

Title	新世代中国人の日本留学：なぜ彼らは神様の子になったのか
Author(s)	範, 玉梅
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/2839
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

平成 20 (2008) 年度 博士学位申請論文

新世代中国人の日本留学

——なぜ彼らは神様の子になったのか

大阪大学大学院文学研究科
文化表現論専攻 日本語学専門分野
学籍番号 04064054
範 玉梅

要 旨

2003年、日本は留学生10万人時代を迎え、留学生は6割以上、就学生は7割以上が中国出身者となっていた。1990年代末頃から中国人留学生は一人っ子が主役になり、彼らの来日によって、第三次の中国人留学ブームが始まった。近年、中国の一般国民にまで拡大した留学は、私費留学生が90%以上を占め、彼らは主にアルバイトで学費と生活費を稼ぐことで、日本人と日本社会に幅広く接するようになってきている。

少子化も高齢化も深刻化している日本では、2008年、「留学生30万人計画」が打ち出され、国際化社会に進もうという積極的な姿勢を見せている。しかし、2003年12月に出された「新たな留学生政策の展開」では、「留学生の質の向上」「在籍管理の強化」が強調され、入学・在留審査は90年代に逆戻りした。留学生のための各種の支援が切り捨てられた上に、マスメディアなどで外国人犯罪が過剰なまでに大きく報道され、日本で学ぶ外国人学生の生活に深刻な影響を及ぼし始めた。日中外交関係が悪化する中、新世代留学生を取り巻く環境はけっして楽観的ではない。それでも、中国人の留学ブームはそのために減退することではなく、どんどん高まってきている。

こうした中で、この数年、日本語学校の教師の間でも中国出身の学生が変化しているという認識が広がっている。「皆（学生のこと）国立大学志向が強い(Cu)」。「国立大学へいけないと、すぐ諦め、専門学校に流され(Ha)」、「受動的な学習姿勢(Ok)」で、「学習目的がない(He)」、「生活管理ができない(Un)」、と教師たちは考えている。しかし「学生との付き合いをどうすればいいのか(Ha)(Ok)」、問題への効果的な対応策はまだ見出されずにいる(範, 2005)。

このような背景の中で本研究を始めた。本研究は、筆者の博士前期課程の研究(範, 2004)をさらに継続し、発展させたものである。筆者は修士論文で、中国で「小皇帝」として育てられ、問題児だとされている「一人っ子」たちの来日によって、日本語教育の現場になにが起きているのかをグラウンデッド・セオリーの方法で分析を行った。その結果、「逸脱的な自由の管理」が日本人教師と留学生が共に考えなければならない緊急の課題となっているということが明らかになった。そして、その問題を解決するのに「居場所」作りが避けられない課題となっているのではないかと筆者は考えた。

本論文に取り上げたK教会では、中国の東北地方、福建省の地方及び発展中の二次都市からの留学生が多くいた。韓国人の教会と関係があり、朝鮮族の若者が多いことも特徴であった。K教会をフィールドとするようになったのは2004年10月10日の教会の留学生との偶然の出会いがきっかけであった。筆者はこの教会に通う中国人留学生が「2000年以前は一人もいなかったのに、2004年までに200人以上にまで増えてきた」という現象に驚き、さらに教会は「愛」があるところだという留学生の話に惹かれ、なぜ彼らは神様の子になったのかという疑問を持ち、この「居場所」を究明しようと考えようになった。

K教会にいる「新世代」の留学生の生活状態を明らかにするため、本研究は、彼らはなぜ教会に通っているのか、教会でなにをしているのか、教会での生活は彼らにとってどのような意味を持つのかという三つの大きなリサーチクエスチョンを巡り、質的研究であるエスノグラフィーを援用して調査を始めた。筆者は2004年10月から2007年10月までの

三年間のフィールドワークで、K教会で留学生と一緒に礼拝日の活動に参加しながら、主に参与観察及びライフストーリー・インタビューを通してデータを取った。

エスノグラフィーは「文化の記述」である。本研究は想定される読み手のことを考慮した上で、記述にはライフストーリーのスタイルを取り込むことにした。様々な葛藤を抱えた新世代の中国人留学生が困難を乗り越え、自分の生きがいで見つけたという成長物語から、暗い時期から立ち上った彼らの精神的な成長にとって、家のようなかけがえのないK教会という居場所の重要性が明らかになった。

それでは、K教会は具体的にどのような条件で若者の安心できる学びの場を作り上げているのだろうか。本研究は佐藤(1995b)の学びの概念を用いて、「教会システムの運営」、「教会の学びの展開」「学びと教えの分裂を克服する工夫」「指導者の参与」という4つの視点からK教会の居場所作りの記述分析をした。その結果、留学生の異文化適応の架け橋の役割を果たしている教会は、留学による「家の雰囲気、社会の繋がり、監督力、遊びの場」というような環境の損失を補完し、若者を主体的に教会に関わらせるため、システムに、以下の三つのことが積極的に取り入れられていることが明らかになった。

- (1) 留学生の趣味を生かすこと
- (2) 留学生によって新人を育てること
- (3) 留学生に教会運営に参加させること

K教会で牧師J先生は留学生に『聖書』を教えるだけではなく、教会という他者との出会いの場を生かし、システムを構築して、皆の学びあう環境を作り出すことに努力した。学びを生かすことによって学びと学びを繋げ、教会自体も変わってきた。

共同体はそれ自身の内在性が成立せず、主体としてそこに属することができない(ナンシー, 1985)。大阪にはキリスト教教会が数多くあるにもかかわらず、K教会にだけ多くの留学生が集まってくる。重要な他者の存在が当然その理由の一つであるが、それ以外に、教会の活動がこの共同体の内在性を豊かにしている一要因であると考えられる。皆がよりよく学び合えるように、教会のシステムは絶えず変更され、改善されてきた。部属活動、運動会、修練会、クリスマスパーティーなどの活動では、皆の自発的な参加が見られる。この自発的な活動によって教会自体も変わってきた。K教会では、我が家のような温かい雰囲気作りによって愛が生み出され、様々な活動に積極的に参加することで、留学生の主体性が発揮される。自発的な活動によって積極的な自由が実現できるという意味で、共同体の内在性につながり、留学生の教会に来る道を作ったのだろう。つまり、教会では自発的に活動できるということが若者の自己実現につながり、彼らに自由を与えた。それゆえ、信仰があるかないかにかかわらず、皆居心地よくいられるようになったのだろう。

したがって、多くの問題が絡んでいる日本語教育の現場において、留学生の居場所作りの改善策を考えるために、教会の学びから学べることの一つに日本語学校の学習概念の転換があるのではないかと考えられる。次に、留学生の留学による環境損失を補完するには、教会の工夫に基づいて、学校という空間を以下の4つの面から生かすことを考えた。

- ① 学校という保護網意識の強化。
- ② 遊びの場の保証・施設の完備。
- ③ 教室の空間の運営。

④ 社会とのつながり。

さらに、先生であり、友達であり、父親であるという牧師の姿から示された教育的関係の再構築の可能性について言及した。この教育的関係はそれ自体調和的で一次元的な教師－子供関係 (Nohl, 1978) ではなく、現在の日本語教師の認識する大人対大人の関係でもなく、状況に応じてそのつど変容する文脈依存的な関係であると言える。教育的関係の再構築に留学生への理解が必要となり、これは教師の学びに繋がる。「心の成長に関心を持ってほしい」というような留学生たちの生の声に耳を傾けることから教師の学びは始まるのではないかと筆者は考えた。教師が自分の中の「留学生」を大切に育て、学び手の「語り」を引きだし、学生を理解しようとすることの重要性を最後に強調した。

本論文の構成

本論文は、研究の位置づけ、研究方法、結果と考察と三部構成になっている。第一部では本研究の位置づけを考えた。まず、第 1 章の研究背景では、留学生を受け入れる側及び留学生を送り出す側の政策の歴史的变化を巡って、在日中国人留学生を取り巻く諸状況を検討した。次に第 2 章の先行研究では、一人っ子研究や新世代中国人留学生研究及び社会と宗教に関する研究という三つの領域について、本研究に関係する重要な文献をまとめた。最後の第 3 章では、研究背景および先行研究を踏まえ、本研究の目的と位置づけを述べた。

第二部の方法論では、「WHAT WHY HOW」という基本的な問いをめぐって、研究方法を述べた。まず、第 4 章では、エスノグラフィーという研究方法を簡単に概観したうえで、筆者がエスノグラフィーを採用した根拠を述べた。次に第 5 章では、フィールドワークの詳細な記述を通してエスノグラフィーをどのように応用したかを示した。さらに第 6 章で、本研究において筆者の分析戦略を述べた。最後の第 7 章では、K 教会というフィールドにおける調査者である筆者の立場を検討した。

第三部は結果と考察である。まず、第 8 章で K 教会の様子を描く。次に第 9 章では、K 教会にいる 4 人の新世代の中国人留学生の物語を取り上げ、彼らの成長過程を描いた。さらに第 10 章では、教会はどのように学び合いの環境を作り、留学生に居場所を提供しているかに焦点を当て、教会のシステムを記述分析した。

第 11 章の結びでは、K 教会の居場所づくりに基づいて、「物語・他人・学び」という要素の関連性を探り、個人の成長における学びの意味及び居場所の意味を述べた。第 12 章では、K 教会の居場所作りをヒントとして日本語学校の学びの再生を考えた。

謝 辞

「言葉は感情的で、残酷で、ときに無力だ。それでも私たちは信じている、言葉のチカラを。言葉に救われた。言葉に背中を押された。言葉に涙を流した。言葉は人を動かす。私たちは信じている、言葉のチカラを。ジャーナリスト宣言。朝日新聞」

2006年から2007年4月までの約1年の間、アルバイトが終わるとほぼ毎週の礼拝日にK教会に行く。梅田で乗り換えるたび、その大きなポスターに書かれたこのジャーナリスト宣言が目に入ってくる。すると一所懸命に聖書の御言葉を留学生に覚えさせようとする牧師の姿が頭に浮かんでくる。寮に帰ってくると、大体夜10時頃だが、賛美歌の録音を聞くと、時には泣き、時には笑い、眠くならずパソコンで文字化が何時間も続けられる。今でも机の上に教会の皆さんからもらったプレゼントが並べてある。玩具やノートなどといったプレゼントを見ると、いつも私のために祈ってくれた彼らのことを思って、心が温かくなり、元々退屈だったはずの文字化の仕事も楽しく感じ、賛美歌を歌いながら文字化をする時もよくあった。

文字化を行うたび、いつも耳にある声が聞こえてくる。「彼ら（日本人教師）は我々（中国人）の子供を分かっているから、理解できたら、きっと彼らを可愛いと思うようになるよ」。このSh先生の話がきっかけになって、私は博士論文を書こうと決心したのだった。Sh先生の話によって、自分が彼ら（留学生）を一人一人の人間として理解できてなかったことに気づいた。

いくら小さい生命でも宿った感動がある。初めての花見で、川の水鳥を見て、「お姉ちゃん、あれも神様が創造した命だね」と言った暁静さんの言葉が忘れられない。静かに笑みを浮かべたその時の彼女の顔つきには不思議さもあり、畏敬もあった。かつて宗教の調査を行った梁さんは宗教との接触を「美好の感覚」（美好：日本語で、良い、すばらしい）と書いている。この「美好」とは獲得した数々の感動のことだろうと私は思う。

海燕さんのことを思うと、ゴリキーの「咆哮する海の上で稲妻のあいだを誇らかに飛び翔けている海つばめ」ⁱ⁾をよく思い出す。海燕さんは来日一年後、彼女のお母さんが事故で意識不明になったため、お父さんの精神も崩壊してしまった。年下の妹と弟がいる彼女は家族の重荷を一人で担い、悪戦苦闘した。無力感を感じた時もあるだろうが、彼女はいつも笑顔いっぱいだ。学校の勉強もバイト先の仕事も教会の手伝いもだれにも負けてはいない。インタビューで私は彼女を慰めようと思って自分の母の死を残念に思うことを彼女に話した。途中で涙がぼろぼろ流れて止まらなかった。この私を抱きしめて海燕さんは「懸崖の上に立つ松をごらんささい、いくら大風に吹かれても、大雨に打たれても、絶壁の隙からでも大きくなり、断涯の上に乗っすぐに立つようになるではないか。私達はこの懸崖の上の松のように八面の風を向かえているからこそ、強靱になれるのだ。」と慰めてくれた。

i) 「一嵐だ！もうすぐ嵐がとどろきわたるのだ！これは大胆な海つばめが、怒りにもえて咆哮する海の上で稲妻のあいだを誇らかに飛び翔けているのだ。一嵐よ、もっとはげしくとどろけ！……」『海つばめの歌』森鷗外訳（マクシム・ゴリキー、ロシア無産階級革命文学者・1868～1936）

このまだ二十歳そこそこの女の子の存在が、私のみならず、教会にいる数多くの留学生達に生きる力を与えている。

ところが、教会の調和と比べ、中国では異常な日常が相変わらず日常化しつつある。「前途」はいつしか「銭途」に取って代わり、ネットに正々堂々と登場した。この微妙な言葉遣いの変化が、拝金主義を蔑視した中国の時代の終焉を宣言したように思える。世界の工場となりつつある中国は、様々な矛盾を孕んでいる。若者は西洋に夢中になり、日本で問題となった若者の問題は段々中国国内でも出始めた。そして、80年代に中国の閉鎖を打破しようとした先駆の留学生達は国学復興運動を起し、かつて中国人が誇りに思った伝統的な価値観を再び提唱しようと呼びかけ始めた。だが、皆それを聞く暇さえないようだ。宗教の復興もまた一つ新しい出来事として私の姉は不思議そうに話してくれた。「あなた、この二、三年いなくうちに、色々変わったよ。隣の息子さんはね、最近は仏教に興味を持つようになって、仕事が終わると家の裏山の上で仲間とよく一緒に話をするの。私も誘われて一回覗いて見た。びっくりしたよ。若者ばかりで皆なかなかお話が上手だった。彼らは周囲の人々を40人も集めて、皆に仏教の話をした」。

今日価値観の転換だけではなく、格差の拡大や環境汚染などの問題も抱えている中国では、不安を感じない人はいない。日本にいるとしても留学生は母国のことに無関心ではられない。青木先生や日本人の友達も皆このような問題が日本でもあったと言っている。牧師 J 先生はこれが地獄の来臨の象徴だと言っている。でも、私は結局なにも出来ないと思った。この悲観的な私に希望を与えてくれたのは K 教会の若者達だった。確かに彼らの言う通り、一人では難しい。だが、皆一緒になったら社会を必ず変えられるのだ。

「お姉さん、最近お姉さんと一緒に人生を語った日々をよく思い出す。雨の日も、風の日も、一緒に語り合えて本当に楽しかった。」と解放君は帰国してから一年後の電話で懐かしそうに当時のことを話してくれた。解放君の話から「一期一会」という言葉に込められた出会いの大切さを改めて感じた。このように私は様々な言葉との出会いの中、心に「上を向いて歩こう」を歌いながら、前に向かって歩いている。

K 教会の留学生と一緒に成長した日々には、励ましてくれた青木直子先生と牧師 J 先生ご夫婦の存在が大きいことが忘れられない。相談に乗ってくれた研究室の人々、お互いに励ましあう仲間、貴重な意見をくださった青木ゼミの皆さん、皆との出会いもその日々に刻まれ、私の人生の一部となった。本論文完成に至るまでにも、多くの方々から力をいただいた。大河内瞳さん、岡本和恵さん、城石しのぶさん、中井好男さん、中山亜紀子さん、西田朋美さん、脇坂真彩子さん皆時間を惜しまず、最後まで応援していただき、付き合ってくくださったことに心から深くお礼を申し上げます。論文を書くのに長い時間がかかったことで、父と兄弟にも散々心配を掛けた。「まだ書き終わってないのか？詰まったら、よく先生と相談して、友達と相談してね」と父も姉も電話でよく言う。父と姉の言う通り、皆さんの支えが無ければ、ここまで辿り着くことができなかった。いつも微笑んで応援するよと言ってくださったサマンティカ・ロクガマゲさんのことも、留学生のことを熱心に話してくれた暁静さんのことも、心に覚えている。皆さんに出会って、「恵まれる」という日本語の素晴らしさを肌で感じられるようになった。

皆に大変お世話になりました。ありがとうございました。

目次

要旨	i
謝辞	iv
目次	vi
序章	1

第一部 本研究の位置づけ

第1章 研究背景	4
1.1 日本における留学生の受け入れ	4
1.1.1 留学生受け入れ政策の変化	4
1.1.2 留学生受け入れの環境	6
1.2 中国人の日本留学	10
1.2.1 開放されつつある留学政策	10
1.2.2 日本留学に対する意識	12
第2章 先行研究	16
2.1 一人っ子についての研究	16
2.1.1 世界における一人っ子の研究	16
2.1.2 中国における一人っ子の研究	17
2.2 中国人留学生についての研究	19
2.2.1 従来の中国人留学生に関する研究	19
2.2.2 「新世代」留学生に関する研究	21
2.3 「新世代」留学生の日本留学の特徴	23
2.4 社会と宗教に関する研究	25
第3章 本研究の目的と位置づけ	27

第二部 方法論

第4章 エスノグラフィーについて	30
4.1 エスノグラフィーとは	30
4.2 なぜエスノグラフィーを援用するのか	32
4.2.1 私は結局彼らを理解できなかったのである	32
4.2.2 私は彼らの悲しみも喜びも共に感じられるのである	33
第5章 フィールドワーク	35
5.1 フィールドの紹介	35
5.2 筆者の参加	37
5.3 データの収集	39
5.4 インタビューについて	41
5.4.1 ライフストーリー・インタビュー	41
5.4.2 インタビュー依頼の受け入れ	42

5.4.3	情報提供者概要	42
5.4.4	情報提供者の選択	44
5.4.5	主要情報提供者のデータ	45
第6章	分析方法	46
6.1	分析戦略	46
6.2	分析過程	48
6.3	結果の表出	51
第7章	私という存在	53
7.1	死について考えた私	53
7.2	南港での出会い	54
7.3	K教会と共に成長した日々	55
7.3.1	晴れの登場	55
7.3.2	危機の出現	56
7.3.3	調査者の姿	57
7.3.4	退出はない	58
7.4	部分的な真実	58
7.5	神様と私	59

第三部 結果と考察

第8章	教会はどんなところなのか?	61
第9章	新世代中国人留学生の物語	65
9.1	道に迷った子羊	66
9.2	小椿の決意	69
9.2.1	小椿の物語	69
9.2.1.1	故郷と家族	69
9.2.1.2	日本留学へ	71
9.2.1.3	初めての日本留学	73
9.2.1.4	暗い時期を乗り越える	74
9.2.1.5	変わりつつある小椿	78
9.2.1.6	専門学校での二年目	85
9.2.1.7	未来に向かって	90
9.2.2	小椿の分析	93
9.2.2.1	小椿の成長と変化	93
9.2.2.2	小椿の特徴	94
9.2.2.3	教会の役割	97
9.3	暁静の追求	100
9.3.1	暁静の物語	100
9.3.1.1	憧れの日本へ	100
9.3.1.2	熊本での挫折	101

9.3.1.3	大阪での新生活	104
9.3.1.4	クリスチャンになる	106
9.3.1.5	受験期の明暗	110
9.3.1.6	未来に向かって	111
9.3.1.7	充実した大学の一年目	113
9.3.1.8	信仰が深まる大学の二年目	117
9.3.2	暁静の分析	121
9.3.2.1	暁静の成長と変化	121
9.3.2.2	暁静の特徴	122
9.3.2.3	教会の役割	123
9.4	文珍の無力	126
9.4.1	文珍の物語	126
9.4.1.1	少女時代の文珍	126
9.4.1.2	日本へ行かされた	127
9.4.1.3	楽しかった一年目	128
9.4.1.4	教会への引越しと初めてのインタビュー	133
9.4.1.5	バランスが崩れた大学の一年目	137
9.4.1.6	ごまかした大学の二年目	142
9.4.1.7	困難を乗り越える	146
9.4.2	文珍の分析	149
9.4.2.1	文珍の成長と変化	149
9.4.2.2	文珍の特徴	153
9.4.2.3	教会の役割	156
9.5	解放の結婚	158
9.5.1	解放の物語	158
9.5.1.1	解放との出会い	158
9.5.1.2	クリスチャンになる	159
9.5.1.3	大学への憧れ	160
9.5.1.4	盛大なパーティーの出演	168
9.5.1.5	電撃結婚と結婚後のトラブル	170
9.5.1.6	過去から未来へ繋げる	172
9.5.1.7	花見の誘い	175
9.5.2	解放の分析	177
9.5.2.1	解放の成長と変化	177
9.5.2.2	解放の特徴	188
9.5.2.3	なぜ解放は教会にいるのか	189
9.5.2.4	帰国の決断から背景を探る	191
第10章	教会の学びの理論	195
10.1	変動するシステムの解説	197

10.1.1	青年隊の再編	197
10.1.2	各部属の設立及び活動の展開	199
10.2	学びの展開	203
10.2.1	礼拝日の参加	203
10.2.2	旬の学習交流	205
10.2.3	旬長と中旬長の学習交流	209
10.2.4	【熱い鍋】の働き	214
10.3	壁を乗り越える工夫	217
10.3.1	通路づくり	217
10.3.2	窓を開くこと	219
10.3.3	道を示すこと	224
10.3.4	舞台を提供すること	233
10.4	指導者の参与	239
10.4.1	諦めない態度	240
10.4.2	希望を与える説教	243
10.4.3	魂を愛する心	245
10.4.4	留学生の尊重	247
10.5	まとめ — 教会の居場所作り	251
第11章	結び — 物語・他者・学び	254
第12章	提言 — 日本語学校の学びの再生を考える	264
おわりに	— 開かれた日本へ	271

【参考文献】 272

【参考資料】 278

- ①「牧師先生への依頼」279
- ②「献身見証」(小椿) 283
- ③「快樂的標杆」(暁静) 284
- ④「一封家書」(暁静) 285
- ⑤「一番美しい希望と思い出を残すために」(暁静) 287
- ⑥「一番大切な人へ贈る言葉—私の祖国に伝えたいこと」(暁静) 289
- ⑦「文珍の発表」(文珍) 290
- ⑧「将来の計画書」(解放) 295
- ⑨「願書の理由書」(解放) 296
- ⑩「先生への手紙」(解放) 297
- ⑪「演説原稿」(解放) 298
- ⑫「ラブレター」(解放) 299
- ⑬「做耶穌的見証人」(小猿) 301
- ⑭「旬長十大罪状」(小不点儿) 303
- ⑮「順口溜」(兄弟教会の留学生) 304

- ⑩「日記」(王小) 305
- ⑪「成功の密訣」(黃) 306
- ⑫「獻身の証」(愛子) 309
- ⑬「鉛筆的原則」312

序 章

問題提起

「あの時(日本へ来た時)、特に心がいつも虚しく感じる、ずっと皆に甘やかされ、宝物のように両手で扱われてきたから、日本へ来て、ガタンと地面に落ちた感じで、何を言っても、いくら呼んでも、誰も応えてくれない(中国語では『叫天天不応、叫地地不靈』)。中国にいた時は、いつも父母がいたから、後ろ盾があった。もし私に何かあったら、お父さんがきっと助けてくれる、お母さんもきっと助けてくれるという感じだった。しかし、今は遠すぎるから、どうしたらいいかいつも分からなくて、(ほかには)何も考えてないし、どんなことがあっても、いつもどうしよう、どうしようというような感じだ。先生は授業が終わるとすぐ帰るし、だれに、なにを言えばいいのか、どうやって問題を解決できるか全然分からなかった。」(Me)

2003年、日本は留学生10万人時代を迎え、留学生は6割以上、就学生は7割以上が中国出身者となった。1990年代末頃から中国人留学生は一人っ子が主役になり、彼らの来日によって、第三次の中国人留学ブーム¹⁾が始まった。近年、中国の一般国民にまで拡大した留学は、私費留学生が90%以上を占め、彼らは主にアルバイトで学費と生活費を稼ぐことで、日本人と日本社会に幅広く接するようになっている。

少子化も高齢化も深刻化している日本では、日本人学生数が減少したため、多くの大学が留学生受け入れに積極的な動きを見せたという事情もあり、2000年あたりから中国からの留学希望者へのビザ発給が緩和されてきた。しかし、経済不況により留学環境が悪化している状況の中(段,2003)で、更に留学生に対する奨学金、学費免除の予算枠が減少した。そのうえ、国公立大学入試で英語の成績が要求されるようになり、私費外国人留学生統一試験も改革された。

2008年、「留学生30万人計画」が打ち出された日本は、国際化社会に進もうという積極的な姿勢を見せている。しかし、2003年12月に出された「新たな留学生政策の展開」では、「留学生の質の向上」「在籍管理の強化」が強調され、入学・在留審査は90年代に逆戻りした。留学生のための各種の支援が切り捨てられた上に、マスメディアなどで外国人犯罪が過剰なまでに大きく報道され、日本で学ぶ外国人学生の生活に深刻な影響を及ぼし始めた。日中外交関係が悪化する中、新世代留学生を取り巻く環境はけっして楽観的ではない。それでも、中国人の留学ブームは減退することはなく、どんどん高まってきている。

¹⁾ 第三次の留学ブーム:近代における中国人の日本留学について、段(2003)によると、1896年から1910年代まで続いた日本留学を第一次のブームとしているのに対して、1978年「日中平和友好条約」をきっかけに、鄧小平の開放政策を背景に増加した日本留学を第二次のブームとしている。筆者は「一人っ子世代」の日本留学が今までの中国人留学生とは様々な違いがあると修士論文で明らかにした。そのため、筆者は第一次ブーム、第二次ブームと「一人っ子世代」の日本留学生を同一視することはできないと考え、「一人っ子」たちが大量に日本へ来ていることによって、第三次の日本留学ブームが形成されていると主張している。

こうした中で、この数年、日本語学校の教師の間でも中国出身の学生が変化しているという認識が広がっている。「皆（学生のこと）国立大学志向が強い(Cu)」。「国立大学へいけないと、すぐ諦め、専門学校に流され(Ha)」、「受動的な学習姿勢(Ok)」で、「学習目的がない(He)」、「生活管理ができない(Un)」と教師たちは考えている。しかし「学生との付き合いをどうすればいいのか(Ha) (Ok)」、問題への効果的な対応策はまだ見出されずにいる（範, 2005）。

そこで、中国で「小皇帝」として育てられ、問題児だとされている「一人っ子」たちの来日によって、日本語教育の現場になにが起きているのか、このような当時まだ研究されていない現象を解明するため、質的研究であるグラウンデッド・セオリー・アプローチ²⁾を採用して筆者は2001年から「新世代」に関する研究を始めた。範（2004）では「日本語学校における一人っ子の中国人留学生増加に伴う問題」に焦点を当て、多様なデータの比較を行った結果、「逸脱的な自由の管理」が日本人教師と留学生が共に考えなければならない緊急の課題となっているということが明らかになった。そして、その問題を解決するのに「居場所」作りが避けられない課題となっているのではないかと筆者は考えた。

本研究は、筆者の博士前期課程の研究（範,2004）を後期においてさらに継続し、発展させたものである。本研究に取り上げられている K 教会をフィールドとするようになったのは2004年10月10日の教会の留学生との偶然の出会いがきっかけであった。筆者はこの教会に通う中国人留学生が「2000年以前は一人もいなかったのに、2004年までに200人以上にまで増えてきた」という現象に驚き、さらに教会は「愛」があるところだという留学生の話に惹かれ、なぜ彼らは神様の子になったのかという疑問を持ってこの「居場所」を究明しようとするようになった。

そこで、本研究は、彼らはなぜ教会に通っているのか、教会でなにをしているのか、教会での生活は彼らにとってどのような意味を持っているのかという三つの大きなリサーチクエスチョンを巡り、教会に通っている新世代留学生の生活状態を詳細に記述することを目的とする。

本論文の構成

本論文は、研究の位置づけ、研究方法、結果と考察と三部構成になっている。第一部では本研究の位置づけを考える。まず、第1章の研究背景では、留学生を受け入れる側及び留学生を送り出す側の政策の歴史的变化を巡って、在日中国人留学生の取り巻く諸状況を検討する。次に第2章の先行研究では、一人っ子研究や新世代中国人留学生研究及び社会

²⁾ グラウンデッド・セオリーは1960年代から健康専門職者たちが用いている代表的な質的研究の1つである。起源は社会学にあるが、どんな研究分野においても活用することができ、心理学、健康あるいはビジネスの研究でも使用されている。グラウンデッド・セオリーの理論的枠組は、シンボリック相互作用論の洞察から導かれており、人間の行動を探究する人々と社会的役割の間の相互作用のプロセスに焦点をあてている。この研究方法の主な特徴の1つは、データから理論を生成することであるが、現在ある理論がこの方法によって修正されることもあれば拡大することもある。

Wysmans(1990:12)によると、この研究方法でいうセオリーとは、以下のことを意味する。「2つまたは3つ以上の概念の間の関係を明らかにすること、そして何が起きているのかを説明するために、調査している現象について系統的な観点を提示すること」

と宗教に関する研究という三つの領域について、本研究に關係する重要な文献をまとめる。最後の第 3 章では、研究背景および先行研究を踏まえ、本研究の目的と位置づけを述べる。

第二部の方法論では、「WHAT WHY HOW」という基本的な問いをめぐって、研究方法を述べる。まず、第 4 章では、エスノグラフィーという研究方法を簡単に概観したうえで、筆者がエスノグラフィーを採用した根拠を述べる。次に第 5 章では、フィールドワークの詳細な記述を通してエスノグラフィーをどのように応用したかを示す。さらに第 6 章で、本研究において筆者の分析戦略を述べる。最後の第 7 章では、K 教会というフィールドにおける調査者である筆者の立場を検討する。

第三部は結果と考察である。まず、第 8 章で K 教会の様子を描く。次に第 9 章では、K 教会にいる 4 人の新世代の中国人留学生の物語を取り上げ、彼らの成長過程を描く。さらに第 10 章では、教会はどのように学び合いの環境を作って、留学生に居場所を提供しているかに焦点を当て、教会のシステムを記述分析する。

第 11 章の結びでは、K 教会の居場所づくりに基づいて、「物語・他人・学び」という要素の関連性を探り、個人の成長における学びの意味及び居場所の意味を述べる。第 12 章では、K 教会の居場所作りをヒントとして日本語学校の学びの再生を考える。

第一部 本研究の位置づけ

第1章 研究背景

通信技術の発達により世界の「村」化が進んでいる現状の中で、異文化の中でも通用する人材の養成は人類の社会が発展するために不可欠になってきている。先進国の経済の停滞及び旧社会主義国家の民主化の拡がりや経済の発展に伴い、大きな投資を必要とする教育は高い利潤が期待できる一つの産業として全世界的に注目が集まっている。

近年、国際競争の激化により強い影響を受けている中国では、経済発展に伴い、経済力が高まり、求める人材像も変化しつつある。本研究の一つの背景となっている「一人っ子政策」³⁾の実施は、中国の高等教育ブーム、留学ブームを推し進めつつある。2001年に、中国の高等教育の規模は世界一になった。それと同時に中国は世界一の留学生派遣国にもなった。

この背景の中で、経済不況が続いている日本では少子化も高齢化も深刻化している。日本人学生数が減少したため、大学、特に私立大学は著しい経営危機に直面している。厳しい労働力不足にも直面して久しい日本は、国際教育産業の繁栄により留学についての方針を改めた。学籍管理を学校に任せ、手続き書類を簡素化する入管の新方針は2000年1月から実施された。その結果として、2003年の時点で1983年から始まった「留学生十万人計画」は人数面で達成された。2004年から留学生の受け入れ政策は消極的に転じたが、2008年、2025年までに留学生を30万人にするという「30万人計画」を打ち出した日本は、国際化に本格的に取り込む姿勢を見せている。その背景の一つとしては、団塊世代（1947～1949）の退職に伴い、日本国内でも企業の人材確保の競争が激しくなったという事情があると思われる。本章では、留学生を受け入れる側及び留学生を送り出す側の歴史的な政策変化を巡って、在日中国人留学生を取り巻く諸状況を詳細に検討する。

1.1 日本の留学生の受け入れ

1.1.1 留学生受け入れ政策の変化

1970年代まで、日本は外国、特にアジアの国々との教育交流がまだ不十分で、留学生受

3) 一人っ子:中国語では「独生子女」。一人っ子政策は中国語では「計画生育政策」という。中国の「一人っ子政策」は、国民の生活水準を維持・向上させるため、経済発展と人口増加との間に生じた不均衡を、人口の抑制によって調整することであった。中国政府は、1970年代の前半から緊急の産児制限政策に入ったが、1979年には更に強化して、「一人っ子化」の計画出産の国策を打ち出し、少数民族地域を除く全国で実施に踏み切った。1981年には、国家計画出産委員会が設置され、計画出産の統一的管理を行うことになった。1982年末に制定された現在の憲法では、25条と49条で具体的に規定され、基本国策の一つに据えられたのである。その後は、国をあげての協力のもと、奨励措置と制裁措置が行われた。本格的な「一人っ子政策」が実施されて、既に20年を経過した今日、「一人っ子」の家族形態は、中国の家庭の基本パターンとして広く定着している。1995年の統計によると、全国「一人っ子証明書」を持っている一人っ子は既に8000万人に達していた。

け入れ体制もかなり不完全であった。80年代以降、留学生の受入数の少なさを国際貢献度の低さとして捉えた日本政府は、中曽根政権時代の1983年、「留学生受け入れ10万人計画」を発表し、21世紀初頭までに留学生10万人受け入れを目指した。この計画の発表により、日本政府が積極的に外国人留学生の受け入れに乗り出した。翌年10月、日本の法務省が私費留学生の受け入れに積極的な姿勢を示し、日本語学校で勉強する「就学生」についての入国手続きの簡素化を実施した。この政策は言うまでもなく中国人私費留学生の来日に拍車をかけた。1985年には、中国人就学生の入国数が一挙に倍増した。1983年の時点で留学生は1万人強であった。その後、順調に受入数を伸ばすものの、1990年代に入ると5万人前後で推移するにとどまった。

そして、同じ頃、1985年から円高が始まり、日本では人手不足が社会問題となり、とくに「3K」（汚い、きつい、危険）と呼ばれる業種などの中小企業では深刻であった。ところが、日本の法律では、外国人の非熟練労働者としての入国が認められていないため、「就学」ビザがたくさんの就労者に利用されるに至った。そこで二つの大きな問題が起こった。一つは、政府による日本語教育機関の整備が進んでいないために、営利目的が優先され教育機関として適切でない学校が乱立するようになった。もう一つは、中国人就学生の増加に伴って、「不法就労」現象も著しくなった。そこで、1988年法務省は入国ビザの発給を厳格に抑えることにした。特に、中国人就学生に対しての入国手続きを徐々に厳しくしていった。1989年、「上海就学生問題」と呼ばれる事件が起こった。上海の領事館への3万8000人からの査証発行申請に対し、受け入れ日本語学校側の未開校や条件不備が理由で申請が不許可になった。入学金と授業料は既に納入されていたため、多数の中国人による抗議行動がおこり、日中間の国際問題になった。この年が中国人就学生の日本への大量入国のピークとなった。

1990年、日本の入出国管理法が改正された。この改正で、外国人による不法就労を取り締まる必要から、在留資格「就学」が新設された。入国管理局の留学生に対するビザ発給が厳しくなったこと、またバブル崩壊で新規開校数も減少したことから、日本語学校が減少した。1997年に発表された「今後の留学生政策の基本的方向について」では、日本語学校を大学進学への予備教育機関として文部省が認めるようになった。1997年4月から、受け入れ学校による機関保証が適用可能になり、従来在留資格申請の際に義務づけられてきた「身元保証書」の提出が廃止された。1997年から新規中国人留学生数の上昇が著しくなった。就学・留学の在留資格で入国した不法残留者の数は90年代半ばから減少し、99年には2万人を切った。入国管理局は出欠確認や生徒指導を強化した学校の努力を評価し、2000年から、不法残留者が在校生の5%未満の「適正校」が申請した学生については、約9割に在留資格を認めるようになった。また、少子化によって日本人学生数が減少したために、多くの大学が留学生受け入れに積極的な動きを見せたという事情もある。

その結果として、文部科学省発表によれば、2003年5月1日現在の在日留学生数は10万人を超え、1983年から始まった「留学生十万人計画」は人数面で達成された。留学生の8割以上は中国を含む日本周辺の地域から来ている。その中で、中国出身者が留学生では

60%以上、就学生では70%以上を占め、圧倒的に多い。しかし、経済不況により留学環境が悪化している状況の中（段,2003）で、更に留学生に対する奨学金、学費免除の予算枠が減少した。また、国公立大学入試で英語の成績が要求されるようになり、私費外国人留学生統一試験が改革された。そのうえ、2003年12月に出された中央教育審議会による答申「新たな留学生政策の展開」では、「留学生交流の拡大が極めて重要である」としながらも受け入れについては「留学生の質の向上」「在籍管理の強化」が強調され始めた。

「入学・在留審査は90年代に逆戻りし、留学生のための各種の支援が切り捨てられた上、マスメディアなどで外国人犯罪が過剰なまでに大きく報道され、日本で学ぶ外国人学生の生活に深刻な影響を及ぼし始めた。」（白石他,2005）というような外国人学生を取り巻く環境の急激な変化を憂慮し、検証と発言を粘り強く続けていくことを目的に、日本で日々外国人学生の相談に当たり、彼らから生の声を聞くことの多い有志が「外国人学生問題研究会」を2003年11月に設立した。

留学生受け入れの概況のグラフによれば、2004年は117,302人、2005年は121,812人と徐々に留学生数が増加していることが窺えるが、「就学」の新規入国者数は、2004年は対前年度（27,362人）45%減の15,027人となった。特に中国は19,337人から5,705人へと70%も減少した。2003年の11月に入国管理局が方針転換し、適正校からの申請でも、中国、ミャンマー、バングラデシュ、モンゴルからの学生については、入出金記録のある預金通帳のコピーや資産形成を記録した過去3年間の資料など、他国の学生より詳細な書類を求めることにしたからである。

2004年初頭より実施された入国審査の厳格化の影響で、2005年度4月の在留資格認定証の申請数・交付数は新規入国者が激減した2004年度並でほとんど伸びていない。それに伴い、2006年の留学生数が前年度より約4000人減少（-3%）した。2007年は「留学の新規入国者数の回復及び、短期留学生受入れの増加（8,368人で前年より945人12.7%増）により、対前年とほぼ同じ数の留学生数を維持することできた。しかし、「2007年の留学生数と『留学』『就学』新規入国者数比較」では、「全体の入国者数はやはり中国の増減によって決定されるという状況に変化は見られない」と白石ら（2007）は強調している。本研究に当たってこのような厳しい事情も「新世代」日本留学の背景として見落とせない。日本政府の留学生受入れ政策の不安定さが留学生の留学環境に与えた影響を次節に述べる。

1.1.2 留学生受け入れの環境

1983年の「21世紀への留学生政策懇談会」の提言では、「教育の国際交流、特に留学生を通じての高等教育段階における交流は、わが国と諸外国の教育・研究水準を高めるとともに、国際理解、国際協調の精神の醸成、推進に寄与し、さらに、開発途上国の場合にはその人材育成に協力するところに、その重要な機能を持つ」としており、留学を終えて帰国した人々が日本とそれぞれの母国との友好関係を発展・強化させるための架け橋となることへの期待を表明している。

ところが、欧米諸国と比較して日本社会は「対外的イメージや国際的影響力向上に重要

なソフト資源の留学生を活用できず、『宝の持ち腐れ』となっている」（朱,2001）、「日本政府と政治家は留学生の考えを国益に関わるものとして重視していない」（茂住,2003）等々、日本外交にとっても重要な「戦略資源」である留学生への認識不足が、数多くの日本人研究者によって指摘されている（工藤,2003；茂住,2003）。「今日、既にいくつかの大学院で、日本経済の構造変化の結果として、日本人学生の進学希望者がほとんどいないという専攻が、留学生によって定員を満たしているという状況が生まれている」。この状況を『日本で学ぶ留学生』（岩男・萩原,1988）では「途上国との間でうまくバランスが取れていると評価することもできる」と皮肉のように述べられている。

80年代、大量の外国人学生がどっと日本に入り込んでくる中、経済的な能力に長けていた日本人は、日本語学校のような高利潤、高い投資回収率がある新しい業種に狙いを定めた。営利目的の日本語学校が乱立して、新たな社会問題が生じていた。様々な新聞などで報道される外国人学生の違法就労、あるいは病死、自殺などの悲劇の多くは就学生の間で起きていた。「上海就学生事件」をきっかけに日本政府は日本語学校の管理に着手し始めたが、バブル崩壊のしわ寄せや社会的重視の欠如が影響し、留学生に対する支援体制の整備はかなり遅れた。依然として、「混乱、整備不足、政策遅れ」という文字が留学生懇談会のレポートの主題であった（1999年文部省留学生懇談会）。

当時、未知の日本へやってきた各国（特に途上国）の若者たちのほとんどは「3K」と呼ばれる職場でアルバイトをして学費と生活費を稼ぐほか無いのが実情であった。極少数の人間が起したトラブルが原因で、多くの不動産屋やアルバイト先が「外国人お断り」となり、他の原因も加って、かなりの留学生が「日本社会は留学生に冷たい」（「日本留学の騙し」・2003）という印象を持っている。留学生達からは「苦労は我慢できるが、日本人社会から無視され、ひいては優越感に満ちた目で見下されるのが、一番つらい」（段,2003）という不満がよく出る。実際は親切な日本人の方が多いが、初めて足を踏み入れた日本で、自分の国や民族の習慣が嘲笑される不愉快な体験がすこしでもあれば、対日イメージを大きく左右する可能性が高い（朱,2001）。また、来日直後の就学生や留学生に対する支援体制が特に確立されていないため、彼らは日本語の勉強、進学試験、社会の適応、そして学費と生活費を稼ぐなど、いっぺんに三足も四足も草鞋を履かなければならない。このような環境は孤立無援という精神状態を生みやすくする。

中国語誌『新大陸』（「日本留学生の困境」・2001）では、「日本社会の最下層である中国人」のルポが発表された。ルポで紹介された留学生たちは日本語学校やブローカー、アルバイト先などから騙取され尽し、毎日学校、アルバイト、宿舎の3つの場所を往復するだけで、進学や在留資格に悩み、苦しい日々を過ごしていた。また帰国した中国人留学生による小説『東京にいる上海人』（樊祥达,1996）では、厳しい社会環境の下で勉強できなくなって、苦役労働を余儀なくされた中国人がぞっとするほどリアルに描写されている。このようなアルバイト収入だけで勉強を支える「苦学生」が80年代にはかなりいた。

1992年、鄧小平の『南巡講話』で開放路線推進が表明され、成長率12.8%の経済高成長を遂げる。これに併って、中国人留学生を取り巻く状況は以前より大きく改善された。日

本側でも、日本政府をはじめ、民間団体が奨学金と留学生宿舍の問題に取り組んだ結果、90年代後期になって、日本の留学環境はある程度の改善を得た。そして、中国人留学生の質も大きく変化してきた。90年代前半には、上海や北京など沿海部大都市の出身で、大卒の専門職・管理職の人々が多かった。しかし、一人っ子世代が徐々に来日するようになるにつれて、日本語教育の現場も変化を起し始めた。山縣（1999）では、日本語学校の中国人留学生は昔の「就労目的」と言われた留学生と違い、学歴志向が強い、また「父母に外の世界をみてこいと言われた」「自分の可能性を広げたい」という理由で日本に来た留学生が出てきたことなどの変化が言及されている。

新しい世代の留学生を取り巻く状況は、10年前の留学生と比べて、段（2003）では次のように述べられている。「彼らは自分より少し前に来た親友の援助を得ることができたため、まったく頼りになる人がいなかった先輩たちと違って、そこまで必死に働かなければならないことはないだろう。しかし日本の経済不況で、アルバイトを探すことが以前よりさらに難しくなり、ビザや住宅問題も留学生・就学生を困らせる根源であり、学習条件は10年前とほとんど変わっていない。日本の留学環境がよくなったわけではないといえるだろう」。

この「変わった」と「変わらぬ」の間で90年代後期から日本にやってきた「新世代」留学生は肌で日本留学生生活を体験し始めた。確かに中国の「新世代」留学生は経済の負担がかなり減っている。バイトをしない富裕の子も出てきた。しかし、ほとんどの留学生は相変わらず勉強とバイトで一生懸命に頑張っていて、欧米留学生のように「遊び心」で異文化を経験する心理的な余裕がない（「現代の日本留学生」・2001）。

2002年頃から中国東北地方・農村出身で、地元の高校・専門学校を卒業した労働者階級出身者が急増してきた⁴⁾。彼、彼女らは20代前半と若く、大学入学を目指して来日する。また、朝鮮族・モンゴル族等、少数民族の人々が多いことも特徴的である（浅野・2004）。中国人の留学生の若年化が進んでいることや、「一人っ子」世代である彼らの成長背景及び多くが地方出身であるという特徴から考えると、新世代中国人留学生は日本社会への適応が前世代の留学生より問題になりがちだと思える。しかし、「来日直後の、一番つらい時期にフォローがない」のが現実である。

しかし、「一人っ子」世代留学生のほとんどは、日本語学校を日本留学の出発点⁵⁾として

4) 出身地や職業階層の厳密な統計的把握は困難である。ただし、NHKが把握した中国人就学生のビザ発給件数によれば、過半数が東北地方の出身地である。中国人就学生のほとんどが留学生に移行することを踏まえれば、留学生のなかでも東北地方出身地の比率は極めて高いと思われる。また、東北地方出身者の増加は留学・就学だけにとどまらない。在留資格を問わず中国人の登録者数をみると、1990～2002年、東北地方（黒竜江省・遼寧省・吉林省）出身者の比率は14.5%から34.8%に急増している。2002年時点では、北京・上海・福建省出身者の合計25.1%をも大きく上回る。『在留外国人統計』（財）入管協会各年次より。（浅野,2004）

5) 中国人の私費留学は、二つのパターンに分かれている。一つは日本語学校に入学し、1～2年ぐらい日本語を勉強し、各種の試験に備えることになる。そうして試験に受かったり、大学院・大学・短期大学・高等専門学校・専修学校の専門課程のいずれかに入って勉強することになる。もう一つのパターンは、中国で大学を卒業して日本の大学教授の推薦により、直接大学や大学院の研究生として来日する。そして、半年や1年の勉強を経て大学院の修士課程に進むことになる。しかし、一定の日本語の基礎及び日本の大学とのつながりが必要であるために、困難度が非常に高い。その為、日本語学校で勉強してから大学などへ進学するのが、日本への私費留学のための主要な留学経路となってきた（徐・2005）。

理解している。彼らは初めて家から離れ、国から離れ、言葉があまりできない状態で、日本語学校の教師以外に何も頼るものがない。範（2004）では、新世代中国人留学生が一人の例外もなく「父母、友達、家の暖かさ」を教師に求めていることを明らかにした。しかし、「日本人教師はやさしいが、冷たい」と留学生たちは言っている。そして、「アルバイトに集中するようになった」学生に関して、「お金のために来た」という教師の認識と違い、新世代中国人留学生は「行きたい学校へ行けないと分かったから」「段々ついていけなくなるから」「学校は面白くないから」という見方を持っている。留学生たちの多くは日本語学校を自分の居場所だと感じていない。このことから、日本語学校は留学生たちの信頼を得られていない様子が見られる。

中国人の私費留学生は、日本語や生活に関するバリアを突破しなければいけない。例えば、アパート探しから保証人引き受け、ビザや進学に関する情報提供といったサポートが必要になる。特に日本語学校の学生の過半数を占める中国人の私費留学生のほとんどは 80 年代～90 年代に生まれた一人っ子である。両親の保護と愛情のもとで育った彼らには、日本語学校は、ただ留学生の日本語を指導するだけではなく、日本に来たばかりの私費留学生の生活各面をサポートする役割を果してほしいという期待が強い。しかし、「教育」より「管理」⁶⁾を重視する日本語学校と、実際留学生に望まれている日本語学校の姿との間には、大きなずれが存在しているように思われる（範,2004；徐,2005）。

本研究はこのような背景で展開されたものであり、研究に取り上げたK教会では、中国の東北地方、福建省の地方及び発展中の二次都市からの留学生が多く、韓国人の教会と関係があるため、朝鮮族の若者も多い。彼らがそこで自分自身の居場所を見出しているということは日本の留学生の受け入れの問題を反映していると同時に、その解決方法も示していると考えられる。

6) 「管理」を実施する機関:日本語学校にいる留学生達は「留学」と「就学」という在留資格の違いで、アルバイト時間・学割・奨学金・授業料免除において就学のほうが全て厳しい。ほとんどの日本語学校は学校法人ではないため、会社法人である日本語教育施設を直接的監督する省庁は現在もない。「日本語教育施設の質的向上」を施設目的とする日本教育振興協会の管轄も、2001年に文部科学省から法務省へ移行した。従って、日本語教育振興協会の方針も「教育」より「管理」へ重視するようになった。「入国管理局の留学生対応にも、果たして『教育』という主題にマッチしているか疑問が多くあった」という関係者の心配がある。2000年入国管理局が発表した「留学生及び就学生の入国・在留審査方針」に見られるように、入国管理局の「管理」というのはあくまでも「在留管理」に着手するものである。そこで、日本語学校がその「管理」を実際に実施する機関になった。2003年末から新規学生の入国審査は厳しくされ、さらに日本語学校が「適正校」「非適正校」に分類されることによって、日本語学校は経営ができなくなる恐れがあるため、学生への教育より学生の在籍管理に一層力を入れるようになった(徐,2005)。

1.2 中国人の日本留学

中国が日清戦争に敗れた翌年の1896年から、魯迅、周恩来、郭沫若など現代史に残る多くの文学者や政治家が留学生として日本にやってきた。1910年代まで続いたこの日本留学ブームは、その後の軍国主義侵略によって一時中断されたが、1980年代以後、鄧小平の開放政策を背景に第二次のブームが起こった（段, 2003）。一度目のブームにおいて、中国から海外に出た留学生の総数は数万人程度だったのに対し、第二次ブームでは日本への留学生に限っても、既に二十万人近くに上っている。

日本社会との交流の幅と深さも昔と比べ物にならない。戦前の日本への留学は官費や資産家たちに支えられたケースが多かった。そのため、若者たちは苦しいアルバイトをそれほどせずに済んだ代わりに、日本人と日本社会を客観的・全体的に理解することができず、「謎」を残したままだった。それに対し、近年の留学は中国の一般国民にまで拡大され、彼らは主にアルバイトで学費と生活費を稼ぐことで、日本人と日本社会に幅広く接するようになった。日中両民族が日常の生活を通じて相手の思考様式・行動パターンを把握するという初めての、そして真の交流が始まったのである。

1.2.1 開放されつつある中国の留学政策

中国政府は、留学生派遣を人材「培養」政策の一部として位置づけ、中国国内で「培養」できない人材を育成する一環として重視してきた（王, 2004）。建国直後から1980年代まで、留学先から留学先での専攻分野にいたるまで、政府が規定していた。1978年に中国で改革開放政策が打ち出され、現代中国人の留学の幕が再び開かれた。同年春、中国では第五回全国人民代表大会、全国科学会議、全国教育会議が次々と招集された。これらの会議は現代化のための人材を育成する重要性、特に外国留学及び国際交流が人材を育成する重要な措置として非常に必要だと強調した。さらに、同年の6月23日、鄧小平は清華大学の報告を聴取した際に、留学生派遣問題に対してこう述べた。「私は留学生の数を増やすことに賛成する。10名20名ではなくて幾千幾万というように派遣する必要がある。計画を作って、百方手を尽くして歩調を速める」と。その後、中国の国務院、外交部、教育部などはすぐに留学生派遣に関する各措置を実行し始めた。

日本への留学生派遣は73年から開始され、79年には大量の派遣政策が始まった。留学生の派遣と受け入れが活発化したきっかけは、1978年8月に締結された「平和友好条約」と79年12月に調印された「文化交流促進に関する政府間協定」であった。1979年から1983年まで5回に分けて約300人の中国の一流大学から選ばれた優秀な大学卒業生が、中国政府の公費留学生として派遣された。1983年以降の公費留学生の日本派遣は学部生を中心とした以前の方針と違い、中国の教育機関と日本の文部省の試験に合格した修士と博士がたくさん採用された。そのために、当時文化大革命から目覚めたばかりの普通の人々にとって、留学ということは想像もつかないことであった。

1982年に中国共産党中央委員会が公表した「自費留学に関する若干の問題の決定」によって、私費留学が初めて認められ、1984年に「自費（私費）留学に関する暫定規定」によ

って「合法的手続きを経て外貨による費用援助を受ける者、あるいは外国の奨学金を受け
る者は、学歴、年齢、勤務年数を問わず」私費留学が本格的に認められることになったの
である。しかし、一般の中国人の海外出国が可能になったのは、1986年のことであつた。
1986年2月の「公民出国入国管理法」の施行によって中国人の出国制限が緩和され、「公
民が私用、つまり定住、親族訪問、友人訪問、財産相続、私費留学、就職、観光、その他
の用件で出国することが容易になった」(駒,1997)のである。

とはいえ、当時の中国人にとっては、海外留学は簡単に実現できることではなかつた。
給料の安さのせいでほとんどの人は貯金を持っていなかったため、私費留学に必要な資金
作りが一つの難関となつた。そして、海外に親戚がいる大都市の少数の中国人を除いて、
大多数の人たちは、留学のルートさえもまったく知らなかつた。先進国は徐々に中国人に
ドアを開け、中国人の私費留学生を受け入れるようになったが、それはあくまでも90年代
中頃以後のことであつた。それまで中国人留学生を一番歓迎したアメリカでも、高い英語
レベルと厳しい面接が要求されたため、優秀な人でもわずかしかが行くことができなかった。

当時は中国の大学進学率が約4%の時代で、大学生や大学院生の在学中の費用はすべて国
費で賄われていた。優秀な人材の海外流出を防ぐ考えもあつたため、卒業後中国で五年間
の服務期(五年間働くこと)が必要であつた。しかし、1993年、政府はこの既定を見直す
ことにし、大学卒業以上の学歴を持っている全ての人が、服務期の制限なしに、自由に外
国留学をできるようにした。さらに、中国教育部によると、大卒以上の私費留学許可手続
きを簡素化するために、2002年2月から1990年2月から実施してきた大卒以上の自費留
学生を対象にする資格審査が不要となつた。2004年、中国政府は初めて私費留学生の95
人に「国家優秀私費留学生奨学金」を授与した。従来公費留学生(派遣留学生)を留学政
策の中心に置いて来た中国政府は、私費留学を支援する大きな一歩を踏み出したのである。

80年代の公費留学生帰国者が少ないこともあり、海外にいる留学生・元留学生が中国に
帰って貢献するように、留学生の帰国の促進政策が数多く打ち出された。1992年に中国国
家教育委員会により公表された「支持留学、鼓励回国、来去自由」(留学を支持し、帰国を
励まし、行き来を自由にする)という留学方針には、留学生の帰国への期待も明確に書か
れている。この方針に基づいて、中国政府は緩やかな留学政策を策定し、外資の積極的な
受け入れや経済発展に伴い、海外にいる元留学生達の中には帰国して祖国の建設に貢献す
る人が徐々に増えてきた。

留学帰国者の知恵と資金をもっと有効に生かせる環境を作るために、中国政府は1999年
から「海帰派」の起業に対する新しい政策を次々と打ち出した。例えば、起業をするなら3
年間免税されること、海外の投資を導入したら奨励金が与えられること等々である。2001
年、中国の人事部、教育部、科学技術部、公安部、財政部の5部門は共同で、海外から留
学生を呼び戻すのではなく、海外留学生が様々な方法で国に貢献することを促進するた
めの意見を発表した。それは海外で学ぶ留学生による国への貢献について、国が発表した初
めての系統的な文書である。それにより、海外留学生が貢献する方法や、国による保証や
政策が明確に規定されるようになった。例えば、海外で研究と勉強をしている人たちに「共

同研究」「人材紹介」「事業投資」など様々な形で国に貢献できるように奨励政策が提案されている。

また、各地方では「留学人員創業園」の設置の動きも盛んでいる。例えば、北京の「清華創業園」から始まり、上海や山東省の煙台など 1996 年という早い時期に「留学人員創業園」が設置された。そして、「留学人員創業園」の設置に伴い、留学帰国者が安心して中国で生活できるように、上海政府はもっぱら留学帰国者の子供を受け入れる学校まで指定した。2005 年から中国の各地からの「招商引資団」が頻繁に日本に来るようになった。それと同時に中国の各地政府は直接日本で在日留学生向けの「人材招聘会」を行うようになった。2007 年に大阪に来た江蘇省無錫の「招商引資団」は留学生が無錫で起業をするなら、最大 300 万元(約 4500 万円)の資本金の支援を行うというような優遇条件まで打ち出した。これらのことから、中国国内でも地方の経済力を高めるために、各地の政府が優秀な人材の確保及び実力のある外資企業の引き入れに一層力を入れていることがうかがえる。

1.2.2 日本留学に対する中国人の認識

80 年代に入ると、世界から入り込んできた各種情報の中、人々は現代科学技術が進んだ先進国に比べて中国が明らかに遅れている現実を認めざるを得なかった。それで若者たちの意識が変わり始めた。経済発展の初期である中国では職業を問わずに、一人当たりの月収はほぼ同じ程度で 100 元ぐらいしかなかった。しかも 3 年ごとに 3 元ぐらいしか上がらなかった。経済の発達した国家で何年間か働いて稼げるお金は中国では 40 年間の働きに相当するものであった。人々は学習、生活及び仕事などにおいて、多くの制限を受けていた。このような祖国の現状も個人の現状も変えたい、自由になりたい、もっと勉強したいという強い意志の元に、大都市の若者たちが出国を求めるようになった。

当時も人気を呼んでいたアメリカへ留学するには、TOEFL の成績とビザ面接が必要であったため、容易に行くことが出来なかった。しかし、1984 年 10 月、日本政府が私費留学生の「就学生」に対するビザ取得手続きを簡素化したことにより、日本語学校の入学許可書と身元保証書さえあれば、「就学生」として簡単に留学できるようになった。行きやすいという理由で数多くの人たちは「就学生」として日本に留学する道を選んだのだと思われる。1985 年から 1988 年までに日本に留学した中国人留学生の学歴を見ると、「大学卒の人がかなりあるものの、その主力は高卒の工場労働者、店員、会社員、個人営業者」(岡他,1995)であった。彼らは中国で様々な経験をしたことで精神的に成熟しているし、忍耐力も強い。留学は唯一の可能な合法出国のルートであったため、留学生の中には日本語学校に在学中に一所懸命に働き、大金を手にして帰国する人も少なくなかった。しかし、勉強をしたい人たちも稼ぎたい人たちも皆留学の目的がはっきりしていた。

90 年代に入ると、中国政府はもっと多くの人が留学できるようにするための政策を策定しただけではなく、留学生に多くの特典を与え、留学を奨励した。そして、卒業後の帰国を促進するために、修士課程以上の学位を得た人に、仕事を手配するようになり、最もよい研究環境及び仕事環境を与えるほか、居住したい都市を自由に選べるようにし、国内で

同等学歴を取得した人よりさらに広々とした住宅を与え、ひいては配偶者や子供の仕事も手配した。帰国した留学生はこのような優遇措置によって、仕事の環境、生活待遇及び経済面で中国国内の同等な学歴を持った人をはるかに上回ったので、外国への留学は、さらに多くの人の目標になった。

このように中国社会の改革が深まるにつれて、「公」意識の後退と「私」意識の復権と共に、民衆の価値観・意識の大転換が起こり、「人そのものの価値を重視し、最大限に個人の才能を發揮し、自己の価値を実現させることが、まさに人生の最高の意義（姜,1997）」であるという思潮が、迅速に多くの若者に影響した。中国人の生活レベルが向上するに伴い、留学の夢は一般庶民にまで広がるようになった。「一人っ子」世代になると、中国の経済発展に伴い、国際化が進み、国際的人材が求められるようになったため、国の奨励政策と一人っ子の父母の高い期待のもとで留学ブームはさらに高まってきている。

中国人の留学願望がこの時代に高まったのは決して偶然ではない。中国人の伝統的な観念でも、子供を養育するのは、一家が代々続き、一門が栄えるためである。そのため、大多数の中国の家庭でもっとも重要なのは子供が優れた人材に育つかどうかということである。いい学校に行き、いい大学に入学することが人材として世に出る第一歩であると考えられる。しかも、現在の一人っ子の親たちはほとんどが青少年時代を文化大革命（1966～1976）の中で過ごした年代である。あの時代は、個人には何の職業の選択権も無いばかりではなく、多くの人が基礎教育を終えることさえできなかった。教育が受けられなかったことは、一生、補うことができない損失となった。だからこそ彼らは、次の世代の子供に対する期待や望みがことのほか強い。子供が役に立つ人材に成長するのを望むだけでなく、更に多くの親は自分がかつて実現できなかった理想や希望を、子供に叶えてほしいと望んでいる。

このような状況の中で、一人っ子の大学進学希望率の高まりは当然予想される。しかし、中国の大学入試は毎年 7 月に行われる統一試験だけである。問題、採点、制限時間は全国共通で、その成績により進学する大学が決まる。受験生はたった一回の入試にすべてをかける。入試は、一回きりで浪人はない。また、日本の予備校、塾に相当するものも偏差値もない。徐々に続けられてきた大学入学者数拡大は 1999 年以後、学校の経営状態や将来の就職難への心配から、かなり難しくなっている。2001 年の時点で、中国は大学在校生数に基づくデータで高等教育の規模が世界最大となっているにもかかわらず、2002 年の時点で大学への進学率は大学就学適齢人口の 14%しかなかった（ユネスコ,2003）。2004 年から「卒業イコール失業」というように大学生の就職も年々厳しくなっている中国の事情も日本への留学希望者が増加している背景にはある。

近年、中国で流行っている言葉の一つに「知力投資」がある。数十万元あるいは数百万円をかけて子供を海外へ送って勉強させることが「知力投資」としてブームになっている。そして留学は、この二、三年、特に高校生、中学生が 50%を占めるようになり、留学生の低年齢化傾向が社会的に注目され、議論されている（「小留学生の問題」・2003）。このことから、「快成（人）材、成大（人）材。（早く大きな人材になってほしい）（範,2004）と

いう親の迫切した気持ちがうかがえる。

日本を留学先として選ぶのはこの親子の夢が叶えやすいところにあると思われる。言語上の要求が他の国ほどきびしくないということだけでも、英語ができない若者や英語が石化してしまった学生達にとって、日本は一番行きやすい先進国だという考えが強い。さらに、まだ先進国との経済面の落差があるため、巨額な留学費用が全部出せる家庭は少数の裕福層に限られている。したがって、働きながら勉強できる日本は欧米の先進国より、魅力的に感じられるのである。日中の貿易往来が頻繁になった近年、英語だけではなく、日本語も出来る人材が求められる傾向があるため、英語が得意な留学生でも日本留学が将来にプラスになる可能性があるのではないかという考えを持つ人は少なくない。また地理的な距離が近いことや顔が似ていることなどから留学生の親達は安心を感じることもある。日中政治関係で様々な摩擦があったにも関わらず、中国の「新・新人類」は、日本の製品のよさ、アニメやファッションなどに魅力を強く感じ、それを理由に日本留学を選んだ人もいる。

「関西空港に着いて飛行機から降りた時、嬉しくてたまらなかった。ここで私は博士学位号が取れるだけではなく、人生初めての100万円(1,500万円に相当)も儲けられると感じたからだ」(範,2007)。このある女子留学生の告白から、日本留学に対する期待値が高いことがわかる。現在の中国ではほとんどの留学生やその親たちが簡単に日本のいい大学に入れるという考えを持っている。

「ここ数年間に留学相談に来た人の中で90%の人は留学の目的がはっきりわからない。これは危険な時代だ。留学は確かに魅力的な道だ。しかし、多くの人が留学の目的を忘れてただ留学の感覚を楽しんでいる」。この現象について中国最大の英語学校、新東方の校長、徐小平は『対話録』の中でこのような盲目的な出国の現象を「留学的集団無目的」(徐,2002)と呼んでいる。

期待値が高いほど失望も大きい。ほとんどの来日留学生は、自分の生活の質が母国にいた時ほどよくないと感じている。友達と比べるといつも乗り遅れていると言っている。日本の進学制度を全く知らなかった彼らは来日後、バイト、勉強、進学の問題に一気に直面するため、ゆっくり勉強できるのはわずか半年しかない。新世代の成長背景から分かるように、農村出身の若者でも、あまり苦勞をしたことがないのに、生活を維持するために働かなければならない。有名大学に行きたい夢もけっして簡単には実現できない。中国国内で「海帰」(昔の衣錦帰郷の留学帰国者)は「海待」(仕事を待つ留学帰国者)になり、留学の質が問われる時代に入った。日本留学の価値をどのように見出せばいいのかということが日本にいる留学生であれば、だれでも考えないといけない問題となった。矛盾・後悔・孤独という「新・新人類」の複雑な心理状態が「留学の『囲城』現象」として現れ始めた。つまり、留学の城外の人は留学の城内に入りたいが、留学の城内の人は留学の城外に出たいという心理の表現である。

この留学意識の転換期の新しい現象は日本留学に対する認識不足の表れでしかないと考えられる。日本がビザの発給を制限したことによって日本を目でみることが出来る中国人

が限られていたので、ほとんどの留学生の親たちは日本へ来た経験がない。そして、中国のマスコミなども長い間留学を美化してきたことで、中国人だったら留学すると必ずいい大学に入れ、そして大きな成功をおさめられるという概念が中国人の頭の中に深く残るようになった。これは留学生の親たちと子供たちの盲目的な自信が無意識につくりあげられた原因だと思われる。中国の基礎教育が外国より厳しいことや日本の大学入試の競争率が低いということは事実である。そして今までの留学が確かに優秀な人材を数多く造り上げたこともいうまでもない。しかし、それは全ての学生が留学したらいい人材になれるという事を意味していない。

一般の中国人の誤解と思い込みは、経済発展期の中国のマスコミのニュースの取材視点と密接な関係もあると思える。中国のマスコミは日本留学の問題点についてほとんど報道してこなかった。成功の神話が溢れている中国では、人々は失敗に目を向ける時間もない。暗いニュースは中国の主題ではないのである。

第2章 先行研究

本研究で取り上げる主題、「新世代中国人の日本留学」を多角的な角度から解明するには、教育学の知識だけではなく、社会心理学、文化人類学など、様々な関連領域の知識も必要であり、これらの関連文献も重要であると考えられる。本章では、「一人っ子についての研究」「新世代中国人留学生に関する研究」、「宗教と社会に関する研究」といった三つの領域で重要な先行研究をまとめる。

2.1 一人っ子についての研究

2.1.1 世界における一人っ子の研究

最初の一人っ子研究はアメリカとドイツにおいて見出されるのであるが、その研究の出発点は、一人っ子が問題の子供であるところから、その問題の性質を明らかにし、その教育方法を研究し、一人っ子の幸せを確保しようというところにあった。すなわち、一人っ子がいわゆる「問題の子供」であるという実際の問題から起こったものである。一人っ子というのは、近代の現象である。古い時代にも、一人っ子は存在したに違いない。しかし、一人っ子が多くなったのは近代的現象なのである。

一人っ子研究の先駆者の一人であるドイツのネーテル (Neter, E) によれば、19世紀末のヨーロッパやアメリカにおいて、いわゆる産児制限（現代の家族計画による計画出産）が行われるようになり、1910年代には一児主義・二児主義というような言葉も使われるようになった。すなわち、「一家族の子供の数はせいぜい一人か二人にして、これらの子供によりよい教育をしよう」という考えが20世紀に入ってから次第に支配的になってきたのである。その結果として、一人っ子の占める割合は次第に高くなってきた。ところが、このようにして子供の数を制限して得た、希少価値を持つはずの一人っ子が問題の子供であるとするれば、一人っ子の教育は非常に重大な問題とならざるをえない。このような事態から、一人っ子問題は、教育学者や心理学者の関心を集めるようになり、特別に研究の対象とされるようになったのである。

一人っ子研究の先駆者であるアメリカの心理学者・ホールは、すでに19世紀末に、弟子、ボハンノンを指導して、一人っ子の統計的研究を行わせている。そして彼は、「To be an only child is a disease in itself（一人っ子であることは、それだけで一つの病気である）」（白佐他, 1998）と言っている。この言葉は非常に有名になり、以来、一人っ子の親は、自分の子供が一人っ子である事を気にするようになった。

なお、ボハンノンの研究論文は、一人っ子だけをテーマとして取り上げた最初のものであり、1898年、教育学の学術専門誌に「家庭における一人っ子」という題で発表された。この研究は、質問紙法を用いて、381人と多数の一人っ子を対象に行われたものである。一人っ子の特性として挙げられていたものを数量的に裏付けて示しており、本格的な研究として高く評価された。実際に、当時の問題児の相談・指導を担当していた教育相談所・児童相談所に、何らかの問題があるとしてつれて来られた子供の中での一人っ子の比率は高

く、臨床的な事例に基づく限り、一人っ子は問題児の筆頭を占めていた。これは、ある意味では、子供の教育に対する一人っ子の親の関心度が強いことを示すものでもあるが、問題の発生が多いということには変わりがない。

そして、多くの研究・実践に基づいて、子供の教育・心理の問題を取り上げた書物ではほとんど全部といってもよいぐらい、一人っ子の問題に触れ、一人っ子の問題性についての警告を発するようになった。例えば、ブラントン夫妻 (Blanton, S. & Blanton, M.G) は 1927 年出版の著書のなかで「一人っ子は非常なハンディキャップを持っている。彼は、兄弟のある家庭に育った子供と同等の能力を持って世の中を渡っていくことは到底出来ない」と述べている。

その後の研究は、一人っ子は「問題児である」とするものと「問題児ではない」とするものの二つに大別できる。前者の研究は医学的・個性心理学的観点から、一人っ子は兄弟のある子供より性格的に劣っているとし、一人っ子そのものに焦点を当てている。それに対して、後者の研究については一人っ子をそれぞれの家庭環境と広く関係付けて研究し、一人っ子が生れつき望ましくない心理的特徴を持っているわけではないとした。現代の研究では、一人っ子である事それ自体よりも、一人っ子である事に様々な原因が加わって総合され、それが問題を引き起こしがちであることが分かってきた。

2.1.2 中国における一人っ子の研究

中国で、いわゆる「一人っ子政策」⁷⁾が人口抑制の基本国策と位置付けられ、本格的に実施されるようになったのは 1978 年である。それ以来すでに約 30 年が経過した。現在、幼稚園児から高校生まではもちろん、大学生も 85%を一人っ子が占めている。同時に、家庭の規模も縮小の一途をたどり、核家族化が進行した。特に、都市においては、両親と一人っ子で構成される家庭が急速な勢いで増加している。2005 年の中国では一人っ子が 9 千万人に達した (張, 2006)。

生まれた時から「小皇帝」、「小太陽」として大切に育てられる一人っ子はずっと問題児であるとされてきた。中国の教育界では「一人っ子教育」という言葉が既に専門用語として定着している。これは、今後の中国の教育界は、かつてとは異なった子供を対象とし、かつてとは異なった対策・対処をしなければならないという意識の現れと言えよう。

昔の中国では、伝統的な大家族制度のもとに、「多子多福」の精神が長い間支配的であり、子供が一人っ子という家庭はごくまれであったので、一人っ子の研究は存在しなかった。中国の学会で本格的な一人っ子の調査・研究が始まったのは、「一人っ子政策」が実施され、一人っ子が育ち始めてからである。1990 年代に入ってから、幼児期、児童期より問題を抱

⁷⁾ 一人っ子政策のルール：都市の夫婦は子供 1 人までだが、多胎児は全員が戸籍を持つことができる。また農村では 1 人目が女の子の場合、2 人目持つことが認められる。少数民族は 2 人の子供まで生むことができ、チベットなどの個別地域では制限がない。夫婦二人ともが一人っ子の場合は子供 2 人まで認められ、都市部では 6 歳あけると 2 人目が可能となりつつある。2007 年の時点で違反して子供をもうけた場合の罰金は、都市部で 15 万元 (225 万円)、地方で 7 千元 (約 10 万円) となる。商売人は罰金を払って子供を持つ傾向にある。

える青年期についての問題も取り上げられるようになり、関係の研究機関では、一人っ子の研究が重点課題として精力的になされるようになっていく。

『中国教育年鑑』などから概括的にまとめると、中国の一人っ子、つまり、中国の子供の多くは、「栄養は良好で、知識欲・想像力・表現力などが豊かで、学習上の進歩が早く、知力面では優れているが、身体面では弱々しく、労働などの辛い事を避ける粘りのない怠け者で、自己中心的・衝動的・わがままで協調性に欠け、他人への関心を示さない個人主義という欠点がある」ということになる。

しかし、幼児期の研究について、劉（1988）、章（1989）などによると、一人っ子の性格において、様々な研究には相反する主張をするものも多く、共通する特性とされているものは、殆ど一致しないことが明らかになっている。中国の心理学者、周ら（1990）の初期の研究を総覧している日本語論文の中には、一人っ子問題が次のようにまとめられている。「一人っ子は、その素質において兄弟のある子供と異なるものでなく、その特徴と言われているものの多くは養育環境の影響によるものであることは、中国における研究によっても示唆された。特に、幼児期におけるほかの幼児との相互関係は、一人っ子の適応、社会性、性格の形成に大きな影響を与えることが推測された」（周他, 1990）。

「中国における家庭教育や子供の成長・発達に関する諸問題も、すべてが一人っ子によるものでもないし、一人っ子であることが唯一の原因でもない。しかし、家庭の中で子供が一人であることが主な原因の一つであり、これらの問題を深刻なものにした主な要因の一つであることは明らかである」（白佐他, 1998）。

松本（1965）、松原ら（1990）などは、日中の一人っ子の環境面の違いを日本人の視点からまとめ、日本社会の出産年齢層にとって、子供が貴重な「宝物」であることには異論がないが、多様化する価値観の中で、子供を産み育てることにそれほど意義や価値を見出す人は多くはないし、様々な困難や苦勞を克服してでも子供を育てようという意欲を持つ人も多くはないのに対し、中国では、両親たちは子供のためにすべてをささげようとしていると述べている。

ただ一人の子供だけに、どうしても家族は、特別な愛情を、特別な配慮を、特別な心配を集中させ、特別な期待をその子に託すことになってしまうのである。幼児期の一人っ子の研究は、林（1989）及び白佐ほか（1998）など数多くあるが、「聡明、可愛い、依存性が強い、挫折に耐えられない、理想が高い、平等意識が強い」という一人っ子の特徴といわれているものの多くは養育環境の影響によるものであることが示唆されている。

中国人の一人っ子に関する最新の研究といえる 2001 年に出版された『愛と成長』（祝, 2001）は量的及び質的方法の両方が使われ、青年期に入った一人っ子大学生を対象にした初めての研究である。結果としては色々な性格面からみれば一人っ子大学生と非一人っ子の大学生とは差異がはっきりしないこと、そして幾つかの面で一人っ子青年は好ましい性格をもっているということが述べられている。ただし、第一世代の一人っ子は非一人っ子の大学生より未来への期待が高く、理想の職業で第一位は弁護士と裁判官であり、第二位は企業家であり、第三位は科学技術者である。それと同時に一人っ子大学生にとって

自分自身に一番足りないものは何かという項目で 80%の人が「挫折に対する抵抗力」と書いている。

2.2 中国人留学生に関する研究

2.2.1 従来の中国人留学生に関する研究

近年の中国の若者の日本留学に関する研究としては、井上（2001）、葛（1999）、岡益己ほか（1995, 1996a, 1996b）があげられる。これらの研究では留学生の異文化適応問題が注目されている。留学生の異文化適応の研究について、研究の蓄積が不十分であるということとは田中（2000）によって指摘されている。研究の歴史がきわめて短いということも井上（2001）によって指摘されている。しかし、留学生の心理的な適応に関する研究はいくつかの角度からなされている。井上（2001）は留学生をとらえる場合、その文化的異質性だけでなく、多角的な角度から理解することが大切であると述べ、8つの捉え方を提案し、留学生研究とは青年研究でもあるという視点を持つことが必要であると強調している。また、アジア地域からの留学生に関する浅野（1997）の研究では、従来の研究にあらわれる留学生（就学生・研修生を含む）像が3つに整理されている。第1は、「専門的技術・知識の学習者、技術移転・国際交流の担い手」としての留学生像であり、同時にそれとは似ても似つかぬ実質的な「出稼労働者」としての留学生像である。第2は人権を侵害される「被害者」としての留学生像である。第3は「異文化の担い手」としての留学生像である。「こうした3つの視角には、それらを繋ぐ一つの重要な研修生・留学生・就学生像が欠落している」（浅野, 1997: 43）という問題点を城石（2004）も指摘している。ある留学生を、全体として捉えることの重要性が示唆されると城石（2004）は考えている。

徐（2005）では、中国人留学生に関する従来の研究を6つの視点からまとめている。第1に、異文化接触の問題と捉えた分析視点がある。その中で、葛（1999）は中国人留学生の特徴やその問題、適応度について述べている。一方、徐・陰山（1994; 1995）の研究では、客観的な要因以外に、個人の主観的な要素も異文化適応の問題に入れて考えることが、とても有意義なものだと考えられている。加賀美（1994）が学生の内面を捉えられないアンケート調査の弱点を克服してデプスイタビュー調査を加えたという点を徐は評価しているが、これは1990年代初めの頃に行なわれたものであるため、現在の状況に当てはまらない点については、検討する必要があると主張している。第2に、中国人留学生の日本イメージについて、山崎（1994, 1996）の研究が注目すべきであることや、孫（2004）の研究ではアルバイト先の異文化接触の重要性が強調されていることなどが挙げられている。第3に、社会学の研究においては、ライフデザイン研究所（2000）の中国人留学生の日本人観についての研究や邵（2000）の中国人留学生の日本観の変容についての研究があると述べられている。第4に、教育学の視点から、小島（2004）の研究が挙げられ、半構造化インタビューから「アルバイトは日本語の勉強に役に立つ」という留学生の声が聞こえるところは参考になると徐は考えている。第5に、政策提言の観点から中国人留学生の受け入れについての問題提起も少なくないと述べられ、研究として段（2003）、浅野、杉村、劉（2000）があげられている。第6に、中国人留学生の意識の特質を探る調査として、私費留学生を対象とする岡・深田・周（1995; 1996a; 1996b）の研究があげられている。

中国人の日本留学に関する最新の研究といえる段（2003）には戦前以来 100 年間の日本

へ留学する中国人の歴史が系統的に述べられ、現代中国人の日本留学の問題が指摘されている。新しい世代の留学生のことも少し触れているが、研究資料はほとんど1997年までのものであるため、現在の一人っ子世代の留学生に関する実質的な記述はない。

2.2.2 「新世代」中国人留学生に関する研究

新世代中国人留学生に関する研究は中国では周（2002）があげられる。近年の中国人留学生の低年齢化現象に関して、『少年留学三思而行』で、周は留学経験者として現代の中国人留学生のことを多様な視点から分析している。留学に対する中国人の考え、留学の短所、長所など留学について全般的に論じられ、留学生の低年齢化の弊害なども具体的に書かれている。ただし、留学先がカナダのような欧米国を想定しており、日本留学への考慮が欠けている。そして、留学生が一人っ子であることには言及されていない。

一人っ子たちの来日より、日本語教育の現場に起った大きな変化が注目され、奥田（2003）、範（2004）、城石（2004）を初めに新世代留学生に関する研究は、この二、三年の間に、様々な研究成果が発表されている。奥田（2003）は日本語学校管理の視点から、学生の若年化に関する対応の必要性を強調している。城石（2004）は一人の留学生のライフストーリーを描き、留学生と共に歩み、彼らを共生社会にいる一人の人間として理解する必要があると主張している。日本語教師である嶋本（2005）及び中井（2006）は、それぞれ、現場にかかわる問題を出発点として研究を行った。嶋本は、五人の学生のライフストーリーを通して、学生のやる気がないという問題を理解しようとしている。中井は学生の再履修という現象について、グラウンデッド・セオリーという質的研究方法で問題の解決方法を求めている。新世代の私費留学生である徐（2005）は、従来のアンケートのような研究方法では留学生を理解するには限界があると感じ、ライフストーリーという内的なアプローチで私費留学生の日に欠かせないアルバイトへの理解を求めようとしている。範（2004）では、中国の「新・新人類」の来日によって起きている日本語教育現場の現象を「背景」・「問題」・「対応策の提言」という3つの軸で捉えている。一人っ子の留学生の特徴には、中国の大きな転換期で生まれ育ったという背景や、中国の発展に伴う価値観の変化などが大きな影響を与えていることが分かる。

以上の研究から、中国の新世代の来日による日本語学校の変化がうかがえる。再履修生がたくさん出る日本語学校の現在、教室運営の難しさが写し出される一方、教師と学生の間で交流が欠けていることも現状である。徐（2005）では、バイトをしながら勉強している留学生たちの基本的な生活パターンが描かれ、バイトを異文化体験として考える留学生の意識転換も記述されている。異文化適応には、主人公のRIの里親の役割が大きいことから、日本社会でのネットワークの形成は留学生にとって極めて重要なことであるということが示唆された。また、中井（2006）で容易に諦める、注目されると頑張れるなどといった新世代留学生の心理的特徴が、今後の新世代留学生の研究を行うには有意義な参考になると考えられる。留学生の受け入れに不備があることが指摘され、奨学金及び授業料免除が必要という従来の留学生研究と違い、範（2004）では、現在の中国人留学生の問題を解

決するには、まず心のケアに注意を向けないといけないと指摘している。

これまでの中国人留学生や新世代留学生に関する研究からみると、留学生に関わる研究には、3つの新たな動向が窺える。一つは日本語教育研究の方向が変りつつあることである。従来教室の中に焦点を当ててきた日本語教育は、内から外へ注目し、学生を社会の中の存在として捉え始めた。もう一つは、研究方法において、従来のアンケートのような量的な調査方法から質的な研究方法も必要だと思われ始めた点である。最後は研究者自身が多様性を持ち始めたことである。研究はあらゆる領域、あらゆる留学生と関わっている人たちによって行なわれ始めた。今後、様々な研究成果が発表され、より多様な声が挙げられることによって、留学生に対する理解も深まっていくのだろう。範（2004）で明らかになった新世代中国人留学生の日本留学の特徴を次節で具体的に述べる。

2.3 「新世代」中国人留学生の日本留学の特徴

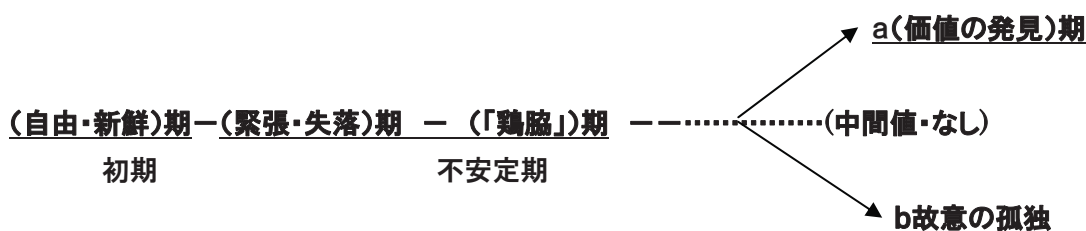
範 (2004) では「日本語学校における一人っ子の中国人留学生増加に伴う問題」に焦点を当て、多様なデータの比較を行った。従来の中国人の日本留学と違い、90年代末から留学の主役になってきている一人っ子たちの日本留学は、中国領事館領事 Zh (範, 2003) のデータによって、以下のようにまとめられる。

「現在の留学生は80年代とは全く違う。80年代の留学生は、大体私のような年齢で文化大革命の中で最も複雑な状態を体験し、個人の生活能力や仕事能力及び思想意識の独立性は相当に成熟していた。日本へ留学する目的もはっきりしていた。それは、新しい科学技術文化を学んで国の建設に貢献することだ。だから、苦労にも耐えられた。80年代後半から90年代になると、この救国救亡という政治的な目的が段々希薄になってきた。ほとんどの人達は自我の設計というのが出発点だといえる。個人生活設計、90年代からこの方向へ発展してきて、現在では普通になっている。90年代末から、1人っ子の世代になると、国内のたくさんの方が高校の途中や高校を卒業してから日本へ来た。父母が日本留学に経済的援助をするのは、日本の教育環境は良好で、国内の大学の競争率が高いため、日本に留学すれば、高等教育の大門に入りやすいと考えているからだ。80年代の留学生には少数だが稼ごのために来日した人が確かにいる。しかし、彼らと違って、現在の留学生の目的は主に学習だというのが一つの特徴だといえる。」(Zh)

「(現在の留学生は)以前の留学生と思想観念、生活習慣が完全に違うんだ。彼らにも独立の思想がある、思想の開放性と自由度はわりと大きい。しかし、周りからの束縛がすくないから、中国の伝統的な文化にも日本の伝統的な文化にも、それに対する知識は少ない。そのかわりに流行文化に染められ、随意性が大きい。いいところと言えば、皆聡明で創造性に富んでいて、好きなことがよくやれる。しかし、ある面で束縛が欠けているので、規律性も欠けている。そして国内で親に甘やかされていて、特殊な家庭環境の中で成長してきたから、多数の子供は思いとは全然違う日本に来て、この異環境の中で色々な変化に伴って自己調整ができるが、極少数の子供は思想観念の面で衝突が発生する。」(Zh)

ここから、90年代末から日本留学の主役になってきている一人っ子の中国人留学生たちは、今までの中国人留学生と違うことがわかる。また、留学の目的としては外国での学習を通して「個人設計」を実現することが特徴だと考えていることがわかる。

Zhの話したように、ほとんどの新世代留学生は、大学、特に有名大学を目指して日本へ来た。10年前の留学生と比べ、必死に働かなければならないことはない。しかし、相変わらずアルバイトをしながら、学校に通う生活がごく普通のパターンであるのに間違いはない。彼らが日本でたどる軌跡は以下に図式するように、三つの段階を経ていると考えられる。



(注：鶏脇とは、ほとんど肉が付いてないので、食べる価値があまりないという鶏の脇の部分；面白くないが、仕方ないという生活の比喻として中国で使われる。)

従来の留学生と全く違う「新・新人類」は自由に憧れるが、他者への依存から抜け出せないという特徴を持っている。この矛盾した心理が、日本に留学することにより、更に複雑な形で露呈している。

ほとんどの「一人っ子の留学生」は中国では全てのことを親たちが「やってくれる」から、学習以外のことを考える必要もなかった。しかし、国を離れ、学習、生活、アルバイトを全部やらなければいけなくなり、このような「自由を管理する」ためには、どうすればいいのかということに悩む学生が多いのである。

また「自由」というのは「新・新人類」にとっては、普通ではない「逸脱的な」性質を持っている。親達にコントロールされた自由が留学によって突然、自分のところに戻ってきた時に、「どうしよう、どうしよう」という準備不足の心理状態で問題に直面し、パニック状態に陥りやすい。この状態を解決できるかどうか彼らの心理的安定状態と直接かかわっている。解決できないと、【故意の孤独】に走ってしまう。彼らは「理想が高いが、挫折に弱い」、自由と孤独の間の「中間値が欠けている」からである。これこそ今まで研究されてきた中国人留学生と最も区別される「新世代」中国人の留学生の特徴だと考えられる。

図に表示された不安定期に入る「新世代」の心理と生活は一番複雑な状態になる。彼らは、日本語の勉強、進学試験、社会への適応、そして学費と生活費を稼ぐなど、いっぺんに三足も四足も草鞋を履かなければならなくなる。このような環境は孤立無援という精神状態を生みやすくなる。常に理想と現実、希望と失望の間を揺れ動く心理状態で、未来に対する希望を失う危険も大きい。

現実の留学生生活は彼らが思っていたとおりのバラ色ではなく、日々の大変さを体験している彼らは、精神も体も疲れている。しかし、ほとんどの留学生は後悔しても何もせずに国には帰れないと思っている。「いくら苦労しても、我慢するべきだ」という中国人の見方が根底にあるからである。そして、両親に心配を掛けたくないで、「いつも元気ですよ、日本での生活は楽しいですよ」と電話で言うが、本当の大変さや心の憂鬱を素直に両親に言えないことが、調査でもっとも目立つ共通点であった。縋る藁なしの孤独感が彼らの息苦しさを煽っている。カラオケで快樂を買うことや、ゲームセンターでよい気分を取り戻すなどのような様々な方法でストレスを発散し、それによって心理的なバランスを取ろうと努力している。それでも、結局耐えられずに帰国した一人っ子が存在し、増える傾向も注目されている。

そして「ビルは高いけど、僕と関係がない。旅行は行きたいけど、お金ない (Te)。」というような、日本の主流社会に入れ、狭い範囲での生活は、誤って社会を捉えるようになる危険が大きい。更に自国のことや自分のことが嘲笑されると、それに対して日本に抵抗する気持ちから敵意を持つようになることもしばしばである。

2.4 社会と宗教に関する研究

宗教は社会の鏡であり、宗教ブームは社会変動と相関関係にある。社会システムの変動は、そこに生きる人間にとって衝撃的な出来事であり、既存の価値観やライフスタイルを無効にし、それに伴って将来への不安を増大させるため、「宗教的機能」が社会変動によって顕在化するからである。芦名（2004）では宗教の機能は社会や文化といったシステムを根拠づけ、人間に存在の意味を与え、さらに社会共同体や個人レベルでは既存の仕組みやライフスタイルを転換するところにあると述べられている。

転換期にある中国では、近年、宗教に関する研究が社会心理学、教育学及び医学など様々な領域で盛んに行われ、その研究結果も次々と発表されている。現代の中国の宗教に関する研究には梁（2004）、李（2005）、何（2006）、陸ほか（2005）がある。梁（2004）では、質的研究方法と量的研究方法を併用して、インタビューとアンケートを通して中国人の宗教心理を調査した。結果は自己同一性という視点でまとめられている。

李（2006）は華南Y県X鎮にある一つのキリスト教教会をフィールドにし、教会の組織及び機能をあきらかにすることで、農村部にあるキリスト教組織の特徴及び社会構造における位置づけを論じた。結論の一つとして、教会のメンバーは社会の公益活動に消極的な一面があるが、「互惠互利」の助け合いという点において認識が強いことが分かる。何（2006）では、様々なテーマで諸「宗教と当代中国社会」が論じられている。さらに、陸ほか（2005）では、転換期にある青年の発達をテーマとした様々な論文が集められている。

陸ほか（2005）では、「新・新人類」という言葉の由来は「日本の“新人類”」（1989年に出版された千石保の著作の訳本）にあることが言及されている。そして、先進国の青年の価値観の変遷と対照した現代中国青年の価値観はポストモダン価値観に転換している傾向があると指摘され、さらに先進国では高度成長を遂げてから出てきたポストモダン価値観が、中国社会発展の「時空圧縮」特性が原因で、“早産”されたため、青年教育を慎重に行うべきだと注意している。

これらの研究はそれぞれ視点が違うが、中国の改革開放が農村部及び都市部で進むにつれて、人々の生活環境、人間関係及び価値観が迅速に変化していることや、特に、人間関係及び道徳観の変化が人々の信仰に影響を与えたことがわかる。何（2006）の調査によると、中国でのキリスト教は1990年代後半に、信徒の増加率がピークに達し、高学歴、若者、男性が増えていく傾向にある。そして、キリスト教の増加は農村から都市教会に移転する傾向があり、特に信徒になった人の中に大学生の増加が目立つという。彼らの言行は拝金主義者と対照的で、現在の社会で目立っている。クリスチャンになった大学生の調査（何, 2006）では、大学生のほとんどは他人の紹介でキリスト教に接触しはじめ、自分の信仰に非常にまじめな態度を持っていると報告されている。彼らが入信したのは、転換期の中国における伝統的な価値観が衰え、社会の秩序が混乱し、人と人との間の信頼関係が危機に陥り、腐敗現象が増加することなどといった状況の中、キリスト教の「隣人を愛せ、世の中の光になれ、塩になれ」という考え方に魅力を感じたからだという。

キリスト教は精神の健康にポジティブな役割がある。この役割をスビルから（芦名, 2004）

は次の 3 点にまとめている。1 つには、宗教は社会化および社会統制の媒体として機能しうる、つまり教義が内在化されるか外圧として作用することで「良きクリスチャン」という生きる上での指針が得られ、また、教会などの宗教的共同体はノーマルでない思考や行動を抑制し、社会的に受け入れやすいよう導くための学習環境として作用するという。第 2 に、宗教は悩める人々に人生の苦難からの「安全な港」を提供すると考えられる。すなわち、日々の在り方に指示を与え、社会的受容によって孤立感や拒絶感を和らげ、信仰との強固な一体化によって聖なるものに護られているという感じを与えるのである。さらに、第 3 の利点として、様々な宗教的活動にはより直接的な精神療法のような働きがあるといわれる。

杉山（2004）は癒しと回心に焦点に当て、新宗教の役割を分析している。修養的な癒し（経典などのテキストの教え）と呪術的な（儀礼）癒しが、どの教団においても存在するという従来の研究成果を踏まえ、第 3 の形として、共同体の癒しというものを呈示している。これは、教団のメンバーとなってそこに「居場所」を見つけ、周囲の人々とのつながりを実感すること、すなわち、教団という信仰共同体への参加そのものに由来する癒しであるという。

杉山（2004）によると、稲恒はキリスト教だけでなく、アメリカでの新宗教でも、「安全な港」の機能などは認められると述べている。佐々木（1969）は新宗教における病気治しは一種の「集団療法」と述べている。伝統的な宗教であるキリスト教の発展からみれば、肉体的病の治療者を兼ねている聖職者はほとんどいないが、カウンセリングの形式における心理学的治療は多くの聖職者たちの仕事の重要な一部分であることがわかる（Yinger, 1994 : 101）。インガーの指摘に見られるように、聖職者は信者の心のケアに強い関心をはらっている必要があるという。

さらに、新宗教信者の入信のプロセスはロフランドとスタークが明らかにした伝統的な宗教の回心のプロセスと同じであるということから、杉山（2004）は宗教における癒しの重要な部分に、アイデンティティの構築があると指摘している。特に新宗教に入信した人の多くが若者であるという事実から、現在の若者の問題にはアイデンティティの構築が大きいということが明らかになった。この現代人の問題は真の自分と現在の自分の間にずれが感じられる点にあらわれているからこそ、現代の新宗教が、しばしば現代人の「自己探し」と結びつくのであることは芦名ほか（2004）でも指摘されている。社会の変動を背景にした中国で伝統的な宗教が復興しているところからみても、日本で伝統的な宗教が衰える代わりに新宗教が発展しているところからみても、若者の自己探しに繋がっているところが共通していると言える。伝統的な宗教であれ、新宗教であれ、若者の自己探しに貢献できないなら、若者はけっしてそこに属することはしないだろう。

第3章 本研究の目的と位置付け

2008年現在、日本語学校に在籍する中国人留学生のほとんどは一人っ子世代となっている。中国の「新・新人類」が90年代後半から徐々に来日し、中国人の第三次日本留学ブームが形成され、「新世代」中国人の日本留学の幕が開いた。彼・彼女らはほとんどが20代前半と若く、大学入学を目指して来日する。経済的な状況の変化に伴い、「新世代」留学生は前世代の留学生ほど必死に働く必要はない。しかし依然としてバイトをしながら、勉強する生活は一般的なパターンである。近年、留学生の若年化が進む一方、2002年頃から中国東北地方・農村出身で、地元の高校・専門学校を卒業した労働者が急増し、少数民族の人々が増えていることも留学生の特徴となった。これらの留学生は中国の大都市に行ったこともなく直接日本の大都市にきた若者が多い。留学生の若年化、一人っ子という生育環境及び地方出身の若者の増加を考えると、日本語学校は、彼らの日本留学の出発点として、異文化適応の架け橋として機能することが強く期待されることが推測できる。

ところが、日本政府の留学生受け入れ政策が不安定であることに左右され、「教育」より「管理」を重視する日本語学校の現実と、留学生に望まれている日本語学校の姿との間には、大きなずれが存在しているように思われる（範, 2004；徐, 2005；浅野, 2004等）。留学生の多くは自分がいる日本語学校を居場所だと感じていない。

本研究はこうした現状を背景として展開され、筆者の博士前期課程の研究（範, 2004）をさらに継続し、発展させたものである。範（2004）では、「新世代」中国人の「逸脱的な自由の管理」が日本人教師と留学生が共に考えなければならない緊急の課題となっているということを明らかにした。そして、その問題を解決するのに「居場所」作りが避けられない課題となっているのではないかと筆者は考えている。

本研究で取り上げたK教会では、中国の東北地方、福建省の地方及び発展中の二次都市からの留学生が多く、韓国人の教会とも関係があり、朝鮮族の若者も多くいた。このK教会をフィールドとするようになったのは2004年10月10日の教会の留学生との偶然の出会いがきっかけであった。筆者はこの教会に通う中国人留学生が教えてくれた。「2000年以前は一人もいなかったのに、2004年までに200人以上にまで増えてきた」という現象に驚き、さらに教会は「愛」があるところだという留学生の話に惹かれ、なぜ彼らは神様の子になったのかという疑問を持ってこの「居場所」を究明しようと考えようになった。

近年、日本人の若者の居場所作りが日本社会で注目され、様々な研究が盛んに行われている。しかし、留学生の居場所作りまで言及されたものが管見の限りまだない。留学生を「外国人」であると同時に悩み多き青年期の若者であるという視点で捉える必要があると金沢（2002）も井上（2001）も述べている。しかし、新世代は多様性を持ちながらも、「躊躇期が延長された（奥田, 2003）」ゆえ、「大人でもない、子供でもない（範, 2004）」時期に留学の旅に出ている。そこで、彼らを見るには、青年ではなく、少年から青年への過渡期を異文化環境で過ごしている一人の人間として考える必要があると筆者は主張したい。

少年から青年への過渡期は一つの危機期であり、アイデンティティの形成が人生の課

題として与えられ、解決しなければならない。キリスト教は伝統的な宗教の一つとして、青少年の成長の過程で注意深く周到な教育を通じて彼らを導くように提唱している（コメニウス, 1973）。そして、キリスト教の教義である『聖書』が完全な人間像を与えていることに人間の個性化において大きな意味があると思われる。しかし、伝統的な宗教が衰え、新宗教が相續いて誕生した今日、単に宗教であることだけでは、問題の解決はなかなか難しいのではないかと考えられる。そこで、K教会を見るには、キリスト教の視点からというより、若者にとって意味がある共同体として見るほうが重要であると筆者は考える。

したがって、本研究は、彼らはなぜ教会に通っているのか、教会でなにをしているのか、教会での生活は彼らにとってどのような意味を持つのかという三つの大きなリサーチクエストを巡り、教会に通っている新世代の生活状態を詳細に記述することを目的とする。本論文ではまず物語を通して、彼らの日本での成長の軌跡を具体的に記述する。次にその記述に基づいて、彼らがいる教会について考察し、分析することにより、多角的に新世代の日本留学の実態を解明し、最後に、留学生の「居場所」作りについてより具体的に提言をしたい。

本研究はエスノグラフィーで行う。長期のフィールドワークを通して、「新世代」留学生の成長を追跡することは、彼らへの理解がより深まり、彼らの悲しみと喜びをより詳細に描くことができると筆者は考える。居場所がないと感じる日本社会では、K教会は非常に貴重な存在であり、そこで行われていることを直接観察することは、従来の留学生を取り巻く現象では起こっていなかった現象を解明するためにも、留学生の居場所作りを考えるにも、非常に意義があると考えている。

2008年、日本では「留学生30万人受け入れ計画」が発表された。少子化及び超高齢化に直面した日本は本格的に国際化に向かわざるを得ない時期が来たのである。「隣に住む外国人との共生環境」には、「内なる国際化」⁸⁾が必要だと田中（1997）は提唱している。筆者は本研究を通して、一人の留学生として共生社会である「美しい日本へ」の実現に微力を貢献できるように願う。新世代中国人の日本留学の実態と諸問題を正確に把握し、その関連要因を多角的に究明することは、教育界だけではなく、二十一世紀の日中関係を展望するうえでも、日本社会の国際化の行方を見るうえでも一つの避けられない重要な課題であると確信している。

8) 田中（1997）は「隣に住む外国人との共生環境」のなかで、国際交流の現状について以下のように述べている「物理的に留学生の数が増えても、質的には、へたすると所得格差や上下関係を実感することに終わる可能性もあります…特にアジア系の留学生に対する異文化理解も、国際交流も、架空のものとして理念を説いていても、現実レベルが変わっていかなければ、いつまで経っても言葉遊びに終わります。（『実践・国際交流』: 84）」田中のように数多くの人たちは「内なる国際化」を提唱し、外国人との真の交流を、留学生に対する真の理解を提唱している。

第二部 方法論

「エスノグラフィーとは、ある集団の文化を記述する作法であり科学である。その記述は遠く離れた土地の小さな部族社会についてのこともあれば、中流階級の暮らす郊外の教室についてだったりすることもある。その仕事は、問題を明らかにするにふさわしい人々にインタビューし、関連する文献や記録をあさり、ある人の意見を他の人の意見と突合せながらその信頼性を確かめ、ある個別の関心その集団全体との間をつなぐ道筋を探し、そして専門家たちのためにするのと同じようにその問題に関心のある人々のために言葉にしてゆく。その限りでそれは、調査報道に携わる人間の作業ととてもよく似ている。ただ、調査報道に携わる人間とエスノグラフィーとの最も重要な違いは、ジャーナリストが殺人とか飛行機事故とか銀行強盗といった非日常的な出来事を探して回るのに対して、エスノグラフィーは人々の日々繰り返される日常生活を書き留めるという点だ」

David M. Fetterman. *Ethnography: Step by Step*.
(Applied Social Research Method Series Vol.17, Sage 1989.)
(ヴァン・マーネン, 1999 : 272 より再引)

はじめに

本論文の目的は、新世代中国人留学生がたくさんいる K 教会は、そこにいる留学生の成長においてどのような意味を持つのかを明らかにするところにある。そのため、K 教会にいる留学生の成長を理解すること及び彼らがいる K 教会という居場所の性質の解明が必要だと考え、研究は質的研究方法の一つであるエスノグラフィーという手法を用いて行った。

エスノグラフィーは民族誌、民族誌学とも訳す。質的研究方法の中でも最も歴史が古く、古代から使われていた。エスノグラフィーには、フィールドワークという調査プロセス及びフィールドワークの結果をまとめたストーリーという2つの意味がある。研究方法においては、データの収集・保存・修正・分析の仕方だけではなく、現場に関する事前の理解、現場への入り方、継続的な参加、現場を去る手順、現地の人々への反応、様々なインフォーマントとの関係性なども論じなければならない。

第二部の研究方法では、「WHAT WHY HOW」という基本的な問いをめぐって、本論文の研究方法を述べる。【第4章 エスノグラフィーについて】では、まずはエスノグラフィーという研究方法を簡単に概観する。つぎに「なぜエスノグラフィーを書くのか」では、筆者がエスノグラフィーを採用した根拠を述べる。【第5章 フィールドワーク】では、フィールドワークの記述を通してエスノグラフィーをどのように応用したかを示す。【第6章 分析方法】では、本論文において筆者の分析戦略を述べる。【第7章 私という存在】では、K 教会というフィールドにおいて調査者である筆者の立場を検討する。

第4章 エスノグラフィーについて

4.1 エスノグラフィーとは

エスノグラフィーは民族誌、民族誌学とも訳す。語源上はギリシャ語の“ethnos”（民族・人々）と“graphein”（書く・記述する）の合成語である。ポワリエ（J.Poirier）によれば、ドイツの歴史学者のニーブール（B.G.Niebuhr）が1810年頃に“民族誌”という語を最初に用いたという（石川,1987）。質的研究方法の中でも最も歴史が古く、古代から使われていた。たとえば、ギリシャ人やローマ人は旅行や戦争に行き会った文化について記述していた。記述民族学は人々についての記述、文字どおり「文化の記述」を意味している（Atkinson,1992）。文化的な見方に焦点を当てている点が、ほかの質的研究方法との違いである（Wolcott,1982）。

記述民族学者は、文化的現象や習慣、規範を理解するためには、文化という文脈の中で人間の行動を研究することが重要である（ホロウェイ&ウィーラー,2000）と述べ、研究する文化あるいは下位文化のなかにひたり、その文化の構成員の視点でその世界をみようとする。データの収集は主に観察とインタビューという長期のフィールドワークを通して行われる。研究者は主な研究用具であるため、観察者としてその文化に参加するように努める。つまり、その文化を学び、構成員の行動を観察し、彼らの話すことをよく聞き、場における出来事や行動について記述することである。データを集め、分析したのち、研究者は詳細で真に迫ったストーリーを書く。ストーリーは記述、分析、解釈をまとめたものである（ホロウェイ&ウィーラー,2000）。要するにエスノグラフィーは文化とフィールドワークとを結び合わせる。つまり、エスノグラフィーには、フィールドワークという調査プロセス及びフィールドワークの結果をまとめたストーリーという2つの意味がある。

歴史の流れに伴い、エスノグラフィーも変化しつつある。その発展変化を「The Five Moments of Qualitative Research」（Denzin,N.K.& Lincoln,Y.S.1994）を参照して、概観してみる。現代の記述民族学は、文化人類学に始まったもので、ポーランドの人類学者 Bronislaw Malinowski（1922）がエスノグラフィーの特徴である参与観察によるフィールドワークを最初に明確な形で打ち出したとされている。「西太平洋の遠洋航海者」がきっかけで、1925年頃を境に、専門家によってエスノグラフィーのためのフィールドワークが行われるようになった。その当時、Malinowski(1922),Boas(1928),Mead(1935)のような著名な文化人類学者が、非西洋文化における文化的パターン、習慣を調査し、そこに住む人々の生活スタイルを探求した。ほぼ同じ時期、シカゴ学派と呼ばれる社会学者のグループもこの手法を採用して、都市のスラム、ゲットー、ギャングのような、周辺的な文化や「社会的異邦人」の下位文化を調査し、のちの記述民族学的方法に影響を与えた。初期のエスノグラフィーでは、文化人類学者は「未開民族」の文化だけを調査していた。研究者は部族の人々と一緒に生活し、彼らについて書くことによって、消えつつある文化の様相を保存したいと考えたのである。その後、西洋の文化人類学者は、自分たちの社会に注目するようになった。つまり、自らの文化のなかで「文化の異邦人」として行動する方向へと変

わった。中心となったのは依然として「違うもの」「逸脱」の記述であった。

1960年代になって、アメリカでは土着のアメリカ人、ラテンアメリカ人、アジア系アメリカ人、アフリカ系アメリカ人など少しずつ自分たちに近いものを対象として記述が行われるようになった。1970年代後半から1980年代にかけて、「実証主義」と呼ばれるアプローチに対する異議申し立て、質的研究についての関心の高まりなどから再び注目を浴びた。80年代から主流になった告白体のエスノグラフィーは、「古典的で、主意主義的なエスノグラフィーが産出する知見に意義が唱えられ、より論証的で、反省的な方法論が希求された時代 Crisis of Representation Moment (1986~1990)」を背景とし、研究者とフィールドの関わりなどを反映することが特徴となっている。「客観的な現実とは、世界のなかの私たちの主観的体験に基づいている」(Munhall&Oiler Boyd,1993:XIX)ので、研究者は研究中の現象から離れられない。そのため、研究の客観性や中立性を達成することは不可能である。現代の解釈的立場に立つ者は、その不可能を認め、自分自身の位置を考慮し、研究では主観的見方を明らかにすることでより客観的な状況を読み手に提示しようとしている。その認識転換の現れとして、「告白的物語」が「写実的な物語」に取って変わり、主流の位置を占めるようになったのである。フィールドワークの実質的な（そして、写実的な）レポートを補うための告白録をつける必要性が、今や人類学・社会学双方の分野で多かれ少なかれ制度化されつつある。フィールドワークの論文に付録として告白を付け加えたり、「メソッド」という標題をつけた告白を論文の中の独立した一章とするのが、普通の形式になっているのである（ヴァン・マーネン,1999）。

20世紀の終わり、シカゴ学派という life history や slice-of-life を強調するグループが life history を物語ることを中心とした解釈的アプローチを強調し、“ふつうの人”を記述するようになった。このように、エスノグラフィーの文化研究対象は「未開のもの」から、「周辺なもの」「違うもの」を経て「人々の日々繰り返される日常生活」までも注目するようになった。それと同時に、研究者は文化共同体への関心を持ちながら、よりマイクロな次元にも焦点を当て、一人の個人もエスノグラフィーに取り上げるようになっている（箕浦・1999）。

現在のエスノグラフィーは発達心理学、社会心理学、教育研究へと広がりを見せている。そして、エスノグラフィーは一つの研究方法として確立、発展及び領域の広がるに伴い、その表現のスタイル自体も変わりつつある。現代のエスノグラフィーは古典的な時代（Traditional Moment 1900~1950）に形成された「写実的」な主流から脱し、告白体、印象派などといった多彩なスタイルが呈現している。その背景に、「理論」とは、多声的な「物語」であり、社会的な批判や評論を目的にしているという認識に立つ質的研究の時代（Postmodern Moment 1990~）がある。この段階で理論はナラティブとして読まれるようになった（フリック,2003）。

4.2 なぜエスノグラフィーを書くのか

4.2.1 私は結局彼らを理解できなかったのである

なぜエスノグラフィーを書くのか。その理由はまず解釈的なパラダイムに立つ認識論上の「理解」というキーワードにあると考える。

「質的研究は、社会や人間の問題を理解するための探求のプロセスと定義され、言葉を使って複雑な全体像を築くことや、その場で自然な行動となって具現化している情報提供者の物事の見方を詳しく報告することが基盤となっている。」

(Cresswell,1994 : 2)

この質的研究で人間への深い理解を提供できるという信念を持って筆者は「一人っ子の中国人留学生の増加現象」を修士論文に取り上げ、明らかにしようとした(範・2004)。調査で留学生の深刻な生活状況を知った筆者は心が痛かった。問題解決を求めることが極めて困難だという現実直面して自分自身の無力を感じた。しかし、留学生のことを理解できたことには自信があった。

中国人留学生の問題について、他の研究者と議論を重ねていくうちに、「個人が見えない」「問題だらけ、暗いね」という批判の声を聞くようになった。問題への理解を求めた結果なので、問題が出てくるのが当然だと思いながら、インタビューした時の Sh 先生(範・2004)の話を再び思い出した。

「彼ら（日本語教師）は私たちの子供たちのことを理解できていない。本当に理解できたら、彼ら（一人っ子の留学生）はどれほど可愛いのか分かるはずだと思う」。

Sh 先生は一人っ子の父親として、この世代の学生の教育に関わる教育者として、インタビューに応じてくれた。彼は一人っ子の問題を指摘しながらも、一人っ子の子供が非常に可愛いと何回も言った。「彼らは実は非常に可愛い」というところに、正直、筆者の私は疑問を持っていた。当時、研究室には、留学生の問題を意識して対応策を探っている日本語学校の先生も何人かいた。論文中間発表で嶋本（2005）のある言葉が引っかかって忘れられなかった。

「……理解が深まれば見方が分かる。……」

彼女は現象学的アプローチで中国人就学生の「経験」を理解しようとしていた。これは彼女が自分の研究動機を述べたところの言葉だった。ごく普通に聞こえるかもしれないが、彼女の真剣な表情と、彼女の言葉と、Sh 先生の話とが、私の頭の中で重なった。私は実は中国人留学生を理解できなかったのではないかという疑問を持ち始めた。

修士論文には一応「幼い、聡明、可愛い」を概念として抽出していたが、実際は彼らが

どれほど可愛いのか理解できなかつた。つまり実感が出来なかつたということだ。論文で個人が見えないのは、グランデットセオリーの方法を使ったために個人が見えにくくなつた部分もあるが、それより、彼らの成育環境のマイナス面及び日本の異文化環境のマイナス面を意識しすぎた自分の存在があつたのではないかと思うようになった。成育環境が影響したわがままな彼ら、日本という異文化環境に遭遇したかわいそうな彼ら、盲目的に留学の旅に出た無知な彼ら、この三つの彼らしか私の中にはいなかつた。結局、私は彼らを一人一人の豊かな人間としてみようとしていなかつた。

4.2.2 私は彼らの悲しみも喜びも共に感じられるのである

理解がなければ、改善もできない。彼らのことを深く理解するには、彼らと悲しみも喜びも共にするしかないだろうと私は思った。彼らと共に成長し、彼らの成長を見つめることで、大きな学びになるだろうと私は信じていたからだ。しかし、現実問題としてこのような場を見つけるのは難しい。ライフストーリーで、彼らの成長のプロセスを詳細に記述しようと計画したところ、K 教会に偶然に出会つた。この居場所を解明するのは留学生の居場所作りの問題解決に非常に意義があることだが、この異文化の世界とどのように関わつたらいいのか当時の私にはあまり知識はなかつた。その時、エスノグラフィーは私の問いに答えてくれたのだ。

「エスノグラフィーは文化を記述する作業である。その第一の目的は自分と異なる文化をその土地の人の視点から理解することである。そして、エスノグラフィーの目的は、マリノフスキーが言ったように、『その土地の人の視点を把握し、人生との関わりをつかみ、彼の世界を見る彼の視点を理解すること』なのだ。」

James P. Spradley. *Participant Observation*.
(Holt, Rinehart & Winston, 1980 大月隆寛訳)

つまり、エスノグラフィーで研究を行うことは、その場の人々との深い関わりが要求される。ほとんどのフィールドワーカーが、その場の人々と共に生活し、彼らの行動をよく見ること及び彼らの言うことをよく聞くことを通して、彼らの文化を学ぶのだ。つまり、エスノグラフィーで私は彼らと共に成長でき、彼らのことを見つめながら、記述することが出来る。そして、自分が実際にこの場で学ぶことによって、彼らの目で見た彼らの世界を理解することも出来る。したがって、本論文においては、留学生の成長を見るにも、彼らの成長における場の意味を解明するにも、エスノグラフィーが有効ではないかと考えた。長期のフィールドワークを通して、彼らと悲しみも喜びも共にすることで、彼らへの理解を深めようと目指し、詳細な記述を通して彼らはなぜ神様の子になつたのかその変化のプロセスを明らかしようとした。理解を改善へ繋げ、そこから、留学生の居場所を作るための建設的な方法を求め、本研究の最初の問いに答える。

ヴァン＝マーネン (1999) はエスノグラフィーとは「ある一つの文化の (あるいはある

一つの文化から選択された諸相の) 記述による再現である」と述べている。そして、一つの文化はその構成員の行動や言葉によって理解し、それを再現し、表現しようとする行為を通して見えるようになるものだと主張している。Goetz と LeCompte (1984) によれば、下位文化あるいは文化を研究する研究者は、その文化に独特で特徴的なプロセスを記述する責任がある。筆者は研究者としてなるべく彼らの視点から、彼らの声で彼らの世界を描写しようと努力した。しかし、そこには、彼らと共に様々な困難を乗り越えてきた一人の留学生としての筆者自身の姿もまた消えてはいない。この筆者の未熟さを容認してくれたエスノグラフィーの時代に恵まれたことで、ここから研究者としての人生を始めようとする筆者に大きな勇気が与えられた。

第5章 フィールドワーク

エスノグラフィーは文化とフィールドワークとを結びあわせる。通常フィールドワークとは、研究対象となる人々とともに生活し、また彼らのように生活することを意味する。その最も広い、最も伝統的な意味において、フィールドワークは、一人の研究者が長期間（どれぐらいかは、普通決まっていない）にわたり、しかも全時間的に調査地の人々と関わり合うことを要求し、それらの人々のホームグラウンドで絶えず進行する彼らとの相互作用から主に成り立っている（ヴァン・マーネン，1999）。現在フィールドワークはエスノグラフィーの最も特徴的な調査方法として、研究室の外でデータを収集することを意味している（ホロウェイ&ウィーラー，2000）。エスノグラフィーに関わる研究者は主に観察と面接というフィールドワークを通して、ほとんどのデータを得る。

本論文のフィールドワークの目的は、K 教会にいる留学生たちが認識しているような文化のパターンと規則性を発見することによって留学生の成長において K 教会の意味を明らかにすることである。筆者は K 教会というフィールドで 2004 年 10 月から 2007 年 10 月まで三年間に渡ってフィールドワークを行った。K 教会で留学生と一緒に礼拝日の活動に参加しながら、主に参与観察及びライフストーリー・インタビューを通してデータを取った。フィールドワークは Germain(1993)を参照し、三つの段階を踏んだ。第 1 段階では、筆者は K 教会の活動に参加し、見たことや聞いたことを出来るだけ記録し、データとして残した。第 2 段階では、特定の論点に焦点を当て、最初の観察に加えて、さらに情報提供者にインタビューをした。第 3 段階では、収集したデータを整理し、最低限で K 教会の意味を表現できるデータに基づいて分析を行った。本章では、本論文のフィールドワークはどのように行われていたのかを「5.1 フィールドの紹介」、「5.2 筆者の参加」「5.3 データの収集」「5.4 インタビュー」という 4 つの面から、具体的に述べる。

5.1 フィールドの紹介

本研究のフィールドとなっていたのは、大阪市内の繁華街にあるキリスト教の宣教教会である。以下は K 教会と記す。筆者は主に K 教会の礼拝日に、留学生たちの活動を観察していた。その他、用事があったり、時間が空いたりした時も随時行くことにしていた。

参与観察を本格的に行った期間としては 2004 年 10 月 24 日から 2006 年 4 月 2 日までの一年半であった。2004 年 10 月 24 日は筆者が初めて教会に行った日であり、新入生歓迎会の日でもあった。2006 年 4 月 2 日は 2006 年 4 月の新入生歓迎会が実際に行なわれた日であり、本論文の一つの区切りだと考えている。毎年 4 月と 10 月は教会の伝道の時期であり、新入生を迎える重要な時期となっているため、半年が一つの周期と考えられている。本論文で 3 周期にわたり調査した理由は二つある。一つは 2003 年から毎年 8 月中旬に行われるようになった盛大な修練会が教会の重大な行事として調査に不可欠なものだと考えたためである。また、毎年 10 月から翌年 3 月にかけては受験期に入る留学生たちが情緒不安定に

なる時期だと言われているが、フィールドに入った第 1 回周期では筆者の教会活動への参加の途切れもあったため、よい情報を得られなかったことがもう一つの理由である。

K 教会の記録によると、2000 年以前はこの教会に通うのは主に日本人と韓国人であった。2000 年から中国人の留学生が入ってくるようになってきて、2007 年 10 月の時点で登録されている約 250 人のうち、3 人の日本人と 7 人ほどの韓国人がいるだけで、90 パーセント以上は中国人となっている。そのうち、研修生が一人と商売をしている人が一人いる以外は全員留学生となっている。留学生の中には中国にいた時から信仰を持っていた朝鮮族の留学生が 6 人いる。それ以外は日本へ来てからクリスチャンになった留学生となっている。年齢層からみると、70 年代後半生まれの留学生は 5 人ほどであり、85 年前後生まれの留学生が中心となっている。2005 年 10 月に来た留学生の中には 87 年生まれもいるという。教会の牧師は韓国人である。教会そのものについては、以下の記述によって説明する。

街の一番にぎやかなところの裏通りで、林立するラブホテルと高層ビルに囲まれ、やや古臭く感じられるこの教会は静かな存在だ。木製の十字架も暗いトーンで教会の古くさを際立たせているようだ。さきほど間違ってしまった教会の鉄製の十字架をかかげた現代的な建物のきれいさとは対照的だ。でも、この教会の一番の特徴となっているのはやはり教会の前に並んでいる何十台もの自転車だろう。駅の東側にある小さい公園の左側を曲がるとすぐ目に入る自転車の列は思わず私にたくさんの留学生たちの存在を感じさせてくれた。(2004/10/24 フィールドノート)

この建物は 5 階建てで、一階は車庫で、左側に二つの部屋があり、それぞれ事務室と活動室のようにになっている。二階は礼拝堂であり、普段みんなここで祈りをしたり、聖書の勉強をしたり、牧師の説教を聞いたりする。三階は和室と洋室の部屋に分かれている。長方形の洋室と繋がっている三角形の空間は、ほぼ 10 畳ぐらいであり、食堂として利用されている。四階は牧師のお家と聞いたが、まだ上がったことはない。

二人並んで歩けないほど狭い階段に少々古くなった赤いじゅうたんが敷かれている。階段を上った時に、初めて来た頃のことを思い出した。「こんな全然おしゃれじゃないところに、皆なぜよく来てるのかな」とその時、心の中で何回も思った。そう思いながら、二階まで上がってきた。いつもここへ来るとまず右側の花壇に迫られている気がする。その次にすぐ目に入ってくるのは長細いドア、ガラスに赤と緑の三角形の模様が飾られ、確かにイタリアの教会の雰囲気漂ってくるが、階段を上がって、すぐ目の前にこのドアがあるので、窮屈感も湧いてくる気がする。(2005/03/17 フィールドノート)

一つの扉を開くと、まるで一つの新しい世界が目の前に広がってくる。筆者はこのようなところで、留学生たちが自分の笑いと涙で自らの青春を刻んでいる日々を彼らと一緒に歩んできた。

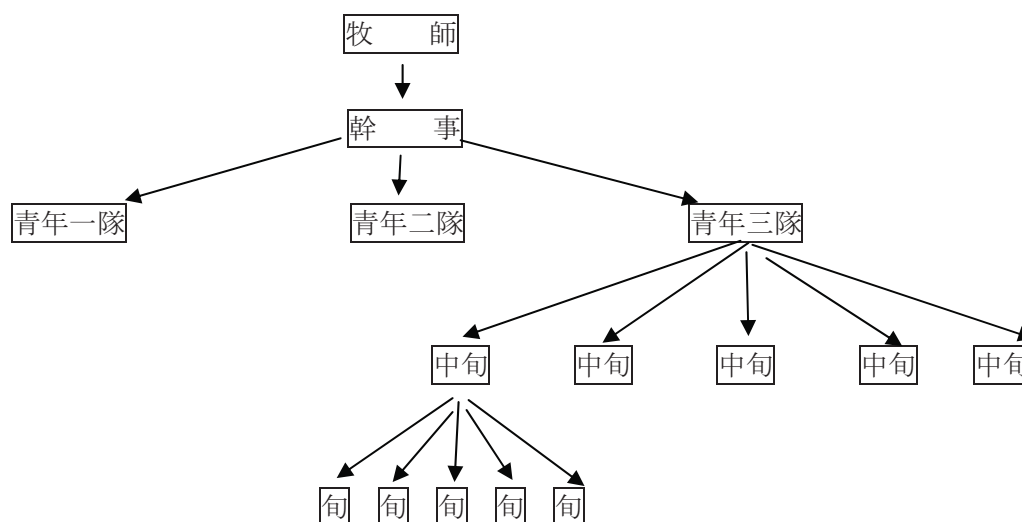
5.2 筆者の参加

日曜日の礼拝⁹⁾は午前と午後との二つに分かれている。午前中は日本人向けの礼拝であり、午後は中国人向けの礼拝となっている。午後の礼拝は一時半から 3 時ごろまでである。筆者のアルバイトの関係で、参加はほとんど 3 時以後からとなっていた。

2006 年の年末まで教会の青年隊は三つあった。最初は青年 1 隊は韓国人と日本人、青年 2 隊は朝鮮族、青年 3 隊は福建省の留学生を中心に形成されていた。しかし、留学生が増えるにつれて、青年 3 隊には福建省以外の留学生が多数を占めるようになった。筆者が参加したのは 2005 年 8 月までは青年 3 隊であったが、8 月の後半から青年 2 隊の旬長と聖書学習を始め、9 月以後、正式に青年 2 隊のメンバーになった。2006 年から 2007 年 10 月まで、教会の青年隊は 4 回再編され、筆者の青年隊の所属も何回か変わった。ここで具体的な紹介は省略させてもらう。

その他、6 時から 7 時半までの部属活動にも参加した。部属活動は聖劇部と聖歌部を中心に行われているが、筆者は聖歌部の一員として 2004 年 10 月 24 日からずっと参加してきた。2005 年 5 月に教会の日本語学習と進学指導の教師募集に応募した。正式に教会から任命されたことはなかったが、おそらく名前を紙に書いたことがきっかけになって、実際に様々な相談が入ってきた。頼まれたことを断らずに筆者はその役割を果たそうと努力してきた。普通の旬員としても、教会の行事、修練会、運動会、新入生歓迎会、伝道など様々な活動に積極的に参加していた。

青年隊の構造 (図 1)



注：旬が一番基本的な単位で 2 人から 5 人までで、人数は決まっていない。

⁹⁾ 礼拝というのは、神の名によって集まり、神がともにいることを知ることである。礼拝前後一時間か一時間半であり、礼拝のプログラムは、教会によって違っているが、賛美歌、聖書朗読、説教、信仰告白、献金、聖餐式などが組み合わされている。礼拝は生活の中心におかれ、日常生活の出発点とされているのである。

中旬は普通 4 つか 5 つの旬によって形成されている。

青年隊は 4 つか 5 つの中旬から形成されている。

青年隊のリーダーは隊長、副隊長；中旬は中旬長；旬は旬長、準旬長。

各青年隊は自分の幹部組を持っていて、青年 3 隊の幹部組は会長、副会長、経理、総務、書記によって形成されている。

なお、2006 年から教会の青年隊は四回再編され、留学生の所属は変化しつつあった。そして上記の青年隊の構図が分かり、各青年隊の人数が 10 人ぐらいで構成されているというのが特徴となった。2006 年 01 月（青年隊の数が 3 つから 7 つへ）。2006 年 07 月（7 つから 10 へ）。2006 年 12 月（10 から 14 へ）。2007 年 07 月（14 から 21 へ）。

留学生向けの礼拝日（表 1）

	①普段の流れ	②旬長との学習 (月一回)	③修練会の時 (二ヶ月一回)	④毎月の第一週目
12:00～13:30	聖餐	聖餐	聖餐	聖餐
13:30～15:00	通常の礼拝	通常の礼拝	通常の礼拝	通常の礼拝
15:00～16:00	初級信仰学習	初級信仰学習	修練会	各青年隊活動
16:00～17:00	中旬長聖書学習	中旬長聖書学習		
17:00～18:00	中旬と旬の交流	中旬と旬の交流	自由交流	旬長と旬員の交流(~17:30) A:旬長、中旬長と会長の交流 B:旬員の交流
18:00～19:00	各部属の活動	各部属の活動	各部属の活動	各部属の活動
19:00～21:30	中保祈祷会	中保祈祷会	中保祈祷会	中保祈祷会
21:30～22:00	聖餐	聖餐	聖餐	聖餐
担当に関する	通常の礼拝及び 聖書学習は牧師 の担当	初級信仰学習は 旬長の担当	修練会の司会は 青年隊が順番に 担当	A と B は 5 時半から 6 時まで同 時に行い、青年隊活動は各青年 隊で同時に行う

注：2005 年 10 月からの変化について

初級信仰学習は全て各旬で行なうことになり、担当者は旬長となった。

中保祈祷会は基本的に 20 時から 21 時までとなった。

19 時から 20 時までの間は祈祷学習と楽器学習を行なう。

中保祈祷会は集中的に祈祷をすることである。祈祷の主題は基本的に牧師の健康、教会の復興、この一週間の皆の信仰において生じた問題、生活において困難なこと、中国及び日本のキリスト教信者のことについてなどとなっている。

5.3 データの収集

本研究においてデータの収集は主に参与観察とライフストーリー・インタビューによって行った。K教会に関するフィールドノートは録音の文字化とメモを参照しながら書いた。その他、メール、手紙、入学願書などの現物を保存した。さらに、K教会の週報や『草原』（教会の月刊誌）や聖書学習用の各種の印刷物などのような、教会からもらえるものは全部もらい、教会以外の場所での教会の留学生達との接触もできる限り日記という形で残している。本節では参与観察を述べ、次節ではインタビューに関するデータ収集の状況を具体的に述べる。

参与観察はデータ収集のための1つの方略であり、「内部の人の意味の世界を直接経験し、観察して接近していくものである」（Jorgenson,1989:15）。参与観察に関して、フィールドにおける研究者の関わり方について4つのタイプがGold(1958)にあげられている。すなわち、①完全な参加者、②観察者としての参加者、③参加者としての観察者、④完全な観察者である。完全な観察者は、その状況に参加しないで、「壁のハエ」のようにふるまう。ここでは筆者は一人の研究者である前にまず一人の留学生という存在であるため、「壁のハエ」のように完全な観察者としてK教会に入ることができない。

第七章の「私という存在」で述べるように、K教会に入る前にすでに研究のことを皆に話したので、教会で完全な参加者として存在していることも信頼されがたい。そこで、「5.2 筆者の参加」でも述べたように、筆者は調査者という身分でフィールドに入り、普通の留学生と同じように青年隊に属し、部属活動にも参加していた。2005年5月までは筆者は観察者としての参加者で観察を行った。2005年5月から教会の留学生の勉強及び進学のことに関わり、仮の日本語教師という役割が期待され、筆者の立場は観察者としての参加者から参加者としての観察者になった。この筆者の参加の形が変わることによって、参与観察によって収集されたデータの性質は少しずつ違って来たことを次に述べる。

2004年10月10日～2005年3月13日はフィールドとの接触期間だといえる。見る事が中心になって参加が途切れたこともあった。興味があることのみメモとして残したこと以外にも、フィールドに関することを家に帰ってから自分の言葉で録音して保存した。その録音とメモをもとにフィールドノートを書きあげた。

2005年3月13日～2006年4月2日は意識的に詳細な参与観察を行った期間であるといえる。この期間からフィールドノートを本格的に書き始めた。フィールドの観察に関して、初めはメモを取りながら、同時に録音も撮影もしたが、4月の中旬に教会幹事の反対を受けて撮影を止めた。しかし、録音は続けた。フィールドノートはメモと録音の文字化をもとに書きあげた。8月15日から8月18日までの修練会に関する録音データは文字化し、録音できなかったデータはフィールドノートとして保存している。

2006年4月2日～2007年10月はインタビューを中心とした期間となっていたが、フィールドに行く限り、新しい出来事を調査日記という形で本論文の仕上がりまで書き続けた。フィールドへは今までと同じように変わりなく行くことにしている。

教会の礼拝日に関するフィールドノートは、大体3つの部分に分けられ、①当日取った

メモを時間帯で分かりやすく整理したもの、②整理したメモと録音データに基づいて事実を記述したもの、③録音データを文字化したものとなっている。

5.4 インタビューについて

本研究のデータ収集は、参与観察以外に主に半構造化¹⁰⁾（保坂ほか,2000）ライフストーリー・インタビューを行った。情報提供者は牧師を含めて、17人であった。牧師J先生へのインタビューはデータ収集の最後に行ない、それを文字化したものを2007年10月に牧師J先生にチェックしてもらった。これで、主に2006年から始まったインタビューのデータ収集は終了した。

次にライフストーリー・インタビューを用いた理由、インタビュー依頼の受け入れ、情報提供者の概要、選択理由及びデータの保存について述べる。

5.4.1 ライフストーリー・インタビュー

本論文でライフストーリー・インタビューを取り上げた理由は、「従属的で抑圧された人々が、自分たちの言葉で自己を語る時、また調査者や読者がほとんど聞いたことも無い声を聞く時、それは人々の内部からの見方を調査者/読者に提供することで、彼/彼女らの文化の理解を促すだけではなく、彼/彼女ら自身の『ちから』ともなりうる（桜井,2002:55）」という独特な利点があるからである。

また、従属的で抑圧された人々のライフストーリーは、彼/彼女らの経験であり、自らの社会的世界に意味を与え、様々な問題を明らかにするだけでなく、自己理解を促進し、自らの生き方を創造する助けとなる。「個人的なことは政治的である」とは、フェミニズムの言葉だが、これまで無視され、排除されてきた人たちが自分の言葉で過去から未来に及ぶ自分の人生経験を語り始めた時、それは社会変革の基本的な道具となりうるのである。

インタビューは参与観察のデータに基づいて半構造化で行ったため、内容はそれぞれ多少異なった。しかし、インタビューの目的は留学生に今までの人生を振り返ってもらうことによってK教会の存在を明らかにすることにあつたので、インタビューの主な項目は以下のようなものに設定した。牧師J先生へのインタビューは参考資料①を参照されたい。

- なぜ日本に来たのか
- 小さい頃の自分とは
- K教会との出会いについて
- 日本語学校の学習について
- K教会にいることについて
- 将来の考えについて

10) 保坂ほか(2000)によると、インフォーマントに自由に語ってもらうという形ではあるものの、同時にこちらの設定した諸項目について聞き取るという緩やかな枠組を持ったインタビューを半構造化インタビューとよぶ。この方法によると、インタビュアーは臨機応変に質問を追加することが出来るので、工夫によっては相当に詳しく聞き取りを行うことが出来る。

5.4.2 インタビュー依頼の受け入れ

Couchman and Dawson (1995) は、個人の権利を「害を加えられることはない、インフォームド・コンセント、自発的な参加、守秘、匿名、尊厳、そして個人の尊重」と述べている。本論文では、以上の個人の権利を守り、情報提供者には依頼を拒否したり途中で取り消したりする権利があること、守秘性を保証することを事前に明確に話した。そして、研究の目的と趣旨を理解してもらうために、筆者は修士論文のまとめ（範・2004）を皆に手渡し、インタビューで聞きたい内容、時間数及び録音することを口頭できちんと伝えた。インタビューの場所と具体的な時間は情報提供者と話し合っただけで決めた。また研究は物語の形で進め、出来た物を皆に読んでもらい、同意を得た上で論文として提出すると皆と約束した。本論文では、牧師 J 先生に依頼書を手渡し、参加を求めたが、留学生たちへのインタビューの依頼は、書面ではなく、口頭で行った。その理由は硬い書式上の依頼は留学生と筆者が結んでいた信頼関係に傷をつける可能性があるためと筆者が考えたためである。

インタビューの録音に当たって、研究のことについて多くの留学生から興味深々に聞かれたことがある。彼らの要望に答え、録音から文字化して分析を行う研究者の仕事について気軽に紹介した時もあった。牧師 J 先生への二回目のインタビューは内部情報に関わるからという理由で断られた。留学生たちへのインタビューの依頼は実際の実施まで待つ時間はそれぞれ違ったが、皆は断らず応援してくれた。

留学生たちが貴重な時間をくれたことに感謝の意を表すため、インタビューごとに 2000 円を事前に封筒に入れ、「神様の祝福！」と書いた封筒を別れた時に手渡した。皆遠慮していたが、納得するまで説得をした。インタビューだけでなく、皆との話し合いが多かったため、よく喫茶店等を利用した。皆との付き合いにおいて、お姉さんという立場にいる筆者は飲み物や食事をご馳走することにも気を配っていた。当然、皆のお言葉に甘えてご馳走してもらった時もある。

K 教会にいる留学生の成長状況を他の留学生だけではなく、様々な人に伝えてほしいという点において、留学生たち自身も牧師も筆者と一致している。そして、筆者は論文で彼らのことを皆に伝えるのが自分の使命であり、責任でもあると考え、筆者なりの伝道だと牧師にも留学生たちにも伝えた。

5.4.3 情報提供者概要

本論文のインタビューの対象は大まかに新世代の中国人留学生（10 人）、先輩の留学生（6 人）及び牧師と 3 種類に分けられる。教会に通っている留学生は数が多いため、適切な対象を選択することが必要となった。本論文のインタビューはフィールドの参与観察に基づいて行うものであったので、インタビュー対象はフィールドワークの進行に伴って下記の表 1 のように絞った。牧師先生へのインタビューは 2007 年 7 月 6 日に午後 2 時から 4 時まで一階の礼拝室で行った。

留学生情報提供者概要 (表 2)

(調査期間: 2004年10月~2007年10月)

名前	性別	出身地	来日時期	学校所属	教会時期	受洗時期	青年隊所属	部属所属	インタビュー時期/場
小靈	女性	瀋陽	01/03	大学3年~ 日本で就職	01/04	中国	3隊中甸長~ 12隊隊長	聖劇部 隊長	06/03 パン屋
莉莉	女性	瀋陽	03/04	大学院1年~ 修士修了帰国	03/04	中国	3隊中甸長~ 14隊甸長	『草原』 編集長	06/03 家
婉義	女性	長春	03/03	日本語学校2年 ~大学3年	03/04	04/08	3隊中甸長~ 11隊隊長	ピアノス ト	07/03 教会
立博	男性	山西	03/04	大学2年~ 大学4年	03/04	03/08	3隊中甸長~ 14隊隊長	聖歌部 隊員	05/03 教会
黄	男性	広西	03/03	日本語学校2年 ~大学3年	03/04	03/08	2隊中甸長~ 12隊隊長	聖劇部 副隊長	05/07 喫茶店
海燕	女性	福建	03/03	専門学校2年~ 大学3年	03/04	中国	3隊中甸長~ 12隊副隊長	聖歌部 隊員	06/08 教会
小椿	女性	福建	03/10	専門学校1年~ 大学4年(編入)	03/05	04/08	3隊隊長~ 13隊隊長	聖歌部 隊員	06/02 06/05 07/07 教会
大字	男性	瀋陽	00/03	大学3年~ 大学院2年	03/08	04/04	2隊副隊長~ 8隊副隊長	聖歌部 副隊長	05/11 教会
劉牧師	男性	山東	03/10	日本語学校2年 ~大学3年	03/11	04/08	3隊甸長~ 7隊隊長	聖歌部 隊員	06/04 喫茶店
文珍	女性	山東	04/03	日本語学校2年 ~大学3年	04/04	04/08	3隊甸長~ 13隊甸長	聖歌部 隊員	07/02 07/07 07/08 教会
宋玉	男性	山東	04/03	日本語学校1年 ~大学2年	04/04	04/08	3隊甸長~ 2006年春	編集部 成員	06/03 パン屋
燕子	女性	山東	04/03	日本語学校2年 ~大学1年	04/04	04/08	3隊甸長~	プロミス 隊隊員	06/04 大学喫茶店
解放	男性	延吉	04/03	日本語学校2年 修了帰国	04/06	05/08	3隊甸員	聖劇部 隊員	06/02 喫茶店
曉静	女性	山西	03/04	専門学校1年~ 大学4年(編入)	04/04	05/08	3隊甸員~ 13隊隊長	聖劇部 隊員	07/08 喫茶店
朝陽	女性	山東	05/03	日本語学校1年 ~大学2年	05/04	05/08	3隊甸員~ 12隊隊員	聖歌部 隊員	07/07 餃子店
趙	男性	瀋陽	05/03	日本語学校1年 ~専門学校2年	05/04	05/08	3隊甸員~ 14隊甸長	聖劇部 隊員	07/05 パン屋

注：教会時期は教会へ来た時期。

なお、インタビューデータ記録は下記となっている。

牧師：約 120 分 1 本

新世代留学生：約 60 分～120 分 18 本

先輩の留学生：約 60 分～120 分 5 本

5.4.4 情報提供者の選択

表 2 で示した情報提供者の選択基準に関しては Goodall(2000)の考えを参考した。

You write what you have been attracted to and convinced by. You write what you have read as meaningful; you interpret what you have read as a meaningful pattern. The story you write will be part of the larger story of who you are, what you've read and argued over, what you believe in and value, what you feel compelled to name as significant(Goodall, 2000:87).

筆者は青年 3 隊の活動、聖歌隊の部属活動、修練会及びクリスマスパーティーといった K 教会の活動の参加を通して、教会の留学生と信頼関係を築きながら、皆の活動を観察した。そのうちに、まず自分が興味があり、そしてインタビューに応じてくれそうな情報提供者を 2 つの目的別に探した。

- ① 教会の全般の様子及び昔の姿を知っている先輩の留学生
(小霊、莉莉、劉牧師、黄、立博、大宇)
- ② 新しく教会に来て教会の活動に参加してクリスチャンになった新世代の留学生
(①以外の留学生達)

エスノグラフィーに関する主要情報提供者は、グループの歴史や下位文化、あるいはグループのなかでの相互作用のプロセス、文化的な習慣、儀式、言語についての専門的な知識を持っている。主要行為者は、研究者がその文化や下位文化に順応するのを助ける。そのため、調査者はある文化を身に付け、その文化について特別に詳しい情報を提供できる個人を探さなければならない(ホロウェイ&ウィーラー, 2000)。このような情報提供者の選択基準に準じ、最初に想定した情報提供者たちにインタビューを行ううちに、主要情報提供者 7 人(朝陽、宋玉、椀儀、小椿、暁静、文珍、解放)を決めた。

ここで筆者が言う主要情報提供者とは、筆者が詳細な観察ができ、成長プロセスが綿密に記述できる留学生のことを意味している。そのため、燕子、海燕、趙は焦点から外した。朝陽と宋玉は、2006 年夏頃、教会から離れたので、二人の観察データは確認ができない

め、個人のストーリーとして取り上げることができなくなった。椀義は初めての依頼から3年間を経てやっとインタビューに応じてくれたが、昔の記憶が曖昧になり、追究できないところが多かった。そのため、ライフストーリーとしてデータの質が他の留学生のデータと並べるのが難しいと筆者は判断した。残った4人（小椿、暁静、文珍、解放）について観察以外でも何回も話を聞き、他の人へのインタビューでも4人のことを意識して探った。

5.4.5 主要情報提供者のデータ

主要情報提供者との接し方の違いもあったため、主要情報提供者の物語では取り上げるデータもそれぞれ違った。

暁静の物語では、フィールドノート、会話の文字化、彼女の日記、インタビュー（表2を参照されたい）の文字化、電話とメールの記録の五種類であった。彼女の日記は2003年6月から2005年12月までのものであり、フィールドノートには教会での話し合いだけではなく、教会の外での話し合いも含まれている。会話の文字化はフィールドに参加した時に取った録音データの文字化であり、インタビューの文字化ではない。彼女との接触は頻繁だったため、インタビューは一回しか行わなかった。

解放の物語では、フィールドノート以外に、インタビューのデータは一回（表2を参照されたい）だけであった。フィールドノートによる大量のデータを得ていたからである。フィールドノートには、筆者と一緒に3ヶ月ほど日本語勉強をした彼の様子の記録だけではなく、普段の彼の悩みの相談、電話及びメールのやり取り、日本語で書いてもらった日記の内容も詳細に書かれている。

文珍の物語では、フィールドノート以外のインタビューのデータは非常に重要であった。筆者は文珍と一緒に聖歌隊にいて、部属活動での彼女への観察は行いやすかった。しかし、彼女は毎回レポートを提出する直前でなければ、私のところに相談しに来なかったため、二人ともゆっくり日常生活の話をする時間は少なかった。また、ストレスを感じた時の彼女は話をしても矛盾が多かったため、正しい理解を求めるのがなかなか難しかった。確認するためのインタビュー（表2を参照されたい）を3回行ったおかげで、彼女の物語はやっと整理できた。

情報提供者4人の中で、筆者と小椿との個人的な付き合いが一番少なかった。しかし、青年3隊隊長であった彼女は公的な活動が多かったため、観察しやすいところがあった。この観察したデータは、インタビューで、彼女の個人の世界を探る鍵となった。彼女の変化を見つめるために、半年に一回程度のペースでインタビュー（表2を参照されたい）を3回行った。

第6章 分析方法

6.1 分析戦略

本論文はエスノグラフィーでの試みである。エスノグラフィーは質的研究方法の一つであり、「文化の記述」を意味している (Atkinson, 1992)。エスノグラフィーの記述は、文化グループのなかの行為や相互作用、出来事の報告となるストーリーを書くことである。ストーリーは記述、分析、解釈をまとめたものであり、読み手はその場の雰囲気をつかみ、「感情」を知り、「ここで何が起きているのか」を理解するのである (ホロウェイ&ウィーラー, 2000)。

「言葉にし、記述してゆくことにも歴史がある。どのような言葉、どのような文法で文化を語ることが支配的になっていたのか、その来歴をときほぐそうとすると、その瞬間から自分が当たり前のものでしてきたその言葉や物言いの背後にある膨大な広がりについて自覚せざるを得なくなり、その自覚と葛藤の中で仕事をしなければならなくなる (ヴァン・マーネン, 1999)」。つまり、想定される読み手によって記述のスタイルを選ぶ必要がある。本研究を始める前に既に存在していた読み手の背景を考えると、彼らのほとんどは「新世代」の生活と密接なかわりがあるごく一般的な人々である。しかし、異文化理解の世界において、このような一般的な人々こそ、もっとも社会変革の力を持つ者だと筆者は考えている。彼らとコミュニケーションを取ることが出来るのはそもそも抽象的な言葉の提供ではなく、ストーリーそのものしかないだろう。研究者たちは抽象的な理論から容易に知恵を得るが、一般的な民衆にとっては、無関心になったり、麻痺したりしがちだからである。本論文ではこのような既存の読み手を考慮して記述のスタイルをライフストーリーで行うことにした。

人生の物語は、ある特定の人に向かって語られる時、ある深い意味において、語る者と語られる者との共同の産物である。自己は、実在性というものについてどのような形而上学的立場を取ろうとも、語る者と語られる者との間の交渉の中のみ明らかにされるのである。……

人間心理学の中心となる概念は意味にあり、意味の構築に関わる過程と交渉作用にある。(1)人間を知るには、人間の経験と行為が本人の志向状態からいかに作り出されるかを把握しておかなければならない。(2)この志向状態の形は、それぞれに特有な文化というシンボリックなシステムに参加することを通してのみ分かるということである。

(ブルーナー, 1990 『意味の復権』)

ブルーナーが述べるように、ライフストーリーはシンボリックな文化システムのなかで語る者と語られる者の間の相互行為として行われ、語り手と聞き手との対話的關係の中で生み出される。したがって自他の共同生成を促しやすい。人は直接同じ経験をしなかった

人に語りかけることによって、相手を「経験の共有者」に変えることができる。「経験を同時代だけではなく、世代を異にする人間に伝える働きこそ、『教育』だ」（やまだ・2002：30）」という考えは、そもそも筆者がなぜライフストーリーを用いるかを考えた一番根本的な理由である。

そして、エスノグラフィーの評価基準としては、文化の構成員が経験しているようにその文化を表しているかどうか重要なものとされる。本論文では、この評価基準を考慮し、イーミックな視点¹¹⁾とエティックな視点を取り入れ、分析を2つの部分に分けて表現することにした。第1部では、K教会にいる4人の新世代の中国人留学生の物語を取り上げ、彼らの成長過程を描くことにした。第2部では、教会の学びの理論をめぐって、教会がどのように学び合う環境を作って、留学生に居場所を提供しているかを記述する。このように生のデータを秩序化することによって、K教会にいる留学生個人への理解及び彼らがいるK教会という場の理解を求める筆者の最初の目的が達成されるのではないかと筆者は考えた。最後の結びのところで、K教会の居場所づくりに基づいて、「物語・他人・学び」という要素の関連性を探り、個人の成長において学びの意味及び居場所の意味を述べる。提言では、K教会の居場所作りのヒントの元で共同体としての日本語学校の学びの再生を考える。

¹¹⁾ 記述民族学はイーミックな見方—内部の人のもしくはその土着の人のとらえ方を理解する必要がある。「現実」についての内部の人の説明は、彼らがどうしてそのように行動するのかという理由を見出すことに役に立つ。その文化の構成員の視点に立って出来事を解釈する。エティックな意味は、研究者自身の考え、すなわちその文化の場からいったん離れて理解しようとする抽象的・理論的視点を強調する。Harris(1976)は、エティックな視点は研究者による科学的・客観的記述であり、直接的に観察可能であることに根拠をおいていると述べている。つまり研究者は、構造的枠組みを解釈していく(ホロウェイ&ウィーラー, 2000)。

6.2 分析過程

ライフストーリー・インタビューでは、インタビュー過程において語り手だけでなく調査者の解釈も入り込んでいる（桜井,2002）。本論文では、参与観察に基づいてインタビューを行ったため、分析及び解釈は、フィールドノートを記述することから始まり、ストーリーが出来上がるまで以下の手順を踏んだ。

① 質問の焦点を絞ること。

まず、フィールドノートのデータを整理し、情報提供者ごとに質問項目を作ること。フィールドノートを何回も読み込むことによって、個人に関するデータを全て引き出し、日付別で保存した。観察したことについて文脈での理解が必要だと思い、その日のノートを全部引き出し、情報提供者に関する記述に赤いペンでしるしをつけた。引き出したデータを読み込んでその中の不明なところや疑問点を問題点としてインタビューの質問項目に入れた。引き出したデータを元に、時間軸で個人のストーリー概要を描いてみた。その中で、十分に記述できなかつたことに焦点を当て、聞くことにした。

② インタビューデータを文字テキストに変換すること。

A：インタビュー直後、まず、できるだけ記憶が鮮明なうちに簡単なインデックスをテープに書き込んでおいた。（インタビューごとに語り手、日時、場所、テープ番号をラベルに記録しておいた）また、話された内容についても、印象に残った部分の要約及びインタビュー前後の状況やインタビュアーの思ったことや気付いたこともフィールドノートに記入した。

B：インタビューを逐語文字化し、内容が分かるようなアウトラインだけ作っておいた。インタビュー後のフィールドノートを参照して語り手の言葉で印象に残った語り手自身をよく表している言葉を一部抜き出して、トランスクリプトのタイトルをつけた。インタビューの過程についてインタビュアーが気付いた要点などをトランスクリプトの初めの部分に記入した。

C：文字化したデータを何回も読み込んで、まず全体にわたって出来事ごとに見出しを付けていった。つぎにフィールドノートのストーリーラインを参照して時間軸で語りの順序を変更して出来事別及び時間軸で熟読によって理解しようと努力した。最後に誤字、脱字、前後意味不明なところの確認リスト、追加説明がほしいところのまとめ及びインタビュアーが気付いた新しい疑問を整理して追加インタビューの準備をした。

③ 追加インタビューをする場合。

フィールドに再訪問の時、上記の編集を終えたトランスクリプトを語り手に読んでもらうことにした。語り手は自らの語りを再チェックし、間違った語りや誤字を修正したり、さらに詳しく話を追加して語ってくれたりした。

④ 追加インタビューを整理すること。

追加インタビューを②と同じような手続きを踏んで文字化をした。新しく出来たトランスクリプトをすべてのデータと照らし合わせながら、時間軸で出来事を何回も並べ直した。

物語が出来上がるまでインタビューをした。インタビューの回数は手元のデータの量と質に関係しているため、本論文では、文珍と小椿に3回のインタビューをした。他の情報提供者は皆一回だけであった。牧師への二回目のインタビューをしたかったが、断られてしまった。

⑤ 書き上がった物語を読んでもらうこと。

書き上がった物語を情報提供者に読んでもらい、物語の中の事実上の前後関係及び因果関係、そして数字上や年数上などの確認をしてもらった。事実の説明に足りない内容を語ってもらった時もあった。主要情報提供者以外の情報提供者にデータの「どこを使う」「どのように使う」という説明を行った。

記述上の質的研究の妥当性に関しては、データ収集から分析に至る基礎的な過程を明らかにする、手続きの「透明性」が挙げられる(桜井,2002:39-40)。本論文では、この透明性を考慮し、筆者と留学生たちの接触、あるいはフィールドワークに至る研究調査の過程を、皆それぞれの物語に反映させた。出来事の経過や登場人物の考えや行為の中に語り手とインタビュアーの解釈が含まれて、構成された一つのまとまりを持った語り(桜井 2002:34)を、両者の共同の産物として、素直に記述することこそ、妥当性を保証すると筆者は考えている。

第2部の「教会の学びの理論」に関する分析は次のプロセスによって行った。

① 視点を決めること。

フィールドノートを読み込むことによって、教会のシステム上の変化が特徴的であるということがわかった。また礼拝日の記述で留学生の一日の生活パターンが明らかになった。牧師と言葉が通じない留学生たちはK教会を家だと思っている。しかし、様々な壁が事実として存在していた。この様々な壁を乗り越えるための教会の工夫が面白い視点として挙げられる。一つの場合を明らかにするには、指導者の考えはなにより重要なものだと考え、牧師J先生へのインタビューをした。フィールドノートでは、牧師の説教や普段の皆との付き合いが多く書かれているが、その行動を取る本人の個人的な考えはデータとして少なかったからである。このようにして得たデータから、K教会という居場所を記述するには、少なくとも「教会のシステムの運営」、「教会の学びの展開」「学びと教えの分裂を克服する工夫」「教会復興の秘話」という4つの視点から述べる必要があると考えた。

② 場の構造の要素から場を描こう。

K教会に関するフィールドノートを図にすると、次の要素が浮かび上がってくる。K教会という雰囲気、留学生たち、牧師夫婦、K教会の活動、K教会という場所(キッチン、活動の舞台、教室のような礼拝室など)。このような要素を各カテゴリーで記述するのに、佐藤(1995b)の学びの概念が役に立った。「学びあう」環境作りは佐藤の学びの考えの核心であり、牧師の考えでもある。「天国の話」(「10.5 教会の居場所作り」より)では、牧師J先生が描いた天国は皆「助け合う」というイメージであった。つまり、他人とのつな

がりを重視しているところがまったく同じだと思える。したがって、佐藤（1995b）の学びの概念を応用するために、各視点と他人、学び、コミュニケーションという3つの因数のつながりを中心に分析記述を行った。

③ イーミックな視点とエティックな視点の記述を考慮すること。

イーミックな視点とエティックな視点の記述を考慮し、各カテゴリーにおいては、留学生たちのストーリーを具体的に記述することにした。多彩な声の中でK教会を表現することによって、読み手はK教会という現場をよりよく理解できるようになるのではないかと筆者は考えている。

6.3 結果の表出

分析結果の表出である「第三部 結果と考察」は、以下のように概観できる。第8章で、教会はどんなところなのかを記述した上で、第9章では、小椿、暁静、文珍、解放という4人のケースを取り上げ、ライフストーリーの方法を援用して「新世代」中国人留学生の物語を描いた。留学生の成長の軌跡を明らかにするために、まず、各ケースでそれぞれ個人の物語を時間軸で具体的に記述した。更に、各ケースの考察では、個人の成長と変化、個人の性格特徴、教会の役割という三つのカテゴリーに焦点を当てて分析した。解放は他の三人と違い、二年間の日本語学校を終えるとすぐ帰国した。なぜ彼は帰国したのかという原因を追究することには意味があると筆者は考え、彼のケースにはこの疑問を一つのカテゴリーとして取り上げた。そして、書き上げた解放の物語は調査の順序をおって記述したものであり、それはこのように表現するのが読み手にとって理解しやすいのではないかと筆者が考えたからである。

第10章では、留学生の成長の背景となったK教会を取り上げ、佐藤(1995b)の学びという概念を参照し、K教会が具体的にどのような条件で若者の安心できる学びの場を作り上げているのかを、「教会のシステムの運営」、「教会の学びの展開」「学びと教えの分裂を克服する工夫」「指導者の参与」という4つの視点から分析した。

「10.1 変動するシステムの解読」では、青年隊の再編及び部属活動の成立背景と活動の展開から、2種類のグループワークを記述し、教会の運営方法を明らかにした。

「10.2 学びの展開」では、以下の4つのカテゴリーに沿ってその学びの展開を具体的に記述分析している。まず「礼拝日の参加」では、教会の学びの様子を縦軸で概観した。つぎに、「旬の学習交流」と「旬長及び中旬長の学習交流」では横軸で学びの様子を再現した。最後の【熱い鍋】の働きでは、一人の青年隊隊長の物語から青年隊の求心力の形成を理解した。

「10.3 壁を乗り越える工夫」では、教える韓国人の牧師と学ぶ側にいる中国人の留学生の間にある年齢の差、文化の違い、言葉の壁など様々な壁を乗り越える教会の工夫を4つの視点から検討した。「10.3.1 通路づくり」では、お互いに認め合うことで学ぶ環境づくりには【暗黙の知の働き】が重要であることを述べ、「10.3.2 道を示すこと」では、異文化適応する力を身につけるために必要なイエス様の【言葉の力】を検討した。「10.3.3 窓を開くこと」では【他者の物語の働き】による生活の経験の学びを示し、最後に「10.3.4 舞台を提供すること」では、学びにおける遊びの要素を論じた。

「10.4 指導者の参与」では、神様の導きを理解するため、牧師であるJ先生に焦点を当て、彼の「諦めない態度」、「希望を与える説教」、「魂を愛する心」、「留学生の尊重」という4つの視点から、教会の復興における指導者の努力と考えを探ることにした。

研究の最後に、筆者は主要情報提供者4人に再び会い、筆者の記述や解釈をチェックしてもらい、研究者の考えあるいは認識が適切かどうかを確認した。本論文では、倫理的問題を考慮し、4人のストーリーを論文に取り上げることがそれぞれ本人に相談した。以下

は暁静の承諾の翻訳である。

「私の生活はとても豊かで、考える事も多いし、やりたい事も多い。自分の理想が高すぎたのか、それともひねくれすぎたのか分からないが、お姉さん(筆者のこと)と知り合う前には、他の人を受け入れられなかったし、他人も私を受け入れられなかった。多くの出来事を私は全部日記に書いている。私はたくさんのかたのことを話したいから、公開して大丈夫よ。名前さえ書かなかったら、OK。論文を書くには要らないかもしれないけど、もし小説などを書くなら、日記を使ってもいいよ。かまわない。(淀川花見・2006/04/03)」

暁静のように皆から承諾をいただいた。皆の意見を尊重し、主人公達の名前を匿名にし、それぞれ小椿、暁静、文珍、解放で表す。書き上げた物語も本人達に見せることにした。

第7章 私という存在

エスノグラフィーにおいてフィールドワークと文化に参加するという事は、現地の人と友達になり、正気と健康を保ちつつ、次第に後方地帯に入り込み、フィールドでいいメモを取って拾い集めた結果を単に書き上げるという作業よりも、はるかに多くのことを伴うのだという忠告がヴァン＝マーネン（1999）に書かれている。未知な世界に入ることは多少の不安もあるが、予想できないからこそ、人の探求心を煽るのだろう。冒険の旅は様々な物語との出会いであるが、それと同時に自分自身との出会いにもなるはずである。本章では、K教会との出会いを通して筆者という私の存在を振り返ってみることで、筆者の現場に関する事前の理解、現場への入り方、継続的な参加、現場を去る手順、現地の人々の反応、様々な調査協力者との関係性を示すことを目的とする。

7.1 死について考えた私

「人は真剣に死ということを考える時、変わるはずだ」と牧師は言った。私が死を初めて考えたのはK教会に出会う前のことだった。修士の時、母が癌で亡くなり、私は最愛の母に「愛している」とさえ言えなかった。これが日本に留学していた私にとっては永遠の痛みとなった。ほとんどの若者と同じように私も自分の夢を叶えようと考え、日本に留学の旅に出たのだ。バイトや勉強などに忙しくて親孝行を考える暇さえなかった。生活上の問題が色々あったが、それを異国体験として乗り越えてきた。しかし、母の死は、耐え難かった。あまりにも順調すぎた人生で、私は初めて人の心には傷があることが分かり、そして同時にその痛みも知った。自分がどれほど弱いものなのかと感じた私は、留学生のことをかわいそうに思ったことがしばしばあった。日本社会を見ても、若者の現状の深刻さを肌で感じるようになった。当時、夜の先生と呼ばれる水谷修先生のドキュメント番組がよくテレビで放送されていた。彼は若者を救う実体験を語り、若者を救おうと社会に呼びかけ、若者の両親たちにコミュニケーションを教えていた。高校生の対話の番組にもエイズ防止を呼びかけている京都大学の教授の報告にも若者の生きづらさが見えた。そこに映っているのは、愛に飢えている人間の姿しかないと感じた。

つまり、死を考えることが、なにを教えてくれたのかというと、「愛」ということを深く考えさせてくれたと言えるだろう。自分から若者の現状を変えようと考えたことも何度もあったが、自分の力はとても弱くてなににもできないのではないかと思うと無力感を感じる。自信満々な人間だった私は、悲観的になり、生活を無意味に感じる時が多くなっていった。その時、頭の中にある言葉がいつも浮かび上がって私を支えてくれた。

「天将降大任于斯人也、必先苦其心志、劳其筋骨、餓其体膚、空乏其身、行拂乱其所為、所以動心忍性、曾益其所不能」。(天の將に大任を斯の人に降さんとするや、必ず先ずその心志を

苦しめ、その筋骨を勞し、その体膚を餓えしめ、その身を空乏にし、行いには其の為す所を払乱す。心を動かし、性を忍び、其の能わざるところを曾益せしむる所以なり) (『孟子』・告子下)

小さい時から、自分がいつか大きなことをするようになるとずっと思っていたから、今はただ試練を受けているだけだと考えると、また元気が出て頑張れるようになる。よく言葉の力に訴える牧師に共感できた理由はこの私自身の経験にあると思う。世界はけっして完璧ではない、ということを知るまで時間がかかった。私もけっして強くない。私はどのように生きてらいいのか、この根本的な問題に迫られ、苦しかった。「社会に貢献できなかったら、豚とどこが違うのか。死んだ方がましだ」。これは7歳の私に言った父の言葉だった。現在の中国新世代と違い、私はそのような時代に育てられた人間だった。生きがいを考えなくても、いい生活は十分出来るという選択肢を持つことがまた私を苦しめる一つの理由となった。この対峙した二人の自分が常に対話を行っていた。しかし、世界が完璧ではないからこそ、改善が必要なのではないかと思うと、現実にはすこし失望を感じるが、未来への期待を完全にあきらめるわけにはいかない。問題はどのように他人の生き方を認めながら、この自分を維持していくのかということだ。

7.2 南港での出会い

K 教会の留学生と出会ったのは、2004 年 10 月の事だった。久しぶりに友人と二人、海を見に行った。すがすがしい秋の中、海風もやさしく感じた。海辺に座って友人と話をしていたところ、隣からにぎやかな中国語の音が聞こえてきた。夫婦のような二人の年配の人が5, 6人の若者に囲まれてなにかを情熱的に話し合っているようだった。どこかの学校の先生が学生を連れてきたのではないかと好奇心が湧いて声を掛けてみた。お互いに自己紹介をしたら、若者たちが皆留学生でその日は祝日だから、K 教会の牧師夫婦に遊びに連れてきてもらったことが分かった。自分も留学生で今大学院にいると言ったら、大学院でなにをしているのかと聞かれた。冗談っぽく「大学院で貴方達のことを研究しているよ」と答えたら、皆すごく興味深そうに色々な質問をしてくれた。文珍はその中の唯一の女の子で山東省から来てまだ半年なので、日本のことをあまり知らないようだった。彼女と同期に来た宋玉は背が高くハンサムな男の子だった。なぜ教会に行ったのかと私は不思議に思って聞いてみたら、皆は「愛があるから」と答えた。黄さんはずっと隣にいる男の子(韓国人)に日本語で通訳をやっていたから、その時は彼と話ができなかった。

皆の名前は当時覚えられなかったが、李幹事のことがとても印象深かった。彼は朝鮮民族で30代ぐらいの男の人だった。自分のことや教会のことを色々熱心に紹介してくれた。李幹事の話によると、彼はもともと経理の仕事をしていた人間でお金が大好きだった。日本へ来たのもお金をもうけたかったからだが、K 教会に行ってから別人に変わってきた。週二回ぐらい老人介護のバイトをすること以外に全ての時間を教会の奉仕に尽くしているという。また、彼は2000年以前には中国人の留学生は一人もいなかったのに、2000年以

後いきなりたくさん中国人が入ってきたことなどを不思議そうに話してくれた。

私たちが中国語で話している間、中国語ができない牧師夫婦はずっと耳を傾けて静かに聴いてくれた。話が一段落して、日本語で牧師夫婦に自己紹介をした。教育学の勉強をしていると聞いた牧師はしばらく黙っていてから、「教育学ですね。愛が分かれば、難しくないが」とゆっくり言った。私はなにも言わなかったが、牧師の感情的な表情からなにかの同感を得た。この牧師の一語と顔つきが今でも忘れられない。隣にいる牧師の奥さんは微笑んで大変丁寧に「どうぞ、どうぞ」と何回もパンを勧めてくれたが、パンは遠慮させていただいた。李幹事は別れる時に自分の名刺に教会の地図を丁寧に書いてくれた。

「来週の日曜日は待ってるから遊びに来てください」と私を誘った。

「必ず行きます」と皆と約束をした。

7.3 K 教会と共に成長した日々

7.3.1 晴れの登場

南港から帰ってきてから、あまり落ち着けなかった。聖書の物語は神話として 5 歳の時に既に熟読した。クリスマスにきれいな教会に遊びに行ったこともある。しかし、キリスト教と言えば、あくまで西洋人のものであり、中国人と関係があるなんて考えたこともなかった。金色の髪が黒の髪を東洋人を統治することが想像できなかったからだ。この一生自分と無縁に思ったものが突然自分の生活に現れたのだ。

K 教会に行ったのは 2 週間後のことだった。忙しかったので、先週来れなかったと皆に言ったが、それはうそだった。実は約束の日曜日に来たが、教会のドアを開けようとしたとたん、怖く感じ、手を引いてしまった。K 教会に入ることに對してこんなに勇気が要るとは思わなかったが、それより、教会に中国人の若者がいっぱいいることに驚いた。

李幹事は皆待ってたよと言いながら、3 階に案内してくれた。ちょうど青年 3 隊の交流時間だったので、文珍も宋玉もそこにいた。文珍は隣の新生の面倒を見ていたので、あまり話せなかった。宋玉は私が来るとは思わなかったと言って、私を皆の前に連れて行って大声で紹介した。「皆さん、静かにしてください。ご紹介させていただきます。こちらのお姉さんはどこで勉強していると思いますか。大阪大学、皆の憧れの国立大学で勉強しています」。彼の話が終わると、三階は急に静かになり、皆の目が私に集中した。40 人ほどもいるところで注目されるとすこし恥ずかしく感じたが、自分がいつ日本へ来たのか、今なにをやっているのか、それと皆のことを研究しているときちんと話をした。すると、進学のことや日本での生活などのような質問がどんどん来て答えるのに精一杯だった。ほかの新生の自己紹介を聞いた後、皆とゲームをやって楽しく過ごした。

帰る時、雨が降りだし、李幹事は教会の傘を貸してくれて、文珍と宋玉と一階まで送ってくれた。初日の教会は厳しいイメージがまったくなくて楽しかった。当日李幹事が貸してくれた 3 本のビデオを家で見た。中国のキリスト教の広い世界を初めて知った。

7.3.2 危機の出現

日曜日はバイトがあったため、教会に行くのは大体 3 時ごろだった。教会のことはあまり知らなかったため、文珍はいつも聖書を用意してくれて席も取ってくれた。彼女の紹介で私も聖歌隊の活動に参加するようになった。一応青年 3 隊に属していたが、最初の半年、旬長が指定されていなかったため、旬の交流時間に各グループ間の移動が許された。しかし、グループへの参加は散漫だったため、帰属感はなかった。

個人的な理由で二ヶ月教会にいけなかった間に、李幹事は帰国した。1 月中旬頃、久しぶりに教会に行ったら、猿さんの証（本論 pp.209-211 を参照されたい）及び留学生の奨学金献金のことを聞いて私は初めて感動を覚えた。本格的に調査を進めようと考えたのはこれがきっかけだったと言える。最初のインタビューを行った。情報提供者の立博は自分のことを話すのが苦手だった。しかし、彼の話聞いたおかげで、教会の状況をすこし把握でき、観察の方向も修正できた。

教会は一つの共同体としての集団活動が多いため、一人だけでは全面的な観察は追いつかないし、フィールドノートに集団活動についてどのように記録したらいいのかも分からなかった。すこしでも多くのデータを残すため、常に録音機を携帯し、ビデオ撮影も始めた。最初は皆違和感があったかもしれないが、ビデオに写りたくてわざと自分の姿を出す若者が多かった。

この自分の行動が大胆すぎたせいなのか、1 ヶ月後金幹事は私と話し合った。「研究はいんだけど、もうすこし神様を感じてから、論文を書いたほうが人に感動を与えるのではないか」と彼に言われた。その後、彼の勧めでビデオをやめて旬の交流時間に二人の単独の聖書学習が 1 ヶ月ぐらい続いた。金幹事が一所懸命に教えてくれたのはよかったが、どうも皆から隔離された気がした。このままでは調査が難しくなるのではないかと思ったところ、本当の危機がやってきた。ある礼拝日の交流時間に、青年 2 隊の隊長に外に呼び出された。「これはなんですか？私たちはもうあなたに何回も忠告したでしょう。ここは研究の場ではありません。今度録音するところを見たら、ここであなたを受け入れられなくなります。あなたは他の教会にいくしかないと思います」と彼女は録音機を指して怒りをこめた口調で言った。今までの人生の中でこんな経験をしたのは初めてだったから、こちらはなにも言えなかった。自分は教会を宣伝したいのにとすると、泣きたくなってきた。

しかし、つらくてもなにも分からずやめるわけにはいかない。そう思って次の日曜日は勇気を出して教会に行った。休憩時間に牧師に一階の事務室に呼ばれた。私はきちんと事情を牧師に説明して「教会に来るのはもともと神様を知りたい気持ちもあったし、論文を書くことも一つの伝道だと思っています。録音がだめだったら、やめますが、こちらに居させてください」と自分の考えを素直に話した。それを聞いた牧師は次のように話してくれた。「皆あなたの存在を色々言っているが、僕はそう思わない。頑張って書いた論文を中国で発表してみたら」。牧師に励まされるとは思っていなかったため、心から感謝した。

一つの危機を乗り越えた私はおとなしくなり、見ることや聞くことにもっと神経を使うようになった。同年の夏から、教会はホームページを作って外部に積極的に宣伝するよう

になったので、ビデオ撮影を常に行い、教会の様子を見ようとしたら、いつでもアクセスできるようになった。青年 2 隊隊長との間の不和も教会の現代化の到来につれて自然に溶けてきた。

7.3.3 調査者の姿

録音できないからといって、メモを取るのを怠けてはいられない。一所懸命に書いたりしていた私を見て、「理解が深まらないなら、いくら書いても無駄です」と文珍と黄さんに言われたことがある。小椿は「あなたは学歴が高いから、知識もたくさんあると思うが、聖書は知識として勉強するものじゃない」と言った。彼らの話から皮肉な意味を感じ、自分の滑稽な姿まで想像してしまった。聖書から命をもらった彼らは、多分私を真理を知らずに知識を自慢している可哀そうな人としか見ていなかったのだろう。

研究は教会に来たきっかけの一つにすぎず、若者をもっと理解したいという気持ちは本物である。2005 年 5 月の洗足式で青年 2 隊の中甸長は「お姉さんの面倒をよく見ていなくてごめんね！」と言いながら、足を洗ってくれた。甸長の愛はたいしたものだねと思った。当日、教会が出した日本語教師募集に応募した。それから、教会で様々な勉強上の相談が入ってきた。やっとここにいる自分の位置を見つけたことを嬉しく思った。留学生たちの履修科目の選択から、レポートの作成まで皆とのかかわりが深くなり、進学指導などあまり出来ないことでも知り合いの日本語学校の先生たちに聞いて皆を助けようと努力した。

もちろん、レポートを書くには私は自分なりの規則があった。一回目は書いてあげてもいいが、二回目から話をしながら書くのが彼らのためだとはっきり言った。それでも、提出直前に依頼されるが多かった。こちらが書かないと彼らは諦めてしまうので、教訓を与えたほうがいいのかと思っても、結局可哀そうな顔を見ることに耐えられず妥協することがしばしばあった。そこには矛盾した自分がいた。私の努力が皆に認められたかもしれない、同年の 6 月に修練会での受洗に勧誘された。皆と一緒に受洗のレッスンを受けたが、最終の同意サインのところに保留してほしいと書いたので、牧師は無理にさせなかった。自分はまだ準備が出来てないからと正直に言ったら、椀義は「残念ですね。神様は外でノックしているのに」と言った。「これは心の問題だ。あなたはこの心がないのだ」という立博の冷淡な言葉から、自分が疑われたような気がした。

しかし、嘘を付けられないから、彼らの反応を気にせず相変わらず調査をし、教会で自分のできることに力を尽くした。この間、文珍と喧嘩をしたこと、解放の日本語学習に付き添ったこと、レポートを初めから終わりまで書かされて腹がたったこと等々、様々なことがあった。椀義へのインタビューが出来るまで 3 年間も待ったが、彼女の過去の記憶が曖昧になって追究できなかった。調査者としてあまりにも無謀すぎた自分のことをたまには馬鹿のように思ったこともある。レポート、作文、成績表の翻訳、進学指導など様々のことがありすぎて、疲れて逃げようと思った時もある。だが、後悔は一度もなかった。「あなた、これからの人生はこのような若者と付き合うことになるよ」という青木先生の話を出すと、この彼らが与えてくれた試練に感謝する気持ちが自然に湧いてくる。

不器用な若者を自分の子供のように預かっている教会の先輩達をみて、自分が出来ることにはかなり限界があることがわかる。だが、私は自分の真情で皆とぶつかっている。教会に来ることで、哲学に興味を持つようになり、新しい思想に接する時のつらさと興奮を語ってくれた若者がいた。私の研究にも役に立ちそうなフロイトのなどの本を何冊も勧めてくれた。珈琲屋でよく一緒に話をし、孤独や自由などの彼の自己分析を聞き、若者の強い探求心に驚いた。

しかし、私は彼らにとってただの論文を書くために来た調査者にすぎなかった！このことに気付いたのは、牧師への二回目のインタビューが断られた時のことだった。当時教会では神学院の申請や神殿建築の計画があり、牧師は忙しかった。二回目のインタビューは「これ以上説明すると、内部情報に関わるから」という理由で断られた。神殿建築が実現できなかったことが原因ではないかと思ったら、「お互いの信頼関係が築けなかったのではないか」という暁静の厳しい声が心の中で響いた。これが大きなショックで自分のことを何回も反省した。翌週、「僕はやはり韓国語で一番自由に話せるから、これから韓国語で説教する」と牧師は言って日本語をやめた。真相は聞けないが、インタビューは日本語で行われたので文字化のデータを見せることで牧師に負担を掛けたのかとまで考えた。

7.3.4 退出はしない

補足インタビューをしながら、物語を書いてみた。その詳細を確認するため、皆それぞれと何回も話し合った。「こんなにたくさん書いてくれるなんて思わなかった」と彼らは驚いたようだった。彼らの暗いところや葛藤を隠さず書いたことで、本人が読んでみたらいやになるのではないかと考えた。しかし、意外に彼らは留学生の問題や自分自身の問題を認め、真剣に向き合おうとした。そして、K教会の問題及び改善策について積極的に私とも議論を何回も行った。彼らの姿から、彼らの強い成長意欲を肌で感じた。解放は「お姉さん、僕のこのストーリーをたくさんの留学生に読んでもらいたい。僕と同じような道に踏み込まないように皆に忠告してほしい」と言った。日本留学を振り返ると、解放は「お姉さんと一緒に人生を語ったりした日々をよく思い出す。楽しかったですね。僕は日本へ何をしに行ったのだ？もうすこし勉強したらよかったのにね」と言って日本で勉強できなかったことを今でも残念に思っているようだった。

調査が終わり、書き上げた物語を情報提供者に読んでもらうことで、研究の場としてのK教会と別れを告げたが、K教会から退出することはなかった。彼らを助けようと考えた私はまだなにも出来ていないため、そこから去っていくことができない。この流動的な場とも言えるK教会では、若者と触れ合うことで、彼らの不器用さに腹がたった私、彼らの純粹さに感動した私、様々な自己発見が出来た。自分よりたくさんのことをやっている若者をみて、自分のことをいつも恥ずかしく感じた。個人の力は弱いですが、彼らとともに一人の留学生としてすこしでも貢献しようという気持ちが以前より強くなってきた。

7.4 部分的な真実

エスノグラフィーは明らかに経験に基づいて営まれる。ある与えられた一つの環境の中で、個々のフィールドワーカーが学べるものと学べないことには、非常に現実的な限界がある。この限界があることを認めることが K 教会でのフィールドワークで最初に学んだことだった。

椀義のように、観察データが少ない、インタビューの時期が過ぎてしまい、濃密な記述が追及できないというような、ストーリーとして取り上げることを諦めてしまったケースも何人かいた。たとえ、文珍のようにせつかく親しくなり、やっとインタビューに応じてくれても、本人の中の葛藤が解けないと、語ってくれたものに矛盾があり、筆者としての私には容易に見破ることができない。また牧師先生が二回目のインタビューを断ったことで事実の深い追求が不可能になり、真実を探るには筆者の理解に頼らせざるを得なかった。

このような観察上及び理解上の多様な問題が常に存在したフィールドでは、様々な人との交渉を行われなければならなかった。そして、中国語のほうがいいのか、日本語のほうがいいのか、フィールドノートを書く時に、言語や言葉の選択に困難を感じた時がしばしばあった。フィールドワーカーの個人的な性格や活動習慣だけではなく、宗教に対する知識不足や信仰者ではない自分自身と立ち向かいながら、前に進まなければならなかった。このように様々な要素が絡んでいる中、私の学びは行われていた。

真実は言葉より複雑で矛盾に満ちている。このフィールドでも、記述に当たっていくつか言及しなかったこともあった。例えば、献金管理に関する K 教会の不透明さへの指摘、恋愛のトラブル及び金銭面のトラブルで留学生が来なくなったこと、受洗後に信仰生活を厳しく要求されて耐えられずに逃げた留学生のこと、教会を利用して国際電話カードやバイトを売りつける留学生のこと等々。教会はたくさんの留学生に居場所を提供してくれていると同時に、様々な問題に直面しているのも事実なのだ。調査者の目が届かないところでも様々な存在があるはずだ。本論文は「部分的な真実」¹²⁾を表現することで、その存在の豊かさを示す意味もあると考える。

7.5 神様と私

「この世の中、教会以外にただで食べられる昼食はない」。

K 教会との出会いを振り返ることで、この暁静の話を再び思い出した。確かに私が調査

¹²⁾ エスノグラフィーのテキストで扱われているフィクションは「文化的真実や歴史的な真実の部分性、つまり、真実とされているものがじつはいかに故意に整理されていて、また排他的であるかを意味する」ものであるとクリフォード (1996:10) が述べているように、フィクションであることは、むしろライフストーリーがテキストへ構成されていく全過程にかかわらず、なによりも私たち調査研究者の解釈過程についてのことなのである。語り手による語りはかならずしも明瞭、正確、誠実に語られるとは限らない。私たちの解釈は、本質的に「部分的真実」(クリフォード)にほかならず、ときには別の真実と併記されるべきものであることは肝に銘じておかなければならない(桜井,2002)。

者として K 教会に参加でき、若者と共に成長できたのは、この言葉に暗示された教会の寛容さのおかげだとしか考えられない。牧師先生への第二回目のインタビューが出来なかったことを残念に思うが、私を優しく扱ってくれた牧師夫婦への感謝の気持ちは言葉では表現しがたい。

クリスチャンにはなれなかったが、イエス様は神話に存在しているのではなく、「我々の生活に生きている人格のある神様」として自分の近くにいるようになった気がする。善と悪の世界観から見れば、林立するラブホテルの中に教会があるという俗と聖の対峙の世界が容易に理解できた。中国人の宗教心理の調査を行った梁（2004）は、宗教に接触した自分の感覚を「非常美好」と一語でまとめ、具体的な事例を挙げていない。「美好」（美しい、好、すばらしい）という中国語は非常に抽象的で掴みにくい。人によってそれぞれ違うかもしれないが、私にとっては、この「美好」は K 教会にいて、愛を理解し、愛を実行している留学生の変容が筆者に与えた感動の数々だった。

かつて、聖劇隊の副隊長の黄さんに次の質問をされたことがある。「今回の修練会で僕は賛美歌をリードした。色々な運営に参加して、僕はこの人工的な雰囲気感動して神様を信じてしまったのではないかと疑うようになった」。自然な感動で自分と神様が結びついたと信じた彼は、自分が騙されたのではないかと心配するようになった。彼は本物を求める。教会に彼のように生きることを真剣に考える若者たちが大勢いる。この若者の姿が私に大きな力を与えてくれた。

今でも大声での祈りはできないが、大声の祈りが出来る彼らのことをうらやましく思う。彼らは神様を信じて、積極的に神様と会話をしようとしている。何を信じればいいのかという疑問だらけの現代の社会では、イエス様の生き方を選んだこと自体をとても貴ぶべきだと私は思う。神様と出会った喜びを彼らは次のように語っている。

「最近、周りの人たちが皆、星のようにきらきらしているように感じた。皆の心もきれいでお花のように見える」。

人を愛することは、他人の発見から始まるのではないかということ教会の若者は私に教えてくれた。このように感動と感謝の気持ちを覚えていくことが、成長そのものであると最近思うようになった。

信仰心が浅いせいなのか、友人と京都の神社にも行くし、お祈りもする。だが、奇妙なことに、最後に口に出す言葉はいつも

「アーメン！」だ。

第三部 結果と考察

第8章 教会はどんなところなのか？

教会は信仰を同じくする人の共同体。主としてキリスト教¹³⁾で用いる語で、他の宗教で用いる場合もある（広辞苑第五版）。旧約聖書には教会という言葉は出てこないが、原語であるヘブライ語に「カハル」という言葉があり、「集会」あるいは「会衆」を意味した。新約聖書のギリシャ語では、カハルはエクレシアと訳されている。イエスは弟子のペテロに、「あなたはペテロである。そして、私はこの岩の上に私の教会を建てよう」（マタイ 16・18）と語り、また他の弟子たちに、「もし彼らが言うことを聞かないなら教会に申し出なさい」（マタイ 18・17）と言った。ドイツ語で教会を表す言葉には、Kirche（キルヘ）という言葉とGemeinde（ゲマインデ）という言葉がある。キルヘとは、建物や組織を含む広い意味で使われ、日本で使われている「教会」という言葉の意味に近いと言える。一方、各々の礼拝をする教会を表す言葉としてはゲマインデ（共同体）が使われる。

「神の愛を知った者の生き方は、神礼拝と隣人愛になる」と聖書では述べられている。キリスト教では、信仰と生活に強い結び付きがあり、教会と切り離すと信仰は成り立たない。そのため、信者は皆教会に加えられ、教会を中心とした信仰生活を送っている。礼拝は教会が行う最も基本的で中心的な行為である。礼拝にとって「集まる」ということは大きな意味を持っている。教会堂というと、欧米風の立派な教会に、信者が集まり、賛美歌の中で静かに祈ったりするところが連想される。またキリスト教の結婚式や葬式の厳粛で、祝福に満ちた雰囲気が一般的には思い出せるだろうが、実際にクリスチャンになるということは、礼拝に参加する以外に「十戒」、「主の祈り」及び「使徒信条」を基本的な信仰信条として、日々の生活で守らなければならない。また、教会の暦による行事に参加することもルールとなっている。朝起きてからの祈祷及び夜寝る前の祈祷は普段の生活に不可欠な一部分だとされている。

さて、フィールドとなる教会はどんなところなのか、その実態を具体的に見て行こう。教会の建物自体は、「5.1 フィールドの紹介」に書いたようにその外見はあまり目立つとは

13) キリスト:キリスト(Christo ポルトガル・基督)はもとヘブライ語のマシーアハ(ギリシャ語形マシアス)のギリシャ語訳Christoから)「油を注がれた者」の意。古代ヘブライ時代、王や祭司や預言者は任命に際して頭に油を注がれたため、後にイスラエルを救うために神が遣わすべき将来の王の意となる。キリスト教では、イエスを人類の罪を贖うために神が遣わしたキリストと信ずる。イエスの誕生は紀元前七～四年ごろ、またその死は紀元三十年ごろと言われている。

キリスト教:(Christianity)イエスをキリストと認め、その人格と教えを中心とする宗教。旧約・新約聖書が教典。正義と慈愛とに満ちた父なる神、人類の罪、キリストによる贖罪と説く。パレスチナに起こり、ローマ帝国の国教となる。現在は欧米のほか世界中いたる所に信者を有する。

いけない。十字架がなかったら、どこかの車庫のような感じで、教会の綺麗なイメージからはかけ離れているところである。だが、小さい礼拝堂はいつも人が一杯でにぎやかな雰囲気満たされている。

三階の和室は夜になると、留学生の寮になる。2006年4月時点では女の子が4人、男の子が3人その寮を利用していたが、礼拝日になると、和室のドアが開き、洋室と一体になり、自由交流、旬の聖書学習及び青年隊活動の場所として皆に自由に使われている。キッチンには当番以外の人でもだれでも使えるようになっている。終わったら綺麗にするというルールさえ守れば、勝手に入り、人の手伝いをして、自分の食べたいものを作っても、だれも文句を言わない。

二階の礼拝堂は説教壇を中心に小さいステージがあり、ステージの左側にピアノと聖歌隊の席、右側には各種の楽器が置かれ、後ろには白い大理石の十字架が目立って見える。この礼拝堂は普通の礼拝堂と違う二つの特徴がある。一つは礼拝堂の一番後ろにある通訳室、もう一つは礼拝堂の真ん中にある大きな柱である。小さい礼拝堂のこの柱はちょうど後ろの人の視線を遮蔽してしまうので、前に立っている牧師の顔をはっきり見ようとしても、実際は非常に困難である。長い椅子は右側と左側に3列ずつしか並べられていない。他は全部一人用の椅子で、合わせて80席ぐらいある。青年隊活動、修練会、歓迎会及びプロミス聖歌隊の練習に合わせて臨時に移動できるようになっている。椅子などに重厚さが欠けているせいか、なかなか教会の落ち着いた雰囲気を感ぜさせてくれない、というのが正直な第一印象であった。それでも、教会に通うようになって、礼拝に遅れ、ドアを開くと、その狭い入口まで立つところがないぐらいいつも会衆の人数は多かった。真ん中に開ける通路にも人が一杯詰まっていて牧師の話を聞いている。このような時になると、真ん中の柱はちょうど皆の椅子の背もたれとして利用できるようになる。通訳室は2003年に保育室から改造されたものであり、牧師が説教する時、そこを利用して留学生が同時通訳してくれる。他の留学生たちはスピーカーを通じて牧師の説教を聴いている。

このようなところで留学生が自分の信仰生活を送ること、あるいはクリスチャンになるということは、どのような犠牲を払うことなのかをすこし考えてみよう。

周知のとおり、中国の経済は発展中であり、国内の格差が大きくなるにつれ、大金持ちもたくさん出てくる時代を迎えた。しかし、範(2004)で明らかになったように、ほとんどの留学生は日本でアルバイトをしながら、学校に通っている状態であるということを忘れてはいけない。豊かになって留学の最初の費用を支払えるようになったが、それだけでは留學生活がちゃんと送れる保証にはならない。留學の低年齢化によって、大多数の学生は少年期から青年期への過渡期を日本で過ごすようになり、初めて社会に出てきた彼らの多くは包丁すら持ったことがないのに、日本で自立していかなければならない。従って、バイトと学校だけで精一杯になり、「自己管理をどのようにしたらいいのか」と悩んでいる人は多いと思われる。

表1で示した留学生向けの礼拝日のスケジュールを見ると、お昼の12時から夜10半の聖餐まで、ほぼ一日中教会で賛美歌を歌ったり、祈りをしたり、説教を聴いたり、聖書を

学習したりしなければならない。普通の旬員でも疲れきってしまうのだから、奉仕する人たちがさらに疲れるのは当然のことである。特に賛美歌をリードする人たち、楽器を演奏する人たちは、礼拝後の部属活動（教会のクラブ活動）でもリーダーとして活躍することを期待されている。例えば旬長の場合、聖書学習で教えること、皆の相談に乗ることも当然のこととされており、かなりのエネルギーが求められているだろう。また大事な礼拝日を守るために、日曜日のバイトを諦めるのは、留学生にとっては非常に辛い選択だと言える。日曜日は学校が休みで、バイトが出来る一日であり、平日より時給が高いことも何よりの魅力であろう。それ以前に、ほとんどのバイト先が日曜日の出勤を前提にしているため、日曜日に働けないと、バイトに採用されない可能性が高くなる。留学生にとって非常に現実的な問題である。

その他、日曜日以外にも教会には礼拝日があり、祈祷会が水曜日の午後 3 時半から、金曜日の午後 9 時から、また毎日早朝午前 6 時からにも設けられている。教会の近くに住んでいる人は、朝と夜の祈祷に参加しなければならないそうだ。各旬は旬員たちの状況にあわせて自由に聖書学習の時間を設けることも勧められている。年中行事として、一週間前後の神学院での学習が年二、三回ある。自由参加であり、学費は 1 万円である。8 月の修練会は 4 日前後で 1 万円ぐらいの費用がかかる。さらに日常伝道を行うように勧められる以外に 4 月と 10 月は教会の伝道時期であり、一ヶ月前後決められた学校で伝道するのがクリスチャンの使命となっている。リーダーになる人たちは普通の旬員と同じようなことをする以外に、会議で話し合っけて計画を立て、毎週、牧師に書面での報告及び口頭での報告をすることも必要となっているし、旬員のことを把握するため家を訪問したり電話で連絡を取ったりすることも日々の生活の一部となっている。旬長、中旬長及び隊長は聖書学習用のプリントや脚本のコピーなどを全部自分のお金で用意している。

要するにクリスチャンの生活は厳しくて、時間と精力が要求されている。そして、金銭を犠牲することも要求されている。各活動用の費用はそれぞれ違うだろうが、献金の「十分の一」¹⁴⁾だけを考えても、留学生にとってはかなり大きな金額だと言える。週 28 時間の許可されたバイト時間内の労働では、時給千円と高く見積もっても、一ヶ月 11.2 万円の収入になる。私立大学で学ぶほとんどの私費留学生にとって、この金額は生活にさえ十分ではないのに、その中から年に 13 万円前後を教会に寄付することはとても無理ではないかと思われるだろう。しかし、教会の週報によると「十分の一」だけでなく「建築献金」「宣教献金」「伝道献金」「運営献金」などから「奨学金献金」まで各種の献金が増え続けており、教会は 2005 年の 10 月に献金を管理する部門まで設置した。注意してほしいのは、献金は自ら神に捧げるものだから、必須ではないと皆がわかっていることである。

初めて教会に来た人に以上のことを話すと頭がいたくなるだろう。初めての人の中には、多くの祈祷詞を覚えることは言うまでもなく、祈祷する時の座り方に慣れるまでに、諦め

14) 「十分の一」:キリスト教の献金のこと。「十分の一」は収入の十分の一のことを指している。献金は神様に捧げるもので、教会の運営に使われている。教会の状況によって、各教会には他の名義の献金が設けられていることもあるが、どんな献金でも基本的に個人の意志で決めることができ、けっして出さないといけないわけではない。

る人もいるだろう。跪いて祈るのが何時間も続くと足が痺れ、私は今でも慣れない。教会の皆さんとの食事、祈りを忘れてよく注意される時の気分を思うと、時間的、精神的にも厳しい留学生活に、彼らはなぜこれほど厳しい信仰生活をも加え、自分の首を絞めようとするのかと考えずにはいられない。仮にこのような厳しさを事前に知らされていれば、たぶんこのドアを開けようとする人は少ないだろう。たとえ入っても、我慢できずに途中で脱落するのも想像に難いことではないと思う。実際に様々な理由で教会に来なくなった留学生は多い。制度自体は自由で、来ることも来ないことも本人の意志を尊重することが基本となっているからである。それなのに、数多くの留学生が楽しんで来続けているのはなぜなのか。厳しい信仰生活と引き換えに何か得ているに違いない。もし彼らがここで何かを得ているとしたら、それは何かという秘密を追及するためには、我々は次の章を開き、彼らに接近するしかないのであろう。

第9章 「新世代」¹⁵⁾ 中国人留学生の物語

われわれは自分のストーリーのまっただ中におり、それがどう終わるかを確かめることはできない。われわれは、新しい出来事が自分の生に加わるごとに、プロットをたえず改訂しなければならない。したがって、自己とは、静的な物でも実体でもなく、個人的な様々な出来事を一つの歴史的なまとまりの中に形作ったものである。その歴史的まとまりは、その人がそれまで何であったかということだけではなく、その人が将来何になるのかという期待をも含んでいる。

(Polkinghorne, D., 1988)

はじめに

物語は、過去と現在の自己を結ぶだけではなく、未来の自己、可能性としての自己を有機に意味付けて組織する。ハイデッガー (Heidegger, M., 1972) は、「可能性」こそは、現存在のもっとも根源的な規定性であると言った。現存在の意味を「時間性」の中で考えれば、自己は事物のように「存在」するものとしてではなく、「みずからを時熟する」生成プロセスにおいて捉えられる (やまだ, 2000)。本章では、以下の五つの違うケースを取り上げ、「新世代」中国人留学生の物語を描く。彼らの成長軌跡の記述分析を通して、「新世代」留学生の日本留学への理解を求めたい。

9.1 道に迷った子羊	66
9.2 小椿の決意	69
9.3 暁静の追求	100
9.4 文珍の無力	126
9.5 解放の結婚	158

¹⁵⁾ 「新世代」は中国語では「新生代」であり、「新・新人類」と同じように「一人っ子世代」のことをさしている。70年代末からの人たちは従来の人達とは違うということを強調する言葉として、中国で一般的に使われているので、本研究では「一人っ子」も「新・新」も「新世代」も同じ意味で使っている。(「一人っ子」は中国語では「独生子女」)

9.1 道に迷った子羊

そうですね。僕は親にいろいろな心配をさせたが、学習だけはお父さんとの約束どおりに進めてきた。今でも負けないように頑張ろうと思っている。でも、日本に来た最初の 5 日間は自分で自分のことがわからなくなってきた、まるで迷った子羊のようだった。

僕は今、一歳上のお兄さん（実際の兄ではない）と一緒に住んでいる。彼はなんでもしっかり管理できているようで、僕の面倒も全部見てくれている。本当は同じ留学生なのに、彼はなにをしても平気でいろいろ教えてくれるのだが、こっちは全く馬鹿のようで何もできなかった。日本へ来たばかりの二、三日はすごくショックを受けた。彼はご飯を全部作ってくれたし、昨日も「昼はまだだろう」と言ってパンを買ってくれた。自分がこんなに失敗するなんて、思っていなかったから、家にいるだけで、もう息が苦しくなった。新鮮な空気を吸おうと思って、ほかの寮とか色々なところへ行った。後から聞いたら、お兄さんは 16 歳から、もうハルピンとか香港とかいろいろなところへ行っていろいろなことを体験したから、私たちより成熟しているのは当たり前なんだと分かった。ほかの人とよく比べて、確かに彼は特別に優秀な人だとわかるようになったら、すこし落ち着いた。

でも、二日目になると、一緒に来た子の一人がもう仕事を見つけて、給料は一ヶ月 20 万ぐらいだと聞いて、またショックを受けた。自分がまだ料理もできず、電車にも乗れないのに、どうして、皆はこんなにすばらしいのか。国にいたときは自信满满だったが、どうしてここへ来たら、自分は何もできなくて、みんな自分よりすごいのかを理解できなかった。あのとき、もう、自分が日本へ何をしに来たかがわからなくなってきたから、じゃあ、僕も仕事を探そうと思うようになってきて、本当にご飯を食べてもおいしくは感じなかった。悩んでいた僕をお兄さんは見ていられなくなったかもしれない、やっと「お前は、日本へなにをしに来たのか、ちゃんと覚えているか」と僕に聞いた。僕はすこし自分を思い出そうとしたが、でも、とてもつらかった。夜に寝ている時は国にいるような感じでまだよかったが、起きて、日本へ留学していることを実感するとまた迷い続けていてすごく悩んだ。

でも、後でほかの人から聞くと、彼（仕事を見つけた子）は日本へ来た時、たくさんの借金を作ったから、そうするしかなかったそうだ。僕は大学を終えていい仕事のチャンスを捨てて、なにかを勉強しようと思って日本へ来たことをもう一回思い出して、僕と彼はやはり違うことに気づき始めた。その後、張さんたちの伝道がきっかけで留学について全般的にすこし分かってきたから、やっと自分の初心に戻れたが、あの時期は本当に自分を見失っていて、他人がしていることを見ると、僕もそうするというような考えばかりだった。

日本へ来る前に、ビザの申請が済んで、日本へ行くまで、まだ 2 ヶ月あったが、両親はすごく心配してくれた。特にお父さんは「お前をこのまま日本へ行かせることを考えると、お父さんはどうしても安心できないんだ」と言った。「心配しすぎだよ。僕はもう大人だし、なんでもできるから、日本へ行っても、バイトと学習以外はなににも問題ないだろう」と僕は簡単に思ったが、こんなに苦勞をすることは全然思いもつかなかった。

僕は今まで全部両親の作った道を歩んできたから、「君は両親に可愛がられて、自信がありすぎるから、きっと苦勞をするよ」と先生にも言われたことがある。日本へやってきて、やっとその言葉の意味がわかってきた。確かに僕は何も苦勞をしたことがない。家で両親が僕にすこし勞働をさせようとしたら、こっちから条件を付けるか、それでもやるかやらないかのようによく加減だった。「一番の欠点は怠けていることだ」と両親に言われたが、あまり気にしていなかった。

お姉さん(筆者のこと)に笑われるかもしれない。飛行機で来たときに、先ほど言ったお兄さんと隣の席だった。料理ができますかと彼に聞いたが、できませんと言われて、じゃあ、行ったら僕が料理をすると彼に大きなことを言った。けど、来たら、なにを買うかさえ全然分からなかった。かえって、彼に作ってもらってしまって恥ずかしく思う。僕は国でもたまには料理を作ったことがあるから、自信を持っていた。

でもあの時のことをよく考えたら、用意は全部お母さんにしてもらって、僕は鍋の中で混ぜるだけの遊びだった。日本へ来たら、今日はなにを食べるか、なにを買うかとかいろいろなことを考えなければならなくなったから、そういうことを考えるだけで、もう、本当に毎日面倒くさくて悩んでしまった。どこから考えたらいいのかも分からない僕だった。留学生活ははじめからもう挫折ばかりだった。お兄さんは料理も教えてくれた。

3日目ぐらいに、彼はお肉を買って、ピーマンも買ってきて、僕は隣で見学した。彼は先に油を入れて、すこし待って、油が熱くなってからお肉を入れた。僕はその時、どうしてもお肉とピーマンの間に何のつながりがあるのか分からなかったから、彼に聞いた。「チンジャオロースーを聞いたことがあるでしょう」と言われて、なるほどとやっと分った。また、お兄さんは「料理を作ることはコツがわかれば、だれでもできることですよ」と言って、そのコツも教えてくれた。

「一つは油をすこしたくさん入れること；二つ目は調味料を吸収しやすいものだったら、醤油と塩を両方とも入れてはいけない」ということだ。彼の言うことを聞いたら、やっと僕の作ったなすび炒めはどうしてあんなにまずかったのかやっと分かったよ。僕はあの時、塩を入れすぎてまずかったから、じゃあ、お茶を飲んで味を薄くすればいいのではないかと思った。

僕はやはり留学を簡単に考えてしまったかな。なんか日本へ行ったらバイトをしたら、外食もできるだろうと思ったけど、日本へ来てみたら、外食って一食だけでも五、六百円ぐらいかかるでしょう。とてもできないんだとわかった。やはり自分で作ったほうが安いし、どうも気持ちもよさそうだ。けど、はじめは日本の物価を見たらびっくりしたよ。ものを買うことは全然考えられなかった。例えば、この電子辞典も買いたいけど、お金を考えたらやはりとても買えないんだと思った。お兄さんに「お前は日本で生活して行こうと思ったら、買うものを買わないとだめですよ。ほかの人も皆新入生だから、だれでも自分の生活があるし。これを買ってもずっと使えるものだから、考えてみなさい」と言われて、すごく考えさせられたよ。僕はいつもほかの人のものを借りたりしていて、皆は親切だけど、やはり甘えんぼのままだったら、いけないよねと考えた。次の日に、僕はなにを買ったらいいのか分からないから、先生にお願いして、必要なものを紙に書いてもらって、その通りのものを買ってきた。後3日したら日本へ来て、二週間になるが、今は少なくとも食べ物とかもうそんなに苦勞して考えなくなってきて、すごくよかったと思うよ。また、自分の道もだんだん分かってきたよ。僕は学習のために来たから、両親は一年間の学費と

半年の生活費を全部出してくれたし、僕はただ、半年の生活費だけを考えればいいから、まず半年かけて日本語をマスターしてからバイトを探しても間に合う、こう考えると頭の中がすっきりしてきて、学習の意欲も出てきた。

先日、お父さんに電話をして、自分がキリスト教を信じるようになったと言ったら、お父さんはびっくりして、「きっと変わると思ったが、こんな早く変わるとは思わなかった」と言った。お父さんはきっと心配しているでしょう。日本は邪教が多いと聞いたから。でもなんといっても僕は今大切なのはまず大学に入ることだとわかった。入ったら、ある意味で落ち着けるだろうと伝道の人にもよく言われたし。そうでしょう。お姉さん。

昨日、僕は携帯を買った。家に電話をしようと思ったが、携帯のほうが高いと聞いた。それは本当なのか僕は分からないけど。一日目に学校から国際電話カードを買ったが、それよりは教会のほうが安くて騙された気がした。まあ、今は学習だけに集中すればいい。けど、あの五日間、僕は本当に聖書の中の迷った羊のようだった、よく乗り越えられたよね、僕は。

(フィールドノート・2005/10/16 7:30~8:30・教会)

以上のフィールドノートは2005年10月に教会に入ってきた新入生の話であった。2005年8月に修練会という一つのクライマックスが終わると、新入生を迎える時期に入り、皆は各学校への伝道に忙しかった。教会の週報に書かれている「新入生を歓迎する」ニュースが毎週見える。それと同時に毎週各学校からの新入生もたくさん教会に入ってくる。筆者である私は、フィールドワークのため、教会に通うようになって、既に一年経ったところであった。皆の騒ぎの中で一人で静かに勉強していたこの子を見ると、教会に慣れてしまった私はこちらへ来た自分の初心を忘れかけている気がした。彼は「小上海」と皆に呼ばれているようであり、10月16日に教会へ初めて来たそうであった。中保祈祷会があるため、小上海と長い話は出来なかった。しかし、彼の話聞いて学校及びアルバイトに追いつけられている留学生活の中で、なぜ彼のような留学生¹⁶⁾が相次いで教会に来るのか、彼らにとって教会はどんな存在なのかという初めて教会に来た時の不思議さを私は再び思い出させられた。

16) 就学生と留学生:日本語にはもともと「就学生」という言葉がない。この言葉は官製用語で、1982年の日本政府の統計年報に初見され、その後、マスコミなどにおいて、なし崩し的に用いられてきたが、1990年6月「出入国管理及び難民認定法」改正(つまり改正入管法)により在留資格の一つとして明確に定義づけられた。「就学」とは「本邦の高等学校若しくは盲学校、聾学校若しくは養護学校の高等部、専修学校の高等課程若しくは一般課程又は各種学校若しくは設備及び編制に関してこれに準ずる教育機関において教育を受ける活動」という。この定義において「日本語学校」の名称は見られない。法務省と文部省の感覚においては「日本語学校」なるものは「学校」の範疇と認めるには不足であるようで、ただ、「教育機関」としている。このような「教育機関」で勉強している学生は「就学生」と呼ばれる。ちなみに、同改正入管法により、「留学」は「本邦の大学若しくはこれに準ずる機関、専修学校の専門課程、外国において12年の学校教育を修了した者に対して本邦の大学に入学するための教育を行う機関又は高等専門学校において教育を受ける活動」と定義されている。すなわち、大学や大学院、専修学校において学んでいる学生、大学で講義を聴く聴講生、研究生などは留学生と見なされる。筆者はこのような差別的意味合いを持つ用語を廃止し、就学生を留学生と同様に扱うべきであると考え、本論文では、「就学生」という用語を引用文献と誤解されやすいところだけに使っている。

9.2 小椿の決意

9.2.1 小椿の物語

はじめに

「すべて求むる者は得、尋ねる者は見出し、門を叩く者はひらかるなり。」

(マタイ伝福音書7：7－6)

これは2007年の春節に私が引いた「知恵の言葉」のおみくじです。今年の修練会でも私は恵みを受けました。周りに祈禱して疲れて眠っている子がいたが、私は涙が止まりませんでした。その時「小椿、私はこんなにあなたを愛している。あなたを一度も捨てたことがなかったのだよ。」と耳に神様の声が聞こえました。それを聞いて私は泣いて泣いて涙が止まりませんでした。よく考えてみれば、日本へ来た頃、私はずっと後悔していて神様に愚痴をこぼしました。でも、神様は私を変えて下さりました。私に夢をくださり、勉強する心までくださいました。

日本語学校の一年半と、専門学校の2年を終えたら、だれかと結婚して借金を返し、お金を貯めるのが私の計画でした。このようにうまく生きることができなんて思えませんでしたが、でも、神様はそんな私にうまく生きる力を下さいました。2、3年あればきっと自分を変えられるという自信をくれました。勉強が嫌いな子もいますが、今の私は学校で勉強ができる以上に幸せなことはないだろうと思っています。そして修士だけではなく、博士に行きたいと思っています。

(インタビュー・2007/02/04)

9.2.1.1 故郷と家族

① 故郷である福清

小椿は福建省福清の出身で、妹と弟がいる。華僑の故郷として知られている福建省の福清は、中国改革開放以来、華僑の投資によって著しい発展を遂げてきた。太平洋に近く地理的に優利である福建省の人たちは、すこし算数ができるようになる13、14歳から商売活動にたずさわり、商売上手な人が多いことが中国でよく知られている。勤勉で苦勞に負けない福建省の人たちは昔から海を渡って生計を立てようという意識が強く見られ、中国人がいるところには必ず福建省の人がいると言われている。

福清の人々の主な特徴と言えば、皆出国したい気持ちを持っているということだ。「どの家も海外へ行く人がいます。福清の人はだれでも海外へ行きがっています。日本、アメリカ、イギリスなど、チャンスさえあれば、出国する。全員海外に行きたくてさびれてしまった村もあります。アメリカは行きにくいですが、アメリカなら50万円かけても、借金をし、家売って密入国をしてでも皆行きたいと思っています」。その理由を小椿はこのように説

明している。「出国さえできれば、お金が入ってきます。お金があれば、よりいい生活ができるという福建省の人の単純な考えがあるからです。だから、どこかの家に海外へ行く人がいれば、皆羨ましく思います。それはその家に将来たくさんのお金が入ってくると言う事だと皆思っているからです」。若いうちに皆出稼ぎに出る福清では、近年都市部に移住する人が増えるに伴って、若い労働力が年々減少を続けている。それと同時に空き家が増え、年寄りばかり残される村も出てきたという。

お金があるとまず家を建てるという考えは、中国で昔も今も変わらないものであり、家は家庭の経済力の象徴と言っても過言ではない。小椿もよく自慢げに「福清の人たちは皆大きな家を買うんですよ。住む人がいなくても、大きな家を買うんです」と言っている。汽車に乗って北から福建省に入ると、まず目につくのは、北より極めて大きい一個建ての住宅である。生活水準を象徴する 3 階建ての住宅が林立しているのが、福建省の農民の誇りであるとともに、お金を重視する考え方を強く支えているようだ。

② 彼女の家庭背景

小椿の家は福清市の農村部にある。父母は農民で自分の名前以外の文字を知らない。稲作に適した土地だが、米作りが大変なため、その地域の農民は落花生、サツマイモ、南瓜などの収穫が早い作物だけを育て、主食の米は全部外から買ってくる。福建省のほとんどの家庭と同じように、女の人家事をし、男の人は外で働き、家族を守るのに必死だ。小椿の目から見れば、父母がやっている全てのことは全部家族のため、子供のためだという。

「父は、自分のために新しい服を一着買うことさえも惜しんでいるのに、母や私たち子供にはいつも一番いいもの、一番高いものを買ってきます。」という彼女の話から父の家族愛が強く感じられた。だから、「福建省の子は海外へ行くと、ホームシックになりがちです」と彼女はよく言う。このような強い繋がりは、困難に我慢よく耐える彼らの心を支えているようだ。

小さい頃の話になると、彼女はよく 5 歳の時のことを思い出す。母が病気だったため、物分りが早く長女である小椿は、その頃から食事の準備をしたり、弟を背負って面倒を見たりしていた。おかげで彼女は母の一番の話し相手になり、母は今でも何でも話してくれる。生まれてからあまり貧乏をした記憶がなかった彼女は、母の話から両親の苦労を少しずつ知るようになった。今でも、彼女は母のこの話をよく覚えている。「母は強いですね。お婆さんと分かれて住むようになり、家になにもなくて、食べる物さえもありませんでした。母は南瓜を薄く切って干したものを煮込んだスープを父の昼ごはんにしました。そんなスープでも二人分はありませんでした。父が食べ終わると碗を下げた母は、隠れて碗の周りに残った南瓜のくずを指でぬぐってお湯に入れて食べていました。考えられないでしょ。福建省の女性はこんなに強いんです。家族のために何でも我慢できます」。彼女には妹と弟がいるが、母は長女の彼女が自分の一番の宝物だとよく言うのだと言う。

小椿にとっては、5 歳の時の記憶が永遠に忘れられない。長年寝たきりだった母は、偶然ある医者の治療を受け、奇跡的に元気になった。再び明るくなっていく家庭、その幸せが

幼い小椿の心を暖めてくれた。彼女の母は熱心なクリスチャンだ。母がいつ、なぜクリスチャンになったのか彼女はあまり知らないようだが、家で美味しいものを作ったら、必ず先に牧師のところへ届ける母の姿は彼女に大きな影響を与えたようだ。

「うちの田舎の牧師様は当時 30 歳ぐらいでした。非常に若くて優しい方です。説教が上手で聞けば聞くほど聞きたくなると母はよく言っていました。田舎の人だから、お金はないので、皆米とかを牧師様に届けます。皆牧師様を愛しています。母もそうです。牧師様のおっしゃることならなんでもいいと思い、反対しません。小さい頃、私たちはなにもわからなかったから、母に物を届けさせられた時に文句ばかり言いました。なぜ私に届けさせるの。私はまだ食べてないのに、先に私達に食べさせるべきじゃないのと。兄弟はだれも行きたくなかったのです。自転車で行って帰って 10 分もかかったからです。」と彼女は笑いながら子供の頃の話を話してくれた。

当時、小椿は母の気持ちさえ分かっていなかった。しかし、日本に来てから二年目、「今思えば、小さい頃から、牧師様を愛する心を母は教えてくれました」と言った小椿は、自分のこの信仰の種が異国で芽生えることを想像もしていなかった。

9.2.1.2 日本留学へ

両親に可愛がられていた小椿は同年代の子よりすこし早熟だったが、そのおかげで小学校に入ってまもなく先生のアシスタントになれた。彼女は、先生に可愛がられ注目されると、ますます頑張るようになり、学校での成績もいつもトップだった。先生の誇りである小椿は、全生徒の憧れの存在だった。このように自信に満ちた小学校時代を終え、彼女は順調に地域で一番といわれる名門中学校に入るようになった。将来立派な大学生になることが彼女の夢だった。

しかし、この中学校は優秀な子ばかり集まっていたため、競争が激しかった。2、3 ヶ月たつと、彼女は先生の扱いの変化を敏感に感じた。「皆に注目されることになれたせいなのか、中学校で先生に注目されなくなるにつれて、自信がなくなり、話も段々できなくなってしまいました」。二年目になると、彼女は成績が急激に悪くなった。小椿は一人で泣く日が増え、段々暗くなった。

だれよりも早く逃げ出したいと思っていた中学校の学業がやっと終わった。大学への進学を諦めた彼女は、初等専門学校の道を選んだ。かつて難しく入りにくかった初等専門学校は、時代の変化に伴い、「皆大学に入りたいから、(私達の時から) 人気がなくなりました」。確かに中国で大学を卒業したら、必ず仕事につけられる時代は既に終わった。親は彼女に農業の手伝いをさせようとは思っていなかったため、彼女はほとんどの福建省の女の子と同じように、結婚する道しかなかった。この現実を目の当たりにした彼女は未来に絶望を感じ、勉強する気さえなくなった。どうやって学校での勉強を終わらせていたのか彼女はあまり覚えていないが、大学生になるのは永遠の夢でしかないことをただただ強く

感じ、いつの間にか自分が本当は勉強ができない子だと思えるようになった。

初等専門学校¹⁷⁾のコースが残すところ後半年となり、いい仕事を見つけれられる見込みのない未来を現実問題として考えないといけない時期になった。すぐにでもお見合い結婚しようかというところまで何回も考えた彼女は、自分の人生をどうやって前に進めたいのか大いに不安を抱いていた。悩んでいた小椿に、父は日本留学を勧めた。小椿の幼い頃、父は日本に行きたかった。この叶えられなかった夢を父は小椿に託したかったからだ。そして「周りの家庭には出国する人がいるが、うちだけだれもいなかったから、それを見ている父はまず私を選びました。勉強はできなくてもいいから、日本へ行かせて少しお金を稼がせたい」という現実的な理由もあった。しかし、父の考えに反して、故郷から離れて日本へ来たくなかった彼女は、留学の手続きをしながらも、ビザが下りないように毎日願った。

しかし、運命とは不思議なもので、手続きの途中で起きた一つの出来事が彼女の考えを変えた。ある日、父は家に帰ってきて小椿の日本留学を止めようとした。理由は日本へ行ってもバイトがないから、苦勞をするだけだとだれかから聞いたからだ。この父の話は彼女を刺激した。小椿の反抗心が働いたのだ。「お父さんは私を行かせたい時は、行かせるのに、行かせたくない時は、行かせない。それはいや！私は必ず行くよ。」と父に日本留学する決意を示した彼女は、留学のことで毎日のように父親と喧嘩をした。

ところが、留学の手続きは予想以上に面倒だった。パスポートを作る際などの様々な問題に対して彼女は一人でやらないといけなかった。無力感に襲われると彼女はよく母に不満を言ったり、泣いたりした。でも文字がわからない両親は何も手伝えずに心を痛めるだけだった。

半年もかかった手続きはぎりぎりですと終わった。しかし、だれもうれしくなかった。「うちはだれも日本へ来たことがないから、特に母は日本でバイトがないと聞いて、日本へ行かせたら、どうなるのかわからないとすごく心配して毎日泣いていました。でも、ここまで来たら、帰り道がないと母は分かっていました。学費にも手続きにもお金を使ったからです」と母も小椿も仕方なく泣くばかりだった。「母の性格は私と似ています。未来に不安ばかり感じます。うつになりがちタイプで笑うことが少なく泣くことが多いです。」

17) 初等専門学校: 高校の科目を基礎にして3年間で専門知識を学ぶという中国の中学校卒業後の進学を選択肢の一つである。昔中国では農村の子は初等専門学校に入ると都市部の戸籍を取得できた。それは一生肉体労働から離れられることを意味するもので、人生の一番の転機だとされていた。そのため、皆一生懸命頑張っていた。大学に入るには後二、三年かかるし、成績が優秀だとしても必ず入れる保証はなく、学費のことも考えると目前の進学先を確保したほうがよいというのがほとんどの人の見方で、長い間初等専門学校の合格点数は普通重点高校よりかなり高かった。しかし、近年、状況が段々変化し、大学を卒業する人が年々増えてきて、戸籍上の制限が緩和され、大都市以外の地域では政策によりお金で都市部の戸籍を買うことができる場所や農村部の戸籍を解除するところもでてきた。

昔からの伝統として、中学校を卒業すると、仕事をやらせて、家の生計を助けてもらう考えが農村の人には強かった。つまり、高学歴より仕事を確保することが目的だった。しかし、近年物質的な条件がよくなり、給料の格差が国内で広がっている影響もあって、彼女のように農村の人でも条件が許す限り学校に行かせる家庭が増えてきた。小椿の話によると、福建省の農村部で大学に通う人は男の子と比べると女の子のほうがまだ少ないのだという。

という。

いよいよ小椿の日本へ旅立つ日が来た。親戚の中で最初の出国者だから、皆揃って彼女を送ろうとした。しかし、チャーターした車には 9 人しか乗れなかった。母はひどい車酔いをする体質なのに、アモイまで彼女を見送りに来た。「お母さんのいとしい子。もし日本でなにか遭ったら、私はこっちで生きていけない。身体を大切にしてくれ」と最愛の母は彼女の手を握って見送った。母は身も世もなく泣いていたが、彼女はもう泣かなかった。出稼ぎの旅はきっと苦勞をするだろうと思ったが、その重い気持ちのどこかで小さな期待が湧いているのを彼女は感じた。

9.2.1.3 初めての日本留学

飛行機は南のアモイを後にして日本に向かっていく。約半年の緊張から解放された彼女は初めての飛行機、初めての一人旅をすこし新鮮に感じたが、その自分の気持ちをゆっくり味わうことはできなかった。「両親は私のために全てを投げ打った。両親の全ての貯金は自分のために使われている。両親の一切の心配も私にある。」と彼女は分かっていた。母の話も小椿の頭の中で何回も繰り返された。「お母さんの大切な可愛い子。お母さんは全てをかけているのよ」と。行く先の苦勞は承知の上だが、肉体的なストレス以上に精神的なストレスがどれほど耐えがたいかということが飛行機の中の彼女には全々思いつかなかった。

日本列島に近づき、迎えてくれる人がいるかどうか心配した彼女は、綺麗な島を見る余裕すらなかったが、同じ飛行機に乗っていた他の留学生のお陰で無事に学校にたどり着いた。日本生活の初日について小椿はこのように語った。「日本へ来ても、別に中国と違う感じはしませんでした。同じ学校の人皆福建省¹⁸⁾の人ですし、皆日本語を勉強しています。私は一週間遅れてきましたが、学校に着いたら、皆もう晩ご飯を作って私を待っていました。だから、日本へ来たという感覚は全然なくて、とても居心地よかったですよ」。このように小椿は 2003 年 10 月、留学生として日本での留学生生活を始めた。

「日本へ来て二日目に神様はもう私を見つけてくださったのです」と嬉しそうにこう言えるようになったのは一年後のことだった。当時、小椿は学校の寮まで伝道しに来た麗香のことを冷たい目で眺めていた。小椿は神様に奉仕するために日本へ来たのではないと、自分の来日目的がはっきり分かっていたからだ。邪教でないかと恐れていた小椿は「この人たちは何をやっているの？」と彼女に疑いの眼差しを向けていた。

今の教会に初めて訪ねて来たのはその後すぐの礼拝日だった。学校の先輩に連れられてきた小椿は、賛美歌を聞いて思わず涙をぼろぼろこぼしてしまった。麗香もこの教会にいた。当時副牧師（牧師の弟）もいた教会の雰囲気は非常に良かったという。教会の祈祷などの儀式は故郷のものとはかなり違って、様々な困惑を感じたが、賛美が好きな彼女は聖歌から喜びを感じ、「まるで自分に向けて歌っているように聞こえる」と思った。「私は賛美歌を歌えば歌うほど嬉しくなります。全ての歌が私のためのように聞こえます。初

¹⁸⁾ 小椿がいる日本語学校は経営者が福清人であり、福清の学生だけ募集しているので、学生たちの間で知り合いも多い。

めは一つの曲を丸覚えはできないけど、文を一つずつ覚えます。文を一つでも覚えたら歌います。」と彼女はよく言った。

ところが、日本へ来て友達に囲まれた日々は長くは続かなかった。バイトを始めてまもなく、学校とバイトだけで忙しい同期の皆はばらばらになり、だれも他人とは関わらなくなった。最初のバイトは料理屋で、彼女はそこで一年ぐらい働いた。料理屋のオーナーは中国人が嫌いだが、仕事がすごく忙しくてきついため、中国人しか残らない。日本語があまり分からなかった小椿はいつも怒られたり罵られたりしていた。お昼はそこで食器を洗ってから学校に行き、夜になるとまたそこに戻ってホールの仕事をする。学校からバイト先まで 20 分ほどの距離だが、毎日走っている彼女の自転車は止まることがなかった。

来日後半年ほど経ち、恋人と別れ、自立しないといけないと意識し始めた。「朝 5 時ごろ起きてから、夜 11 時まで、家に戻ると 12 時。毎日変わることはありません。朝まず教会へ行きます。それからバイトへ行きます。朝のバイトが二つあります。終わると学校に行きます。学校が終わるとバイトに戻るという毎日で、その間は 30 分しかないから、時間がとてもきついです。できるだけ時間通りに終わらないと、学校に間に合わなくなります」という一年目の彼女のスケジュールには、休みはわずかだった。「工場のバイト先で仕事をしているところで立ったまま寝てしまって、隣にいる人が私をじっと見ていた。5 分間もそのまま寝て、それでも起きられないぐらい疲れた」ということもあった。

9.2.1.4 暗い時期を乗り越える

① 後悔しかなかった一年目

来日一年目の彼女の記憶には、孤独、疲れ、涙、後悔しかなかった。中国でバイトを経験したことがまったくなかった小椿は三つのバイトを掛け持ちしていた。彼女は毎日パンばかり食べている自分のことを非常に可哀そうだと思い、毎日泣いていた。「神様よ、なぜ私を日本に來させたんですか？私は本当に疲れきってしまいました」と彼女は毎日イエス様に祈った。しかし、イエス様は何も答えてくれなかった。なぜ私は日本へ來たの？日本へ來てこんなたくさんの苦勞をしなければならぬのと彼女はよく思った。泣き疲れると母に電話をしてまた泣き、娘の痛みを感じる母も泣いてしまった。

職場で苛められ、心細くなると、彼女はよく中国語で賛美歌を歌った。賛美歌を歌うと自分が強くなったように感じたが、仕事が終わると一人で泣いてしまった。午前の食器洗いの時間は一時間だけだが、いつも一生懸命だった。ある日、仕事が非常に忙しくて食器を洗い終わると服も全部濡れてしまった。しかし彼女は社長にまた文句を言われた。「自分の仕事だけ見つめて社長を見ないようにして我慢したけど、とても悲しかったです。太っている社長は顔が丸く豊満な女の子が好きだから、私のことを嫌がっていることがよく分かりました。私が細すぎるからです。当時はもっと細かったんですよ」と小椿は言った。職場で食事が与えられない小椿は、一日中食事できずにパンばかり食べていたからだ。その日、非常に疲れた彼女は、そこで賛美歌を歌いだした。「神様よ、让我知道你的意，当我在黑暗中徘徊，让我知道你的意，让我知道你爱我」とずっと歌っていた。歌い終わると帰

らされたことを彼女ははっきり覚えている。

12時30分をすぎると、1時からの学校に間に合わないから、遅刻をしたくない彼女はいつも仕事が終わると、急いで学校に行った。食事できないから、お腹がいつも堪えられないくらい空いていた。社長は気分がよい時には時間通りに彼女を帰らせる時もあった。日々の疲れが溜まってきた彼女は、ある日、仕事が終わると、声も出せなくなっていた。廊下によりかかって立っていると、彼女は涙がボロボロ出てきて止まらなかった。

「声はもう出なかったんですが、私の天の父よ、私は本当に疲れたと言いました。涙が止まると、心に一つの声が響きました。『小椿、私はいつか間違ったことがあったか。私は間違ったことはなかったよ。あなたをずっと愛しているよ』と神様はそのように私におっしゃいました。私は泣き出しました。その時、私は大きな力を得ました。そして『神様、私はあなたのことを信じています。私は本当に疲れました。でもいじめられても怖がりません。』と神様に言いました。」と小椿は泣きながら、当時の話をしてくれた。

日本へ来て一年経った頃でも、まだ後悔する気持ちが強かった。「自分のことをめちゃくちゃ可哀そうに思いました。日本へ来て、自分が本当に可哀そうです。なぜ私をここにさせたの。なぜ私にこれほどの苦勞をさせたのと父母の文句ばかり言っていました。憎んでいたんじゃないけど、心の中では全部両親のせいにしていました」。18歳の女の子は、まだ両親に甘えたい年のはずなのに、寝ずに働いても返せない借金に付きまとわれている。この逃げられない運命に直面した彼女は、将来の夢をすでに心の底に埋めてしまったのだ。

② 愛を感じた教会

他の旬員と同じように新人だった小椿にも旬長がいた。小椿より半年前に来た旬長の女の子は学校も出身も彼女と同じで、もともとクリスチャンだ。よくチョコレートを買ってくれた。「私達はほぼ同じ年だから、彼女はよくいろんなおやつを買ってくれて、2人で一緒に聖書を読んだり、話をしたりしました。」と小椿は言った。しかし、自分を変える鍵になる李幹事のことを思い出すと、彼女は感無量だった。「李幹事が私に与えた影響は大きいんです。教会へ来て皆に祈ってもらいたい気持はあったけど、毎日10時間以上の仕事をして学校に行ってから、教会へ行く元気がありません。時間さえあれば、寝ることしか考えられなかったんです。でも、李幹事は諦めずに私に毎日電話をしてくれました。『小椿、最近はどうですか？小椿、皆待っているから教会へ来てみてね』と煩わしいほど言ってくれました。」いつも彼女を捕まえて聖書学習を促した李幹事に、彼女は応えないわけにはいかなかった。

「人間はだれでも同じかもしれないけど、自分に気を配ってくれる人のところに行きます。私は特にそんなタイプです。李幹事は朝鮮族の人にとっても厳しいけど、漢民族の子にはめちゃくちゃやさしいです。私は年が若いし、あの時、うちの学校から来た子は、私しか残っていなかったということもあったかもしれません。だから私に非常に優しくかったです。とても大切に接してくれていたから、李幹事にはとても感謝しています。」

彼女の学校は教会に近いから、伝道に誘われて、教会へ一度は足にむける人は少なくな

い。しかし、皆祝福祈祷に参加しても、バイトを見つけると来なくなる。「留学生の大きな問題の一つは、彼らの心が死んでしまうことです。未来に希望を持たずにお金という現実だけを見つめるようになることだと思います。特に福建省の留学生たちは、毎日バイトをしても借金を返せません。疲れている時に他の事を考える余裕があるはずがありません。私もそうでした。教会へ来る時間に休めたらいいのにとか思いましたよ。」と彼女はかつての自分の考えを素直に話してくれた。恋人との別れで小椿は自立意識が強くなったが、疲労に耐えられない時には結婚に逃げることや、日本語学校を卒業後、不法滞在してお金を貯めることも彼女は何回も考えた。

しかし教会と日々触れ合うことによって彼女は段々変わり始めた。そこで感動を覚えた小椿は、ある高熱の夜のことが忘れられない。その日、連日のバイトで疲れ果てた彼女は高熱を出してしまった。身体に異常を感じた彼女は、寮の人たちに電話をしたが、反応は冷たかった。一人ぼっちの彼女は、辛い思いをしながら、教会に助けを求めに来た。2階の礼拝室で寝てしまった小椿を見て、牧師夫婦は必死に看病してくれた。「なんでも上から持ってきてくださいましたよ。牧師様と師母様は、私のためになんでも持ってきてくださったのです」と彼女は何回も同じ言葉を繰り返した。

このように言葉の壁を越えて牧師夫婦の愛が彼女に伝わってきた。普段の生活では中国語ができない牧師と中国語しか喋れない留学生の間に言葉の交わりは少ないが、「いつも笑顔で私達の後ろに立って、私達の話の聞こうとしている」牧師の姿が彼女の心を暖めてくれたようだ。2003年には中国人留学生がいきなりたくさん教会に来て、夜になると礼拝堂でそのまま寝てしまう人が多くなった。朝の祈祷の邪魔になるが、牧師は彼らを起こすどころか、布団を持ってきて彼らにかけてあげていたという。「教会には韓国人や朝鮮民族の人が一杯いて、牧師様はかれらには厳しいけど、漢民族の子に対してはいつもやさしく見守ってくださいました。漢民族の子の中には言葉遣いや礼儀にあまり注意しない子もいるけど、牧師様は嫌がる顔を一度も見せませんでしたよ。牧師様は私達を子どものように見てくださっています。私達を言葉がまだはっきり話せない孫のように可愛がってくださっています。」と彼女はうれしそうに言った。

牧師のことを話すと彼女は止まらない。彼女は冗談まじりにこんなエピソードを話した。「礼拝堂に人が多く集まると、空気が悪くなります。夏になると、足の臭いがすごかったですよ。皆バイトからそのまま教会に来るから、匂いがすごかったです。扇風機は礼拝堂の後ろについているから、匂いが一番前でお話をする牧師様のところにまでがんがん届きます。それに気づいた先輩が、次の週に牧師様の足元に新しい扇風機を置いたけど、牧師様は匂いのことを何もおっしゃらなかったのよ」。

③ 暗い時期を乗り越えた

日々大変な思いをしていた小椿は段々神様の救いを感じるようになり、「彼が生きるからこそ、私は明日を迎えることができます」という賛美歌を歌うたびに感動してしまう。一年間の苦しみに耐えてきた彼女は変わり始めた。

「貴方たちは留学に来て、異国で愛をほしがる。しかし、日本で自分を愛してくれる人もいないし、関心を持ってくれる人もいない。寂しい思いをしているばかりで、それを言える相手さえもない」という牧師の話を聞いた小椿はよく自分のことを思い出し、周りの留学生が苦しんでいた昔の自分のように見えてきた。礼拝の時にいつも一番前の席に座り、ノートを取りながら、牧師の話を聞いていた小椿は、段々牧師の言うことがまるで自分に向けて話されているように聞こえてきた。その時、生まれて初めて言葉に飢えているような気がした。

夢もなく日々大変な生活をしている同期の皆も、希望を失い、パチンコに頼るようになったバイト先の留学生も、昔の自分を鏡のようにはっきり映していると小椿は強く感じた。彼らもきっと自分と同じように言葉を欲しがっている、愛をほしがっていると思った彼女の中にはある熱望が生まれ始めた。失った皆の希望を呼び戻そうと思うようになったのだ。その時、小椿の耳元に「伝道しなければいけない」というまるで神様のつぶやきのような声が一瞬聞こえたという。ちょうど彼女が日本へ来て一年になる頃だった。あの料理屋のバイトをやめた小椿は、すでに教会の近くで新しいバイトを始めていた。短い間に、彼女は十分の一を出すようになり、2004年8月に腕儀と並んで洗礼をうけた。「自分のことをとてもお馬鹿さんのように思いますよ。神様は私にやってほしいことを何もおっしゃらないのに、自分からやります。馬鹿のように十分の一を捧げ、馬鹿のようにこの教会に付いていきます。修練会では恵が受けられるから行きたいと思ったし、何かに参加しなさいといわれるとすぐ参加していました。」と、当時の自分をまるで馬鹿のように言ったが、「振り返ると、全ては神様の恵みだと発見しましたよ」と2006年5月のインタビューで小椿はうれしそうに話した。

8月にあった教会の二回目の修練会のほとんどを、彼女ははっきり思い出せないが、次のように語っている。「皆大きな恵を得ましたよ。この世界へ来るのはどれほど幸せなことかと。神様のために生きているあの皆の情熱、手を上げて祈ること、その全てを神様に感謝すべきです」。

伝道にますます熱心になった小椿はよく次のように自分の行動を説明する。「外の世界は本当に危ないですよ。周りを見たらすぐ分かります。人はどんな友達を作るかによって変わるもので、皆寂しくて友達がいないから、パチンコ好きな友達ができたら、パチンコをするようになるし、ホストのバイトをやる友達ができたら、そっちに行ってしまう。うちの店のおばさんのご主人はよくカジノに行きます。貯金の一千万円を全部つぎ込んで、まだ外で借金しています。いつかカジノで勝ったら辞めると言ってるけど、そんな簡単にやめられるはずはないでしょ。麻薬を吸うのと同じだと思います。おばさんを見たら、本当にかわいそうに思います。50過ぎなのに、いつも靴一足を買うお金さえ持っていません。でも、教会は違います。ここへ来る人は、悪くなれないんです」。彼女は、ゲーム遊びが大好きな旬員との付き合いに悩んでいた旬長に、「ついて行ってあげなさい」とよくすすめた。旬長がその旬員と仲良くなるのがまず大切だと思っていたからだ。

すでに暗い時期を乗り越えた小椿は、バイト先でよくいじめられた涙の日々をこう語っ

ていた。「今思うと、彼らに感謝しています。彼らによって私は成長しました。これほど訓練を受けられるところはないだろうと感じます。神様にすごく感謝しています。だけど、あの時、私はよく苛められて本当に苦しんでいました。でもあんなところで働いたからこそ、今はなにも怖くありませんよ」。

④ 新しい始まり

2004年10月30日は私が初めて教会へ行った日であり、小椿が青年3隊の隊長になった初日だった。彼女はこの日、新入生歓迎会の司会をした。皆に一人ずつ丁寧に声を掛けながら、話をする姿や輝いている彼女の目から、この細く小さい女の子はある力、ある感動を私に与えてくれた。私達の間には会話はなかったが、神様の誇りを彼女から感じた当時の私の気持ちは、時間が経った今ようやく分かるようになった。

新人がどんどん教会に来るようになった。伝道や青年隊の仕事に全身全霊を傾けている彼女の情熱を感じない人はいなかった。かつて「(教会へ来た頃)、人の前で立って話せる人じゃなかったし、なにを話したらいいのかも分からない。中国ではいつも他人に守られ、気を使ってもらうタイプ」だった女の子が、今では40人ぐらいの人を前に堂々と話せるようになった。旬員たちとの日々の接触で「わがままな時、どうしたらいいか分からない時、情熱的すぎた時、愛し方が分からない時」もよくあったが、この全てのことを通して、彼女は人の気持が一層分かるようになり、意志も強くなった。自分のことばかり考えていた昔のことを恥ずかしく感じ、日本へ来たことを初めて幸せに感じたという。「神様は私を変えようとしてわざとここへ呼びになったのかもしれませんが、これからも私をどんどん変えていこう」と小椿は思った。

李幹事や朝鮮民族の先輩は隊長になった小椿をずっと支えていた。人の心を読む機会が与えられた小椿は、「上に立つことの難しさ」を知り、牧師や李幹事のことを一層尊敬できるようになった。そして「旬員たちを理解するにはもっと知識と知恵が必要です」と思うようになった。「この教会で一番成長した人は小椿です」と言ったのは青年3隊の旬員の暁静だ。暁静はかつて隊長の小椿に「人を指導するには、自分が先に勉強しないといけない」と言ったことがある。向学心が強い暁静のことを小椿はずっと憧れるように見ていた。彼女が昔の自分によく似ていることにやっと気づいた小椿の中には、ある情熱が湧いていた。人には恥ずかしくて言えないが、彼女は神様にこのようにお願いをした。「神様が私にも勉強する心を下さるように」と。

9.2.1.5 変わりつつある小椿

① 日本語学校での勉強

約一年半いた日本語学校を卒業した時、自分の日本語は3級ぐらいのレベルだったと小椿は言った。遅刻はせず、先生によく従う彼女は、ずっといい子だった。バイトをやりすぎて学校に行くときよく寝てしまったが、起きたら一所懸命に勉強していた。しかし、そのような悪循環を繰り返したため、学校の勉強が大幅に遅れ、授業で分からないことも多か

ったが、無理やり付いていっていた。

「皆（日本語学校の留学生たち）レベルが違うけど、同じ教科書を使ってレッスンを受けてました。先生の授業の進度は速かったです。試験があるから、先生は止まらずにがんがん前に進んでいきましたが、私は一つもできずに後からついていきました。分からないことを質問したかったけど、時間もないし、日本語でもはっきり説明できないから、黙ってついていだけでした。皆一緒に卒業したように見えますが、結局私はなにもできませんでした。毎日人の後ろをついて走るだけだったからです。」

しかし、できなくても勉強を諦めるわけにはいかない。勉強に熱心な暁静を見てもそう思ったし、「女の子はもっと勉強すべきだ」という牧師の話もあったからだ。成績はよくないが大学に行きたいと、彼女は自分のことを可愛がってくれる先生に素直に話した。

2004年も例年同様、冬に入ると、留学生の間に進路のことが一番の話題になった。小椿は自分の実力を考慮して専門学校に進学することにし、三つの専門学校を受けたが、二つは落ちてしまった。もう一つは受かったが、このだれでも入れる学校に行くのかと思うと、彼女はすこし悲しく感じた。しかし、クリスマスの準備に忙しかった彼女は真剣に自分のことを考える時間がなかった。12月25日、全世界のクリスチャンが期待している祝福の日がついにやって来た。教会のパーティーは盛大に行なわれ、大成功だった。その後の聖歌隊の食事会も色々な話題で盛り上がったが、一人静かにしていた小椿のことにはだれも気づいていなかった。その日の記念写真を見れば、他の人の笑顔の中に挟まれた彼女の笑顔が不自然だったことがすぐわかる。

② 専門学校に入ること

3月末、小椿はW専門学校に進学できた。専門学校の決定から始まった一つ一つの事件には、全て神様の意図があるようで、彼女は自分の運命を不思議に感じた。「この世の神様は逆に働く神様です（中国語では「相反作功的神」。つまり神様は欲望を捨てた人の願望を叶える）。彼のことを愛する人であれば、けっしてだれも捨てないのです」と小椿はよく言う。まるで神様に祝福されているかのような自分の人生を語るたびに、彼女はいつも感謝の言葉が止まらない。

【専門学校の選択】

当時の彼女にとって、W専門学校に行くことになったのは偶然で意外なことに過ぎなかった。受かりやすいY校に行くかどうか迷っていたところ、4、5万の奨学金がついているU校を知った彼女は、そちらに応募してみたい気持ちになった。締め切りの日にお金を出そうとして日本語学校に行った彼女は担任の先生に会った。「大学に行きたいんじゃないの？Y校に行ったら、勉強が絶対できないから、行ったら大学に行けなくなるのよ。」と先生は彼女がY校に行くことを精いっぱい止めようとした。自分のために普段日本人が言わないことまで直接言ってくれた先生の気持ちを強く感じた小椿は、U校の事が言えずに、

その時先生に勧められた W 校に応募した。

そこなら一年勉強をしたら大学に行けると先生は言ったが、その学校のことについて、勉強する時間が長くてバイトができないという以外に彼女は何も知らなかった。「応募の締め切りはその日の午後 2 時だから、もう時間がないと思っていた時、ちょうどある女の子がその学校の願書を持っているのが分かりました。先生はそれをコピーしてくれて目の前で私に記入させました。Y 校の入学金の締め切りは一週間後だから、先生は封筒に太字でその締め切り日までに是非返事をくださいとまで書いてくれました」。ぎりぎりになって彼女は願書を出したが、その後行われた試験のうち、面接は割とよくできたが、筆記が難しくて全然できなかったという。しかし神様の導きでもあるかのように彼女はその学校に合格した。

【クラスの選択】

2005 年の四月は彼女にとって、新しいスタートだった。新人を迎えるために準備や伝道が始まり、教会の皆が忙しかった。教会に出入りする人が多くなり、小椿は皆に非常に丁寧に挨拶した。メンバーが増えると、人の顔を覚えるだけでも大変なことだが、彼女はきちんと全員の名前を覚えた。旬長たちは彼女に感心したという気持ちを話し、彼女のことをよく褒めていた。青年三隊の集まりや様々な交流会などで、彼女の姿をみない所はなく、いつでも彼女は元気で積極的だった。バイトも学校も忙しいが、教会のことは何でも喜んでやっていた。一所懸命な彼女のことを不思議に思い、直接彼女に聞いた人もいたが、これはイエス様が下さった力だよと小椿はいつも微笑んで答えた。自分のやっていることの全てが神様の喜びで神様が自分に与えた訓練だと彼女自身が思っているからだ。

新しい一年が始まったと強く感じる小椿はやる気に満ち溢れていた。専門学校に入った日から、彼女は「大学」と「奨学金」二つの目標に向けて勉強に努めようと決心した。この学校は前の日本語学校と違い、日本語レベルのクラス分けが非常に細かい。ゼロからやり直したかった小椿は、一番進度が遅いクラスを選び、このだれも来たくないクラスで新しいスタートを切った。

このクラスの一番の発見と言えば、確かに遅いということだった。蝸牛のように、隣のクラスは既に何頁も進んでいるのに、こちらはまだ同じところに止まったままの状況だった。何回説明してもわからない人がいるからだ。それで何人かの学生はクラスを変えたが、小椿はそこで頑張り続けた。先生の繰り返しを確かにくどく感じたが、そのおかげで日本語を一つ一つしっかり覚えられたという。なにより一番のメリットは、たとえ分からないところがあっても、また繰り返してくれるからついていけなくなるのが絶対ないことだったと彼女はよく言う。

「人間は皆同じだけど、他人に言われなくても、できないことにコンプレックスを感じるでしょ。学校でもバイト先でもいつも劣等感を感じ、日本語が分からないから、人と話もしたくありませんでした。以前は。」と言った彼女は、ここで一つできると自信がつき、一つ分かるともっと知りたくなり、勉強に興味が湧いてきた。勉強に熱心ではない学生がほとんどのクラスでは、いつもクラスの一番前の席に座る小椿が先生の注目の的となり、

授業が終わっても先生は、彼女の質問にいつも熱心に答えてくれた。「勉強は必ず一番前に座らないとだめだと思います。以前はいつも一番後ろに座っていてバイトで疲れると寝てしまっていたから、なにも頭に入ってきませんでした。一番前の席に座ると、怠けたら先生に見られて注意されるから、頑張れます。今の私は勉強しようという気持ちがあります。授業中に目を大きく丸くして勉強しようとしています」。

私（筆者）が初めて小椿と個人的に話をしたのは、この時期の前後のことだったと思う。教会で彼女と知り合ってから、既に半年になっていた。部属活動が終わったある初夏の夜、3階では皆食事が終わり、彼女がキッチンの片付けをしていた。私が暁静と話していると、彼女が話し掛けてきた。「暁静ちゃんは偉いですね。私は彼女から色々なことを学びましたよ。私は国内にいた時にはだれにも注目されない暗い人でした。注目されないと段々心が死んでしまうタイプの人だから」。小椿は片付けが終わると、またこちらのテーブルに来て嬉しそうに私にこんな話をした。「うちのクラスはね、勉強が苦手な学校にも来ない子が多いですけど、よく勉強している女の子が一人います。私はその子を今目標にしています」。その子は大学に落ちたが、日本語が上手でよく努力しているらしい。ひそかにその子を目標にした小椿は、だんだん先生の進度に付いていけるようになり、この専門学校もこのクラスも自分に一番合っていると思った。

③ 朝の祈禱を理解したい

学校で落ち着いて勉強できるようになった小椿は、もう一つの願望を持つようになった。朝の祈禱に参加したい、牧師の話を理解したいという願望だった。教会に来てからの一年間、彼女は牧師と話がずっとできなかったことを恥ずかしく思ったし、朝のバイトで祈禱に参加できなかったこともずっと残念に思っていたからだ。2005年5月頃、彼女は一つの決意をし、朝のバイトをやめて祈禱に参加すると牧師に話した。「バイトをやめたら、どうやって生活するの？借金もまだあるし。」と牧師は彼女を止めようとしたが、小椿は牧師の言うことを聞かなかった。バイトをやめた彼女は祈禱に参加し始めたが、牧師の日本語が全然分からなかった。皆普段祈禱の後には部屋に戻り、また一時間寝てから学校に行くが、彼女はその一時間を利用して日本語の聖書を勉強し始めた。

「私は日本語で聞きたい。神様、聞いて分かるように、私に知恵を下さい。」と小椿は毎朝祈った。毎朝聖書を一章と自分で決めて、彼女は日本語を読んでから中国語を読んだ。最初は、彼女は牧師の話の中から拾った片言の日本語から、聖書の物語を推測してみることしかできなかった。一週間が過ぎ、二週間が経ったが、まだ分からなかった。しかし、三週間、四週間が経つと、牧師の話がゆっくりと少しずつ分かるようになった。単語が多くなると覚えられないが、一日10個だけ紙に書いて覚える。どうしても覚えられなかったものを寝る前にもう一回覚えてみる。この日本語学習計画を実施して半年も経たないうちに、彼女は牧師の話をほとんど聞きとれるようになり、分からないところでも推測できるようになった。ただ20日間ほどの勉強に過ぎなかったが、「神様は私の人生を変えてくださった。私に自信を持たせてくださって、この留学生が一杯いる日本で違う人生をくださ

った」と彼女は思った。

小椿は日本語が段々話せるようになって、自信も一層付いたようだった。牧師との話も、毎週の報告でも、準備部での話し合いでも彼女は頑張って日本語で話していた。2005年6月に入ると、準備部（修練会のために設立した部）の仕事がより一層忙しくなり、毎週聖歌練習に参加できなくなったが、時間さえあれば、小椿は聖歌隊に顔を出した。普段の伝道や旬員の育成に力を入れている小椿は学校での勉強も怠けず頑張っていた。自分の歩んできた道を振り返ると、小椿は福建からの留学生のことを可哀そうに思い、彼らへの伝道に一層力を入れるようになった。

しかし、どんなことでも、全てうまく行くことは決してない。旬長たちと意見が食い違う時もよくあった。いつも牧師の話のままに行動する彼女が旬長の宋さんにひどく批判されるのを、私は何回もこの目で見た。教会ではよく上の人のお話に順従になりなさいと言われたが、「旬長が聖書の説明を間違ったら、すぐ訂正すべきです」と彼女は金幹事の話に異議を唱えた時もあった。日々の摩擦の中で、「人に言われると傷つきやすかった」小椿は強くなった。周りの人たちにちやほやされないと生きていけない昔の自分から脱皮したと彼女は感じた。借金を返さずに教会の仕事に一生懸命になる彼女は、取り付かれてしまったと福建の友達に言われたこともあった。しかし皆に今は馬鹿だとしか見られないが、いつか自分のことを理解してくれるだろうと信じていた。

④ 2005年の修練会

2005年8月の修練会のテーマは「ビジョン」だった。困難な現実を負けて夢と希望を失ってしまった留学生の問題を感じ、青年は大きな夢を抱いてほしいという牧師の期待が含まれているからだとして小椿は解釈した。このテーマにそって準備部は着る服から、泊まるどころや連日の活動などまで時間をかけて計画していた。聖歌隊も聖劇隊もそれぞれ自作自演のものを披露しようと練習が頻繁に行われた。修練会の前日の礼拝日に礼拝が終わると、牧師は皆にこの半年間どんなことを勉強したのかというテーマで振り返ってもらった。初めて設立した準備部には日本、中国、韓国からの若者がいた。彼らは今まで言葉や文化の違いに様々な壁を感じ、計画をうまくまとめられず悩んでいたことなどを泣きながら話したが、このことを通して大きな成長を感じたと皆最後に言った。

翌日はすっきりした青空で、幹部達は朝早くから修練会への出発の準備に忙しかった。既に大きなリムジンバスが五台外で待っていた。Tシャツに着替え、スケジュールが入っているきれいにデザインされた名札をかけると、皆の顔がすこし興奮したように見えた。13隊に分けられた隊員には、韓国人、中国人、日本人が混ざっていた。各バスにも三カ国のメンバーがいるから、隊長以外に二人の担当者も付いていて、朝食を配る以外に通訳や車内活動を考えたりしていた。小椿と鄭は私が乗るバスの担当だった。もともと車酔いがひどい小椿は途中で気分が悪くなり、少し休んだが、すこしよくなるとすぐ人の面倒を見ていた。そのおかげで目的地に着くまでに、車内の皆は親近感を感じ、友だちになった。

韓国やアメリカからの牧師もいたため、修練会の13ある講座は日本語だけではなく、

聞く側の事も考慮して、講座ごとに通訳も付いており、小椿は日本語同時通訳の担当の一人だった。同じ隊ではないため、彼女のことをあまり注意深く見ることができなかったが、最後の祈祷会でみた彼女の涙を流しながらの悲鳴の祈りが非常に印象深い記憶となった。

忘れがたい8月がすぎ、9月に入ると一週間の神学院があり、その後は伝道の時期に入った。修練会で洗礼を受けた青年たちが日々変化を見せる一方、教会には毎週新しい留学生が来た。中でも福建省の子が多かった。彼らを丁寧に案内している小椿の姿があちらこちらで見られた。バイトを探したい、部屋を探したいという声に彼女は精一杯答えようとした。10月の青年隊の集まりで、各旬の交流時間に、ある女の子がバイトが見つからず将来に不安を感じ、「父母のところに戻りたい。帰国したい」と言いながら涙を流していた。彼女を慰めていたのは旬長の椀儀だった。椀儀は自分のことだけではなく、小椿のことまで例としてあげた。「ほら、小椿を見て、彼女に初めて会った時は暗い子だなと思ったけど…」すると聞いていた女の子は途中で涙を拭いて、前にいる小椿を見つめて、「本当ですか、そんなふうに見えませんね。」と不思議そうに言った。そばに座っていた私も驚いた。小椿にも暗い時期があったことを初めて聞いたからだ。一ヶ月後のある晩、私は礼拝堂で店の接客のマニュアルを真剣に読んでいた彼女に会った。敬語が読めないと彼女は言って私に読み方を聞いた。皆のおかげで彼女はある有名な和食屋でバイトを見つけたそうだ。給料が高いこの和食屋はマナーが厳しく外国人の採用は彼女が初めてだったらしい。彼女は仕事もうまくいくかどうかを心配しながらも、「この神様がお与え下さった機会を大切にしよう」という頑張る意欲も見せた。

暁静が「綺麗な光景を見た」と言ったのはほぼ同じ時期のことだった。小椿自身は全く覚えていないようだったが、涙が止まらない新人の鼻水を自分の手で拭いた小椿を見て、暁静は確かに感動を覚えたのだ。

⑤ 2005年のクリスマスまで

新人を迎える運動会は11月の教会の大きなイベントだ。計画から実施まで教会の幹部達は準備に忙しかった。運動会当日、私は車を待ちながら福建省の留学生達と話ができた。18歳前後の彼らの澄んだ目と純粋な顔を見れば、まだ苦勞を知らないようだと私は思った。「小椿姉さんはすごく私たちの面倒を見てくれたよ」と彼らは皆小椿のことを知っていた。彼らの中にはスポーツだけではなく楽器や歌に興味がある人が多かったらしい。その後聖歌隊や聖劇部に入り、積極的に教会活動に参加する彼らの笑顔がよく目に入った。

【青年隊の集まり】

12月第一週目の日曜日、例の各青年隊の集まりでは、小椿は、この一年間を振り返ってずっと福建の留学生のことだけを考えてきた自分を深く反省し、周りに理解されなくて辛かった時も、疲れて隊長の責任から逃げ出そうと考えた時もあったが、この道を選んだ自分をちっとも後悔していないと皆に告白した。最後に彼女は福建の子にもっと関心を持ってほしいと皆に呼びかけながら、「最近友人は私のことをすこし理解してくれるようになっ

た」ということをうれしそうに話した。

その日、旬長と旬員の聖書学習時間には、私は旬員が来なかった宋玉さんと勉強することになった。私たち二人が信仰をどこまで持ったら受洗ができるかということ議論しているところへ、各グループを見回っていた小椿が来た。すこし黙って聞いていた彼女は、私達の真ん中に入って、信仰がない人の乱れた生活について色々話してくれた。「私は高校の友達にまだ恋人がいないことをよく笑われます。彼らによくこのように言われました。『小椿、お前のような単純な人はもういないよ。お前は本当に馬鹿だよ。今の社会がどのように変わったのか知らないよね』と。恋愛経験を積んで金持ちと付き合うことを狙うのはまだ理解できるけど、結婚してくれなくてもいいとまで考えるのはとても受け入れられません。」と彼女は拝金主義の若者の考えを悲しそうに嘆いた。私は驚いて宋さんに聞くと、自分の友達の間でも「恋人は恋人、妻は妻、愛人は愛人」という考えが流行っていると彼は教えてくれた。世代の差を感じた私は正直ショックを受けた。

彼らは信仰がないから自分が罪を犯していることを知らないのだと、信仰を選ぶこの道の正しさを小椿は繰り返し話してくれた。「牧師のおっしゃるとおり、女の子とでも、もっと勉強すべきです。以前の私は友達と同じ考えでした。金持ちを捕まえて楽な生活を送ろうと思っていました。でも、よく考えたら、運よく金持ちのお嫁さんになってもいつ捨てられるか分からないでしょ。友人の何人かはもう結婚して子供もできたけど、私は全然うらやましくありません。人生ってもっと有意義なことがあると分かったからです。宋さんは「彼女の言ったのは牧師の言ったことと全く同じだ」と自分のアイディアがない彼女のことを厳しく指摘した。しかし、神様に一途な小椿のことを思うと、私の胸は熱くなった。

【クリスマスの夜】

12月に入ると、聖劇部や聖歌隊の練習が頻繁に行われるようになった。二十人もいる聖歌隊では小椿はあまり目立たなかったが、いつも遅れずに聖歌隊の練習に参加していた。クリスマスが近づくと、教会はわくわくするような雰囲気溢れる。12月中旬の日曜の夜、聖歌練習後、部屋に小椿、小芳、私ともう一人の10月から来た福建の男の子が残った。小椿は一人で静かに分厚い『マザー・テレサ』¹⁹⁾伝記を出して読もうとした。「日本語の本ですね。読めますか」と隣に座っている男の子が不思議そうに彼女に聞くと「読めますよ」と彼女はうれしそうに答えた。その後小芳が、暁静が最近受験のためにバイトをやめたいと言っていることを話し出したら、「彼女にすぐやめないように伝えてね。すぐやめたら、あとの人は信頼されにくいから、よくないと思う。」と小椿は言い、教会に新年度のシステム変更があることを教えてくれた。来年彼女は隊長ではなくなるが、暁静が旬長に戻るのを楽しみにしているようだった。

いよいよクリスマスの夜を迎えた。礼拝堂は人が多すぎて座れないぐらいだった。今ま

¹⁹⁾ マザー・テレサ (1910～1997) (愛と献身の生涯。キリストを信じ、困った人々を救うことに生涯をかけた敬虔な信徒。1979年ノーベル平和賞受賞。)

でとは違い、今年は 8 月に受洗した日本人の青年が一人加わり、日本、中国、韓国の三カ国語の司会だった。十分な準備をしてきた各部の出し物は皆素晴らしく、観衆の拍手と笑いが止まらなかった。韓国聖劇部の演劇²⁰は特に目を引くものがあった。その日本語のセリフには大阪弁も入っていて、皆の笑いを誘った。日本語が分からない人のそばにはそれぞれ同時通訳がついていた。福建の若い子たちに通訳をしていたのは小椿だった。後ろで立っていた私は耳を傾けて聞いていたが、彼女の通訳は素人だとは思えないくらい流暢だった。

クリスマスの夜は寒かったが、歌や舞台を満喫し、更にプレゼントをもらった皆は満面の笑みだった。聖歌隊と聖劇部を祝う食事会が小霊の家で行なわれるので、皆一緒に駅に向かって行った。歩きながら、小椿は幸せそうにこんな話をした。「今日はとても嬉しい。暁静の旬長に戻って、当時彼女に応えられなかった旬長（私）の愛をたっぷり与えるチャンスが神様はくださった。それからもう一つの最大の祝福を神様はくださったよ。私は旬員陳さんへのプレゼントを準備して彼がクリスマスに来るようにずっと祈ってきた。そうしたら彼は久しぶりに今日教会に来たのよ。しかも私と海燕それぞれにマフラーのプレゼントを買ってきてくれたなんて信じられないでしょ。」とマフラーを見せてくれた小椿は幸せで一杯の表情だった。

9.2.1.6 専門学校での二年目

① 二年半ぶりの帰国

2006 年に入り、日本の新年が過ぎた後、教会では春節のムードが高まった。帰国できなかった留学生は春節の夜に皆集まって、中国の春節番組を見ながら、約千個もの餃子を食べってしまった。進学のこと皆が慌てていた中、小椿も大学への進学や編入などを考えたようだが、最後にはもう一年専門学校で勉強することにした。「今の学校は自分に一番合っているから、ここですこし力を付けたら、大学に入っても楽になる」と彼女は自分の考えを話してくれた。決意をした彼女はすっきりして二年半ぶりに帰国した。そして二週間後、彼女は元気に大阪に戻ってきた。

故郷の教会で彼女は日本での自分の変化を示し、もっと夢がある生き方を皆に勧めたようだ。家族のことを話し出すと、彼女の話は止まらなかった。弟は小さい頃から物を盗む癖があり、手にあまったお母さんは彼のことを諦めてしまったくらいだったが、このような弟が今まともに店を開き、姉の小椿の話に従って教会に十分の一を出すようになったらしい。妹はもともといい子だから、いい大学に進学できるかどうかということ以外に心配することが何もない。両親は借金のこと不安を感じたが、久しぶりに娘の元気な顔を見て何も言えなかったそうだ。小椿は母に一万円をあげたが、それをもった母は泣いてしまった。小椿は母の手料理を久しぶりに食べて幸せを一杯に感じた。朝一番早く起きて家

²⁰ ある男の子が才能がないことで村の人にいじめられ、皆の目が気になって家さえも出られなくなったが、村の外のあるお爺さんとの出会いが男の子の運命を変えたというストーリーだった。

の掃除をやり出した彼女のことを兄弟は「お姉さんは掃除が大嫌いだったのに」と言いながら、姉の後ろについて手伝ったりしてくれた。同期の皆との再会でも小椿の変化が話題を呼んだようだ。卒業の文集を開いてみた小椿はその中に書かれた暗い子のことを自分のことだとは思えなかったと笑いながら言った。

② 牧師になりたい

寒さの中で春が大阪にやってきて、教会はまた新学期の準備や伝道などで賑わう時期を迎えた。青年隊は3隊から10隊になり、各グループの人数は10人ほどに抑えられ、聖書学習などの集まりがより管理しやすくなった。牧師はいきなり隊長から平句長になった小椿のことを心配して彼女と話し合った。彼女は句長から努力することが自分への訓練だと思い、前向きに頑張ろうと考えた。4月のある夜、中保祈祷会後の晩御飯が終わり、私たち二人は一緒にキッチンの手伝いをした。その後、小椿は牧師になりたいが、知識不足を感じるということを話してくれた。「うちの牧師様のような牧師になりたいけど、自分がなにも分からなかったら人を導くことなんて考えられないから、今の自分のレベルではとても無理」と。日本語が読めるようになると、彼女は聖書だけではなく様々な本を読みたくなり、大阪市立図書館をよく利用するようになった。聖書の影響もあり、小椿は歴史と伝記を面白く感じ、色々な本を借りて読んでいた。しかし、これからの大学受験でどのような専門を選んだら、人の心がよりよく理解でき、現代のことを知ることができるのか、彼女自身まだはっきり分かっていなかった。

次の日曜日、私は句長と句員の交流時間に暁静に引き留められて小椿と一緒に話をした。暁静は最近バイト先の間人間関係に悩んでいると私に何度も言った。小椿は自分のことを例に出し、自分から行動したら、周囲の見方を変えられると言って彼女にヒントをあげようとした。「うちの店は男の子が多くて、皆掃除が嫌いな。床が汚いのに、見ても見ないふりをしているのよ。最近私は掃除が好きになってバイトの終わりまでまだ時間があるから、モップで床を拭いていた。それを見た店長は初めは何も言わなかったけど、数日後すごく喜んでくれて、『男の子でさえやりたくないのにお前はよくやってくれた。お前一人で男四人分の仕事がやれるね』と言ってくれたの。私はうれしかった。だれでも同じだと思うけど、人に認められるとうれしいからね。私は特にそんなタイプの人で、認められるとより頑張れる。部屋を一つ一つ全部モップで拭くと、めっちゃ疲れる。だけど、きれいになった部屋を見て心もきれいになったような気がするし、なにより皆も段々掃除してくれるようになったのを見ると、これ以上うれしいことはないよ。だから、言う前にまず自らやる。牧師様がよくおっしゃることだけだ。」

小椿の話に暁静はいつも「正しい所もあるけど…」という賛否両論の態度だった。しかし、小椿の信仰について、暁静の言ったことは忘れられない。「彼女にはある不思議な力があるようです。だれに何を言われても、一心に神様のことだけ考えています。借金はまだ返せていないけど、神様に一所懸命奉仕しています。彼女は純粋に神様を喜ばせようとしている人です」。同じ日のことだが、今年小椿は奨学金がもらえるそうだと3階の人たちが

わいわい話していた。それを聞いた暁静は「彼女の番になるのは当然よ」と言った。教会に来た年配の人たちは小椿のことを知り、「留学生は偉いね。外国で信仰生活を送って、ただでさえ生活にも困っているのに、きちんと 10 分の 1 を出すなんて本当に信じられない」と牧師に話した。

③ 残されたパン

未来に色々な選択肢がある中、なぜ彼女は牧師になりたくなかったのか、私は不思議に思い、ついに彼女にインタビューする決心をした。彼女は迷わず快諾してくれた。インタビューは一週間後に行なった。お茶やパンを注文して席に座り、すこし雑談をした。留学生活について話してほしいことは事前に伝えたが、研究の目的をもうすこし分かりやすく説明するため、再履修生への理解と支援に関する研究のレジюме資料を彼女に見せた。レジюмеを読みだした彼女の顔は非常に真剣だった。

彼女は「日本人の先生は私達のことを分かっていません。特に中国からの留学生はレベルも皆それぞれ違うし、個人的な事情も違うから、先生は確かに教壇の上で一所懸命に教えているけど、下の学生は付いていけるかどうか、どのような状態になっているのかあまりわからないようです」と言い、自分が日本語学校で何も勉強できなかったことや、なぜ専門学校が一番進度が遅いクラスを選んだかということから話をしてくれた。今のクラスには有名な大学に行きたい男の子がいるが、遅いクラスのスピードが希望に合わないので、学校に来ないで独学しているらしい。この子のことから小椿は、学校が有名かどうかということより、自分のレベルに合っているかどうかということが重要なのだと強調した。「一つでも分かると自信が湧いてくるから、私はここで少しずつ進歩しています。一年目の第 1 学期の中間テストで二つの科目が 2 だった以外は他の科目は全部 1 を取りました。一年目の学期末の試験では全部 1 で、第 2 学期末の試験も全部 1 でした。だから、今年は 67 万円の奨学金がもらえるはずですよ」ということで、彼女は勉強の自信を取り戻し、成績も上がってきたようだった。

小椿は「失敗を怖がらず頑張ってみることが大事だと牧師様はよくおっしゃいます。彼ら（他の留学生）はすごく疲れてしまってこの現実にもう何も期待をしていません。お金を唯一の希望として考えています。彼らの生活と言ったら、毎日深夜のバイトを繰り返すだけです。同級生の皆は奨学金を申請する勇氣さえもありません。生活というのはそういうものではないのに、彼らに教える人がいません。福建からの人の中にも大きな夢を持っている人がいて、大企業家になりたいなりたいとよく言うけど、あまり勉強していません。夢も重要だけど、日々の努力も重要だということが彼らには分からないからです。」と話し、教えてくれる人がいない留学生を可哀そうに感じたと言った。

牧師の教えを心に刻んだ小椿は、一步一步努力していた。「専門学校にいと自暴自棄になる人が多いです。でも、今専門学校にいても、私はゴミじゃないと思う。専門学校にいるから勝手に生きていてもかまわないのではなく、今後私もいい大学を受けようと思っています」。小椿は自分が奨学金がもらえることを聞いた同級生たちは皆驚いたとうれしそう

に言った。彼女は前にも奨学金を 4 回ぐらい申請したが、全部だめだった。日本語能力試験の 2 級しか持っていないのに、奨学金をもらえるなんて本人でもありえないことだと思ったのだ。

実際、2006 年新入生入学式で小椿がスピーチしたことがその理由だとは皆は知らなかった。学生課の先生に頼まれ、喜んで引き受けた小椿は、スピーチで日本へ来て後悔していたことや、日本へ来なかったら変われなかったことなどを素直に語り、一度だけの人生を有意義に過ごそうと考え直させてくれた日本留学に感謝すると最後に話した。聞いた人々は皆感動し、ある先生は涙を流したそうだ。この学生課の先生がちょうど奨学金を担当していたことや、新校長が成績より自分の考え方をしっかり持つ学生を育成しようという方針を打ち出したこともあったのかもしれない。今回の奨学金は彼女に与えることになったことを先生は事前に電話で小椿に知らせた。偶然のようだが、神様の導きだと小椿は感じた。演説原稿の多くが牧師のよく言うことだったし、もともと先生は他の何人かに頼んだが断られたから、自分のところに回ってきたんだと彼女は恥ずかしそうに言った。

留學生活の初めの頃については、彼女は涙を流しながら、その暗い時期の話の色々してくれた。しかし当時彼女をよくいじめた料理長のことを彼女はこのように語った。「私は今は彼のことをほとんど忘れてしまってるで遠い昔の夢のようです。本当に神様に感謝しています。当時受けた心の傷を癒してくれたからです。そして彼ら（料理長たち）にも感謝しています。彼らのお陰で私は成長して強くなったからです」。

以前のバイト先は食事をくれなかったが、今のバイト先は学校にも教会にも近くて、皆食事をくれる。特に朝の喫茶店の店長のお婆さんはいつも「もっと食べなさい、もっと食べなさい」と言って彼女にたくさん食べさせてくれる。「ほら、私は最近太ったでしょ」と小椿は涙を拭いて笑った。彼女の日本語も「大阪に十年ぐらい住んだ人のようだ」とバイト先の人によくほめられるそうだ。

ますます学習意欲が高まった小椿は、何でもできたらいつか役に立つだろうと考え、今色々勉強している。小さい頃、豎琴のけいこを止めたことや、教会へ来てピアノを習いたかったが、始めなかったことを後悔しているようだ。最近、牧師は皆にパソコンの勉強を勧め、小椿も頑張っている。たまには疲れて諦めなくなるが、彼女はよく海燕のことを思い出し、自分を励ましている。海燕は家の事情で、非常に疲れているが、強靱な意志を持っている。「彼女はお金がないけど、パソコンを買って自分で勉強しています。彼女の勉強しようという決意は本当にすごいです。彼女は『どうしても勉強したい、最後まで勉強したい。他の人に憧れる必要はない。今はできないけど、きっとできるようになる』と言っています」と小椿は海燕の話を中心に刻んでいるかのように話した。

話しているうちに 6 時を過ぎ、バイト先から電話が入ってきた。小椿は注文したパンを残して資料を丁寧に鞆に入れ、急いでバイトに向かっていた。彼女の姿が見えなくなってからも、私は彼女の最後の話がしばらく耳に残っていた。「今の私は学校で勉強できること以上に幸せな事はないと思っています。一、二年あれば、私は変われますよ。博士になることは難しいかもしれないけど、少なくとも修士までは行きたいです」。

④ 大学に進学へ

2006年6月、『草原』の電子版が教会のホームページに公開された。そこには投稿が多く豊かな内容が満載されている。教会ではその印刷物を手に持って楽しそうに読む人が多かった。礼拝日の晩御飯後、キッチンの片づけを終えた小椿は、掲示板に掛けてあった『草原』を羨ましそうに見ながら、「私もいつか日本語で『草原』に投稿できたらいいな」と呟いた。「直してあげるから、書いてみたら。」とそばにいる私は彼女に勧めた。彼女は微笑んで何も答えなかったが、最近はずっと日記を日本語で書いていると言った。学校の授業で書くことも面白くなってきたそうだ。先生がいつもテーマを出し、学生は皆グループで話し合ってから作文を書く。お互いに意見の違いを認めることが前提になっているから、皆自由に大胆に発言できるところが非常に心地よく感じるという。「よく考えたら、今の教会も学校も自分に一番合っていると思います。牧師様が博士だったら、牧師様のおっしゃることが勉強のできない私達には分からなかったし、学校が国立だったら、絶対ついていけなかったから」と彼女は微笑んで独り言のように言った。

数日後、噂によると彼女は三日間も断食して奨学金の半分を献金したそうだ。7月のある晩、彼女は公立大学に行きたいという考えを私に話した。彼女の挑戦したいという気持ちを全力で応援したいと思い、私は学校の資料を調べてあげると約束した。その後2006年8月の修練会の前日、彼女に階段のところで会ったが、彼女の顔色は非常に悪かった。

11月に小椿がD大学経済部の編入試験を受けることにしたと聞いて、私はまだ彼女に公立大学の資料を渡していない自分のことを恥ずかしく感じた。二週間後、「お姉さん、私はこの学校に行きますわ。この一ヶ月一生懸命頑張って、もう力を出し尽くしてしまった気がするから」と試験に受かった小椿は言った。私はすこし残念に思ったが、彼女の疲れきった顔を見て何もいえなかった。留学生の中で経営を学んでいる人は多いが、数学と英語の要求が高いため、経済を学んでいる人は実は少ない。今回の試験は彼女の予想と違い、非常に厳しかった。彼女は最初この学校を眼中におかなかったから馬鹿だったと自分を笑った。「自分の力でいけると考えた私が間違っていました。これは自分の力じゃないんですよ。神様が力をくださらなかつたら、受かることはなかったでしょう。願書を出した時のことも同じです。崔さんが夜一時まで成績表を作ってくれなかったら、私はあの学校に応募することすら諦めてしまっていたでしょう」と彼女は受かったことを幸運に感じ、そこでよく勉強しようと決心した。

大学が早く決まると、彼女はすこし安心した。ある日、小椿は学校で他の学生の成績表作りを手伝ったことで先生にひどく叱られ、泣いてしまった。学校は一学期間かけて成績表作りを教えていたが、実際はできない人がほとんどだった。小椿も受験前にパソコンで成績表を作れなかったが、受験後彼女は何度も練習してようやく出来るようになったのだ。学校では先生が受験用の成績表を作ってくれないため、自信がない留学生は試験の応募自体を諦めようとしていた。「できなくて、彼らは諦めてしまうから。彼らの背中を押してくれる人がいれば、すこしでも彼らも前に進めるようになるでしょ」と小椿は考えてクラスの何人かのために成績表を作った。この事を知った先生は授業中に彼女を叱った。「以前成

績が良くないときでも、先生にこんなに言われたことがなかったから、悲しくて泣いてしまった。」という。クラスのある子は先生に次のメールをした。「尊敬する先生、小椿がこのことを手伝ってくれず、もし彼らが受験できなかつたら、この責任はだれか負うのですか」と。先生はこの機会に皆にパソコンをマスターしてほしかった。この先生の気持ちを小椿はよく分かっていた。しかし、彼女は勉強は大学に入った後でもできるから、受験を放棄するのが一番問題だと考えていたのだ。

9.2.1.7 未来に向かって

2007年2月5日の土曜日、午後4時から6時まで、教会の3階で小椿に二回目のインタビューをした。彼女は伝道のため、土曜日6時からのバイトを辞めていた。試験のことを話しながら、彼女は鞆から分厚い『ミクロ経済学』という本を取り出した。小椿は面接の時、先生たちに日本語は問題がないが、経済の基本知識がまだ足りないと指摘されたから、図書館から本を借りて、日々勉強していたのだ。数学は長くやってなかったし、統計なども難しくても読んで分らないところが多い。しかし彼女は一ページずつ何回も繰り返して読んだら理解できたと話した。この学校のシステムではクラスの成績上位5%の人が奨学金をもらえるようになっていて、彼女はそれを目的に頑張っているようだった。

小椿はバイト先でもより一層頑張れるようになった。喫茶店のお婆さんは彼女のことを孫のように可愛がってくれて、美味しいものがあれば必ず彼女に食べさせてくれる。店に来るお客さんも頑張り屋の小椿を見ると、よく声を掛けてくれるようになった。バイトを楽しくやれるようになったと小椿は言いながら、最近のある出来事を話してくれた。ある日、興味深々に彼女に声を掛けてきたお客さんは、彼女が福建省の出身だと聞いたとたん、何も言わなくなったという。すこしショックを受けた小椿はこのように言った。「これは彼らのせいでもありません。以前来た人は確かに悪いことをやったことがあるから、皆福建省の人に警戒心を持っていても仕方ありません。正直に言えば、私も内心では福建省の人をどうしても好きになれませんでした。でも、神様に感謝しています。自分が福建省の人じゃないという嘘を一回も口にすることがありませんでしたから」。

すこし沈黙した後、再び話し出した小椿は福建の留学生の変化を嬉しそうに話してくれた。福建の人は元々お金稼ぎのために日本に来て、違法行為をする人も中には多いが、日本でバイトをしてもお金稼ぎにならないことに皆が段々気づき、勉強に力を入れる子が増えてきたそうだ。去年の留学生の中でも、ある女の子は一年間バイトもせず、寝食を忘れて猛勉強し関西大学に受かったし、小椿がいた日本語学校でも初めて何人かの学生が奨学金をもらえるようになったそうだ。故郷に帰った時、親は彼女が借金をまだ返せていないことを恥ずかしく思い、他の人に言わないようにしていたが、最近はこのような子が増えてきたそうだ。先輩の一人がよく勉強して日本企業に就職した後、一気に借金を返したという話も皆に影響を与えているかもしれないが、福建の子はとにかく勉強に懸命になる人が増えてきた。福建の人は何でも懸命だから、勉強にも命がけで頑張っているときと夢が叶えられると小椿は信じている。「神様は福建の人をかわいそうに思っています。レビ人

と同じように福建の人がたとえよくないとしても、神様はけっして私たちが捨てません。親たちの世代は変わらないだろうけど、若者は変われます。福建は若者から、女の子から、特に日本に来た女の子から変わり始めました。」と彼女は感慨無量だった。

日本へ来てからのことを振り返ると、小椿は感謝の気持ちで一杯のようだ。最初教会に来た小椿は神様の慰めを求めたから、皆に祈ってもらふことばかり考えた。しかし、「人を祝福することはなんて素敵なことだろう。やりたくてやりたくてたまらない」と小椿は人のために祈ってあげたい今の自分の気持ちを嬉しそうに語ってくれた。インタビュー後も私の手を握って祈ってくれた。伝道のために土曜日のバイトも辞めた小椿は全くお金がなかったが、心さえ豊かに感じれば満足でき、未来の生活に対する希望もささやかなものだった。「物質的なものは多く望まないけど、旬員たちにご飯がごちそうできるぐらいのお金があれば十分です」。

2006年の修練会でも彼女は恵みを受けた。神様の言葉を耳にした小椿は、涙が止まらなかった。「牧師様と出合わなかったら、神様を知らなかったら、私は自分の人生をうまく生きられなかったでしょう。私はだれかと結婚するか、不法滞在してお金を稼ぐかということばかり考えていたでしょう。」と小椿は言った。旬長になり、そして隊長になったことから彼女は自分の成長を感じた。「神様を信じてさえいれば、皆変わるでしょう。あんなに自己中心的で、人に何か言われるとすぐ傷ついていた昔の私は、本当に変わりましたよ。今でも人の心を理解できない部分は多いけど、初めてたくさんの人を理解しようと考えようになった時はうれしかったです。あの上（礼拝室の教壇）に立つことはどれほど難しいことかとよく感じました。人を理解することは本当に難しいですね。牧師様は本当にすごいです」。

たくさんの人々の心を理解し、慰めてあげたい小椿はいつか牧師になればいいなという思いをずっと持っている。知識不足を感じた彼女は、様々な本を読み始めた。読書は遠い昔の習慣だったが、生まれて始めて本を持つだけでも幸せを感じるようになったようだ。「ただ一度の人生をどのように過ごすか」を日々考えている小椿は、羨ましそうに実り多い人生を送ったお婆さんの話をしてくれた。実家の隣に住んでいたお婆さんはクリスチャンで、非常にやさしくて大きな声をあげたこともなかった。ただ人をひたすら愛していた。そして周りの人も彼女から大きい影響を受けた。小椿の母もその中で感動してクリスチャンになったのかもしれない。死ぬ前のお婆さんに「ヤマモモが熟した」とイエス様はおっしゃったという。つまり、お婆さんはこの一生の果実がもうできているから、この世の時間がもう終わって神様に会いに行く時なのだということだと小椿は説明してくれた。「だから、お婆さんはとてもうれしそうだったよ。息子さんたちは皆悲しくて泣いていたけど、お婆さんは笑って一人一人と最後の別れを告げた」のだという。

終わりに

牧師になりたい。大学を卒業したら、中国の神学院に進学したいという彼女の話やずっと覚えていた私は、その理由を聞いたところ、彼女はまた意外な話をしてくれた。新年の

夜の祈禱をした時に、神様にこのように話しかけられたそうだ。「あなたは博士になりたいだろう。あなたは私のために自分の理想を捨てられるのか？」誰も知らない彼女のこの願望を神様が既に知っていることに自分も驚いたと彼女は言った。将来の道をどのように選ぶか小椿はまだ分からないだろう。しかし、「すべて求むる者は得、尋ねる者は見出し、門を叩く者はひらかるなり。(マタイ傳福音書 7：7-6)」と新年の御籤を読み上げた彼女の顔にはある確信があるように見えた。

希望に満ち溢れた小椿を見て、今年日本語学校に来た彼女の従兄弟は「お姉さんが羨ましい。お姉さんには夢がある」と言っている。従兄弟のこの話を小椿はうれしく感じた。しかし、先日、テストで100点を取ったことを母に報告したが、「100点を取っても、奨学金がもらえないのなら、意味がない」と母は応え、それを彼女は悲しく感じた。最愛の母に理解してもらえないことを彼女は非常に残念に思った。「もう慣れてしまった母に理解されないこの苦痛はだれもわからないと思うけど、先日暁静の旬員は祈禱会で私のために祈ってくれました。」と言った小椿は、顔に喜びと安堵の微笑みを浮かべた。いつか母も自分を理解してくれるだろうと彼女は思っていたのだ。

9.2.2 小椿の分析

9.2.2.1 小椿の成長と変化

物語から分かるように、福建省出身の小椿は、出稼ぎを主な目的として日本へ来た。苦勞をしたことがなかった彼女は、学校以外の時間を全てバイトに注ぎ、パンさえもきちんと食べられない日が多かった。バイト先で苛められ、肉体的にも精神的にも苦痛を感じていた。耐えられずによく両親に愚痴をこぼし、日本へ来たことを後悔していた。しかし、神様を知って彼女の価値観や人生観は完全に変わった。将来牧師になり、一生他人のために生きていこうと思うようになった小椿の成長と変化は衝撃的である。

「考え方が変わると全てが変わる」と彼女が言うように、自分の未来像に向かって日々努力している小椿は精神状態が変わっただけではなく、学習でも信仰でも大きな進歩を見せた。牧師と交流したい、朝の祈禱を理解したいという単純な動機から、彼女はコツコツと日本語の勉強にはげみ始め、基礎を固めるため、学校でも自分のレベルに合ったクラスを選び、羞恥心を捨てて先生に教えてもらった。日本語版の聖書を読むため、彼女は一文字ずつ調べていった。すると牧師の話が段々分かるようになると同時に、学校の成績も一気に上がった。勉強にすこし自信が付いてきた小椿は、学校にいることを幸せに感じ、有名な大学に入りたいという願いが芽生え、博士課程に行きたいという考えも出てきた。牧師になるにはもっと知識が必要だと思ったからだ。大学の経済部に編入した小椿は、バイトを抑え、学習に信仰に一生懸命だ。生活費が足りない時もあったが、小椿は力の限り他人を助け続けている。「この細く小さい女の子にはものすごい力がある。きっと偉い人になるだろう」と牧師が言ったように、聖霊に溢れた彼女は神様の誇りだ。

学校、教会、伝道に忙しい小椿は、自分の暗い時期を振り返って、いつもこう言っている。「学校でのスピーチの時も、私は日本へ来て長い間後悔していたと言いました。なぜ私を日本に来させたのか、私にこんなに苦勞をさせるのかといつも泣きながら神様に聞きました。でも、今は感謝しています。日本へ来なかったら、私は勉強する心をもらえなかったでしょう。人生をよく生きていこうと思わなかったでしょう」。日本へ来たお陰で自分の人生が有意義になったと小椿は思うようになった。自分が日本へ来ることには神様の意図が含まれていたと彼女は幸せそうに言った。「神様は福建省の人を救いたいから、まず日本へ来た若者、日本へ来た福建省の女の子達から救いたいとお思っている」。

この日本へ来たことの意味付けから、今後福建省からの留学生が変化していく可能性が示されている。地理上や歴史上の様々な原因から福建の人々はお金重視の考えが強いことがよく知られている。出国することにお金を惜しまない福建の人々の考えは現在でも変わりが無いようだ。「皆海外に行きたいと願っていることが福建人の特徴です。どこの家でも出国した人がいれば、その家には将来必ず大きなお金が入ってくると皆思っているからです」と小椿は言った。海外への出稼ぎの伝統は、各家庭に影響を与えている。小椿もその中の一人で、大学へ行く夢に絶望した彼女は海外で稼ごうと思い、普通の2倍以上の仲介手数料を払って日本へ来た。しかし、その苦勞は想像以上の耐えがたいものだった。昔は

二年間海外に行ったら借金を返済できたのに、今では3,4年経っても返済できない子が年々増えてきている。この現象を理解するには、いくつかの変化に注目しないといけない。

まず、一般的に言えば、福建省の人々は昔ほど貧しくはなく、他の地域より豊かな生活を送っていることが重要なポイントだといえる。小椿の家族を見ても分かるように、両親は子供達が勉強したければ、それをサポートしてきた。長女である小椿も家で苦勞をしたことはなかったし、好きなものなら何でも両親が買ってくれた。苦勞をする必要が段々なくなってきた現状の中で、子供に勉強をさせたいという親の気持ちが強くなったのには二つの原因がある。一つは中国の経済状況の変化に伴ない、職業による収入差が大きくなったことで不安定な商売をするより、学歴を高めて安定した収入のいい職業につくほうが魅力的になり、その機会も増えたことだ。もう一つは、中国の高等教育改革によって大学生の在校人数が拡大されたことだ。またたとえ大学に入れなくても、多くの若者が高校までの教育を受けられるようになり、義務教育の実施なども伴って若者の教育レベルが上がる条件が整った。それゆえ、現在来日する福建の留学生達は昔の小学校を出ただけの人たちとは違い、大学進学に憧れているし、大学に行く実力もないわけではない。日中の経済格差が縮小し、日本円の価値が下がる一方の現状の中で、苦勞してお金を稼ぐ意味が薄くなってきたのではないかと考えられる。

「福建人は計算高いから、なにをすれば自分の有利になるのか他の地方出身者よりよく分かっています。バイトを一所懸命にするのと、勉強を頑張って奨学金をもらうのとを比べたら、どちらがいいのか皆段々分かってきたようだし、隣村の子は日本で就職してたくさんのお金を両親に送ったという噂もあって、皆の考えが段々変わってきたのでしょう」。小椿は自分自身の経験からも現在の留学生が今後変化していく可能性を述べている。この10年の間、福建省に教会がたくさんできたことで、日本へ来る留学生は、すでに教会と接触したり信仰を持ったりしている子が多くなっている。伝道に積極的な小椿の影響もあり、日本での進学の道が見えてきて、勉強に一所懸命頑張る子がどんどん増えてきたという。

「福建省の人は何でも一所懸命だから、学習をしようと決めたら一所懸命になりますよ。2007年の私の出身校の子は皆進学できました。学校が去年から奨学金を設けるようになったことが皆の原動力になったようで、今年は有名な大学に7人も進学しました。一人の女の子はあまりバイトをせず昼も夜も頑張って、一年間勉強しただけで関西大学に合格したんですよ。」と小椿は自慢そうに話してくれた。

福建の子はこれから変わる、そして福建も留学生によって変わると信じる小椿自身は、まさしくその変化のモデルである。

9.2.2.2 小椿の特徴

小椿がよく言うように、福建の人々は伝統的に金銭意識が強いが、団結力も強い。生まれ付き苦勞によく耐えられる彼らは何でも一所懸命にやる精神を持っている。小椿の物語と彼女の変化からも分かるように、この一所懸命な気質のお陰で彼女は学習の面でも信仰の面でも大きな成長を見せたといえる。彼女の特徴は以下の4つの視点から理解できる。

A 注目されるという心理的ニーズ

教会の中では、聖霊に溢れた小椿のことが注目されるようになった。「人間は注目されるとどんだんいい方向に変わって行くけど、注目されないと段々死んでしまう」。この小椿の話から他の人に注目されることは彼女の成長において大きな意味があることがわかる。物語で述べたように、先生に注目されなくなったと感じた中学生時代から、小椿の挫折は始まった。「小学校の時にいつも先生に大事にされていたから、成績が少し悪くなると、必ず先生は原因を聞いてくれた。でも、中学校に入ったら、皆優秀だから、先生は私のことをあまりかまってくれなかった。だから、いきなり自信がなくなってしまった。」そして将来や自分のことを悲観的に思うようになり、教会に来た最初の頃も神様の前で大声でよく泣いていた。ところが、李幹事の心遣いが彼女の心を暖め、青年3隊の隊長になったお陰で、彼女は暗い姿が消え、生命力と自信に溢れる人間になった。「昔は注目されない存在だったよ。口をついて出てくる言葉は否定的なものばかりだった」と小椿は新入生によく言う。初等専門学校の写真を開くと、腰より長い髪をした小椿の憂鬱な顔とその美しさは、そばに立っている元の彼女の彼氏の元気な姿と鮮明な対照をなしている。自信がない小椿にとっては学生委員会で活躍していた彼が頼りだったという。「彼はすごく皆に注目されていた人だったよ。悲観的な私の憧れだったかな。そのような人になりたかった」という彼女の話から、ずっと誰かに興味を持ってもらうこと、注目されることを期待していた彼女の心理が分かる。

B 牧師に従う心

バイトをせず伝道に一所懸命な小椿は、同郷人からよく馬鹿だと言われる。「確かに馬鹿のように見えるかも。10分の1を出しなさいと言われてたらと出すようになったし、洗礼を受けなさいと言われてたら受けたし、隊長になりなさいと言われてたらやってみました。でも、李幹事や牧師様の話に従うのが間違いないということを彼らは知らないんですよ。」と小椿は、皆の反応を全然気にせず、笑いながら牧師に従うことが損にならないことを強調した。普段の生活での小椿の発言や人への接し方まで牧師の姿が重なる。「彼女の言うことは全て牧師様と同じだ。ちっとも自分の考えがないから、面白くない」と宋は隊長の小椿が個性のない人だと言い切る。青年3隊をどのように運営するのかということにも、宋と小椿との間に意見の食い違いが多かった。「最初は言葉が通じないから、牧師様との交流も言葉でできませんでした。でも、牧師様の表情からも行動からも私は愛を感じました。隊長になってどうすればいいのか分からない時がありました。だから牧師様の真似をしようとしたんです。牧師様の話は自分のために言っているように心までよく響いてきます。牧師様は真理を言っているから、信じたらきっと自分のためになります」と小椿は言う。自分の話を理解してもらうために、彼女は小さい頃、楽器を学ぶのを拒否したことを後悔しているという話をした。「あの時、もし学んでいたら、今教会で演奏者が足りない状況を解決できるでしょ。だから、段々大きくなって分かったのは、年配の人たちは経験が豊かなので、彼らの話に耳を傾けることが自分のプラスになるのは間違いないということです」。このよ

うな考えが彼女の出発点なのか、年配の人の話に従う彼女は喫茶店のおばあさんと仲良くなれたし、スピーチができたり奨学金をもらったりしたのも先生に従ったお陰だと彼女はよく言う。だから、彼女は牧師に従うことが成長の一番早い道だと思っているのではないだろうか。

C 模範意識が強い

「旬員が悪いのは旬長に問題があるからだ。」これは旬長への教育で牧師がよく言う言葉だ。この教えによって、旬長たちはよく自己反省を行い、模範意識を目覚めさせる。隊員が何十人もいる青年隊では、隊長の小樺の行動が注目されている。小樺は皆の期待に応え、厳しい信仰生活を厳守し、優秀な学生として認められるようになった。クリスチャンになると周囲から特別な目で見られるようになるのと牧師によく指摘されたこともあるのかもしれない。小樺はバイト先でも家でも掃除などの小さい事から、自らの行動でクリスチャンである誇りを示している。言うよりは自分の行動によって周りの人々の考えが変えられると彼女は信じている。皆にはモデルが必要だと認識している彼女は、自らモデルになり、自分の努力で周りの人々の見方を変えようとしている。教会での小樺の祈りはいつも号泣を伴ない、悲しそうに見える。人はなぜそんなに彼女が泣いているのかと思うだろう。でも「彼女の旬員の一人が教会に来なくなったからだ」と暁静は端的に、常に旬員のことを考えている彼女のことを説明してくれた。確かに旬員たちの痛みを感じなかったら、彼女はするように泣くことはできないだろう。このような旬員のことを常に心にかけている彼女がいるだけで、教会の皆が影響を受けているだろう。

D 人を理解しようという気持ちが強い

「隊長になって一番よかったのはいろんな人の気持ちが分かるようになったこと」だと彼女は言う。人の前に立って初めて牧師がしていることは容易ではないと分かったという。様々な旬員との接触では、人を理解できる心が要求される。年配の人から年下の留学生まで、小樺は牧師をモデルにして皆に気を配っている。常に皆に声を掛けたりして熱心にコミュニケーションを重ねている。「彼らは友達がいなくて、本音を話してくれる先輩もいないから、叱ってくれる人もいない。本当に孤独なのよ。しかし彼らにすこし近づいたら、何でも話してくれる」と小樺はよく言う。一人の旬長の相談に彼女は「無視されるかもしれないけど、パチンコまで付いて行ってあげなさい」とアドバイスをした。学校にも教会にも行かずパチンコで時間を潰しているこの旬員には愛が必要だと思ったからだ。他の留学生の成績表作りを手伝ったのも、成績表が間に合わなかったら大学の出願を諦め、大学進学まで諦める危険性が彼らにはあると彼女は思ったからだ。「彼らは本当はとても可愛いけど、現実に容易に負けてしまう。でもすこし援助があれば、色々な道が開けるだろう」と彼女は自分の行動で彼らを救おうとした。バイト先のおばあさんのパチンコ好きな夫の生き方を見ても、最初の頃の自分と同じようにバイトに偏って未来への希望を失った福建からの留学生達を見ても、小樺は悲しみを感じる。他人を理解するには、他人の痛みを知

るしか道がないのではないか。小椿は長い間孤独と苦痛を経験したからこそ、より一層他人のことを理解できるようになったのだろう。

「修練会の彼女は美しかったよ。彼女がした事も美しかった」と暁静は小椿を褒めた。小椿がたくさんの人々を愛しているからだ。要するに聡明で勤勉な小椿は、たくさんの人々を愛する事ができたことによって、心が広くなり、苦しみを通して神様が必ず祝福を与えてくれるということを悟ったと言えよう。

9.2.2.3 教会の役割

物語で述べたように、小椿は信仰を持っていた母の影響もあり、日本に来てからバイトを探したい、神様の祝福を受けたいという気持ちで初めて教会に来た。バイトに体力と時間を注いでいた彼女は、神様の前に来ては自分の苦痛を誰かに慰めてもらいたいとよく泣きながら告白していた。しかし、当時の彼女は自分が信仰生活を送りに日本へ来たのではないと、自分の来日の目的と教会とははっきり分けて考えていた。ところが教会にいる事によって小椿の人生が変わり、お金のことだけ考えていた女の子は神様に献身する人間になった。教会が彼女にとってどのような意味があるのかを理解するには、以下のポイントが重要である。

A 成長の舞台になったこと

彼女が教会に継続的に来た理由は、恋人と別れ、独立意識が強くなったことや、高熱の夜、看病してくれた牧師夫婦の愛に感動したことなど、様々ある。中でも李幹事の存在は無視できない。当時李幹事は毎日小椿に電話をかけ彼女の様子を尋ねた。彼に叱られたこともあったが、彼女は彼の自分への気遣いを感じ、彼に親しい感情を持ち始めた。「皆待ってるから、必ず来てね」という李幹事の誘いもあって、彼女は継続的に教会に来るようになった。「寮に帰っても面白くないから、バイトが終わると、自然に教会に来るようになりました。よく考えたら、教会に来られたのは、李幹事が教会へ来る道を作ってくれたことが一番大きかったと思います」と小椿は言う。中国人のチームを作るため、教会には青年3隊が組織され、受洗後の小椿は隊長に任命された。彼女の支えになったのは李幹事と朝鮮族の先輩達だった。手を取って小椿を教えていた李幹事のお陰で、人前で言葉が出なかった彼女は自信に溢れた隊長になった。青年隊の集まりで上手に司会をしている小椿は教会という舞台で注目される存在になり、昔の自信を取り戻した。様々な人とぶつかったりもしたが、これらのことを通して、小椿は自分のことばかり考えるのではなく、皆の気持ちを理解できるようになり、他人の痛みを自分の痛みだと感じるようになった。

B 価値観を見直すチャンスくれたこと

教会にいる様々な他人の存在が彼女に与えた影響も多かった。勉強好きな暁静やしっかりした海燕など、違う価値観をもった人々との日々の接触は、彼女に自分の価値観を見直す機会を与え、彼女は勉強のできる人に憧れるようになった。福建省からの他の留学生も、

暗い自分の過去も、小椿を大いに考えさせた。知識を得たくなった彼女は本を読むのが好きになり、時間さえあれば市立図書館を利用するようになった。「人物伝記」が好きな彼女は、様々な本を読むことで視野が広がり、「今まであまり深く考えなかった自分の人生をどのように有意義に過ごせるのか」という問題を考えるようになった。牧師と日々接することによって彼女はイエス様の愛を肌で感じることができ、将来の道を神様の中に歩む決心ができた。

C 勉強する心をくれたこと

神様に対して小椿が一番感謝しているのは朝の祈りを聞く心から勉強する心までくださったことだ。そのお陰で日本語の障害を克服した小椿は、学校の成績がよくなり、皆の前のスピーチで自分の夢と変化を語ることができ、優秀生として62万円の奨学金を与えられた。勉強の楽しみを感じた彼女は「学校にいる以上に幸せなことはない」と思うようになった。日々変化している彼女は充実感を味わい、知識から力と自信を得た。「今の私はまだ弱いけど、二、三年もしないうちに、必ず変わる、変えられる自信がある」と小椿は言う。自信が付いた彼女は、自分が将来修士だけではなく博士まで行こうと考えるようになった。大学に入った小椿はバイトを減らし、学習にも伝道にも一層力を入れるようになった。朝の祈禱や日曜日の礼拝では通訳を担当したりしている彼女の声が力強く聞こえる。

D 使命感と責任感を与えてくれたこと

2006年に青年隊は3つのチームから7つのチームに編隊された。元の青年3隊が解散し、隊長の小椿は引退した。牧師はいきなり平句長になった彼女のことを心配して彼女と話し合った。「私はいきなり隊長になったけど、句長から努力したことはなかったので、色々な不足をよく感じていました。この時間を利用して自己整理してほしいという牧師様の心遣いはよく分かっているから、別に不満とかは全然ありませんでした。これは神様の意図でもあると思いますよ。句長から私を訓練しようということだと思います」。牧師の意図がよく分かった小椿は嬉しかった。腕儀と同じように、句長から始め、句員の一人一人と丁寧に付き合いたいというのが元々の願望だったからだ。現在の教会を自己訓練の場として考えている小椿は一から一步一步努力し始めた。

他の地方の留学生と比べ、福建の子を特に可哀そうに思った小椿は、彼らへの伝道を諦めたことはない。彼女の熱意で2007年4月彼女の通う日本語学校の新入生57人のうち53人もが教会に来た。しかもバイトを見つけても残っている人が多い。「一人の力では難しいけど、教会に来たら、神様の力で、皆の力で変わらない人はいないだろう」と教会の力を信じる彼女は、李幹事が自分にやってくれたのと同じように、福建の子たちに教会に来る道を作っている。これこそが自分の使命だと思っているのだろう。

イエスの価値観を受け入れた彼女は、福建省の伝統的な価値観から解放され、自分を変えられた。自分の成長と変化を感じる彼女は、様々な人の変化からも、自分の家族の変化

からも、自分の選んだ道が正しいという確信が持てた。神様に会い、神様を知ったことに彼女は幸せを感じ、感謝する気持ちで一杯だ。過去と未来を結ぶ現在に立っている小椿は神様のために人生を捧げたいと献身の誓いをした。自分の人生の終わりに実家の隣人のお婆さんと同じようにヤマモモの実が熟すようになることを彼女は望んでいるのだろう。

9.3 暁静の追求

9.3.1 暁静の物語

はじめに

「私は方向を見つけられなくなってしまい、不安になり、憂慮し、逃げ出したくなった。諦めようとしたところに、ある光が現れ、『わが子よ、私のところへ来て。私はあなたの身を寄せるところ。私はあなたを目覚めさせ行くべき道を教えよう。あなたの上に目を注ぎ、勧めを与えよう』(詩篇：32 - 8) と言った。あの過去を書いたノートを読んで、あの重い毎日を振り返り、自分の努力を通して残した一つ一つの小さい足跡を思い出して、私は泣いてしまった。理由は分からないけど、涙が止まらなかった。」

教会の月刊誌に書かれた彼女のこの一文を読んでから、私はついに決心して、その過去が書かれたノートをみせてもらえるかと暁静に頼んだ。2006年7月2日、彼女から日記を受けとった瞬間、私は感動して涙を流した。彼女が私をこれほど信頼してくれているのは本当にうれしかったが、それより、彼女がやっと人間をもう一回信じてみようという気持ちになれたのではないかと思うと、神様に感謝する気持ちで一杯だった。「お姉さん、なぜ私は笑えないのかしら？」という、彼女と付き合いだしてから何回も聞かれた質問の答えの鍵は、きっとこの日記の中に隠されているのだろうと思うと、涙がにじんでくる。

9.3.1.1 憧れの日本へ

暁静は1983年に中国の山西省にある中小都市に生まれ、5歳離れた弟が一人いる。現在の中国において、経済的に遅れているこの都市は、太原と北京に近いゆえ、明清時代には富商が次々と現れたところとして知られている。彼女の一族が昔商売で繁栄したことも、旧中国の祖父の時代からはるか昔にまでさかのぼることができる。しかし、時代が変り、文化大革命(1966~1976)に遭った暁静の父親は学校さえも行けなかった。流浪の生活を送ってきた彼は、道端の芸人の影絵芝居を通して、すこし文字を学んだが、今でも字が完全には書けないようだ。1978年の中国の改革開放政策に乗り、就職口がなかった暁静の父親は鉄鋼会社を起こした。改革が進むにつれて、中国国営大企業の倒産が相次いでいたが、暁静の父親の会社は順調に大きくなり、暁静の父親も地方の有名人になったそうだ。

暁静によい教育を受けさせるため、暁静の父親は彼女を故郷から離れた省都の太原に送り、暁静はそこにある唯一の全寮制の「貴族学校」に、小学校から高校卒業までずっと通っていた。当時はいうまでもなく、現在でも、子供をこのような学校に行かせるのは相当な財力がないとできないことだ。暁静は同年代の子と同じように毎日親に甘えることはできなかったが、学校での学習は親の期待に背かずずっと抜群の成績だった。中学校に入ると、暁静は学生委員会で活躍し始め、学校では先生たちとも学生たちとも仲良く、皆彼

女の言うことをよく聞いた。校長先生とも友達の付き合いだったそうだ。周りには花束と褒め言葉しかくれない暁静はいつも自信で溢れ、笑顔だった。「まるで世界が私を中心に回っているように感じた(日記・2005/07/31)」と暁静は言った。

大学入試試験でも、武漢××大学(重点大学)にめでたく合格した。しかし、この大学は第1志望の北京放送大学ではないため、彼女は行きたくなかった。落ち込んでいた娘を心配した父親は、留学を勧めた。「日本へ留学したらどう？」と言われると暁静は迷わず留学の決断をし、一週間以内に荷物を片付け、西安での日本語学習を始めたという。

半年の日本語学習を終えた暁静は、2003年4月に順調に来日した。北京空港まで送ってくれた父親は、泣いていた。「初めて泣いた父を見た。私一人を日本に行かせる辛い気持ちがよく分かった。けれど、これからは、自分の天下を切り開けると思うと、わくわくしてきた。(日記・2003/07/12)」という。涙を見せない彼女は既に新しい目標を立て、同年代のWang Miaoのように世界を基盤として自由な人生を送ることに憧れていた。

「Wang Miao は一人っ子だが、大学に受からなかったことがきっかけで渡米した。英語を一年間猛勉強した後で、大学に通いながら、上院でバイトをした。卒業後、ワシントンでアパートを借り、アメリカ政府で仕事を始めた。仕事が中米両政府の貿易と政治に関係が深いので、年中ニューヨークや香港や上海の間を飛び回っていた。仕事を始めて2年後、世界を見た彼女は最後に北京に魅了され、定住することにした。やっと居場所を見つけた彼女は、一層世界的な活躍ができるようになった(日記・2003/06/29)。」

9.3.1.2 熊本での挫折

飛行機が黄色の中国大地を離れ、青海原が見えてきた瞬間、彼女は生まれて初めて自由を感じたという。海に囲まれている日本列島が、空から望むと、緑に恵まれ、非常に綺麗に見えた。彼女の心はすでにこの玩具のような可愛い小島に惹かれ、自分のものにしようという野心にも一瞬かられた。未知の新生活に多少の不安も抱いていただろうが、それを考える暇はなかった。冒険の匂いがする未来は彼女の征服心を煽っただけだった。

迎えに来た日本語学校の先生は「君たち、あらゆる苦勞をなめ尽す、この世の中の地獄へようこそ」と言った。暁静は少し不思議に思ったが、全然気にならなかった。「両親はすでにお金で弟と私の道を開いてくれた。私はその通りに歩くだけのことだ。」と彼女は今まで「普通の人間が遭う困難な道を避けてきた飛ぶような人生」を幸運に感じ、約束された将来の成功が自分を待っているだけだと思っていた。楽観的な予感の中で、彼女の留学生活が始まった。

南国の風景が北国の女の子にとっては永遠の魅力を持っているように、緑の大きな葉の熱帯植物を見るだけでも暁静は満足を感じた。蒸し暑い熊本の気候に慣れるのは、大変だったが、彼女はそれを異国体験の楽しみの一つとして乗り越えてきた。最初の3ヶ月は、一緒に西安から来た小蘭と同居していた。父親が裁判官である小蘭は暁静より7歳年上で、大学を卒業して仕事を三年間した賢い女性であり、化粧も料理も何でも教えてくれるし、バイトと学習の選択に悩んでいる暁静を見ると、「あなたは他の人と違い、視野を広げるた

めにここへ来たのよ」といつも暁静に注意をしてくれた。

キッチンに入ったこともなかった暁静は、自分がお金を出し、小蘭に二人分の料理を作ってもらって生活パターンをこれ以上合理的なことはないと思っていた。両親への電話報告は楽しい事ばかりだったし、故郷からの大きな小包が届くたび、喜んで同期の皆に分けていた。短時間の幼稚園バイトを通して、初めての日本人の友だちができた暁静は日記にこのように書いている。「最近佐藤さんと一緒にいろいろな祭りに参加した。日本語の進歩を感じた。今後も日本人ともっと接触してたくさんの友達を作りたいと思う。いい一日だった」。

ところが、このような日々は長くは続かなかった。小蘭は大学院の研究生に決まり、一人で引越してしまったのだ。周りの人たちも皆それぞれバイトと学習に忙しくなった。一人の時間が増えた暁静は、幼稚園の佐藤さんとの付き合いを積極的に深めようとしたが、なかなか中国人のように親密な関係にならないことに悩んだ。ある日、台湾のことと靖国神社のことを、二人で話したそうだ。「台湾は中国の領土ですかと彼女に聞かれた。当然だと私は彼女に教えてあげた。彼女は常識がなさそうよね。失礼な質問をした。また、日本の侵略が真実であれば、中国側に賠償しないことは有り得ないでしょうと言われた。私はもう答えたくなかった。なぜ靖国神社問題でよくもめたのかがやっと分かった。中国人の広い心がバカにされているからだ」。暁静は、佐藤さんとの距離を乗り越えることができないだろうと感じた。

それと同時に、小蘭に利用された暁静のことをバカだという噂が学校に流れ、孤立した彼女は同期の皆に不信感を持ち始めた。彼女はこの不愉快な気持ちを発散するため、バイトを始めようと考えたが、レジの仕事に面接に行くと、日本語でうまく自己表現できない自分を初めて発見した。そして「受かったとしても、お金を間違えたら、責任を負うことができないだろう」と思った暁静は、自信がなくなった自分のことに敏感に気づき、一睡もできなかった。

バイトはしなくてもよかったのだが、食事作りを面倒くさく感じ、学習にも集中できない暁静はついにホームシックに陥った。2003年6月1日から書き始められた日記には、「家に帰りたい。父と母を思い出した。お父さん、お母さん、愛している」というような簡単な日本語で書いた内容が何日も続いていた。両親が自分に大量の投資をしてくれたので、暁静は自分がこのままではいけないと考え、たまには日記で「これはただ一時的な落ち込みだから、日本語をじっくり勉強して、自分の目標を実現しよう」と書き、自分を励ましていた。

6月26日に中国で幼なじみの二人の親友が付き合い始めたという友人の電話から、暁静はすこしショックをうけた。女の子は一番の親友であり、男の子は暁静の当時の彼氏だったからだ。一番信頼していた二人に裏切られたと暁静は悲しく思ったが、「許してあげる、男の子だったらいくらでもいるから」と自分を慰めた。

夏に入ると、皆は段々進学と留学生統一試験のことを話し出した。しかし、心の準備がまだできていない暁静は、自分の生活に混乱を感じ始めた。部屋で長い時間をかけて自己

の気持ちを整理しようとした。「自由すぎるせいなのか、生活のリズムが崩れた気がする。圧力があつたほうがいいのかも」と考えるようになった暁静は、近くの料理屋さんでバイトを始めた。いろいろなことを覚える必要があるキッチンの仕事は大変だったが、彼女は一つ一つの進歩をみせた。しかし、「だれかと相談したいが、相談できる人がいない、いない」と、彼女の心の混乱状態はバイトを休んで整理しても、ちっとも改善されなかった。

7月3日の日記に、「交通事故、怖いですから、アパートへ帰った。休みの生活はとても難しいね。帰りたいです。」とあつた。その日、自転車に乗っていた暁静は、車にぶつけられた。暁静は大怪我をしなかったのは幸いだと思い、一万円の診察料と4千円の自転車修理代を自己負担した。一見簡単に終わるはずだったが、この影響はその後4ヶ月も続いた。

怪我で静養していた暁静をだれも見舞ってくれなかった。「国内にいたら、絶対こんなことにならない。きっとみんな見てくれるだろう」と、彼女はすこしだけ友達に馬鹿にされた気がした。両親が送ってくれた食べ物をいつも皆に配ったりしていたのに。事故を思い出すと、あの日、車を運転していたおぼさんの怒りの言葉はわからなかったが、罵られたような気がした。あのおぼさんが悪いのに、なぜ自分を怒ったのか分からなかった暁静は、日本語が分からない外国人の私をいじめていたのではないかと推測した。しかし、「他人の土地だから、我慢するのが得だ」と彼女は悲しく思った。久しぶりに学校に行ったら、「最近、学校へ来なかったけど、どれぐらい儲けたの？」と聞かれ、彼女はまたショックを受けた。

試験まで日がないと感じる暁静は、皆のことを気にせず勉強に専念しようとした。しかし、すべてのことがうまく行かなかった。暁静に車をぶつけた女の人が10月に彼女の学校に6万5千円の車修理代を請求しにきた。事件が複雑化したことを感じた暁静は、事情を担当の先生に説明し、すべて彼女に任せた。しかし、一ヶ月後、裁判所からの通知が届いた。「亡霊がいつまでもつきまとうようだなあ。(中略)私はあの人に訴えられたようだ。あの人はなにをしたいの？この貧乏な留学生からどれぐらいゆすりたい？先生はどうやって処理したの？なぜこんなことになってしまったの？」暁静は悲憤やるかたなくなり、日記に怒りをぶつけた。「黒と白が逆になった。外国人しかも日本語が分からない私を馬鹿にする気？」彼女は、裁判に行く意志を先生に伝えたが、先生は彼女のために集めたお金(学校3万、クラス2万、先生1.5万)をそのおぼさんに渡し、事をおさめた。しかし、彼女のプライドは深く傷つけられた。「先生は好意でしたのかももしれない。でも、あの目はまるで私が悪かった、私が嘘をついたとでも言っているようだった。くやしいな。私は人にお金をあげる人なのに、今後、皆にどう思われるのか。」と暁静はやりきれない思いをした。

同じ時期にバイト先で日本語の不十分さを日本人に嘲笑されたのに、その場にいた留学生がだれも助けてくれなかったことがあつた。試験をなにより大事に思う暁静は、大学出願書類作成についてある先生に頼んだ。しかし、「先生は、いつも忙しそうで返事してくれなかった」。よく観察すると、この先生は担任の先生と仲がわるそうだとすることを発見し、暁静は、「私を犠牲にするつもりなのか。でも、私の将来は冗談事ではない」からと先生の助けを諦め、自分ですることにした。混乱の中で大学を受験した彼女は初めて不合格

の失意を味わった。同じ地方から来た別の二人の子がそれぞれ大学に決まったのを見て、暁静はすべてのことに絶望を感じた。「ここは私の居場所じゃない。」と暁静は思った。適当に大阪の専門学校を選んで、だれにも挨拶せずに、熊本から逃げ出した。

二年後の暁静は、最後に自分の荷物を片付けてくれたバイト先の店長の優しさを思い出したが、当時はそのような優しさに気づくことができなかった。当時の彼女の気持ちは日記にこのように書かれている。「帰るべき家がない。いじめられたような感じ、どうしたらよいか分からないような感じ…天下(新しい道)を切り開くことは本当に難しい」と。

9.3.1.3 大阪での新生活

大阪は熊本と違い大都市だから、この知り合いのいないところで生活できるのかと暁静は不安を大いに感じたが、将来の選択肢が多いかもかもしれないという期待感も抱いていた。大阪のことがわからない暁静の部屋探しはなかなかたいへんだったが、不動産屋で劉君と出会い、暁静はすこし自分に自信が付いた。4歳年上の劉君も一年の日本語学校を終えて専門学校に上がったばかりだった。彼に付いて色々なところを探して最後に南大阪にある家賃2.6万のアパートに決めた。二階に入居し、一階にいる劉君と兄弟のように支え合いながら、新生活を始めた。小さい頃から一人で生活してきた劉君は一人っ子だが、なんでもできそうであり、非常に綺麗好きな人だった。彼女にとって、軍事や経済に詳しい劉君は外の世界への掛け橋のような存在だった。

暁静がいる専門学校の進学課程クラスは、同年代の中国人留学生がほとんどだった。しかし、人生のどん底を象徴するこの場所が自分の居場所だとは思わなかったし、勉強に熱心でない皆を見るだけでも嫌になった彼女は、彼らと仲良くしようとさえ考えなかった。学校の日本語の授業は日本語学校とあまり変りがなかったが、歴史の授業とマナーの授業には興味があり、彼女はいつも一番前に座って授業を受けた。様々な知識を身に付けたかった暁静は、先生の注目を集め、授業が終わっても先生は彼女の質問にいつも親切に答えてくれた。

五月のある日、一人の先輩が教室にキリスト教の紹介をしに来た。彼女の話によると、大阪市内のあるキリスト教教会では中国人の留学生がたくさん集り、助け合いながら、有意義な生活をしているという。好奇心が湧いた暁静は、礼拝日に先輩に連れられ、初めて教会を訪ねた。その日の体験は新鮮だった。帰り道で教会の近くの焼き鳥屋さんに寄った。バリバリの商売人である女社長の風采に引かれ、彼女は思わずバイトを申し込んだ。次の日は面接で、「今日の面接は前と違って、私から聞きたいことを全部聞いた。もちろん、最後に社長を褒める言葉も忘れずに言った。気分がよかった」。暁静は自分の予想通りに採用された。

その店の店長は、親切な人であり、暁静に色々教えてくれた。客がいない時、お酒好きな店長は彼女と二人で飲みながら、よく話しをした。他には50代のおばさんが一人、18歳のパチンコ好きの痩せた男が一人いた。この小さい世界から日本を体験していた暁静は、偶然に食事に来た一人のお婆さんに出会った。留学生支援のボランティアをしているお婆

さんは、阪神大震災の時に山の上まで食品を送ってくれた二人の中国人留学生の恩を受けたことがあるらしい。暁静も留学生だということを知ったお婆さんはそれから、店によく寄るようになり、彼女を励ましてくれた。

すべて順調に進んでいるように感じた暁静は、一年半ぶりに帰国した。以前自分のために事故に遭った父親のことをずっと心配していたからだ。会社は既に大きくなっていて、相変わらず質素な生活を送っている両親を見ると、両親がやっていることのすべてが弟と自分のためだとわかり、両親の愛に応えるために有名な大学に入ろうと再び決心をした。

私たちの出会いは、2004年10月に初めて私が教会へ行った時のことだった。青年3隊の集会に案内され、そこで自己紹介をした筆者の私は、初めて来たからかもしれないが、たくさんの人からやさしい声を掛けられた。緊張感と不安が多少解消された時、「お姉さんも西安の出身ですか。私も西安で日本語を勉強しましたよ。日本語学校で一緒に住んでいた人も西安の出身です。お姉さんにすごく親近感を感じています」と彼女は積極的に話しかけてくれた。遠く離れた故郷の話は異国で特に懐かしく感じたのかもしれない。彼女との距離はグッと縮まった。色々な話から中国の一流大学に行かずに日本へ来たということを知った。実は、青年隊隊長の小椿の電話を何度ももらっていた暁静は、この日、久しぶりに来たという。バイト先は近いが、何ヶ月も来なかった。教会の皆が貧乏で話しが合わないと感じたからだと言った。

同じ青年3隊にいても、聖劇部に属している彼女と聖歌部に属している私とは、すれ違いが多いため、あまり話をするチャンスがなかった。だが、彼女のことがずっと気になっていた。教会の留学生たちとは違い、まったく笑顔を見せない彼女があまりにも特別だったからだ。それからの日々は飛ぶように経ち、あっという間にクリスマスになった。聖歌部と聖劇部と一緒に公演する計画があったため、暁静と私は接触する機会がすこしだけ増えた。聖劇を練習する彼女の姿は真剣だった。キリスト誕生を象徴するクリスマスはクリスチャンにとって一年のうちで最も平安と幸福に溢れた日であり、永遠の祝福が受けられることを意味をしている。教会では留学生たちが長く練習してきた歌、聖劇、ダンスが一度に披露され、クリスマスの雰囲気が一層盛り上がった。公演後のプレゼントははじめて参加した私のような留学生にとっては、意外な驚きと喜びだった。公演成功を祝う食事は、近くの商店街で行われ、30人ぐらいの留学生が参加した。知らない人が多かったが、賑やかな食事会で話し合いが皆の心を暖め、おかげで私も久しぶりに思い切り笑った気がした。真冬の夜中で、風が強かったはずだが、全然寒さを感じなかった。しかし、帰り道、暁静の一言で笑っていた皆は急に静かになった。「日本の社会はとても邪悪だと思う。人間同士がお互いに心を開かないから。」という彼女の話がどうしても気になってほっておけなかった。

彼女の日記を開くと、「聖劇をやるのが面白い。こういうことが好きだから、第1志望の放送大学にこだわった。」と彼女は自分が教会にいる理由をはっきり書いていた。暁静は聖劇隊副隊長の黄がいつも彼女に挨拶をしてくれたおかげで、「すこし自分の存在感を感じた」が、相変わらず自分から他の人と話をしたくないし、皆も自分と話をしたがるないと

思っていた。彼女は、自分の存在感の薄さに苦痛を感じた。ニュースに関心を持った暁静は、段々日本語が聞き取れるようになったが、親子の殺し合いや虐殺などの暗いニュースの連続で、日本社会を怖く感じた。さらに外国人犯罪などの放送から、自分が歓迎されない存在だと分かり、日本人を警戒し始めた。バイト先の青年のことを「彼は私とほぼ同年代だ。お酒に弱いから、憧れのホストの仕事を諦めたと言っていた。理想がない人だ。だから、お金を全部パチンコに使ってしまったんだ。」と蔑視しながらも、大きな文字で書いた「銀座の王女」という日記のページには、様々な金持ちと会話ができ、お金がたくさん入ってくるというホステスの生活に憧れるように詳しく記述していた。「中国人の道德観は、この社会であまり通用しないかも。だって処女(バージン)は笑われることだし、水商売の女たちは普通の人より正々堂々と番組に登場している」と暁静は様々なことに矛盾を感じた。

クリスマスが終わり、新しい一年が始まった。暁静は憧れの有名私立大学を受験した。しかし、落ちてしまった。ショックを受けた彼女は、自信がなくなり、バイトに走った。「両親に電話をしない、だれにも会わない」日々が3ヶ月も続いた。

9.3.1.4 クリスチャンになる

① 修練会に向かう

4月になると新学期が始まった。教会でも一週間の神学院が終わって、伝道の時期に入り、皆忙しくなってきたが、暁静の姿は見かけなかった。伝道の反省会が行われた日に彼女の姿を久しぶりに目にした。彼女は一生懸命に餃子などの中華料理のチラシを作っていた。隣にいる旬長の崔さんは手伝いをしながら、「彼女は偉いですよ。今回学校の学園祭のリーダーに選ばれたんですよ。」と自慢げに言った。暁静は「お姉さん、いつか一緒に食事をしましょう。お姉さんと話をしたいから」と私を見つめて真剣な顔で言った。「いいよ。いつでもOK!」と気軽に答えたが、彼女の顔から不安を一瞬感じた。

5月、教会は伝道時期から旬員を育てる時期に入り、洗足式では、皆幸せそうに自分の旬長に足を洗ってもらった後、一緒にお祈りをした。隣に来ていた暁静も、大声でお祈りをした。彼女は真剣な顔つきで涙をずっと流していた。そして「お姉さん、このようにやってみてね。声を出して祈ってみて。こうすれば、らくになるよ」と、声を出さず祈禱にまだ慣れない私に言ってくれた。6月に入ると教会の方針が変わり、積極的に各青年隊の自己運営を勧めるようになり、青年3隊の集まりにも変動があった。各隊員の誕生日は青年隊で祝うことになり、旬員たちの交流も30分ほど設けるようになった。初めてのお祝いパーティーは賑わい、暁静と同時期に来た皆は平安と快樂を得たが、暁静だけは「どうして私はたのしくないの?」と呟いた。

その後暁静は受洗前の学習に参加し、7月から十分の一を出すようになり、クリスチャンになる準備ができたようだった。7月24日の旬員交流をリードした金幹事は、交流が終わる直前のお祈りを暁静にやってもらった。彼女のお祈りがうまいことに皆はびっくりした。金幹事も意外だというように笑い、「暁静のお祈りは僕より上手ですね」と彼女を褒め

た。この日から、暁静は夜 9 時からの中保祈祷会にもきちんと出るようになった。彼女は、旬長の話に従い、神様の救いを求めようと積極的に考えるようになったようだ。

7 月に入ると、修練会に向けて雰囲気は高まっていた。聖歌練習も聖劇練習も山場に入った。神様の恵みを期待している暁静は、一度も欠席しなかった。教会に長くいると、暁静は親に頼らずに奮闘している教会の人たちが見えてきて、自分のことを恥ずかしく感じるようになり、自分が子供のままではいけなくて成長意識が強まってきたという。7 月 10 日に「大人という概念は何ですか」と私に聞いたことがあった。私は自分自身、母親が亡くなってから初めて大人になった感覚をもったと素直に彼女に話した。金銭面での心配が全然ない暁静は、ずっとここで唯一やることは学習でそれ以外のことはしなくてもいいと思っていたようだ。しかし、お金があることと個人の成長は違うと最近周りの友達に言われ、一人で困難に直面せざるをえない場合でも「負けない」と信じて行くのが大人だと思うようになったそうだ。「自分も早く大人になりたい」と彼女は言った。

ところが、聖劇練習にも受験勉強にもより一層力を入れるようになった彼女は、引越しの悩みで顔色が悪くなり、かなり痩せてきた。暁静は今の住まいがバイト先や学校に遠く、時間を効率的に利用できないので、引越しを考えていた。しかし、劉君と離れたくなかった。矛盾を克服できない自分に焦っていた。「髪スタイルを何回か変えたが、まだだめ。落ち着かない」彼女は「だれかに相談したい。しかし、相談できる人がいない。最近是人と話をしたことがないような気がする。以前より話しが出てこなくなったような気がする。まだ会話の練習が必要だ」と不安を感じた。一ヶ月ほど悩んでいた暁静は 8 月 7 日に私に相談した。彼女はいつもと同じようにとてもゆっくりしたスピードで話し出し、「以前の私はこんなではなかった。日本へ来てから私の心は氷になって、行動も遅くなってきたし、声までも変ってきた。」と自分のことを全て話してくれた。ほぼ一時間半の話の間、彼女はずっとうつむいたままだった。

② 第三回目の修練会

よい天気が続く中、年に一度だけの修練会が 2005 年 8 月 15 日から始まり、参加者は 200 人近くにのぼった。今回の主題は「ビジョン」であり、若者がどのように自分の夢を掴むかという内容をめぐって世界各地から応援にきた牧師たちが演説を行い、「科学と宗教」、「成功の秘密」、「異性交際」等々用意された 13 の講座も大人気だった。

三日目の夜は修練会の山場だった。4 時からの暁静たちの聖劇公演は大成功だった。韓国からのクリスチャンたちも聖劇に出演した。最後のステージは皆が舞台に誘われ、自由に歌い、自由に踊り、会場の雰囲気は一気に盛り上がった。賛美が始まり、皆の心は更に開かれ、歓声の中で三時間も過ごした。その後の燭光パーティーは感動的なものだった。徐々に高らかに流れていく賛美歌の中で、白い蝋燭の光に囲まれた静かな雰囲気が、聖的な感動を与えてくれた。皆は兄弟姉妹のように抱き合い、祈ったり泣いたりした。最後の受洗式には受洗者が 23 人もいたが、暁静は一番に舞台に上がって涙を流しながら洗礼を受けた。

18日に第三回目の修練会は牧師のお祈りで終わりを告げた。彼女の荷物を二人で分担して持ち、地下鉄まで行くうちに、ゆっくり色々な話ができた。集団生活が苦手と言った彼女は初めて大勢の人と一緒に泊まることになり、慣れないので苦勞をしたようだった。シャワーの水が少なく、浴びにくかったそうだし、泊まる場所が汚くて、よく眠れなかったから、行ってすぐに帰りたくなかったらしい。お昼の鶏肉も新鮮ではなかったから、どうしても食べられなくて全部他の人にあげたという。しかし、今回の修練会では、神様の恵みの話になると、感動して何回も涙を流してしまったという。帰ってから感想を書くという彼女の話から、日本へ来て二ヶ月後から書き続けてきたこの日記の存在を知った。

そして、彼女は日記を書くことで自分をしっかり整理できるし、自分の人生観と価値観を発見できるから非常にいいことだと、私にも勧めてくれた。留学生活はだれにとっても特殊な経験だと思うが、彼女は、「特に特殊すぎる」この経験をこのように語ってくれた。「変化が本当に大きすぎる。今回、さらに大きな変化が起きたと感じた…実は昔の私はとても単純な人で、単純に周りの人と関ってきた。けれど、日本へ来て、この社会は本当に冷たいと分かってから、段々、自分も心を閉ざすべきだと思うようになって、本当の自分を隠して他の人と同じようになろうとした。自分に関係のないことに絶対かまわないように関心を持たないようにしようとしたが、たまにはそれはやりすぎじゃないかと自分も思う。とても疲れていると感じる。それは私じゃないから。」クリスチャンになった暁静は本当の自分を取り戻したいと言った。

③ 修練会後の変化

【礼拝日のお証し】

修練会直後の礼拝日に修練会で感動した7人はお証をした(神様が存在するという個人の経験を皆の前に語ること)。暁静は4番で心細そうに皆の前に出てきた。皆は「はやく、はやく…」と笑いながら、催促したが、私はそれをすこし意地悪く感じた。泣き顔より変な彼女の笑顔が、皆の大笑いを誘った。私はその時から涙がずっと止まらなかった。

そこで彼女はこんなことを語った。ずっと自分のことを上帝の寵児だと思っていた暁静は、この修練会で神様が自分の心を開き、自分の心に神様を迎えられるように毎日お祈りしてきたという。彼女の話しによると、彼女は昔はいつも明るい女の子であり、どんな事でも笑い、小さい頃から笑って大きくなってきたという。10歳の頃、笑い過ぎて母に叱られた事さえあったのに、日本へ来て二年、笑顔がなくなり、笑えなくなってきた。「私はよく神様にこうお祈りします。『私の笑顔を返してください。私は本当にこれが必要なんです。これが私の生活に必要です。』返してくださいと何回もお願いしました。けど、見つけられません。いくらお祈りしても見つけ出せません。」と暁静は泣きながら言い続けた。「本当です。私は笑えません。修練会の時に、あの牧師様は中国人は皆笑いが好きではないのかと聞いたが、笑い出せないんですと私は彼に言った。笑えることが本当はないから、頭が真っ白です。大学に行きたいのに、二年も過ぎて、行動が遅いせいなのか、要求が高すぎるせいなのか、なかなか受からない。自分のことに本当にびっくりしてしまいました。なんで

も遅い。信仰についても、私と一緒に来た人は皆情熱的だが、私にはまだ信仰心がなかった。」と暁静は自分の焦っている心情を皆に告白した。

しかし、ずっと生活に混乱を感じていた暁静は、今回の修練会によって、「私の心が開けて、本当に聖霊に溢れるように感じた」。自分の考えを捨て、神様がきっと導いてくれると信じるようになったと続けて語った。皆は途中から彼女の話に静かに耳を傾けるようになり、最後には彼女に熱烈な拍手を送った。

9月に入ると、教会は特に新旬員の育成に力を入れ、暁静は皆の祝福の中で自分の誕生日を迎えた。皆から褒め言葉を一杯もらった暁静は声を震わせながら、このように言った。「小椿さんを通して、私は人間の愛を知り、崔さん旬長を通して、私は神様の愛を知った。洗礼を受けた時はとても感激したので、自分が何を言ったのか覚えていなかったが、舞台を下りると、隣にいた女の子に『暁静、さっき自分が何を言ったと思う？』と聞かれた。自分は『私もやっと自分の家を見つけた』と何回も呟いたらしい。そうですね。私はやっと日本で自分の家を見つけた」。確かに受洗から、暁静は教会にいる時間が増えてきたし、日記を読むと、神様への告白が日々書かれるようになった。以前は修練会の天道歷程で声を出して意見を述べる勇氣さえなかった暁静は、変り始めた。

【自宅訪問とバイト先での食事】

修練会は忘れがたい記憶になり、日々の関わりが私と暁静の友情を育ててくれたおかげで、いつの間にか、私たちは何でも話せるような友人になった。9月の中旬頃、暁静の自宅を訪ねたことがあった。二人で夕食を食べながら、長い話をした。

本を読むのが大好きな彼女は、政治や金融などのことを一杯知りたいが、日本語が読めないことを残念に思っていたし、ずっとギターを習いたかったが、実現できなかったと言った。教会での活動がすこしだけこの残念な気持ちを癒した気がしたという。

両親の話しになると、暁静は涙を流した。勝ち気な暁静を心配している母親は、ずっと大学は有名ではなくても構わないといい続けてきたが、彼女は、自分の父親が故郷で有力者だから、神様の栄光をたたえるのと同じように父親の栄光もたたえたいと思い、有名な大学に入ることを目指してきたという。昨年の失敗で自分の殻に閉じこもった暁静は、テレビでニュースを見たり、捨てられた新聞を読んだりしてきた。日本社会の暗い面に危険を感じたが、おかげでヒヤリングも読解も大分進歩したようだ。

あの日私は彼女の家泊まった。食事後の片付けもお風呂の用意も全部暁静がやってくれた。翌日の朝、起きると、彼女は既に朝食を用意してくれていた。牛乳を飲み、彼女が作ったサンドイッチを食べ、筆者は人に世話をしてもらって幸せを久しぶりに感じ、胸が一杯だった。

後日、筆者の意見を聞いて、彼女はバイトを辞め、受験勉強に入った。最後の給料日に暁静は筆者を誘い、バイト先で食事をした。以前の店長はお酒を盗んでやめさせられ、現在の店長は二十歳ぐらいの青年だ。「新しい店長より手早いし、お客さんも全部見れるから、皆に頼られている」と暁静が自慢げに言ったことを私はまだ覚えている。

サービスをしてくれたのは南京から来た 20 歳前後の女の子だった。暁静の話によると、この子は今大学生だが、勉強にあまり熱心ではないらしい。しかし、音楽とファッションに詳しいから、今の若い店長と話しが合う。いつも馬鹿のように笑いながら、仕事でミスをして許されると。「私はだれかに言われるとすぐ直す、彼女は何回言われても、直さない。でも、彼女の両親は大学教授だから、うちの両親より社会的な地位があつて、羨ましい。」と暁静は言った。バイトを辞めた暁静は、女社長と長い付き合いをしたい気持ちを電話で伝えたかったが、自分が子供だと無視されるのが怖くて諦めた。

私の目を見ながら話せるようになった暁静は、教会の皆の話をよくするようになり、特に皆を愛している小椿のことを感激したように何回も話してくれた。

9.3.1.5 受験期の明暗

① 志望大学への熱戦

精神状態がすこし安定した暁静は全力で新たな挑戦を始めた。長い受験期の戦いの中で、希望の光が見えなくなり、弱気になる時が暁静にはよくあつた。あまり会えないが、メールで彼女を応援しつづけた。「何も分からなくなって、頭が真っ白になった」時には、自分のことを信じられなくなり、「英語がやっぱり難しい。どうしよう。時間もあまりないし、お姉さん、私は無理をしているんでしょうか。今まで。」と自信がない話を C メールでよくした。しかし、私がすこし励ますと彼女から「苦労した末の成功は何よりうれしい！たとえ失敗しても後悔しない！今までの努力は絶対にどこかで役に立つ」というような返事がまた来て、私の励ましにもなった。同じ聖劇部で活躍している暁静と解放君は、励ましあう友だちになり、それぞれ自分の目標を目指して奮闘し始めた。

勉強できなかった父親の夢を叶え、将来は父親の手伝いをするため、経営学部を志望したという理由書を書くことによって、彼女は未来の自己像を具体化した。まだ日中貿易発展の掛け橋になろうというほどの大きな考えはなかったが、留学生活が無駄ではないことを深く感じるようになった。11月10日に大学の試験があり、13日は留学生統一試験だった。統一試験で得意な数学がよくできなかった暁静は、母親に電話をかけ泣いた。そして18日の試験結果発表ではやはり不合格だった。「昨日夢を見た。不合格だって、やっぱり仕方ないから、他の大学へ行くしかない。苦しいけど、頑張ります。でも目茶苦茶大変だった」。彼女は深夜まで眠れなかった。

20日の収穫節は、寒い日だった。薄着だった暁静は顔色が悪かった。失敗は予想通りのことだから、大丈夫だと皆の慰めに気力なさそうに答えた。「私を入れないことはあっちの損だと思ふよ。〇〇大学は人を見る目がないとうちの先生も言ってくれて私を慰めようとした」と言い、彼女は笑い出した。彼女を元気づけるため、教会の先輩たちは、P 大学や C 大学などの大学が学生を集められずに悩んでいるという話を色々持ち出した。しかし、彼女は「そのような大学には行きたくない。そうなってしまったら、すごく悔しくなる」と言いながら、泣いていた。このような大学では、皆勉強も生活もいいかげんに過ごしているからだという。不安を感じた暁静は、大学を 7 つも応募した男の子の真似をすることま

で考えた。

すこし落ち着くと、暁静は、ある公立大学を受験することにした。受からなかったら、国立大学に挑戦しようとするようになった。私が領事館の公証書発行の再開を彼女に伝えに行ったのは11月27日のことだった。天気は相変わらず寒かった。3階にいる暁静は静かに「日米貿易」の記事を古い新聞から切り、自分のノートに挟み入れているところだった。今回希望した人間行動学は彼女が本当に興味を持っている専門であり、彼女はこの講座の内容などに非常に詳しくかった。試験当日、小論文も面接も少しできなかった部分があったが、ほとんどよく出来たという嬉しそうな報告をしてくれた。しかし、結果は不合格だった。うわさでは今年は一人も合格できなかったという。

② 意外な展開

運命がいつも意外な展開をみせてくれるように、暁静は行きたくないと言っていたQ大学を受験することになった。応募締め切りの当日、なにも準備をしていなかった暁静は、先輩の李さんについて行っただけだったが、彼は彼女の代わりに願書に全部書き込んでくれ、近くのコンビニで写真を撮らせ、二時間以内に手続きが全て終わった。試験日は同じ週の日曜日だという。あまりにも順調だったからかもしれない、暁静はこれは運命だと感じた。

受験後の暁静がスーツのまま教会に戻ると、礼拝は既に終わり、Q大学の韓国人の女教授が自分の留学経験を話している最中だった。教授が皆に質問ないかと聞いたところ、解放君が手を上げ、興奮した様子で立ち上がった。「先生はQ大学の教授ですね。うちにも今日受験生が一人います。」と話し出した。「僕はもう帰国することにしましたが、彼女は本当に優秀です。彼女が大学生になれなかったら、この人たちは皆大学生になれないと思います。教授、どうか彼女を大学生にしていただけませんか。」解放の行動は、あまりにも周りを驚かせた。暁静も緊張した様子で席を立てて教授にあいさつをした。教授は、今日はここへ来なかったら、面接官のはずだったのにと残念そうに言った。Q大学出身の女教授の奮闘史を聞いた皆は、すこし出発点が低くても明るい未来が作れるということについて、交流の時間で活発に話をした。

「運命が私をこの大学に導いてくれたから、私は行くわ。しっかり勉強して、近い将来大学院に行こう」という暁静は、ずっと大学生になるのに憧れていてこの夢が実現できるかどうか分からなかったので緊張してきたという。今回の結果は皆の予想通りで、彼女は大学に合格した。祝福の中に国立大学を勧める声もあった。「夜、留学生統一試験の成績が分かった。日本語 258、総合 147、数学 128、全部で 533 点。どうしたらいいの？私も分からない。神様の意志に従おう！（日記・2005/12/22）」と暁静は迷っていたが、結局積極的に行動しなかった。

9.3.1.6 未来に向かって

① 新年の始まり

2006年の2月になると、皆それぞれ行く道が大体決まり、教会では春節を迎えるムードになった。新年を教会で過ごした暁静は、旬長たちが作った餃子を食べ、「知恵の言葉」のおみくじを引き、皆と色々な楽しい話をし、心が温かく感じたという。「実は私は愛情で一杯の人だ。皆のことは見ると、本当に弟のように可愛く思う。今回は自分も愛を人に分けることができうれしく思う」。暁静はかつて準旬長になることに自信がなくて断ったのだが、今では旬員の面倒を熱心に見るようになり、中旬長の崔さんにも中国語を教え始めた。

さらに暁静は海燕の紹介でバイトを始めたが、店長によく褒められるし、日本語も最近考えずに口から飛び出すようになり、若い店長とよく冗談を言ったりしているようだ。「私は本当に海燕(来日二年目の頃から、母親が事故で昏睡状態になっている)に感心しているわ。以前は福建省の人を心の中で馬鹿にしていたけど、海燕をみると、福建の女の子は本当によく我慢するなあと思った。私が彼女だったら、きっと笑えない。でも、海燕はまだ笑えるなんて…」。暁静は海燕から元気をもらったという。

暁静は大学が決まり、学費も皆の応援で全部自分で出した。解放も帰国して会社を起こすことにした。ある土曜日に半年前に暁静と解放と私とで約束した食事がやっと出来た。解放は自分の「ベント」(自転車)を押し、三人で笑いながら、近くの店まで歩き、楽しく食事をした。皆自分の苛められたことや落ちこぼれたことなどをたくさん話した。修練会以来、神様によって反省の日々が続いてきた暁静の日記には、この日のことが感謝と喜びが溢れた大きな文字で示されていた。

② 帰国

2月末、暁静は二週間、帰国した。日本に戻ってから、教会の人たちにお土産を送り、私にも紅梅の掛け軸を送ってくれた。彼女にとって今回の帰国の収穫は大きかったようだ。オリンピックのボランティアでも、英語以外にもう一つ外国語ができた方がいいから、これからもっと努力しないといけないと言った。中国国内のほうが日本よりチャンスが多いと考える劉君は、留学生生活を終えて帰国した。暁静は同じ孤独を感じる莉莉と一緒に住む事になり、新しい生活を迎える準備ができた。

暁静がいっぱい話をしたいと言ったため、私たち二人は一緒に梅田で食事をしながら、ゆっくり話しをした。彼女が故郷で久しぶりに会った高校の同級生たちは、既に前途有望な青年に成長していた。暁静は皆に会うのが怖かったのだが、会って無力感が消え、皆からパワーをもらったという。また、久しぶりに家族の皆と一緒に春節を送ったためか、暁静は、両親の人生史やお婆さんとお爺さんの人生まで詳しく話してくれた。かつて彼女は両親以上に立派にならないといけないと思い込んでいたが、話をするうちに、両親が実は自分に何も要求していないし、好きなように生活してほしいというのが親の本音だったと分かったという。

帰り道で、暁静は、将来の考えを話してくれた。この夏に弟が大学に受かったら、一緒に雲南旅行へ行き、バイトでためたお金で学校へ行くお金がない児童の援助をしたい。留学を終えたら、好きなところに住み、日中友好に貢献できる文化活動に関する仕事をした

い。「お姉さん、私は夢物語を言っていると思いますか。でも、夢を持てば、元気が出てきます」と別れる前に彼女は恥ずかしそうに言った。数日後、学習意欲が非常に高い暁静は、学校の履修科目を取り過ぎて、先生に注意されたようだ。

③ 初めての花見

時間の経つのは早いものだ。少々寒さが残る中、大阪で2006年の春を迎えた。暁静の提案で、莉莉と三人で花見をした。連日の雨だったが、4月3日は珍しく晴れていた。時期尚早だが、淀川沿岸の桜がすでに綺麗に咲いていた。雨の洗礼を受けた花びらはすこし白っぽいのが、瑞々しくみえる。暁静はすこし髪を切ったようで、薄化粧をしている顔がとても元気にみえる。桜を見ても、川の水鳥を見ても、いつも静かに笑みを浮かべている彼女が印象的だった。

造幣局の川岸では、太陽が暖かく感じられた。祭りの準備で忙しそうにしている人たちの姿が花見のムードを高めてくれたおかげで、すこしワクワクしてきたが、日の当たらないところに並んでいるホームレスの青いテントの家は今でも忘れられない風景だ。あいにく造幣局は12日から開放ということで、有名な桜は今年も見られなかった。すこし残念だったが、莉莉がカメラを用意してくれたおかげで、写真を撮って楽しめた。

日本へ来て長いのが、ずっと忙しくて花見をしようと思うたびに、桜はいつも散ってしまっていた。今年はやっと初めてゆっくり花見ができたので3人は顔を見合わせて笑った。この半日だけの花見も日本でのいい思い出になるだろう。

2006年の4月は、『草原』(教会の月刊誌)が一周年を迎え、日本語学校及び専門学校の留学生に向けても発行が始まった。中には、暁静の投稿があり、成功したい自分の苦悩と苦痛が書かれている。花見の時に撮った写真も載せている。淀川の満開の桜を背景にしたあの純粋な笑顔がなにより可愛かった。教会には皆の努力のおかげで新しい顔がまた一杯増えてきた。彼らの相談を聞いている暁静の姿を見て、師母(牧師の奥さん)は「ここは、天国ですね。」といつも嬉しそうに言っている。はたから見れば、だれも彼女に悩みがあるとは思えないだろう。彼女はすでに新しいスタートを切ったのだ。

9.3.1.7 充実した大学生の一年目

① 教授との出会い

大学に入った暁静は周囲の大学生はあまり自分のモデルにならないと思ったが、ゼミの教授との出会いが彼女の学習の原動力になっていた。東大出身の教授は60歳前後で、外国の色々な大学で教えた経歴を持っている。授業をするのにいつも目をいっぱいに見開いている先生の姿やユーモアのある発言から、彼女は勉強への意欲を感じるようになった。「先生の授業が終わると、バイトに行きたくなる。学習の意欲をめちゃ強く感じるから、夜のバイトに行かなかったこともあった。やる気が出た時は特に勉強の効率がいいと思うから、何日も続けられる」。豊かな知識に憧れている彼女は、ゼミの先生の存在を神聖に感じ、先生との出会いを神様にも感謝した。様々な知識を一日でも早く吸収したいため、彼

女は学校での勉強に一生懸命だった。時間を節約するため、彼女はいつも食堂のお昼のピーク時を避けて一時半ごろ図書館から出て食事に行き、一人でうどんなどを食べてからまた図書館に戻っていく。彼女は自分のこのようなシンプルな生活が非常に充実していると感じたとよく言う。ゼミには中国人の留学生が少なくはないが、暁静はいつも一番前の席に座って先生の話聞いていた。授業が終わると、先生の代わりに暁静はいつも前に行って黒板を消す。先生に近づきたいが、どうすればいいのかわからない彼女は、その行動を同級生に笑われたことがある。しかし彼女は全然気にしなかった。「どうせ黒板を消すのが好きだし、いつか先生に注目されるだろう」と彼女は思っていた。

② 多忙な日々

教会の信仰生活が軌道に乗り、日曜日以外の時間でも、彼女はときどき教会に行くようになった。学校での勉強が順調に進んでいた一方で、暁静は色々なバイトにチャレンジしようとした。4月から彼女はパン屋のバイトを始めた。パン作りに興味があり、ずっと習いたかった彼女の夢が実現した。それまで外国人のバイトがいなかったパン屋では、最初よく間違えて苛められたが、彼女はそれをも経験の一つとして真剣に受け止めていた。この、朝5時から9時まで週3日間だけの仕事だったら、彼女は気が楽だったはずだ。しかし、ラーメン屋と一ヶ月前から始めた夜のバイトを一緒にやると、暁静は体力の限界を感じる時が多くなった。5月の学園祭は学校が休みなので、私(筆者)は久しぶりに暁静に会った。彼女の顔色は悪かった。「夜のバイトを体験したかったけど、今はもう十分だよ。やっとなぜ皆勉強をしないのかが分かったの。疲れすぎると勉強なんかできなくなるよ。生きることしか考えられない。食べることと寝ることだけだね。」と言い、彼女は夜のバイトに耐えられずに次の週に辞めることにした。「お姉さん、私は欲張りな人だよ。何でもやりたい、やれると思ったけど、間違ったようだね」と彼女は半分冗談で自分のことを話してくれた。一気に勉強したいから焦っていた彼女は「急がないでゆっくり勉強しなさい」と先生にもよく言われるらしい。パン屋の仕事も急いでやるから、手も腕もよくやけどをした。腕の傷を見せながら、勉強とバイトを両立できない自分の気持ちは非常に複雑だと暁静は言った。二ヶ月ぐらい続けた夜のバイトを辞め、暁静はぎっしり詰まっていたスケジュールを調整した。後日、「この一週間、ゆっくり新聞が読めたし、日記が書けた。嬉しかった!」と彼女はメールを送ってくれた。

③ ゼミの教授との関わり

大学の勉強に大きな期待を抱いている暁静は日々努力している。大学に教授が数多くいるが、身近に接触できる人は、ゼミの教授しかいない。言うまでもなく教授は留学生にとって一番大事な人だと言える。暁静の教授は独身でよくゼミのメンバーにご馳走したり、笑い話を言ったりする魅力的な人だ。しかし、「先生は忙しくて自分の学生のことを無視したりした時がある。先生はたぶん気づかなかつたんだろうけど、学生は逆にそれを全部気にしている」と暁静は言う。6月のある日、先生から返されたレポートは暁静のものしか直

されていなかった。ゼミの人たちはショックを受けた。そして「先生が君だけ重視しているから、私たちは明日からもう来ない」と彼らは言って次週のゼミに来なかった。皆のレポートを見たら、ネットから写したりしたものが多いと彼女は分かったが、授業を続ける先生は何も言わなかった。だから、それは皆への警告なのか、それとも先生が忙しいからできなかったのか暁静も分からなかった。

教材や本などがない授業では、先生はよく皆に色々なものを調べさせる。メンバーの中にはこのような授業を無意味に感じ、勉強をごまかす子もいるが、暁静は違い、全部興味を持ってやってきた。「先生の言うことにきくと道理がある」と彼女は信じているからだ。しかし、たまには先生のことを分からない時がある。「私はよく努力してレポートを提出したけど、先生はそれをちらっと見て机に置いたままのようで、自分の書いた物があまり価値がないように感じた。ほかにもまた提出した物が一ヶ月も経ったのに、まだそのまま置いてあったことがあった。先生はたぶんそれを忘れてしまっただろうと思った」。

暁静の卒業論文のテーマは『時計』だ。二回目のゼミでいきなり決めたもので、あまり深く考えなかったため、本を読むうちに、テーマが狭すぎるのではないかと彼女は疑問を持ち始めた。先生に素直に話をしたら、「時計だけでも、十分研究できるよ。参考書だけでも読みきれないほどあるから、それを全部読むのに時間がかかる。ドイツ語やフランス語は読めないでしょう？大丈夫だよ。僕ができるから。」という冗談半分のような先生の話から彼女は勇気ももらった。

10月の学園祭にはテーマ自由のスピーチコンテストがあり、留学生の参加者が多かった。暁静もこの中国人の多い大学で、皆に注目されるにはいい機会だと思い、準備し始めた。しかし、途中で彼女は自信がなくなり、諦めようとした。しかし「参加が一番大事だから」という先生の励ましもあり、最後まで彼女は頑張った。前夜に先生に直してもらった「一番美しい希望と思い出を残すため」という原稿には自分の日本での体験、「バイト先で弁当を作ってくれた日本人への感謝」や「試験の不透明性の指摘」などが色々書かれていた。当日、参加したほかの留学生のスピーチは感動するほどすばらしかった。暁静は暗記できなかったこともあり、賞をもらえなかったが、参加できてよかったと言った。皆の考え方を聞き、スピーチの姿を見て、暁静は初めて自分の周りでも優秀な子がいっぱいいることに驚き、自分の学校への見方も変わった。

④ 嵐山の紅葉

季節は秋に移り、相変わらず忙しい日々の中で、暁静はバイトも勉強も順調に進んでいた。ラーメン屋の店長の紹介で店のあるお客さんに中国語を教え始めたし、パン屋でも皆と仲良くなってきた。従業員が5人いるうち中年のおばさん以外は皆若者だから、話がよく合う。ほぼ同年代の店長（男性）は皆と何でも話すし、中国の事に関してはよく暁静に聞いたりしていた。「夏休みは帰国したから、戻った時に皆にお土産を配った。年齢が近い二人の若い女の子も、実家に帰った時や旅行に出た時に私にお土産を持ってきてくれた。」と暁静はこのような付き合いを満身に感じた。もう一人のアルバイトはたった16歳の桜さ

んで、非常に可愛い女の子だ。両親がいないため、お婆さんと二人で暮らしている。一歳上の恋人とよくラブホテルに泊まったりして家にあまり帰らないようだ。「自分の友達にはもう子供ができた子もいると彼女は言った。君はまだ若いから、子供を作ったらあかんよと私は彼女によく注意した。彼女はまだ子供だから、他の人はだれもこのような話を彼女に言わないようで、私が言ったら、彼女は聞いてくれるような感じ。」と、暁静は彼女のことを妹のように思い、よく話し掛けた。彼女も暁静のことが好きで、暁静と一緒に働けるようにわざとシフトを変えた。11月は紅葉の季節だ。店長は暁静の希望を聞いて皆を嵐山に連れていった。京都は店長の実家だから、運転や案内を全部やってくれた。一日だけのハイキングだったが、皆楽しかった。店長は時間を忘れてしまい、夜の仕事に遅刻した。「ある時から急に周りの人がだれでも無視できない宝物のような存在に感じるようになった。以前は日本は自分の人生のただの通り道でしかないと思っていた。バイト先の日本人もただいつか通り過ぎる旅の道の景色だけだと思っていた」。新秋のある日、私（筆者）は暁静に久しぶりに会った。彼女は嵐山の旅や教えている日本人が中国語を話せるようになったことなどを嬉しそうに話してくれた。

⑤ 書評を書く事

2006年12月頃、先生は暁静に『アジアで輝いている女性達』²¹⁾のスピーチの録音を頼んでアジア経済のフォーラムに行かせた。任務を無事に終わらせるために、彼女は録音機の使い方を事前に何回も練習した。事後の口頭報告で先生と話し合うことが出来た彼女は「先生と話し合うことができて幸せな気分だ」とその日の日記に書いた。先生と話をしたい、先生と堂々と議論をしたいと思う暁静は、よく先生のオフィスを覗いていたが、呼ばれない限り勇気を出して入ったことはなかった。「先生のスケジュールはいつも詰まっているようで、話している言葉も母語じゃないから、短時間で自分の言いたいことが伝えられないし、自分には大事な用事もないから、先生の邪魔になるのではないか」という恐れを彼女はずっと抱いていたからだ。授業中、先生は中国のことについてよく話す。「中国は禅の発祥地だが、禅は日本で50種類ほどに発展した」というような先生の話に彼女は黙って聞いた。「異議を持った時もあるが、自分が自国の文化を知らないから反論もできない」と彼女は母国の文化の無知に気づき始め、先生の話に入れないう事を残念に思っていた。

クリスマスの締め切りまでに、暁静は一人だけ書評を書く宿題を提出できなかった。書評の題材に『国家の品格』（藤原正彦,2005）を選んだ彼女は分かるまで何回も読んだことで時間が過ぎてしまった。「『昔の学生たちは僕がなにも言わなくても、出張から帰ると皆いつも素晴らしいものを提出してくれた』と先生はよく言う。そんなことを言われたら、私は自分の準備不足のせいではないかと思ってしまう。先生はたぶん私が怠けているから

²¹⁾ タイ、ベトナム、シンガポールなどアジア諸国の著名企業に貢献した女性達の集会。日本の代表者は松下電器からの女性。テーマは『アジアで輝いている女性達』。内容は仕事と家庭を両立できる会社の環境作りについての話。

出せなかったと思っているでしょ。でも、先生は知らない。私が本を読むのに一文字一文字調べたことを。」と暁静は先生が自分のことを分からないと感じた。「時には自分がなにもできないと感じるよ。日本語の勉強が苦手だから、中国にいたら、よりたくさんの方が学べるはずだと思うし、先生ももっと私のことを理解してくれるだろうと思うけど」。

編入生の一年目は速く過ぎ、それを振り返った時に、暁静は「経営・経済に関しては、自分は何でも知っているような気がしていたけど、よく考えたら、一つも詳しく説明できない浅い感じ」と言った。自分のことを反省して、日記にはこのように書いた。「自分は何でもできるようになりたいから、あっちこっちつまみ食いしてきたような気がする。勉強の中心はなかった。少なくとも今まで学んだ分野に何が入っているのかをはっきり分かるようにしよう」。暁静はゆっくり勉強しようと考え、大学を卒業したら、まず研究生として教授の元で学んでみたいという考えを先生に話した。

9.3.1.8 信仰が深まる大学の二年目

忙しい大学の一年が終わり、暁静は必須の単位はほぼ取れ、後は論文を書くだけだった。学校やバイトに精一杯だった彼女は、信仰生活にあまり力を入れていなかったことに気づき、もっと信仰活動を行おうとした。ちょうど2007年の春に青年隊が調整され、暁静は福建省の子がほとんどの13隊の副隊長として任命され、隊長の小椿と青年隊の管理に協力するようになった。

3月から、暁静は自分の時間を調整して教会の朝の祈禱会（6時～6時半）に参加するようになった。朝は5時ごろ起きて5時半ごろ電車に乗り、祈禱会に参加する。それが終わるとすこし勉強した後、教会から学校に行く。このように2ヶ月続けてみたら、気分が伸び伸びとしただけでなく体まで軽くなったように感じ、朝の祈禱に参加してよかったと暁静は言った。4月の伝道からも彼女は喜びを感じた。それぞれの日本語学校に行ってみるうちに、日本を全く知らない新入生の話や彼らの困惑した目から、暁静は昔の自分を思い出し、伝道が「魂を救うこと」だという牧師の話がよく分かった。行く先々で、彼女の熱心さに惹かれて教会に来た子もたくさんいたが、警戒心が強い子に断られたことも多かった。しかし、嫌がられても彼女は諦めずに頑張りを続けた。「伝道は面白かった。これは心の触れ合いだから、やればやるほど面白く感じる。小さい頃から、ずっと祖国のためになにかできたらいいなと思っていたが、今はこの伝道を通して祖国のために自分の微力を尽すことができ嬉しく思う。」と日記に自分の考えを書いた。

① 教会の近くに引越した

ルームメートの莉莉が4月に修士課程を修了して帰国することにしたので、暁静は6月に教会の近くに引っ越しした。一人分の荷物だけだが、当日、青年隊の皆が手伝いに駆けつけてくれた。まるで自分の妹と弟のような彼らを見て彼女は感動した。「自分が愛を少しあげただけで、皆愛をこんなに一杯返してくれたことを温かく感じた」。皆へ感謝する気持ちもあり、暁静はある日曜日の礼拝後、新居に13隊のメンバーを招待した。準備は前夜か

ら始まり、母の手料理を思い出しながら、色々な材料を購入しておいた。そして当日は朝から、料理の準備を急いだ。一人で約 10 人分を用意するのはなかなか大変だったが、皆が好きなスイカも忘れずに大きなほうを選んできた。久しぶりに満腹になるまで料理を食べられて泣いた子がいた。その中の一人の女の子の話を暁静はずっと忘れられなかった。

「彼女は本棚を見て羨ましそうに『本が多いですね、私も本を読むことが好きですよ』と言った。『好きなように借りて行ってね』と私が言ったら、『いいえ、持って帰っても読まないから』と答えた。彼女は学校とバイトで忙しすぎるから、本を読む時間はない。去年、夜のバイトをして分かったの。人間は疲れると生きることしか考えられないから。」と暁静は悲しそうに自分の体験を後になって話してくれた。彼女と久しぶりに教会のことを話したが、一番多かったのはやはり旬員たちのことだった。「周りの人たちは皆花のようだよ。きれいに咲いている花のようだよ。」と暁静は嬉しそうに言った。「皆、輝いているところがあるよ。例えば、陳は留学生統一試験で 300 点を取ったの。彼女は『皆、福建省の子を嫌がるけど、私はやる気を見せてやる』とずっと頑張ってきたし、もう一人の女の子は成績は普通だけど、心がとても優しい」と暁静は言った。

青年隊の管理では隊長の小椿との間に意見の相違が多少あったが、意見を交換することによって、協力の大切さを大いに学んだ。旬員たちの状況を把握するため、彼女は常に彼らと連絡を取ったりしている。病気になった子に薬を送ったり、悩んだ子を慰めたりしている彼女は忙しかった。旬員が間違ったら、叱ることもあるが、彼らは彼女を信頼している。6月中旬、旬員の陳強が交通事故にあったが、彼が真っ先に連絡したのは副隊長の暁静だった。警察、保険会社、領事館と、最後まで暁静は彼に付き添った。事故処理が終わると、リサイクル屋で働いている陳強は感謝の気持ちを表すために暁静の家まで中古の洗濯機を届けてくれた。

旬員との付き合いが深まるにつれ、暁静は教会にいる自分のことを考え直した。「昔は教会の人は皆勉強に熱心じゃないから、この教会は自分のいるところじゃないと思ったが、最近は段々自分がこの教会にいるべきだと思うようになった。私は人に影響を与えられる人間だから、勉強が好きで向上心がある私のような人が必要だ。皆簡単に諦めてしまうから、私のような人がたくさんいれば、皆もっと頑張れるんじゃないか」と彼女は思う。また「彼が真っ先に思い出したのは学校の先生ではなくこの教会の私だ。」という陳強から、暁静は自分の責任の重大さを改めて認識した。

② 映画館のバイト

新居はパン屋とラーメン屋から遠いため、暁静は近くの映画館で新しいバイトを見つけた。6月下旬、パン屋の皆は教会の近くに来て彼女のために盛大なお別れ会をしてくれた。16 歳の桜さんは別れを惜しんで暁静に手紙を送った。暁静は妹のようなこの子の手紙を何回も読んだし、なにかあったらいつでも相談に乗ると彼女と約束した。映画館の仕事は 7 月に始まり、30 人もいる若い日本人と一緒に仕事が出来て、暁静は嬉しくてたまらなかった。掃除とチケット販売と飲み物やポップコーン販売しかない仕事は簡単に見えたが、研

修の初日に、暁静はお辞儀から教えられ、映画館のバイトも甘くはないことがよく分かった。すこし細かすぎると彼女は思ったが、色々な人から色々なものが学べるこのバイトに彼女は興味を持った。「皆性格が違うし、趣味も違う。仕事を行うコツも違う。ある女の子はお客さんとの短い接触でどんな言葉が一番適切なのかをよく知っているし、ある男の子は販売の声が売上にどのように影響しているかを教えてくれた」。マイクを通して映画館のお知らせを放送する時があるが、暁静の声がきれいだとお客さんが褒めてくれた事がある。「ここはちょっと違うけど、自分がアナウンサーになったような気がした。小さい頃から自分の声が綺麗だということを知っているから、ずっと歌やアフレコなどの分野で活躍できればと夢を見ていたけど、親は勉強に影響を与えるのではないかと思って、機会を作ってくれなかった」と彼女は恥ずかしそうに言った。

③ 魂を育てること

ほぼ同じ時期、暁静は教会では魂を育てることをやり始めた。「ダビデ王」のような聖書の物語はたくさん生き生きと話せるが、旬員に聖書を教えるうち、彼女は聖書の知識不足を感じ、「自分の言っている言葉は全部この世の言葉であり力がないようだ」と言った。より詳しく聖書を知るため、彼女は毎週の木曜日に愛子に学びながら、『聖書人物』を読み始めた。聖書を勉強するうち、暁静は自分が実は非常に傲慢な人間だと分かった。周りの人を見ると、莉莉は中国の若者のために信仰の本を書こうと思っているし、小椿は人を救うために自分の一生を神様に捧げようと誓い、旬員たちのために何でもやっている。教会の兄弟姉妹たちは金銭上の色々な悩みを持っているが、他人のために色々なことをやっている。しかし、バイト先のあまり未来のことを考えない日本人の友達や生活を享受することしか知らない他の友達と比べたら、彼らが他人のことをずっと思いやっていることを強く感じた。「ずっとアナウンサーになりたかったけど、実現できなかったし、日本へ来る前に希望プロジェクトに参加して不就学の児童をバイトのお金で一人養おうと思ったけど、それも実現できなかった。たかさんのことをやっている教会の兄弟と比べて、自分は何もできていないのではないか？自分は本当に小さくて道端の草のようなものだ。小さい頃の夢もあくまで先祖のほこりになるという考えしかを持っていなかったし」と暁静は言った。そして、教会に来始めた頃、頭がよくて、裕福な生活をしている教会の外の友達以外は友達だと思わなかったことまで彼女は反省した。

8月8日の日記に暁静はこのように書いていた。「初めはずっと空を向いて歩いていた。足元には石があることを知らなかった。頭の中にどうも大きなものがあるような感じで、それをやろうとしていた。具体的にはどんな物なのか分からなかったが、先祖のほこりになろうと思っていたことは分かる。でも、北京放送大学に受からなかった日から混乱に陥り始め、慌て出した。段々足元の石をどけないといけないと意識するようになって、石を運び始めた。そのうちに信仰を持つようになった。現在は自分の家族だけではなく、自分の祖国のためになにかをしたいと思う。自分ができることは少ないが、彼らを愛することはできる。愛を注ぎ込むのだ。愛は止められないものだから」。

終わりに

7月に入ると、暁静は論文の準備に忙しくなった。中国の格差問題への意識が強まり、現実の社会に役に立つ研究をしたいと教授に話し、研究テーマを変更したのだ。大学の生活について、「自分はまるで砂漠を歩いて喉がからからになっている人のようだよ。あちこち探し求めたけど、水が見つからない」と先生の意図が分からない暁静は泣きそうな声で、先生との付き合いをどうすればいいのかわからないと言った。先生は忙しすぎるから、自分は先生のことが分からないし、先生も自分のことを分かっていないと彼女は感じたのだ。それで大学院に上がったら、どのような先生に出会うのかも心配している。しかし、現在、彼女は大学の懸賞論文に応募し、夏休みに自分のことを書いて先生に読んでもらおうと考えた。もっと自分のことを先生に理解してほしいと思ったからだ。勉強もバイトも信仰も全部頑張らないといけない生活は相変わらず忙しいが、神様のために生きていきたい彼女は躊躇せず前に進んでいる。

9.3.2 暁静の分析

9.3.2.1 暁静の成長と変化

日本へ来る前の暁静は、成績優秀で、勝ち気な人だった。勉強だけに集中している彼らは、純粹で、社会の複雑さを全然知らない。だから、巻頭の Me も本ケースの暁静も、幻想を持って日本へ来た。しかし、現実とは想像と違っており、生活、学習とバイトに一気に直面して、混乱に陥ってしまった。

「私はここへ来て、勉強をしたいから、バイトをしていなかった。しかし、ずっと混乱を感じていた。生活は混乱していた。バイトを休んで家で整理し、自分を整理する。普通の中国人だったら、皆バイトの時間を増やしたがるが、私はいつも休んでる。しかし、休んでも自分の整理ができない。何をすべきなのか、どこからすべきなのか全然分からなかった(ノート・2005/08/20)」。彼女は自己管理に随分悩んでいた。

自分自身に起った変化に気づき、その改善を求める暁静は、色々な方法を使って自分の状況を変えようとした。買物やヘアスタイルを頻繁に変えることや日記に怒りをぶつけるなどの消極的な方法によってストレスを発散してきた。以下のように、日記を書くことによって自己整理を図り、他人からの学びを通して成長を求めようという積極的な戦いも見せている。神様へ助けを求めることも一つの手段となっている。

A 日記を書くこと

暁静は日本へ来て三ヶ月後日記を書き始めた。自分の変化があまりにも大きすぎたのがその理由だった。日記を書くことをとおして、自己の整理ができるし、自分の人生観と価値観が発見できるので、非常にいいことだと彼女は言っている。元々強いはずの自分と現実の弱い自分の戦いが長く続いていた。失敗の連続から「なぜ計画通りに行かないのか？やはり、理想が高すぎるのか、自分への要求が厳しすぎるのか。」という反省を繰り返してきたが、「やっぱり、諦めない、自分は完璧主義かもしれないが、成功したい、だれより成功したい、早く成功したい」という辛い叫びを上げ続けてきた。

暗い時期には自分の苦悩を聞いてくれる人も、自分を励ましてくれる人もいなかった。だから、日記に写した成功した人々の物語から、力を得ようとした。自分が時代に遅れていると感じ、怖がりながらも、新聞やニュースで世界を掴もうとした。「今日は、日本人と一緒に盆踊りに行ってきた。たくさんの日本語を話した。すこし進歩を感じた。今日は進歩があつてよかった」。成長意識が強い暁静は、ささやかなご褒美を日記で自分に与えている。

B 他人を通しての学び

「私は他の人と違い、早く成長したい。だから、皆に指摘されてうれしく思う。指摘されると私は直す」。暁静の他人を通して学びたいという意識を、私は初めての彼女との話しあいで強く感じた。

「今までだれからも叱られたことがなかったよ。でも、彼の言うことが正しいから、私は直すべき」と劉の叱りを彼女はしっかり受けとめた。寂しがりやの二人は、お互いに支えあいながら、暮らしてきた。引越したくなかった理由は彼から政治と軍事に関する知識が聞けなくなるということだった。

バイト先の女の子を見るときも、隊長の小椿を見るときも、暁静はいつも「直す、直さない。」という言葉を使っていた。彼女は年配の人との付き合いが好きで、解放にもよく勧めていた。「年配の人から、よい人生の勉強ができるから。」と彼女は考えていた。だから、引越しの相談をする前に、彼女は私の履歴を全部聞いたし、熊本の小蘭との同居経験も無駄だと思っていたいなかった。

C 神様へ助けを求めること

日本へ来て、自分自身に起った変化に気づき、その改善を求める暁静は、積極的だった。長い間「両親に心配をかけたくない。でも、相談できる人がいない」と思っていた暁静は、教会の人と話もしなかった。しかし、信仰に熱心な同世代の人をみて、彼女は「この神様を心の中まで迎えたい。自分を変えてほしい。」と修練会に参加した。

感銘を受けた暁静の変化は大きかった。周りの人たちを全部見直し、心が柔らかくなり、なにより教会を家だと思えるようになった。日記でも、怒りと弱気の雰囲気が一気に変わり、神様への告白によって反省の日々が続くようになっている。人間は人間から離れるのではなく、人間を愛すべきだという認識の正しさを確信し、キリスト教の真理が自分の鏡になった。「人間に苦勞をさせる神様の意図は、人間を高めるためである。そう考えれば、耐えられるのだ。」と彼女は悟り、現実を受け止めるようになった。

9.3.2.2 暁静の特徴

暁静のケースにおいて、彼女の父母は、改革開放のおかげで金持ちになったが、同年代の新世代の両親と同じように文化大革命時代に学習機会が奪われ、あまり知識がなかった。暁静を一流の大学に行かせずに留学をさせた父母は、ほとんどの親と同じように子供のためだけに生きていると言っている。その親の気持ちをくみとり、ほとんどの留学生在が暁静のように成績でその期待に応えようとしている。

「しかし、幻想を持って日本へ来たら、世間知らずで勝気な自分が突然社会の複雑さを感じ、どうすればいいのか迷ってしまった。…なにより期待していた全てのことは、自分から遠く遠く感じ、その距離は光年で計算できるほどだった。私は苦悶と苦痛に、とうとう劣等感と無力感に陥った。いくら努力をしても、どうしても最初の起点に戻ってしまう。私はもう勇気と力がなくなり、自己否定をし始め、激情に溢れる未来を疑い始めた」。教会の月刊誌で自分のことを告白した暁静は、虎のように存在感が強かった昔の自分が病気の猫になり、心が枯れてしまったような時期が長く続いたという。

「理想が高い、挫折に弱い」彼らの中には、途中で学校を辞める人もいる(城石,2004)し、バイトに夢中になる人もいる(範, 2004)。早く成功したい暁静もその中の一人で、受験の失

敗や社会の複雑さに直面して、勉強にも人との付き合いにも自信がなくなり、周りの人を信頼できずに長い間心を閉ざしていた。

物語で述べたように、暁静は視野を広げることと有名な大学に入学することの両立が可能だという留学のメリットを狙って日本へ来た。有名大学を目指すという彼女の目的ははっきりしていた。一年目に国立大学を一所、二年目に有名私立大学を一所、三年目に有名私立大学を一所と公立大学を一所受験してきた彼女は、力をつけながら、目標を実現するために努力してきた。三年目の彼女の総合成績(533点)をみると、国立大学や有名私立大学は難しくはなかったと言える。しかし、彼女は自分のレベルに相当する大学に行けなかった。その原因を分析すると、彼女が適切な進学指導を受けていなかったことや大学側の入試の不透明さなど留学生受け入れ態勢の不備が窺える。しかし、有名大学にこだわる彼女の志望校の選択も重要な原因の一つではないかと考えられる。

もともと思春期から青年期にかけての年代というのは、人間関係に対する不安を感じやすくなる時期である。日本語学校時代の交通事故の一件で、彼女は教師の好意により傷つけられ、「頼んだのに忙しそうで返事をしてくれない」と近くにいた教師を遠く感じている。日本人の友達との歴史認識の違いから暁静は友達に距離を感じている。経済力が違う留学生や志が違う留学生と付き合いたくなかった彼女は孤立した存在だった。

さらに、親子の殺し合いなどのニュースで恐怖を感じて、日本人に警戒心が強くなったことや、バイト先のホストに憧れている男の子を蔑視しながらも、「銀座の女王」に憧れていることなどの矛盾が、彼女を苦しめたようだ。日中関係が悪化している状況の中、暁静は「身を守るために、議論を避けたほうが聡明だ」と考え、本音をだれにも言わないようにしていた。

このように日本の社会道徳の不透明化(田中,2001:3)に対する認識不足や日中関係が悪化している状況の中、更に試験の失敗や対人関係の失敗が重なり、ずっと高い評価を受けてきた自己像が崩れ、大きな挫折を味わうことになった。

自分を理解してくれたり、受け入れてくれる場がないと絶望を感じた暁静は、熊本の日本語学校も大阪の専門学校も、当初は教会さえも、自分にとって意味がある場所だとは思わなかった。栄光に満ち溢れ、周囲の賞賛を集めていた過去の姿こそ本物の自分であって、今の自分は本物ではないと位置づけた。未来のあるべき自己像を過去の栄光あるそれと直結させて考えようとしており、今現在の自分はいないものでしかなかった。これは暁静の考えだが、新世代留学生のもっとも典型的な考えを反映しているだろうと考える。

9.3.2.3 教会の役割

若者が宗教に関心を持つのには様々な理由があると思われる。暁静の場合は、神秘的ものを信じる潜在意識が元々強かった。マージャンをしている父親の後ろに立つだけで父親がマージャンに急に勝ったりしたことも、自分の不思議な人生も、まるで神様の助力があるように思ったし、大学入学での意外な展開と長年願っていた引越しの実現から、神様の導きを感じたと本人は言った。

神様の恵みを受けている彼女は自分のことをこのように語っている。「よく考えたら、私は自分のことを全くわかっていなかった。理想が高すぎた。たとえば、100階の階段があったら、翼が付いていたとしても、1回だけでは登ることができないだろう。それから、信仰が私の鏡になったことで、自分のことをはっきり見えるようになり、再び立ち上げられるようになった。(『草原』・6期)」という。さて大きな成長を見せてくれた彼女にとっては、教会がどのような存在なのかと以下の4点から考えてみよう。

① 助けが求められる場

教会の人たちは皆貧乏だし、話しも合わないと感じた暁静は、教会に来なかった時期があった。しかし、彼女にとっての初めての旬長である青年3隊隊長の小椿は、彼女のことを諦めずにずっとメールや電話で声をかけていた。彼女の全てのことを相談に乗っている小椿は積極的だった。そのおかげで、彼女の心が暖められ、再び教会に来るようになったのだ。教会の人と話しをしたくなかったが、会うたび挨拶をしてくれる聖劇隊副隊長の黄から彼女は自分の存在感を感じたという。学園祭の成功も教会の皆の助けが欠かせなかったし、受験の失敗からショックを受けた暁静を慰めてくれたのも、教会の先輩たちだった。確かに教会にいと、どんな時でも相談に乗ってくれる旬長たちや、バイトを紹介してくれる皆、学費を貸してくれた皆から、彼女は愛を感じないわけにはいかない。だから、旬長の話を聞き、神様の救いを求めるために日々お祈りをしていた暁静は、修練会で皆の間の愛に感動して元の自分を取り戻そうと考えるようになったし、誕生日の祝い中で皆に「小椿から、人間の愛を知り、現在の旬長から神様の愛を知った」と言った。

② 自己探しの場

初めて親から離れ、自分の想像と全然違う日本の社会に出会った暁静は社会の複雑さに直面して、様々な矛盾を感じ、自分の本心を隠すようになった。しかし、教会の皆との出会いやキリスト教との出会いは彼女を変えた。9.3.2.1 暁静の成長と変化でも述べたように、暁静はキリスト教の信仰によって、是と非の基準がはっきりし、自分に直面できるようになり、暗い時期から立ち上がり、再び笑顔になれたと『草原』で語っている。暁静のように、自己探しの時期とも言える思春期の少女、少年は、常に自分のポジションをどこに置けばよいか迷いながらも、どこかで社会に対しても自分に対しても高く期待している。善悪を判断する能力が十分にそろっていないまま、社会に出ると、従来の価値観、人生観が崩れやすい。しかし、皆と日々の聖書学習をし、教会に設けている哲学や心理講座を聞き、議論を重ね、そのおかげで、彼女は本当の自分を見つけた。そして、教会の伝道に参加することによって、彼女は自分のやっていることを「国への一つの貢献」だと思えるようになり、自分が教会にいるべきだと思うようになった。

③ 自分の能力を養う場

本を読むのが大好きな彼女は、政治や金融などのことをたくさん知りたいが、日本語が読めないことを残念に思ったし、ずっとギターを習いたかったが、実現できなかった。しかし、教会での活動ですこしだけこの残念な気持ちが癒された気がすると彼女はうれしそうに話したことがある。自分の心を閉ざした暁静は一時期皆と付き合いたくなかったが、

聖劇部の活動にずっと熱心だった。「聖劇をやるのが面白い、北京放送大学に行く夢が叶えられなかったこととも関係がある。」という暁静の日記から、聖劇活動が彼女にとっては大きな意味を持っていることが分かる。彼女は自分で脚本を作ったり、台詞を考えたりする聖劇活動では自己表現ができて、生きがいを感じただろう。暁静は様々なことに興味を持っているようだ。教会で中国語の新聞を読んだり、必要な部分を切り抜いたりしている彼女の姿を何回もみかけた。牧師の普段の説教からも、土曜日の『異性交際』の講座からも、生活の知恵を得ようとしている彼女は積極的だ。知識が増えれば能力も強まると考える彼女は教会を中国語の情報源としても、利用しているのだろう。

④ 自分の能力を発揮でき、存在感を与えてくれる場

日本語が上手になるに伴い、暁静は趙(暁静と同じ旬の男の子)の日本語の補習教師になり、ずっと教えてもらってきた中甸長に中国語を教えるようになった。成長が早い隊長の小椿や、悲しみを抱きながら笑って生きている海燕のようなずっと彼女に無視されてきた教会の同年代の人たちは、彼女にとって尊敬できる存在になり、『草原』編集部の張は、彼女と語り合える友人になり、解放や暁静の旬員が彼女の援助の対象となっている。ここで、暁静の豊かな感情が彼らの存在によって引き出され、彼らの存在を通して、暁静自身に豊かな個人を実感させてくれているのだろう。小椿もいつも学習好きな暁静を手本にしていると言っている。人に愛され、人を愛し、人に必要とされる存在感を与えてくれた教会は彼女に自信を付けてくれる場であり、ここで自分を見つけた彼女は、神様によって救われたと言っても過言ではない。

要するに、彼女にとって、教会は、色々な意義がある場所である。このような安心して相談できるところで、自分の才能を養い、色々な知識を身に付け、活躍できるようになった暁静は、この場所で過ごしたおかげで、大学に入学でき、友人も出来、将来への不安が段々なくなり、安心できる自分の世界が出来たのである。周囲から必要とされているという実感は、自分という存在のかけがえのなさ結びついて、生の充実感をもたらしてくれる。教会のシステムへの参加が他者との深い関りの中へ入っていくきっかけとなり、己のかけがえのなさを実感していく契機として、彼女のような若者の居場所をより広げていくことになったのであろう。

9.4 文珍の無力

9.4.1 文珍の物語

はじめに

文珍は私（筆者）が最初南港の海辺で出会った K 教会の留学生の中で唯一の女の子だ。当時は彼女が来日して、半年が経ったばかりだった。彼女は私が教会へ行くたびにいつも挨拶してくれたし、色々な事も説明してくれた。2005年3月に私が帰国した時も、彼女から絶えず電話がかかって来た。3月13日に私達は久しぶりに会って一緒に食事をした。その時、彼女は順調に大学に入り、教会に住み始めたばかりだったので、楽しい話を色々してくれた。話の中には日本人への感謝の気持ち、牧師夫婦への愛情及び未来に対する彼女の期待などがあった。その後、彼女との付き合いが緊密になったため、彼女は自然に私の観察対象となっていった。彼女の悩みの相談にも付き合いながら、借金のトラブル、バイトを失ったショック、バイトを探す恐怖から登校拒否までの彼女の感情の起伏をずっと見つけてきた。とても純粹に見えた文珍には意外に矛盾した一面があった。留學生活の困難を克服するのに、自信がない彼女はいつも無力感を感じ、この無力感が解消されるまで約3年間もかかった。彼女は少し落ち着くと、自分のストーリーを少女時代から語ってくれた。

9.4.1.1 少女時代の文珍

黄海の沿岸にある威海市は、大自然に恵まれた中国山東省にある中規模の都市だ。地理的にも有利であるため、新興地域として海外の投資が増える一方、近年国内各地からの移住者も年々増えている。三菱、日立などの有名な日本企業の看板もあちこちにみえる。1984年の秋、文珍はこの都市からすこし離れた山村に生まれた。彼女には9歳年下の妹がおり、文珍の父母、姉妹だけではなく、曾祖母、祖父母と一緒に暮らす7人の大家族である。父は末子で、どこの家庭でもそうであるように親から可愛がられている。その長女として、文珍は生まれた日から皆の愛を集めていた。小さい頃から口がうまく甘えるのが上手な文珍は両親の宝物で、家業である小売店の手伝い以外、農作業も家事の手伝いもしたことがなかった。「母は私のことをとても可愛がってくれたから、農作業が辛いと言ったら、すぐやめさせてくれて、遊んでもいいよと外での遊びまで許してくれた」と言う。

村で唯一の小売店を営んでいる文珍の父は、隣村までよく顔が知られた人だ。何でもできる父の影響を受けた文珍は小さい頃、何にでも自信満々な子だった。10人しかいない小学校のクラス（計画生育政策実施以来、農村でも子供が減っている）では成績はずっと一番だったし、品物の計算はだれより速かった。文珍の名を知らない人はいない村で、彼女はずっと子供達の「餓鬼大将」だった。「あの頃は、自分にできないことはないような気がして、何でもできそうだと感じたよ。」と彼女は言った。自分を溺愛している母と違い、

父は文珍の学習に厳しかった。文化大革命で学校に行けなかった父の期待は「私と違う人生を歩んでほしい。自分ができなかったことを実現してほしい」と大きく、将来立派な大学生になってほしいとよく彼女に話した。だから、小学生の時にすでに文珍は父の期待を実現させようと決心し、将来、必ず大学生になると担任の先生に宣言した。

大学進学を夢を抱いていた文珍は、優秀な成績で小学校から県立中学校に入った。都市の子供との出会いは初めは新鮮だった。しかし、まもなく文珍は彼らと話が合わないと感じた。学習と遊び以外のことはあまり考えない田舎の子と比べ、都市の子は皆服や両親の仕事や恋愛のことなどを自慢するのが好きなようだった。この世界に合わないと感じた文珍は段々皆と離れ、皆と話をするのが嫌になってきた。勉強に専念することにした彼女は中学校卒業までずっと優秀生という評判を維持してきた。しかし、市立高校に入ると厳しい寄宿生活が始まり、なかなか慣れなかった彼女は生活に混乱を感じたうえに、苦手な幾何などの理系科目がますます難しくなった。それに伴い、勉強にも力不足を感じ始めた。

「理系はどうしても好きになれなくて、悩んでいたよ。総合成績はまだいいほうだけど、どうも自信がなくて自分のことをとても恥ずかしく感じた」と言う。家の商売がうまく行かなかった事情もあり、その頃から文珍は人の前で話をする自信がなくなったそうだ。

9.4.1.2 日本へ行かされた

① 大学受験の失敗

高三の勉強はますます厳しくなり、緊張した雰囲気が一層高まっていた。大学を目指している文珍は一心に勉強していた。「私の成績ではいい大学には入れないかもしれないけど、大学にうからないとは考えなかった。」彼女は自分の進路として大学に行くことしか考えられなかった。クラスには、勉強を放っておいて、毎日日本留学ばかりを考える子もいた。文珍は後ろに座るその子を見てよく笑ったが、彼女自身は留学のことなど一切考えたこともなかった。娘をいつも自分の誇りのように思っている両親はやれる事を全部やってくれ、彼女の応援に一所懸命だった。

しかし、結果は思う通りに行かなかった。大専（日本の短大に相当）からの知らせは何通も来たが、期待した大学からの通知は一つもなかった。大専を出ても前途がないと思った彼女は通知の封筒さえ開けなかった。人生の選択を迫られ、文珍は一つの決断を下した。周りの子と同じように勉強の心を捨て、お金を儲ける自立の道に行こうと、文珍はシンガポールへの研修生に応募した。労働力外国輸出が盛んになっている山東省では、農村の高校卒の若者にとって、これは海外に出稼ぎに出る絶好の機会だと思われた。地理の授業で知ったシンガポールは非常に綺麗だったから、文珍は小さい頃からずっと憧れていた。だから、その面接に大きな期待を託した彼女は不合格の結果を知った時に、非常にショックを受けた。

② 人生の選択

研修生への道が閉ざされ、人生が行き詰まった時に、ある小さい出来事が起き、それが

彼女の運命を変えてしまった。夏場のある日、「隣村の若者たちは、皆日本留学に行くらしいよ。お宅のお嬢さんは行かないのか」と父は隣村の人に声を掛けられた。仲介者が父の高校の親友で、日本留学は意外に色々なメリットがあるということだった。それを聞いた父は、その時、心が動いた。あの人に娘を託すのは安心できると父は留学の相談を文珍に持ちかけた。しかし「シンガポールに憧れているから、日本留学に特に魅力を感じない」と彼女はまったく無反応だった。

父は留学のことを言い出すと、祖母は猛反対した。祖母は保守的な人で、何もできない文珍のことや借金の返済のことを心配していたし、なにより可愛い孫を遠いところまで行かせるのが許せなかった。しかし、父は家族がいることで、外へ出られなかった青年時代のことや、同じような原因で田舎から出られなかった自分の父のことを思い出して、やはり彼女を日本に行かせようと決心した。「子供を外に羽ばたかせ、外の大きな世界で道を開いてほしい、自分のように村に閉じ込めさせたくない」と、父は文珍の留学の事で祖母と喧嘩までした。最終的に祖母は父の情熱に負けてしまい、文珍は家を抵当にして銀行から借りた10何万元の留学費用で日本に行くことになった。

③ 初日の日本

年々厳しくなっていた留学審査では、半分以上の希望者が不許可になった。しかし、あまり期待をしていなかった文珍は意外にも難関を乗り越え、ビザは順調に下りた。出発の前夜に、母は泣き、父はくれぐれも体を大切にしようと言った。翌日、日本留学の子達は集合して、チャーターしたバスで一緒に煙台空港まで行った。席が限られていたため、空港まで送れない祖母と母は、涙を流して彼女に別れを告げた。バスは走り出して村を離れ、母と祖母の姿が段々ぼんやりとなった。4月の空港は各国に向かう留学生で賑わっていた。親たちの団体が大げさなほどの見送りをしていて、文珍は驚いた。皆留学するのだと思うと、彼女の心の底にあったわずかな不安は奇妙にも消えてしまった。

初めての飛行機、初めての海外出発を彼女は新鮮に感じ、興味津々で機内の明かりを付けたりしてみた。しかし、「色々なことを面白く感じたけど、入管で言葉が通じなくても特に異国に来たという感覚は全くなかった」と文珍は言った。空港から出るとすでに日が暮れていた。迎えに来た人に連れられ、電車に乗り換えた彼女は、窓からこの先進国の様子を覗いてみた。外は暗くははっきり見えなかったが、大きな建物の間に挟まれた木造の古い家を見た文珍は失望を隠せなかった。「先進国にもこのような小さい古い建物があるとは全然思わなかったから、すごくおかしく思った」。たどり着いた目的地は仲介者の知り合いの家だ。奥さんが中国人のこの家で、文珍と同行の10人が住み込み、月4万2千円の日本留學生活が始まった。

9.4.1.3 楽しかった一年目

① 初めての日本生活

7人の男子と4人の女子は二つの部屋に分けられた。6畳ぐらいの部屋は彼女らにとって

窮屈だったし、中華料理屋を営んでいる大家さん夫婦が作ってくれたものもまずかった。しかし、皆知り合いで仲がよいため、文句はなかった。皆よく一緒に食事を作ったり、夜中まで話し合ったりする寮の生活は、最初は楽しかった。

初めに一番心配したのはやはり日本語の勉強だった。中国で日本語を3ヶ月ぐらいしか勉強できなかった彼女は、学校でついて行けるかどうか非常に不安だった。ところが、彼女の運はよかった。関西で一番いい日本語学校に恵まれ、クラスわけのテストでは、進度が遅いクラスに行かされたが、自分のレベルにぴったり合っていたため、安心して新しい勉強に入っていた。初日、学校に行く途中、道に迷った文珍を学校まで連れていってくれた花屋の店員さんややさしい日本人の先生のことを思うと、彼女は自分の新しい人生がここから始まってよかったと感じた。周りの留学生達も非常に純粋で、大学、それもいい大学に入ることしか考えていないようだった。だから、文珍も必ず大学に入ってみせると心に誓った。初めの3ヶ月はバイトもできないので、「まず、しっかり勉強しよう」と彼女は父に相談して約束した。

今の教会に来たのは来日後一週目の日曜日のことだった。仲介者の従弟Mが皆を連れてきたのだ。「教会には仕事がある」という煙台の空港で聞いた仲介者の一言を覚えていた彼らは、それまで教会に入ったことはなかったが、日本に来てから一日も早く来たいと思っていた。初めての教会では、挨拶を無視されるという文珍にとってちょっとした不愉快なことがあったが、楽しい記憶がほとんどだった。日曜日の教会は賑やかだった。たくさんの中国人留学生とここで出会えるとは思わなかった彼女は、様々なことを新鮮に感じた。初めてのカレーは美味しかったし、礼拝前の賛美歌を聞くのも好きだった。綺麗な聖歌隊のリーダーの女の子を見るのも好きだった。牧師の説教になると、すこし耐えられなくなる気がしたが、後ろを見たら、一緒に来た男の子達はお腹が一杯になったせいなのか、皆寝てしまっていた。その光景を彼女は面白く感じた。

ところが、途中で同郷の女の子に呼ばれて、彼らが礼拝堂を出ようとしたところ、出口に立っていた師母（牧師の奥さん）は彼らを止めようとした。日本語が分からない彼らは師母の話が分からなかった。「こっちは出たいのに、そっちは出してくれないという感じでいやな気持ちでした。」彼らは教会はただご飯を食べさせてくれるわけではなく、来たら帰らせないのだと思った。しかし、「今思えば、師母はきっとせっかく来たら、なにも聞かずに帰るのはもったいないじゃないのか」というような話をしたと思う。

② 教会へ来ること

【目的のある継続】

その後、新入生歓迎会があり、麗香は文珍たちの寮まで来て彼らを誘った。「みんなは日本に来たばかりで、先に来た人に面倒を見てほしい気持ちはよくわかるわ。なにかあったらMに遠慮なく言ってね。」という彼女の話は文珍たちの心に響いた。だから、寮の皆は歓

心を買うようにM²²⁾を大切に扱い、彼の言うことなら何でも聞いた。その後の運動会にも参加した。このように文珍と一緒に来た小蕾について継続的に教会に来るようになった。初めて教会に触れた小蕾は皆の祈りを見て皆が精神病だと思っていたが、文珍には全然違和感がなかった。ただ、「彼らは事前に暗記した物を礼拝堂で暗誦している」と思い込んだ。文珍は教会で今まで食べた事なかった韓国料理の美味しさを覚えたし、それより、自分をやさしく扱ってくれる教会の人たちに段々親近感を感じ始めた。

しかし、信仰のことを彼女はまだ真剣に考えていなかった。ただ、「君たちのために、私たちはずっと祈っているのに、なぜ君たちは自分のために祈らないのか」という李幹事の反問を彼女は今でも忘れられない。新入生歓迎会で李幹事は新入生に紙に願望を書かせ、皆のために祈ってくれたが、文珍たちはだれも自分のために祈っていなかったからだ。「皆来たばかりだし、遊び心で来たから、祈りはいいことかもしれないけど、心からキリスト教を受け入れていない。だから、だれも祈らないのは自然だ」と文珍は思った。しかし、まだキリスト教を信じるころまで行かなくても、李幹事が自分のために祈ってくれることを彼女はうれしく感じた。今後教会に行かなかつたら、李幹事は祈ってくれないだろうと思ったこともあった。

【鄭旬長との出会い】

教会に来た新入生は、暫くしたら、各旬に移動し、自分の旬長のもとで信仰生活を送るようになる。文珍も同じだった。李幹事から聞いた話では、旬の交流でも自然にバイトや勉強の話などを皆が言い出すと聞いていたから、文珍は首を長くして自分の旬長を待っていた。「ずっと誰かに頼りたいという気持ちがあるから、いい旬長に恵まれたら、これからのいろんな面で助けてくれるだろう」と彼女は期待した。しかし、李幹事が旬長を紹介してくれた瞬間、文珍はがっかりして言葉が出なかった。教会に初めてきた日文珍の挨拶を無視した人がこの鄭旬長だったからだ。「だれでも、この知り合いのいない教会に来た時に誰かに声を掛けたり、掛けられたりしたい」と思う文珍にとって、彼は頼りにならない冷たい存在でしかなかった。

朝鮮族の鄭旬長は文珍とほぼ同じ年だが、肌が白くて中学生のように見える。文珍が彼の最初の旬員で、どのように扱えばいいのかあまり分からなかったようだ。しかし、知っている限りのことを文珍に教えようとした。教会の人は多いが、普段直接連絡できるのは旬長だ。日々の接触を通して文珍は鄭旬長のことを見直し始めた。まっすぐな鄭旬長の言葉に傷つけられたりしたこともあったが、彼の信仰の熱心さに敬服しないといけないと文珍は思った。最初の交流では二人はよくぶつかったが、「どのようにしたら、君は聞いてくれるの？」という旬長の努力を彼女は心から認めはじめた。

²²⁾ 仲介者：文珍たちの日本留学の仲介をやっている文珍の父の高校時代の友人。仲介者の従弟M：彼と彼女の彼女は文珍たちより一年前に日本に来て、伝道できた教会の人の紹介でバイトを見つけたという。当時、この従弟は中旬長の麗香の旬員であり、麗香から新入生を教会に連れてくることを頼まれていた。

【寮の人間関係の変化と教会への関わりの深まり】

季節は夏に近づき、教会は、夜泊まる人で一杯になった。皆好きなように2階、3階で寝てもだれも文句を言わない。椀儀や小椿はいつも皆に布団を敷いてくれる。たまに泊まる文珍は教会の雰囲気非常によと感じ、寮に帰りたくなくなってきた。寮に長く住むと、色々な揉め事が出てきてしまい、人間関係が複雑になったからだ。仲介者が皆のお金を多めに取ったことが大家さん夫婦の話からばれてしまったうえに、バイト探しを急いでいた子にMは5万でバイトを紹介し始めた。「バイト、お金」ばかりが話題の中心になり、皆との話が合わないと感じた文珍は寮に帰りたくないと思うようになった。ある夜、布団を敷いてくれた椀儀に「椀儀は本当にやさしいですね」と文珍は憧れるように言った。「神様はやさしいから、人間も優しくなれるのです。」この彼女の答えに文珍はある感動を感じた。

しかし、本当に教会を好きになったのはある夕方の出来事がきっかけだった。その日の夕方、文珍が教会に来ると、旬長の鄭旬長が牧師の車を洗っているところだった。彼女は手伝おうとしたが、「汚いから、君は傍で見ていてだけでいい」と旬長に断られた。周りは静かで雑音がなかった。夕陽の柔らかい光の中で、鄭旬長は一緒懸命に洗車をしている。傍でずっと静かに見ていた文珍は「この安らぎの雰囲気、牧師と鄭旬長の間の愛情」に惹かれ、自分がずっと求めていたのはこのような生活だとわかった。その日から、文珍は頻りに教会に来るようになった。

③ クリスチャンになる

日本語学校も楽しかった。担任の先生は学校で一番ユーモアのある人で、授業は人を笑わせ、寝させない力を持っていた。こんな面白い先生に生まれて初めて出会ったと文珍は思った。しかし、勉強以外のことにはだれも関心を持ってくれない。学校と違って、教会にいと、必ず自分のことを聞いてくれるし、自分をまるで子供のように扱ってくれることを彼女はうれしく感じた。だから、じっと座って何もしなくても家に帰ったように落ち着いた。礼拝日になると、彼女はいつも一番前の席に座り、熱心に牧師の話を聞いていた。牧師の人間関係の説教は道理があるし、大好きな賛美歌『全新的你』（新しい貴方）を歌うたび、涙が止まらなかった。歌詞の前半は自分の心をわかってくれる人がほしい、後半はイエス様があなたを変えてくださったという内容で、それは彼女の心まで響いた。鄭旬長との交流も深まり、彼女は彼を頼りにするようになり、生活の悩みなどを何でも気軽に相談するようになった。「旬長はまっすぐな人だから、彼の言うことを受け入れにくい時もある。しかし、よく考えたら、皆道理があるから、素直に受け止められる。だから、旬長の言うことなら何でも聞きたいし、従いたい」と。だから、旬長に金曜の礼拝にも参加しなさいと言われると参加するし、十分の一を出すようにと言われると自然に出すようになった。修練会があると聞いた文珍は小蕾と、迷わず喜んで8千円の費用を李幹事に出した。バイトもなくお金もない二人は、修練会がどのようなものなのかも知らなかったが、修練会で必ず自分自身に大きな変化が起きると信じていた。

洗礼の勉強をした直後の2004年8月に、待ちに待った二回目の修練会が六甲山で行われ

た。文珍をはじめとする 10 人ほどの留学生が洗礼を受けた。大勢の若者と一緒に日本で夏休みを過ごせるのを彼女は非常にうれしく思った。食事の時やお風呂に入った時など、皆よく恵みを受けたかどうか話し合ったりして、中には非常に感動した人も何人かいたようだった。しかし、文珍自身は「特に恵を受けたとは感じなかった。ただ、賛美歌を歌ったり、祈祷をしたり、説教を聴いたりした時には心から嬉しかった」。

緊張したが楽しかった修練会から帰った後、文珍は周りに起こった変化に気づいた。以前はお皿洗いさえ文珍の分もしてくれた先輩たちは、お皿を洗いたかったら洗ってもいいよと遠慮しなくなってきた。「子どものように扱われてきたから、いきなりそうになってしまうと、すごく戸惑ったけど、よく考えたら、確かに自分はもうお客様じゃないよね」と文珍は今後自分が子どものままでいてはいけないことを意識し始めた。

そして、文珍は 10 月の新入生の案内など積極的に参加するようになった。私（筆者）との出会いもこの時期だった。歓迎会の時に彼女のそばにはすでに旬員が一人付いていた。文珍は旬員の面倒を頑張ってみていたが、実は心細かった。「自分がまだだれかに頼りたいのに、人の面倒を見るなんてできるわけがない」と思った文珍は準旬長になることを初めは断った。しかし、「職分は神様が下さるものだから、神様があなたはできると思ったら、あなたはきっとできる。受洗した人は多かったが、だれでも準旬長になるわけではないよ」という鄭旬長の話を聞いた文珍はやってみることにした。人の面倒を見るのは面倒くさいし、どのようにやったらいいのかも彼女は分からなかった。しかし、先輩達が自分にやってくれたことを思うと自分も責任を果たさないといけないということにはよく分かった。それで大きなことは出来ないが、よく電話をしたり、生活の悩みなどを聞いてあげることから、準旬長としての第一歩を踏み出した。

④ 神様が下さった大学

日本へ来て半年が経った。文珍は学校以外は教会が全てのん気な生活をしてきた。一年間の生活費を持ってきた彼女はあまり危機感を感じなかったのか、母国にいるように暮らしてきた。それにどうしても大学に入りたいので勉強だけに集中したかった。しかし、次の学期の学費準備に忙しい皆を見て、彼女は嫌でも M に 3 万払ってバイトを紹介してもらわざるを得なくなった。そのバイトは服を畳んだりする仕事であり面白くないが、非常に楽で時給も高かった。しかし、不景気で文珍が来て 3 ヶ月も経たないうちに店が倒産してしまった。

ちょうど同じ時期に日本語学校は受験期に入り、緊張感が高まっていた。学校では他の科目も設けられ、一層忙しくなったので、彼女はあまり生活のバランスが取れなくなってきた。国公立大学や「関関同立」などの有名大学を目指す留学生が多かったが、大学の名前を見るだけでも頭が痛くなるほど数が多かった。何処へ行ったらいいのか文珍には全然分からなかった。ただ、どこの大学でも受験料は 3 万もかかることだけが分かった。それでそれを節約するため、文珍は学校の推薦を狙っていた。推薦ならその学校の試験を受けるだけで、大学は面接さえ通れば済むから、日本語に自信がない自分にとって、一番の選

択だと思ったからだ。

ところが推薦でも簡単に受かることはなかった。文珍は何回も試験を受けたが、全部失敗してしまった。中には非常に行きたい大学もあった。この大学の授業料が一番安いことを文珍は気に入っていたからだ。しかし、神様にもしきりに哀願したが、なかなか受からなかった。時間が経つにつれて、推薦で入学できる学校が段々少なくなった。最後の大学を受ける時、文珍は色々心配したが、全てをかけた。「この学校のことは全然分からないけど、面接で落ちる人が多いので、いきたくなかった。でも、最後だから、仕方ない」と。その時、旬長の一語は彼女に力を与えた。「神様が下さるものだったら、最後の時に合格させないはずはない」と言われた文珍は、自分がなんとなく受かる予感がして、筆記試験後、二次試験である面接の準備はしなかった。それで彼女を心配した先生は仕方なく全部用意してくれたそうだ。当日同じ学校の 3 人が一緒に面接しに行った。大阪からの距離の遠さに三人とも驚いたが、それより、面接官の質問が準備したものとは全然違っていったことに皆がっかりした。

「とても緊張したから、先生の質問をあまり考えずに準備したものを一気に暗記したまま言っちゃった。先生に自分の言葉で言ってと言われたけど、私はまた『私は…と申します』自己紹介をもう一回言った。終わったとたんに全然先生の質問に答えてないことに気づいた。どんな本を読むのかと聞かれて、歴史の本が好きだと言ったら、どんな本が好きなの？と聞かれて、『三国志』と答えたけど、人物の名前は日本語で言えないから、中国語で言った。後の質問はほとんど分からないと答えた」。文珍は悪い予感を抱いて学校から出てきた。しかし、他の落ち込んだ二人と違い、文珍はほっとした気分だった。彼女は面接前に旬長の言葉を思い出し、皆を慰めようとした。「あなたはイエス様のいい子だから、神様はあなたを守ってくれるけど、私たちはあまり教会に行かないから、だれも守ってくれない」と二人は元気なさそうに言った。

ところが、結果は意外なもので 3 人とも合格したのだった。文珍が憧れた大学に受かった留学生たちは、能力試験を受けなかったため、合格が全部取り消された。驚喜した文珍は冗談で鄭旬長にこのような話をした。「神様が本当に自分の子に祝福を下さるのなら、私一人だけを大学に行かせるはずなのに、なぜ他の子たちも大学に行かせたの？」と。「神様にはもう一つの言葉があるよ。愛する子が至るところ、その土地までも祝福を受ける。だから、彼らはあなたによって神様の祝福を受けたということだよ。」という鄭旬長の説明に文珍は満足し、電話で「大学に合格した」とうれしそうに両親に報告した。同期で大学に受かった人の中には実力のある人が一杯いたが、一番ラッキーなのは文珍だった。「確かに自分の実力で受かった大学じゃないことは認める。神様が下さった大学だ。」と文珍は自分の夢を叶えてくれた神様の愛を肌で感じたようだった。

9.4.1.4 教会への引越しと初めてのインタビュー

大学が決まると、文珍は早速工場で夜勤をして学費稼ぎをしようとした。しかし、夜勤は辛くて 2、3 日したら、彼女はもう耐えられずに辞めてしまった。バイトは半年前から始

めるはずだったのに…と彼女は教会にずっといてなにもしなかった自分のことを後悔していた。学費稼ぎはもう間に合わないから、借りるしかなかった。「当日貸してくれると約束してくれた人はだれも学校に来なかった。仕方なく当日学校に来た何人かの留学生に借りた。自分でも不思議に思ったけど、なんとか全部集まって出せた」。ほっとした文珍は夜の祈祷で神様に感謝した。バイトの必要性を感じた文珍は、教会の皆にバイトの紹介を頼んだが、最後にある教会の留学生がバイトしている所の洗い場に決まった。「自分が何もできないから、料理作りはだめだし、ホールは日本語が必要だから、できない。この洗い場の仕事も自分にできるとは思わなかった。皆の話では、ものを洗うには色々コツがあると聞いたから」と彼女は洗い場のバイトにも自信を持っていなかった。しかし、仕事は初めはゆっくりできたことで、文珍は少し安心した。

2004年の10月に私（筆者）が文珍に出会ってから、教会に来ると彼女はいつも真っ先に声を掛けてくれるようになった。そばの席を取り、イヤホンまで用意してくれた。新人の私にとっては、彼女は欠かせない存在だった。牧師の説教を聴く時や聖歌隊練習をする時はよく会うが、同じ旬ではないため、聖書学習などの交流は少なかった。2005年に入ると、私は帰国などで忙しくて3月までは教会にあまり行かなかった。2月の終わり頃、彼女は私の事を心配してくれたこともあり、電話をしてくれた。教会に引越したことや大学に合格したことなどいい事ばかりの報告だった。それで私は久しぶりに礼拝日に教会に行き、北京から持ってきたお土産を彼女に渡し、木曜のインタビューをお願いし、食事も約束した。

① 木曜日の約束

3月17日木曜日は雨だった。インタビューの用意ができてから、11時半の約束に間に合うように教会に向かった。日曜日と違い、木曜日の教会は非常に静かだった。私が来る足音が聞こえたかもしれない。金幹事が一階の事務室から出てきた。彼と挨拶してから三階に行った、金幹事の言う通り、文珍はまだ起きていなかった。外の洋室では立博と劉牧師（愛称）が二人椅子に並んで興味深そうにある本を読んでいた。

12時近くになると、文珍はやっと起きて目を擦りながら和室から出てきた。中にはもう一人女の子が熟睡していた。時計を見た彼女はびっくりしたように「もう12時だ！目覚し時計は鳴らなかったの？」と皆に聞いた。「何百回も鳴ったよ」と劉は冗談を言った。文珍は失敗したというような顔をした。バイトを始めてから、彼女はよく疲れを感じるようになったそうだ。寝るとだれが起そうとしても起きられない状態がずっと続いてきたから不思議だと、私にも何回も話してくれた。彼女が顔を洗ってから、私たちは近くの商店街に向かった。

外はすでに雨がやんでいた。私たちは歩きながら、普段の生活のことを話した。料理が作れない文珍はほとんどパン食のようだった。「本当に料理ができる人に憧れる。毎日パンばかりでもう飽きたけど、インスタントラーメンもおいしく作れない。」と言う彼女は、料理が上手な劉のことを羨ましく思っている。彼の作ったラーメンがおいしくて文珍は昨日食べすぎで吐きそうになったくらいだったのだ。

話題が自然にバイトに移ると、彼女はあまり言いたくないんだけど、と言ってから、大変な仕事の状況を話してくれた。料理屋さんのバイトは最初のうちはゆっくりできたが、最近バイトが一人やめたため、彼女の仕事がいきなり増えてきたらしい。仕事がきつくて面接にくる人はほとんど一日だけでやめてしまう。「毎日忙しくて終わったら本当に死にそうな気分だわ」と文珍は哀しげに言った。しかし、「日本語にも自信がない。人間ができる仕事じゃないけど、この仕事がなかったら、他にはみつけれないかも」と彼女は仕方なく我慢するしかなかった。最近、新人が一人増えたが、彼女は全然嬉しくなかった。仕事以外に新人に教えないといけないからだ。「最近、よくめまいがするから、怖くなってきた。」と身体の限界を感じた文珍は、このままなにもできないかもと思い、四月に学校が始まったら、新しい仕事を探そうと考えていた。

店がいろいろあるから、何を食べるのか彼女は迷ってしまった。職場はカレーばかりで他の料理を食べたことがないため、彼女は中華料理に決めた。彼女は「海鮮定食」、私は「麻婆ナス定食」を注文した。料理を美味しそうに一所懸命食べる彼女の姿を見ると、私はなぜか涙がでそうになった。

② 牧師夫婦の愛

私たちは食べながら、教会のことも話した。彼女の話によると、教会の引越し先は現在より大きくて、3、4階の寮には何十人も入れるそうだ。何でも揃っている上、家賃は安い。そのため、皆楽しみにしているようだ。牧師夫婦の話になると、文珍の話は止まらなかった。

「私たちは本当に牧師様を愛しているよ。美味しいものがあれば、だれもが先に牧師様に食べていただきたいと思っている。お姉さん（筆者）のお土産も一口でも牧師が食べないと私たちは食べないと心にそう思っているくらいだよ。それより、牧師様はもっと私たちのことを愛してくださっている。昨日の夜、天気が悪かったでしょう。牧師様は自分の家のストーブを持ってきて、夜中は布団を直しにきてくださった。牧師様は私が寝ていると思ったみたいだけど、実はわかったのよ。ただ、目をそのまま開けなかった。泣き出したら、格好悪いから。」

彼女の話聞いた私は恥ずかしく感じた。私が渡したお土産は本当に小さくてあの人数で分けられるものではなかったからだ。「師母（牧師の奥さん）もそうですよ。いつも食べ物を持ってきてくださるし、私達に足りないものがあると気づいたらすぐ持ってきてくださる」と文珍は話し続けた。

牧師夫婦の愛を感じた彼女は牧師ともっと話をしたい気持で一杯だった。しかし、牧師は日本語と韓国語しかできない。文珍は日本語で自分を十分に表現できない事をすごく悔しく感じた。「朝鮮民族の子たちにすごく憧れる。彼らが自由に牧師と話せる姿を見ると、いつか自分もそうなったらいいなあと思う。日本へ来て一年も経ったのに、まだ人

の話が分からない」と言った彼女の顔は段々暗くなってきた。

③ 日本人の友達

すこし落ち込んでいるように見える彼女を励まそうと思って、私は彼女にお茶の注文を日本語で練習させてみた。「お茶を一杯お願いします」と文珍が恥ずかしそうに言ってみたら、店の人は「はい、はい」と返事しながら、お茶を持ってきた。それを見た文珍の顔には微笑みが浮かんだ。

それから私は先日の電話で彼女が話してくれた日本人のことが気になって彼女に聞いた。話題が変わると、文珍の顔が明るくなり、話のトーンも上がってきた。日本語学校の入学式の当日、彼女は学校の近くで道に迷ってしまった。学校の電話番号しか持っていない文珍は困った。電話をしても日本語が全然聞き取れなかったからだ。仕方なくすぐ近くにあった花屋のおばさんに助けを求めた。日本語が喋れない彼女は片言の英語以外に手振り身振りしかできなかった。言葉が通じなかったのか、おばさんは店の奥から若い男性を呼んでくれた。文珍と彼の英語は似たり寄ったりだったがなんとか通じた。

「彼は地図を調べ、学校に電話をして聞いて、最後に私を学校まで送ってくれた。皆きっと分からないと思う。私がその時どれほど感動したかということ「thank you!」は何回も言ったけど、それは私の気持ちを全然表せていないと感じた」。文珍はいつか自分の感謝の気持ちを日本語で言おうと決心した。その後毎日同じ道を自転車で走っている文珍は、その店の前を通る時によく中を覗いたが、入ったことはないままに、3ヶ月が経った。日本語ができない自分のことを恥ずかしく思ったからだ。しかし、「先日、お姉さんに電話をした日ですね。覚えている？うれしかったわ。恥ずかしかったけど、うれしかった。やっと彼と話げできた。私の話が大体通じたから、めちゃうれしかった」とやや興奮気味に文珍は「あの日」のことを話してくれた。

【あの日】

「あの日、私はあの店の前を通った時に中にだれもいないようだったから、なんか変な勇気が湧いてきて中に入ってみたら、彼が一人でいたの。忙しそうになんか書いているから、私のことにあまり気づかなかったみたい。たぶん私のことを忘れてしまったかなと思って、彼の前へ行って『道が分からないから、教えてくださいませんか』と言って彼を試そうとした。すると彼はすぐ調べに行った。しまった！忘れられちゃったと残念に思っていたら、彼は急に頭を挙げてじっと私を見つめて『あなた』って、よかった。私のことを分かってくれた。めちゃうれしかった。たくさんのことを喋ったよ。はっきり言えない日本語はたくさんあったけど、なんとか通じたようだった。日本語がすごく進歩したと褒められたよ。「若いですね。23歳に見えます」と彼が34歳であることを知った上で彼に言ったら喜んでくれた。うれしかった。今週はずっとこんな気持ちだよ。うれしい気持ち、はは（笑う声）」

(ノート・2005/03/13・中華料理屋)

話が止まらない文珍のその笑顔、その目はまるで違う世界にいるようだった。私たち二人の話が長かったからか、店のおばさんの目がきつく感じられ、そろそろ出ないと追い出される気がした。動く気がなさそうな文珍を現実に戻し、会計をして帰り道に向かった。彼女は改札口まで送ってくれた。別れた時に次のインタビューを頼んでみた。「留学生活って、苦しいばかりで死ぬほど苦しいよ」という彼女の話聞いた私は心が痛かった。

9.4.1.5 バランスが崩れた大学の一年目

① 混乱した大学新生活の始まり

花屋の彼と友達になった文珍は、よく携帯で彼と話をするようになった。彼も優しい人で、いつも彼女の話に熱心に聞いてくれる。文珍が落ち込んだ時に励ましてくれるし、悲しい時にジョークを言って彼女を喜ばせてくれる。文珍は彼と話をする、時間を忘れてしまうことが多かった。

2005年4月3日に大学が始まり、大学生活に大きく期待した文珍は早く起きて学校に行った。道端の桜の蕾がいまにもほころびようとしていた。JRの車窓から春の柔らかい日差しを浴びている文珍の心は解放されたように伸び伸びとしていた。肉体労働が苦手な彼女は学生であることが本当に幸せなことだと感じた。

初日の学校は賑やかだった。部活の人たちに何回も声を掛けられたが、彼女は微笑んで手を振って「NO!」と格好よく断った。次週の礼拝日に文珍は初日の体験を皆に嬉しそうに話した。「あの大学が仏教の大学って知らなかったわ。驚いたよ。皆から仏教を勧められたら、どうしたらいい？」と彼女はこの初日の驚きも隠さなかった。それを聞いた椀儀は文珍のところに来て「大丈夫だよ。クリスチャンですと正直に言ったら、誘われることはない」と言って彼女を慰めた。しかし、今後仏教の勉強をやらされるのかもとぶつぶつ言う文珍の不安は解消されなかったようだ。

次の日曜日に文珍は分厚い履修科目の本を持ってきた。本をどのように読むのかも分からなかった彼女は履修科目を決めるのに散々悩んでいた。幸いなことに学校のある先輩の手伝いのお陰でなんとか履修表を出した。しかし、初日の授業で「自然について」400字の感想文を書かされた文珍は、先生の意図を理解できずに諦めてしまった。文珍は日本語の勉強がもっと必要だと痛感したが、学校、伝道、バイトに忙しくてなかなか実行できなかった。

4月末のある日、彼女はバイト先で店長と喧嘩し、首になることを心配して私に相談してきた。他のバイト探しを奨めたら、「ここがだめになったら、行くところはない」と言った。彼女は一年も日本にいたのに、日本語がまだ聞いて分からないことを悔しく思ったようだ。家には借金の利子を返すお金もないし、皆の助けで学費は出したが、教会の家賃（ガス、水道、電気代を全部入れて月1万5千円）も十分の一も携帯代もまだ払えずに随分悩んでいたようだ。大学が始まってまだ一ヶ月だが、自分の生活をどうやってもうまくコントロールできないと言った。バイトで疲れると勉強するべき時間にもずっと寝てしまうし、携

帯で電話すると止められず二時間も話すので、請求書を見るのが怖くて見ないようにしているという。

② いい学生でいるための努力

【発表できなかったレジュメ】

一番忙しい四月が過ぎると、文珍はすこし落ち着いたようだった。季節が変わる頃でもあるが、文珍は緑と赤の T シャツを二着購入した。髪を短くした彼女には元気が戻った。金銭的困難の危機は去り、「不満は言うが、だれよりも一所懸命に仕事を頑張っている」彼女は、そのまっすぐな性格をバイト先で認められ、皆と一層仲良くなってきた。

学校の勉強も他の人に負けないように文珍は努力しようとした。履修している「国際文化」ゼミはグループで発表する授業のスタイルで、彼女にとっては初めての体験だったが、自由に発言できそうな雰囲気が気に入った。発表は成績に反映されるので、文珍はやる気満々だった。ところが、「反日資料を探せ」という宿題の資料を、文珍は色々な方法で探したが、見つからなかった。困った彼女は私に助けを求めた。反日の歴史的な資料はあまり思いつかなかったため、2005年6月の『芸芸春秋』にあった「小泉首相に謝罪してもらいたい」（童増）という文章をコピーして彼女にあげた。しかし、資料が過激で同じグループの在日中国人の女の子に反対され、使わなかった。理由は「ここは日本だから、歴史問題は持ち出さないほうが自分のためにいいから」ということだった。

文珍は本当のことを言うべきだと考えた。しかし、中国人の留学生がグループに2人しかいないので、意見を統一したほうがいいという思いもあった。日本語が上手に話せないため、文珍は黙って彼女の話の話を聞いているだけだった。文珍は夜7時半、教会の3階で、宿題を出せずに悩んでいた。するとそれを見た李鵬、椀儀、暁静、もう一人の朝鮮族の女の子が集ってきた。「反日」を巡って彼らは色々な議論をした。真実を言うのは留学生の役目だという皆の意見が彼女に影響を与えたのか、月曜日の彼女の電話は明るかった。日曜日の話をよく考えて、文珍は「ずっと迷っていたが、この問題は自分の本当の考えを言わないとどうしてもすっきりしない」と思った。大きなことは言えないまでも、自分の感覚で中国人だったら皆よく知っていることと考えていることをそのまま発表のトピックにすると彼女は決めた。授業中に日本語が通じなかったら、もう一人の留学生に通訳してもらうことまで考えた。

午後、彼女はメールでまとめたものを送って翻訳してほしいと頼んできた。全部で3つの部分に分けて書いたものだ。一つ目は反日という言葉に抵抗感を持っていること、二つ目は被害者と加害者はだれなのかを考えるべきだということ、三つ目は加害者の感情を考えるべきということ。内容は、中国人であれば、だれでもよく知っていることで、彼女はそのまま自分の素朴な考えを書いていた。

「お姉さん、ありがとう。皆の話から力をもらった。いつも日本語が下手だから、恥ずかしくて怖くて何も喋らなかった。だまっていたけど、日本人の友達ができたとしても、やはりお互いに本心を言わないと本当の友達とはいえないから、私も彼らの本当の考えを

聞きたかったし…」と文珍はすっきりしたようだった。

私は彼女の書いたものを翻訳してから、読みやすくするため、漢字に全部振り仮名をつけた。火曜日の午後に全部終わらせた。彼女は水曜日の朝6時に出かけるので、郵便で送るのは間に合わないため、6部（5つのグループプラス先生の分）コピーして教会まで届けに行った。文珍はバイトで帰りが遅くなるので、劉牧師に渡してもらうことにした。

翌日の昼頃、心配して文珍に電話をした。先生がいなかったため、授業は資料検索をやったそうだ。「資料はよかったと思う。日本人の女の子に見てもらった。このまま発表すればいいと言われた。彼女は歴史のことをあまり知らないから、資料を探したけど、あまり無かったと言った。またこれで色々なことが分かるようになったので、よかったと言ってくれた。来週は使うよ」と彼女はうれしそうに言った。

ところが、次週もまた休講だった。作ったものは先生に提出することになったが、発表できなかったことに文珍はすこし失望を感じた。「うちの先生は結局授業をやるだけだったんだ。別に真剣に議論とかを望んでないと思うわ。そんなに真剣に準備したりしてもあまり意味がないよね」と文珍は話した。

【日本語学習】

彼女は教授に多少失望したが、それは彼女の日本語の勉強に対する意欲にはあまり影響しなかった。授業が聞き取れずすこし焦っていたが、「他人ほど日本語の勉強に時間をかけてなかったから、これから真剣に頑張ったら、きっと進歩できる」と彼女は信じていた。大学でも留学生向けの日本語の授業がある。しかし、あまり個人差を考慮しないため、文珍は実用的だとは感じなかった。黄さんと文姫さんのように努力して奨学金をもらおうと考えている彼女は、5月末に日本語を勉強したいと私に正式に申し込んだ。約束した時間は毎週礼拝日の7時から8時半の間（聖歌練習後の時間帯）、場所は3階の洋室だ。色々な原因で、4回目からやっとなんと勉強ができた。

学校からは『坊ちゃん』の800字の感想文の宿題が出されているので、読んで分からなかった彼女はこれを初めに勉強しようとした。基礎が弱くて読むのによく詰まったりしていたが、単語を一つ一つ調べて丁寧に本に記入し、鉛筆で読み方を書いていく彼女は真剣だった。分からないところがあれば、必ず分かるまで追究し、本の中に書き込んだ間違いを全部訂正した。新しい単語が多すぎて、8時半までかけて半分しかできなかった。9時から中保祈祷会があるため、勉強は終わらせた。「よく頑張ってるね」と師母は文珍の傍に来て微笑んで彼女の頭を撫でた。キッチンから御飯の香りが漂い、文珍は嗅ぎながら、「美味しそう、今日のご飯を三杯食べるよ」と言った。久しぶりに勉強に集中した彼女は嬉しそうに見えた。そしていつものように私を駅まで送ってくれ、散歩しながら、最近の勉強のことなどを色々話してくれた。中国でパソコンにあまり触ったことがなかった彼女は、今後はパソコンの習得を目標にし、必ずこの山を越えてみせると言った。しかし、それからの勉強は文珍がバイトを失ったことで継続できなかった。

③ バイトを失った時期

【教会での怒り】

洗い場のバイトはきつくても長く続かなかったが、文珍は半年以上も頑張ってきた。一生懸命な彼女は皆に認められ、皆と仲良くなってきたところだったが、店長と喧嘩して自ら仕事をやめてしまった。この店で、文珍は彼女に自分の仕事をよく押し付けるある店員としょっちゅう喧嘩をした。「自分の仕事は自分でやれ」しか日本語では言えないが、文珍はいじめられると我慢しなかった。当日この場面を目撃した店長の笑いは文珍を怒らせた。「何を笑ってるの？私はやめます。」と店長に言ってまっすぐ店から出てきた。神様に新しいバイトを下さるようと先日祈祷したため、このような結果になったのも意外なことではないと彼女は思った。

7月3日は青年隊の集まりの日だった。賛美が始まると、賛美歌をリードした黄さんは一人では寂しいから、誰か一緒に歌おうと文珍を前に誘った。今回の集りの主題は「愛」で、30分の祈祷時間帯で「文珍のバイト」のため、皆一緒にお祈りをした。鄭旬長も彼女のために色々なチラシを集めてきた。それには彼女のできそうなところに全部印を付けてあった。旬員交流はグループで行われるが、文珍は元気がなさそうに真ん中の柱によりかかって一人座っていた。何も知らない4月の新入生の呉さんが近づき、冗談で彼女の頭を撫でたとたん、文珍は「何するの？」と立ち上がって叫びだした。驚いた皆は急に静かになり、立っていた呉さんもびっくりした顔をした。その後、文珍は頭を腕に伏せてそのまま座り込んでいた。彼女はこの日のバイトの面接を用事があると嘘を付いて断ってしまい、相手を怒らせてバイトもだめになったのではないかと思っていたのだ。暗い顔の彼女を慰めようと思って、私（筆者）は自分のバイト探しの困難を素直に話した。小椿と椀儀は彼女のことが気になって途中で礼拝堂の外に呼び出し、色々な話をした。その後、文珍は夜の勉強を頭が痛いと言ってキャンセルした。

バイトがないと不安を感じる文珍はあっちこっちにお願いをしたが、全部だめだった。日本語に自信がない彼女はバイトの面接を怖がっているので、暫く教会で祈り以外なものもなかった。彼女のことを心配したある先輩は「箴言」²³⁾ (『聖書』・旧約) の蟻の話 メールで何回も送っていた。

【三つのレポート】

文珍は7月の旬員訪問や8月の修練会の準備には参加していたが、学校にはあまり行かなくなった。バイトが見つからずに機嫌がよくなかった文珍は、レポートの締め切りを忘れてしまい、締め切りの三日前に3つのレポートを書いてくれないかと私に電話をしてきた。私は一緒に考えようと手伝うことを約束した。レポートの概念さえ知らなかった彼女は、最初は自暴自棄のような感じだったが、私がレポートの基本から教えてみたら、素直に受け入れた。資料の検索なども教えたとおりに頑張ってやった。集めた資料について彼

²³⁾ 「箴言・6・格言集(一)」: 怠け者よ、蟻のところに行って見よ。その道を見て、知恵を得るよ。蟻には首領もなく、指揮官も支配者もないが、夏の間パンを備え、刈り入れ時に食糧を集める。

女は、自分の考えもきちんと持っていた。ただ、日本語の基礎が弱くて書くのが難しそうだった。「私はどうして学校に行っているの？なにも学べないから、もう行かない」と言いながらも、話し合ったことを全部丁寧にノートに記入し、分からない部分を全部私に聞いた。

レポートを書くのにあまり時間がないため、文珍はその日行かないといけない夜の中保祈祷会に行かなかった。鄭旬長、麗香、金幹事の三人は次々と3階に彼女の様子を見に来たが、彼女は理由を説明せず黙っていた。文珍は「私は私なの！いつもこんなことになるけど、だれも私のことを変えられないのよ」と思っていたのだ。その後、私と話し合った二つのレポートは彼女が夜寝ずに清書して提出し、もう一つは自分でインターネットで検索してなんとか書き終えた。

半年の学校生活を振り返ると、文珍は自分がなにもできなかったとつくづく感じた。半年も経ったのに、授業はまだ完全にわからないし、授業で寝てしまう人が多くて、期待した大学と違うような気がした。借金を全部返した小蕾と解放の元気な姿を見て、彼女は挫折を感じた。バイトに集中したら、自分が今彼らと同じようにどれほど楽かと思うようになった。「大丈夫だよ。文珍には信仰があるから、きっと神様はいいバイトを下さるよ」と中旬長は彼女によく言った。祈るしかないから、文珍は神様に願い続けた。夜、文珍は祈った内容を日記に全部書き込んだ。バイトのことや自分の矛盾などを書いてみたら、少し気持ちが楽になった。

④ 勉強とバイトを両立できない自分

8月の修練会は彼女にとっては楽しかった。修練会には聖霊が溢れるから、奇跡が起こると皆よく言う。期待した文珍は大いに祈った。普段来なかった自分の旬員も修練会に来たし、各講座の教授の講義は面白くて勉強になったと彼女は実感した。修練会から帰ってきた文珍は明るくなり、積極的にバイトを探そうとしたところ、先輩の紹介で急にバイトが決まった。居酒屋のキッチンの仕事はやったことがなかったが、面接がいらないため、文珍は挑戦しようと思った。店長は非常に優しい人で、彼女に包丁の握り方から教え始めた。感謝した彼女は一生懸命だった。早く慣れるために、教会のキッチンでもよく練習して皆の意見を聞いたりした。夏休みはあっという間に終わり、バイトはすこし落ち着いたが、学校が始まった。学校でも頑張ろうと思ったが、朝の講義では疲れのせいでどうしても寝てしまうことが多くなってしまった。

しかし、周りを見たら、自分は特殊な存在ではなく、自分のような人が多くいるように見えた。バイトと勉強を両立できないと感じる文珍は、自分のことをもう一回振り返った。大学の学生は二種類に分けられる。一つは勉強派、もう一つはごまかす派。「本気で勉強する人は皆日本で長いし、一級も持っている。先生の言うことは全部分かっているし、先生と色々な交流ができる。私のような人は推薦で大学に入ったから、彼らとレベルが全然ちがうんだ。」と文珍は思った。勉強する人は皆大学の近くに住み、実力があり、本当に小学生のように奨学金をもらえるように努力している。ごまかす派はほとんど大学から遠い所

に住み、学校は遊びに行っているようなものだ。「私はこっち（ごまかす派）と一緒に学校に通っているから、仕方がないね。実力の差が大きすぎる」と彼女はその落差を超えられないように感じた。特にある朝のことは彼女に衝撃を与えた。大学で本を読んでいたところ、スリッパを履いている男の子が前を通った。隣りに座っていた男の子は彼に声を掛けた。「お前、今日はなにをしに来たの？」と。「今日は暇だから、学校に遊びに来た」とスリッパの子はタバコを吸いながら、軽く応えた。「恥ずかしかった。二人は中国人の留学生だった」と文珍は言った。このように生きるのなら、解放のように肉体労働でお金を儲けているほうがよっぽど誠実だと彼女は思った。

ジレンマに陥った文珍は、学校にも行くが、前ほど熱心ではなくなった。新年が近づき、まだ借金を返済できていないにもかかわらず、文珍は半年頑張った自分へのご褒美として高いダウンジャケットを購入した。1月7日の礼拝室で、彼女は自慢げに皆にそれを見せた。学期末のレポートは締め切りの直前でまだ三つも溜まっていたが、彼女は全然心配しなかった。誰も助けてくれなかったら、ネットから写そうと考えたからだ。自分の勉強に関心を持っていない彼女に私が注意したら、「丸写しする人もいるのに、先生は皆合格させたよ。皆学校でごまかしているから、……お金のために日本へ来たと考えることのどこが悪いの」と彼女に反論された。私はこの話に怒りを感じ、我慢できずに彼女を大声で叱った。怒った私の話を彼女はずっと黙って聞いていた。文珍はその後、レポートを皆の助けでなんとか提出したが、実は学校にまじめに行かないなら、いっそのことお金でも稼ごうかと文珍は考えていたのだ。

9.4.1.6 ごまかした大学の二年目

① 父親の電話のプレッシャー

学校は冬休みに入り、文珍はすこし自分の気持ちを整理しようとした。料理の素材から覚えなければならぬ居酒屋の仕事は大変だが、皆と楽しく仕事ができるこの職場が好きになって大切にしようと思った。学校のレポートはもうそんなに怖いものではないが、日本語がまだ話せないのは悔しかった。文珍は先日も電車で財布を落としてしまったが、日本語があまり出来ない自分の代わりに鄭旬長があちこち電話をして探してくれた。日本語を勉強したいが、借金返済のことも考えないといけない。最近父が頻繁に電話をしてくるようになった。やさしかった父は人が変わったようで、借金返済のこと以外に話す内容がほとんどなかった。返済の期限が近づき、仕方がないのだろうと文珍は考え、春節後、真っ先にバイトをすることにした。

1月28日の春節の教会は非常に賑わった。他の旬長たちと一緒に作った千個以上の餃子は全部皆で食べてしまった。牧師夫婦もたくさんの美味しいものを買ってきて、皆と一緒に夜中までテレビを見たり、話をしたりした。寒い冬の中、文珍は教会を非常に温かく感じ、自分に優しくしてくれる人たち全員に新年祝福のメールを送った。私のところにメールが来たのは夜2時頃だった。「新年快樂！合家幸福！在新的一年里好事多々、笑容多々、開心每一秒、快樂每一天、幸福每一年、健康到永遠！」並んでいる祝福の言葉は全部中国

語で、日本の携帯電話のメールでは文字を探すのに時間がかかるものだが、心を込めてメールをしてくれたことを感じた。

楽しかった春節はあっという間に過ぎ、現実に戻った彼女は借金返済のプレッシャーを感じ、皆の紹介で居酒屋の他にも色々なバイトをやってみたが、うまく行かなかった。劉牧師がいる中華料理屋で二日ぐらい働いたが、彼女はお客さんをごまかす店長のことが嫌で辞めてしまった。このことで暁静は文珍のわがままをひどく叱った。その後、文珍はあるうどん屋でホールのバイトに挑戦した。しかし、注文を聞き取れずに客に書いてもらおうとしたら、店長にとっても怒られたため、彼女は逃げ出した。文珍は調子が悪いと嘘を付いて二度とその店に入らなかった。バイトが決まらない文珍の気持ちは複雑で、父の電話に出ないようにしていた。

② バレンタインの和解

新年のわだかまりを解くため、私たちは二人で食事する約束をした。場所は一年前と同じ、商店街だった。時間がまだ早かったので、二人ですこしぶらぶらした。久しぶりにリラックスしたのかもしれない。文珍はずっと笑顔だった。「今日はバレンタインだから、皆チョコレートがほしいって」と彼女は言ってまずリングチョコを買い、帽子屋で色々なものを被って見せてくれた。イタリア料理店の前で彼女は足を止め、ウインドーに並んでいるパスタやグラタンを見つめながら、「美味しそう。いつもここを通るけど、入ったことはなかった。」と言った。「じゃ、今日はイタリアンにしようか」と彼女の気持ちに答えて二人で店に入った。座ると、早速文珍はメニューを持ちあげて小さい声で読み出した。「グラタンって何?」と聞きながら、絵を見て好きなものを注文した。

辞めた中華料理屋のことを話すと、「日本語が出来たら直接言うけど、できないから、私は黙ってずっとこのように彼を見つめたの。」と文珍は嫌な表情を示しながら、当時のことを再現してくれた。抵抗を示すために彼女はわざと指示に従わないようにしていた。文珍に嫌がられたと感じた店長が文珍と話そうとした時に、彼女は「やめる」と言って布巾を置いて店から出てきた。「別に後悔してないよ。あんな店で働きたくない」と文珍は笑いながら店長の驚きを真似した。

私は先日怒ったことを彼女に謝った。すると文珍は「実は勉強もしようと考えて日本へ来たの。けど、小蕾がよくそういうふうに言うから、私も影響を受けた」と小蕾のことを話してくれた。体育系の彼女は自分を勉強ができる人ではないと思っており、日本に来た主な理由は出稼ぎだった。大学に行きたい文珍のことを嘲笑したりしたこともあった。しかし、「大学に入った私を見て彼女は黙るようになって、自分もある専門学校に入った。」と文珍は言った。教会の他の留学生の手伝いに力を惜しまない小蕾は非常に元気に見えるが、実は体の調子が既に崩れていたようだ。二年間続けた夜のバイトのせいで、体のあちこちに痛みを感じるようになり、つい最近夜勤は続けられなくなったほどだった。

教会の人の話題になると、行動力があり、苦労にも耐えられる解放のことを感心したように彼女は何回も話した。自分とほぼ同じ時期に来た解放が借金を返し、学費も全部出し

たのに比べ、文珍は自分が何もできないと無力感を持ったようだ。「教会にいなかったら、私は今はもう死んでしまっているかもしれない。死ななくても、悪い子になっているに決まっている」と文珍は元気なさそうに言った。「一緒に来た人たちを見てすぐわかることだよ。賭け事をしなくても、タバコやお酒をするようになったし、授業中に寝たり授業に来なくなったりするとか、服や鞄や化粧品からも分かるよ。全部変わった。変化が怖いよ」という。彼らを救うために文珍は努力をしたが、だれも聞いてくれなかったようだ。

食事が終わり、帰り道で、朝、父と喧嘩したことを話してくれた。借金の話で文珍は怒り出し、携帯を投げたらしい。しかし、「父は本当に偉い人ですよ。私が父だったら、もう気が狂っているだろうと思う。(娘のために借金することは)父のように絶対には出来ない。」と文珍は父親のことを色々話してくれた。

「父は私に無理強いはしない。私のことを尊重してくれている。日本へ来るのを、お婆さんは反対していた。お婆さんは古い考えだから、うちはお金がそんなにないけど、借金もない。お金をたくさん儲けられるのならいいけど、できなくても食べられる。うちは堅実な生活を送っていたの。今のように大きな借金をすることもなかった。借金はまだ返してもいない。だけど、父は私を支持してくれておばあさんを説得した。若い人を束縛しないように彼らに新しい道を切り開かせようと父は言って、10 万元借りてくれたけど、その期限は来月なの。見聞を広げ、世間を渡り歩いてほしいというのが父の希望だった。自分の娘は外でうまくやっていると彼は思い込んでいるでしょう。でも、私はちっとも父の願望にこたえられない。日本語も下手だし、借金の返済もできていないから」²⁴⁾。

文珍はすこし落ち込んでいるようだった。日本語だったら、今から間に合うし、お金はゆっくり返せるのよと彼女を励ました。それで彼女は「牧師は 28 歳から日本語を勉強し始めたのだし、私はまだ若いよね」と言い、今から『みんなの日本語』を勉強しようと決心したようだ。私は「50 歳になっても、まだ同じようなことを言っていないようにしてね」と冗談で言った。すると文珍はまた落ち込んでしまった。「分かってる。いつもこうだよ。言う事が自分でも嘘のように聞こえる。解放を見たら、どうして自分には彼のようにできないのだろうと思う」と文珍は自分のことを「本当に可哀そう(日本語)」と言った。

別れる時、外は大雨だった。「お姉さん、韓国人²⁵⁾と結婚するのはどう？」と文珍は微笑んで聞いた。「韓国人のお嫁さんになるには家事ができないといけないと聞いたけど、文珍

²⁴⁾ 原文：「我爸从来不逼我，他很尊重我。我来日本，我奶奶不同意。她是老想法，我们家没有钱，可也不欠债，有钱就挣一点儿，没有钱挣，也有饭吃，踏踏实实的生活。不像现在欠了这么一大笔债，还都没有还。可我爸去跟我奶奶说，他支持我，他说，不要把你年轻人束缚住，让他们去闯天下，他给我贷了 10 万元，到下个月就到期了。他希望我闯一闯，长点儿见识，我够佩服我爸的。我要是他我早就疯了。他以为自己的女儿在外面挺好的，可是我就是不争气，日语没有学好，钱也没有还上。」

²⁵⁾ 文珍と一緒にアルバイトをする韓国人の男の子のこと。彼は一人っ子だが、来日一年だけで日本語を独学してマスターした。アルバイトも一生懸命にしてキッチンの仕事は何でも出来るようになった。文珍をよくご馳走してくれる優しい男性だという。

なら仕事がまめできびきびしているから、大丈夫でしょう」と言ったら、「いいえ、怠け者だよ」と文珍の表情はすこし曇ったように見えた。

③ マグロキッチンでの訓練

3月頃、教会の近くでやっとバイトを見つけた文珍はうれしくて電話をしてくれた。マグロキッチンでの仕事（以下、マグロのバイト）だった。ご飯にマグロをのせるだけの仕事で、簡単でだれでもできそうだから、文珍はやる気満々だった。しかし、しばらくしたら、チーフのお婆さんによく小言を言われるようになった。店にバイトの人が少ないので、仕事以外に掃除や洗い物など全部やらないといけない。仕事によくけちをつけられた文珍は耐えがたい時が多かった。しかし、借金のことを考えると、彼女は我慢するしかなかった。旬長の鄭旬長がビザの更新が許可されずに四月に帰国した後、文珍はすこし落ち込んでいた。この時期、自信がなかった文珍は中旬長によく励まされていた。「人はだれでも同じだと思う、だめだとよく言われたら、できるとしても自信がなくなるでしょう。中旬長は違う。彼女はよく私のことを認めてくれたから、すこし自信を持てるようになった。」と文珍は言った。勉強を怠けはするが、仕事をごまかしはしない。だから、チーフのお婆さんに言われたことを全部最善を尽くして黙ってやってきた。お婆さんは煩しいが、そのおかげで、文珍は色々な物の勉強ができた。なにをどのようにすれば一番いいのかということを知った彼女は「自分は細かい仕事に気付かない人だとよく分かった」と言う。しかし、半年後、彼女はやはり我慢できずに辞めてしまった。同じ店なのに、日本人の若者が寝たら、「疲れただろう、寝かせてあげて」と言うのに、中国人だったら命がけで働いても文句を言うお婆さんのことが好きになれなかったからだという。

夏休み前のレポートを書くため、文珍は色々な資料を集めてきた。書く順番を私と話し合ってから、自分で頑張って書いてみた。書くのにあまり自信がないので、教会に来た韓国人の女の子に直してもらった。久しぶりに教会に行ったら、文珍は前学年の成績表を持って自慢げに隣の旬員に見せているところだった。彼女の成績表を見つめていた新入生の子の表情は羨ましく見えた。覗いてみたら、パソコンが不可以外は皆全部80点以上だった。半年もあまり真面目に勉強していなかった文珍はこのままごまかしてはいけないと言った。

しかし、夜早く帰っても3時ごろにならないと寝られないし、いつも昼12時過ぎても起きられないこの繰り返しのなかでは、勉強の時間がなかなか作れないようだった。「どうしてこんなに疲れているの？目覚まし時計が何百回鳴っても聞こえないの？」と彼女は自分のことを不思議に思っている。休学して日本語をじっくり勉強したらとだれかがアドバイスをしたらしいが、文珍はそうしなかった。一年目のように自分がじっと何もしなくなるかもしれないことが怖いからだ。後日、文珍は私に電話をしてきて「新年の時、叱ってくれてありがとう」と言った。マグロのバイトでよく叱られた彼女は、今まで自分のことを叱ってくれる人が少なかったことに気づき、言ってくれるのをありがたく思うようになったようだ。それで文珍は日本語を教えてほしいとある教会の韓国人に頼んだが、長くは続かなかった。

④ 多忙な日々

マグロのバイトを辞めてからまもなく文珍は近くのコンビニで新しいバイトを見つけた。外国人の女の子が彼女しかいない店では、皆に可愛がられ、自分の正直な天性のままでいられた。だから、給料が安く疲れると彼女はよく言うが、辞めることは考えていなかった。それと居酒屋でのバイトだけでは借金が返済できないため、彼女は神戸の食堂でもバイトをやり出した。三つのバイトを掛け持ちしていた文珍は学校でよく寝てしまう。しかし、出席を取るため、継続的に通っていた。

10月から教会の補習学校が正式に始まった、日本語だけではなく、英語、数学等皆の希望の科目が全部含まれており、先生は教会の先輩達だ。文珍は忙しくて参加できなかったが、いつも自分の旬員に参加を促した。自分のように失敗しないようにと旬員たちによく言っている。あまり教会に来ない旬員たちのことをかわいそうに思っている文珍は、常に電話をしたりして生活面の手伝いをできる限りやっている。旬員のバイト探しについていくし、進学相談にも積極的に乗っている。「今の旬員はどれほど幸せだろう。私たちの時は、聞ける先輩もこんなに多くはいなかったし、インターネットでも情報が少なかった。この人と人の交流が少ない日本では、留学生が教会に来ないのは惜しいことだと思う。」と文珍はよく言う。一緒に日本へ来て誤った道に入ってしまった山東省の女の子のことを思い出すと、「もし、彼女が教会に来ていたら、その道（売春）に行くことはなかったでしょう。彼女はまだ16だよ。」と文珍は彼女のこと²⁶⁾を残念に思った。12月になると、レポートの時期に入り、今回のテーマでは「自由について」と「イスラム教」を文珍は自力で書いてみた。中には「自由には制約が必要だ。制約のない自由は本当の自由にならないのだ」という議論を証明するため、彼女は自分の留学生生活を根拠の一つとして取り上げた。文章を直してもらうために、色々な苦勞をした。パソコンでメールのやり取りなど普段しない彼女はたくさんの人の手を借りた。レポートを提出した後、「お姉さん、日本にいて時代に遅れた気がした。高校の友人は写真とかをメールで送ってきたのに、返信するにはどのように写真をパソコンに入れるのか全然分からなかった」と文珍は恥ずかしそうに言った。

9.4.1.7 困難を乗り越える

2007年に入ると、青年隊の調整があり、愛子が文珍の隊長になった。キリスト教に献身している愛子はずっと文珍の憧れだった。文珍のレポートの手伝いをいつも断る以外は何でもやってくれるので、愛子がいてくれることで文珍は心強くなった。バイト先での仕事も順調だったが、文珍の悩みは新年に近づくと、ますます大きくなってきた。新年に、50

²⁶⁾ 甘やかされて大きくなったその女の子は、中国で何も足りないものはない生活に慣れて、日本に来て同じように生活をしたので、お金をすぐ使い切ってしまった。親に何回もお金を送ってもらったが、足りなかったし、バイトの苦勞にも耐えられなかった。だれも彼女のことを信用していないので、お金を貸してくれる人もいなかった。それで不法滞在者になって生活のために売春に走った。強制送還される前には、ある店で大声で泣いたり叫んだりして彼女の精神状態は既に崩壊していたようだ。

方を送るからと彼女は父に嘘を付いたが、一年も延び延びになって今回はどうしても逃げられなくなってきた。しかし、返済するお金はなかった。

① 父親との和解

文珍は教会の人たち全員を回ったが、一円も借りられなかった。他の人に貸したばかりで、お金がないと言う答えしかなかったのだ。彼女は神様に祈ることしかできなかった。「しかし、祈っても役に立たないと思った。私は教会の人に全員聞いたが、だれも貸してくれない。神様、貴方もどうやっても私にお金をくださることはできないだろう」と神様への自信がなくなった。絶望を感じたある日、文珍はこのことにプレッシャーを感じ、やりきれなくて外に出た。中保祈祷会にも参加せずなにもしない彼女は、心中むしゃくしゃしてたまらなかったので、建物のかげで号泣した。しかし、泣いていても彼女は神様にこのように祈っていた。「神様よ、やはり貴方の助けが必要です。貴方が私を助けてくださらなかったら、私は生きてはいけないのです」と。すると本当に奇妙なことに、その夜文珍がある新生児に電話を試みたら、相手は20万円を貸してくれると承諾した。それで他の集めてきたお金と一緒に50万以上も全部家に送ることができた。今回のことで彼女は神様が自分のために存在しているように感じ、皆に感謝する気持ちが一杯になった。

父は文珍に電話をして文珍の送ってきたお金で利子を返し、家族一緒に頑張るから、残りはゆっくり返せばいいと言ってくれた。父が彼女に日本でよく勉強してほしいというのが本音だと言った時に、文珍はうれしく感じながらも、父に怒り出し、「なぜ早く言わないの？この一年間はあまり勉強してなかったよ」と言った。久しぶりに父と色々な話のできた文珍は、自分がずっと父のことを誤解していたとやっと分かった。「父は電話でお金以外のことはなにも言わなかったから、お金がそんなに大事なら、お金を稼いであげたらいいじゃないかと思っていた」と彼女は思った。父と喧嘩した文珍は日本へ来て初めて頭がすっきりしたような気がしたという。父は相変わらず変わっていない。何でもできる人で、何でも自分と友達のように話し合ういい父だと文珍は言った。

② うどん屋でのご馳走

文珍にインタビューができたのはちょうど彼女が父に送金した次の日のことだった。明るくなった彼女は普段と違い、話が止まらなかった。自分の日本留学を思い出す限り頑張ってお話してくれた。彼女は日本に住み慣れ、日本食が好きになり、お寿司を食べるのが一つの楽しみになった。将来の話題になると、将来は見聞を広げるため、オーストラリアやシンガポールに行きたいと言った。しかし、やはり勉強が一番重要だと思い、勉強したい気持ちがまだ強くて卒業しても社会に出たくない。大学で考古学の専攻を選んだ彼女は大学院に行く事を目標にしていた。

「夢を見つけたら、ご馳走をしてね」と一年前のバレンタインデーに彼女と約束していたので、インタビューが終わると、文珍のよく知っているうどん屋に連れていってもらい、食事をご馳走してもらった。ここは、彼女が腕籠にも小樽にもご馳走したことがあり、安

くて美味しかった。調理場を熟知している文珍はバイト先の欠かせない存在になり、一所懸命な彼女のことを皆が応援しているようだ。新入生に付き添って聖書の勉強をしたり、履修科目の選択やパソコン検索を丁寧に一つ一つ教えている彼女のことをみた私は「文珍、偉いね」と彼女を褒めたが、「いいえ、自分がやってもらったことと同じだからなんでもないですよ」と彼女は謙虚に答えた。

終わりに

2007年の春に入ると、たくさんの留学生が大学に進学し、皆一所懸命に勉強を頑張っていた。教会の一階の礼拝室は自習室になり、勉強する子の姿がいつ行っても見られた。文珍は居酒屋以外のバイトを辞めて、お好み焼きの店で働き始めた。旬員たちのために、バイト先で学んだ腕前をよく教会で見せている。自分の叫びと祈りが書かれた日記を開くと、不思議なことに自分の願いが全部実現していたことに彼女は気付いた。よく喧嘩をした小蕾との関係が改善できたことも神様のおかげだと文珍は思った。なぜかというところ、もともと二人とも我慢できない性格だから、会うたび喧嘩になるが、この一年間、二人は段々話せるようになったし、お互いに相手の変化をまで認めた。神様が彼女との付き合いを悩んでいた自分の祈りを聞いてくれたからだと言珍は信じているからだ。

今年中国では田舎の経済を活気づけるため、政府の投資で企業作りの計画が打ち出され、文珍の父が責任者として選ばれた。しかし、彼は断った。自力で起業したい父を100%応援すると文珍は言った。「父の言うことなら、何でも賛成するよ。父はいつも正しいから」と文珍は父のことをいつも誇りに思っている。借金はまだあるが、ゆっくり返せばいいと思った文珍は、やはり勉強が一番大事に感じた。勉強ができれば、いろいろな道が開けるようになるが、後悔してばかりの同郷の男の子のようにバイトと学校が両立出来なくなり、不法滞在になったら、未来はないのだと言珍は痛感した。勉強に自信がなくなったこともあるが、自分はずっといい学生だったと言珍は初めて自慢げに小さい頃の話をしてくれた。

「確かに暁静ちゃんの言う通り、学校にはごまかす人がいるけど、勉強しようとしたら、できるはずだよ。今まで自分のことをすごく甘やかしてきたからだめになっちゃったけど、これからは、神様に勉強の自信を取り戻したいとお願いするわ」と文珍は言った。

9.4.2 文珍の分析

9.4.2.1 文珍の成長と変化

「この二、三年、成長したところが多いはず。日本へ来た頃、何もできなかったけど、今はできるようになって、認められた時もあるんじゃないかと思うと、やはりうれしい。苦勞をしたかと聞かれたら、確かに日本で苦勞をした。国内では苦勞する可能性もないから、どうして日本でこんなことになったのかとよく文句を言う。でも、日本は私を成長させてくれたところだという点では肯定すべきだと思う」。

(インタビュー・2007/08/01)

日本で成長を感じた文珍は、小さい頃苦勞をしたことがなかった。バイトをしながらの留学生活では、学習とバイトを両立できずに学習を捨てることまで考えたことがあった。困難な時期を乗り越えた彼女は「やはり、学習が一番重要だ」と悟り、学習の自信を取り戻そうと考えるようになった。以下の「生活能力」、「学習能力」、「迷いとの対決」及び「信仰の深まり」から、彼女の成長を見ていこう。

A 生活能力

来日一年後のある日、文珍は劉牧師が作ったラーメンを吐くまで食べたことを話してくれた。「インスタントラーメンさえも美味しく作れない」と言う彼女の生活はずっとパン食に偏っていた。苦勞に耐えるのが苦手な彼女は「母に溺愛されたせいで自分は何もできない」と日本へ来てわかった。夜勤の仕事は彼女が辛さに耐えられずにすぐ辞めてしまった。皿洗いの仕事も最初はやれるかどうか自信がなかった。日本語が分からないし、仕事をやった事もなかったので、皿洗いでも仕事が遅いと言われるのではないかとずっと恐れを抱いていた。

「洗い場で皆バリバリやっている様子を友人から聞いて自分は皿洗いさえもできない気がした。仕事が遅いと嫌われたら、どうしようとずっと心配していた。」と文珍は自分の仕事に自信がなかった。仕事は非常に大変なので一ヶ月もしないうちに辞めるだろうとバイト先の皆によく言われたが、文珍は半年も続けた。「ここがだめだったら、行く道はな」かったのに、店長との喧嘩で辞めてしまった後、彼女は不安からか教会で怒りだしことがあった。

来日一年半経っても、文珍はバイト先で日本語がまだ聞き取れなかった。そのため、ホールの仕事や面接が必要なバイトを全部怖がっていた。高さんのお陰で、ある居酒屋でバイトができた彼女はキッチンの仕事を始め、包丁の握り方から勉強し始めた。ここで、文珍はキッチンの仕事全般を覚え、店で一人前の調理スタッフになっていった。居酒屋でバイトをしながら、彼女は他の色々な仕事もやってみた。「マグロのバイトでの始めの半年は辛かったよ。担当のおばさんが煩わしくて中国人に厳しかったけど、そのお陰で、私は何をすればいいのか、どのようにすればいいのか分かるようになった」と文珍は言った。そ

の後、コンビニでのバイトや神戸の食堂のバイトと次々にバイトを見つけたことから、彼女は仕事が出来ないという恐怖心を段々克服していったと言える。

教会で皆によく料理の腕をふるっている文珍の姿を見ると、彼女が何もできなかったとは想像できないだろう。「仕事は一生懸命で怠けはしないから、行く先々で皆に好かれる。なにかあったらすぐ顔に出るから、文珍ちゃんはとても分かりやすい子だねと、店長は私の頭を撫でながら、微笑んで言った。不満はよく言うけど、道理に外れたことはしない。大体、相手がちゃんとしてなかったら言うけど、店長もよく私の方が正しいと言ってくれたよ。彼が悪いのだから、文ちゃんは影響を受けないようにと言ってくれた。」と文珍は二回目のインタビューで店の人との付き合いを詳しく話してくれた。

この話から、現在勤めている居酒屋とお好み焼き屋で、文珍の努力が皆に認められ、自分の意見を素直に言えるようになったことが分かる。「皆とうまくいっていることに満足しているよ。今後はホールの仕事に挑戦しよう」という彼女の話からも文珍は自分の成長を実感していると言えるだろう。

B 学習能力

筆者：「成長って具体的に言えばどんなところ？」

文珍：「やはりバイトかな。すごく成長できたと思う。だって最初はなにもできなかったもん。店でなにもできないからバイトをするのが怖かった。けど、今の子を見たら、自分はちょっと心配しすぎたと思う。学習のほうはね、変化はあまりなかった。一年目はまだ自信があったけど、大学に入っても、なにもしなかった。」

(インタビュー・2007/08/01)

バイトと比べ、彼女は学習にかなり自信がなかったようだ。一年日本語を学習しただけで有名で学費が安い大学に入れたのだから、いい学生だと思われても普通だろう。彼女は大学に入った頃は奨学金をもらえる学生になることを目的にしていた。しかし、彼女の自信が段々なくなったのは物語で述べたようにいくつかの原因がある。初めての大学生活に慣れず混乱したこともあるが、それより、大学に失望を感じたほうが大きい。苦勞して用意した発表ができなかったことから、彼女は教授が形式主義だと思うようになった。大学の学生を見ても、授業中に私語をしているか寝ている人がほとんどで、「皆大学をごまかしている」というイメージは、彼女の期待した大学生活と大きなギャップがあった。真面目に勉強する子もいるが、あくまでも少数派で、その人達は文珍の日本語能力との差が極めて大きい。いくら努力しても無駄だと感じた彼女は実力の差を埋められないことからショックを受け、自ら自分を「ごまかす派」に位置付け、彼らと同じように単位を取るためだけに学校に行くようになってしまった。彼女は努力すればできるという学習の自信を失ってしまったため、自分のことが恥ずかしいからと言って最初のインタビューの頼みを断った。

しかし、彼女は、日本語学校の一年目の勉強がよくできたし、自信があった。クラスの

進度は遅いほうだったが、文珍の出席率はほぼ 100%だった。「一年目は楽しかったよ。先生も面白かったし、周りの人が皆純粋で大学に進学すること以外のはなにも考えていなかった。授業を一日でも抜けたら付いていけないから、だれも授業をサボるなんて考えたこともなかったよ。」と文珍は自慢げに日本語学校のことを話してくれた。確かに大学に入った時は、彼女はパソコンで検索もできなかつたし、レポートの概念さえ知らなかつた。レポートを完成するのに、たくさんの人の手を借りていた。今でも宿題が全部一人でできるとは言えない。しかし、レポートに何を書いたらいいのかすら分からなかつた最初と比べ、今は切り貼りでも自分で本体が作れるようになったし、「感想文は強いから、自分で書く」ことや、「自由について、言いたいことがあるから書いてみた」ことなどから、彼女の進歩がうかがえる。旬員のレポートを食事も忘れて手伝ったことや、ほとんど 80 点以上の点数を取った彼女の成績からも、その進歩が証明される。

「今の愛子隊長はいい隊長だよ。レポート以外はなんでも手伝ってくれる。レポートは貴女はできると、彼女はいつもこう言って断る。皆初めは 300 字の物でも苦勞をするけれど、貴女はすこし頑張ったらもう大丈夫だからと言ってくれた。でも、私は上手に書ける自信がない」。三年生に上がった文珍はレポートを隊長に頼んでみたが、断られた。大学に入って 2 年経ち、レポートはなんとか出せるようになったが、それでもまだ自信がないのはなぜだろうか。それは何でもできそうな気がした昔の自己像がまだ彼女の頭の中にあり、現在の自分の姿とのギャップが大きいと感じているのではないかということ、そして、彼女自身がバイトのために、あまり勉強に力を入れてないことと関連しているのではないかと筆者は考える。

C 迷いと対決

「父親との和解」で、父親を誤解していたことがわかった文珍は、自分の考えをこのように述べていた。「日本へ留学させるのは勉強させたいからだともっと早めに言ってくれていたら、勉強に力を入れたのに」と。つまり父親は彼女の考えに大きい影響を与えた重要なポイントの一つだといえるが、彼女の行動パターンを左右してきたのは彼女の考えの変化だ。物語で述べたように、彼女の考えは「学習中心」から「バイト中心」へと大きく変わり、それらの中間に「学習を捨てるかどうか」という三つの経緯を辿っていた。

周知のように文珍は父に日本に来させられたが、学習と見聞を広げるために来たという目的ははっきりしていた。日本語学校の一年目は周囲の学生と同じように、「大学に進学することだけ考えていた。専門学校とかは考えたこともなかった」。どうしても大学に入りたかった彼女は神様の前で何回も泣いて祈っていた。一年経つ頃には、周りに段々バイトに重点を移す同郷の子が出てきたが、彼女は奨学金をもらえるいい大学生を目指そうとした。大学の新しい環境を新鮮に感じると同時に混乱を感じたが、発表やレポート、日本語学習は諦めずに努力しようとした。ところが、日本語の基礎が弱いため、勉強しても彼女は効果を感じなかつた。

「学校には二種類の人がいる。本気で勉強する人は皆日本に長いし、一級も持っている。

先生の言うことは全部分かっているし、先生と色々な交流ができる。私のような人は、推薦で大学に入ったから、彼らとのレベルが全然違うんだ。」と文珍はひどくショックを受けたという。洗い場の仕事がきつくて学校に行っても疲れを感じる文珍はバイトと学習は両立できないと感じ始めた。同時に、不真面目な学生の姿がたくさん見られたことで、文珍は大学生生活に失望を感じたし、バイトを中心にした子は借金の返済が済み、自立できたことから、彼女は自分のやっていることの意味に疑問を持ち始めた。

そして文珍は借金返済の圧力に追われ、バイトを二つも三つもやるようになった。学校を「ごまかす」生活が嫌な彼女は「勉強を捨て、バイトに集中しよう」とまで考えた。矛盾したこの気持ちは「筆者との喧嘩」で非常にはっきりと現れていたといえる。「お金のために日本へ来てどこが悪いの？」この筆者に投げつけた質問を、たぶん彼女は自分自身に何回も問いかけていただろう。しかし、夜勤を続けてきたために体を壊した小蕾や、不法滞在して出口がなくなって後悔している同期生を見て、文珍は怖くなった。学校を捨てることができずに、単位を取るためだけに大学に行くようになってしまった。バイトでの訓練で生活能力は伸びてきたが、学習をごまかしている自分のことを文珍は恥ずかしく感じた。

その後借金の一部を返済した後の父との話し合いによって、親への理解を深めた文珍は、留学の目的がはっきりした。

「今は生活がすこし落ち着いているように感じるから、やはり勉強が一番重要だと思う。大学院にも行きたいし、他の国にも留学したい。」文珍は食べながら、興奮したように言った。彼女と知り合ってから、彼女は初めて未来のことを堂々と語ってくれたのだ。

(ノート・2007/02/04・うどん屋さんでのご馳走)

文珍は夢を見つけたら、ご馳走をしてくれると私に約束したことがある。うどん屋さんでのご馳走では、彼女は自分の夢をはっきり語らななかったが、学習に対する自信を取り戻したいとはっきり言った。後日のインタビューでも、彼女は小さい頃の話を持ち出して話してくれた。そしてその終わりに文珍は「私はずっといい学生だよ」と自信に満ちた様子で言った。迷った末、「いい学生である」という自分の一貫性を見出せたことが彼女の自信の源になったのだろう。

D 信仰の深まり

文珍の成長をみるには、信仰の成長を避けては通れない。物語で述べたように彼女が最初に教会に来たのはバイトの紹介を期待していたからだ。皆が祈ってくれるのをうれしく感じたが、自分からは祈らなかった。「あれには賛成しないから」と言ったことから、文珍は当時まだキリスト教を信じていなかったことがわかる。

人間関係に悩んでいた文珍は牧師の教えを聞いて道理があると感じ、友愛の雰囲気にかき立てられて教会に継続的に来るようになった。旬長の話に従い、自分自身の変化を望んで文珍

は洗礼を受けたが、修練会では特に恵みを感じなかったという。しかし、大学受験のことや学費が払えた不思議さなどから文珍は神様が存在しているという確信を持つようになった。「本当だよ。試験問題はあまりできなかった。帰り道で他の二人の子は元気なさそうだったけど、私は違ってなんかうれしかった。不思議なことにきっと大丈夫だと思っていた。だから、面接の準備もしなかった」。これは「神様がくださった大学」の話として教会で広がっている。学費を払う当日、大学でお金を借りることができたことも神様の助けだと文珍は信じている。

教会に引越してから、祈りに時間を惜しまない文珍は教会の活動全てに参加するようになった。彼女はバイトを失って無力感を感じたが教会で祈る以外何もしなかった。彼女のことを心配したある先輩は「箴言」の蟻の話のメールで何回も送った。「あの時、もう頼める人には全部頼んだし、絶望に近いかな。じっとして何もしなかったから、怠けていると思われたかもしれないけど、自分の力ではどうしようもないから、神様に祈り続けるしかなかった」。この文珍の話から、彼女は神様がまた奇跡を起こしてくださると信じていたことが分かる。

文珍は神様のことを「安心感を与えてくださる。まるで自分のために存在しているように感じる」といつも言う。二回目のインタビューでは、文珍はずっと書いてきた日記のことを嬉しそうに話してくれた。「最近日記を開いたら、びっくりしたよ。祈ったことは全部実現したよ」他人の日記と違い、この日記に書かれているのはほとんど祈りのことばだという。

「神様は生きていらっしゃる神様だよ。小蕾と私は、歩んでいる道が違うだけじゃなく、二人とも我慢できない性格だから、会うたび喧嘩になる。お互いに嫌がっているから、声を聞くだけでも、いらいらするようになる。去年、彼女が教会に引越してきた時、彼女とどう付き合ったらいいのか神様に教えてほしいと何回も祈った。すると奇妙なことに、この一年の間、私たちは段々話せるようになった。先日彼女が教会から引越していく時に、文珍、あなたは変わったよと言ってくれた。貴女も変わったよと私も彼女に言った。本当だよ。神様のお陰で私たちは変わった。」我慢できるようになったという性格の変化は神様のお陰だと、文珍はよく言う。このような小さい事の積み重ねによってかもしれないが、文珍の神様を信じる心はどんどん成長してきたと言える。

9.4.2.2 文珍の特徴

文珍の特徴を説明するために、来日してからの彼女の自己管理及び彼女の我慢しない性格への理解から分析してみたい。

① 文珍の自己管理

「文珍の成長と変化」から分かるように、両親に溺愛された彼女は田舎の出身だが、苦労をしたことはなかった。しかし、日本へ来たらバイトをせずには生きてはいけない。初めて何もできない自分のことが分かった彼女は、皿洗いの仕事でも辞めさせられないか、

ずっと心配していた。小さい頃から父の夢を実現したかった文珍は「いい学生」のままできようとしたが、なかなかうまく行かずに「バイトと学習」の選択に困難を感じ、長い間迷い続けた。迷いが整理できず、彼女は現実に対していつも無力感を感じ、ずっとだれかに頼りたいという気持ちが強かった。自分の力で問題を解決できない場合、いつも日記、他人そして神様に助けを求めるのが彼女の特徴だと言える。

A 日記を通して自己整理する

「神様を信じる心の成長」で述べたように、文珍は来日もなく日記を書き出し、その中に書いた大学進学や小蕾との関係の回復や家の借金返済などがその後祈りによって全部実現されたことに驚いた。日記を書くことについて、本人はこのように語っている。「自分でできなかつたら、祈るしかない。祈っても何を言いたいのか自分でも分からない時がよくあった。3階で祈りの言葉を日記に書いてみた。一時間以上かかる時もよくあったけど、書き終わると、気持ちがすごく楽になる気がしたよ。悩んでも悩んでもどうしても解決できない事を文字で表わすと、頭がすごく軽くなって悪い物が胸から出たような感じだった。」文珍はこのように「自分にはなにができないのか?」「なにがほしいのか?」「何を神様に助けてもらいたいのか?」という頭で整理できない気持ちを書いてみる事によって自分の考えをはっきりさせ、祈りの言葉を吐き出すことによって心のバランスを取っている。

B 他人から助けをもらう

物語から分かるように、助けてもらいたいことが彼女が最初に教会と接触した理由だ。初めて教会に来た動機や旬長の鄭旬長との出会いや旬の交流を望む気持ちなどからも、彼女は助けてもらいたい気持ちが強いことがよく分かる。留学の苦勞に耐えられない彼女は日記の中に「誰かに頼りたい!ずっと誰かに頼りたい」と神様への告白を何回も書いている。自分のことを子供のよう扱ってくれる教会の先輩にも、愛を示してくれる牧師夫婦にも頼れると感じたからこそ、彼女は教会を家のように感じるようになったのだろう。「私は弱いから、皆がいなかったら、すぐ諦めてしまうよ。」文珍は自信がなくなると、自暴自棄に走る傾向がある。実際、彼女は学習とバイトの間で迷った時、バイト探しからレポートを書くことまで、教会の皆に頼っている。

C 神様への哀願を通して恵みをもらう

文珍の大学進学について、「泣ける子は恵みをもらう」と教会の皆がよく言う。自分の実力では現在の大学に進学できなかったと本人もはっきり言う。「神様がくださった大学」の経験から文珍は「哀願したら神様はきっと聞いてくださる」と信じるようになり、その信じる心によって、彼女は留學生活の最も困難な時期をいくつか乗り越えた。バイトや家の借金返済など、絶望を感じても彼女は神様に祈り続けた。「知っている人に全部聞いたよ。でもだれも一円も貸してくれなかった。神様も私を助けられないだろうと思ったよ。祈っても意味がないだろうと思ったけど、『神様よ、私は本当に弱いです。もうなににもできない

んです。私を捨てないで助けてくださるようお願いします』と泣きながらこのように繰り返して祈り続けた」。神様がきっと奇跡を起こしてくださると信じる文珍は、問題解決の最後の手段として神様に哀願するしかないと思っている。だから、本当に勉強したかったら、神様もきっと勉強する心を下さるはずだと本人は言った。

このような手段を取ることによって、文珍は混乱した生活に負けずにすんだ。しかし、日本語学習が継続できないことや、レポート提出の期限を把握できないこと、「人に頼りたい、神様に頼りたい、教会を離れられない」という彼女の話からも、計画性が欠けた彼女の生活はまだ改善にまで至っていないと言える。昔の自信満々な自分と比べ、まだまだ自分のことを恥ずかしく思い、教会に依存している彼女の心理がうかがえる。

② 我慢しない文珍の性格

文珍の自己管理では、依存性が強い彼女の特徴が目立つ。そして、彼女のバイト経歴から見ると、我慢しない意外な一面を持っていることが分かる。物語に書いたように、文珍は劉牧師の紹介で始めた中華料理屋のバイトをたった二、三日で辞めてしまった。理由は店長が料理をいいかげんにして客をごまかしていたからだ。「本当に子供っぽいね。劉牧師の立場を全然考えてないじゃないか。貴女は貴女の仕事をすればいいのではないですが、今後、誰かがそこでまたバイトをしようとしたら、どうするの？」と暁静ちゃんは彼女のことをひどく批判した。ところが、文珍は店長が怒った様子を真似しながら笑っていた。「日本語が出来たら直接言うけど、できないから、仕事をせずに彼の目をずっと見つめていた」と。人を騙すことを許さない彼女は、このような仕事はしなくても惜しくないと言った。確かに彼女の言う通り、皿洗いのバイトも、マグロのバイトも神戸の食堂のバイトも全部彼女が自分で辞めてしまった。「バイトをする時は、我慢はしない。唯一我慢したのはマグロのバイトだ。借金返済のことがあるから、半年も我慢した。でも結局我慢できずに喧嘩してエプロンを捨て『辞める』と言って出てきた」。マグロを辞めたのはおばさんが煩わしいだけでなく、中国人を差別しているからだという。神戸の食堂のほうはあるおばさんがいつも「日本人は皆食器洗いに洗剤を使っているよ（つまり中国人は衛生にあまり注意していない）」というような小さな事で文珍を虐めたことが原因だったそうだ。

「私はどこへ行っても、仕事を一生懸命にするから怠けはしないよ。私とうまく付き合えないのは、ほとんど彼らのせいだと思うよ。居酒屋やお好み焼き屋でも、私はなにかあったらすぐ言うよ。皆、ちゃんと私のことをわかってくれるから、すごく居心地がよく感じる」と文珍は言う。皆と仲良くしている居酒屋では彼女は二年半以上も働いてきたが、辞める気には一度もならなかった。お好み焼き屋では、日本人の若い男の子が一人いて、仕事を怠けていると文珍が文句を言ったことがある。彼は「必ずお前を辞めさせてやる、それは時間の問題だ」と文珍に言った。彼を無礼だと感じた文珍は店長に報告し、店長は彼が悪いと彼女を慰めた。文珍はその子との関係をどのように処理すればいいのか悩みながらも、「けど、ぶつかることがなかったら、理解し合うこともできないでしょう。だから、私はなにかあったら、すぐ言うよ。言わなかったらお互いに気になるし、仕事が楽しくで

きない。言ってお互いに理解できたら、二人の関係も改善できるでしょう」と話していた。このように我慢しない理由を述べていることから、人との付き合いにはぶつかることが重要だという文珍の考えが分かる。「もちろん今のバイト先で皆とうまく行っているのは私一人がいいのではなく、彼らもいい人だから、仲良くなれるんだと思う」。この話から、人間関係の理想像に関する文珍の考えがはっきり伝わってくる。つまり、彼女の求めている人間関係はお互いに尊重し合い、理解し合う関係だと考えられる。

友愛を感じて教会に継続的に来たことから、鄭旬長とぶつかりながら理解を深めたことから、中学校時代の同級生のことを嫌がっていることから、学生が純粋な日本語学校を楽しく感じたことから、真心で付き合う純粋な人間関係を求める文珍の心がわかる。ここに素直で偽善が嫌な文珍の一面が見られるのではないだろうか。

9.4.2.3 教会の役割

「日本を離れたら、なにが恋しくなるのかと聞かれたら、やはり教会だと思う。学校は面白くないし、日本人は、お互いあまり心を開かない。ここでだけ、皆愛を持って交流をしている。家族のようにね。喧嘩したりして不愉快なこともあったけど、皆お互いに思ったことを何でも言う。」

(インタビュー・2007/08/01)

彼女の話によると「教会だけ」が彼女にとっては意味のある空間だ。「我慢しない文珍の性格」に書いたように、自分が素直でいられ、純粋な人間関係を築く事ができる場所しか自分の居場所だと思わないからだ。文珍は寮の人間関係に嫌気がさし、鄭旬長と牧師の間の愛情に惹かれ、教会に来た。「自分の性格をそのまま受け入れてくれる」教会で、先輩からの心遣いと牧師夫婦の愛に包まれ、皆との心の触れ合いを常に体験している彼女はここから離れたくないのだろう。

当然、教会に住めば、現実的に色々利用できる便利さがある。電気水道代込み一ヶ月 1万 5千の家賃は安くて魅力的だし、何でも揃っているキッチンが利用できることもお金の節約になる。忙しくなったら、だれかの作ったご飯を食べてもいいし、事務室のパソコンも勉強のためならいつでも使用が許可される。教会に色々な留学生がいることで、いつでもお金を融通してもらうこともできる。

彼女は教会から離れられないのは、混乱した生活で無力感を感じた彼女が、教会に依存しているからとも言える。「2、文珍の特徴」でも述べたように、教会の皆の助けがなかったら、バイト探しもレポートを書くことも一層困難になっただろう。ここで「教会にいなかったら、もう死んでいるだろう」という彼女の話に注目してほしい。この時期の文珍はバイトを失い、大学に失望を感じ、借金返済のプレッシャーに苦しめられていた。「皆がひっぱってくれなかったら、私は死ななくても悪い子になってしまっただろう。私は弱いからすぐ諦めてしまうから」と言っているように、彼女は同郷の人たちの変化を見て、自分

もそうなるのではないかと恐れを感じながらも、生活の苦勞に負けそうになった。そのような文珍の世話をしてくれたのは教会の皆だった。聖書の物語を話して彼女を慰めたり、彼女のためにバイトを探したりしていた先輩達は彼女から目を離さなかった。

日本語が出来ないから、面接に自信がない文珍は、自分がかawaiiそうだといつも思っていた。しかし、弱い人は先に救われると聖書が言うように、肝心な時に祈り続けた彼女の声は、全部神様のところに届いたようだ。「大学の夢の実現」、「楽しい居酒屋のバイト」、「無事に送れた借金返済のためのお金」という三つの大きな恵みは、神様が彼女にくださった祝福だと思う以外説明のしようがなかったのだ。だから、彼女はこの全能の神様が自分のために存在しているように思い、困った時にきっとこの神様が手を伸ばして助けてくださると信じている。

教会にいと、いつまでも子供のままではいられない。文珍は準旬長になり、旬長になり、何人もの旬員の面倒を見てきた。生活から勉強まで旬員たちに手伝いをする事によって文珍は成長している。教会の皆との日々の接触によって、彼女は自分のことがよく分かるようになり、我慢できない性格や怠け者の癖を祈りながら少しずつ改善している。2007年から文珍は聖書を教え始めた。自分のことを振り返りながら、教えている彼女にも学びが多いようだ。「最近皆がよく褒めてくれるから、少し自信が付いてきたんじゃない？」というある教会の先輩の言葉から、文珍は人に認められたうれしさを感じた。このように他人の存在によって彼女は自分の存在感を感じ、たくさんの自己発見もできた。

これらのことをまとめると、彼女は教会から与えられた安心感によって異国生活の混乱から段々と脱出し、教会活動への参加やクリスチャンの厳しいルールを守る事によって、無力さが段々と解消されてきたと言える。

9.5 解放の結婚

9.5.1 解放の物語

はじめに

解放のことを思うたび、いつも作業服を着た彼の姿が浮かんでくる。あの細い体を包んだ大きな服は彼の15歳にしか見えない天真爛漫な笑顔と鮮明に対照的な絵として夢の中にもよく出てくる。涙が止まらなくて目が覚めた時が何回もあった。彼のどこがそのように私に悲しみを感じさせたのだろうかと思うが、彼のいつでもニコニコしている顔からその根拠を見つけるのはなかなかむずかしかった。その不思議な笑顔の秘密を知ったのは彼と日々の接触をしてからのことだった。

9.5.1.1 初めての出会い

解放との初めての出会いは大分前のことであり、記憶がそこでどうもぼんやりしているようだ。記憶が鮮明になったのは彼と一緒に勉強し、色々な相談に乗ってあげている、ずいぶん時間が経ってからだ。教会へ行った二回目の時には、彼は確かにいた。明確ではないが、礼拝日午後4時頃の3階のキッチンでのことだった。礼拝が終わり、皆ばらばらになっていた。まだなにもわからぬ私はなにをすればいいのか分からずに3階に来た。そこで、小猿（愛称）という男の子が情熱的な挨拶をしてくれた。適当に座ったら、急に一人の男の子が慌てて入ってきた。「お姉さん、電話を聞いてくれ！」と彼はいきなりに私に頼んだ。「僕の姉と言って、どこで会うか、なにを持っていくかと聞いて」と彼は中国語で手を振りながら指示した。携帯が渡され、「もしもし、お世話になっております。解放の姉です」と私は電話に出た。向こうの男の人は丁寧に色々なことを言ってくれたが、駅の名前とペンチという重要な単語の意味がわからなかった。もう一回話してもらって、仮名でメモを取った。後でペンチの意味を調べたら、「qian zi」というものだった。教えてあげると、彼は嬉しそうに「ありがとう」を連発した。今後同じようなことがあったら、どうするのだろうと考えて、彼に「今度、メールを送ってお願いと言ってください。そうすれば、辞書で調べられるので、意味が通じます」と勧めたが、彼はメールをどう使うかも分からなかったようだ。その後、また急いで出ていった。それが、彼との初めての出会いだった。

10月からクリスマスまでの間には彼についての記憶はあまりなかった。クリスマスに聖歌部と聖劇部と一緒に出演する予定があったから、時々一緒に練習をしたが、あまり話しができなかった。出演後の打ち合わせにも彼は来ていなかったようだった。

しかし、彼は確かにこの教会で無視できない存在だ。2005年4月17日の新入生歓迎日に歓迎パーティーが終わってから、一時間の交流が設けられていた。皆は話しながら、ゲームをやった。負けたらお酒の代わりに水を飲むのがルールだ。彼は本当に不器用なので、いつも負けてしまう。皆の大笑いの中で14杯も飲んだ。3階は彼のことですごく盛り上が

っていた。「解放、頑張れ！解放、頑張れ！」の音がすこし意地悪く聞こえるが、バカ正直な彼は笑顔で飲めなくなるまで飲んで、「解放がいるところには、いつも笑いがある」と皆はよく言っていた。

でも、普段の礼拝には彼はあまり元気な姿を見せなかった。いつも遅れたり、聖書を読まずに途中で眠たくなったりする彼が目には浮かんでくる。このような時になると、隊長の小椿さんはいつも彼のそばで聖書を持ってあげながら、読んでいる箇所を指して、一緒に聖書を勉強していた。小椿さんは彼が眠たくて我慢できなくなったら、肩を揉んであげるのも喜んでやっていたようだ。

2005年6月から青年隊の集合には誕生日のお祝い式が設けられた。解放と他の3人の旬員と一緒に3隊の皆からの賛美とお祝いを受けた。綺麗な音楽が流され、祝福の言葉の中で何人かは涙を流した。解放の幸せそうな笑いは止まらなかった。椅子に戻ってきても、じっと自分へのカードを見つめていた。3人とも旬長から一言ずつの褒め言葉をもらった。解放の旬長の黄さんが「解放にはまだまだ色々足りないところがあるけど、ありがたい長所もあります。どんなことがあっても、彼を見ると、いつもニコニコしています。辛い時が多い留学生活の中の彼の笑顔から僕は大きな勇気をもらいました。」と彼を評価した。

だから、いつも笑顔の解放に怒りがあるとは思わなかった。6月の二週目の日曜日、青年隊の交流時間に中旬長と旬長の間の交流及び旬員の中の交流が分けて行われていた。成淳さん（朝鮮族の男の子）は旬員たちを集めて日本の生活について話してもらった。「一人の留学生はお金で快樂を買おうとした」という話が出てくると、座っていた解放は、急に立ち上がり、「思っていた日本と実際は全く違うんだから」と怒ったように大声で言い出した。でも、なにが違うのかを彼はその時言わなかった。

9.5.1.2 クリスマスになる

2005年8月に教会の修練会が行われた。今回は3度目であり、参加者は200人近くだった。4日目の夜は修練会の山場だった。4時からの解放たちの聖劇出演は非常に好評だった。韓国からの兄弟姉妹も聖劇に出演した。最後のステージは皆さんが舞台に誘われたので、解放は興奮したように舞台の下からいきなり飛び上がった。彼の行動に驚いたせいも、会場の雰囲気は急に静かになっていた。それから更に盛り上がってきた。皆が気も狂わんばかりに喜んだ時間が3時間も続いた。7時から10時までには賛美の時間だった。賛美、賛美、椅子が全部片付けられ、大きな会場では皆が心を開き、自由に歌ったり、踊ったり、笑ったりしていた。10時から一時間の祈祷があり、電気が消され、白い蠟燭の光に囲まれた静かな雰囲気は聖的な感じを醸し出していた。きれいな賛美歌の中で皆はお互いに抱き合い、泣いたり祈ったりしていた。11時からの受洗式に解放は涙を流しながら牧師の洗礼をうけた。

次の日、修練会はまだ半日あり、解放ができたばかりの韓国人の友達と話しながら歩いていた時に、「解放、ちょっと待って、私はわかった。君は偉くなるよ」と文珍はわざわざ彼を呼び止めて言った。彼女は彼の勇気を評価しようと思ったのだろう。

解放はクリスチャンになった。次の日曜日に牧師は修練会の話をお証しした7人のなかで、解放が一番目に手をあげて皆の前で自らの体験から自分の変化を話した。解放の話によると、旬長の黄さんは自分にたいへん親切なので、最初は教会に来ないと、恥ずかしく感じるから、教会に来た。皆から修練会がとてもいいとよく聞くから、今年はお金の余裕もできたので、好奇心で覗いてみようという考えで修練会に参加した。普段の祈りは途中眠たくなるから、しっかりやっとなかったから、彼は今回皆と同じようにまじめに長い祈りをするつもりにした。人間だれでも罪を犯したことがあるから、神様の前で徹底的に告白した。その後、妙なことが彼の体に起きてきた。自分は強いのだといつも思っているのに、急に涙が止まらなくなって体も半分空で漂っているような感覚になり、どうしても自己コントロールできなくなってきた。彼は今回本当に聖霊の感動を受けたと感じた。本当に天国に入ったようだった。だから、以前の信仰は全部虚偽だったが、これから本当のクリスチャンとして、神様の誉れのために努力する。聖なる言葉を持って一歩、一歩、進んでいく。必ず世界の舞台に立って成功者になるという。

彼のお証しは皆の笑い拍手の中で終わった。いつも総理になりたい、社長になりたいと思っただけの解放が今から神様の誉れのために生活していきたい、努力していきたいと思うようになったことはたしかに神様によって救われたのだと牧師は言った。

だが、牧師の指摘したように、新しい自分と昔の自分との本当の戦いは始まったばかりだった。

9.5.1.3 大学への憧れ

解放の誕生日の時にいつか時間があったら、人生を話し合いたいと私に話したことがある。その後、修練会の時期と重なり、私たちはあまりゆっくり話しをする時間がなかった。修練会から帰ってきた解放は変わった。「神様は君を愛しているよ」と皆と情熱的に挨拶をしたりしている解放は聖霊に溢れているとよく言われていた。彼のお証しした日に、「お姉さん、今まで頑張ってバイトをして、借金は全部返せし、10月の学費も貯めたので、すこしバイトを減らして勉強したい」と礼拝堂に入った私に恥ずかしそうに言った。本気だと思わなかったが、とりあえず火曜日の3時に1回目の学習を教会近くの学習センターで始めた。あまり勉強はできなかったが、解放はまず自分が将来世界の舞台に立つという目的を教えてくれた。そして、新しく買ったノートの一ページ目に校長先生の奥さんへのメッセージを私に書かせた。一回目に書いたものは豪気がない、地味すぎると言われ、彼の言う通りに書き直した。私の大阪大学の所属もきちんと書いてあった。解放と校長先生はどんな関係なのかその時は全然わからなかったのですこし彼の行動がおかしく感じられた。私の名前はあの日から大阪大学として彼の携帯に登録されることになった。

① 校長先生との契約

9月4日の礼拝が終わると、青年隊の交流時間になり、解放は仕事を明日からやめ、お姉さんについて勉強すると急に皆に宣言した。学習するって信じられない、本当ですかと周

りの人たちは大騒ぎした。やらなかったら、今の仕事を紹介してくれないかと文珍は彼に頼んだ。早速、解放はこの日の聖歌練習の終わりを待って、近くのスーパーに私を呼び出した。彼は二級のテストと『新しい日本語』の教科書を持ってきた。それをここで勉強しようと思ったのだろう。彼のレベルが全然わからないから、とりあえず読んでもらい、その内容を説明してもらった。しかし、一時間も経たずに彼は眠たくなってきた。コーヒーを2杯も飲んだが、あまり効果がなさそうだったから、途中で立って勉強し始めた。終わり頃、彼は自分の計画を打ち明けてくれた。同志社大学を目指しているから、試験に合わせてこの1級、2級の文法とテキストの内容を中心にやってほしいという。それと現在の自分はD班だから、10日後にC班に入りたいと言った。もうすこしよく話を聞いたら、解放の学校での状況が分かってきた。彼がいる日本語学校は学生のレベルによってクラスがA,B,C,Dと分けられている。彼は二回目のD班に属している。つまり再履修生だ。日本語の発音はあまり悪くはないが、語彙量がたしかに少ないと初めの学習でわかった。

次の日は月曜日であり、3時からの解放との学習が正式に始まった。ほぼ毎日2,3時間の学習は2ヶ月も続いた。解放は言った通りに会社に手紙を出していきなり仕事をやめた。そして、学校にあまり行かない人から毎日行く人になっていた。学習に集中しようという姿勢がみえたが、クラスでの成績の上昇はそんなに簡単ではなかった。小テスト3回連続クラスの1位を取ったら、上昇を認めてくれると彼は校長先生と契約したそう。サインが入っている契約書も見せてくれた。解放はよく決断したが、実はあまり自信がなかった。先生の言うことを聞こうとしても分からないからだ。しかし、大学に入ることを考えると、D班だったら絶対だめだと彼は考えた。D班の進度は遅いし、皆先生の言う事がわからないから私語ばかりでよく聞き取れないこともあるそう。1週間後の試験は勝負だと二人力を合わせて、努力した。彼は基礎が弱い、いいところもある。中国語と日本語を混ぜて話しをするのも恥ずかしくなさそうだし、読む時であれば、力の限り頑張る。目的がはっきりしている解放は、小さいところでもわからなかったら、すぐ質問をする。日記を書かせたら、はじめは一行、二行ぐらいだったが、書かない時はほとんどなかった。解放は信用を重視しているから、人に言ったことは必ず守る。だから、日記もそうだと彼自身が言っていた。日本語で書いたことがほとんどなかったと聞いたが、書きたいことは多かったようだ。4日目からの日記は既に普段の生活の羅列ではなくて、自分の考えたことなどを書いてきた。そのおかげで彼の心に更に接近できた。10日後の試験で意外にも84点を取れた解放は、二番目の学生より35点もよかったとうれしそうに報告した。すこし自信が付いた彼はB班を目指し始めた。この時期の彼は非常に元気だったし、学習意欲も強かった。100字も書けなかった彼は2,3ページ書くようになり、宿題を書き終れない時もあったが、必ず次の日に二日分持ってきた。日々の進歩がみえるのはうれしい事だろうが、それより一番うれしいのはやはり先生の言うことが段々分かってきたことだそう。ある日、彼は興奮したように「お姉さん、全部わかったよ。僕は校長に中国人の先生を雇うことを提案した。」と言いながら、急に大分前のことを思い出して、「うちの先生は意思を伝えるためによく身振り、手振りをするが、もともと分からないのに、そのようにすると、ますます分か

らなくなってくる。あの授業で先生はパンダと言いたかったのだと今は分かったが、こう、こうして、なにをいいたいかずっと分からなかった」と解放は冗談でパンダの振りをしてみせた。そして彼は先生の言うことが全然通じないという D 班のストーリーを一つ話してくれた。ある日の午後、先生の言うことが分からないから、皆寝てしまった。解放も寝てしまった。それでも、先生はまだ身振り手振りをしながら、レッスンを進めていた。あまりにもおかしいから、C 班の学生は皆 D 班をみに来たという。

彼の努力で学習は順調に進んだが、途中で同志社大学には英語の試験があるということを知って、解放は諦めるしかなかった。その後願書のことで暁静ともめたりした²⁷⁾。しかし、すぐ目標を関西学院大学に換えた。この大学はキリスト教と関係があるから、解放は願書をもって嬉しそうに創建者の歴史と学校のことを日本語で読んでくれて、意味も説明してくれた。色々な抱負も話してくれた。大学に入ったら、留学生基金を作るから、1円でも100円でも人数が多くなったら、たくさんの人を助けられると言っていた。

解放が校長先生との関係をどのように築いてきたのかははっきりとはわからないが、彼の話によると、もともと校長先生の奥さんは北京出身の仕事がよく出来る人で、校長先生と一緒にこの学校を運営しているという。子供がいないし、段々年も取ってきたので、解放を育てる気持ちがあるという。日本語学校を卒業したら、校長について世界各地に面接などに行くという話を解放からよく聞いた。だが、解放は大学に進学することにしたので、その話を白紙にした。すこしは校長に怒られたようだ。解放は自分が知識以外はなんでも持っているから、大学にさえ入ったら、前途がきっと明るくなるという思いが強いので大学進学を選んだと言った。

二回目の試験の挑戦で解放は全部できてはいなかったが、B クラスに入ることにきまった。その時に学校は京都に移校することになったので、クラスは4つのレベルから3つになった。A と B を合併したので、解放はいきなり A 班の学生になった。この変化はあまりにも衝撃で、すこしついていくのはむずかしそうだった。A 班の学習はもう面接と文章を書く練習に入ったので、学習の仕方を変えてもかまわないが、彼には合わないだろうと思った。2つぐらいレッスンを受けたら、解放はもうショックを受けたようだった。皆の日本語がべらべらだから、解放は皆の言うことを聞き取れなくて口が開けなかった。学校から逃げたいという考えが出てきた。同時に願書を出すのに色々な証明書が必要で、彼の出席率が悪いから、校長先生は他の人に隠して彼の資料を準備していたということもあった。願書には事実を書きたいが書いたら受け入れてくれないという矛盾した気持ちがあったかもしれない。連続の徹夜学習になると、急に「お姉さん、僕はもう耐えられないんだ。もし、僕が死んだら、あの日記を公開してほしい」と解放は言い出した。私は冗談で「死んでも有名になりたいの?」と言ったら、「お姉さんは留学生のことを研究しているでしょう。他の留学生に私と同じにならないように警告してほしい。もう孫楽さん（ルームメート）に言

²⁷⁾ 願書のことで暁静ともめた:解放と暁静は二人とも同志社大学を希望していたが、英語の試験があるため、解放は諦めるしかなかった。大学の願書を先に解放が預かったが、彼女と会う時にいつもそれを持っていくのを忘れ、結局一ヶ月渡すのが延びた。暁静は解放がわざとしたと思って解放と口喧嘩をしたそうだ。

った」と答えた。

② 日本語学習中のエピソード

【不法滞在者の友達】

9月22日の学習に解放は遅れてきた。校長先生の奥さんになにか用があったという。証明するために、奥さんに電話で説明してもらった。解放の話によると、留学生の林さんが不法滞在者になり、日本の生活に耐えられなくて帰国することにしたいらしい。解放は現在彼のことを任されているという。しかし、解放はチケットを買ってあげるだけで済むと考えていた。出頭が必要だとは全然知らなかった。よく彼に説明をしたら、解放は手続きのプロセスが分かり、校長先生と一緒に林さんが帰国できるように手続きをした。入管でも拘置所でもその手続きをやったのは解放だった。お友達と同じにならないように、頑張ってくださいと行く先々の人たちから励ましの言葉をもらった解放は学習意欲が更に高まったようだ。林さんのことを話すたび、解放はいつも彼のことを馬鹿だと言っていた。林さんは裕福な家で育てられた子だ。そのせいで、仕事が出来ずにいつも首にされる。すこし仕事をすると疲れるからと言って、学校に来なくなり、ついにビザ申請の時期が過ぎてしまい、不法滞在になってしまった。日本で何も出来ない彼はついに耐えられなくて帰ろうと決心した。お金がないので、家族との連絡費用やチケット代も全部解放が出した。息子を助けた解放に感謝するために林さんのお父さんは、田舎まで解放の両親を尋ねた。林さんはやっと無事に帰国した。林さんのお父さんがある局の局長だと聞いた解放は学生募集のことを頼んだという。

【願書の計画書】

9月の終わり頃、解放は大学の願書を出した。願書の計画書を解放は真剣に書いていた。当然中国語だったが、留学生が来日の書類を偽造することや反日デモのことや小泉首相の靖国神社参拝など社会現象に対する自分の考えを述べ、日中の中に不理解があることがその原因だと説明した。また将来平和な世界を作るために色々な基金を作り、貧乏な人々を助けようと考えていると彼は書いていた。黄さんに訳してもらった後で学校の先生にも見てもらった。しかし、次の週の月曜に持ってきたものをよく読んだら、助詞以外にあまり直してくれていなかった。文脈的におかしいと思うところが多かった。事情を聞いたら、先生は入管の批判や書類の偽造の話を出さないように彼に勧めたようだ。解放はその意見を採用したが、彼自身はあまり納得できなかった。小泉首相のことも書かないほうがいいと言われたが、そうすれば文章のインパクトがなくなるのではないかと解放は考えた。だから、助詞以外になおさないようにと先生に頼んだらしい。計画書の冒頭の「先生、おはようございます」もすごく説得してから消すことにしたが、先生を笑わせると、いい点数をつけてくれるだろうという彼の考えはなかなか直せなかった。この日、解放は私を地下鉄の入り口まで送ってきた。

途中彼はお菓子を買ってくれた。今日国際電話カードを売って、6千円もうかったから

と嬉しそうに言った。最近学習中でもよく教会の皆から国際電話カードを頼む電話が入ってくる。教会で彼がカードを持ってくるのを何回も見たから、別におかしく思わなかった。歩きながら、彼は一つの疑問を話し出した。カードを買ってくれる人のなかにホストをやっている人がいる。彼らは千円、2千円の小さいお金は気にしないから一番付き合いやすい。しかし、ホストの仕事は汚いと牧師も教会の人たちもよく言う。解放が理解できないのはどうして皆が悪いというのに、日本人の先生は彼らに丁寧な態度をとっているのかということだ。全然怒りが見られない日本人の先生の態度から、別にホストって悪くはないだろうと彼は思った。日本人は他人のことに干渉しないからと説明したが、彼はどうしても理解できなさそうだった。

【中秋節の思い】

9月19日は中国の中秋節だった。フィールドノートを見ると、あの日から解放は日記に自分の心に思ったことを書くようになったとわかる。19日の牧師の話から解放はいつも空想している自分は本当のクリスチャンではないことに気づいた。それでも、どうしても大金持ちや社長になるという考えが諦められないこと、また、日本での生活だけではなく中学校以来の生活を後悔していることなどを話してくれた。

二日間会っていなかったので、日記は21日まで書いてあった。「夜、月を見た時、父と母を思い出しました（日記の引用）」と日本語の間違いを説明しながら、解放の両親への思いを聞かせてもらい、帰ってから私は涙を流しながらフィールドノートを書いた。

解放の両親は農民で、今でも畑をやっている。彼は両親に可愛がられて家の中のことはなにもしなかったため、玉子焼き以外に食事を作ることがなにもできなかった。しかし、以前の解放は両親の愛がわからなかったし、両親が農民だから知られたら恥ずかしく思うので人に言わなかった。今回の願書には両親のことを書こうと解放は決心した。両親は本当に熱心で正直な人で、非常にいい農民であり、彼の誇りだと思えるようになったからだ。彼は両親のことを話すと満面の笑顔になる時が何回もあった。

彼の両親は毎日朝早く起き、3個の饅頭と水、すこしの漬物を持ち、麦藁帽子を被り、畑に出て行く。昼になって、疲れたら、二人は一緒に坂に座って食事をする。お父さんは誠実で馬鹿正直に見える人だけど、本当にいい人で偉いと解放は思っている。村内の人の手伝いに呼ばれるとすぐ行くが、その後の食事にいつも呼ばれないまま帰ってくる。それでも、次の手伝いに呼ばれたら、また喜んでいく人だからだ。解放はたまに自分が将来なにも出来なかったら、二人はだれが扶養するのかとお父さんに冗談を言うが、お父さんはいつも腕を叩いて、私たちはまだ元気だよ。だれがあなたの扶養に頼るものか、少なくとも、後10年間は働けるよと彼に言い返す。お父さんの唯一の楽しみは故郷の坂で豚頭肉を食べながら、白酒を飲んで夕焼けをゆっくり見ることだ。あの坂の景色は非常に綺麗だから、解放は案内するから是非見に来てほしいと何回も私に言った。日本へ来て疲れて倒れそうな時に、「倒れたら、だめだ！倒れたら、誰がお前の両親を扶養するのか！頑張れ！頑張れ！」と解放はいつもこのように自分に言い聞かせる。そのおかげで元気になって、ま

た頑張れるようになった。だから、解放は将来いくら成功しても、農民の子だということを永遠に忘れないと言っている。ただ、両親のことを思うと、彼は日本でなにも勉強しないで、中身がなくてほらを吹くばかりの自分のことを非常に悔しく思っているようだった。

【日本語学習中に出来た友達】

A：珈琲屋のお姉さん

解放の学習にすこし進歩がみえると、彼自身にも自信が出てきたようだ。学習以外によく冗談を言ったりしていた。願書を出してから、一時期の学習は珈琲屋でやっていた。

いつも大声を出して読むから、注目されていたのだろう。珈琲屋の一人のお姉さんはこちらへ来て彼と話をすることもあった。解放はいつも日本語と中国語を混ぜて話をする。通じないだろうと思ったら、そんなことは全くなくすぐ友達になった。

この時期、解放は天国への憧れが強くて皆と一緒に天国で笑いながら話をする夢をみるがあった。夢の中で笑い出して目覚めたこともあったという。黄さんに「お姉さんは君のために毎日教えているんだから、君はお姉さんのために祈りをしなきゃ」と言われたころや、教会へ来ることは救われる第一歩だということから、毎週教会へ来てほしいとよく私に言った。誕生日に暁静に聖書を贈り、暁静からペンをもらった時、解放は急に「珈琲屋のお姉さんはとても親切だから、彼女も天国にいてほしい」と言いだした。聖書を読んでもらいたいからと、学習後に、彼女に聖書を一冊贈った。だが、1週間経っても、彼女は聖書の話に全然触れなかった。解放はどうして聖書の話をしてくれないのかと思い、直接彼女に聞いた。忙しくて、帰ったら眠たくなるから読む時間がないと彼女は答えた。解放はすこし失望したが、彼女と相変わらず挨拶をしたりしていた。今後も連絡するようにお互いに連絡先を交換した。

B：喫茶店のおじさん

喫茶店のおじさんと知り合ったのは偶然だ。珈琲屋の定休は土曜日だから、解放と私はイタリア料理屋のすぐ隣の喫茶店でよく勉強していた。小さいところだが、ゆっくり飲み物を飲んだり、話をしたりすることが出来るし、夜 11 時まで利用できる。解放の一生懸命に学習する姿はよく人の目を引くが、店の人はすぐに慣れたようで、彼の大声は注意されなかった。

その日は解放の日記に「牧師の話を聞いて、生きがいはなんですかと考えるようになった」と書いてあった。彼は自分のお金だけのために人生を送る考えを恥ずかしく思い、もっと有意義なことをやろうと日本語をたくさん交ぜながら、情熱的に語ってくれた。いつもの話だが、将来基金を作って世界中の貧しい人たちを救うという。日本語がすこし分かるようになってきた解放は、普段でももっと日本語で話してほしいと私に注文した。彼の要求に応え、日本語で話す時が増えてきた。わからなかったら、彼はすぐ辞書を調べる。生きがいのことを話すと解放は少し興奮し、声も普段より高くなってきたので、彼の隣に座っていたおじさんは途中で彼に声を掛けてくれた。解放は興奮して自己紹介をし、私をも紹介し、おじさんと握手をした。二人は 40 分ぐらい話し合った。通じ

ない時だけ通訳の私が呼ばれた。帰りに、おじさんは解放に名刺を渡し、将来日本語が上手になったら、この会社へ訪ねてきてねと言った。解放は名刺がないから、自分の連絡先をメモに書いておじさんに渡し、喫茶店の出口まで送っていった。おじさんの手を握って、解放は「僕は日中の永遠の友好のために頑張ります」と大声で言ったが、友好は中国語のままだった。帰り道に解放はその名刺をうれしそうにずっと見つめていた。ある会社の専務と書いてあったが、解放は専務の仕事をあまり知らなかった。説明してあげたら、将来自分はきっとビジネスで成功できると嬉しそうに言った。別れる時に「お姉さんも名刺をもらったのにどうして僕ほどうれしく感じないの？」と解放は疑問を聞いた。お姉さんはいつも物事を複雑に考えているからと応えが、彼は理解できないようだった。

C：学習センターのおじさん

私たちの学習時間帯に学習センターが開いていれば、そこをよく利用した。静かなところで勉強にも集中できる。学習センターは解放の家にも近い。彼はここを知って以来、一人でもこちらをよく利用するようになった。学習センターのもう一つの利点はここでの学習が飲み物を注文しなくても済むということだ。解放は普段テレビを見ない。分からないのもあるし、時間ももったいないと考えているらしい。しかし、小泉首相のことをよく知っている。彼の個性と覇気に憧れているとよく言う。反日デモのことや靖国神社の参拝のことで中国のことが盛んに取り上げられていた時期に、センターの新聞にも彼の記事と写真がたくさん載せられているので、解放はたまに見るようになった。

ちょうどA班に入った時期で、面接試問の練習があり、なかには「中国をどのように民主的な国にするか」というようなものもあった。彼が段々日々の生活を超越して社会的なことを考えるようになってくると、色々と分からない事も出てきた。解放はセンターに入った時に必ず「おはようございます」と大声で挨拶したから、受付のおじさんはよくこちらの学習を見に来たりしていたし、解放もわからないことがあったら、おじさんに教えてもらったりしていた。ある日、解放は小泉首相の参拝をどうしても理解できずにおじさんに聞いた。それは小泉首相の信念だというおじさんの答えはあいまいだった。納得できない彼はまた新しい疑問を持ち出した。信念は悔い改めないということなのかと私に聞いた。罪を認めないと地獄に落ちるから、皆はいつも日本のために祈祷をしているのに、と解放は淋しそうに言った。

【初めてのスーツ体験と面接訓練】

試験にむけての学習を進めて一ヶ月ぐらいして、解放がすこし私との勉強をおごりになった時期があった。学習に遅れたり、学校に行かなかったりしていた。理由は夜勉強したら、朝はどうしても起きられないということだった。起きたら午後1時になっているので、学校に行っても意味がないと説明してくれたが、彼は中学校でも眠りたい時期が長く続いたことがあったと話をしてくれた。そして、私はある番組のことを思い出して、たぶん病気だろうと言った。信じられない彼を、薬局に連れていった。症状を話すとすぐ、薬を

くれた。次の日、薬を飲んだ解放は元気満々に学習に来た。効果を感じた解放は旬長の黄さんにも勧めたが、断られたようだ。

いよいよ、試験の日が近づいてきた。面接の準備で、青年2隊の隊長は彼のためにスーツを借りてきた。10月の最後の日曜日は関西学院大学の受験で大騒ぎだった。彼を入れて試験を受ける人が3人いた。他の二人の準備はすでにできていたようだ。7時から8時まで3階で解放のために面接について色々なアドバイスをした。解放は7時10分ぐらいに3階に上がってきた。ドアを入るとすぐ「先生、おはようございます」と皆に挨拶した。皆は大笑いだった。用意したスーツを着てもらったら、すこし大きかったので、鄭さんは（彼も同じ学校を受験する）すぐ自分のものを持ってきて彼に着替えさせた。スーツを着たのは初めてだと解放は言いながら、興奮したように牧師の奥さんの顔に3回もキスをした。窮屈な感じが嫌だから、明日私服で行きたいと言ったら、大字に「明日行ったら、すぐわかる。皆スーツだから、君一人スーツじゃなかったら、どうする？」と言われ、一応受け取ったが、シャツはあまり似合わないと言ったので黄さんは自分のものを持ってきた。斬新になった解放は非常に元気に見えた。格好いいと麗は何回も言った。服の問題を解決してから、面接のことに入り、先輩たちは皆聞かれる可能性がある問題を全部並べて解放に聞いてもらった。注意事項も色々言ったが、立博さんは第二の案（面接のやり方）も用意する必要があると主張した。解放は皆の言うことを全部メモに書いた。中保祈祷会に参加するために皆が下に行った後で、私は帰ったが、黄さんの話によると、あの日、彼は夜遅くまで面接の練習をしたという。

③ 先生への手紙と関西学院大学の受験

A：先生への手紙

最後の受験準備として解放は面接の先生に手紙を書くことにした。自分の日本語が下手だから、意味を十分に伝えられない恐れがあるからだという。手紙に解放は自分の受験の決断までの経緯と将来の抱負を述べ、最後は先生にチャンスを下さるようお願いをした。私が見た原稿は解放が書いたものを崔さんが日本語に訳した第1版だった。彼の意志を尊重した上で、日本語に中国語で書いたものが漏れなく入っているかどうかチェックするのが私の仕事だった。中には彼に確認してから直したところもいくつかあったが、完璧になったら、自分に相応しくないから、細かく訂正しなくてもいいと言われたので、直さないところも残した。夜、黄さんから電話をもらった。彼は手紙を読んで、残りを直したと言った。解放が後悔するかもしれないと思ったからだ。手紙が出来てから、3つを写して封筒に入れたと夜の電話で解放は報告してくれた。少なくとも、彼は先生の返信を期待したようだった。

B：受験

教会の皆のおかげで解放はやっと試験準備ができた。今回は教会で解放以外に鄭さんと劉さんも受けた。試験当日の面接で先生にお父さんはどれぐらいの畑をやっているのかと聞かれた。単語がわからないから、私に電話をして聞いてきたりしたことがあった。

終わると解放はうれしそうにお爺さんとお婆さんとの二人の面接官で、僕は皆をおおいに笑わせたと言った。手紙は三つ用意したので、二人だけだけど、三つ全部置いて帰ってきたという。しかし、結果は4日間後に通知された。3人全員不合格だったと黄さんから聞いた。

礼拝日に行くと、鄭さんはいつも通り教会の案内をやってしたが、解放はあの日から消えていたようだ。中旬長の崔さんは彼のことを心配した。「神様が祝福するのは力の限り頑張る人だから、解放はできる限り頑張ったからそれでいいんです。」と解放に会ったら伝えてほしいと崔さんは私に話しをしてくれたが、あれから彼はだれとも会わなかったし、学校にも行かずに夜中のバイトをむやみにやり出したと聞いた。

ある礼拝日に久しぶりに解放にあった。彼は疲れたような顔で無理に笑顔を見せてくれた。最近のことを聞いたら、道頓堀の和食レストランでバイトを見つけたという。彼は店の名前がわからなかったが、大阪の金持ちがよく来るところだと説明してくれた。もっと話を聞こうと思ったが、聖書学習が始まり、私は5階へ行かなければならなかった。

C：試験に失敗した後の食事

11月9日は寒かった。試験に失敗したにも関わらず、解放は2ヶ月の学習に感謝するため、中華レストランでご馳走してくれた。皆は帰国を止めてくれたが、帰国の決心をすでに固めたという。日本に疲れたから、帰ってから会社を作り、お金を儲けようと彼は考えていたが、具体的な計画を聞いたら、孫楽ともう一人の男の子と、3人で一緒に会社をする以外、中身はまだなかった。後日、孫楽に校長先生の奥さんと話をしてもらい、奥さんの反応から判断しようと解放は考えていた。能力試験の準備なら、まだ間に合うと言ったら、解放は自分を嘲笑するように、自分は勉強のできる人ではないから、無理やり大学を受験したが、このようないい大学は自分が入れるところではないと色々なことを後悔したように言った。面接の先生からも全然返信がなくて、きっと笑われただろうと解放はすこし失望したように見えた。ビジネスは簡単に成功できることではないと説得したが、解放は自分も迷っていると言った。成功の夢を見ながらも、来年の冬、なにもできずに寒さの中で自転車を押しながら歩く自分の未来像を怖がっているようだった。地下鉄の入口で別れた時に日本へ来る前に中国の体制のせいで自分の才能が発揮できないと思ったが、この世界有数の先進国に来て、まだ一つのことでもできないとは思わなかったと解放嘆息した。

9.5.1.4 盛大なパーティーの出演

11月9日からしばらく、日曜日の礼拝が終わると解放はすぐ帰るので、会っても挨拶ぐらいだった。笑顔にはかなりの無理があったのではないかと思い、黄さんに聞いた。最近バイトばかりで、だれとも話しをしないとされた。まだショックから抜け出せないのだろう。ちょうど受験の時期と重なって、教会の学生から色々な頼みが入ってきた。それに暁静ちゃんのことと自分のことで精一杯になっていたのも、彼のことを心配はしていた

が、火曜日必ず彼にメールを入れる以外はすこしほっておいた。

12月には教会の一番忙しい時期だと言える。各部属の活動も普段より頻繁になってくる。私もこちらの老人（古い人）として色々な仕事を与えられた。ある日、久しぶりに解放から電話があった。「お姉さん、僕は国会議員にあうんですよ」と彼は自分の興奮を隠さずに色々言ってくれた。よく聞いたら、校長先生がある国会議員のパーティーの招待状をもらったので、解放を連れて行くという話だった。彼は電話でなにを着たらいいのか、なにを話したらいいのかと質問を続けていたが、2月のことだから、それを考えるのは早すぎじゃないかと言ったら、彼は自分のことを嘲笑してからまじめそうに「今回はチャンスだと思います。神様が僕を慰めるためにわざわざ用意してくれたことだから、僕はしっかり掴まないとだめです。お姉さん、僕は今バイトが忙しいけど、1月になったらゆっくりできるので、もう一ヶ月日本語を勉強して、パーティーで皆をこの中国人の留学生、日本語ペラペラ、可愛くて若い青年だと驚かせたい。お願いします」と言った。仕方ないねと思いながら、その時になったら、話しをしましょうとOKした。

次の日曜日、彼が招待状を皆に見せているところに私は礼拝堂に入った。周りの人がすごいねと羨ましそうに言う風景がちょうど目に入った。当然解放は丁寧にA4のファイルに入れた招待状を私にも見せてくれた。随行者のところに確かに解放の名前が書いてあった。牧師の聖書学習は1時間ぐらいだったが、彼はずっと真剣な顔で招待状を見つめていたようだった。このパーティーの出席計画はたぶんあの時から既に考え始めていただろう（もっと早かったかもしれない）と今は思うが、本当に打ち明けてくれたのは1月に入ってからのことだった。

計画と言っても、実はとても簡単だ。彼は司会者からマイクを取り、出席した皆の前で演説をしようと考えていた。どのようにマイクを取るかまではあまり考えなかったようだ。演説の内容については日中友好とビジネスをしたいという目的以外にまだ中身が完成していない。唯一よく考えたのは、退場のことだ。皆が彼の発言に盛り上がったところで静かに校長先生に挨拶もせず会場から逃げだすと計画した。自分がやることはきっと校長先生に許されないし、出席者から暖かい拍手が来て、さらに話すことを求められたら、自分の下手な日本語がばれてしまうというのがその理由だと言った。

パーティーの日が段々迫って来たが、彼はまだ完成品を作れなかった。1月30日の打ち合わせで彼はやっと混乱した思想を整理して10行ぐらいの文章ができた。最後は「愛ということをもっと知れば、世界は明るくなります」と日本語でまとめた。本人の意志を尊重したうえで、日本語に訳したが、当然必要だと思うところをすこし飾りもした。そのほか、名刺の作り方と色々な段取りとかも具体的に話しあった。家に帰ると彼は急いで名刺を作った。パソコンを触った事もない彼にとっては名刺作りも一つの挑戦だった。アドレス入り、自分の名言も入れたこの名刺の正体は1週間後にやっと見ることができたが、なかなか面白くて見たこともないものだった。宴会後解放からの連絡は一つもなかった。2月5日の日曜日の礼拝堂は、解放の名刺の話で盛り上がっていた。彼は一枚私にも丁寧にくれたが、宴会のことには一言も触れなかった。実はその前に彼の不注意で階段のところで文

珍が彼の落とした名刺を一枚拾った。「これを解放が知ったら、怒られる²⁸⁾から」と彼女は言いながら、鞆に入れた。

この日は雪で寒かった。教会からの帰り、解放は送ってくれた。しばらく黙っていた彼は、やっと口を開き、冷静に話しをした。演説はできなかったという。校長先生に止められたこともあるし、その雰囲気は自分の演説を許してくれないと感じたということもあったそうだ。でも、彼は黙ってはられない性格だから、情熱的にいろんな人と握手をして名刺もいっぱい配ったし、いっぱいもらったそうだ。お年寄りの中ではとても目立ったかもしれない。「こんな若い人がどこから来たの？」と彼のことを皆よく聞いた。議員の幹事グループのメンバーに全部挨拶をして写真も取ったと彼は大声で言った。その次の日曜日に取った写真も全部見せてくれた。スーツに変身した解放をだれも田舎者だとは思わないだろう。だが、このような珍しい経験をした彼は「一言でいえば、日本は自由民主の国ではないとわかった」とすこし失望したように言った。

9.5.1.5 電撃結婚及び結婚後のトラブル

解放はまるである潜在的な能力の持ち主であるかのように、決して平凡ではられない人だ。普通の人だったら、そもそも彼についていくことが不可能だろうと最近よく思うようになった。今回の衝撃的なニュースの開始は議員のパーティー後十日も経っていない時のことだった。まだまだ寒く感じる大阪の2月はあらゆるところにチョコレートの香りが漂っている。バレンタインはあまり自分とは関係がないと思ったが、他人の人生にここまで深く巻き込まれるとは想像もつかなかった。

今年の天気は異常だなと夜の天気予報を聞きながら考えていたところへ、携帯が鳴った。もう夜中の一時だよと思いながら、電話に出ると、解放だった。許してあげるしかないのだ。私たちの夜は彼の昼だから。挨拶をしてから、すこし黙っていた解放は、急にうれしそうに「お姉さん、僕は彼女ができた。結婚しようと思っている。今週の土曜日は一緒にホテルへ行く。これは日本で普通のようなのだ。」と私に呼吸する時間さえくれずに一気に話しかけた。なに？彼女？ホテル？頭の中が整理できない私は感想もお祝いも言えずなに人ですか？おいくつですかという基本情報を先に聞いた。「日本人で、二個上だ。14日、情人節（バレンタイン）は一緒にいたよ。もともとホテルに行こうと思ったが、彼女の車の中で夜中まで話をした。楽しかった。僕は今度本当に恋に落ちた気がする。彼女が好きになった。恋愛とかは僕とあまり関係がないことだと思ったが」と彼は正直に話してくれた。こちらはおめでとう以外に言うことがなかった。

その次の日はまた解放から電話をもらった。今度はホテルへ行くのにコンドームがいるかという質問が一つ、来週の土曜日は彼女に手紙を出すと言ったから、手紙をお姉さんをお願いしたいということだった。はじめの質問を臆面もなく言う彼にすこしは腹が立ったが、最後のお願いは迷わず引き受けた。今思えば、彼がなにを書くのかを知りたいという

²⁸⁾ 名刺の数は限られているので、解放は皆に名刺を配るのではなく、必要だと思う人にしか配らない。文珍はその中に入っていないため、知られたら名刺が取り戻されるかもしれない。

下心があったと思うが、ただ一つの手紙がある意味で一人の人の人生を決めたことは今でも信じられない。

フィールドノートによると、2月17日にその手紙のことで打ち合わせをしていた。彼が書いた原文を持って帰ってとりあえず日本語に訳してみた。2月20日に未成品を彼に見せた。2月21日の打ち合わせは彼女とのデートでキャンセルされた。2月22日に完成品をみせた。2月23日に「プリントアウトしてイタリアレストランでピザをご馳走してあげ、女性に喜んでもらえると思うことをいくつか教えてあげてから別れた」と書いていた。2月26日の日曜日に解放は彼女からのメールをみせてくれた。本当に好きですよというような中国語ばかりだった。解放によると、私の提案を参考にして彼女に450円のバラを贈ったらすごく喜んでくれたという。

2月28日火曜日の朝7時ごろ、彼から報告が入ってきた。彼女はOKしてくれた。次の日はお母さんに会いに行くという。木曜日まで連絡がなかったから、心配して電話を試みた。意外にもお母さんは手紙を見て感動して涙も流して、そして解放を連れて色々な神社をお参りにまわったと解放はうれしそうに報告してくれた。3月11日に解放は配偶者ビザ申請書類を持ってきた。解放の準備するものと妻になる美子の準備するものは何なのかを話しあった後で彼らの恋愛から結婚までの経緯を書いてあげた。夜10時に解放はまた牧師との約束(結婚の話をするという)があったので、10時までには資料のことを終わらせた。崔さんは牧師との話しの通訳を担当したそうだ。

3月13日に婚姻届けを出した。二人は正式に夫婦になった。だが、美子の資料がなかなかそろわなくて、入管は書類を受け取ってくれないので、解放は帰国できなくて非常に悩んでいた。日本留学に応募した学生はむこうで面接²⁹⁾を待っているという。3月14日に新婚の夫婦に会った。美子は健康で素朴な子というイメージだった。一緒にイタリアレストランで話をした。解放は子供のことを強調する以外に彼女に10条の約束事を話した。その後、彼女が自分に言いたい事を聞いたが、彼女は「自分勝手なところに注意してほしい」以外はなにも言わなかった。

二十日後、出した申請資料を入管は受け取った。結果がでるまで待つしかないので、解放もすこし落ち着いた。これで無事に終わったと思ったら、本当のトラブルが始まった。3月31日に彼に呼び出されてあるコンビニで話をした。彼はいきなり結婚したことを後悔している、離婚したいと言い出した。よく事情を聞いたら、美子に仕事をやめてもらったことでたぶんお母さんが怒って、「援助金を出してくれ」と彼に電話をしたそうだ。美子の中絶³⁰⁾のお金とお母さんの援助金とのことで自分が騙されたのではないかとまで疑ってきたと彼は正直に言ってくれた。また結婚前に彼女の家庭に行かなかった事も後悔しているよ

²⁹⁾ 面接のこと: 校長先生と解放との契約のこと。解放が現地で募集した学生を現在の日本語学校が受け入れるということを校長先生は約束してくれたそうだ。

³⁰⁾ 美子の中絶: 解放と一緒にいた時に避妊をしなかったため、妊娠した。解放は今はまだ成功していないため、子供はいらないと言ったので、美子は中絶したそうだ。手術の費用は7万ぐらいかかったという。

うだった。現在、美子は娘³¹⁾とお母さんと一緒に住んでいる。彼女は仕事がないから、毎日家でぶらぶらしているようだ。また、美子のお友達は自分の母の恋人にレイプされ、母に事情を言えずにこちらにもう一ヶ月も泊まっているそうで、生活費も美子から借りていると解放は言った。お母さんは夜中の仕事を終えて朝帰ってきたら、皆の面倒以外に 7 匹の犬の面倒を見なければならない。そのような小さい家での生活風景を見ると頭が痛くなるから、本当に行きたくないと解放は何回も言ったし、結婚前に美子が自分は大きな家に住んでいると言ったのを信じた自分が馬鹿だったと後悔していた。色々なことを分析してあげてから、会って話しをしてみたらと彼に提案した。すこし落ちついてきた解放は先に美子に連絡をして話してからお母さんと一緒に話をする決めた。そして、すぐに連絡を取ってみた。皆留守電だったから、一応メッセージを入れておいた。

お母さんとの面会の約束は日曜日の 3 時 40 分だった。隊長の金さんは、一緒に行くという私を止め、彼の旬長の崔さんに付いて行ってもらった。聖歌練習が終わると 8 時になった。解放は笑顔で帰ってきた。金さんと私に「円満に終わったよ」と簡単に事情を説明してくれた。金さんは会議で 4 階に行った。解放はスーパーでお母さんからの手紙を見せてくれた。その手紙にお母さんがこの結婚を許した理由と家庭の事情とが書かれてあった。解放はお母さんが持ってきた領収書で家の借金の事や美子とお母さんがなぜ夜勤をするのかということを理解した。お母さんは借金があるが、多くはないので、解放に返してもらおう考えは全然なかったという。ただ、美子の夫として色々なことを分かってほしいという気持ちがあり、解放も家族の一員としてこれから 3 人一緒に頑張りましょうという考えを伝えたかっただけだった。

解放は自分が縛られることを心配して離婚するつもりで行ったが、お母さんの話を聞いて安心した。私が母子家庭の援助のことと子供の養育費のことを説明すると、解放はまじめそうにこれから頑張る美子を楽しんで大人の顔を見せると言った。日本人は実はだれでもが金持ちではないことがわかった解放はすこし素直になった気がする。

帰りは交差点まで送ってくれたが、いつも教会の人に強い面ばかりを見せる自分のことや美子との付き合いで勝手にしすぎる自分のことなどを彼は話しながら反省した。私と別れると彼はジュースを持って金さんと崔さんに感謝しに行った。教会の皆がいつでも自分を守ろうとしてくれていたことも彼はわかったようだ。

9.5.1.6 過去から未来へ繋げる

解放が帰国を決め、婚姻届を出した次の日に彼にインタビューをした。いつもの喫茶店で二人は飲み物を飲みながら、話をした。いつも間違えてコーヒーを二つ注文するが、彼はいつもジュースにチェンジする。まだコーヒーに慣れていないからだという。結婚してうれしいはずなのに、彼はあまり元気がなさそうだった。聞いたら、結婚したと実感して過去についても未来についても色々なことを考えたので昨日は眠れなかったと話した。そ

³¹⁾ 美子の娘:元夫との間の子。3年前に美子は離婚して3歳の娘を連れて実家に戻った。高校卒業してまもなく結婚した美子は、仕事をせずにご両親の家に寄食する生活を続けていた夫を諦めて離婚したという。

して、その考えたこともいろいろ話してくれた。

解放は中国東北地方の延辺の山奥にある村の出身だが、朝鮮民族ではなく漢民族だ。一人息子だから、両親は小さい頃から彼を叔母さんのところに送ってそこで教育を受けさせた。叔母さんのところは小さい都市だから、よい教育を受けられるはずだと思ったからだ。しかし、解放は中学校に入り、学校の友達ともあまり遊ばずにいつも眠たくて眠たくて学校行っても家に帰っても眠たかった。食事をせずに眠り込んでいる状態が長く続いていたので、学校の先生は甥の頭が病気じゃないかと叔母さんに言った。それを聞いた解放はプライドを傷けられ、荷物を片付け、皆の止めるのを振り切っていきなり学校をやめて田舎に戻った。しかたなく両親は彼を受け入れた。学校に行きたくなかったら、お父さんと一緒に農業をやろうかとお父さんは解放に言った。解放も喜んで両親と農業をやりはじめたが、半年もしないうちに、もう耐えられなくなってきた。やりきれない畑を憎んだ時もあったという。農業に向いてないことがよく分かった解放は自分で企業をすることを考え出した。農業は辛すぎるから、いつか成功して両親をこの山奥から連れ出そうと解放は考えた。両親にお願いして、貯金したお金を全部出してもらって解放はこの3万元で叔母さんがいる都市に料理屋を開いた。小姐（ウェイトレス）を5、6人雇い、料理師を1人、会計を一人雇った。友達の一人は一緒にやりたいと言った。彼もお金を少し出したから、彼は副経理（副社長）、解放は老板（社長）でやり出した。皆揃っているし、お客さんもよく入ってくるから、解放はうれしくて毎日小さい鞆を脇の下に挟んでぶらぶらしていた。社長の感覚を楽しんでいた。しかし、見かけは何も問題がない店なのに、いつも赤字だった。半年も続けないうちに倒産の危機に迫られてきた。解放は今でもどうしてうまくやっているのにお金ももうけられなかったのか理解できないと言っている。

倒産しかけている解放は借りたお金もまだ返せなかったし、どうしたらいいのかわからなくなってきたので、副経理の友達のある提案を採用した。もとの契約書期間を勝手に書き直し、一年延ばして店を他人に渡そうと計画した。店は賑やかなところで募集も順調に進んだ。ある人は3万元を出して店を借りた。だが、実際は契約の期間はあと2か月だったから、やっていることはすぐばれてしまった。もともと3万元返せば済むと思ったが、相手は暴力団と関係があり、倍にして返せと要求された。解放は怖くて実家まで逃げた。お父さんは解放を隠し、相手と色々な交渉した。その時期は警察の車も暴力団の車も山奥にやってきた。警察の車の音がよく聞こえるので、解放は怖くて3ヶ月ぐらい外へ出られなかった。3ヶ月後、親戚が解放を福建省まで逃がした。福建省で鉄道作りの仕事を半年ぐらいやっていた。家との連絡もできない流亡生活を諦め、自首しようと思った解放は、家に電話をかけてみた。お父さんが色々なところへ行って借金してやっとこのことを静めたと聞いて、帰ることに決めた。

長い間胸を張って太陽を見たことがなかった解放は両親に申し訳なく思い、この体で頑張ってみせると決めた。だから田舎に戻らずに叔母さんのいる都市にもう一回出た。あまりいい仕事を見つけられないことに悩んでいたところ、学校の友人に会った。彼は警察学校の中専に入り、実習中でもうすぐ卒業するところだった。仕事がないと言ったら、彼は

僕について来いと言ひ、それから 2 年間ぐらいつと一緒だった。警察だから、どこへ行ってもただだし、そのおかげでホテル、カラオケ、色んなバーなどを見学できた。色々な大物にも会えた。恋愛も一回ぐらいつしたが、相手は君はまだ子供だからと言って彼を振った。それにも関わらず、その時期は後ろにチンピラのような若者が何人も付いていたので、自分がとても勇ましく感じたという。しかし、このような生活は長く続かなかつた。ある事件に友人も関わっているという疑いがあり、警察から調査があつたのだ。解放は暗くて狭い部屋に連れていかれ、そこで自白まで 48 時間監禁された。眠れずに彼は壁の時計を数えた。まるまる 48 時間経ち、解放はなにも白状しなかつたので、釈放された。だが、他の連中が皆自白したので、友人は仕事を無くして他の都市でタバコを売る仕事を始めた。解放が日本にいる間に彼はもう自分の工場を建てたそうだ。仕事を一緒にしようという誘ひも何回もあつた。

色々な困難に遭つても、解放は志を捨てるわけにはいかなかつた。いつかチャンスを手掴んで成功すると信じている。留学のことも同じだ。日本はとてもいいとよく言われたので、解放は挑戦しようと考えて両親に話した。両親と親戚は皆反対した。なぜかという、皆は、今の日本では、そんなにお金をもうけられないし、苦勞をするだけだと聞いたからだ。でも、解放の考えは違つた。普通の人にはたぶんどできないかもしれないが、自分なら、きつと運命を変えられると考えた。だから、両親に何回も跪いてお願いをした。最後に両親はやってみてもいいが、もしビザが下りたら、行つてもいいし、だめだったら、諦めろつと解放と約束した。

運命はいつも不思議なものかもしれない。その年に面接に来た校長先生は、日本語ができない解放は不合格だと判断したが、書類は先に入管に届いたので、とりあえず結果の出るのを待つしかなかつた。意外なことだが、解放一人以外にだれも合格できなかった。仕方なく学校は解放の入学を認めた。そして両親は彼の留学のために親戚に一軒から、5 千円ずつ借りてきた。親戚を全部回つてやつと 7 万元の基本費用を集めてきた。ということは学費を出したら、なにも残るお金はないのだ。

それでも、解放は日本へ来た。関西空港からリムジンバスに乗り換え、市内に向かう時の海の綺麗さは今でも彼の頭に残っている。バスから降りるとどこも漢字ばかりで一瞬中国にいる感じがしたが、現実世界に入ると、学校がおわるとどこで泊まるかという問題に直面した。皆が帰つたあとで、先生にどうして帰らないのと聞かれた。解放はお金がないから、行くところがないんだと答えた。先生は解放をあるビジネスホテルに連れていって泊めてくれた。7 千円出してくれた。次の日になると、また同じ問題が出てくる。幸いなことに、学校に行くと、学校の先輩(教会の兄弟)と知り合つた。彼は解放を引き取つてくれた。学校へ通いながら、バイトを探し始めた。だが、なかなか難しくて見つけられなかつた。その間は時間がたつぷりあつたので、偶然道端で伝道していた金幹事にあつた。彼に日曜日、教会へ来てねと言われ、教会はどんなところかなと思つて解放は来たのだ。来たら、もう本当に愛を感じたという。旬長の黄さんは仕事探しにも付いていってくれたし、食事もご馳走してくれた。初めての仕事は解放が 5 万円で買ったものだ。それでも、うれしか

ったという。仕事は留学生にとって命のようなもので、今日バイトがなかったら、明日生きられないというなにより現実的な問題だと彼は考えている。生活がすこし安定してきたから、解放も他人にバイトを売ったりした。お金で買えることはないより随分ましだと彼は解釈している。国際電話カードを売り始めてから色々な留学生と接触することもできた。バイトを見つけられないある女の子が、解放に「バイトを紹介してほしい」と助けを求めたことがあった。しかし、解放もバイトを紹介できなかった。再び会った時の彼女は売春し始めていたようだ。彼の接触していた人の中には立派な人もいるし、不法滞在になったり、ホストになったりする子もいる。世間はたぶん彼らを不良として見ているが、彼らは個人的な事情があるから、そうするしかなかったのだと解放は言った。そうは言っても、大学に入った人はやはり多いが、彼らと比べて、僕は結婚したと解放は自分の留学の成果を定義した。前日卒業式に参加して自分の名前が呼ばれた時にとっても感動した解放は「僕のような人でも卒業証書をくださるとは思わなかったから。卒業証書を校長先生からいただいた時を一生忘れない」と言った。帰国してから、会社を作り、ホームページを活用することを考えている解放は、これから、日中を自由に往来し、神様の教えを持ってビジネスでの成功を目指している。

9.5.1.7 花見の誘い

2006年4月18日午前11時ごろ、仕事が休みで家で彼のストーリーを考えていたところに、解放から電話がかかってきた。「お姉さん、解放です。今忙しいですか。」と聞かれた。

「いいえ、家にいますよ。もう起きましたか」と冗談で聞いた。

「もう起きましたよ。お姉さん、ぼくをからかわないで。あの、もう1週間後に帰国するから、今日は休みで、お姉さんと一緒に花見をしようと思ってますが、どうですか。皆花見、花見というけど、僕は日本へ来て、桜をゆっくり見たことは今まで一度も無かったから」彼の笑い声の続きにやや淋しそうな声が聞こえた。

「そうですね。私も今年やっとなつ静ちゃんと2時間ぐらい花見ができたが、今までは忙しくてそんな気分にならなかったね。そのうちにいつも桜が散ってしまう。今年ももう終わったよ、解放は見てないでしょう。」

「そうですね。もう終わりましたか。残念ですね。」と彼はすこし悔しそうに言った。

「美子と一緒に見たら、どう？帰国する前にいい思い出を作ったら？」と彼に勧めたら、「彼女は最近なにも連絡をくれないから、僕もなにも連絡をしない。」と不平を言った。「直らないね。こんな時は、いつも僕と彼女をおき変えて考えたら、幸せになるよ」といつもの冗談のように彼に言った。

「わかりました。僕は彼女に連絡をしないから、彼女はなにも連絡をくれない」と彼は笑いながら日本語で復唱してくれた。

その後、彼は明日からこの電話をもう使わないことを告げた。昨日の礼拝日に解放はビザが17日間だけ下りたことを教えてくれたが、美子とまだ冷戦中だということには全

然触れなかった。今回だけ彼を断ったが、いつかきっと彼と美子と一緒に花見ができるようになるだろうし、彼と私の付き合いもこれからが本番だろうと思うと、解放のこれからが楽しみになった。

9.5.2 解放の分析

9.5.2.1 解放の成長と変化

以下、解放の成長と変化においては、思想の変化、能力の変化、心理的变化、認識の変化という4つの面から分析した。

9.5.2.1.1 思想の変化

解放のストーリーあるいは彼の全ての決断は思想の変化を巡り、展開されたものだと言え、その変化を4つの段階に沿って、分析してみる。

A: 来日の目的

一般的に留学と言え、当然学習をするために来たと思われるが、解放の目的はそうははっきりしていたとは思えない。日本がとてもいい国だという噂に反して、現在の日本は非常に大変で苦勞をするだけだと聞いた親戚は彼の留学に反対した。

「普通の人だめだけど、僕だったら、きっとなんとかなるよ」と解放は思って留学の決心をした。中学校以来、社会で多くの失敗を体験した解放は「それでも、志を捨てるわけには行かなかった。いつかきっと成功するだろうと信じてきた」。だから、彼は学習するより、自分の運命を変えようと考えて日本へ来たと言える。彼はいつも社長になりたい、総理になりたいと教会で大言壮語する。「世界の舞台に立つ成功者になることを目指している。」かといって彼がはっきり儲けることを目的としていたとも言えない。そもそも、成功者になれば、お金も自然に入ってくるものだから、お金のことを考える必要はないのではないかという曖昧な心象が見えないところで動いているのではないかと筆者は考えている。

B: バイトへ走る

しかし、日本へ来てまもなく、彼はバイトに精を出し始めた。そして、学校にも行かなくなるとし、成功する夢を捨てたとまでは言えなくても、現実にお金を貯めることに夢中になってしまった。

「日本は思っていたのと違う。なんでも高いから、バイトをしないと、生きられない。」というのは、私費留学生が皆直面しなければならない現実で、「疲れている。起きられなくて学校に行きたくない」気持ちとの闘いは日々あることだと言える。それでも、全ての留学生が学習を放棄してバイトだけに執着するようになるわけではない。

解放には自分なりの理由があった。初めてのバイトは5万円で買ったものとインタビューで彼は言った。彼の日本語学習が始まってから、みんながお金のために来たのではないのだと彼を説得した時に解放は納得できずに反論した。「僕も伝道に行くでしょう。お金のためじゃなかったら、どうして、皆バイトと言ったら、目がきらきらするの？あの物欲しそうな目をどう説明する？」と彼は答えを求めた。つまり、必死にバイトを探している留学生の姿から、皆お金のために来たという自分なりの推理をしたのだろう。

生活がバイトに偏ると、「学校についていけない、先生の言うことが分からない」という悪循環に陥ってしまい、ついに「バイトに集中するようになった」と言えるだろう。特に

解放の場合は校長先生との約束があり、日本語学校を出たら一緒に仲介の仕事をするという。だから、時間が許すかぎりお金をたくさん貯めることで、大きな成功に近づけると思うようになり、進学は考えないようにしていたのではないか。

C：大学への憧れ

修練会の感動を受けてクリスチャンになった解放は神様の国で成功を目指すと言った。しかし、本当にバイトをやめて学習に集中する決心をしたのは一週間後のことだ。解放は初めて教会の人たちが皆進学のことを考えていることに気づいた（先生への手紙を参照）。

「僕は一所懸命にバイトをやっているのに、あの日、皆の話を聞くと、皆進学のことを考えているらしかった。僕は間違っていないが、周りを見たら、旬長は立命館大学、暁静ちゃんも同志社を目指している。『関関同立』³²⁾とよく言われるが、あまり真剣に考えなかった。9月2日の夜に朱さんの言葉を聞いて目覚めた。僕はいつも情熱、情熱があれば、いつか成功するよと信じているが、知識がなかったら、情熱だけではなにもできないと言われた。彼女を見たら、もう、日本語も英語も韓国語も全部ぺらぺらなのに、まだイギリス留学を考えているなんて、僕はそんな必要はないと思うが、彼女はそう思っていないようだ。皆大学に入る。僕一人だけ残される。」と解放は自信がなさそうに言った。

(ノート・2006/10/13・学習センター)

暁静の言葉を借りると、「解放は最初お金を考えたと思うけど、教会の人と接触しているうちに、段々知識もほしくなってきた。特に彼の旬長の黄さんは彼に影響を与えているだろう」ということから、教会の人たちの影響は大きかったということがわかる。

「お姉さん、今日から自分を変えてみる。ごめんね、いつも今日からと言っているね。本当に恥ずかしかった。僕と初めて会う人は、皆僕のことを志があり、情熱も溢れるいい青年だと思うが、しばらくしたら、本当の顔がばれてしまって、失望させるばかりだと校長先生の奥さんにも言われた。確かに僕は中身がなにもない、なにをしてもできないから、口だけうまい。実はなにもものでもない」と解放は反省したように言った。

(ノート・2005/10/12・珈琲屋)

二ヶ月の学習中に解放は同じようなことを何度も言った。彼の中には何でもできる自分と知識がない自分という二つの自分がある。「知識さえあれば、できないことはないんだ」と常に矛盾した自分を一つにして理想的な自分を創るために二ヶ月賭けてみる決心をしたのだろう。

D：有名な大学の挫折から

「今度、神様はきっと僕に大きなショックを下さる (ノート・2005/09/29)」と解放は悪

32) 『関関同立』：関西学院大学、関西大学、同志社大学、立命館大学。

い予感を持ちながら、試験準備をして受験し、そして、落ちてしまった。そのショックはかなり大きかった。

「僕は馬鹿だ。あんなにいいバイトを辞めて、受かる可能性もない大学のために一生懸命に頑張ったなんて。お姉さん、このような試験ってもう二度と受けたくないんだ。この二ヶ月間のように緊張したのは生まれて初めてだ。髪が抜けてくるし、鼻血もよく出る。怖かったよ。体の調子がこうなるのは初めてのことだ。怖くなった。試験が終わるともう精神的におかしくなっていた。もし僕だけ受からなかったらどうしよう。とか夢でも見ていた。結果を知ったら、その夜はまた眠れなかった。これからどうしよう。専門学校？大学？帰国？黒くなる³³⁾？色々、どっちを選ぶか、すごく悩んでいた。もう耐えられないぐらいだ。もう限界だと感じている。僕たち三人は関西学院大学で写真をとったよ。ツースの姿で格好よかったけど、三人全員落ちるとは思わなかった。」彼は自分の鼻を触っていた。鼻が赤いのは先ほどからもう見えていた。

(ノート・2005/11/09・中華レストラン)

久しぶりに解放に会ったときに彼は自分のやっていたことを全部否定してしまっていた。しかし、「僕は本当に不法滞在になりたくないんだ。将来有名な人になったら、恥をかくから、そんな事を言うだけだが」と言った。解放は学習を完全に断念したが、有名になる夢まであきらめてはいなかったようだ。彼は帰国する決心をして、一日も早く帰ってビジネスをしようとするようになったわけだ。結婚した解放は気持ちを切り替え、ビジネスの成功を願いながら、神様の国で良心的なお金だけを儲けると決めたという。

9.5.2.1.2 能力の変化

二年間の日本生活では、思想の変化より、解放自身の各能力の変化がより観察しやすい。ここでは、主に学習能力と生活能力を巡って彼の能力の変化を分析してみる。

A：学習能力

解放は中学校を辞めてから、日本へ来る前まで、学校に行かなかった。基礎ゼロで日本語学校に入り、授業が分からなくなってきてバイトに走ってしまったのか、それともバイトに走ってしまったから授業が分からなくなったのか、その因果関係はさておき、結果だけを見ると、二回目も D 班に配属された再履修生だという事実から、彼の学習能力はあまり評価できないと言えるだろう。

しかし、このような彼に二ヶ月だけの学習で、衝撃的な変化が見えてきた。再履修生の D 班から C 班へ、C 班から A 班への進級は一番の証拠だといえるだろう。日本語で文章を書いたことがない彼が、日記を日本語で書けるようになり、書き続けるようになったことから、彼自身の変化はさらに大きかっただろうと推測できる。

³³⁾ 黒くなる:中国語では「黑了」。不法滞在になることをさしている。

解放は試験に落ちてしまい、二ヶ月の学習を後悔していたが、しばらくしたら、その学習効果について、このように語ってくれた。

「お姉さん、試験はダメだったけど、あの二ヶ月の学習は無駄じゃなかった。今の仕事は〇〇という店だよ。面接は難しいだろうと思ったけど、行ってみたら全部分かった。すぐOKしてくれた。知ってます？金持ちがよく行く店だよ。中国人は僕一人しかいない。時給もいい。」と解放はそのレストランのマスコットを真似をした。

「あの一回の消費は50万ぐらいの店です（客は一回に50万ぐらい使うということ）」と隣に座っている崔さんは補足した。

(ノート・2006/11/24・教会)

バイト探しの大成功を報告する解放はまだ試験に落ちたショックから抜け出せなかっただろうが、一緒に食事をした時に店員さんと積極的にやりとりをする彼の姿から、日本語を聞くと頭が痛いと言っていた彼はいつの間にか消えてしまっていた。

一緒に学習を始めた頃、解放はメールをもらおうと、いつも電話で返事していた。日本語でメールができないと言ったから、暁静ちゃんは日本語の練習のためにメールを使っているよと言いながら、そのメールの中に使われている日本語文法のポイント³⁴⁾を指して見せた。彼は納得して暁静に負けないぞと言いながら、私から日本語の言いまわしを聞いて返信をした。そのような状態はしばらく続いたが、メールの送信がかなり速くなったことに気づいたのは、美子と付き合ってからのことだ。

「お姉さん、恋愛はすごいよ。僕の日本語はすごく進歩している。」と解放はうれしそうに恋愛のメリットを言った。

「そう？それはいいけど、彼女の日本語が全部わかる？」と彼に聞いたら、「全部分かるとはいえないけど、大体分かるよ。いつも辞書を持っていて、分からなかったら、すぐ調べるから、意味が通じる。だけど、彼女はいつも関西弁で、なにになにやんかと言われて、関西弁が難しいから、はじめは分からなかった。彼女は標準語ができないようだ。それはダメだよ。僕はもう彼女に日本語を勉強しなさいと言った。」と解放は美子との付き合いをいろいろ話してくれた。

(ノート・2006/02/23・イタリアレストラン)

イタリアレストランで彼女への手紙について話した時に、解放は恋愛の日本語体験を話してくれた。彼は日本語がだんだん分かるようになり、使うようになってきて、自分の中国語もまだ学習する必要があると思うようになった。自分の学校には中国語ができる先生がいる。その先生と話をして、自分の東北地方訛りの中国語が先生のきれいな発音に負けたのが理由だという。

半年も経っていないが、解放の進歩が色々なところから見えてきた。議員の宴会への参

³⁴⁾ 日本語文法のポイント: 暁静は日本語を練習するために、メールのなかによく日本語能力試験の二級、一級の文法ポイントを入れている。たとえば、「...げ」や「...ばかり」などのようなものをわざわざ使っている。

加をきっかけとして解放は触ったこともないパソコンに馴染みが出てきて、自分で名刺を作ったり、アドレスを申請したりすることができた。現在は既に自分で会社のホームページを作り、ホームページで日記を公開することを考えているようだ。

「テレビがあるけど、見ても分からない。僕はすごく時代に遅れている気がする。パソコンも全然できないし」という解放はいなくなったが、テレビの内容が分かってきた彼は新しい悩みが増えた時期もあった。

「あのテレビに出たことと同じように、美子が子どもを産んで、捨てたらどうする。彼女はそうしないよね。そうしたら、すぐ離婚する。残酷すぎるから、お金を出して離婚する」と解放はすごく悩んでいるように言った。美子はそばに座って、中国語が分からないが、解放の日本語が交ざっている話し振りから、何か分かったようだ。

(ノート・2006/03/14・イタリアレストラン)

初めて美子と会ったのは、二人が婚姻届けを出した次の日だった。解放がいきなり子供のことを言い出したのは、二人の不注意で美子が妊娠したかもしれないということを知り、今子供は要らないということ、美子に意味がちゃんと通じないことを心配して、私に通訳させた後だった。テレビの報道で産んだ子供を捨てるニュースをよく見るが、美子も日本人だから、同じことをするかもしれないと思ったのだ。

しかし、悪いことばかりではなく、テレビから彼は人生の激励ももらったようだ。結婚後のトラブルを相談した日に彼は顔も洗っていないようだった。

「この二、三日、落ち込んでいるけど、細木さん、知ってる？彼女の言葉はすごく人の心を奮い立たせる。あの言葉から奮闘する意欲が出てきた。細木さん、よく出てくる。本当は古い師なんだけど。」と解放はすこし落ち着いてから、ハンバーグを食べながら、他の話題を話し出した。

(ノート・2006/03/30・サイゼリア)

解放はこのように様々な手段を通して、日本社会と接触し始めた。それが様々なことを彼に考えさせていることは想像できるだろう。

B：生活能力

借金を全部返してからすこしお金を貯めたから、学習に集中したいと学習を始めようとした時の話しである。まだ学費と借金に悩んでいる教会の子より、解放は確かに金銭面での悩みはないはずだと思われるかもしれない。しかし、彼が生活スタイルをちっとも変えなかったのは心に両親の影があるからだということは教会の人にはあまり知られていないだろう。

「お金を持っているのに、どうしてそんなに節約しているのと教会の人たちはよく僕に言うんだけど。彼らは僕の心が理解できるはずはないと思う。彼らの両親は少なく

とも都市で生活して肉体労働をしなくても済むけど、僕の両親はまだ畑をやっている。毎日の食事も簡単だよ。白菜にすこし塩を入れて食べるの。それでも、お父さんはいつも美味しく食べていて、体も健康でなにもないんだ。最近は僕はすこし田舎の生活を忘れかけているような気がするから、怖く感じる。忘れたらだめだと心にいつも言い聞かせている。」と解放は言いながら両親のことを思いだしたようだ。

(ノート・2006/10/25・喫茶店)

白菜炒めのスタイルの食生活は、確かに質素すぎるが、本人は別に悪いと思っていないようだ。そこには、素質な生活を続けている両親の影があり、自分一人だけが贅沢をしてはいけないと思っている解放がいるということがよくわかるだろう。実際は、白菜を切って、塩を入れるだけの技術でも、日本へ来る前の解放にはできなかったことだ。

一人息子だから、両親が家の手伝いなど全然させなかったせいで、国にいた時の解放は玉子焼き以外に料理などできなかった。日本へ来ると、なんでも高すぎるので、しかたなく、やっと頑張って作れるようになった。しかし、ずっと工場のバイトをしてきた解放が入学試験に落ちた後で始めたレストランでのバイトで問題が発生した。

「お姉さん、日本語が上手になってバイトをすぐ見つけたと思ったが、キッチンに入ったら、人参とかはまだましかど、玉ネギ、長ネギと言われると、頭が痛くなってきた。同じものだと思っているのに、違うと言われても分からなくて、最近はキッチンの仕事ができなくて、ホールに放り出された。日本語が下手だから。」と解放は元気なく言った。

「それより、洋葱と葱の区別がわかります？」と私は彼に聞いた。

「同じじゃないんですか」

(ノート・2006/11/09・中華レストラン)

解放は試験に失敗してからバイトに走ってしまった。バイトが二つ見つかった。一つは和食レストランという店、もう一つは上記のレストラン。そこでは鍋料理をやっているそうだ。ホールにやられてしまった解放はそれを日本語のせいにしたが、自分の生活能力不足はあまり認識していないようだ。しかし、クリスマスの解放は変わった。

クリスマスの演出が終わる頃、解放は帰ってきた。先ほど、北京の男の子に呼ばれて電機屋を案内してあげたそうだ。職場のことを聞くと解放はうれしそうにこのように言った。「お姉さん、最近はね、僕はもう和食に慣れて、他のものを食べたくなくなるんだ。前言ったバイトを知ってるね。夜中になるとお客さんがいないから、店長と僕、二人になって、店長の指導に従って、鍋を作って二人で話しをしながら、食べるの。今の僕はもうみんな作れるの。」と彼は自慢げに言った。

(ノート・2006/12/26・教会)

その夜の聖歌隊と聖劇隊の打ち合わせは李小玲の家で行なわれていた。30人ぐらいの料

理作りに解放が腕を見せてくれたと聞いた。職場で訓練を受けた解放はいろいろな料理ができるようになり、料理屋の仕事も楽しくなってきたようだ。どんな料理屋でも仕事ができるという自信がある彼の話から、彼の生活能力もたしかに伸びたと見えよう。

9.5.2.1.3 心理的变化

9.5.2.1.2 に述べたように、日本へ来る前に体を使う仕事をした体験があまりない解放は日本へ来て、工場でのバイトを一年半続けてきた。彼の思想の変化、学習能力及び生活能力の伸びに伴い、心理的な変化も現れてきた。

A：農民の両親

2005年9月19日から自分の考えを日本語で書き始めた解放の日記から、労働に対する見方が変わったことが分かる。

「今日は19日です。牧師の話から色々考えました。不労働者不得食。労働は光栄なことだ。恥ずかしいことではないと思う」

「今日は21日です。夜、月を見て、両親を思い出しました。最近は収穫の時期だから、両親はまだ畑をやっているでしょ。僕がいないと手伝う人もいないと思うと、帰りたくなります。しかし、できません。泣きたいです。(略)」

(解放の日記)

注：不労働者不得食（労働しない人に食料を下さらない）

19日は旧暦の8月15日で中国の中秋節だった。筆者は行かなかったが、教会の礼拝で「恥じない労働者になれ」が牧師の説教の主題だったと週報から分かる。中秋節は中国人にとっては非常に大事で、遠く離れている人たちの思う日だから、解放も当然両親のことを思いだしただろう。日記を読んだのは22日の学習の時だった。彼は両親への思いをたくさん語ってくれた。(ストーリーの両親への思いを参照)

「僕の両親は農民です。他の人の両親はそんなに大変な肉体労働をする必要がないが、僕の両親はもう50歳になったのに、まだ苦勞をしています。本当に『面朝黄土、背朝天』の生活ですよ。お姉さんは想像できないだろう。これは日本語で言えないけど、そういうイメージです。(略) 本当に僕を溺愛して育てて来たのに、僕はそれが分からなかったです。両親は農民だから、言うのが恥ずかしかったですが、今は僕の考えが変わりました。両親は本当に熱心で正直な人です。とてもいい農民で僕の誇りだと思います。(略) 僕は将来、必ず両親を大別山（山奥のこと）から連れ出すと両親に言ったが、お父さんとお母さんはその土地が好きなんです。たとえ僕が成功しても、両親を連れ出すことはきっと無理なんだとよく分かっています。彼らはもうあの土地に溶け込んでいるから」

(ノート・2005/09/22・珈琲屋)

解放が労働が貴いと思うようになるにつれて、両親を尊敬する気持ちが強くなり、自分

が農民の子供であることに誇りを持ち始めた。

「大都市の生活に慣れて、すこし昔のことを忘れかけていることに気づいて、以前の生活を忘れたらと思うと、怖かった。成功しても農民の子供であることを一生忘れないことを自分に何回も言い聞かせた。(略)お父さんは可愛い人だね。僕が学校をやめて帰った時も、商売が失敗した時も、お父さんは何も言わずに荷物を運んでくれたり、一軒一軒お金を借りて、相手に返したりしていた。あのぼろぼろになった自転車に乗ってあっちこっち片をつけてくれた。」と解放はお父さんのことを思いながら話してくれた。

(ノート・2005/10/23・喫茶店)

解放はお金の余裕があるのに、どうしてそんなに節約するのかということを教会の人たちは理解できなかったが、心に苦勞をしている両親、わがままをさせてくれた両親の姿があるからこそ、解放は自分だけの快樂を許せないという心理が分かっているのだろう。

暁静が帰った後でも、解放はしばらく笑っていた。笑い³⁵⁾が止まると、自分もお父さんのことを書くことにした。農民だけど、自分にとって偉い人だからと解放は言った。でも、後で「正直に言うと、僕はショックを受けました。彼女のお父さんは金持ちで、僕のお父さんは農民です。彼女は帰ったら会社を管理するが、僕は帰ってもゼロから奮闘しないとだめだから。」と解放は言った。学習に戻ったが、彼はよく読み間違えたりして、なかなか集中できなかった。仕方なく、学習を途中で終わらせた。

(ノート・2005/09/27・珈琲屋)

27日のこの日は土曜日で、願書の理由書のことを暁静ちゃんと話した。解放は彼女と仲良い友達だが、自信満々の解放は彼女の父親と自分の父親を比べると、すこし気が弱くなったようだ。その気持ちはきっと複雑だろうが、「お父さんは農民だから、笑われるかもしれないし、学費を出せない疑いをもたれるかと思って願書にお父さんのことを書くのを諦めた」と言っていた解放は素直に両親への尊敬を願書に書いて出した。美子のお母さんに初めて会った時も自分の両親は農民でお金もないと正直に告げた。働いている美子のお母さんへの尊敬も電話で話してくれた。

B: 美子への妄想

解放は美子と付き合い始めて、すぐ結婚した。初めての日本人の友達としても、日本人の女の子としても新鮮な印象を持っただろうということは容易に想像できる。しかし、あまり日本人と親密に接触したことがない解放は彼女に多少妄想を抱いていなかっただろうか。

³⁵⁾ 解放の笑い:27日に解放と日本語を勉強した時に暁静が書き終わった理由書を見てほしいと言って持ってきた。一ヶ月前から土曜日の一時から三時までの間に教会には「男女交際」の特別な講座が設けられ、牧師が講師を担当している。暁静ちゃんは興味があつて講座を聞いてからこちらへ来たので、解放は彼女が「男女交際」に興味があることを笑った。

今日はラブレターの打ち合わせだった。「彼女はお金を持っているようだ。将来もし会社を起こそうとしたら、3千万円か5千万円ぐらい銀行から借りられると言った。またお友達にも会社を経営している人がいて、一緒に仕事をしてもいいという話もあったから、日本人と連携して日中貿易会社を作ったらどうだろう」と解放はうれしそうに私に聞いた。彼女のことは分からないが、夜勤のバイトをしている人だったら、そんなにお金を持っているはずはないだろうと思って、「車を持っているだけで金持ちだと思ったら、大間違いですよ」と彼に注意をした。

(ノート・2006/02/24・イタリアレストラン)

聖歌練習がおわると、解放にスーパーに呼び出された。ビザ申請の書類のことで色々な話をした。結婚のことを聞いたら、「僕は昨日両親にも電話で報告しました。皆びっくりしましたよ。解放が東洋の娘さんと結婚するなんて信じられないようだ。一番の仲の良い友人も『本当？証明書を送ってくれ』と言った。彼は警察の出身だから、確認しないと信じられないから。ほら、皆僕が嘘をついていると思っているでしょう。それが本当だと分かったら、僕は偉そうに見えるでしょう。美子は僕と結婚したら、きっと幸せになるよ。僕は市長を招いて盛大な結婚式を挙げてあげる。」と彼は幸せそうに言った。外国人と結婚する人は多いのに、市長は来るの？と聞いたら、田舎には外国人と結婚する人がいないから、市長に来てもらう方法が自分にはあるとはっきり答えた。

(ノート・2006/03/12・スーパー)

解放は結婚を後悔して離婚したいと言い出した。「あんな小さい家に美子と娘、香りちゃんが住んでいて、お母さんはまた7匹の犬を飼っている。正直に言うと、あの家を見ると頭が痛くなる。僕でも行きたくない。美子は結婚前に自分は大きい家に住んでいると言ったけど、それを信じた僕が馬鹿だった。もし結婚する前にこの家のことを知っていたら、多分結婚しなかったと思う」と解放は仕方なさそうに言った。

(ノート・2006/03/31・サイゼリア)

解放の話を読むと、付き合いが浅かったことが結婚後のトラブルの原因だとよく分かる。解放の美子への妄想は日本人のことをあまり知らないせいだと解釈できる一方、若い人の虚栄心も後悔をもたらす原因の一つだと読み取れるだろう。

さて、美子への愛は誠実なものなのか、それともビザのためなのかということをお問わなくてはならないだろう。記録を開いたら、このようなことが出てきた。

2006年2月16日に解放は素朴で健康な日本人女の子を好きになったという電話があった。

2006年3月12日に配偶者ビザ申請書類の美子を書かないといけないところに、解放は美子を書くという記しを全部付けていた。自分が男だから、できるだけ自分でやると

解放は言った。

2006年同じ日に美子に指輪を買った解放は「はじめは1万8千円のものを選んだが、安すぎるから、3万8千円のものにした。もうすこしお金を貯めたら、豪華なものを買ってあげる」と言った。

2006年3月14日に、初めて美子に会うことができた。解放は「彼女は どうして指輪をしてないの?」と心配そうに私に彼女に聞いてほしいと頼んだ。「サイズが合わないから、直してからする」と彼女は答えた。

2006年同じ日に、婚姻届けを出した解放は彼女に10条を伝えた。3つぐらいダブったのは僕がいない時に自分を大切にしなさいという内容だった。

2006年3月30日に、解放は美子に夜勤をやめてもらった。つらすぎるから、そうさせたくないのが理由だという。お母さんに怒られて、援助金を出せと言われた。

2006年4月2日に、お母さんと話しあった。お母さんの手紙と領収書で解放は美子の家の事情を信じるようになった。そして、美子も色々な犠牲を払って自分と結婚したということを知った。「これから、美子をもっと愛さなければならない。」と思うようになり、「前は、お父さんに来日してもらうために、彼女を利用したかった。本当に恥ずかしかった」と自分のことを深く反省した。

要するに、解放は美子への妄想が多少あったが、彼女への愛情も多少はあると判断できる。しかし、ビザを得たいという考えが強いのではないかという教会の人たちの疑いを解消できたとは言えないだろう。

ここでは、私以外に知っている人がいないだろうと思うことを一つ提供しないといけない。05年10月18日のノートに書いてあったことだ。解放はA班に入り、進学のことでも校長先生がいろいろな書類を用意してくれた。関西学院大学が無理だったら、京都産業大学は推薦でもいけると奥さんは言った。あちらだったら、校長先生のおうちにも近いから、いつでも会える。あの夜、養子になったらビザが下りるから、自由に生活できると奥さんは解放に持ちかけた。しかし、解放は「日本語が上手になったら、考える」と丁寧に断ったという。

一見盲目的な結婚に見えるが、上述のような様々な事実から、解放は美子と愛情のもとに結婚したという事は否定できないだろう。愛という土台があるからこそ、現実に目覚めた解放は、美子への妄想から、やっと彼女に素直に対応していこうと考えるようになったのであろう。

C：自己変容

「教会の人に自分の強さだけを見せたかった」解放は虚栄を捨てて率直で誠意がある人へ変身するにつれて、自己中心的な人間から自己を反省できる人へ変わりつつある。行動にすぐ移すことはまだ難しいだろうが、意識が転換したことは間違いないだろう。

解放と関った一年間を振り返ると、解放が先生の計画書の書き直しに不満を抱いたこと、

大学の先生への手紙の崔さんの翻訳を私にチェックさせたこと、美子の日本語を批判したこと、美子との話し合いで自分からいきなり 10 条を出してから彼女の考えを聞いたこと、等々が思い出される。美子の言葉を借りて言うと、「自分勝手な人だ」と言うしかなかった。「君は僕の経理、お姉さんは僕の通訳だ」というふうに冗談をよく言う解放は、いつも自分は賢いから、皆はただの道具だという考えを無意識に持っていただろう。

しかし、偽造された留学書類で日本へ来た解放が嘘が一番嫌いになり、誠実でいたいと思うようになったことは評価されるだろう。また、知識がない自分のことに気づき、避けなかった勉強に思い切り努力したことも変化の一つとして捉えられるだろう。

9.5.2.1.4 認識の変化

解放の思想の変化の過程は彼の留学生に対する認識にも影響を与えていると思われる。皆が偽造の書類で来日してお金のためにバイトをしていると思い込んだ解放はバイトをしてお金を貯める目的を設定した。教会の人たちが皆進学に意欲を示していることを不思議に思ったが、やっと大学進学を望む人がやはり多いのだということが分かった。

集中的に勉強して有名大学を目指した解放は大学には受からなかったが、留学生と言っても様々な人がいることがよく分かった。そして、その中の珍しい例として自分は結婚したと留学の成果をあげている。

それと同時に、高潮が一再ならず起こる留学生生活を体験した解放は日本への認識も深めてきた。宴会の参加から日本では彼のような若者が政治家になれる可能性はないと分かった。美子との結婚で日本人の生活に対して抱いていた現実とかけ離れたイメージが壊れた。学校の先生はどうしてホストをやっている子にもやさしいのかと疑問を持ったが、だんだん学校の先生は学生との付き合いを学校だけのものだと考えているということが分かってきた。

教会での生活によって、おそらく信仰の目が開いたことは彼の人生観と価値観に大きな影響を与えたと言えるだろう。ここでは、すこし例を挙げて説明しよう。

ノート A:

「これは手紙の一番のポイントですよ。笑いが不可欠だ。本当ですよ。職場の人や学校の人に僕は自分のために生きているんじゃなくて、ほかの助けを求める人のために生きているんだと言ったら、狂人だと思われて笑われた。彼らは僕のころ、僕の抱負が分からない、彼らはクリスチャンではないから、人類を心に思うなんてことは考えられない。」と彼はやや興奮したように言った。彼がこれを通して言いたいことの一つは、僕はほかの普通の人と違うということで、もう一つは、もし先生が笑ったら、先生もこの人たちと同じだということになるということだ。(先生への手紙を参照)

(ノート・2005/10/27・学習センター)

ノート B:

翻訳した原稿を読む途中で彼は笑い出した。「お姉さん、僕は本当にこのようなこと(日中の架け橋)をやりたいけど、実際はうちの校長先生はそう思っていないようです。彼は

これだけ知っている」と彼は指を丸くしてみせた。あれはお金の意味だ。「これですよ。これ、はずかしいでしょう。彼はまず中国人からお金を稼ぐ、次に日本人からお金を稼ぐとよく言っている」と解放は文章を見ながらすこし嘲笑したように言った。文章には校長先生を褒める言葉がたくさんあったけど。

(ノート・2006/01/30・学習センター)

ノート C:

「僕のことを知っている人は少ないが、彼らの言うことを聞くと、この信仰の深さが全然違うと感じた。ほら、宋玉さんは「君はすごいね、日本人の女の子が出来た。他の人は日本人の恋人を作りたくてもできないのに」と言った。黄さんは「はやく結婚手続きをしないと、日本人だから、彼女にふられるかもしれない。よく注意してください。君の努力が水の泡にならないように早いうちに決めてよ」と言った。涼紅さんは「よかった、よかった、これで銀行からお金を借りることが出来るよね」と言った。彼女がこの前、銀行から 3 千万円ぐらいお金を借りられると言ったからだ。でも、信仰が深い人は全然違うよ。先ほども金さんと崔さんは色々と言ってくれた。ほとんど結婚したら、必ず責任を感じなさいとか、大人になって彼女のことを考えなさいとか、結婚したら、一緒に住むべきだということばかりでした。」と解放は笑いながら「やはり、純粋なクリスチャンは違うんですね。」と言った。

(ノート・2006/03/12・スーパー)

ノート A は関西学院大学を受ける時に面接官への手紙を書いた時の話で、ノート B は演説原稿について話し合った時の話である。原稿の最後は「まず愛を知れば、世界は明るくなります」と賛美歌の歌詞で彼はまとめた。ノート C は美子との結婚に関して皆が解放へ話したことについての話である。その他、珈琲屋のお姉さんへの伝道、大学の趣旨を嬉しそうに読んでくれたこと等から解放の変化が伺える。その理由は特に日記の中で牧師の話から生きがいを考え始める解放、いつも空想ばかりだという彼の悩み、興奮したように基金を作って世界の貧しい人を助けるという彼の気持ちなどから、天国への憧れを持ち始めた解放の成長は信仰の目が開いたからだと言えるだろう。

9.5.2.2 解放の特徴

ここまでの分析から見ると、解放には大きな特徴が 3 つある。一つは人を扱うのが上手だということ。二つ目に情熱が溢れているということ。もう一つは理想が高いが挫折に弱いということである。

解放のストーリーを読むと、彼は生活の知恵がある人だと思えるだろう。日本語は出来ないが、いつも手紙で自分の考えを伝えようとする。「先生への手紙」(参考資料を参照されたい) は少なくとも 3 人が彼を手伝っていた。この人は秘書、この人は通訳、この人は会計と彼は冗談でよく言うが、違う人を違うところに使う解放は賢い。解放がいつも自分の主張の正しさを強調していることから、彼自身はその賢さを意識していると考えられる。

しかし、少数の人が偽造書類で来日したことから、全員偽造だと思い、皆お金のために日本へ来たのだと考えてしまったように、社会の複雑さをあまり認識していない彼は、物事を簡単に考えてしまう傾向があると言えるだろう。そして、このような偏った認識に左右され、行動する危険性があるのではないかと考えなければならない。

さて、皆はなぜただで彼に使われても断らないのか。きっと様々な理由があるだろうと考えられるが、その中で一つ無視できないのが、彼は普通の若者より情熱を持っているということだ。彼の情熱に惹かれて、友達になりたくなると暁静ちゃんをよく言う。たしかに、校長先生の奥さんとの付き合い、日本語学習中に出来た友達のこと、職場や修練会など彼が行ったあらゆるところで友達が作れたことは彼の熱意を証明している。「心を込めれば、全部正しい日本語だよ」という美子の話から、おそらく彼女も彼の情熱に負けてプロポーズを受けたのだろうとよく思う。人をよく助け、信用されているから、何かあったら解放に頼めば、間違いないとよく言われている。そのおかげで彼が助けを求めた時に皆がそばにいてくれたのだろう。

その情熱が彼の原動力になっているのかもしれない。「総理になりたい、社長になりたい」と皆の前で宣言しても、彼は全然恥ずかしく思わなかっただろう。中学校しか行っていない解放は社会に出ると、失敗の連続だったが、志を捨てなかった。受験の失敗を経験しても、夢を諦めずにいつか成功するという自信を失わなかった。しかし、自分の計画にはいつも計画性が欠けていることに本人はあまり気づいていないようだ。だから、失敗しても、その原因をはっきり分かっていないと言える。教会の人に強い自分を見せたい解放は気持ち弱くなる時もしばしばあった。毎日続く学習に耐えられなくて自殺まで考えたこともあったし、受験に失敗すると、学習をすぐ諦めてしまった。また結婚後まもなく離婚すると言い出した。このようなことから、苦勞に耐えられない、挫折に弱いという解放の一面が見える。

それでも、いつも両親のことを思い、彼らを山奥から連れ出そうと考えている解放は幼稚なところがあるが、なかなか可愛くて善良な青年だと思われるだろう。

9.5.2.3 なぜ解放は教会にいるのか？

修練会で恵みを受けた解放は旬長の「黄さんが非常に親切なので、教会に来ないと恥ずかしいから、教会へ来た」と皆の前でお証をしたが、実は青年3隊の6月の誕生日会では解放はそのきっかけをこのように語った。「日本へ来てから、仕事がなかなか見つからなくて、困っていた時に僕を引き取ってくれた先輩はクリスチャンだった。彼から日曜日教会へ来たら、ただで食べられると聞いた。まあ、教会へ行ったことはなかったから、行ってみようという好奇心もあったが、主にただで昼ごはんを食べられる事に惹かれた。家にいても、寝るだけだったら、教会のほうがずっといいのではないかって教会へ来た。来ると昼ごはんだけではなく、一日2食も提供してくれるし、パンも食べ放題だった。お金がないから、これで一日の食事は祈祷だけで解決できたとうれしく思った。祈祷は分からないけど、皆のする通りにすれば、別に自分にはなににも損がないだろうと思った。」と解放

はマイクを握って笑顔で話した。いつもと同じように盛大な拍手を皆からもらった（ノート・2005/06/05・教会）。

解放と同じように来てみようと考えてくる留学生は多いが、段々仕事が出来たら、来なくなる人も多い。しかし、解放は眠たくなる場合もあるが、ほぼ毎週来ていた。聖劇団の一員として活躍していたし、好きな賛美歌をたくさん覚えた。解放へのインタビューは結婚した後で行われた。彼は楽しそうに教会に初めて来た時のことを語ってくれたが、「教会に行ったのは1回目は食事のためだったが、二回目に行ったら、本当に愛を感じた。」と話した。その愛については具体的な話をしてくれなかったが、彼の旬長の存在が大きいだろうと考えられる。解放の初めての仕事は教会で買ったものだが、仕事探しに付き添っていたのは旬長の黄さんだった。黄さんの話によると、「解放以前の女性旬員は全員失敗したから、解放にすごく力を入れた。まあ、解放のことで本当に時間と精力がかかった。バイト探しも、面接も、お金がないから、貸してあげなくちゃいけないし、食費がなくなると、ご馳走してあげるとか、やれることを全部やった。」と述べた。解放も旬長の愛を感じて今でも彼のことを尊敬しているようだ。旬長の言う事を耳をそば立てて聞いているのをよくみた。

青年3隊に2年間いた解放は誕生日のプレゼントを大事に保存していると日記に書いた。異国生活は淋しい時もあるだろうが、誕生日祝い会をやってくれる皆の中にいると、心が暖かくなるだろう。受験のためにスーツを貸してくれた兄弟や面接の練習に付き合ってくれた兄弟姉妹やいつも黙って通訳を引き受けてくれる崔さんのように、彼が助けを求めさえすれば、いつも皆がそばにいてくれる。皆の温かい応援の中で解放は段々変わっていくだろうと解放の周囲にいる人々は考えているだろう。解放もたしかに9.5.2.1 解放の変化の中で述べたように様々な変化を見せてくれた。落ち込んでいた時の解放は「牧師の話を聞くのは、ただ心の慰めがほしかったからだ」。しかし、段々牧師の話を自分と結びつけ、真剣に自分のことを考えるようになったということが日記からよくわかる。先生への手紙を読むと、バイトを辞める決意をした時も教会にいる人たちの影響が大きかったことがよくわかる。

いつも偉いことを言う解放は皆によく笑われるが、自分を恥ずかしく思わないようだ。教会のどこがいいかとインタビューで聞いた。彼は一番目に「何を言っても、ほらを吹いても、だれも笑わない」と話してくれた。たしかに笑いが絶えない教会で、誰かが人を嘲笑するのを見たことは一度もない。だから、解放はきっと安らぎを感じただろうと思える。

現在の解放（2006年4月の時点）は教会の兄弟と3人一緒に住んでいる。教会の紹介だったそうだ。大きな部屋は教会に近く、家賃を分けると、一人2万ぐらいいだけだから、非常に安い。解放は現在、普通の信徒と同じように礼拝をする以外に、国際電話カードも売っている。彼の話によると、仕事売りをやった時もあった。留学生が何百人もいる教会は彼の収入の一部を支えているだろうと想像できるが、本人ははっきり言わなかった。

しかし、解放はクリスチャンとして出すべきである十分の一を出していなかった。信仰が浅い彼はお金を出したくないのだと普通なら考えるだろうが、解放の考えはかなり違う

ようだ。「僕は結婚することを牧師にまだ言っていない。牧師はよく教会の青年と話し合っ
て皆を励ましてあげるけど、僕とは一回も話し合ったことがない。一度でも僕を励まして
くれたことがあれば、なにも言わずに出すけど」と解放は不平を言っていたが、心では牧
師との接近を望んでいたのだらうと思える。200人ぐらいの青年がいる教会では、全ての人
と話しをすることは不可能だが、解放のように牧師の愛をほしがめる青年がいることから、
牧師の存在が大きいということが分かる。牧師はどんな存在なのかとインタビューで解放
以外の人々によく聞いたが、例外なく父親のような存在だという答えが返ってきた。そこ
からも牧師は皆に大きな影響を与えていると思える。

以上、なにを言っても嘲笑されないと楽な気持ちを感じる解放は、バイトの付き添いの
旬長や、助けをもらいたい時にいつもそばにいてくれる教会の皆から確かに愛を感じてい
たと言える。また、バイト探しだけではなく、電話カードを売ることやバイトを売ること
などのような行動の自由を許された教会は、非常に便利だと彼が考えたのも無理はないだ
らう。要するに 自由、便利、楽、愛を感じる解放にとって、どれが強いは判断しにくい
が、本人は教会をきつと多様な機能を持つ場所として捉えているのだらう。

9.5.2.4 帰国の決断から背景を探る

二ヶ月の学習に感謝するために、解放は私に中華レストランでご馳走してくれた。彼は
帰国を決め、その理由も色々話してくれた。受験の失敗からショックを受けはした
らうが、他の大学とか専門学校とかまだ色々な選択肢があるはずなのに、帰国を決意したの
はなぜだらうか。

「それはそうだけど、帰ったほうが行動範囲が広いでしょう。たとえ失敗しても後悔しな
いんです。僕はもともとビジネスに関心があって、大きな会社を作ろうという夢をもっ
て日本へ来たから。日本と比べたら、国内のチャンスは随分多いし、ここで、毎日料理屋
でのバイトは大変だし、長ネギ、白ねぎも全然分からなくて、日本語が悪いからホ
ールをやらせられてしまった。ようするに、この1年半僕はもう疲れ切った気がす
るから、一日も早く帰りたいです。(略)とにかく疲れたから、帰って創業をしたい
んです。早く帰らないとチャンスはどんどん無くなるし、ここでたとえ大学に入
ってもまだ4、5年かかるでしょう。大学を卒業しても、どんなメリッ
トがあるの？帰っても街中、皆大学卒だから、なんにも価値がないんです。僕
の友達はみなそれぞれ自分のことをちゃんとやっています。もう形ができてい
るから、僕は彼らに負けたくないし」と解放は食べながら、これからの考
えを語った。

(ノート・2005/11/09・中華レストラン)

彼の話から、疲れたので早く帰って創業をしたいという気持ちが強いことがわかる。そ
の理由としては中国で活動できる空間が広いことと友達がすでに企業などを持っているの

で、早く帰らないとチャンスが無くなる恐れがあるということだ。つまり、彼の中では日本に居ることは成功から遠ざかると感じられているのではないかと説明できるだろう。

彼の話しを理解するためには、急速に発展中している中国の背景を無視できないと考える。彼の友達の話からも、中国の成功の神話が人に影響を与え、そして、証明されていると言える。当然、解放は自分の周りの変化を無視できないだろう。

「中国にいた時に、国の体制のせいで自分の才能が発揮できないと思ったが、この世界でも有数の先進国へ来ても、何も出来ないとは思わなかった。」と解放は日本留学への失望を隠さずに言った。確かに運命を変えようと期待した解放は、バイト生活の中で疲れ、大学入試に失敗した失意を味わっていた。さらに、議員宴会に出席して、日本の社会が貧乏な若い解放の成功を支えてくれる可能性がないことがよく分かり、日本で成功を望むことを諦めたのではないかと思える。

しかし、最後の決意を下すまで、彼も様々なことを考えていた。解放の話によると、帰国に反対する人は多かったという。崔さんと黄さんが引き留める時に、半年後にビジネスに失敗した落伍者になるかもと言われ、そうなることを恐れ、非常に悩んでいたという。最終的に彼は自分のこの整理できない気持ちを校長との面会に賭けてみた。

「金曜は孫楽さん（解放の友人）に学校に行ってもらって、校長先生と話しをしてもらいます。一緒に会社をするメンバーとしてね。もし、校長先生が認めてくれたら、僕は帰るが、だめだったら、皆の意見を聞きます」と解放は言った。

面会がうまくいったことは彼を心中の闘いから解放した。早速社長になり、楽な生活をしたという解放の気持ちは切実だった。そして、美子との結婚で日中往来が自由になった解放は、帰国したら、きっと成功できるという自信をさらに強めただろう。

解放は縛られることが一番嫌いだ。同じ世代の青年と同じように自由に憧れている。社長になることも、日本へ留学することも最終の目的はずっとはっきりしていると言える。関西学院大学しか受けなかった彼の目標設定は現実離れしているが、何でも有名で一番ではないとだめだという一人っ子世代の心理も窺える。

彼らは若くて自分のことさえ分からない時もしばしばあるが、伝説の日本を信じてきた彼らが、現実の日本とぶつかって、ショックを受けてしまうのは当然だと言える。特に解放の場合は、中学校しか出ていなかった。知識に憧れてはいるが、大学に行くには自分は力不足だということに気づき、途中で諦めたとしてもおかしくはないだろう。日本での経験から、社会現象を理解しようとするのは一つの進歩だと思うが、知識不足プラス若いということではなかなか完全に理解できないことが彼を息苦しくさせているのではないかと思える。

日本の体験からかなりの成長を見せてくれた解放は農民の子供だが、同世代の若者と同じように母国であまり苦勞をしたことがないため、苦勞に耐えられずに帰国して、この苦勞を終わらせたいという考えもあるだろう。

解放のお姉さんも日本へ来ることになっている。彼がこれから狙っている仲介事業の盛況を考えても、中国国内の格差、日中の間の格差が存在する限り、彼のような人が増えることが予想できる。

現実離れした目標を立てる青年の存在には様々な原因があるだろうが、経済発展の「壮大な物語」が彼に大きく影響を与えたことは認めなければならないと考えられる。しかし、彼のような青年が変わること及び彼のような青年を周囲の人間が変えられることはなにを示唆しているのか。ある環境を与え、適切な指導を受ければ、色々な困難を乗り越えて彼らも成長できる可能性があるかと教えてくれたのではないか。そうすれば、いつか彼らが望んでいる本当の成功を手に入れることも不可能ではないだろうと考えられる。

帰国を決断した解放のことを教会の若者たちはこのように言っている。

「教会ではたくさんの方が解放に敬服している」と文珍はよく言う。

「私たちは将来、たぶん解放より知識を身につけているだろうが、大きく成功することは難しいだろう。でも、解放だったら、その可能性が十分あります。」と宋玉は考えている。

「今はなにを勉強したいのかわからないかも。仕事をしてみてなにか勉強しなくなったから、その時でも遅くはない。ずっと彼のことをかわいそうだと思っているから、よく言ってあげるけど、最近は成熟してきたような気がする」と暁静ちゃんは解放が帰国を決心した時に言った。

「今、彼の信仰はあまり深くないけど、『PIAO』³⁶⁾の主人公のように、いつかだれかキリスト教の悪口を言った時に前に出てキリスト教のために戦うだろうと思うよ」と彼の部長である黄さんはインタビューを受けた時に言った。

確かに、信仰においては、解放は他の人に負けているかもしれないが、他のいいところもたくさんあると教会の皆は彼のことをこのように見ている。解放の物語を再び振り返ると、いつも彼を暖かく見つめている教会の兄弟姉妹の存在が大きかったことがよくわかる。

この場所での人々との出会い、神様との出会いで、彼の信仰の目が開いたと言えるだろうが、そもそも、この信仰を持つことによって、是非を判断する基準が彼の中で明確になったことが彼自身の変化を起こした一番根本的な原因ではないかと考えている。

解放は留学生として日本語学校での学習に失敗したと言えるが、知識が学生に伝わらなかったことが大きな原因の一つではないかと私は考えている。日本語文法に関する中国語の翻訳本を書いてほしいというのが私に対する解放の最後の願いだ。きっと自分と同じように先生の言うことが分からずに授業を受けている留学生がたくさんいると思っているだろう。

ホストとして働く学生に接する教師の態度を理解できなかった解放はインタビューで

36) 『PIAO』:アメリカの映画『Gone With the Wind』は中国語訳では『飄』、日本語訳では『風と共に去りぬ』。「主人公のレット・バトラーは商売人だけど、南北戦争が起こった時に彼はスカーレットを馬車に乗せてから、自分が戦場に出たのではないか。北の戦士としてね。彼(解放)は今の信仰はあまり深くないけど、『PIAO』の主人公のように、いつかだれかキリスト教の悪口を言った時に前に出てキリスト教のために戦うだろうと思うよ」(黄さんのインタビューより)

「日本人の先生は学生のことにかまいたくないとやっとわかった」と述べた。先生への期待を諦めたことから、現在の日本語学校では、教師が自分の役割を学生に知識を伝授することとして捉えていて、人を一人の人間として育てようとする気持ちが薄れているのではないかと考えられる。

しかし、「教育の目的は人間の記憶力を飾ることではなく、意識を強めることだ」とアメリカ大統領のワシントンは言っている。教育がどのように青年を導いていくかということは、真剣に議論しなければならないだろう。

第10章 教会の学びの理論

はじめに

前章では物語を語った留学生の成長において、居場所の重要性が明らかになった。居場所とは、個人が安心して自己を認められる空間であり、また他者との関わりの中でそのつながりが保障されている場でもある。教会を家のようなかけがえのない存在だと思う暁静、小椿、文珍にとっても、餃子店で生きがいを感じた朝陽にとっても、「居場所は必ずしも物理的空間を意味するものではなく、むしろ心情的に安心できる空間という意味合いのほうが強い（佐々木,2001）」ことが分かる。しかし、数多くの留学生が居場所を見つけられないという現状から、居場所作りは大きな問題の一つとして取り上げられ、その解決を求められている。

萩原（2001）は「子供・若者の居場所の条件」において次のように説明している。

- ① 居場所は「自分」という存在感とともにある。
- ② 居場所は自分と他者との相互承認という関わりにおいて生まれる。
- ③ 居場所は生きられた身体としての自分が、他人・事柄・物へと相互浸透的に延び広がっていくことで生まれる。
- ④ それは世界（他人・事柄・物）の中での自分のポジションの獲得であるとともに、人生の方向性を生む。

この意味で居場所を考えると、居場所をたんに鬱屈や葛藤から一時的に逃避する癒しの場に帰することはできない。この内在した鬱屈や葛藤を契機に参加の意思や自己実現、自己決定の権限にまで発展させていくときにこそ、仲間との共感と絆に支えられた自由、自主、自立、自生のプロセスが期待できるのではないだろうか。人間の精神状態に対して、宗教は「安全な港」を提供してくれるポジティブな働きを持っていると思われる。そのため、信仰の自由という原則の元で、信仰者が集まってくるのである。教会が居場所として思われるのは、そこで人々が繰り広げている営みと密接に関係していると言える。その営みを明らかにするため、本章では、フィールドワークを行ったこのキリスト教教会を取り上げ、教会は具体的にどのような条件で若者の安心できる学びの場を作り上げているのかについて、「教会システムの運営」、「教会の学びの展開」「壁を乗り越える工夫」「指導者の参与」という4つの視点から分析する。

「10.1 変動する教会システムの解説」では、青年隊の再編及び部属活動の成立背景と活動の展開から、2種のグループワークを記述し、教会の運営方法を明らかにしたい。

「10.2 学びの展開」では、以下の4つのカテゴリに沿ってその学びの展開を具体的に記述分析する。まず【礼拝日の参加】では、教会の学びの様子を縦軸で概観する。つぎに、【旬の学習交流】と【旬長及び中旬長の学習交流】では横軸で学びの様子を再現する。最後の【熱い鍋】では、一人の青年隊隊長の物語から青年隊の求心力の形成を理解しようと試みる。

「10.3 壁を乗り越える工夫」では、教える韓国人の牧師と学ぶ側にいる中国人留学生の間にある年齢の差、文化の違い、言葉の壁など様々な壁を乗り越える教会の工夫を4つの視点から検討する。「1. 通路づくり」では、お互いに認め合うことで学ぶ環境づくりに【暗黙の知の働き】が重要であることを述べ、「2. 道を示すこと」では、異文化に適応する力を身につけるために必要なイエス様の【言葉の力】を検討する。「3. 窓を開くこと」では【他者の物語の働き】による生活の経験の学びを示し、最後に「4. 舞台を提供すること」では、学びにおける遊びの要素を論じる。

「10.4 指導者の参与」では、神様の導きを理解するため、牧師である J 先生に焦点を当て、彼の【諦めない態度】、【希望を与える説教】、【魂を愛する心】、【留学生の尊重】という4つの視点から、教会の復興における指導者の努力と考えを探る。

10.1 変動する教会システムの解説

2007年4月までに教会のシステムは何度かの変遷があり、青年隊の数は2004年の3つから14にまで発展してきている。各青年隊の隊員は10人ほどを維持している。2003年以前、プロミス聖歌隊しかなかった青年活動の部属は2003年12月頃の漢民族の聖歌隊の結成以来、2004年4月の栄聖劇組、2004年12月の草原編集部、2005年3月の修練会準備部、2005年10月のパソコン隊と、相次いで設立された。2007年4月に神学院が正式に設立され、サッカーチームとバスケットボールチームも設けられた。ユニフォームを着たメンバー達が毎週練習を行っている。2005年から始まった補習学校の講座も英語の他に、日本語と数学が増え、教会の先輩たちが担当者となり、来る人のニーズに合わせて毎週しっかりと授業をするようになってきている。この教会で育てられた愛子は第一期の留学生であり、四年間の神学院を卒業してから2007年4月に宣教師として教会で奉仕するようになった。彼女によって『信仰入門六段階』（韓国で使われている入門書、教会の朝鮮民族の兄弟（本当の兄弟ではない）によって中国語に訳され、教会ですべて使われてきた）の中国語翻訳版が修正され、統一教材として各青年隊が一から勉強している。2006年4月に牧師の説教がデジタル化されて以来、教会のホームページはますます充実し、論壇や留学生掲示板などのページが開かれ、教会の外との繋がりも多様化してきた。

2007年4月に正式に神学院が設立されると同時に、そこで学んだ留学生に神学院の学位を授与することが認められるようになった。講師は主に韓国と日本の各地から招かれた牧師、大学の教授である。日本の祝日や学校の夏休みと春休みが神学院の受講日となっている。神学院は教会の留学生の神学やそれに関連する社会学、哲学、心理学をもっと知りたいという要望に応え、2004年から始まった。毎年4月と10月の二回開講されていたが、自由参加で学費は要らなかった。2006年から参加者から1万円の学費を取るようになったが、そのお金は奨学金として神学生を奨励するために使われている。

10.1.1 青年隊の再編

2000年以後、中国人の留学生が教会に来るようになったことに伴い、教会は青年達をよりよく導くために、絶えずシステムの調整を行ってきた。青年隊は2004年10月の青年3隊結成から7隊へ、さらに10隊へと二回の再編を経て2007年の20隊まで増えてきた。2005年12月までの40人ぐらいの多人数から成る青年隊に比べ、2006年以後の青年隊はほぼ10人ぐらいの人数を維持してきたことが特徴的だと言える。

チームワークの形で行われている教会の運営について、牧師は次のように語っている。「チーム作りが基本的な考えで、チームを作ってチーム長を作る。そして半年か一年間のスパンで彼らに自分の担当するチームの計画を立てさせ、それを実行してもらう。行き詰まったら反省し、計画を修正してまた実行する。このように訓練をさせることは、必ずその人のためになる。その人の人生においてもプラスになるからと思っている。」ここでは青年隊を自己運営することによって自己訓練をさせようという牧師の考えが伺える。チーム

の人数に関して牧師の考えは以下のようになっている。

筆者：「現在は 10 人ほどを維持しているのは、やはり、これは理想的な人数だと思っていますか？」

牧師：「いいえ、理想的なのはやはり一対一の形だけど、なかなかリーダーを立てにくいことがあって、そうはいかない。」

(インタビュー・2007/07/06)

「とにかく留学生達に仲間作りをさせたい、お互いに話し合うことによって心の氷が溶けていく。個と個の繋がりができたら、友達作りに一番早いのではないかと牧師は思っている。一対一あるいは個と個を繋ぐことができれば、お互いの関わりの中で成長していくことができる。留学生同士の関わりが深まり信頼しあえる関係ができれば、安心して信仰生活を送ることが出来るし、もっと自分を伸ばそうと積極的に動くことが出来るようになる、という考えはチーム構成の出発点となっているようだ。

以上のことから分かるようにチームの再編では、教会の拡大及びリーダーの数の増加が反映される一方、【個と個の繋がりを作る】牧師の努力も反映されている。教会に来る留学生の一人一人に牧師はいつも丁寧に声を掛ける。「教会に来て、声を掛けてくれる人がいなかったら、君だったらどう思う、また来るの？」と牧師はよく旬長たちに言う。彼らに他人の気持ちを考えながら行動を取ってほしいからだ。

2004 年 10 月に青年 3 隊が結成された時、小椿は隊長に任命された。当時も留学生が大勢来ていたが、リーダーは少なかった。全く経験のない彼女を支えたのは李幹事と数人の朝鮮民族の姉妹（本当の姉妹ではない）だった。李幹事の帰国後、その役割を引き継いだ金幹事は青年 3 隊の成長をずっと見守ってきた。2005 年 8 月の青年隊の集まりの最後に、いつも後ろに座って青年隊の様子を見ていた金幹事は「青年 3 隊を自分の子供のようにずっと見守ってきて、今日見たようにここまで成長してきたことをとても嬉しく思います。教会は青年隊の自己運営を勧めているから、僕が来なくても皆自分の力で自分の青年隊をうまく作れると信じています」と皆に話した。2006 年 1 月から教会の 3 つの青年隊は従来形の形が崩され、7 つになった。その後、青年隊の調整も頻繁に行われ、元の幹事が青年隊の隊長になり、青年隊の自己運営は軌道に乗り、幹事という職位がなくなった。

教会では、旬員達の学習、集まり、修練会の参加、食事作りといった活動は、基本的にグループワークという形で行われる。青年 3 隊が結成された時には各青年隊は 1 つの大きなグループであり、中に 4,5 人の小さいグループがあった。調整後の青年隊は人数が少なくなり、小さいグループもなくなった。各青年隊が 1 つの単位として教会の活動に参加するようになったのである。青年 3 隊の結成及びその後の分化では、教会のグループ・プロセス（集団過程）が描かれ、このグループ・プロセスの中に、青年隊の自治力がつくまで手助けしている幹事の役目も伺える。

よいグループワーカーというのは、対象のグループが未熟で若者たちがばらばらなとき

は積極的にリーダーシップを発揮し、グループが徐々に形成されて若者たちの中からリーダーが生まれてくる段階になると次第に手を引き、若者自身のリーダーシップに任せる。つまり、教会の幹事たちはこのグループ・プロセス（集団過程）を理解する者であり、グループワーカーとしての使命を果たしたところで身を引いたのだろう。この常に行なわれるシステムの調整では、グループワークは教会の基本的な管理形式であり、その目的は集団を形成することではなく、個人の参加を活発化させるところにあるのではないだろうか。

10.1.2 各部属設立の背景及び活動の展開

教会は毎年、新入生を歓迎するため、4月と11月に近くの運動場を借りて運動会を行なう。しかし、スポーツチームはなかなか作れなかった。バスケットやサッカーが好きな留学生は大勢いたが、練習時間や人数が確保できないため、チームになれなかった。だが、2007年4月に皆の希望に応え、バスケットとサッカーチームが結成された。日々の練習が欠かせないスポーツチームは、教会だけではなく、積極的に社会に進出し、大阪のある学校の日本人サッカーチームと試合したこともある。このように教会の拡大に伴い、各部属が相継いで設けられ、部属活動も盛んになっている。礼拝日、各青年隊の修練会、8月の修練会、クリスマスに皆の斬新な出し物が披露され、観衆の心に響いている。様々な試行錯誤が繰り返されて成長してきた各部属の成立背景及び活動の展開にて、留学生たちの主動的な参与が伺える。

【聖歌隊】

中国人留学生の聖歌隊が2003年10月に結成される前、2002年にすでにプロミス賛美隊は結成されていた。漢民族の聖歌隊と違い、韓国人の留学生を中心としたプロミス賛美隊は聖歌より踊りの要素のほうが強い。漢民族の留学生が大量に来たことによって、愛子と大宇は中国人の聖歌隊を作ろうという発想を牧師に訴えた。愛子は隊長として皆に歌だけではなく、呼吸の仕方や簡単な音楽知識も教えている。大宇は副隊長で、聖歌隊の集りや連絡などを行っている。ピアノを狙って教会に来た椀儀はピアニストとして忠実に自分の役目を果している。毎年度の始まりに、大宇はいつも自分のお金で隊員全員に新しいファイルを用意する。隊員の一人一人の名前が最初のページの御言葉の下に丁寧に書かれ、2ページ目には、カラー印刷した聖歌隊全員の写真があり、その下には励ましの言葉も書かれている。一年のスケジュールは3ページ目のカレンダーに記入され、練習用の楽譜も全部入れてある。聖歌隊には自由に参加できるので、メンバーの入れ替わりは激しい。それでも5人から始めた聖歌隊は、現在20人にまで増えてきた。聖歌隊は聖歌の練習以外に、一つのチームとして、ハイキングや誕生日のお祝いなど様々な活動を行う。メンバーたちはほとんど地方からの若者で、話しても方言が混ざっているし、歌もあまり得意とはいえない。言葉の訛りで笑いを生み出すこともあるが、嘲笑されることはない。

【栄聖劇隊】

栄聖劇隊は2003年8月に結成された。隊長は小霊、副隊長は黄である。結成当初はメンバーが不安定でよく聖歌隊から人を借りることもあったが、2005年8月の修練会では自作

自演の「伝道」を大成功させた。それから聖劇隊は「栄聖劇隊」という名前に変更し、相次いで隊員の自作の劇が披露されてきた。脚本は中国語だけの台詞から、日本語の大型劇まで皆によって創られている。この聖劇隊の前身について、隊長の小霊は次のように語った。「当時、中国人のグループがなかった。私自身はあまり演技の経験がなかったし、趣味でもなかった。ある日、パソコンで一つの短劇を読んだ。とても面白く感じたから、もしこれをうちの教会で演じてみたら、きっと面白いんじゃないかと思って、牧師にこの話をした。いいよと牧師は快諾してくれたから、こっちも人を集めてやってみたら、反応がよかったが、続かせるのが難しかった。脚本を探すのも難しかったし、メンバーも固定していなかったため、困難がいっぱいあった。2004年頃、暇潰しに伝道の話を書いてみた。内容はとても簡単であり面白くなかった。でも、他の隊員と話をして、一人一言ずつ言ってもらったら、脚本が段々豊かになっていった。舞台にしたら、皆に認められて嬉しかった。そこから力をもらったのかもしれないが、現在皆の発想を生かして脚本が作れるようになった」。

【草原編集部】

草原編集部の編集長であった莉莉は2003年に教会に来た。大学は国語専攻で、日本での修士課程も中国文学の専攻だった。文学創作が好きで来日後、『関西華人』などの雑誌に文章が3つ掲載された。「来日した留学生は皆日本語があまり読めないから、日本語の勉強だけでは退屈するし、精神生活がとても乏しく見える。だから、もし教会に青年向けの読み物があれば、いいなと思うようになった。李幹事に話をしたら、最初は反対された。でも、1号、2号を出してみたら、持って帰る人が多くてすぐなくなった。内容を読んだ李幹事は『こんなに良く出来ているとは思わなかった』と反対したことを謝ってくれた。」2004年12月の1号は白黒でA4の紙12ページしかなかった。内容も莉莉の作品以外はほとんど他の雑誌から選んだものだった。2号から教会で投稿の募集を始め、内容は前より豊かになったが、莉莉個人のお金で印刷が行われたので、部数が少なく、皆の要望に応えられなかった。『草原』を支援するため、教会は資金を少し出すようになった。3号からの『草原』はカラーになり、詩、エッセイ、証、散文など多彩な投稿が掲載されるようになった。投稿の人数が増えると同時に、カメラマン、編集者、記者を志望する者も出てきた。メンバーが揃った編集部で編集した『草原』はますます洗練され、人気も高まっていった。6号の『草原』は電子化され、正式に日本語学校や中国国内の教会にも送付されるようになった。

【準備部】

毎年度8月に行う修練会は教会の重要な行事の1つだ。スムーズに行われるように教会では2005年4月に準備部が設けられた。韓国人、中国の朝鮮民族と漢民族からメンバーが選ばれ、彼らによって修練会の日程や各種の準備などが行なわれる。一回目の修練会は2002年8月に東京の教会と一緒にいった。二回目から独立して運営するようになり、韓国及び日本国内の他の地方にある教会からも参加者を招いている。二回目と三回目の修練会は牧師が青年隊の隊長の意見をまとめて決めたが、四回目からは準備部が事前にアンケート調査を教会で行い、皆の聞きたい講座などの意見をまとめて検討した上で、計画を立てるように

なった。最後の決定版は牧師が皆と話し合った上で決まる。最初の修練会は賛美歌と説教しかなかった。しかし、皆の努力でゲームや聖劇や演奏など内容は前よりもはるかに豊富になり、質的にも大きな進歩が見える。「成功の秘密」「宗教と科学」「恋愛と婚姻」「自己実現」等の講座も若者の関心を集めるものばかりで、どの講座でも中国語、韓国語及び日本語の通訳も用意され、世界各地から説教のために牧師を迎える体制が整えられていった。

【翻訳隊】

教会の最初の通訳はほとんど朝鮮族の留学生だった。2002年からずっと勤めて来たのが、金星愛だ。「2002年、私がこの教会に来た頃、朝鮮民族の子はいたが、中国語がうまく話せなくて、牧師は教壇の上で話をしているのだ、教壇の下では大笑いになる時もあった。牧師は訳が分からなかったが、その子の中国語が可笑しかったからだ。私はこちらに来て、通訳を担当するようになってから、昔の育児室を通訳室に改装してもらった。」彼女が来る前には標準語でうまく話せる朝鮮族の子がまだいなかった。神学院に進学した彼女は週末しか来られないため、水金の礼拝では黄が中国語の通訳を担当してきた。現在は中国語の通訳担当は麗香を中心に、鄭、崔がいる。そのため、2005年から、金星愛は日本語の通訳になり、朝の祈祷では小椿も半年ぐらい通訳をしていた。

教会の教材として、『聖書』以外に『信仰の六段階』及び『毎日聖書』がある。『信仰の六段階』は韓国の教会で使われている非正規出版物であり、新しくきた留学生向けにキリスト教の信仰について簡単に説明しているものだ。2003年中国語版が金星愛によって翻訳され、教会の基礎テキストとして使われるようになった。『毎日聖書』は日本語の出版物であり、皆の補助テキストとして使われている。

【パソコン隊】

2005年まで、教会のパソコン隊は聖歌の字幕と証のビデオの放送以外に、あまり機能していなかった。しかし、2005年8月の修練会后、パソコン隊のメンバーが増えたことで、教会の行事や牧師の普段の説教の録画が全部デジタル化され、ホームページに掲載されるようになり、3ヵ国語の言語が選択できるようにもなった。また『草原』もいつでもどこからでもアクセスできるようになった。教会は週報・伝道・ロコミ・チラシの配布という昔ながらの宣伝手段から、インターネットという現代的手段を通じて外部に開かれ、教会の外部への自己宣伝認識がより一層強まってきた。ホームページができた後の礼拝日、牧師は「皆さんが来たことによって、また呉さん（同年の4月に教会に来た男子留学生、パソコンに詳しい）が来たことによって、我々の教会は現代化が進みました。ここでお礼の言葉を述べさせていただきます。皆さん、ありがとうございます。」と言いながら、皆にお辞儀をした。

このように、各部属が相次いで設立されたことに伴ない、教会の中身は充実し、留学生の活躍の場が多様化されてきたのである。

上述の分析及び記述から、教会で行われている二種類のグループワークについて明らか

になり、教会のシステムが絶えず発展、変化、改善され、若者の参画が活発化しているのがわかる。「青年隊の変化」は、グループの数の増加が個と個のつながりを強めたことを象徴し、「各部属の設立」では若者の主体性を描いた。教会は最初の段階では留学生をリードした。しかし、青年隊の自己運営が進むにつれ、留学生の自主性が発揮されるようになり、彼らのリードによって教会は現代化が進んでいった。4人の物語で書いたように、若者には自分の趣味を生かしたい、リーダーシップを発揮したい、特技を披露したいという内面的な要求がある。教会はこの留学生自身の成長欲求に応え、彼らの自己表現の場を提供することで、彼らに存在感を与える。部属活動や青年隊のリーダーになることは、計画力が訓練され、自主自立の精神を育てることに繋がる。

共同参加を重視している教会の管理では、留学生の活動環境を整えるのに、牧師と幹事たちの役目が大きい。各部属の設立の背景には留学生の活動を積極的に支えている教会の寛容さが映し出され、小椿の成長からは若者の教会運営への参加を支援している牧師と幹事たちの姿勢が伺える。アメリカの環境心理学者ロジャー・ハート（2000）は「社会発展への最も確かな道は、——民主的なコミュニティ作りに積極的に参画し活動する市民を育てること」と語り、子供の参加レベルを「参画のはしご」³⁷⁾として8段階にまとめた。そして周囲の環境を作ったり、改善したりするのに、子供も大人も共に参画し、協働のプロセスから学ぶことがなにより大事だと強調している。

ハートの「参画のはしご」と照らし合わせて留学生の教会運営への参画を見ると、若者の参加のプロセス及び進行段階が明らかになってくる。準備部の設立及び活動で記述したように、修練会をはじめとした教会の活動はもともと牧師の提案に沿って実行されていた。その後準備部メンバー達によって話し合いや提案がされるようになり、さらに半年後には、準備部メンバーが皆の意見に基づいて行うようになった。つまり教会活動に皆に参加してもらおうという考えが重視されてきたのである。各青年隊は自分のチームの状況を礼拝日ごとに牧師に報告する体制となり、「電話カード売りの規制」「バイト販売の禁止」「金銭の貸し借りの禁止」「パソコン学習の勧め」など気づいた問題があれば、週報を通して皆に注意を呼びかけている。2007年8月になると、各青年隊はほぼ自治体制に入っていた。しかし、重要な活動については「皆に提案してもらおうが、最後はやはり僕が決める」と牧師は言った。つまり教会全体の管理には牧師の力がまだ強く存在している。これは一つの重要な象徴として、教会というコミュニティへの留学生の参加がまだ進行途中であり、より一層深まる可能性をも意味していると言える。留学生の成長と共に歩んでいる教会の成長が今後とも期待できるだろう。

37) ニューヨーク市立大学で環境心理学を教えるロジャー・ハートはユニセフとの共同プロジェクトにおいて、子供の参画を環境問題において実効的に実現している事例を世界中に求めて、その原理及び方法論を探求する本を出版した。この本は『子供の参画』と題して1997年に出版されて以来、世界各地で話題を呼んでいる。木下勇・田中治・南博文（監修）（2000）『子供の参画』IPA日本支部（訳）崩文社

10.2 学びの展開

本節では、教会の学びはどのように行われているのかを明らかにするため、以下の4つのカテゴリに沿ってその学びの展開を具体的に記述して分析することにする。まず【礼拝日の参加】では、教会の学びの様子を縦軸で概観する。つぎに、【旬の学習交流】と【旬長及び中旬長の学習交流】では横軸で学びの様子を再現する。最後の【熱い鍋】の働きでは、一人の青年隊隊長の物語から青年隊の求心力の形成を理解しようと試みる。

10.2.1 礼拝日の参加

教会の第1部礼拝は午前11時から12時半までで、牧師は日本語で説教する。中国語と韓国語の通訳も付くが、信者のほとんどは日本人の大人だ。留学生はほとんどが午後の礼拝に参加する。12時半から昼食の時間で、ほぼ毎週カレーだが、12時半前に来た人は、だれでも無料で食べられる。第二部礼拝は1時半から始まり、3時半頃終わる。皆が席につくと、牧師は礼拝堂の後ろから黒い本ケースを持ってまっすぐ教壇に行く。冬は黒いスーツ、夏は白いシャツにいつもネクタイをしっかりと締めている。背が高くない牧師は海兵に在役したことがあるためか、いつも姿勢がよく元気な姿で現れる。牧師は韓国語で説教するが、中国語と日本語の同時通訳がいるため、説教の理解には問題はない。礼拝が始まると、後ろのドアのところに師母の姿が見える。師母はこの数年、いつもそこに立って最後まで牧師の説教を微笑んで見守っていた。

ほぼ毎週新人が来るため、教会の外に案内担当者（一周期は半年で案内希望者の当番リストが作られる）が必ず一人か二人立っている。新人は2階まで案内され、礼拝堂に入ると、別の案内人から教会の週報をもらい、自分の旬長や隊長の隣の席に案内される。座ると、イヤホンや聖書やプリントが配られ、旬長が説教しているところを教えてくれる。1部と2部の礼拝の聖書内容は同じだが、説教する時の言葉遣いは違う。午前の大人向きと比べたら、午後は子供・若者向きで牧師は、よくトーンを上げたり下げたりする。皆が眠らないようによく質問をしたり冗談も言ったりするし、教壇の上の金のベルを鳴らす時もある。それでも夜のバイト疲れや聖書にまだ興味を持って眠たくなる人もいる。気づいた旬長や隊長が彼らを起すため、肩のマッサージをするのは教会の一般的なやり方となっている。礼拝は牧師の祝福祈祷が終わると、各青年隊の学習交流時間になり、牧師は皆と挨拶をしながら、退場して4階の自分の家に戻る。そして、そこで教会の持事たちと一緒に聖書学習をしたり、教会の出来事について相談したりする。

各青年隊は自分のグループのメンバーを集め、4時半まで学習交流を行う。『信仰の六段階』のテキストを元に、主に隊長のリードによって学習が進められる。進度は隊長が決めるが、理解できるかどうかポイントでどこまで進めるかスピードの要求は一切ない。学習は共同学習の形を取っているから、皆の体験や理解を話し合いながら進めるのが普通である。一週間ぶりに会うこの時間に、皆自分の嬉しかった事や反省したこと、困ったことなどがよく話し合われる。問題があったら、解決方法を一緒に探す。新人が入った時や旬

員の誕生日のお祝いがある時には、食べ物や飲み物を購入して学習をせず交流だけする時もある。隊長はこの時間を利用して教会の色々な活動やお知らせを皆に伝え、旬員の出席の点検も行う。点検表を記入して晩御飯後に牧師に報告するのが隊長の仕事の1つである。礼拝日以外の青年隊の集まりは自由でハイキング、温泉などに行く青年隊もある。

第3部礼拝は4時半から始まり、一時間前後である。もともと、この時間は旬長と中旬長が勉強する時間帯で、牧師は普段着で出席することが多かった。一段高くなっている教壇に座って皆と話し合っていた。内容は人をどのように愛し、旬員と良好な関係をどのように作るのか、リーダーシップはどのように育てられるのか等々だった。しかし、参加を希望する平旬員が段々増え、バイトなどの理由で第2部礼拝に参加できない旬員がいることも考慮し、牧師は内容は違うが、第2部礼拝と同じように説教するようになった。牧師の説教以外にこの時間は信仰に関するビデオの放送、修練会、新入生歓迎会、教会のメンバーの証、外部の牧師や成功した信仰者の話をしてもらうなど、色々なことが行われる。

2005年11月までは6時から7時半までが各部属の活動時間で、中保祈祷会（8時から9時まで）後の食事まで時間が長いため、その前に教会は皆がお腹を空かさないようにパンとジャムを提供してくれていた。スケジュールの調整があり、2005年12月からは中保祈祷会は7時までになり、各青年隊が作った食事をしてから部属活動が始まる形となっている。礼拝日の活動は色々あるが、必ず全て参加しないとイケないわけではなく、第2部礼拝と旬の交流以外の活動への参加は個人の意志で決め、強制はされない。新人なら途中でも退部できるため、気軽に各部属活動（パソコン部、翻訳部、中韓日聖歌隊、中韓聖劇部、草原編集部、計画部、日本語・韓国語・英語のクラス、サッカーチームとバスケットチーム）に参加することができる。さらに、土曜日と水曜日の3時半からと金曜日の午後9時から、各1時間の説教も設けられており、好きな時間に教会に来て説教に参加してもいい。

教会の行事は4月と10月の伝道、8月の修練会が主だが、新入生を歓迎するために歓迎会と運動会が開かれている。現在、伝道は日常化し、土曜日、百貨店の前で本やチラシを配る自発的な動きも出ている。伝道で来た新入生は教会に入ると、まず旬長が決められ、青年隊に所属する。その後、旬長の指示で礼拝に参加する。そのうちに、歓迎会や運動会に参加して、8月の修練会の参加にも勧められる。受洗の案内が事前に行なわれ、希望者は修練会で洗礼を受けることになる。牧師は受洗者に証を示してもらい、受洗証を配ることになっている。信仰者になることで十分の一（マラジ書3:6~10）が勧められ、教会の活動の手伝いもしてもらうようになる。信仰が深まる（使徒行18:24~ 「人を愛する寛容な人、魂を愛する心持ち、祈祷できる人、伝道の心がある人、順従して感謝する人」）に従って、準旬長や旬長に任命され、下には旬員が付くようになる。教会の任命証をもらった旬長たちは自分の責任を自覚し、積極的に伝道や魂の養育（注：牧師によると、この教会では心を育てると言う意味で使っている）、教会の活動に関わることが要求される。

10.2.2 旬の学習交流

「変動する教会システムの解説」では、青年隊の再編には旬員一人一人のつながりを強めさせる牧師の考えが示されていると分析した。教会に来る留学生は基本的に一人の旬員として、旬あるいは青年隊に属して、自分の旬長の元で、旬の学習交流、修練会、食事作りといったグループワークをして教会活動に参加している。少人数で行う旬の学習交流は、旬員の間関係が深まる大切な時間であり、教会運営の基礎及び核心部分として機能していると言える。

「礼拝日の参加」で、各旬の普段の様子を紹介したように、旬の学習交流は必ずお祈りから始まる。普段は『信仰の六段階』³⁸⁾を中心に勉強を進め、途中で聖書に関連した話題が出たら、皆それぞれ自分の感想を話し合う。最後は、その日の話に出た苦悩及び歓喜を中心として次週に万事うまく行くよう皆一緒にお祈りをする。その後、時間があれば、個別に話をしたり、雑談をしたりすることもよくある。飲み物の購入、誕生日の祝い、テキスト印刷などにお金がかかるため、各旬は一人月 500 円の経費を集め、その経費内でおさまるように自己運営を行う。

旬の学習交流の特徴は、教会の教科書を通して生活体験と聖書の言葉を照らし合わせながら、話を進めるところにある。聖書の理解に関する個人差が尊重され、意見の食い違いが許される何でも話せる雰囲気作りに隊長たちはいつも注意を払っている。ここではキリスト教の基本知識の勉強も重要だが、それより、旬員たちが一週間の出来事や自己反省などを話し合うことはもっと意味があると思っている。大学進学や人間関係などの悩みを打ち明けることによって、旬長は旬員の状況をより具体的に把握できるし、旬のメンバーたちとの間の経験交流も促進される。

例えば、10 隊のある旬員はバイト先で日本人と友達になりたいが、なかなかできずに悩んでいるという話をした。すると、皆それぞれ似ている経験があると話し出し、中には中国人同士の話と日本人同士の話が違うという指摘もあり、日本人の友達作りをしようとしたら、初めは「た、だ」というような常体の言葉を持ち出すのではなく、「です、ます」のような丁寧体で話をしたほうが良いという話のコツまで教えてくれた人もいる。なぜなら、初めて日本語を習う中国人は「です、ます」を友達に使うとわざと距離をおこうとする意味があると思っており、「た、だ」を使う傾向がある。そのせいでよく無礼な人だと誤解されるからだという。

このように、旬の学習交流では経験を共有することによって、教育が行われている。10 隊では、意見交換が活発になった時、隊長は「世間の人々は私達のように素直に話し合えば、解決できないことはない」とよく言う。彼女の話から、旬の学習交流の時間では、

38) 第一段階:「信仰の出発」(第1課「罪」第2課「神様の愛」第3課「悔い改め」第4課「信仰」);第二段階:「新しい生活」(第1課「生まれ変わり」第2課「救いの確信」第3課「素晴らしい礼拝」第4課「祈禱」第5課「聖書」第6課「クリスチャンの生活」);第三段階:「成長の生活」(第1課「伝道」第2課「成長」第3課「神様」第4課「イエス・キリスト」第5課「聖霊」);第四段階:「教会の生活」(第1課「教会」第2課「教会の儀式」第3課「教会生活」);第五段階:「敬虔の生活」(第1課「クリスチャンの身分」第2課「クリスチャンの行い」第3課「勝利の生活」);第六段階:「献身の生活」(第1課「献身の動機」第2課「献身の方法」第3課「献身の決心」)

皆が心を開いていることがわかる。そして、様々な問題を抱えている留学生達は自分のことを話すことで、皆に助けを求めようとしていることが伺える。

青年 10 隊の燕子は、バイト先の上司との付き合いがうまく行かないことで、心を閉ざして日本人に警戒心を持っていた時期があった。阪大を見学しにきた時、阪大の学生の純粋さに感激して彼女は次の話をした。「たぶん、私は心が病気になったのかもしれない。日本人にあまり接触したくないし、日本人が彼氏って絶対だめです」と言い、その理由をこのように話してくれた。

「バイト先で一人のおばさんによくいじめられたし、チーフが好色な人だから、初めはよく接近してきたが、断ってからは、仕事をする時、どんなことでも叱られるようになり、バイトをすると涙が止まらない。夜中に二人しかいない時にバイトをするのは一番怖い。どうしたらいいのかわからないから、ずっと恐怖心を持っている。店に入る前に、すごく祈ってから行かないと入る勇気がない。たぶん、このような人に遭ったせいなのか、仕事は全部ホールだけど、必要以外にお客さんと話したくない。学校の日本人をみても警戒心が思わず湧いてしまうから、皆に傲慢な人だとよく言われた。実は私はとても情熱的な人だけど」(ノート・2006/04/17・阪大見学)。

その後、自己を保護するため、彼女は皆のコメントを採用して新しい人に出会うたび、いつも「もう結婚しているよ」と相手に言うことにした。それは確かに効果があったと彼女は言った。旬にいてことで、燕子は様々な助けをもらった。隊長の交渉でプロミス隊(韓国人を中心としたダンス隊、朝鮮族の中国人も 2 人ぐらい入っている。しかし、交流言語は韓国語だから、漢民族の留学生はいなかった)に入れたし、引越した時の部屋探しや普段のレポート作成などまで、皆の力が不可欠であった。旬員達の要求に応じて、旬はあらゆるサポートを提供している。皆と一緒にいてことで、燕子の生活習慣も少しずつ変わってきた。パンの柔らかい部分しか食べなかった彼女は、皆に言われて、固い部分も無駄にせず食べるようになった。有名大学しか考えなかった彼女は、旬長の説得で自分のレベルに合う大学に進学した。

燕子の話から、旬長は旬員にとって極めて重要な存在だということが伺える。参考資料⑭の「旬長の十条罪状」(旬長の愛情を表現したもの)に書かれているように、旬長は旬員の聖書学習だけではなく、「モーニングコール、散髪、食事の栄養」などといった旬員の生活の全てに関わっていることがわかる。だから、旬の学習交流は一つの重要な接点として、旬長と旬員を結びつける。旬員たちからよく出てくる問題は以下のようにまとめられる。

勉強面：進学問題；日本語の勉強；大学のレポート；パソコン学習

生活面：バイト探し；部屋探し；学費といったお金の問題；生活管理の問題；バイト先の人間関係

心理面：道徳観；挫折と苦痛に直面する(理想と現実の間)；自己成長欲求(学習意欲、自己表現の意欲)

これらの問題を解決するには、3つの手段がよく用いられる。

一つ目は、聖書、先輩たち、牧師 J 先生及び旬長個人の物語を多用すること。

二つ目は、聖歌隊や聖劇隊などの部属活動を利用すること。

三つ目は、教会という組織の力を総動員すること。

旬の力と旬長の力だけで完全に解決できないことには、教会という組織の力を借りることもよくある。バイト探しも部屋探しもそうであるが、進学のことなら、旬長はいつもよい情報を提供できそうな人を教会で探し出して、旬員のことを頼む。このようにして旬員の旬長への信頼が生まれる。次に筆者とある大学の法学部で勉強している浩との話を取り上げ、留学生が教会を信頼できる要素の1つである【広がりの問題】について考える。

浩：「もう学校は始まったけど、文系だから、どうしても将来にプラスにならない気がします。それより、将来何をしたらいいのかわからないし、今はどんな専攻を選んだら、プラスになるのかもわかりません。」

筆者：「そうですね。確かに難しいですね。知的財産法や商法のほうは人手が足りないと聞いていますが、そっちを考えてみたら？」

浩：「そうですか？そのような話はあまり聞けないんで、まあ、バイトでも同じですね。ある和食屋だったら、以前は中国人が一人もいなかったのに、一人が入ると、後はどんどん入っていくけど、広がりのことですね。このような話はだれも広げてくれないから、知りませんでした。」

浩は 2006 年 4 月にある大学の法学部に入ったばかりだった。彼と同じ学部で勉強している人が教会には 5,6 人もいる。留学生統一試験で 530 点を取った彼は日本語もぺらぺらである。だから、先日、こんなにいい成績を取ったのに、なぜ国立大学を挑戦しなかったのかと筆者は不思議に思い、彼に聞いた。だれもそのような話をしていなかったし、自分のレベルがどこにあるのかが分からなかったからだと浩は答えた。

(ノート・2006/04/16・教会)

浩のような状況の留学生は教会にも何人かいる。せっかく優秀な成績を取ったのに、三流大学に入ってしまった。ここから、浩のような留学生が学校で適切な進学指導を受けていなかったことが伺えるが、教会の広がりには限界があることもわかる。先輩達の経験の限界に関係していることは、ここでは深く追究しない。しかし、ここで、注目したいのは、彼らが教会の広がりを信じていることである。この事実から、彼らは教会に対する強い信頼を持っているということが読み取れる。

要するに、教会システムの基礎となっているこの青年隊の学習交流の目的は、グループの形で集り、お互いに近況や経験を話し合うことによって、皆の困難や苦痛などを分かち合い、その解決方法を探るところにある。上述したように、留学生が利用できる教会の巨大なネットワークは留学生達の問題解決へのルートを広げ、皆の体験や聖書の物語は問題解決の知恵の源となっているのだ。青年隊の活動は旬員達の生活に対する関心から出発し

て、一人一人の旬員の生活問題の解決と自己成長の欲求を満たすことによって、旬長と旬員、旬員と旬員の中に、信頼関係が作られ、青年隊の団結力が強まる。このような、「集まる（形式）＝話し合う（手段・方法）＝助け合う（目的）」という青年隊構図には、教会の運営に関する基本構想が隠され、人間の人格的な信頼関係と教会というシステムへの信頼関係をどのように繋げるのかということが含意されているのである。つまり、教会のシステムに対する留学生の信頼は、青年隊のメンバー間の人格的な信頼がなければ、生まれることはないということである。

10.2.3 旬長と中旬長の学習交流

旬の学習交流が終わると、旬長と中旬長は二階の礼拝堂で牧師のもとで勉強を行う。4時半から5時半までのこの時間帯は旬員は参加してもしなくてもいい。牧師は聖書を元に教会の幹部達向けに、「人間関係の処理」「計画性の重要性」「リーダーシップの発揮」「自己理解」などといった主題を選んで話を進める。旬員の参加が増えたため、この時間帯の使い方は変ってきた。様々な証をしてもらったり、ビデオを放送したり、他の教会の牧師やクリスチャンに話をしてもらったりするようになった。2007年4月からは、幹部達は牧師に学び、平旬員は黄さん（隊長）に学ぶという形になっている。旬長たちの学習時間帯では、お互いの旬員の情報交換が必ず行なわれるし、青年隊の管理について皆それぞれの経験と対応策を話し合う。ここでは、2005年1月16日のフィールドノートを取り上げ、牧師が幹部達になにを教えようとしているのかを明らかにしたい。

【猿さんの証】

今日は僕の信仰がどのように成長してきたのかを皆さんと一緒に分かち合います。僕は元々朴兄さんと同じ国際言語学校で学んでいました。朴兄さんはあの少し年上の格好いい男の人です。彼は朝鮮民族の人で、韓国語で聖歌を歌うのが好きみたいです。聖歌が非常に綺麗だったし、韓国語も綺麗だなあと思って韓国語を勉強しようと思いました。彼は非常に優しい人だから、こうして僕に韓国語を教えてくれるようになりました。もちろん、当時の僕は信仰などにも持っていませんでした。歌詞は少し知っていて、歌うのも好きだけど、キリスト教に全然触れたことはなかったものだから、キリスト教は東洋人とはあまり関係なく、お爺さんとお婆さんたちが参加する会だと思い込んでいました。つまり、キリスト教に対してすこし暗いイメージを持っていたと言えるかもしれません。

僕が本当に教会に接触したのは李さんに会ってからのことです。彼も朝鮮民族の人で、「難波にはある教会があって、雰囲気がとてもいい。遊びに行くだけでも、食事も与えてくれる。主にカレーだけ。」と言ってくれました。しかし、行って帰ると全身にカレーの匂いがついてしまっていました。カレーを食べるために教会に行くのは信仰じゃないから、あまり意味がないと思いました。あの時、朴兄さんも悩んでいることがあったら僕に言ってねとよく言ってくれたけど、僕はいつも時間がなくて自分の信仰を立てようと思いませんでした。

クリスマスのプレゼント交換はとても印象深かったです。ただ気軽に遊びに来たから、プレゼントを持ってくるなんて思いませんでした。来てみて、皆が贈り物を持ってきていたことを知り、恥ずかしく感じました。皆さん大丈夫だと言ってくれましたけど。あの日、僕は靴下二足ももらって嬉しかったです。しかし、お祈りをした時に泣いたり笑ったりする皆さんのことを受け入れられませんでした。キリスト教がこんなに切なくて悲しいものだったら、長生きしても意味がないと思いました。ここは本当に悲しすぎると思ったからです。

当時はまだ日本に来て間もない時でした。二ヶ月掛けてバイトを探したけど、なかなか見つかりませんでした。生活費は全て家からの送金に頼っていて恥ずかしかったし、毎回10万、

20万のために銀行で手続きをするのも面倒臭く感じました。仕事が見つからずにまた教会に来るなんて複雑な気持ちで、聖書も理解できないし、聞くうちに眠たくなるから、教会に来ることをやめてしまいました。しかし、仕事はすぐに見つけれませんでした。それから、色々な教会に行ってみました。台湾人の教会やエホバの証人などです。皆一つの共通点があります。それは、食事はただで、人々が親切だということです。この間、旬長は電話をしてくれませんでしたから、僕はとても悲しかったです。旬長は電話をして聞いてくれるべきだったと思います。その後、彼はまた僕に会いに来ました。「自信が非常に欠けている。まだ弱い。ずっと彼のために祈っている」と旬員点検表に書かれているのを僕は見ました。しかし、僕のためにお祈りをするより、むしろ電話一本してくれるほうがありがたく思うでしょう。HAさんのしてくれたことに非常に感激しています。学校が休みで8月の修練会の時です。自分の信仰はまだ初級段階だと感じ、恩義なんか受けていないようだし、お金もかかるから、修練会に行けないと思いました。しかし、彼はチケットをくれ、僕を修練会に行かせてくれました。そこで、改めてキリスト教徒の悲しむ一面を体験しました。皆抱き合いながら、苦しそうな様子でした。僕は理解できませんでした。喜びに溢れるべきだと思ったからです。

現在振り返ると、たぶんあの時から信仰を立て始めたのかもしれない。9月20日、病気で教会へ行けませんでした。旬長は何回も電話をして、薬を飲んだのかとか聞いてくれてとても優しく感じました。教会に行かなかったら、彼に申し訳ないと思いました。彼を通して僕はキリストの愛を感じました。だけど、惜しいことに彼は一時帰国しました。それでも彼が帰国している間、教会に頻繁に行き皆さんと一回でも多く会えればという思いでした。もう一つの出来事です。僕は自転車で怪我をして血がたくさん出て、ズボンにも穴が何か所か空きました。お祈りをした時に僕が足を引きずっていることに旬長は気づいて、「祈りが終わっても、待っていてね。話があるから」と彼は言いました。その後、たくさんの薬を持ってきてくれました。塗るのや、スチームのものや、全部彼が買ってくれました。主は彼の心にいるから、彼は人を深く愛せるのだらうと思いました。

もちろん、他の旬長や僕も含めて、愛は欠けていないけど、愛をどのように表すのか知らないだけだと思います。崔旬長（三人目の旬長）も彼ら二人も、信仰にあつい人ですが、性格が違い、二人は優しく、一人は気性が激しいです。HA旬長は聖書学習にいつも十分な準備をしています。彼も留学生で、バイトもやるし、疲れているはずですが。他の人が自分に何かしてくれたという事実を認めないとその人を傷付けることになります。彼は最初はずっと僕に注意してくれていたけど、段々しなくなってきたから、僕も聖書を読まなくなってきました。人は怠けやすいものだからです。しかし、僕は李旬長がしてくれたことを証言します。彼のおかげで僕は成長しました。自分の信仰も固まってきました。旬長を見れば、旬員がわかると崔旬長がよく言うこの言葉を僕は覚えています。人はまず自分の原因からよく探すべきだと思います。そして何がその人の信仰の足を引っ張っているのか相手を理解してみるべきだと思います。

人はお互いに愛し合うべきです。ここにはまるで一つの利益が存在するようです。実際貴方が払った犠牲は無駄にはなりません。なぜここに来た人が来なくなったのか、これは誰の問題

なのかとよく考えるべきではないですか。本当に愛し合ったら、皆の顔を非常に見たくなるはずです。皆に会ったら、喜びを感じますから。醜い顔であれ、美しい顔であれ、皆さん僕の兄、姉です。皆さん僕の弟、妹です。

(ノート・2005/01/16・筆者翻訳)

【猿さんの証】では、彼が旬長の愛を通して神様の愛を知ったことが語られ、一人の留学生として他の人からの関心と愛を期待していた彼の心理が伺える。彼の信仰が深まったのは、この自分の期待に応えてくれた旬長たちの存在があったからだ。四人の物語で語られたように、教会の先輩達からの愛を感じたことが、皆教会にいる基本的な理由となっている。旬長と旬員との信頼関係作りにはこの愛が焦点となり、旬長たちの学習時間では、「愛をどのように伝えるのか」という話題がよく牧師によって取り上げられている。

【牧師の話】

今日は猿さんの話を聞いて、彼の話から彼らは旬長の愛と関心を肌で感じたと思われる。そして、彼らは旬長を通してイエス様を知りたい気持ちがある。人間にとって一番の宝だと思うものは命と魂だ。貴方達は彼らを感化することができた。それだけで偉大なことをしたと思う。彼が脚を怪我したことをだれも知らない。彼の両親も。だけど、貴方達は彼を手伝う事が出来る。彼は貴方達の兄弟だから。そのために、私たちが絶えず自分に言い聞かせなければならないことは彼らと苦痛を分かち合っているのかということだ。貴方達の愛があるからこそ、たくさんの魂は永遠の命をもらったのかもしれない。例えば、電話を掛けること。一週間に何回したのか？消防士の人工呼吸のようにしているか？彼らと同じように情熱と勇気を持っているのか？なぜ旬員に電話をしないのか。経験があったら、貴方達はよりよく出来るようになると思う。これらは全部非常に貴重なことで、お金では買えないことだ。私達のたくさんの旬長がよく美味しいものを作って旬員を家に呼ぶことを私は知っている。一人の留学生にとって、これは難しいことだ。しかし、出来る人がいる。最近、二人の旬長が教会に自分の奨学金をくれた。彼らは自分の奨学金を出して、自分より生活に困っている留学生を助けようと考えている。自分は本当に愛が分かっているのかと私も反省した。私もお金を出す。他の中国人に愛を分かち合ってもらおうことが目的だ。今日は本当に嬉しかった。私たちがこれほど美しい証を聞けたなんて。電話は必ず掛け続けよう。お互いに励まし合おうね。

(ノート・2005/01/16・筆者翻訳)

奨学金を出す二人の名前を牧師は言わなかったが、その週から教会の週報に留学生奨学金献金の欄目も設けられるようになった。

「旬員をみれば、旬長のことがわかるから。それなりの旬長にはそれなりの旬員がいる」と牧師はよく言う。旬長の模範性が強調されたこの言葉には、旬長たちは旬員の成長に責任を持つべきだという意味も含まれている。牧師の話から分かるように、この時間帯の目的は、旬長たちに生活上及び信仰上で旬員たちのことを考えてもらうところにある。つまり、旬員たちをリードするというより、旬員たちを愛してほしいという牧師の意図がある。

そして、ここでは、「電話を掛けなさい」、「手紙を書きなさい」、「よく家を訪ねなさい」、「病気になるったら家まで見舞いに行きなさい」など、具体的な方法も明示されている。旬員の証は、旬長たちの自己反省を促し、旬員の心情を考えることで、彼らの要望に応える努力の成果及び方向性を示す手助けとなっている。

福建省出身の人が多い青年 13 隊は、旬員達の状況を考慮して様々な実践を繰り返した。その経験に基づいて隊長は以下のような基本方針を 2007 年に打ち出した。

「旬長は週一回旬員のところを訪ねること。礼拝日、食事の前に必ず旬員に電話をすること。彼らに愛を分かってもらえたら、他の人に伝えてもらうこと。信仰と実際の生活を照らし合わせて考えることによって恵みを受けてもらうこと。彼らの長所を発見し、彼らを褒めること。彼らに希望を与え、他人に影響を与えられる人になってもらい、世の中の塩と光になってもらうこと。そして、教会では皆兄弟姉妹だから、人を単独の一人の人として見ないこと。」

(インタビュー・2007/08/01・暁静)

青年 13 隊と同じように、各青年隊にはそれぞれの事情があり、グループ運営の重点は多少違っている。愛だけではなく、旬員達に使命感や責任感も感じてもらえれば、人間としてより一層成長するという考えもある。それには当然牧師の教えに基づいているが、隊長の小椿と副隊長の暁静は自分達二人の自らの成長体験にもよると言った。

旬長たちの学習の最後には、必ず交流の時間が設けられる。「何でも相談に乗る、何でも手伝いをする」という教会の体制の下で、旬長たちはこの時間を利用して旬員の情報を積極的に交換し合い、様々な交流を重ねている。一回きりで来なくなったというような特殊なケースなどの対応には皆の知恵が期待されている。

旬長の宋玉はいつも皆に反対して全く違う意見を出す。皆に説得されても、彼は自分の立場を堅持して反発をする。たまに、議論が対立したままで終わってしまうこともある。教会では彼が皆に従わないことが目立つが、彼はそれで満足している。「皆に挑戦してもらうことが面白いと思う。基本的にいろんな声を出したほうが解決力が上がると思っているから。牧師がなにか言ったら僕は反対しないが、ただ自分が本当に納得いくまで考えないと実行する時の原動力にならないし、僕が悪役になってでも、皆に考えてもらいたい。もし皆が僕を説得できたら、僕も反省するようになるから。」と彼は皆と違い、反対の視点で他人から学んでいる。このように様々な形で旬長たちはチーム運営について学んでいる。この学びでは、個人の体験も他人の経験も当然重要であることは言うまでもなく、それ以外にグループの共同運営からの学びも多いことを、暁静は以下のように語った。

【暁静と小椿の協力】

二人の考え方が違うから、協力し合うことが最初は難しかった。彼女はリーダーになれたから、気が強い話し方をする。彼女のやり方に異議を唱えた時もあったが、彼女に従うことにして黙っていた。彼女はそれに気づいたら、すぐ私と話す機会をもった。ある日、「暁静はとても優秀だから、あなたが何も言わないと私はあなたの考えが分からない。」と小椿は言った。色々なことでぶつかったりしたが、今は仕事を分担して良かったと思う。私は資料を作り、彼女が報告をする。足りないところがあったらこっちから補足をする。青年隊の活動は私が担当しているが、旬員の訪問は彼女の担当だ。彼女はとても純粋で心にあることを全部隠さず言ってしまうから、たまに人を傷つけることになる。だから、二人で話し合った結果、全てのことを皆に言うのではなく、牧師にしか言わないようにした。

(ノート・2007/06/01・「暁静の話」)

皆で分かち合ったこの【暁静と小椿の協力】からは、一つのチームを運営することによって、リーダーたちの計画性と協調性が育てられ、色々な能力が磨かれていることがわかる。旬員との友好関係を作るために、旬長たちは愛、時間、お金を費している。旬長と旬員が共に成長し、互いに分離できない存在だということは牧師がよく指摘している。旬長たちは旬員を通して、自分の愛が実現され、魂を救う存在であることを感じるようになる。旬員は旬長から愛を受けるだけでなく、どのように他人を愛せるかを学んでいるのだろう。

青年隊が集る時、宋玉は礼拝堂の後ろから静かに会場を眺めるのが好きだ。「教会に来て、ほら見て、小椿や立博たちはバリバリ働いているじゃない。その様子を見るのが僕の楽しみの一つだ。彼らはここを出たら、少なくとも中小企業の管理職は勤められるだろうと思う」と彼は楽しそうな表情で話をしてくれたことがある。彼の話からも、旬員の管理を通して、旬長の管理能力が伸びていることが伺える。

10.2.4 【熱い鍋】の働き

この二、三年、毎年教会に来る留学生は増えている。数回だけ来る人の数は続けて来る人の数より多い。そこで、留学生に続けてきてもらい、皆と一緒に信仰生活を送ってもらうためにはどうすればいいのかが、教会の一番の課題となった。10.2.3 では、「2005 年 1 月 16 日」のノートの一部から、旬長と中旬長の学習時間である第 3 部礼拝で、「温かい家」作りはどのように教えられ、考えさせられているのかを見た。以下では【熱い鍋】の話を取り上げ、その熱さの秘密を探ってみよう。

【熱い鍋】

「今年（2007 年）は青年 4 隊の新入生は全員残っている。なぜかというと、青年 4 隊は熱々の鍋のようだからだ。熱い鍋にはどんなお肉を入れてもすぐ食べられるようになるでしょ。つまり、4 隊の皆の心がとても熱いから、いくら堅い心でもこの鍋に入ったら氷のように自然に溶けてしまう。皆に愛されてここを家のように温かく感じるようになったら、誰も離れようとはしないでしょ。だから、私たちが心が熱くならないとこの鍋の温度を保つことができない」。これは青年 10 隊隊長小霊の旬員の学習交流の時間の最後の話である。彼女は【熱い鍋】の話をして皆に熱い鍋になろうと呼びかけている。

隊長の話が終わると、施さんは「4 隊の隊長の大字さんは昔私の旬長だった。彼は一日おきに、一人一人に電話をかける。それになにかあったら迷わずすぐ駆けつけてくれるから、すごいよ。」と言った。「4 隊は活動が多いそうだ。大字さんは確かにすごいよ。よく皆を連れて食事会やハイキングなどに行くから。皆若いからそれが好きみたい。」と李霊はまじめに補足した。

（ノート・2007/07/30・青年隊聖書学習）

その後第 3 部礼拝の時間になったため、熱い鍋の話はこれきりになってしまった。しかし、【熱い鍋】は青年 4 隊の愛の象徴として皆に深い印象を与えた。皆の話に出てきた大字は、青年 4 隊の隊長以外に聖歌隊の副隊長とサッカーチームのキャプテンを担当している。各種修練会においても彼はデザインから司会にまで関わっている大変忙しい人だ。しかし、いくら忙しくても彼は旬員達のことについて一つ残らず覚えている。

「日本にいるかぎり、計画しないと生活は混乱に落ち入ってしまう。（中略）例えば、僕は今学校の論文があって、またフランス語も勉強している。ジムも週 3 回行っている。夜している料理屋のバイトの責任も大きいし、朝 3 時から 5 時まで新聞配達もやっている。教会の礼拝参加だけではなく、旬員一人一人に電話をすることや、妊娠した金丹にネットで調べたスープの作り方を教えること、張偉のために進学の情報を集めるなど、全て一つずつやらないといけない。きちんと計画しないと忘れてしまうかもしれない。だから、時間の使い方をきちんと計画して、手帳に書く。手帳を開くと今やるべきことがすぐわかるから、一つも漏れないように状況を把握できる。でも、一度計画しても絶えず調整しない

とだめだ。変化は計画より速いからだ。僕は計画をするのが好きだ。そして、一旦計画したら、必ず実行する。本当にやり出したら、必ず一番にならないと気がすまない。満点までやらなかったら、やらないほうがましだと僕は思っている。だから、なんでも一番を目指す」。

(インタビュー・2005/11/20・大宇)

大宇の話から、彼が多忙な日々の中で旬員のために一生懸命頑張るのが、「何でも一番を目指す」という最善を尽くす心理と関係があることがわかる。そのため、計画性及び計画の実行力が非常に重要なのだと彼は考えている。この彼の考えは、彼自身の経験からのものであることを理解するために、【大宇の物語】を取り上げてみよう。

【大宇の物語】

一人っ子である大宇は、建築家の父親と洋服屋を経営している母親のもとに生まれ、幸せな家庭で育てられた。中学校から有望なバドミントン選手として省体育隊に選ばれ、厳しい訓練を受けたお陰で、国内外の試合では、何回も賞をとった。17歳の時、彼は来日している恋人のことを心配して日本まで追っかけてきた。しかし、来日してまもなく、父親が事故でなくなり、好きだった彼女にも振られた。彼は自分を見失い、酒浸りの日々を二年間ぐらい続けた。ある日、友人の家で礼拝から帰ってきた小霊（当時の友人の彼女）の安らかで喜びに溢れた顔を見た彼は、教会に来るようになった。数多くの留学生がいる教会には、様々な苦悩を抱えている人も多い。牧師の説教を聞きながら、彼は段々昔の自分を取り戻していった。デザインが好きな彼は将来、フランスに留学して神様を称えることができる自己流のデザインをしたいと言う。

(インタビューによる編集)

バドミントン選手だった彼は、小さい頃から個人の成長及び一つの集団の成長における計画の重要性がわかっていた。有望な選手として目標に向かって諦めずに努力する精神もその時に訓練された。教会で色々なアイデアを出している彼は、自分にデザインの才能があるのは両親の遺伝子を受け継いだからだとよく冗談で言う。彼にとっては、計画とはデザインのようなものであり、その作品を実現するため、懸命な努力も不可欠だという考えも強いだろう。しかし、来日後、家庭の事情もあり、彼は墮落した無計画の生活を二年間も送った。精神と肉体の苦痛を経験し、不良になる危機もあったが、神様に出会い、「神様が心にいることで、心が守れた」と彼は言った。自分のことを振り返って、大宇は次のように語った。

「僕自身、とても神様に感謝している。もし僕が神様に出会えてなかったら、今何をしているかわからないよ。死んでたかもしれないし、ホストをしていたかもしれない。当時僕の知っている人の何人かがホストをしていたから、彼らに君はかっこいいのにホストを

しないなんてもったいないねと誘われた。でも、僕がそこまで行かなかったのは神様のおかげだと思っている。もしこの神様を知らなかったら、今の僕はそもそも存在していないだろうと思うよ。留学生は特に厳しい状況に直面しなければならないから、一歩間違ったら、人生も終わりになる危険がある。そんな時は、全て神様に任せようと僕はいつも皆に言っている。神様はどんな魂でも見捨てないから、全てを神様に任せるだけでいい。」

(インタビュー・2005/11/20・大宇)

つまり、大宇は副隊長の麗香と同じように、心の危機を体験したからこそ、隊長としての使命と責任を強く感じ、旬員のために一生懸命になれるのだ。つまり神様に救われたことを実感した彼のこの強い使命感と責任感こそが、【熱い鍋】の秘密となっているのだろう。

教会の学びは、主に「礼拝の聖書の学習」、「青年隊の学習交流」、「旬長たちの学習交流」、「中保祈祷会」、「部属活動」という5つに分かれて行われている。本節では、礼拝日の学びを概観した上で「青年隊の学習交流」と「旬長たちの学習交流」を中心に学びの展開を詳しく述べた。【集まる＝話し合う＝助け合う】という教会の基本構想では、個と個のつながりを強めるには、「青年隊の学習交流」及び「旬長たちの学習交流」が極めて重要だということが明らかになった。旬長という人間への信頼が教会システムへの信頼の基礎となり、その信頼関係作りには「愛を伝えること」が重要なポイントとなっている。愛をどのように伝えるのかを巡って行なわれている学びでは、旬長と旬員の分離できない共に成長し合う存在としての関係が示されている。【熱い鍋】では、鍋の熱さを維持するのに旬長たちの強い使命感と責任感が必要となっている。大宇の経験は特殊だが、旬員を導くには旬長たちの個人体験の質が問われているところは同じだと言えよう。

10.3 壁を乗り越える工夫

2007年現在、200人もいる信者のうち、もともと信仰を持っていた留学生は5%しかない。2,3年前は2%しかいなかったと牧師は言った。ほとんどの留学生は教会へ来るのさえ日本へ来て初めてのことであった。立博のインタビューによると、バイトを紹介してほしい人や、日本のことを知りたい人、無料のご飯を食べたい人と、様々であるが、信仰のために来る人は少ない。そして教える側にいる韓国人の牧師と学ぶ側にいる中国人の留学生の間にある年齢の差、文化の違い、言葉の壁などのような問題が存在している。このような様々な壁を乗り越え、絶えず入ってくる新入生と言葉も通じない現状に対処するため、教会はどのような工夫をしているのかを以下の4つの視点から本節で記述分析する。

- ① 通路づくり＝家の雰囲気づくり＝認め合いを学ぶこと【暗黙の知の働き】
- ② 道を示すこと＝イエス様からの生活の方針＝異文化適応する力を得ること【言葉の力】
- ③ 窓を開くこと＝他者と社会と世界とのつながり＝生活の経験を学ぶこと【他者の物語の働き】
- ④ 舞台を提供すること＝創作・組織・協同＝他者との関係・学び方を学ぶこと【遊びの要素】

10.3.1 通路づくり

韓国人、中国人、日本人がいるこの教会には、言葉の障害を克服するため、通訳室を設け、韓国語が分かる朝鮮族の留学生と日本語が分かる漢民族の留学生に同時通訳を担当してもらおう。教材や賛美歌など文字が必要であれば、三ヶ国語で示す。人材を育てるための通訳チームも2006年に結成した。

小椿は自分の成長に関して、「李幹事が教会に来る道を作ってくれたお陰」だとはっきり言っている。よく電話をしてくれた李幹事から彼女は愛と関心を感じ、李幹事に叱られても、それは愛の表現の一つだと思っている。「人間はだれでも自分に気を配ってくれる人のところに行くでしょ」と彼女が言ったように、李幹事によって示された「愛と関心」が彼女を導いてくれたといえる。猿さん(10.2.3 学びの展開での猿さんの証より)は綺麗な韓国語の賛美歌に惹かれたことが最初に教会に来た理由だと言った。しかし、泣きわめくような韓国教会の激しい祈りにすぐに馴染めなかった。色々な教会を見学した彼は「台湾人の教会も日本人の教会もここと同じように、ご飯はただで、人が親切だ」と言ったが、最後はやはりこちらに戻ってきたのだ。それは小猿が父母のような牧師夫婦、兄弟姉妹のような留学生達を自分の家族のように感じ、教会を自分の温かい家のように思えたからだ。ここでは、旬員と旬長の個別関係作りが保障されるという教会システムの確立の重要性が示されている一方、そのシステム運営においては雰囲気作りなどのような【暗黙の知】が働いていることもわかる。

【暗黙の知】とは、対象の全体性を掴む知であり、言語として明示は出来なくとも非言

語的次元で感覚的に把握する知である。【暗黙の知】は関わる対象を包括的に把握し、「雰囲気」「におい」「予感」といった原始的な身体感覚と深く結びついて科学の知の生産現場のみではなく、私達の日常生活において、相手の顔の表情やしぐさから体感的に全体の意味を掴むといった形で無自覚に使われているものでもある。(注：もともと科学者で、のちに哲学者に転向した M. ポラニーは「科学の知」とは科学者による対象への主体的な関わりにおいて導き出されてきたものであり、その前提には科学者自身の経験知である「暗黙の知」が働いていることを明らかにしている。) 人間は基本的に快樂原則と現実原則に基づいて行動をする。そのため、他人を批判しない、自由に発言できる、愛と関心があるという雰囲気が、人を引き付けないことはないだろう。

文珍は自分の教会に来た時のことを語ると、いつも、ある教会の夏の夜とある夕方のことを話し出す。「あの夏の夜、教会の雰囲気がとてもよかった。皆好きなように寝てた。布団を引いてくれた椀儀や小椿がとても優しくかった」から、彼女はよく教会に泊まったりしていた。「夕陽の中、牧師と旬長の鄭さんは洗車していた。あの平和で友愛に溢れた雰囲気がとても感じられた。ここは自分のいるところだと思った。」当時、寮の人間関係に悩んでいた文珍はそれから教会に継続的に来るようになった。解放は教会の利点を「いくらほらを吹いても、笑う人がいない」という自由に発言できる場所だと強調した。

多文化が共存する教会では、最初に耳に入った美しい聖歌に感動したり、文珍のように初めての韓国料理に新鮮さを感じたり、小猿のように韓国語に興味を持つようになったり、このような異文化の触れ合いは必ず驚きと喜びが伴うと思われるが、生活習慣や言葉使いによる摩擦も起こりやすい。日本に来てまもない頃服装から言葉まで日本人の若者の真似をする留学生が多かったり、皆と話をする時によく普通体が日本語らしい日本語だと思いついで頻繁に使って見せつける人もいる。いつも敬語で牧師と話をする韓国人と朝鮮族の留学生と比べ、漢民族の若者は礼儀に不注意な人がいる。「私達中国人の若者は礼儀にあまり注意しない人もいて、自分勝手に、私達から見ても良くないと思うのに、牧師は嫌味を言ったことが一度もない。」と、先輩の小霊と莉莉は牧師のことをこのように語った。中国人の若者には標準語が話せない地方出身の人が多いため、様々な方言の訛りが混ざった標準語が使われ、よく笑いを呼ぶ。しかしだれも軽蔑はしない。冗談を言い過ぎないように旬長たちはよく注意をしているが、批判はしない。人間は他者との良好な関係を維持することにより、安定した状態を作り出すことを欲する。教会の学び合うシステムでは、信仰の有無、年齢の差があるにも関わらず、皆助け合いながら生きていくことが共通認識となっている。文化アイデンティティの尊重が保障されているのは、教会のこの協同的な人間関係作りという「暗黙の知」の働きがあるからだと言える。

文珍は教会にいて、小蕾との関係改善による大きな自己変化の一つを語ってくれた。二人ともせつかけで、互いに互いのことを目障りだから、声を聞くのも嫌だと思っていた。しかし、教会にいて、教会の雰囲気を壊すわけにはいかないと二人とも分かっている。「喧嘩になりそうと思ったら、すこし黙ってみる。彼女も私が興奮しそうな時、すこし我慢してくれるようになった。段々、彼女が変わっていくように感じたし、彼女も

私に変わったねと言ってくれた」と文珍は言った。

小椿は自己変容について「現在の自分はほとんど肯定的な言葉しか言わないが、以前の自分の口から吐き出された言葉は否定的な言葉ばかりだった」と語った。彼女のこの自己変容では李幹事や金幹事といった教会の人たちの励ましが不可欠だった。人は褒める言葉や励ましの言葉から自信と勇気もらい、存在感を感じる。この教会の協同的な雰囲気維持に、「肯定的な言葉」遣いの役割が大きい。人の長所を発見して褒めることは青年 13 隊の方針としてはっきり決められているし、青年 3 隊は「お互いの長所を褒め合う」ゲームで肯定的な言葉遣いを勧めようとしている。「旬長の中では麗香旬長の影響が大きかった。いつも褒めてくれたから、彼女からすごく自信もらった。一生懸命頑張ったのに、まだだめだと言われるとどうやったらいいのか分からないし、すごく不安を感じてしまう。」と文珍は褒める言葉の力を信じている。つまり、他者からの承認や肯定的評価が若者の内的世界を充実させていくことに役に立つのだ。だからいくら欠点があっても、必ずいいところがあるはずだという教会の教えでは「肯定的な言葉」遣いが愛の表現の一つとして認識され、教会にいる一人一人の人間は注目される大切な存在として見なされている。2007 年副隊長になった暁静は自分の体験をこのようにまとめている。「要するに、互いに寛容で、理解し合い、旬員の面倒を見て彼らに孤独を感じさせない、存在感を感じてもらおう。人間の潜在能力は無限だから、信じてあげたら、その能力は自然に伸びていく」。

人間は他人との関係の中で自己意識が形成されていく。この過程はまず「第 1 次集団」すなわち家族などの「対面的で、親密で、協力によって特徴付けられている集団」(小笠原・2003)において生じる。子供達は第 1 次集団に属する人々の反応を、自己を映す鏡として反省的に受止め、自己意識を形成していくのである。クーリー (1970) はこれを「鏡に映った自己」“looking-glass self”と名づけている。「教会の兄弟姉妹は私の全てで、私の命だ」という聖歌隊隊長の話から、教会の留学生達を貴重な存在だと思っていることがよくわかる。教会は留学生達が留学によって失った「第 1 次集団」の再現として皆に存在感を与えている。日々の接触や衝突によって、他人との共存を学んでいる。協同的人間関係を橋渡しするこの学びにおいて大切なのは、互いに互いの存在を認め合い、自分自身でも自己のありようを認めていくというプロセスであり、多様性がそこには含まれる。日々の状況は嵐のごとく変化するけれども、こうした自由な精神の働きに支えられた、学びを模索する教会こそが、若者の成長を促す場所となり、留学生の来る道を開いてくれたのだろう。

10.3.2 窓を開くこと

教会では修練会及び2部礼拝の学習時間に、証が一つの定番としてよく行われる。内部の留学生だけではなく、外部から牧師と信徒を招き、証をしてもらう。韓国人やアメリカ人をはじめ、大学の教授から会社の社長まで様々な人が呼ばれた。放送されたビデオもイエス様の物語以外は中国人と韓国人の証がほとんどであった。証では皆自分の体験を語り、信仰による悟りや恵みが主な内容となっている。テーマ別でまとめると「人生の成功」「事業の成功」「留学の成功」「信仰の発展」という4つの展開がみられる。

筆者：「教会にたくさんの人に来てもらって、証をしてもらっていますね。その理由は？」
牧師：「建物に喩えるとすぐわかると思う。つまり、この部屋のように、窓が一つもないと、息苦しいでしょ。でも、壁に窓が一つ、二つ、何個か開いたら、新鮮な空気が入ってくるし、光も入ってくる。そうすれば、部屋が明るくなるでしょ。明るい部屋にいると人の気持ちはどうなるのでしょうか？」

(インタビュー・2007/07/06)

牧師へのインタビューは一階の礼拝室で行われ、牧師は窓が一つもない暗い礼拝室を指しながら、以上の話を語った。牧師は「光」「新鮮な空気」のような比喩を使って他者を通して皆の見聞を広げ、外の社会と世界を繋げようとしている自分の意図を説明している。成功した様々な人たちに来てもらって証をするのは、現実世界での彼らの物語を通して神様の存在を皆に知ってもらいたいからと思われる。さらに、また神様の意志にしたがって日々の行動をとってもらいたいという宗教的な目的も当然含まれている。しかし、それより、苦しい現実だけを見つめずに未来を展望しながら生きていってほしいという気持ちが強い。

(12月のある礼拝日) Q大学の韓国人の女性教授は教会で証をした。教授は離婚してから日本に留学し、日本での自分の進学、就職、日本人との付き合いなど具体的に話してくれた。その中では生活の計画性、努力及び誠実さが留学成功のポイントとして強調された。教授の話が終わると、手を挙げて質問した留学生が多かった。信仰と学習時間の配分や進学の際の注意事項など日頃から関心を持っている質問が次から次に出された。グループ別の討論でも、熱心に議論が重ねられた。「起点が低くても成功できる可能性がある」ということに皆が励まされた。それはなぜなら教会には有名な大学に行きたい人が多いが、実力がまだ付いていなくて苦悩している人がほとんどだからである。皆の熱意に感動した教授は最後に、感無量でこのように言った。「現在のヨーロッパでは教会の蝋燭が光をすでに失い、まるで老人の涙のようだが、こちらで皆さんがこれほど熱心に信仰生活を送っているなんて感動しました」。

(ノート・2005/12・教会)

教授はもともとQ大学の出身だった。この皆が行きたくない大学（Q大学の偏差値はあまり高くないため、皆行きたがらない）を選んだ教授は、当時の自分のレベルに合う大学を選んだからこそ現在の成功に繋がったという。このことから、留学生達の中には有名大学ばかりの考えから自分の実力に合う大学を目指そうとする意識転換が見られた。牧師の言う通り、この教授が歩いてきた道を教会にいる留学生は今歩いている。前者の経験は後者の経験にもなるから、その過ちと失敗を深く受止めることによって、留学が最終目標により一層近づけるようになるのだ。

一人っ子であるLiは“小詩人”（年齢が若い詩人）だと言われている。彼が日本に来て書き出した日記の1ページ目には以下の詩が書かれている。「後悔」のところは「後悔!!!」になっている。「自分が書いたものではないが、私たちの気持ちが全部描かれているから。」とLiは言っている（範・2004）。

「父から離れ

故国から離れ

そして家族から離れた。

いったい自分は何処に行くのだろうか。

待ち受けている先は孤独と後悔…。

それでも自分を守るためには、そうするしかなかった

いったい自分は何処へ行くのだろうか？」

中国人の留学生の80%が後悔している。満足している人は10%で、残る10%はどちらともいえない。満足を感じる人達はほとんどが公費留学生である（「関西新聞」2003.08.07）という中国人留学生の感覚が留学生意識調査によって明らかになっている。

短い詩だが、行き詰まっている彼らの姿がうまく描写されている。彼らは「いったい自分はどこへ行くのだろうか？」という問いに答えを見つけられずに困っているのだ。

物語の4人の主人公はそれぞれ事情が違うが、日本で希望を失い、夢が見れなくなった時期があった。「日本の環境は厳しくて留学生にとっては一つの挑戦だ。一步間違ったら、全てが終わる」という日本留学の危険性を大宇はインタビューで指摘した。引きこもりになった林（解放の友人）のこと、文珍の同郷の女の子が売春で気が狂ったこと、などを考えると、彼らには身近なモデルが欠けていることがよくわかる。彼らが進んだ道は決して彼らの望んでいた留学の道ではないのだ。留学生でさえあれば、誰でも不安の時期を体験したことがある。「色々なことを知りたいが、日本語が読めない。テレビを見ても分からないし、バイト先の人の話は全然聞き取れない」というような「閉鎖された生活」から皆が脱出を求めているのだ。この留学生の状況を読み取り、彼らの心理に応えようとする牧師は日々皆への訓練を強めるだけでなく、留学経験がある大学の教授や留学生に話をしてもらい、様々な物語を提供している。

「青年よ、大きな夢を持って、一步一步進んでください。」これは説教した時に牧師のよ

く言う言葉だ。短い文だが、「一步一步」のところで牧師のゆっくりとした口調が意味深い。夢があれば強くなれる。困難にも耐えられる。この言葉には、「現在に生きているのではなく、今生きていることは未来に生きていることを皆に知ってもらいたい」という牧師の考えが込められている。さらに未来に生きるには足元をきちんと固めないといけないと牧師は強調した。教会ではバイトと学習のバランスをうまく取れない人が多いため、成績が優秀な留学生に証をしてもらうこともよくある。

2005年11月の新入生歓迎会で、黄さん³⁹⁾は「日本でどのように成功するのか、どのようにお金を儲けるのか？」という証をした。彼は具体的な数字を挙げ、バイトに集中する留学生生活と勉学に力を入れて奨学金をもらう留学生生活との詳しい比較を行った。結果としてはバイトに傾いた留学生生活は願いとは裏腹に、お金を儲けられないだけでなく、肉体的にも損になる。勉学に専念して奨学金をもらう留学生生活は本当の金儲けの道だと結論付けた。証をした黄さん本人も確かにこの道でずっと来た人だし、彼の流暢な日本語を聞いた人たちは皆頷いていた。この日来た新入生のなかには福建省からの人が多かった。

(ノート・2005/11/04・教会)。

インタビューで、黄さんはこの証をしたのは皆にもっと勉強してほしいという牧師の意図があるからだと言った。そして「成功の近道」(参考資料⑩を参照されたい)というテーマを選んだのは、留学生たちが成功にせつかりになり、道を間違えてバイトに走ってしまう傾向があると考えたからだ。その後、留学生の勉強が教会の中心課題の一つとなり、牧師の説教や教会の各活動でよく言及され、旬員の学習の後押しをすることが旬長たちの重要な仕事の一つとなった。皆の努力のお陰で変化は小樁から始まり、福建省の新入生まで及んだ。あまり勉強のことを考えないと言われる福建省の留学生達は一年後皆進学先が決まった。中には奨学金をもらった学生もいた。マザー・テレサの本を読むのが好きな小樁、マザー・テレサのような道を歩んでいきたい小樁、彼女自身の変容は周囲の人々の存在と密接に関係していることは言うまでもない。一つの窓を一つの世界だと考えたら、多様な他者の存在は多彩な世界を意味している。「周りの人たちが皆素晴らしい、皆花のようだ」と暁静がいうように人間は他者を意識し始めた時、世界を見る目が変わるようになる。それゆえ、この他者の存在はきわめて重要であり、真つ暗な部屋の光だと言える。

人として生まれた者は経験を重ね、学習し、人間として成長しつづける。他者との交流が自己意識の形成に決定的であると論じられている(哲学者ヘーゲル、社会学者クーリーとミード)。他者を通して多様な学びを行う時、五感の働きの中で「聴く」ことは学びの基礎的な行為である。さらに感じる力、読み取る力、それを自分に問いかけ考える力、そして判断して自分の意として取り入れる力、つまり、感覚と知覚の力が学びに総合されてい

³⁹⁾ 黄は皆の憧れている有名私立大学の留学生であり、成績が優秀なので毎年奨学金をもらっている。そのおかげでバイトを多くもせず勉強と信仰生活に集中できている。

る。この過程では、自分と関わりのあるものとしての他者（世界）が見えてくる。それが、「学んでいる」ということだろう。世界における自分の位置（状況）を知ると共に、自分のいる世界の有り様（状況）を知るということでもある。学び取る力に長けた人は、小椿のように教えを目的としない雑談から人生を変えるほどのことを学び取る。このように、明示的な教えではないことに教えられて学ぶ、つまり明示的な教えではないものごとにも「教育」的な働きがあり、これが生活的な経験（生活経験的な知識）を豊かにしてくれる。

10.3.3 道を示すこと

キリスト教は『聖書』を通して正しい生き方を示し、よいクリスチャンになるために日々の生活の方針を与える宗教である。その特徴は、言語的象徴、つまり宗教言語が重視される点にある。創世記の天地創造は神の言語行為であり、神の言葉である聖書は朗読され聴かれるべきものとされる（音声・話し言葉）。それに対して、神を見ることは死を意味し、神を像に刻むことは偶像崇拜として禁止される。キリストは神の言葉（ロゴス）であり、その言葉や地上における振る舞いは、人間の言語により聖書として言語化される。日曜日ごとの礼拝では、この聖書テキストをもとに、話し言葉による説教が行われるのである。これが「信仰はキリストの言葉を聞くことによって始まる」（コーマ 10:17）と言われる所以である。宗教言語は多様であり、その中でも隠喩表現は、信仰者と神との相関関係を生き生きとしたものとして具現化する上で重要なものだと言える。

たとえば、旧約聖書の詩編には、神に関して、豊かな隠喩表現が見られる。神は羊飼である。神は王である。神は父である。神は避難所である。神は盾である。神は石の塔（やぐら）である、など。こうした隠喩表現によって古代イスラエル民族がいかなる経験の場も神との関わりと捉え、その神との関わりの現実をいかなる方法で生き生きと言語化したかがわかる。そして、こうした現実についての発見的機能を有する隠喩表現は、より抽象度の高い思想だけではなく、実践へと展開され、それらを支える力となるのである。この節では、教会の言葉がどのように展開され、留学生を支えているのかを検討する。

10.3.3.1 正しい生き方（道徳観・価値観）

<是非観と道徳観のゆれ>

「ケーキが大好きで中国にいた時は父母がよく注意してくれたけど、今は自由になって毎日三食ケーキとミルクしか食べないし、夜も焼肉屋のバイトがある時は11時頃肉を食べるから、半年経たないうちに、20キロも太った。」これは青年7隊の旬員の話だ。彼女だけではなく留学生は日本で父母のような監督してくれる人がいない。そのため、生活管理で混乱に陥りやすい。それに加えて道徳観が揺れやすい危険も常に潜んでいる。聖劇部隊長の小霊はある韓国人にホステスを勧められたことがあり、「お酒作りだけで時給は高いし、なにも代価を払わないと聞いて、行こう」と考えたこともあった。聖歌隊の大宇も周りの人に何度もホストの仕事に誘われたことがある。

「お姉さん（筆者のこと）、不思議だね。牧師はいつもホストは悪いと言っているけど、うちの学校にはやっている子がいるよ。先生は知っているけど、悪いとは言わないし、逆に彼と仲良くしている。ホストは良くないって言えないようだ。」と解放は言った。

（ノート・2005/12/11・珈琲屋）

解放はホストという仕事が悪くないのではないかと思っている。その根拠は先生が悪いと言っていないからだ。しかし、日本語学校の先生への調査によると「確かに小料理屋の

店長をやっている人や、ホストをやっている人がいることは知っているけど、あまり言わない。事前に風俗店で働くことは禁止と言っているし、もし法律に違反したら、警察や入管があるから。」という考えを持っている先生がほとんどだった。先生達は留学生の出席率をよく注意するが、私生活に関してはあまり自分と関係がないと思っている。つまり、先生たちは学生の道徳面の監督に責任があるという認識を持っていないと言えよう。

ところが、学校と違い、教会ではサタンの誘惑に抵抗してイエスが名誉、権力、財富という三つの誘惑を断ったストーリーがよく語られ、金銭という悪魔に支配されてはいけないというキリスト教の価値観・世界観が繰り返して強調されている。人間は弱いものゆえ、常に非人間化される危険がある。この危険を皆に意識してもらうため、牧師は何度も自分の弟のストーリーを語っている。

【小牧師（牧師の弟）のストーリー】

「(前略) 弟は韓国の大学で哲学を専攻し、卒業してから日本留学に来た。僕と同じように肉体労働のバイトをしながら、大学院に通っていた。当時、ミナミのバーでマネージャーとかしている韓国人は多かった。皆月 80 万円ももらえたそう。弟は誘われて迷ってしまい、どうしたらいいのか僕に相談しに来た。僕はクリスチャンの正しい生き方を考えて自分で決めろと言った。結局バーに行かず僕と肉体労働を色々やり続けた。留学を終えた時に、弟の友達の中には何千万円も稼いで持って帰った人がたくさんいたが、弟は3万7千円しか持っていなかった。確かに彼らは投資したりして一時的に大金持ちになったが、韓国のバブルが崩壊して倒産した人がほとんどだ。しかし、弟は神様の祝福を受けた。韓国のソウルで土地が一番高い所を持っている大資産家がいるが、その孫が弟に一目ぼれして結婚した。弟を皆見たでしょう。背も低いし、顔もあまりよくない。この弟は貧乏で本当になにもないが、神様を信じていることで祝福された。」

(ノート・2006/04/06・教会)

「一步間違えたら全てが終わり (大宇)」という留学生達が常に直面している心の危機を牧師はよく分かっている。だから、牧師は飽きるほどこのストーリーを語り、留学生の道徳観と価値観を正そうとしている。

「彼女たちは日本へ来た頃、お金を儲けて、会社を作ろうという大きな夢を持っていた。しかし、道を間違えてあんな仕事 (売春) をしてしまい、容易に辞められないし、女の幸せももう諦めたようだ」と朝陽はよく餃子を食べに来る隣の店 (風俗店) の女の子達の話をした。「日本は物質社会だから、よい子でいるのは難しいけど、悪いことを学ぶのは容易だ (Me)」というように、日本社会の自由には誘惑も危険も十分に揃っている。非行、犯罪、殺人などのような様々な選択肢が常に彼らを誘っている (範,2004)。

「日本の番組はあまり面白くないね。暗いニュースばかり。けど、細木数子のお話を聞くのが好きだ。このお婆さんの話は人の心を奮い立たせるから。」これは解放が段々日本語が分かるようになり、テレビを見るようになった頃の話だった。番組で人の過ちを厳しく叱

ったり、怒ったりする細木は、物事を曖昧にせずはっきりものを言う人で、日本社会の問題も厳しく指摘している。この細木の番組が人気になったこと自体が道徳的な監督力が一般的に弱まっている日本社会の一つの象徴だと言える。この現実の中、人の是非観は曖昧になりがちだ。たとえパチンコンに夢中になったとしても誰も何も言わないだろうし、本人も段々それが悪くないと思うようになる。

しかし、教会に来る子は、そのようにさせない。小椿のように「それは賭博だよ。行ったらだめだ。ご両親は泣くよ。神様は許さないことだ。」と必ずうんざりするまで言うし、パチンコまでついて行って説得することもある。同郷の女の子達を見た文珍（文珍の物語を参照されたい）は「自分が教会を出たら、死ななくても不良になるに違いない」と感じ、教会を離れることを怖がっていた。教会にひっぱっていつてくれる先輩や牧師がいるお陰で彼女は自己を守れた。教会は混乱した世界から彼らを保護する役割を果そうとしていることは明らかだ。

10.3.3.2 生活知の教え

<困難と挫折に遭遇>

教会にいと「困難に遭っても感謝すること」「神様に祝福されたら神様を賛美すること」「出会いを大切にすること」「全てのことを肯定的に考えていくこと」「謙虚になること」「努力すること」「周囲のモデルになること」等々、生活態度を表す言葉があちらこちらから聞こえてくる。トイレのドアにも、「感謝と祝福の言葉はあなたと隣人を生かし、不平とつぶやき（教会の張り紙のまま）の言葉はあなたと隣人を殺す」という張り紙がある。円滑な人間関係を築くためには素直に話し合うことや、他人の立場で物事を考えることがコツだとよく言われている。

「学習とバイトのバランス」が崩れ、ひたすらバイトに走る留学生がいる。彼らを乱れた生活状態から救うために、牧師は常に彼らに夢と希望を与え、人生は計画によって変えられるものだから、知識を増やしていくことや苦難に耐えることこそがその夢を実現する力になると、しばしば強調している。大学受験に失敗したことやバイトが見つからないことに悩んでいる彼らを慰めるのに周囲の人はよく以下のような言葉を用いる。「苦難は訓練だから。もっと大きな祝福が待っているから、頑張りましょう。」「祈祷しなさい。神様は一つの窓を閉じたら、必ず一つの扉を開けてくれる。信じる人には幸がくる。」「大丈夫だよ。神様はきっと君にもっといい学校（バイト）を用意しているから、元気を出して次に行こう。」等々。

聖書ではヨセフ、ダビデ、ダニエル、モーセのような偉大な使徒の物語が語られている。その中では成功と苦難の関係を語ったヨセフのストーリーが特に人気がある。牧師の説教でも、旬の学習でもよく言及される。

ヨセフは30歳の若さでエジプトの総理（創世記時代）になった。7年間の飢饉からエジプトを救い、そしてエジプトを繁栄させ、自分の一族を守った聖書の中の有名な人物だ。

ヤコブが年を取ってからできた子であるヨセフは、小さい頃からずっとどの兄弟よりも可愛がられていた。子供が多かったが、父のヤコブは彼にだけ裾の長い晴れ着を作ってやった。ヨセフは一生裕福な生活を送れるはずだったのに、17歳の時兄弟によってエジプトに奴隷として売られてしまい、エジプト総理になるまで父親と会うことができなかった。奴隷の時代、主人の家で管理人の妻の偽りの告白によって3年間も牢獄に入れられたことがあった。

＜ヨセフのストーリーの展開＞『聖書』（創世記：37-50）

このヨセフのストーリーを語る時、牧師はいつも「大きな夢を持つこと」、「苦難を祝福に思うこと」、「準備の重要性」という三つのポイントを取り入れながら「夢と成功」を論じる。ヨセフは夢を見るのが好きな少年だった。17歳の時、彼は太陽と月と11の星が自分にひれ伏している夢を見た。兄弟達に売られてしまったのは、無邪気に夢を語ったことが兄弟達からの妬みを招いたからだ。しかし、全ては神様の意図によるものだと信じていたヨセフは、兄弟達を憎むのではなく、彼らを許し、自分の家にまで招いた。苦難の全てが神様からの祝福だとでも言うように、ヨセフは庶民の家に売られたのではなく、ファラオの宮廷の役人で、侍従長であったポティファルの所用となったのだ。そこで彼の誠実さや能力が認められ、ポティファルは自分の全てをヨセフに任せるようになった。囚人になって入られた牢屋も、エジプトの地位が高い政治犯とされてしまった人ばかりで、彼らから大いに学べたこともヨセフの総理になった道と密接に関係している。

教会では、解放のように成功を夢見る留学生が多い。しかし有名大学を目指していたが、結局専門学校に行きつく留学生も多い。彼らは梔儀や暁静らのように自信がなくなり、諦めかけている。牧師はこのヨセフの物語を通して、神様がヨセフのように大きな夢を持つ人が好きで、皆にいつでも夢のある人であるように勧めている。また、夢は行動で実現するもので、人生の成功には必ず苦難が伴い、苦難を自己訓練と思い、そこから神様の思いを読み取ることが大事だと教えようとしている。未来の準備となる現在を大切にし、ヨセフのように諦めずに努力すれば、神様の祝福が待っていると皆に神様を信じてもらいたいと考えている。

人それぞれ違うから、神様が用意してくれる祝福もそれぞれ違うという牧師の話の影響もあり、教会では先輩達が旬員の進学指導にあたって自分に適した学校を選ぶことの重要性をよく語る。たとえ好きではない学校に入ったとしても、大学への夢を捨てるのではなく、日本語をよく磨いてから再び大学に挑戦してみようと先輩達は自分の失敗と成功を活かして皆の様々な相談に乗っている。勉強に大きな進歩を遂げた小椿の話も説得力のある実例として教会で広まっている。

「人は自分の言った言葉通りになるから、常に注意しなければならない。つまり自分の口に出した言葉は自分の未来を作る。」と牧師はいつも例を挙げながら、言葉の力を語る。成功に憧れる留学生達は、自暴自棄になりやすい。留学生の心理をよく理解している牧師

は、留学生達に自分のレベルに合うところから努力し、自分の言葉で自分の未来、自分の成功を作ってほしいと考えている。教会で「肯定的な言葉」を積極的に勧めているのにも、牧師のこの深い願いが込められているだろう。

10.3.3.3 祈禱という言語活動

「言葉は糧食、祈禱は呼吸」、祈りは神様との交流であり、クリスチャンにとっては日々不可欠なことだと言われる。祈禱は神様との直接の対話だと言え、祈禱を通して自己内省が行われ、願いが叶えられ、そして導かれるという様々な恩恵を受けるようになる。以下の【今日はアルバイトを一日した。】では日本に来て半年ぐらいのある留学生の経験が書かれている。社長を怖がるこの留学生はいつも店に入る前に祈りをする。

【今日はアルバイトを一日した。】

9時前はとてもよかったけれども、9時から10時の間に頭が目茶苦茶になった。幸い仕事のミスはなかった。The reason is that I am afraid that the boss will take back my new timecard so that today's work will be in vain .The second is that the timecard has been out of order, if I ask boss to repair it .I am afraid that the boss will be very irritating .The third is that last week the timecard machine had been out of order once so I am afraid the boss will be me less money .After all the last hour is very bad.

もしまた料理間違えたら、社長は必ず怒る。そしてもっと社長を怖がる、怖がったらまた間違える、(中略) 今日私がミスをした原因は祈らず、自分の考えでやったせいだ。(後略)

(『草原』・10期)

祈禱をしたら、力がもらえると教会の留学生は皆信じている。教会の留学生はバイトに行く前に祈禱をする人が多い。その理由を先輩の小霊はこのように語っている。「私が知っている留学生のほとんどはバイト先で何か言われたり、差別されたりした経験がある。言葉が十分に通じないから、とても怖いでしょう。日本人じゃないから、バイトをすぐに辞められないし。嫌でも我慢するしかないから、行く前に必ずイエス様から自信と勇気をもたらうためにお祈りをする。」ここから、祈禱は恐怖心を克服する一つの手段として行なわれていることも伺える。

文珍の物語では、彼女はいつも自分の力だけでは実現出来ないことを祈禱し、祈禱詞を書くことによって自己整理を行う。彼女は祈禱をすると「悪い物を全部吐き出したような気がして、すっきりした感じ」になるし、祈禱によって神様が「三つの恩義」(文珍の物語を参照されたい)をくださったと感じている。つまり、彼女は神様に告白することによって、自分の不安を全能の神様に託すことができ、その内心の不安が緩和され、ストレスが解消できるようになった。いくら悲しくてもまず神様に感謝すること、それから自分の願いを話すこと、最後は全て神様に任せる気持ちを表すというプロセスで祈禱が行われる。

この「感謝・お願い・交付」の中で「交付」という言語活動は人間の弱さと無能さを認め、神様の万能さを信頼していることを意味している。だから、教会では、人間の力でできないことの全てを祈りによって解決させようと勧めている。

11月18日は収穫節であり、礼拝が終わると、青年隊の交流時間になり、青年10隊はいつもの5階の和室に集まってきた。今日は李靈に『信仰の六段階』を教えてもらうはずだったが、彼女は用事で来られなかった。隊長の小靈は皆に「罪」の節を復習してもらってからこの一週間の状況を話してもらった。

途中でいつも元気な烏ちゃん(4月に来日したばかりの人)が急に泣き出し、叔母さんのことを話し出した。「叔母さんは乳がんで、四年前手術をしたが、最近再発して癌細胞は頭まで広がっているようだ。叔父さんはお父さん以外にまだだれにも言ってない。叔父さんは若い頃事業で成功して皆にとっても優しい人だ。叔母さんは私を一番可愛がってくれているから、帰りたいが、母は帰って来ても何も出来ないからと言う。一級の試験があるから12月に帰っても、もう間に合わないし、どうしよう」と烏ちゃんは皆に助けを求めた。お爺さんの死を思い出した施と肝臓癌で亡くなった父のことを思い出した李さんは、それぞれ、当時のことについて話した。病状がひどくなったら、安らかに眠るために祈禱をすることがないと烏ちゃんにコメントした。

隊長の小靈は「祈禱しなさい、祈禱したら、奇跡が起こるかも。麗香のお母さんは白血病で死んだのに、牧師が電話でお祈りをしたら復活したという神跡がうちの教会にはある。祈ってみて治らなくても、叔母さんに天国への希望を与えられたら、少なくとも安らかに天国に行ける」と言った。引き続き、小靈は「二、三人でも一緒に祈禱したら、神様は必ず承諾すると言ってる。私達で叔母さんのために祈りましょう。」と言った。烏ちゃんに叔母さんの名前を確認してから皆一緒に叔母さんの病気が治るよう祈った。そして落ち込んでいる烏ちゃんに中保祈禱会への参加を勧めた。なぜなら40人ほどもいる中保祈禱会には聖霊が溢れていて、叔母さんのことを皆に祈ってもらったら、神様はきっと聞いてくれると信じているのだ。

(ノート・2007/11/18・青年10隊の交流)

烏ちゃんのように「心の傷」を抱えている留学生が教会には多い。父親が半身不随になった黄さん、母親が意識不明中の海燕、事故で父を亡くした大宇等々、彼らは人の前でけっして涙を見せない。彼らの傷を癒すために、教会では中保祈禱会の団体祈禱がよく行われる。一人の声は小さいが、皆が一緒になったらその願いは必ず神様のところに届くだろうと皆神様の助力を期待している。『草原』への投稿には数多くの留学生が「他人のために祈る」ことに感動したと書いている。立博はインタビューで「教会のすごいところは皆が他人のために祈れることだ」と言っている。

「初めて教会に来た時、祈っても涙が出なかった。しかし、バイトを始めてから色々な

辛い経験をし、神様に救いを求めたくなると、涙が出てきて止まらなくなった。それは自分のことを誰よりも可哀想に思えたからだ。今他の人のために祈る時、当時の自分の痛みを思い出せる。彼は、彼女はきっと当時の自分と同じように心を痛めているだろうと思うと、自然に涙が出てくるし、その痛みを心まで感じるようになる。それは決して同情ではなく、一種の同感かな、なにかやってあげなきゃという気持ちになる。(インタビュー・2007/08/01)」と暁静は自分の祈りに対する心境の変化を語ってくれた。

彼女は辛い経験をしたからこそ、他人の痛みを自分の痛みとして感じられるようになった。祈祷は他人と一体になることを可能にし、そこには連帯感が生まれる。他人の悲しみや苦しみをすることは、自分の事しか考えていなかった今までの自己内省の機会ともなる。自分を救ってほしい気持ちが他人を救済したい気持ちに変わることが人間の大きな成長につながる。この成長を実感した留学生は自分自身の人格の聖化⁴⁰を感じるようになり、他人のために祈ることができるのだろう。中保祈祷会は他人への関心を引き出し、同感を育て、連帯感を作るという意味でその存在が極めて重要だと言えよう。

10.3.3.4 教会の言葉とは

「李幹事はよく言うが、この教会に続けてきている人だったら、きっと何かの言葉に心が惹かれたはずだ。」この文珍の話から、教会にいと彼らに与えた言葉の影響が大きいことが分かる。聖書を手離さない立博は「歌と聖書の言葉も生活の知恵を教えてくれるから、読めば読むほど面白く感じる」と言う。「聖書を読んで分からない時があるが、生活の中で本当に何かに遭った時に、聖書の言葉が自然に思い出され、なるほどという感じで役に立つ時が多かったよ。」と大宇は鉛筆で線を一杯引いた聖書を見せてくれたことがあった。初めて教会に来たにも関わらず、聖歌に感動して泣いてしまう人が多い。綺麗なメロディより、「自分の心が映し出されている」歌詞のほうが皆の心を惹くようだ。人間の迷い・苦悩・苦痛・弱さが描写された聖歌が多いが、困難を乗り越えた喜びを語る聖歌も多い。孫は喜びを感じた時もバイトに疲れた時も聖歌を大声で歌う。小椿は聖歌を歌ってバイト先のいじめと戦った。聖歌には「戦勝の力」があると思われているのだ。

「先ほど礼拝に参加して、皆なぜ教会に来たのかが分かったよ。礼拝の時に『貴方達は一人で日本へ来てこの知り合いのいない異国で話し合う人もいないことを僕は知ってます。まだまだ両親に甘えたい年なのに、日本で苦勞をして泣きたい時もあるでしょう。』という牧師の話が終わらないうちに、皆泣いてしまった。私達は留学経験者だからよく分かる。留学生は心の苦しみをぶちまけるところがないから。」と李（元留学生だった筆者の友人で偶然教会に来ていた。）は言った。教会には留学生が自分の苦悩を吐き出す場所としての機

⁴⁰ 聖化：キリストによって与えられる神の恩恵により、義と認められた者が聖霊を受けて、潔められた人格を完成してゆくこと。広辞苑より

能が大きいと彼女は考えているようだ。

(ノート・2007/04/15・教会)

確かに李の言ったように、教会は苦悩を吐き出す場としての役割が大きい。しかし、彼らがなぜ泣いたのかという理由を追究する時、牧師の語りは無視できない。そもそも牧師のこの理解と同感を示した言葉こそが、彼らの涙を誘う力となったのではないだろうか。

礼拝日の牧師の説教では、キリスト教の価値観と道徳観が強調されるだけでなく、聖書を巡り、宗教の世界観も理解してもらい、人生の生きがいも積極的に考えてもらっている。日常生活や世界中で起こる様々な出来事も説教のテーマとして取り上げられる。「宗教と戦争の関係」「テロへの理解」「アメリカの象徴としての自由の女神」「世界貿易組織の意味」などのような社会・政治にかかわる主題も取り上げられ、聖書の物語と照らし合わせながら、キリスト教の視点から社会・歴史の発展、現在世界の構図・紛争、未来世界の発展と変化が語られている。更に児童虐殺や性が自由になりすぎているといった社会問題から、物質文明の発展に伴ない、精神文明が衰えている現状への宗教的な理解を提示する。

宗教に含まれている哲学や歴史学や文化など膨大な知識に接することによって、彼らの視野が広げられるし、皆の知識を深めたいという強い願望に応えるため、神学院も設けられたのだ。「世の塩、光になれ、生きがいのある人生を過ごそう」と牧師は若者によく呼びかけている。そのお陰で、解放のような「成功の夢」だけを見ている若者が「生きがいはなんですか」と自分自身に積極的に問い掛けるようになり、金銭意識が強い福建省からの留学生達も段々変貌しつつある。「経済を習い、社長になり、マイカー・マイホームを購入する」という自分の生活だけを考えていた子の何人かは牧師のように魂を救う理想を立てるようになった。

鄭、劉牧師、解放、この3人は元々関大経済学部しか目指していなかった。【解放の物語】では、関西大学を一緒に受験した3人はスーツ姿で一緒に学校の前で記念写真を撮ったという話がある。教会に在ること、彼らの価値観に大きな変化が起こった。解放は神様の教えの元、ビジネスの成功を求めようとする考えに変ってきたし、劉牧師は社会の構造を深く教えてくれる専攻に変え、将来牧師になろうと決心した。鄭は受験に失敗した翌年神学院を受験しなおして神学生としてゼロから勉強をやり直すことにした。この「3人の変化」は教会ではよくあり、教会の言葉の力を示してくれる。その変化を起した根本的な原動力となっているのは、聖歌、聖書、及び周囲の留学生達が語った言葉から、道を知り、知恵をもらい、同感できたことだと言えるだろう。

まとめー【言葉の力】

神様は祈祷、他人、出来事、聖書の言葉を通して人に話しかけると牧師は言う。小椿も文珍も暁静も神様を頼ることによって大きな変化を起した。どうしたらいいのか分からない Me (範,2004) と違い、信頼できる牧師、先輩達、神様がいることで、文珍の「だれかを頼りたい」という不安が解消でき、自分を守れるようになった。宗教のポジティブな働きの一つは「安全な港」を提供してくれるというところにある。この「安全な港」を築く信頼できるネットワークの存在が極めて重要だと思える。

異文化適応するためには、信頼できるネットワークの形成の重要性が指摘されて久しい。朝陽の餃子店のメンバーたち、日本人の里親 (徐,2005)、NI の従兄弟にとっての NI (範,2004) のような存在は彼らの異国生活への適応に積極的な役割を果たしていたと言える。

教会には規範があり、親の代わりに監督してくれる人がいる。自分の間違いを注意してくれ、進学指導やバイト探しなど実生活面も心理面もサポートしてくれる。このような自己保護・自己救済のネットワークの存在が非常に重要だという認識を留学生自身も持っている。そのため、小椿は伝道にとっても熱心であり、来ない人がいれば、彼女はいつも神様の前で泣きながら祈る。それは彼女が外の世界の危険を意識しているからだ。交通事故に遭った陳強やバイト先で殴られた男の子は、はじめに旬長の暁静に助けを求めたことから、暁静は自分の責任の重大さを感じ、伝道で留学生を救うことが「自分の祖国のために力を尽くす」行為だと考えるようになった。「後は神様がしてくださるから、彼らを教会に連れてくるだけでいい。個人の力は弱いけど、神様に頼ったら強くなるよ。」この伝道する者同士が励まし合う言葉から、皆が教会の言葉の力を信じていることがわかる。

洗礼を受ける事とはイエス様の生き方で生きていこうという決心を示す行為であり、神様を頼りとして心に迎えることでもある。「自分を変えたい」という留学生の入信動機からみれば、この信仰の道を開いてくれた言葉の力は無視できない。暁静も「快樂的標杆 (楽しさの基準)」(参考資料3を参照されたい) で、聖書の言葉を人生の道のりの指標とすることによって未来を展望でき、日々の問題に対応できるようになったという。この基準を示してくれた言葉こそ、彼女の楽しさや喜びの源となり、力になったようだ。

11月18日は毎年収穫節が行なわれる。2007年のこの日牧師の教壇は留学生が買ってきた果物、野菜(主に大根、キャベツ)に囲まれていた。中にはワインもあった。牧師は微笑んでクリスチャンはお酒を飲まないよと注意したが、この子の気持ちをなにより貴重なものだと褒めた。教会に来たばかりの子でも、この感謝する心を持っている。このことから十分の一、留学生によって始められた奨学金献金などの献金の種類の増加が留学生の感謝の気持ちの表れだと推測できるだろう。

10.3.4 舞台を提供すること

この節では、教会の若者の「遊び」に着目する。成長過程にある時期の遊びは、個人の発達にとって非常に重要な意味を持っている。人は遊びを通じて運動機能や感覚器官などの身体機能、各種の感性や社会性を身につける。また遊びから様々な有形無形のことを学んだり体得したりすることで、自己を形成し成長していくと考えられるからである。そこで、留学生の居場所作りを検討するには教会の遊びの環境を明らかにする必要がある。

以下は2005年4月3日の伝道反省会でのある先輩留学生の発言である。彼はどのように留学生に伝道したらいいか自分の経験を話していた。ここで「有趣好玩儿！」(日本語で「面白い」)という言葉が頻繁に使用されていることに注目してほしい。

「実は伝道はとても簡単だ。お互いに知らないからこそ話し掛ける必要がある。どこから来たのか、その土地の特産品は何なのかなどと聞いて褒めてあげたら、相手の気持ちよくなる。そうすると自然に話をしてくれる。…僕は教会に行けば教会の人たちは優しいし、教会はめちゃ面白い(有趣好玩儿)と感じたよとか、聖歌を歌うのは楽しくないとか、人と喋って聞いたことも無い事を聞けて珍しいと思わないのか?と問いかけ、このような自分が体験した楽しさを彼らに紹介する。教会には留学生が多くいて、ゲームをする時もあるし、ご馳走をしてもらえる時もある。君も教会に行って、面白いかどうか見てみて、面白くなかったら帰ってもいいよ。…教会は本当に面白いよ(有趣好玩儿!)。礼拝日は一緒に食事をして喋ってる。同郷も多いよとか…」

(ノート・2005/04/03・伝道の反省会)

この先輩留学生は留学生を引きつけるために教会はどんなところなのかを紹介するより教会の面白さをアピールしたほうが効果的だと強調した。それは人間には、本能的に「遊びたい！」という欲求があるのを若者自身がよく知っているからであろう。

さて、教会はどのような遊びを提供しているのか。この答えを見つけるために留学生が教会に来た最初の目的を整理してみる。今までのデータに出てきたように、バイトの紹介を求める子もいれば、カレーを食べに来る子もいる。それ以外に、立博はサッカー、椀儀はピアノ、燕子はダンス、暁静は聖劇とはっきりした目的を持ってきた子も大勢いる。言うまでもなく、彼らにとって、教会の魅力はスポーツ、音楽、ダンス、劇という多様な遊びの場を提供してくれるところにある。「バスケットがないと、朝の魂は来なくなる(バスケットを愛する留学生は信仰心がまだないが、バスケットが好きで、バスケットのために教会に来る)」という暁静の心配からも、教会のリーダー達は留学生の様々な要求に注目し、応えようとしている姿勢が伺える。

しかし、遊びには出会いの空間、出会うためのまとまった時間、なにより出会う相手あるいは仲間が必要だと思われる。教会がどのようにしてこの3つの「間」を結びつけるのかを明らかにする前に、まず留学生が普段なにをして遊んでいるのか、なにを期待しているのかを考える必要があるだろう。以下のデータはある旬員が教会に来る前に「お金で楽

しみを買っていた」話である。

「先日、僕の旬員の一人はこのような話をしてくれた。彼は教会に来始める前、お金で楽しみを買ったことがあった。彼はカラオケにいる間は、一時的に、確かに満足だと感じた。しかし、出るとやはり不快だと感じた。なぜなのか皆どう思う？」と鄭は言った。皆それぞれ自分の意見を出したが、ほとんどの人が日本人とは付き合いにくいとか、友達がいなかったとかしか言わなかった。「彼本人はこの世界との繋がりを感じられなくて、心の中にある空虚さに耐えられないと言った」と鄭は最後に言った。

－（青年3隊旬員交流時間・鄭旬長）

範（2004）に書いたように、ほとんどの留学生は両親に心配をかけたくないので、自分の憂鬱を正直に両親に話さない。ストレスをゲームセンターやパチンコンにぶつける人が多い。鄭の旬員と同じように彼らは閉塞した日常から離脱したいが、一時的な発散では心の喜びにならない。インターネットに夢中になった子は「ここには、差別がないから、日本語が下手でも、友達出来る」と言った。ここに映し出されているのは彼の求めている連帯感が実現できないという苦痛しかない。「旅行はお金がないからいけない。ビルは高いけど自分とは関係ない（発展している日本社会との関わりが見出せないという意味）」というように主流社会に入れなかった彼らは実に孤独な存在である。「ゲーム化した遊び」は現実世界の人間との繋がりに遊離し、本当の連帯感を生み出すことはできない。現代社会の「遊びのゲーム化」は遊びのルールが体系化され、遊び全体がそれ自体で自己完結し、しばしばその小宇宙を支持する外部性が消失した状態であると専門家（田中,1999）は指摘する。そのため、彼らの空虚さはけっしてテレビ、カラオケ、映画、ゲームで解消できるものではない。

ゲームの世界は若者の日常空間の一部となっているにもかかわらず、そこでは発達に不可欠な「身体の運動」「感覚器官の駆使」「人間関係」「言語活動」「生活体験」「自然体験」などは乏しい。しかし、教会の若者を見ると、彼らは踊ったり、歌ったりして自分の能力を自由に発揮し、生き生きとしている。脚本や踊り、修練会の進め方など、色々な工夫をこらして次から次へと新しいことを思いつく。常に創造力と想像力を発揮し、五感を鍛え、運動能力を駆使し、感性を磨く。他人との摩擦を通して、距離のとり方を測れるようになる。いくつもの失敗を重ねてたくましくなる。物事の進め方や考え方を身に付ける。そのようにして自らの存在を最大限に全うし、そして、そのことを喜ぶ若者自身の姿に、生きる喜び、存在することの喜びを感じる。このような教会での遊びは対人関係を結ぶ機会や、自らの肉体を使うことを自由な場で行う機会となっている。

教会では、チームでの活動が人間関係を生み出す仕掛けとして、若者が求める連帯感を保障しており、その重要性は無視できない。例えば、プロミス隊（ダンス隊）、聖歌隊、聖劇部、スポーツチームなどの部属活動も、青年隊の修練会、当番制度の食事作りも、皆チームで行われている。また、教会の新入生歓迎会、8月の修練会、運動会、さらにクリス

マスパーティもチーム間の協力が前提となっている。彼らは遊びを通して色々な自己表現をし、新しいものを自分で作り出すことを楽しんでいることが以下のデータからわかる。

「もともと劇の出演に興味があるのは、自分の才能を活かせるからだ。聖劇部にいるのは楽しい。皆の知恵で脚本を作ったりしてまるで遊びのように楽しくやれる。(暁静)」(これまで出された脚本は斬新なもので皆を大喜びさせた。)

4月の新入生歓迎会に放映されたドキュメンタリーは大宇の作品で、皆を楽しませることができた。「皆の写真を入れるよ。修練会の画像処理も終わったし、コマーシャルのように作れたよ。面白いよ。後でみてね!」と大宇は言った。

プロミス隊(ダンス隊)に参加した燕子は脚が痛いと言いながらも、皆の体勢に合わせて自分の動きを絶えず調整している。彼女のきらきらと輝く目や、暁静の満足したような話、大宇の自慢気な表情から、この活動に自分で作り出すこと自体が遊びであるという遊びの本質を見ることが出来る。成長期のまっただ中にある若者にとって遊びとは、単に遊んでいるだけではなく、自らが自主的に創造する時空間であり、人間関係であり、身体能力を試す場であるからこそ、教会は一人一人の参画を大切にしているのだろう。

この個人の参加を保障するため、月の初めの礼拝日に行う修練会は各チームが順番で準備し、毎週の礼拝日の食事作りもチームごとに担当していく。8月の修練会・クリスマスパーティ・新入生歓迎会などの一大行事では、新入生以外の人全員にできるだけかかわってもらうことが教会の方針となっている。例えば部属活動をしていない人には、プレゼント係をしてもらったり、ゲーム監督をしてもらったりといった具合である。一人も漏れないように細かいところまで隊長達は牧師へ報告する計画書に書かなければいけないし、実施後のよかった点と改善すべき反省点も紙面での報告が必要となっている。

各青年隊の修練会は青年隊のメンバー達によって工夫されるものであり、ダンスやビデオ、楽器演奏、劇など組み合わせも自由だが、証と聖歌、それに祈祷は必ず入れなければならない。新入生の歓迎会、教会の修練会やクリスマスパーティでは、必ず各部属(韓国の部属と中国の部属)の準備したレベルの高い歌とダンス、演劇が披露され、教会の話が上手な人が司会をする。各主題に合わせて証と祈祷が行われ、盛りだくさんのゲームやクイズをする。新入生の歓迎会は新入生にゲームなどを楽しんでもらう。歓迎会で行われる証は日本留学の様子や彼らが遭遇するかもしれない困難及びそれをどのように乗り越えればいいのかという内容がほとんどだ。彼らをグループにわけ、お菓子とフルーツを食べながら、日本に来てからの感想をお互いに話し合ってもらう。ゲームの中でも「触れ合い・仲間作り・愛を伝える」という主題は一貫している。クリスマスパーティは年末のメイン行事であり、当日のパーティの雰囲気に合わせて、教会を飾る仕事は皆が知恵を出し合っている。そのお陰で、毎年教会は独特な雰囲気を醸し出す。来る人の目を引いている。パーティーは豊かな内容で皆の心を魅了する。最後のプレゼントの時になると、教会の愛に感動して涙を流す人もいる。

8月の修練会は普段の修練会と違い、六甲山などのように青年活動施設が設置されているところで行い、大阪の教会をはじめ韓国や日本各地から参加者が集ってくる。準備部の

メンバー達は4月に行うアンケート調査の結果に基づいて、プログラムを考える。修練会の場所やバスの手配とお知らせ、講義をする教授や牧師への連絡はもちろんのこと、修練会の主題から、お揃いのTシャツのデザイン、皆のサイズ登録・購入・配布、チーム分け及びチーム長の決定、3ヶ国語の通訳の考慮、更に毎日の食事会やお風呂、舞台の照明、楽器の設置や字幕まで様々なことを留学生自身で決めないといけない。朝7時に始まり、夜12時頃終わる4日間のスケジュールは内容が多いため、休みはほとんどない。世界各地から招かれた牧師は様々な講義を行う。山登りなどのような屋外の活動も多く、皆疲れてしまう。しかし、皆の興奮した顔、嬉しそうな笑顔、感動して涙を流した姿をみると、修練会の参加は彼らにとって、大きな意味があるものだといえる。修練会後も皆時間を設けて自分の成長と感動を語りあう。このように、教会の活動ごとの成功は、皆がそれぞれ自分の役割を果たしたと密接に関係している。皆の力を合わせ、1つのことを作り上げることで、皆それぞれの知恵が発揮できるようになる。活動の企画者は全般的な企画力、実行力を学べるし、活動の参加者はグループの中で協力することなどを学べるだろう。

遊びは言語哲学者バンヴェニストのいうところの、人の存在論的な「様態」の一つである。一つの定型化された行動であるというより、全ての人の行動に生じうる「自発的な意味生成活動」であるという特徴を持つ。中国で台所に立ったことすらしない留学生が、教会のキッチンで先輩に教えてもらいながら、50人分の料理を作るために一生懸命に働く姿を見ると、これは遊びのための学びなのか？学びのための遊びなのか誰にもわからない。ただ、その嬉しそうな顔から彼らは今、ここで食事作りを楽しんでいるのには違いないということが分かる。

「今ようやく、初日のゲームの意味が何であったか分かった。隊長は私達を列にして、私の背中に『愛』と書いていた。私を感じた文字を、前の人の背中に書くというゲームだった。伝言ゲームと似てるが、隊長は愛を伝えてほしいというつもりだったんだね！」これは教会の一番盛り上がるゲームの話だ。ゲームはいつも青年隊の交流時間、修練会の前後に行われ、会場の雰囲気を盛り上げるため、司会者は皆を走らせたり、お互いの肩をマッサージさせたりする。本番のゲームと同じように、愛と関心を巡り、触れ合い作りが主題と成っている。例えば、2006年11月12日の新入生の歓迎会では、「玉子コミュニケーション」ゲームがあった。会場の一人一人に1つずつ卵が配られ、それを持って知らない人のところに行き、玉子に名前を書いてもらう。時間内に名前を多く取った人が勝ちとなる。書いてもらう前に相手に「いつ日本へ来たの？日本はどうですか？お名前は？どこから来たの？どの学校で勉強しているの？イエス様は君を愛しているよ。私もあなたを愛しているよ。」という言葉伝えるのが条件となっている。クイズは、チーム参加が前提で、聖書と日本に関する基本知識が中心だった。新入生に優先して応えてもらうが、チーム長の助言が許される。

教会の遊びの特徴はスポーツ、ダンスやゲームなどのような遊びを対立的なコミュニケーションではなく、同調的なコミュニケーション関係に基づいて行うことである。同調的

なコミュニケーションは、私とあなたがそれぞれの主体的な企てよりも、共通した事に関心を示している場合に成り立つ。この同調したコミュニケーションこそが安心感・仲間意識を作り出し、これを通してお互いに言葉・文化・考え方の相違を乗り越えられ、多文化と共存することを学ぶようになるのだろう。

要するに、教会は若者の遊びの場、あるいは若者の自己表現の舞台を提供してくれるという点で意味が大きいと言える。ここでの遊びの役割とは単に空間を提供するだけでなく、人と人との関係、あるいは「場」を醸成することでもある。そのためには単に「場所」を用意するだけではなく、人間関係を生み出す仕掛けを意図的に用意するなど、場を生かす方法も重要となる。自由な遊びが生み出す想像力、創造力、身体能力、社会性、感性などが「場」を生み出す力なのである。遊びたいという本能があるからこそ人は遊ぶのだが、遊びによる体験を通して、いくつもの高度な能力を身に付けていくと考えれば、「遊び」とは、「本能として誰もがそなえている学習プログラム」であるといってもいいだろう。遊びはそのような体験を無理なく自然にすることのできる仕組みなのであろう。

本節のまとめ

本節では、教えと学びの分裂を克服するための教会の工夫を4つの視点から検討してみた。「1. 通路づくり」では、家族のようにお互いに認め合うことを学ぶ環境づくりには【暗黙の知の働き】が重要であることを明らかにした。「2. 道を示すこと」では、異文化適応する力を得るにはイエス様の【言葉の力】が必要だということが分かった。「3. 窓を開くこと」では【他者の物語の働き】によって他者と社会と世界とのつながりが作られ、生活の経験から学ぶようになることについて分析した。「4. 遊びの場を提供すること」では他者との関係・学び方を学ぶために創作・組織・協同という関係作りが有効であることが示した。つまり若者は通路を作り、窓を開き（見聞を広げる）、道を示し（思想と基準を学び）、実践や活動や遊びで認識知が広がるという環境に置かれると、生きる力が育てられ、教えなくても学べるようになる。このように留学によって失われた「家の雰囲気、監督力⁴¹⁾、社会性、遊びの場」という環境が教会によって補完され、教会の安定した共有できる留学生間のネットワークが留学生の異文化適応に積極的な役割を果たしていた。

2007年度の修練会では一人っ子の小明の脚本が舞台化された。「彼はスターになりたいと思っているが、性格が一般の人と違い、社会で排除され、認められないタイプの人のようだ。彼との協力はすごく難しかった。しかし、彼は確かに才能がある。教会には愛があるから、彼との協力がうまく行くように皆よく祈った。彼もかなり変わったようだ。（インタビュー・2007/08/01・暁静）」と聖劇部の人たちは語った。このように、活動や遊びを通して、少なくとも、付き合いにくい人と関わり、かけがえのない人のために配慮をし、経験の全体性（五感すべてが連関した経験）を体得することによって、留学生達は実践知＝臨床知を獲得するようになるのだろう。

遊びがこの実践知＝臨床知を培い、内的時間を編成し、他者と未知との遭遇をもたらし、越境する力を発見させる行為だからこそ、若者のためになるのだ。このような遊びの場を作るにはキッチン、舞台、相談室、学習室、運動場などのような場所も含めて、全ての場所が保障されなければならない。

41) 監督力：道を間違えそうになった時、正しい道に導くこと。

10.4 指導者の参与

2007年牧師のJ先生は55歳になり、日本に来てすでに18年が経つ。牧師になってからの年月は長い、まともに給料をもらえるようになったのは、ここ4、5年のことだ。中国人の留学生が来ることによって教会が復興され、大阪で最大級の教会となった。2007年の韓国聖潔教団成立100周年にあたり、J先生には功労賞が授与された。300人ぐらいの信徒が入れる1億2千万円の聖殿暁静築は1千万円の差で落札できなかったが、同年度の4月、教会には神学院の設立が認められ、神学院の大学院も11月に設立された。「日本・韓国・中国のために21世紀の広場を作る」ことが教会のビジョンの一つとして教会週報に明記され、若者の教育館を設立することが使役方向（実際に週報で使われている言葉であり、教会の目標という意味を指している）として決められている。

教会の復興について、J先生はこのように語っている。「……私は韓国人、彼らは中国人、国籍は違うし、年齢も違う。また育てられた背景も違う上に、言葉も通じない。その人々を導くとかまた救うとか、私には本当に出来ないんです。私が計画をしたのではなく、目に見えない神様のお導きだと思います。」しかし、J先生は神様がどのように導いてきたのかをはっきり話さなかった。そこで本節では、神様の導きを理解するため、J先生に焦点を当て、教会の復興における指導者の努力と考え方を探ることとする。

【教会復興までの経緯】

J先生は韓国の農村の出身で、兄弟が10人いる。高校を出ると、水兵として海軍に属していたことがある。若い頃はよくお酒を飲んだり、喧嘩をして殴り合ったりしてけっしていい青年ではなかったとJ先生はよく言う。28歳の時、J先生は肝臓になり、お医者さんに死を宣告された。治療を諦めてしまったJ先生は、昔教会に行ったことを思い出し、神様に救いを求めた。奇跡のようにJ先生は全快した。これがきっかけとなって神様に献身を誓い、牧師になろうと決心した。努力を重ねた結果、やっとJ先生は神学院に入る夢を実現させた。神学院を出て牧師になり、韓国で様々な仕事にも精力的に参加した。ある日、彼は夢を見た。夢で和服の女性が語りかけてきた。「韓国には教会がもういっぱいありますが、日本はまだ少ないんです。牧師に日本人も救ってくださるようお願いします」と。この女性の願いに従って牧師は35歳の時、日本に留学し、日本語をゼロから勉強し始めた。当時も現在と同じように留学生に対する日本の環境の厳しさには変わりはなかった。J先生は工場で肉体労働をしながら、日本語学校に通っていた。米も塩もない時があった。そんな困窮した状況でこそ信仰の力を強く感じた牧師は、伝道の意志を一層強め、京都の自宅に7坪の教会を開いた。大阪城などで路傍伝道をしたが、信徒はなかなか集らなかった。97年、現在の5階立ての教会に引っ越した。神様のお陰で楽器も車も信徒が寄贈してくれたが、2000年までの7年間で信徒は日本人7人しかいなかった。牧師は法律上、バイトが出来ないため、一家3人の生計を維持するのに、師母一人のバイトに頼っていた。牧師は知らないが、食べ物がなく、捨てられていた白菜を料理して牧師に食べてもらった時もあったと

師母は言った。2000年から朝鮮族の留学生（元の信仰者は2、3%を占めた）が来るようになり、彼らが聖書を勉強し、御言葉を述べられるようになった。その朝鮮族の留学生の伝道により漢民族の留学生が数多く教会に来るようになった。

牧師の話によると、他の教会と自分の教会は、どちらも神様がいる点ではほとんど一緒だが、深い部分では違いがある。一つは自分の教会は信者の聖霊を生かし、また信者の聖霊によって生かされているので、神様に対する愛、情熱があり、神様への愛と隣人愛が深いということだ。この深さは賛美したり、祈ったり、また献身的で、隣人を愛している人がたくさんいることが証明できる。もう一つはイエス様と教会を愛するだけでなく、留学生が自分の民族、自分の国を愛する心が深いことである。自分のふるさと、民族、国に対する責任を持つことに牧師はずっと尽力してきたという。

この違いの発生をより詳しく理解するために、以下では、牧師の【諦めない態度】、【希望を与える説教】、【魂を愛する心】、【留学生の尊重】という4つの視点から、牧師がどのような思いで皆を導いているのかを明らかにしたい。それと同時にその思いと牧師自身の経験との関わりも検討する。

10.4.1 諦めない態度

調査で数多くの留学生は牧師が留学生の心を分かってくれると感じている。かつて留学生だった牧師も「自分が肉体労働をしながら、留学生を送ってきたからこそ、現在の留学生の苦しみを細部まで理解できる」と言った。留学生の精神的な苦痛や肉体的な疲労や借金の苦しみなどに対する理解は、言葉だけにとどまるのではなく行動の上にも牧師の努力として示されている。

牧師は留学生一人一人に関心を持ち、その関心を留学生に感じてもらいたいと考えている。留学生に会うたび、牧師は必ず手を伸ばして丁寧に挨拶をするし、皆に将来何になりたいか書いてもらって、それをもとに個人個人に指導をしている。学費が出せないという心配をしている留学生に何度も証をしてもらい、神様は必ず助けてくださると安心感を与える。困難な留学生活と戦っている彼らに聖書の言葉を覚えてもらい、祈禱によって神様に自分の苦痛を訴え、神様に期待を託すようにする。信仰を持つことによって厳しい状況を乗り越えられると牧師は信じている。牧師自身も神様が心にくれたことで、困難から喜びを感じ、苦痛に打ち勝ったという。留学生に信仰を持たせようと牧師は一生懸命だ。留学生に対する牧師の姿勢について大宇はインタビューで、次のように述べている。

「最初は、牧師が神様を受け入れることがまったく不可能に見える人たちにも一生懸命に伝道しているのを見て理解できなかった。あんな人たちに何を言っても無駄だと思ったからだ。けど、今は僕にも分かったよ。イエス様は一人も諦めない。僕はこの身で感じられるし、耳でも聞こえる。今になって僕もできるようになったが、当時は本当に分からなかった。」大宇は一人のことも諦めない一生懸命な牧師が自分に深い影響を与えたと語ってくれた。

2006年11月13日のノートを開くと、やや緊張していた牧師の姿が鮮明に記述されている。「今日は留学生統一試験があった。礼拝に参加できなかった留学生のために5時半から第4部礼拝が牧師の家で行われた。筆者を入れて7人の留学生は牧師の書斎に案内され、大きなソファに座らされた。微笑みをたたえた師母が大きな蜜柑を皆に出し、試験のことも少し聞いた。通訳の麗香はパソコンを開き、録画された第2部礼拝の牧師の説教をホームページから引き出し、イヤホンをしてから、中国語で通訳を始めた。彼女の隣りに座っていた牧師は注意深く最後まで聞いてくれた。中国語が分からない牧師の表情から少しの緊張を感じたが、とても真剣に見えた。今日のテーマは御言葉の重要性だった。牧師は終わり頃、一人一人に感想を話してもらった。(ノート・2006/11/13・教会)」。この日、牧師の言った一人も残さず言葉を覚えてもらいたいという切迫した気持ちが筆者には非常に印象深かった。

牧師がこのように一生懸命に努力している理由は「皆に天国に行ってもらいたいという気持ちがあるからだ」と小椿は説明してくれた。牧師にとって、一番眠れない時期は4月と10月の新入生がたくさん教会に入ってくる時期だという。牧師は新しい人々に永遠の命があることをうまく伝えることが出来ないのではないかとこの心配を抱いて泣いてしまう時がよくある。「そんな時は、私は私なりにもっと祈りながら、また勉強しながら、頑張っているが、本当に難しい。知識によってそれを教えられるのではなく、聖霊にかかわる問題だから、イエス様を知らない人々に永遠の命を生きさせることが出来なくて、非常に心が痛い。礼拝の時、賛美をしながら、僕は泣いている時があるのだ」と牧師は自分の無力さをインタビューで正直に語ってくれた。自分のせいで、だれかが地獄に落ちてしまう恐れをずっと抱いているのは、牧師が留学生活の厳しさと危険を意識していることも原因の1つだと言える。「僕と弟は留学の道を歩いてきたから、その苦痛が肉体からのものだけではなく、精神的なものの方が大きいことが分かっている。道に迷った羊のような彼らは自由になった生活に快樂だけを求める傾向がある。彼らは関心と愛をほしがる。道を導く人をほしがる。」と、牧師はこの時期の彼らはしっかり捕まえておかないと地獄に陥ってしまう危険がもっとも高いと考えている。

牧師は留学生の問題を意識し、その解決方法の一つとして、個と個の関わりを作れる青年隊を結成することを考えた。目的はお互いに話し合うことで理解し、学び合ってもらうことである。これには若者の心理的な病気が愛のつながりによって癒されるという考えも含まれている。「変動するシステムの解説」では、牧師が積極的にリーダーを立てる理由の一つは皆にリーダーシップの訓練をさせたいからであることが明らかになった。その訓練をさせるという考えには、一人っ子の生育環境への牧師の理解及び彼らを成長させたい牧師の意図があることが以下の牧師の話しから読み取れる。

「韓国でも同じだと思う。一人の子を素晴らしい子に育てようとその家の中のことは全でお父さん、お母さんがやってあげる。でも、その人たちはね、一人前じゃなくて、半人前になってしまった。だから、私が考えたのはたくさんのリーダーを立てて、リーダーが自分の組を組んでチーム長になる。そして一年間、自分の組の人をどのように導くべきか、

計画を立てて、実行して点検してみる。また自分が伝道で新しい人を連れてくる。計画を立て直し、実際にやってみることによって、自分の人生において大きなプラスになってくるんだと思う。」つまり、韓国の若者の生育環境に対する牧師の理解が現在の中国人留学生への導きに大きな意味を持っていた。

「牧師が留学生だったから、留学生のことを知っている。大人だから、父親だから、子供達のことをよく知っている」と暁静は牧師のことを理解している。経験の重要性を牧師は次のように語ってくれた。「私が昔経験した色々なことを話してみると、朝鮮族また中国人留学生と年の差があるのにも関わらず、話を通じた。つまり韓国人は今物質文化が発達していて、今の私の娘世代の人と話をしたら、全然通じないが、この中国人留学生は私の思い出と全く一緒なんだ。共通性がある。それで親しみを感じるようになったと思う。」ここでは牧師自身が韓国で経済成長を経験したからこそ、中国の経済発展期に生まれた留学生達と友達になれたのだと強調している。つまり、留学生達が歩いている道を牧師は歩いてきたからこそ、牧師は皆の期待を深く理解でき、皆の問題の解決に一生懸命になれるのだろう。

10.4.2 希望を与える説教

「牧師の話がまるで自分に対して語っているように聞こえる」という留学生の声をよく聞く。この話から牧師の説教は人の心を掴むものであることが分かる。牧師は中国に行ったことがない。しかし、中国人留学生のニーズに応えた説教ができる。その理由は牧師の彼らへの深い理解にあるということをも 10.4.1 で明らかにした。牧師が留学生の生育環境への理解を持っているからこそ、挫折しやすい心理や自立性と計画性に欠けた性格など留学生の特徴を掴むことができ、教会でシステムを作って彼らに訓練をさせようとしている。また牧師自身に日本留学の経験があるから、厳しい留学環境に置かれた留学生達が希望を失いやすいことや危険にさらされやすいことをよく分かっている。牧師が自分の弟がホストのバイトに誘われた話を皆によくするのも、様々な人に来てもらって証をしてもらうことも、困難に満ちた留学の道をどのように歩むべきなのかを皆に示そうとしているからだ。窓を開き、光を入れることで牧師は皆の閉鎖した日常に希望を与えようとしている。彼らをよりよく導くため、牧師は青少年の心理を扱った本もたくさん読み、さらに他の教会の牧師と会うたびに、皆の経験に耳を傾け、他の教会で成功したやり方を自分の教会でも試している。

「中国人に深く関心を持ったのは、約 18 年前のことだった。僕が留学生だった時、共に日本語学校で勉強した中国人が 7,8 人いた。当時、その人々を見て、一般的な人間の考え方ではなく、信仰者の立場から見たら、神様の救いを知らないその人々が可哀想でもあり、また愛らしくも感じられた。その時から、中国人に対する愛情があったと思う」と牧師は話した。当時の牧師も中国人留学生も皆貧乏だった。師母は電気バリカンで皆の髪を切り刈ってくれるなどの世話をした。そのようなことを通して中国人たちと色々な交流ができた。中国人との縁を深く感じた牧師は、今の留学生に対する責任と使命を感じている。「信仰と夢がなければ、僕はまだ韓国で農民をやっていて、魂を救うことなんて考えられなかっただろう」と、信仰と夢が牧師自身を変えたように、若者も変えられると信じている。教会の第 1 期生である莉莉が「教会にいる学生はもともと強い子は少ない。弱いからこそ残された」と言う。教会には地方からの学生がほとんどで、その中の大多数が中国の大都市に行ったこともないのに、いきなり日本の大都市に行かされた。牧師はこの教会に来た一人一人すべての学生に目を行き届かせて、その学生に合った導きをしようとしている。彼らに勇気、自信、存在感を与えるため、褒め言葉を多く用いることを教会で勧めている。

牧師の努力は決して無駄ではない。数多くの留学生が信仰によって人生の生きがいを見つけ、大きな変化をみせた。経理の仕事をしていた李幹事は以前、お金のことしか考えない人だった。日本に来たのもお金をもうけようと考えたからだ。しかし、キリスト教に接触したことによって彼の人生観が変わり、留学生を救うことに誰よりも情熱を注ぐようになった。警察官だった金幹事は、小さい頃から多くの人を救いたいという夢があった。留学の厳しさを経験した彼は、信仰が人を救う近道だと分かった。日本で墮落して死にかけてところを牧師によって拾われた麗香の変化でも大宇の個人的な経験でも信仰を持つことで彼らが社会の危険と誘惑から守られたことが語られている。

青年は国と社会の未来を担うから、青年が墮落したら、この国、この社会は未来がなくなると牧師は青年教育において、青年達の国に対する責任を強く意識している。教会の人々の変化から、牧師は自分が学んだ事も多かったと言う。彼らから国を愛し、貢献したいという情熱を感じたし、牧師の青年時代からの夢である多くの魂を救うという希望が見えたという。初期の留学生達は皆苦しんでいたので、牧師は彼らに奉仕や祈禱をやってもらい、言葉を一生懸命に覚えてもらった。彼らの成長に伴ない、就職の問題が出始め、牧師は学習の重要性を強調するようになった。そのため英語クラス、日本語クラス、パソコンクラスを一年中無料で開き、皆に勉強させようとしている。

より幅広い知識を得られるように、説教をする時も、教会の歴史やユダヤ教の政治形式など意識的に教えている。教会の運営が安定してきたことで、牧師は奨学金や宿舎のことにより一層取り組めるようになった。

「神様は目に見えない言葉を使って私達に自分の人格、自分の精神、また自分の全てを教えている。イエス様を受け入れることによって自己を捨て、目に見える現実あるいは世の中の状況に支配されるのではなく、それを乗り越えて自分の言葉で未来を作っていく。夢が人を変える力になるのだ」と牧師は自分のやっていることの全てを皆の未来を育てるところにあると語っている。小椿の成長をみている牧師は「彼女にはもう未来がある」と言った。主体的に色々考えて行動している彼女から多くの留学生が生きる力を与えられた。

暁静はリーダーになると責任感が育てられることを次のように語っている。「留学生達は皆肉体労働は運動と違うことを意識したから、サッカー隊などに参加したのかもしれない。2007年10月の試合は旬長達が準備し、忙しかったが、旬員達はそれをあまり知らなかったようで遊んだだけで帰ってしまう人も多かった。旬長はやはり旬員と違って責任感があるから」だ。伝道で国に尽くしているという使命感を感じた暁静の話からも、牧師の思いや協力が留学生の使命感と責任感を育てるのに成果をあげていると言える。

「僕は一人の人間だけを見ているのではなく、一人を通して、何千人、何万人を見ている。」と牧師がよく言うように、皆に希望を与えるのは留学生達の未来及び彼らの国の将来を見ているからだ。そして、それこそが牧師自身の夢でもあるからだろう。

10.4.3 魂を愛する心

以下の話はインタビューの依頼書を牧師に渡した時の話で、筆者にとって非常に印象深いものだった。「全てのことは幸せと愛のもとで行われており、僕にとって、中国人留学生は純粹で昔の韓国人のようだ。僕はそこに惚れたのかな。」後日のインタビューで牧師は説教の重点が「神様を愛し、また隣人を愛しなさい」という点におかれていることを強調した。なぜなら、人間は肉体の力によって生かされているのではなく、精神によって、宗教的な言葉でいえば、魂によって肉体が支えられているからだ。魂が抜けてしまったら、人は倒れてしまい、腐ってしまう。しかし、人間は神様の愛を知ること、内面から全てが変わり、神様を信じるようになり、そして人々を愛せるようになると牧師は思っている。

「十字架の意味はこうなんだ。上と下、これは神様と私の関係で、横はね、隣りの人と私だ。つまり、神様が私を愛す。私は自分の隣りの人を自分の体のように愛す。これがキリスト教の根幹だ」と牧師は十字架の意味を語ってくれた。牧師はコーヒーを買うことから手紙を書くこと、電話を掛けることなどまで旬員への愛をどのように表すかを教えている。それだけでなく、「娘がバイト代で買ってくれた靴を履くと、世界が変わった」というような子供を持つ父親としての喜びを語り、留学生に両親の気持ちを理解してもらおうとしている。二階の礼拝堂で寝る人が多いが、夜中に皆に布団を掛けに来る牧師や、また留学生に服を作ったり、三階で皆とおしゃべりしたり、食事を作ったりしている師母から留学生達は愛を感じている。

「牧師への感情は尊敬なのか愛なのか」という筆者の質問に文珍は「もちろん愛だ」とはっきり答え、留学生がお土産を持ってきたら、先に一口でも牧師夫婦に食べてもらわないとだれも食べないと、彼女は皆の牧師夫婦を愛する気持ちを話してくれたことがある。しかし、「それより、牧師は私たちのことをもっと愛しているよ」と、彼女は牧師夫婦が父母のように皆を愛していることを強調した。

暁静は普段牧師夫婦と話すことがあまりない。しかし牧師夫婦の話をする、彼女は例を挙げながら、自分のことをわが子のように扱ってくれる牧師夫婦のことを語った。「ある晩、三階で牧師は王晶さんと話したいから、隣りにいた私にちょっと通訳してくれる？と言った。牧師の話し振りは、まるで子供を気遣っている父親のようだった。お互いの間の距離をとて近く感じた。先日、暁静は無口な子だが、見えないところでたくさん事をやっている」と師母は小椿に私のことを言ったらしい。小椿からこの話を聞いて、一言だけだが、母が自分の子供のことを言っているような温かさを感じたよ。自分の家にいるような気持ちでもっと頑張れるような気がした。」

一人一人に注目し、それぞれの問題を聞いて終わるのではなく、最後の解決まで関心を持ってくれるのは牧師の愛の特徴だと小椿は言った。例えば、中旬長の崔は就職のことでずっと悩んでいた。牧師は彼女の相談に何回も乗っただけではなく、就職が決まるまで繰り返し証（皆の前で話をするとは、自己内省になるし、ストレスの発散にもなると考えられる）をしてもらった。今の彼女は非常に落ち着いているように見える。また事故に遭った陳強のことも心配し、朝の祈祷も礼拝の時も彼の名前をよく呼んで励ましてあげたり、

慰めてあげたりしていた（インタビュー・2007/08/01・暁静）。

このように牧師は留学生との間の壁を愛で乗り越えようと努力してきた。「言葉の差もあるし、文化差もある。また教会に来た人々が一つになることは一般的な考えだったら、人間の力では絶対無理だと思うだろうが、愛は必ず通じると信じている。つまり言葉は通じないけど、神様の愛を持ってすればこの行いを通して、この目を通して、愛は通じるという考えである。また僕も自分なりに愛を持って頑張ってきた」という牧師の話から、彼が愛の力を信じていることが強く感じられる。愛は必ず伝わるものだと牧師が言うように、小椿はいつもそばに立って皆の話を聞こうとしていた牧師の姿からその愛と関心を感じ、自分も牧師を見習って留学生達を愛そうとしている。小椿や椀儀から愛を感じた文珍は、人に頼りたい気持ちは強いながらも、旬員達のために出来る限りのことをしようとしている。旬員に何かをしてあげてもそれを当然だと思うのは、自分が同じようにしてもらってきたからだと言珍は説明している。この彼女自身の行為の解釈から、愛が通じたということが分かるだけではなく、愛がキリスト教の文化の重要な部分としてうまく伝承され、さらに広げられていることが暗示されているだろう。

しかし、牧師はなぜ人をこのように愛せるのだろうか。牧師が「愛は人を救う」という十字架の秘密を悟ったことが一つの理由だと思える。だが、これだけではまだ不十分である。牧師の「自分なりの愛」を理解する必要があるのではないかと筆者は考える。

現在の牧師の行いは、牧師の子供時代と青年時代の考え、留学体験、一人娘を留学させた父親の思いと関係があることが以下の牧師の語りによって理解できる。

「昔、子供時代と若い頃ね、自分が人を助けるように神様も私の家族を助けてくださればと考えながら、やってきた。私は留學生活を経験してきたから、留学生の辛さが分かる。彼らは年齢的にはまだ子供で、私の子供ぐらいの年だ。私の子供がもしこんな厳しい状況の中で生きているのならば、本当に心が痛む。それで、皆を自分の子供だとかう考えながら、なるべく、赤の他人として考えるのではなく、自分の娘または息子が今こんな酷い目に遭っているなら、私はどうすべきだろうか？そう考えてやってきた。また今娘がアメリカにいるから、私が留学生たちにやってあげたように、他の人々が娘を助けてくだされば、それで十分だという心を持ってきた」。

この牧師の話から、留学生の辛さをよく理解できるのは、牧師自身の経験と関係があり、留学生のことを自分の子供のように愛せるのは、牧師という聖職者であることより、彼らの痛みを肌で感じるJ先生の強い親心があるからであろう。

10.4.4 中国人の尊重

教会にいと、留学生たちが牧師夫婦に親のような愛を感じているだけでなく、中国人として尊重されていることも感じられる。その尊重は主に以下の3つの面に表れている。

一つは中国語で皆の名前を覚えていること。300人ぐらいの留学生がいる教会では、皆の名前を母語で覚えるのは難しいことだと思われるが、牧師はこれこそが一人の人間として他者への敬意を示す根幹になると思っている。二つ目は、中国の文化と習慣を尊重すること。中国人の留学生が教会に入ってきてから、毎年春節には留学生が餃子を作ったり、皆で中国の春節番組を見たりする。説教の時に牧師は愛国心の重要性を訴え、皆に自国の文化を誇りに思ってもらおうとしている。三つ目は留学生をあるがまま受け入れること。「朝鮮族の留学生は皆牧師と話をする時に、敬語を使って礼儀正しく接しているようだが、漢民族の留学生の中には礼儀を知らない子がいる。でも、牧師は嫌な顔一つしない（莉莉と小霊のインタビューより）。」牧師は自分の一人娘も特別扱いはしない。夏休みに帰国したら、必ずバイトをさせる。彼女は二階の礼拝堂で皆と一緒に寝ることもある。「娘は僕と同じように弱いから、皆そのまま受け入れてください」と牧師は言ったことがある。牧師自身も、普段皆と一緒に住み、食事したり、祈ったり、話したりしている。新入生が入るたびに、牧師は彼らと一緒に弁当を食べながら話をする。牧師のこの行動は彼が常にイエス様がどのような生き方をしてきたのかという自問と関わっていることが以下の牧師の話によって分かる。

「信者に説教だけをしていればいいというのが一般的な牧師の考え方だが、私はイエス様がどんな生き方をしていच्छゃったのかを考えた。つまりイエス様は弟子たちと共に歩み、食事しながら、また祈りながら、ずっと一緒に生活された。そして共にサラダを分けられたのだ。それが弟子への一つの導きだと思う。」

J 先生が皆を尊重しているのはそれこそがイエス様の生き方だと考えているからだけではなく、彼が留学生に感謝しているからでもある。

「現在、皆を自分の子供のように思っている。僕が寝ようとしている時、皆まだバイトをしていると思うと、心が痛くなる。彼らはあちらこちらで頑張っているのに、僕がどうして寝ていられるだろうかと思う。皆の祈祷の声を聞くと、僕は聖書を読む。君達がここ、僕の心にいるからだ。祝福の道が聖書にあることを僕はよく知っている。神様を感動させるために信仰をもって忠実に神様に奉仕している。神様がこの幸福を僕にくださったと信じている。たくさんの若者と一緒に礼拝できて、君たちの変化を見られて僕がどれほど感激したか皆には分からないかもしれない。しかし、僕にはたくさんの感謝がある。神様に感謝している。一部の人は献金したら、教会が変わっていくと思込込んでいる。しかし、僕が言いたいのはこれは金銭の問題ではなく、命の問題だということだ。僕と同じように、皆にめぐりあえる人はどれぐらいいるだろうか。本当に神様に感謝している。そして貴方達に感謝している。」

(ノート、2005/04/03・教会)

牧師は若者と一緒にいられることに感謝していると皆に語る。昔他の子供をたくさん助けたいと思っていたが、この夢が将来実現できるとは思っていなかった。そして、「自分はただ愛を教えただけなのに、彼らがこんな多くの事をしてくれるようになるとは思わなかった」と牧師は言う。韓国人はせっかちだから、恵みを受けたらすぐそのことを言いたがるが、本当かどうか分からない。中国人は反応が鈍い。よく考えているからかもしれないが、いつ恵みを受けたのか分からない。しかし、本当に受けると大きな反応を返してくれることがある（ノートの「牧師の発言」より）。この教会の繁栄を支えている中国人留学生の力を牧師は強く感じている。

「皆まだ子供だから、考え方が非常に単純で、自分にやさしい人の所に行く。牧師は皆を愛しているから、牧師の言うことに従うのも当然だと思う。」と暁静は言った。確かに彼女の言う通りに牧師が伝道しなさいと言ったら、皆は伝道しに行く、お祈りしなさいと言ったら、皆お祈りする。聖書の言葉もよく聞くし、牧師の言うように真面目にノートを取る。スリッパの片付けをしなさいと一回言われただけなのに、自主的に並べるようになる人もいる。クリスチャンである現代の若者はすでにあまりしなくなった断食祈禱や路傍伝道などを留学生達はやっている。これこそが中国人が持つ純粋さであり、牧師が惚れたところだろう。

インタビューの中で、牧師は他人のために涙を流しながら一生懸命祈禱したり、断食したりする留学生を見て感動したと話したことがある。彼らの努力によって、数多くの魂が救われた事実、自分の奨学金を献金して自分より貧しい留学生を助けようとしている留学生の行為、200 円の留学生（注：ある留学生のことだが、お金がなかったが、その時、持っていた 200 円を全て献金した。200 円をもらった牧師は一晩中泣いてしまった。）の有難い感謝の心から、牧師は若者を通して社会を変えることができ、また世界を変えることができるという自信を持てるようになった。この夢を与えてくれた若者に感謝の意を示すため、2007 年 10 月から、牧師は十分の一以外に、毎月奨学金献金をするようになった。牧師は変わったと皆がよく言う。これまでは、口数が少なかったが、冗談を言うようになり、皆と一緒に歌ったり、踊ったりして、子供のような純粋さを取り戻した。牧師自身も自分の変化を若者から生きる希望を感じたからだと解釈している。牧師が留学生に伝えきれないほどの感激を抱いているのは、彼らが生きがいを与えてくれたからだろう。

本節のまとめ

以上、4つの視点から教会の復興を理解した。牧師の強い責任感と使命感、留学生に対する理解と尊重、父親のような愛が重要なポイントとして浮かび上がってきた。記述分析の中で牧師自身の物語や考えといった牧師個人の経験知が語られ、その重要性も示されている。留学生との経験の共有によって相互理解が深められ、牧師は常に留学生の立場で物事を考えられることができ、彼らをうまく指導できるようになったと言えよう。

教会では、牧師夫婦のことを皆「牧師先生（師父）、師母（中国語では先生の奥さん）」と呼んでいる。中国には昔から「一日師となると、一生の父となるのと同じだ」と言い伝えられている。この「師父・師母」という言葉からも留学生達の牧師夫婦への尊敬と愛が感じられる。また四人の物語から分かるように、留学生の前に立っている牧師は、ただの聖職者の牧師の姿だけではなく、人を教える先生の姿、皆と話し合う友達の姿、皆に布団を被せたり美味しいものを食べさせたりする父母の姿とも重ねられている。皆が学びあい、愛し合う環境を整えるため、牧師は様々な勉強をしてきた。中国人留学生との間には言葉が通じないという壁もあったが、牧師は目や口や動作で一生懸命にその壁を乗り越えようとした。「なぜ私は牧師の娘になったのか。」と、一人娘が牧師に愚痴をこぼしたことがある。彼女は牧師が自分の娘より教会を愛し、教会の留学生を愛していると感じた。「愛は必ず通じる」という信念を持った牧師の愛情が皆に届いたように、教会では多くの小イエスが育てられ、牧師のように愛を広めている。このような小イエスたち（イエス様のような生き方をしようとしている若者）の支えが教会の復興を促進させた原動力であり、牧師にとっては欠かせないものなのだろう。

これまで教会の復興における牧師の努力を分析してきた。その努力を支えている神様の導きを理解するには【師母の夢】が貴重な資料として取り上げられなければならない。

【師母の夢】

少し前、教会はこんなに復興していなかったと牧師から聞いたことがある。韓国人と日本人と中国朝鮮族の人がいたが、数は少なかった。私たち（莉莉たち中国人留学生）が来た年（2003）は人が一番多い時期だったと思う。礼拝の時、牧師の話聞く人が牧師の足元まで座っているほどだった。ドアも閉められなくて、外の廊下まで立っている人がいた。今はその時の半分ぐらいだけど、それまでこんな多くの留学生がいたことがなかったから、牧師も驚いていた。教会の復興は2003年から。教会に長くいたから、師母はこのような話をしてくれた。

2003年3月のある朝、お祈りをする前の夢だった。起きなさい、起きなさいと夢の中である声が聞こえた師母は眠たいまま礼拝堂に入っていった。すると牧師が前列でわずかな人と一緒に祈りをしていた。師母も後ろに座って祈りをしていたら、礼拝堂のドアが開いた。ある光が入って来てそれからたくさんの人が入ってきた。皆日本語を話しているのではなく、ちょっとだけ日本語が交ざっているような話し方だった。牧師と師母は何が起こっているのかわからずずっと見ていた。皆涙を流しながら、教会がいっぱいになるまで入

ってきた。ドアが閉まると、皆祈りはじめた。その祈りのほとんどがどうしてこのような苦勞をしなければならないのかという文句ばかりだった。その時、ドアがまた急に開いて、このような祈禱をしている人が何かの力で外に連れ出されそうになった。(彼らは悔い改めるのを知らないからだ。) 外は真っ暗で地獄のようだった。牧師と師母はそれをみて泣いて泣いて何回もお願いをして、「神様、彼らの代わりに私を連れて行ってください」と祈禱した。しばらくすると、礼拝堂も落ち着きを取り戻した。皆牧師の伝道を真剣に聞くようになった。そして、ドアは再び閉ざされた。師母には「この子供用の部屋を直して、椅子を一番うしろまで並べてください」というもう一つの声が聞こえた。

朝 6 時ごろ起きた牧師は「はやく、はやく朝の祈禱の時間ですよ」と師母を起した。師母はまだ夢の中にいるように「朝の禱はもう終わったんじゃない?」と聞いた。すると牧師は「早く起きて、まだ寝たいの? 師母として模範にならないと」と師母を起こした。夢だったということはまだ実感できていなかったが、師母はいつも通りの祈禱に参加した。その年の4月頃から、教会は急ににぎやかになってきた。半年後、師母はその夢を牧師に話し、また「夢の中で若者を中に連れてきた人が一人一人の人間をすごく丁寧に席まで両手を腕にそえて案内しました」と牧師に言った。牧師は分かったと答えた。

(ノート・2006/03/14・莉莉との話し合い)

【師母の夢】に出てきた予言された教会の復興は教会の秘話として今でもわずかな人にしか知られていない。インタビューの中で秘められた神様の導きに関して牧師は説明しなかった。しかし、ドアから教会に入って来る人への実際の案内姿勢を見ても、一人も残さずに天国に行かせたいという牧師の緊迫感が感じられる。このような話から、牧師の言う神様の導きが、どのようなものであるかは理解し難いことではないだろう。

10.5 まとめ — 教会の居場所づくり

本章では、【システムの運営】、【学びの展開】、【壁を乗り越える工夫】、【指導者の参与】という4つの視点から、教会の学びを記述分析した。グループワークという形で行われる教会の学びでは、留学生の主体性を生かし、学びあう環境作りが重視されている。総合学習のような全体性のある活動を通して、個と個の学びを繋ぎ、留学生に意味がある体験をさせる。教会の学びは、学びあう場作りを中心に展開され、その目的は学び合うことで留学生達の生きる力を育てるところにある。生きる力とは、自ら学ぶ意欲と思考力、判断力、表現力などの能力のことであり、ここでは、「自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する能力」、「自らを律しつつ、他人と協調し、他人を思いやる心や感動する心など豊かな人間性、そしてたくましく生きるための健康と体力」を意味している。【学びの展開】で分析したように、(集まる)形式=(話し合う)手段・方法=(助け合う)目的という青年隊の基本構図によって、教会の学びが保障されていることが分かる。次に取り上げる【天国についての話】から教会作りという牧師の構想の原点を見出すことが出来る。

【天国についての話】

「最近、皆に天国はどんな感じなのかとよく聞かれる。僕は行ったことがないが、天国に行ったという韓国のある牧師の話聞いたことがある。彼は病気で一時的に息が止まった瞬間、天国と地獄に行ったそうだ。彼の話によると、先に行ったのは地獄だったが、私たちの想像する残酷な所ではなかった。皆平和に暮らしているようだった。ただし、皆テーブルを囲んで食事をする時、不思議なことにどんなに時間をかけてもなにも食べられなかったそうだ。なぜかという、お皿が深いから、スプーンを使わないといけぬ。皆それぞれ自分のスプーンで食事を取るが、1メートルのスプーンは長すぎて、なかなか食べ物を口に運ぶことができないようだった。その後、彼は天国に行った。そこもちょうど食事の時間だった。そこでも同じように長いスプーンを使っていたが、幸せそうに食べていた。よく見たら、彼らは二人ペアでお互いに食べさせ合っているのだ。あなたに一口、私も一口、ゆっくり食事を楽しんでいたそうだ」

(ノート・2005/11/13・礼拝の時)

上述の「天国と地獄」に関する牧師の話では、自分のことだけ考えている地獄の人々と違い、皆協力しながら共に生きていくという天国の光景が鮮明に描写されている。この話は教会という居場所作りに関する牧師の考えの出発点となったのではないだろうか。

学びの場という視点から教会の居場所作りを考える時、学びと教えの分裂を乗り越えるには、【家の雰囲気】【社会の繋がり】【行為の監督力】【遊びの場の保障】この4つの工夫が、最も大きな特徴となっている。生活知と学問知を繋ぐ教育の働きによって、学びが広がり、留学生のこれまでの経験を生かして生きる力あるいは未来を創る力が育てられる。

ここでは、学びという概念を佐藤（1995 b）を参考にし、その特徴を以下のようにまとめる。まず、〈学び〉は子供一人一人の個体的な意味体験である。ある対象を自分なりに意味付け、自分のものにするのである。この「意味づけ」は、表象(representation)、つまり現実を再現すること(re-present)ではない。意味付けは、何らかの感動を自分なりの作品に昇華させるように、新奇なものを自分に馴染みのものになぞらえる（喩化する）ことによって身近なものにするのである。こうして自分のものになった経験、つまり意味（比喩）は互いに結びつき、沈殿し、世界像を構成する。この世界像とは「世界とはこういうものだ」という世界についてのイメージであり、私たちを根本的に安心させてくれるものである。

第二の特徴として、〈学び〉は言説実践である。音声であれ書記であれ、言語というものは、体験の体験、経験の経験を可能にするただ1つのメディアである。人は言語によってのみ、体験・経験を対象化（反省）することができる。そして、この対象化はそのまま自己関係の形成であり、自己の再構築につながる。つまり、経験する自己とその経験する自己を反省する自己とのダイアログ（対話＝弁証）が生まれ、人はこのダイアログを介して、ものごとを選択する。ちなみに、ここでいう自己関係とは自己/他者の関係を内面化したものである。

最後に〈学び〉は他者とのコミュニケーションである。自由に討論し、その中で他者に触発され、自分を深めることである。誤解のないように言えば、「コミュニケーション」というものは、対称的な二者以上の当事者間で即興的に営まれるものであるから、原理的にダイアログであり、モノログではない。ダイアログは、異質な言説をそれぞれ許容しつつ、その豊潤化に向かう言説実践であり、定型化＝正常化＝神話化された言説（正しい唯一の答え）に、様々な言説をからめとることではない。〈学び〉の第三の特徴は、このダイアログとしてのコミュニケーションである。したがって、どれほど活発に意見交換が行われている場合もそれがモノログ―他者の自己属領化―であれば、それはコミュニケーションではない。つまり、〈学び〉とは言えないのである。

これらの3つの側面は、相互に依存しあっている。私たちは、対象を自分なりに豊かに意味づけることができなければ、自分の内面世界を豊かにすることはできない。また他者とのコミュニケーションをまともに営むこともできない。そして、対象を豊かに意味づけられるかどうかは、その人の内面的な豊かさ次第で、また、他者との関係の豊かさ次第で決まることである。つまり〈学び〉とは、世界形成（意味付け）、実存形成（自分づくり）、社会形成（仲間づくり）―この3つの活動が相互に依存しあう言説実践である（佐藤 1995 b）。教会の特徴は、このような〈学び〉の環境が教会という居場所によって保障され、補足されているところにあるのであろう。

教会は「家の雰囲気、社会の繋がり、監督力、遊びの場」というような留学による環境の損失を補完し、異文化適応の掛け橋という役割をも果たしている。若者を主体的に教会に関わらせるため、教会のシステムには、以下の3つのことが積極的に取り入れられている。

- （1）留学生の趣味を生かすこと

(2) 留学生によって新人を育てること

(3) 留学生に教会運営に参加させること

教会の復興には、留学生達の力が不可欠だが、指導者の牧師先生の役割も重要で無視できない。「指導者の参与」では、若者を社会の主体としてとらえ、いつも若者の立場に立って物事を考えることが、教会がうまく導かれる理由だということが明らかになった。牧師は若者をありのままに受け入れ、皆にそれぞれの国の文化の尊重することを提唱している。留学生を助けるために一生懸命な牧師のことを理解するには、牧師という体験以外に、彼の韓国での経済成長期の体験、一人の留学生として、また、一人娘の父親としての体験が見落とせない。自分の学びの質は旬員にも影響を及ぼすという意識が強い牧師は、常に若者と話しながら、様々なことを学んでいる。教会という留学生の居場所を作るため、指導者としての牧師の関わりは以下のようにまとめられる。

(1) 居場所空間を運営する

A 教会において多様な他者とのコミュニケーションの機会を設ける

B 関係の場としてのグループ運営に関わる

(2) 居場所を社会システムの中に位置づける

A 社会参加の機会としてのグループ体験をさせる

B 若者と社会をつなぎ、(つなぎ直し)、若者の社会への参加を進める

このような考えのもとに教会の実践が行なわれている。教会づくりに参画しようとする留学生の主体性を育む取り組みでは、伝道も時間を掛けて積極的に取り込まれている。教会を舞台に、周囲の人と関わりながら身近で現実的な課題に取り組む経験を積み重ねている。そうすることで、段階的に「自分に対する自信」と「教会作りの主体者としての自覚」が高まり「主体的に教会作りに参画しよう」という意欲が生まれるのである。

①留学生の課題を探る様々な活動 ②伝道による留学生がいる様々な日本語学校や専門学校への訪問による訪問先での人との交流による直接的、体験的な活動 ③そして牧師から旬長たちへの直接的な提案 ④その反省会で参加者や新入生からの評価など、これらの経験や学びのプロセスを経て、留学生は教会で生きていく「意味ある空間」を体感し、協同性を獲得していく。

こうした実践は、牧師が学びのデザイナーであり、学びのコーディネーターであることを提示する。さらに牧師の留学生への新たな発見とまなざしが子供との協同の学びを広げ、学びを変革していく。留学生も牧師も「学ぶ」と「生きる」ことの統合を深めていくプロセスが学校改革とコミュニティの再生にヒントを与えてくれているのではないだろうか。

第11章 結び— 物語・他者・学び

旅とは、境界を定め直すことではないだろうか。旅をしている私は、現実には一つの場所から別の場所へ動いて、地図に書かれた「皆が通る普通の道」を辿っているにすぎないのだが、もう一方では、境界それ自体を崩してしまうさすらいの旅に船出したことになる。旅は、故国と外国を——生まれ育った文化と新しい文化を——もっと生産的な言葉を使えば、こちらとあちらを、それに別のどこかを、不断に折り合わす作業にほかならない。

(トリン、T. ミンハ、1996)

いつの時代にも旅は存在し、旅と共に、旅の中で人は生きてきた。そこでは、異なった物語を持つ様々な人々が出会いを繰り返してきた。自らの物語の上に他者の物語が重なり混交していく過程は、様々な境界が越えられていく過程であり、人生の物語が生成されていく過程でもある。“物語”という言葉に定義するのは難しいが、私はここで児童文学評論家の清水真砂子の考え⁴²⁾を借りて“物語”を問いに対する答えと考える。もう少し広く、期待まで含めて、それぞれのこの世界の捉え方、ととってもいい。混沌から自分は世界をどう捉えているのか、それを広く“物語”と考える。したがって、ここでいう“物語”は文学の一形態にとどまらない。

1. 物語との出会い

中国からの新世代留学生が日本語学校で60%を占めている。数が増える一方、年齢は年々若くなってきている。彼らは子供でもない、大人でもない時期に日本留学の旅に出る。この異文化適応の旅とは、彼らにとっては自己探しの旅であり、自己実現の旅でもある。

かつて筆者の修士論文の中に取り上げた新世代の物語では、「ただ立っている男の子」⁴³⁾のような物語のない時期を無意味と対峙しつつ生きなければならない留学生たちの置かれた状況の苛酷さを思い知らされることになった。彼らは母国の壮大な物語に染められ、不可能はないと意気になっている。しかし、手にした自由と、望んだ自由にはギャップがある。

⁴²⁾ 清水真砂子は物語を問いに対する答えと考える。バフチンは「問いに対する答え、それを意味」と言った。ベンヤミンは“小説”との対比で、“物語”は意味と不可分であると書いている。河合隼雄は「不思議を心におさめるために物語がある。」と言った。彼女の“物語観”はこうした人々の考え方と自分自身の日々の思考に支えられているという。

⁴³⁾ 「彼の学校はうちのむこう（近く）だから、私は毎日授業中、彼が見える。彼は道端に立っている。何もしていないずっと立っている。学校は『掛羊肉売狗肉』(これは中国で、羊の看板で犬肉を売するという意味)、面白くない、先生はやさしい、(欠席しても)出席をつけてくれるから、って、勉強がいやになってきた。(Mo)」(範・2005: 84)

旅先は孤独と苦痛に満ちている。彼らは【消極的な反抗】と【積極的な戦い】(範, 2004)を通して、自分の「居」場所を求めた。しかし、彼らがいる日本語学校という決められた居場所は空洞のままで問いに対する答えを持っていない。

若者として意味がほしい。だが、彼らのこの問いかけに世界はがらんとした空洞のままで、答えは返ってこない。こうした答えのない状態が続くと、問いを発したほうは、そのうち、問いなど自分は発しなかったのではないかと不安になり、さらには自分自身の存在そのものを疑いだす。自分というものが本当にあるのか、ないのか。それを確かめたくて、人を殺したり、自らの身体を傷付けたりし始める。

かつて、精神科医の島崎敏樹は、生きがいとは「居がい」と「行きがい」との両方が満たされていることであると説いた。自分の居る場所がはっきりしていること、つまり自分の存在を意味づける所在があるということと、これから進むべき方向としての「目標」なり「目的」があるということの大切さを述べたものである。抽象的な言い方をすると、人間の存在感を確認する手がかりを、空間と時間という軸にそって明確にしたものであると言える。

彼らには夢がなくなった。理想の消滅が現実感の喪失に繋がる。理想とは世界をどう構築したいか、自分の人生をどのように歩みたいか、他者との関係を自分はどう作っていきたいかという人間の思いであり、期待である(里見他, 2003)。この理想がないと人の現実感覚は薄れていく。人は無意味に耐えられないのである。

これまで留学生への支援にはお金が重要だと訴える研究が多かった。しかし、彼らの状況は決してお金の問題ではない。お金があれば解決できる問題ではない(範, 2004)。彼らは孤独のゆえに、連帯感を求め、居場所を求めているのだ。

人間は「共同体」なしには生きられない。このことを明確に根拠づけたのは、ジョルジュ・バタイユである。「おのおのの存在性の根底には、不充足の原理がある。(バタイユ, 1970 : 189)」。ブランショも言うように、この原理としての欠如は補完の必要性を伴わない(ブランショ, 1997 : 18)。「原理」である以上、「それがひとりの存在者の可能性を統御し秩序づけるもの」となる。

孤独からの脱出は、物語と他者と出会うことからしか始まらないのだ。本研究のフィールドで、新世代の留学生は教会の人々との出会い、そして、牧師との出会いによって、混乱から脱し、K教会を舞台として大きな成長及び変化を見せてくれている。自分の将来を悲観的に感じた彼らは、そこで、【出口なし】の状況を打破し、自己のアイデンティティを確立させ、生き方・あり方を考える展開となっている。

2. 物語 = 「his story」 = 「History」とは

窓が一つもないと、息が苦しくなるが、窓を何個か開けたら、光や新鮮な空気も入ってくると牧師は言った。神様との出会いを物語った彼らのストーリーは、教会という居場所

を得ることによって自らのアイデンティティを形成するプロセスそのものだと言える。一つのストーリーとして辿り着くまでの要素をここで振り返ってみよう。

2005年の母の日、青年2隊の隊長は自慢げに隊員たちの作品を紹介してくれた。3階の掲示板に貼ってある三枚の絵だった。全部イエス様を描いた絵だが、顔の輪郭が皆ぼんやりとしている。腹や心のところに書かれた大きな文字が特徴となっている。一つの絵には「愛」、もう一つの絵は「真理」、そして、三つ目の絵には赤いハートマークの中に「義」が書かれていた。

K教会では、「History」＝聖書の言葉＝「his story」という言い伝えがある。ここの「His」は“イエス様の”という意味である。つまり、イエス様のストーリーは歴史であり、真理そのものであるとキリスト教では捉えられている。人は真理を知ろうと欲する。というのは、真理が未知の強力な世界の中で、自分に方向をあたえるもっとも安全な道であるからだ（フロム, 2005: 272）。したがって、「his story」との出会いが真理との出会いだと考えると、生きることとは大きな意味をもたらすものであると牧師は信じる。これが、牧師が若者に御言葉を覚えてもらおうと一生懸命に努力している所以だろう。

本研究で取り上げた暁静の物語では、他者によって壊された自己が、他者を通して再構築される彼女の成長過程が示されている。絶望から様々な困難を乗り越え、立ちあがってきた彼女の精神的な成長から、その鏡となった聖書の力の重要性が明らかになった。人間が自分の中にある暗い面を直視し、その暗さが自分自身に他ならないことに気づくということは、真の自己を実現するために通過しなければならない一つの段階である。宗教はこの人間の個性化⁴⁴⁾つまり完全な自己実現というプロセスにおいて、完成された自己についての具体的なイメージを与えてくれる点に意味があると思われる。この完成された自己の姿とは、キリスト教文化圏では三位一体やキリストのことを指している。

青年期は1つの過渡期であり、同時に1つの危機である。この自我確立をするためにゆるされたところのモラトリアムの時期では、アイデンティティの危機に陥りやすい。エリクソン(Erikson, 1965)は、アイデンティティの危機に陥った者の葛藤について、社会的プロトタイプが問題になっていることを示している。この社会的プロトタイプとは、エリクソンによれば、ある社会の中での善悪の基準である。つまり、何が理想で何が悪かを示すものである。これを「心理社会的価値観」(小沢, 2003)と言い換えれば、「社会の中で人生

44) ユングの心のモデル:「意識／個人的無意識／集合的無意識」。

人間は人生の中で心の全体性を自分の個性として実現するという課題を課せられているのである。それは、真に個性的な自己、真の自己を実現する、つまり真の自分になるという課題にほかならない(＝自己実現のプロセスとしての個性化)。この課題は、ユングのモデルに従えば、次の2つのポイントを有することになる。第一のポイントは、自我の確立である。これは、少年期から青年期への移行において典型的に生じるものであり、例えば、母親からの少年の自立(親離れ)として問題化する。しかし、親離れして自立した自我を確立しただけでは、十分な個性化は達成できない。次のポイントは、自我意識と無意識との統合によって、全体的な自己を実現することであり、これは青年期を遥かに越えて継続される精神的成長のプロセスとなる。個性化(自我・意識と無意識の領域が統合され、完全な全体としての自己が完成していくプロセス)との関わりにおいて見るとき、宗教の意義の1つは、宗教が目指すべき個性化の目標、つまり完成された自己についての具体的なイメージを伝承することによって、人間の個性化を助けるという点に認められる(芦名ほか, 2004)。

の道のりを歩んでいる自分に何をしてどう生きていいか？」という方針、指針、方向性を示すものであると言える（小沢, 2004）。

人間は本来好奇心が強く、真・善・美を追求するものである。したがって宗教の神秘さ、聖書に描かれた西欧文化の広大さ、物語の新鮮さ、言葉の知恵に魅かれる人が多い。暁静のように信仰を持つことが自分の個性的な消費だという意識を持つ若者もいる。正しい人生の道を知った小椿、“快樂の標杆”（楽しさの基準・参考資料③を参照されたい）を見つけた暁静、自己救済の手がかりを掴んだ文珍、皆それぞれ、イエス様の物語から答えを得た。人は言葉の力によって生かされる。神様を成功への道具だと思った解放も、「生きがいはなんですか」と積極的に考えるようになり、将来成功者になったら、貧乏な人を助けようとまで考えた。

私は解放のことを考えると、彼の天国への憧れをよく思い出す。「お姉ちゃん、みんな天国で今のように人生を話し合ったりして生活を楽しんでいると最近をよく思う。みんな天国で集まったら、どれほどうれしいことだろう」と解放は話してくれたことがある。天国が彼にとってこれほど近くて楽しい存在なのだと、嬉しそうに話す彼の表情を見た私は当時少し驚いた。

宗教は起点及び終点を示すことで個人の生きる意味を提示する（小沢, 2003）。キリスト教はこの「天国への憧れ」を与えることで、人間の居場所の問いに答えを出している。このように、キリスト教は、悪と善をはっきり区別することと、終点を指定することによって、人に人生の方向を与えようとしている。これは思春期にある若者の成長により助けになると思われる。しかし、天国の存在を信じることは、天国との間の繋がりを実感しないと生じにくいのだ。そこで、教会の内在を豊かにするために、牧師は留学生たちが学びあうことによって繋がりを作りだせると考えたのだろう。

3. 「学ぶ」とは「他者と出会う」こと

大きな物語であれ、小さな物語であれ、たぐりよせられた物語は一時的にその人間を生かしたとしても、人が生きて、一瞬たりとも一所にとどまらない以上、本人は意識しようかしまいが、やがてその人間を縛り始める（里見他, 2003）。このとき、その物語を破るのは他者である。他者は必ずしも私たちの外部にのみ存在するわけではない。内側にも他者はおろ、それは様々な違和感となって、立ち現れる（佐藤, 1995 a）。学ぶということはこの他者と出会うことであり、他者を自らのそばに、あるいは内に置き続けることであろう。

【自分を変えたい】これはほとんどの留学生の入信動機だった。自己は他者を通して形成される。人が自分を変えようとする場合、変ろうとする自分を映し出す鏡としての親密な人々、重要な他者の存在が不可欠である（Berger, 1967）。フィールドの記述から分かるように、教会は多様な他者と物語を提供してくれている。教会という集団は、食事・学習を共にする事、悩みや問題の共有などの精神的な支え合いなど、一般的に「家族」と呼ばれる共同体に期待されている性格を備えている。教会では、父母とされている J 牧師夫婦、お互いに兄弟姉妹と呼ぶ留学生たちがこの共同体を形成・維持してゆくにあたって「家

族」という共同体像をその支柱に据えている。その強い紐帯が教会に安定感を与えるための大きな力となったと留学生たちは捉えている。

かつて青年隊の隊長であった愛子は、旬員の「神様は本当に存在していますか」という問いに次のように答えた。

「神様は存在しているよ。あなたに願いがあったら、神様に願ってみてください。みんなの助けで実現できたら、それは神様の存在だと思って、感謝しなさい。」

願いが「皆の助けで実現できたら」という彼女の話から、教会にいる留学生の皆が非常に重要な存在だということがわかる。ルーマン（1990）によれば、信頼⁴⁵⁾には人格的な信頼とシステムへの信頼の二種がある。人格的信頼は、親しい間柄での情緒的な相互浸透、つまり「わかりあい」を軸として、自己の感情的な体験を相手がまるごと受容してくれることを保障するようなコミュニケーションの形態を取る。4人の物語及び教会の学びの記述分析から分かるように、留学生達が神様を信頼できるのは、教会の人々への人格的信頼関係と教会システムへの信頼がその土台となっている。そして、その教会システムへの信頼は教会の人々への人格的な信頼に頼っている。

【言葉の力】（「10.3.3 壁を乗り越える工夫」より）で分析したように、教会では自己保護・自己救済のネットワークの存在が極めて重要であるということが明らかである。この信頼できるネットワークの形成は、信頼できる牧師と先輩達の存在がいなければ成り立たない。旬長と旬員の関係作りは留学生の仲間発見のきっかけとなり、そこから他人との連帯感が生じるようになる。ここから、なぜ彼らは神様の子になったのかという筆者の疑問の答えとなる鍵が見出せる。一言で言えば、神様の愛は空洞の文字ではなく、牧師J先生から、また数多くの小イエスから、伝承され、旬員の心に届いたのだと言える。つまり、愛の力によって留学生は神様との人格的な信頼関係を築き上げたということであろう。またこの愛という共同の認識が出来たことで教会にいる留学生間の連帯感が強くなり、教会のシステムへの信頼性も高められた。

旬長たちはイエス様の愛は犠牲的な愛だと旬員によく言い聞かせ、旬員に両親の愛を考えさせることによってこの愛への理解を求める。新世代留学生の養育環境を考えると、なぜ彼らが神様の子になったのかという問いの答えにもう1つの要素が浮かび上がってくる。一人っ子であるイエスは苦難に満ちた人生に義を尽くした。このストーリーの中のイエスが、なんにでも犠牲を払ってきた新世代の両親の縮図であり、留学の旅に出た留学生自身の姿の生き写しでもあるからこそ、留学生は神様であるイエス様をより近くにいる人間と

45) 信頼とは、「自己が抱いている諸々（他者や社会へ）の期待を（自己）があてにすること」であり、膨大な行為可能性の複雑性を縮減するものにほかならないという論に依拠している（ルーマン、1990：1）。システム信頼は、相手の個人的人格や属性とは無関係に、期待どおりに行動することを信頼するもので、社会的役割に対する制度的信頼とも言える（ルーマン、1990）。

して思えるようになったのだ。つまり、彼らが両親から愛をたっぷり受けてきたことで、この犠牲的な愛を理解でき、その存在を信じるようになったと考えられる。

このように、イエス様への連帯感の確立によって、留学生は自分の自己像がはっきり確立でき、教会への連帯感の確立もできるようになったと言える。アイデンティティの確立には、一方で社会的に承認されうる自己像の確立と、他方では集団への連帯感の確立が不可欠であり、両者が有機的に結合されなければならない。ここでは、留学生の身近かなモデルである先輩たちとJ牧師先生が、重要な他者として彼ら自身の変容を促進する役割を果たしている。

4. 物語と出会う・こわす・つむぐ

人間は本質的には自己愛に執着しているものだ（ルソー）。「彼らはなぜ他人のために祈れると思いますか」という最初のインタビューでの立博の反問から、新世代の留学生の大きな変化がうかがえる。彼らの意識は愛は受けるものだという考えから、愛を自分の行動で実践するものだと思えるまでに転換したのだ。

宗教的な隠喩は、人間存在のあり方の変革と結びつくことによって、回心（自己の転換）における決定的な役割を果たすことになるという救済の機能がある（芦名他・2004）。キリスト教における「神の国」⁴⁶⁾の存在を実感した人間は、世界をこれまでとは別の方法で見るようになるだけでなく、まさに別の方法で行動する存在へと変革せざるを得ない—あなたも同じように他者の隣人として生きよ—。こうして、神様の愛を信じること及び隣人を愛することという動的な関係から信仰が生まれ、この愛を自分の行動に移すことによって神様の子という実感が得られるのだという。

2007年4月の時点で教会の留学生の伝道は既に関西の日本語学校と専門学校23校にまで広がり、そのほとんどが含まれる。準備部の幹部達は教会のネットワークを利用して、事前に新入生の到着の日にちや場所を把握する。新入生が来日する当日に必ず教会のメンバーが迎えに行く。「新学期になると、彼らはずっと先生より早めに来て、学校の前で新入生を待っている。止められないよ。止めようとしたら、先生は彼らに地獄に落ちてほしくないでしようと言われる。しかたないな。」とある日本語学校の先生は言った。

愛はさえぎれないものだ。暁静のように、この伝道をクリスチャンとしての使命に感じるだけではなく、「自分の祖国への一つの貢献」だと思っている留学生も多い。2007年10月に教会では「解煩公司」（悩みを解ける会社）が設立され、東京に進学する留学生の一人が社長に任命され、東京に派遣された。東京の留学生を中心に彼らの悩みを聞き、実生活

⁴⁶⁾ 芦名定道他（2004）によると、神の国の到来に基づいたイエスの宗教運動は、その特徴を「罪人に開かれた食卓」（開かれた共食）に見出すことができ、イエスにおける「神の国」を、この「この開かれた食卓」によってイメージすることはきめて適切だと言えよう。「神の国」は既存の義人と罪人の二分法を批判的に相対化し、新しい現実をありありと描くことを可能にしているのであって、この意味で、「神の国」の実現はイエスの宗教運動において、新しい実在性を帯びて到来したのである。

の手伝いをするのがその目的だ。留学生は自分の経験から新入生の心の危機を意識し、彼らを救うために自分の時間も金銭も惜しまず精を尽くしている。他人のためになにかをするこの彼らの生き方が生きがいそのものの写しであり、彼らの成長の証とも言えよう。

このように、教会と出会うことによって、留学生は苦悩のはけ口を与えられる。かつ親身に迎え入れられることによって、集団への帰属感を獲得し、次いで、苦悩に新しい意味づけが与えられる。さらに、集団の全体的な価値体系を受容し、主体的な実践者となることによって、「救い」だけでなく、「生きがい」をも与えられるのだ。この生きがいを持つことこそ、彼らの居場所の確立へとつながり、アイデンティティの確立となっていると言える。

新入生向けの伝道熱は、新世代留学生の心の危機の深さそのものを反映するだけではなく、その解決策をも示している。それは自由を管理するには秩序が必要だということだ。この教会の留学生の認識が以下の【鉛筆の原則】という彼らが好きな文章で、分かりやすく説明されている。

【鉛筆の原則】

鉛筆は箱に入れられて運ばれようとする。製造者は非常に心配して彼を隣に連れてこのように言った。「この世に出る前に、あなたに話したいことがある。この言葉を覚えて、君は最高の鉛筆になる」。

1. 君は将来きっと大きなことができる。しかし、ひとつの前提として、君は盲目的に自由にならないように一つの手に握られるままに従わなければならない。
2. 刃に削られるような痛みが常に感じられるだろうが、この痛みは必要なもので、君がよりよい鉛筆になるためである。
3. 固執しすぎないように自分の犯した間違いを認め、勇敢に直すこと。
4. 行くところであればどこにでも、消すことのできない痕跡を残さなければならない。どのような状態に置かれても、書き続けていくこと。覚えておくことだが、生活には永遠に無意味なことはない。

(『草原』・5期 筆者翻訳・参考資料⑱を参照されたい)

全ての青年が自分の立場に正当性を与えてくれるイデオロギーに執着する。集団のイデオロギーは、青年の価値の混乱を防止することによって、アイデンティティの確立を助けるだけではなく、若者の行動の目標と方法及びその理論づけまで与えてくれる(濱島, 1973)。したがって、犠牲的な愛が真の愛だと思われるように、この制限のある自由は自由だという認識が、彼らに自己管理の方向を与え、厳しい信仰生活に従う重要な理由だと考えさせるようになるだろう。

しかし、単にキリスト教に依存と従属するだけで自由になれるというなら、たくさんの教会を作れば、それで問題を解決できるのではないかという素朴な疑問が浮上してくる。

たしかに、宗教は社会とそこにおける多様な文化的営みとが依拠する秩序を根拠づけるという機能（芦名ほか, 2004）を持つため、留学生の異文化適応にも積極的な役割を果たしていることはだれも否定しないであろう。しかし、伝統的な宗教が危機に直面している今日、議論が単に教会を作るところだけで終わると、あざ笑われることになるだろう。

「共同体はそれ自身の内在性が成立せず、主体としてそこに属することができないという、そうした不可能を引き受けているのである。共同体はなんらかの形で共同体の不可能を刻み付け自らそれを担っている。共同体は融合の企てでもなければ、一般的にいつて生産のためのあるいは活動のための企てでもない—むしろ企てといわれるものではありえない。」（ナンシー、1985：47）

共同体はそれ自身の内在性が成立せず、主体としてそこに属することができない（ナンシー、1985）。キリスト教教会が数多くある大阪で、多くの留学生はあえてK教会に集まってくる。重要な他者の存在が当然その理由の一つであるが、それ以外に、教会の活動がこの共同体の内在性を豊かにしている点が一要因ではないかと考えられる。皆がよりよく学び合えるように、教会のシステムは絶えず変更され、改善されてきた。部属活動、運動会、修練会、クリスマスパーティーなどの活動では、皆の自発的な参加が見られる。この自発的な活動によって教会自体も変わってきた。

自発的な活動⁴⁷⁾が自由の問題に対する答えとなるとエーリッヒ・フロム（2005）は指摘している。フロムによると個人が独立した自我として存在しながら、しかも孤独ではなく、世界や他者や自然と結びあっているような、積極的な自由の状態が、自我を実現し、自分自身であることを獲得できる。自己の実現はたんに思考の行為によってばかりでなく、人間のパーソナリティ全体の実現、かれの感情的知的な諸能力の積極的な表現によって遂げられる。これらの能力はだれにでもそなわっているが、それらは表現されてはじめて現実のものとなる。積極的な自由は全統一的なパーソナリティの自発的な行為のうちに存す

47) 『自由からの逃走』(原作 1941)の著者であるエーリッヒ・フロムは自由の意味を巡って近代人の性格構造を分析した。彼は近代人に対する自由の二面性を論じたとき、現代においても、個人の孤独と無力を増大させている経済的諸条件を指摘した。すなわちその心理的結果を論じることで、その無力は権威主義的性格に見られる一種の逃避を導くか、あるいは孤独となった個人が自動人間となり、自我を失いつつも、しかも同時に意識的には自分は自由であり、自分にのみ従属していると考えられるような強迫的な画一性に導くことを示した。フロムによると、自発的な活動は、自我の自由な活動であり、心理的には *sponte* というラテン語の語源の文字通りの意味、すなわち自らの自由意志ということの意味する。われわれは活動ということ、「なにかをなすこと」とは考えず、人間の感情的、知的、感覚的な諸経験のうちに、また同じように人間の意志のうちに、働くことのできる創造的な活動と考える。自発的な活動は、人間が自我の統一を犠牲にすることなしに、孤独の恐怖を克服する一つの道であり、積極的な自由は自発的な活動によって実現できる。というのは、ひとの自我の自発的な実現において、かれ自身を新しく外界に—人間、自然、自分自身に—結びつけるからだ」とフロムは述べた。

る。このような自発性を構成するもっとも大切な要素は愛であるとフロムは強調している。その愛とは相手を自発的に肯定し、個人的自我の確保のうえに立って、個人を他者と結びつけるような愛であるという。

K教会では、この愛が我が家のような温かい雰囲気作りによって生み出され、様々な活動に積極的に参加することで、留学生の主体性が発揮される。自発的な活動によってこの積極的な自由が実現できるという意味で、共同体の内在性につながり、留学生の教会に来る道を作ったのだろう。つまり、教会では自発的に活動できるということが若者の自己実現につながり、彼らに自由を与えた。それゆえ、信仰があるかないかにかかわらず、皆居心地よくいられるのだろう。

本研究では、筆者の知識不足で宗教の視点から教会という共同体の分析記述を深く探ることができなかった。しかし、キリスト教が青春期にある若者たちの自己形成に意義のある影響を与えていることは確かである。ただし、教会でも、一つの共同体として、内在性が成立しなければ、主体的にそこに属することができない。K教会では、重要な他者との出会い及び学びの実現（つまり自発的な活動が実現できること）が愛によって結びつけられていることでこのような共同体の形成を可能にしたのであろう。

まとめ

2006年4月末の礼拝日の聖歌隊の練習が始まる前も、青年隊の学習でも、隊長の愛子は次のような話をした。「淡路島の美術館を見学することをお勧めします。そこに行ったら、古代から現代までの歴史が全部見られます。現代の絵になると、線がいっぱいごちゃごちゃして絵にならないように見えるが、それが現代の人の混乱した精神を表しているから、それを見たら、きっと色々なことを考えるようになると思います」。その夜、愛子は献身の証をし、献身しようと言明した。（献身：人生を神様にささげること。つまり一生聖職者として働くこと。人生の決断力が要る選択。（参考資料⑱「献身の証」を参照されたい）

学ぶとは他者に出会うことであろう、と書いたが、この「他者はもちろん人間だけに限らない。社会の様々な制度（これも人間の作り出した物語の一つと取れる）もあるだろうし、自然界の様々な現象もあろう。それらとどう出会い、どう切り結んでいくか。学ぶということはいつか私の中では、そのまま生きることと重なってきている」（里見他, 2003）。

愛子にすすめられ、淡路島の美術館（ロンドンのテイト・モダン美術館の展示会）に出向いた。ここでは既成の物語がいたるところで壊され、作家たちの挑んだ新しい物語が私たちが縛られている鎖を解き、私たちの生きる地平をはるか遠くまで広げてくれる。スタンレー・スペンサーの描くアッシジの聖フランチェスコは、俗と離れてひとり静かに小鳥と語らう、やせた清貧そのものといった僧なんかではない。ここに来たら、若い人たちのちっぽけな自己意識などふっとんでしまう、と私は思った。もちろん、テイト・モダンでなくたっていい。まずはたくさんの豊かな他者に出会う機会を若者たちに提供すること。それを

今、課題の一つに据えたいと思う。

物語は異文化間のコミュニケーションという機能を持ち、世代を超えて伝承できるという教育の意味もある（やまだ, 2000）。本研究の若者の物語では、激動する社会環境を背景とした青年たちの危機が描かれ、心の危機を克服するには他者の存在が極めて重要だということが明らかになった。「人は自分が目にしているものになる」（ウィリアム・ブレイク）。歴史と社会は私たちの鏡であると同時に、私たちの物語もまた、歴史の流れを映す一つの鏡となる。価値観が多様に呈現され、多元化した現代社会では、「ヨーロッパにおける信仰の蠟燭が老人の涙のように消え」（Q大学の教授の話）ようとしている。しかし、たくさんの若者がK教会に集まっている。そこで、彼らはなぜ神様の子になったのかを考えた本研究はまた他者として、一つの窓として私達が認識した世界を広げていくことだろう。このことこそ、筆者である私がこの研究をする意義であり、願いでもある。

第12章 提言

——日本語学校の学びの再生を考える

本研究で取り上げたK教会というフィールドでは、様々な葛藤に直面した新世代の中国人留学生が困難を乗り越え、自分の生きがいまで見つけたという物語が繰り返されている。暗い時期から立ち上がった彼らの精神的な成長にとって、家のようなかけがえのない教会という居場所の重要性が明らかになった。本章では、多くの問題が絡み合っている日本語教育の現場において、留学生の居場所作りの改善策を探ることにする。教会の居場所作りから得られたヒントを踏まえ、1. 日本語学校の学習概念を転換する、2. 学校という空間を生かす、3. 教育的関係の再構築の可能性を探る、4. 教師の学びの質を高めるという4つの面から、留学生と日頃向き合う空間をどのように生かして居場所が作り上げられるのかを検討する。

1. 学習観念を転換しよう

習熟主義的な学習観は、場から切り離された個人の機械的な行為として学習を捉えるため、他者との出会いの場としての学校の意義を原理的に否定している。K教会で牧師J先生は留学生に『聖書』を教えるだけでなく、教会という他者との出会いの場を生かし、システムを構築して、皆の学びあう環境を作り出すことに努力した。学びを生かすことによって学びと学びを繋げ、教会自体も変わってきた。したがって、教会の学びから、まず一つ学べることは日本語学校の学習概念の転換にあるのではないかと考える。ここで学校ならではの役割として、学びと学びをつなぎ、学び合いを組織することの重要性を挙げたい。

教会の留学生を見れば、彼らの「学ぶ喜び」の中には、他者とともに学ぶ喜び、他者との関係を作りながら、ともに何かを獲得し創造し共有することの楽しさが確実に含まれている。したがって、そうした共同的な学びを構築する「場」として、学校は存在しなければならないと筆者は考える。関わり合いは、学びと学び取る力のインキュベーターである。様々な若者たちが関わり合う場と機会を大切に、多様な学び方、豊かな学び取る力を育てる姿勢の中でこそ、学び合いは実現していくのであろう。

留学生は、何も経験したことのない白紙の存在として教師の前にはいるのではなく、いかなる「学び」も、その学び手自身の経験の歴史の中に織り込まれることなしには「学び」として成就しない。『学ぶ』ということは、既存の経験を資源としながら、なおかつ、経験を変える、あらたに経験を開く、ということだろう。そうした新たな経験の地平は、若者が自ら活動することを通して、——なにかを「おこなう」ことによって切り開かれていくものだ(デューイ, 2004)。そのための舞台と素材を、私たちは、若者がいま立っている場の足元から切り出してこなければならぬだろう。いま居るところに深く立脚すること、そこに「学び」の出発点があることを教会の実践は私たちに教えてくれている。

2. 学校という空間を生かそう

学校という空間は、大きな可能性を含んだ空間である。それは他者との出会いの場であると同時に、仲間・教師との持続的な交流を通して、留学生たちが「自分の世界」をつくりあげていく場であり、自分自身の固有な「今」と「ここ」に則して、それにもかかわらず大胆に新しい地平に向かって乗り出していく知的冒険をいざなう場でもありうる（里見ほか, 2003）。実際問題として今日の社会において、その機能を果す場を他に求める事は容易ではない。私たちが直面している学校の危機は、それゆえ、学校の可能性を再発見する契機でもある。留学生の留学による環境損失を補完するのに、4つの工夫が教会で行われている。学校という保護網意識の強化、遊びの場の保証・施設の完備、教室空間の運営、社会とのつながりという4つの工夫をヒントにして学校の空間運営を考えてみる。

①【学校という保護網意識の強化】

教会の学びにおいて特徴的なことは、牧師のみではなく、先輩が後輩に日常生活の道徳や生き方などを教えていることだった。「一步間違ったら、全てが終わる」という大字の危機意識、文珍の「教会から出たら、死ぬかもしれない」という心配、「ホストってどこが悪いの」という解放の疑問。これらから新世代留学生の心が危機に直面していることが分かる。若者を大都市生活という怒涛の荒波のなかで孤立の危機に瀕している状況から救済するため、K教会は積極的に保護の包囲網の役割を果している。

大都市そのものは偉大な教育者であるが、真剣で、過酷で、葛藤のある教育者としての性質を有しているとドイツの教育者のテフスは指摘している。彼は<教育的側面>と<非教育的側面>とが混在する大都市で生活する子供を適切に導くための配慮が必要だと述べ、かつて子供たちを保護していた共同体に代わる「教育共同体」としての学校の重要性を強調した。教会の留学生たちは、教会の監督力によって、自己管理が出来るようになり、「心が守れた」。したがって、日本語学校のシステム上の管理だけでは、留学生の問題を解決することは期待できない。教会の伝道熱は、彼らの危機の現れだと言えるが、この留学生の自己救済の行動から、彼らは自分たちがいる日本語学校に不信感を抱いていることは明らかだ。全ての学生を教会に行かせたらと考えると、日本語学校はますます教育の原理から乖離するようになるだろう。

したがって、日本語学校には留学生たちの問題を認識して、学校を核とした保護の包囲網となることが期待される。ここで、テフスの考えを借り、K教会の実践を応用すれば、大人でもない、子供でもない発達期にある留学生たちを適切に導くには、まず、安心して相談できる環境づくりが要求される。場所を保障するとともに、積極的に学生の相談に乗る人の確保も必要だと思われる。つぎに、言語学習より大きな意味での知識の伝授ができる場も必要とされる。若者の自己探しに繋がっている哲学や社会学などの教育が要求されている。様々な知識に接触することで、彼らは「真・善・美」がはっきり分かるようになり、人としての道理も次第に身につけていくのである。

② 【遊びの場の保障／施設の完備】

教会の部属が次から次へと結成される背景及び活動の展開から、自分の舞台がほしい、自己表現したいという若者の心理がうかがえる。若者の「あそび」は豊かな学び合いの活動でもあったのだが、留学生活の中でそうした意味や機能も弱まってしまった現実がある。こうした現実を考えると、多様な学びと学びをつなぐ学校の役割は重要性を増やしていると言わざるをえない。

小椿も暁静も文珍も解放もそれぞれ教会での部属活動を楽しんでいる。楽器、踊りやスポーツに興味があって教会にきた留学生も多い。彼らは自らの手で脚本を作ったり、『草原』という月刊誌を編集したり、修練会のために様々な準備をしたりしている。披露された修練会やクリスマスの演技から、彼らはこのような活動に深く集中して打ち込んでいることが分かる。活動の目的が彼ら自身のものになっていて、その目的や他者との協力とそのため過程とが統一されたものとして意義があるということが様々な証で語られている。つまり教会の活動には人の心を捉える力の完全さ、という意味での「全体性」(デューイ, 2004)が備わっている。

要するに、日本語学校において、自分の能力を養うことができる環境、つまり日本語の学習だけではなく、自分の趣味なども養える環境が期待されている。そして、集団の中の一員として活躍できる場、あるいは自分の能力が発揮でき、他人に必要とされる存在として感じられる場所の保障が必要とされる。クラブ活動に積極的に取り組むことやクラブ活動の自己運営を促進することなどで、彼らの認識力の質が高まり、主体性も発揮できるだろう。この若者の遊びの場を保障する施設の完備も要求されている。

③ 【教室空間の運営】

教会の学びは留学生の生活に関心を持つことから始められ、少人数の共同学習スタイルを維持することによって、個と個のつながりを強めることが特徴である。旬長や隊長などのリーダーたちに教会の運営に参加してもらうことによって、彼らにリーダーシップを発揮してもらい、様々な学びが行われるようになった。教会自身もこのような学びの運営によって変ってきた。ここから日本語の授業の運営へのヒントを以下の3点にまとめる。

第一に、少人数の共同学習の形で行うこと。一斉授業ではなく、皆のレベルに合わせた授業の提供を工夫すること。教会では、旬の学習は少人数で行われ、学習の進度は旬員の理解次第であり、カリキュラムは状況によりその都度変更が行われる。10人以内の人数を維持しているのは、友達が作りやすいし、旬の交流も十分できるという考慮がある。現在の日本語教育の現場では、日本人教師がほとんど日本語のみで書かれた教科書で外国人留学生に日本語を教えるのが一般的である。教師と学生の間で言葉が完全に通じないため、教科書の内容が学生に届いていないことがしばしばあるだろう。解放の学校の一生懸命な教師と寝てしまった学生たちのこと、先生のスピードに付いていけずになにも分からないまま卒業してしまった小椿のこと、大学の講義が分からなくてつまらなく感じて寝てしま

った文珍のことなどから、教材はその内容を彼らが理解できない限り彼らにとって意味がないものでしかないことがよく分かる。さらにたとえ学生が分かったと言っても、その理解は必ずしも確実に不変の「理解」だとは限らないだろう。

第二に、教員が教え、生徒が教えられる、という伝統的な教授のあり方の問い直しが必要とされている。子供たちの生活的な知識や経験を大切に扱い、話し合えるセミナー式の授業が期待される。教会では牧師の教えや旬の学習などは、留学生の生活経験を大切にしながら行われている。そして、調査では日本語が苦手な留学生から、面白く感じた授業の話もいくつか聞いた。例えば、ある山東省の男の人は「授業で一ヶ月の給料計画を書かされた。皆の考えはそれぞれ違うので面白かった」と言ったことがある。一人の女の人は「私の故郷」という作文で自分の故郷のきれいさを細かく説明しようと筆者と二晩も話し合った。福建省出身の女の人は「皆すごかったよ。パワーポイントを使ったりして、自分の故郷を紹介していた。時間も大分オーバーしてたのに終わらなかった。今回の機会を利用して福建省のことを色々紹介する。福建はお茶以外にも名所や伝統があるから」と自慢げに言った。小椿も解放も文珍も、自分の生活と関わりがあることだったら、書く意欲を見せてくれた。授業の取り組みでは生活知と学問知の間をつなぐ時間を取り、生活的知識の価値を低く捉えず、対等な知のあり方として尊重し肯定し大切にすることが必要である。

最後に、肯定的な言葉遣いを多用すること。教師だけではなく、学生の間にも肯定的な言葉遣いを勧め、自由発言ができる環境作りを心掛けること。留学生が教会を居心地よく感じた理由の一つは、皆お互いに長所を認め合って自由に発言できるところだといえる。牧師も旬長たちも皆に肯定的な言葉遣いを勧め、皆のことをよく褒めている。文珍は褒められると自信がつくと言った。小椿も暁静も注目されるともっと頑張れるような気がするという話をよくした。若者はだれでも自分のことに注目してほしい、ほめてほしいという心理を持っている。中井（2006）も、この褒められると進歩できるという若者の心理に言及している。

④【社会のつながり】（学校を開くこと）

なぜ留学生たちは教会にいと世界が見えると感じたのか。それは、牧師が留学生の閉鎖された生活状況を改善するため、積極的に豊かな他者や物語を提供したからである。この窓を開くことによって、彼らは生活知（経験知）を増やし、社会との繋がりも実感でき、生きる意欲を見せた。デューイは、「経験」の思想家と言われている。教員が何を教えるかではなく、子供が何を経験するかという点に着目して、彼は教育を考察した。デューイによれば、経験というものは連続的であって、たとえ一見「刹那的」な経験であっても、それは後の経験になんらかの方法で影響を及ぼすものだ。一つの経験は、良かれ悪しかれ、続いて起こる経験のなかに生きつづける（デューイ、2004）。そうした経験を獲得していく条件を系統立てることを、デューイは教育者の任務と考えた。ここでは、学校を社会とつ

なげるために、教会から内部と外部の交流を促すこと及び若者自身のネットワーク作りを促進することという2つのヒントが示されている。

第一に、教会のように、学校の内部と外部の交流を促すこと。例えば、学校の外部及び内部の人たちに人生経験や留学経験などの話をしてもらおうこと。OB、OGの留学生たちはもちろん、日常、留学生に接する機会が多い日本語教師に貴重な存在として経験を語ってもらうことも留学生にとって意味が大きいと考えられる。そしてOB、OGの力を利用して、様々な物語と出会う機会を作ること。経験を学ぶという意味で、特に宗教ではなくても彼らの道徳観が正されることにつながる。またクラブ活動を生かし、外部とのつながりを作ることでもできる。教会は地域の民間人や他の学校などと一緒にスポーツの試合をしたことがある。学校だったら、合唱隊の出演や工場見学などのような外部とつながる活動がもっと多く出来るであろう。

第二に、若者自身のネットワークづくりを促進すること。教会のネットワークは若者自身の友情連鎖であり、それによって、バイト探しや進学などといった生活上の様々な問題が解決されてきた。教会と同様に小さいグループ作りからはじめ、学年や経験の差を利用したネットワークが作れる。生活情報交換の活動を行わせるうちにリーダーシップを発揮したい人が自然に出てくるだろうし、リーダーたちを通して、教師は随時学生の状況を把握できるようになる。利用できるネットワークづくりのためには、幹部たちを育てることが必要となる。またバイト探しに派遣会社を利用することや部屋探しの情報などを常に提供する必要がある。

要するに、学校側に様々な他者を提供することが期待されている。一つ注意してほしいのは、来日したばかりの学生は問題を起しやすいということである。留学生生活が順調にいくように教会のように固定した先輩留学生との付き合いが鍵となる。

3. 教育的関係の再構築の可能性を探ろう

本論文に取り上げたデータでも、相変わらず日本人教師について「皆やさしいけど、近づきにくい」と話した留学生が多い。初めて家から離れた彼らは、教師に先生であると同時に「父母、友達」のような感情を求めている。しかし、教師たちは留学生と大人同士の付き合いをしようとしている。結局両者とも不満足の状態になってしまい、留学生との付き合いをどのようにしたらいいのか悩んでいる教師が多い。この問題にうまく答えてくれたのは、K教会のJ牧師先生と留学生たちとの付き合いだと思える。

【指導者の参与】で述べたように、J牧師先生は説教だけが自分の仕事だと考えず、生活上で父親のように留学生に深く関心を示し、友達として彼らと話しながらかつて彼らのことを理解しようとしている。この牧師の努力によって牧師と留学生の間に人格的な信頼関係ができたことが、教会復興につながったのだ。この牧師の姿から示された教育的関係はそれ

自体調和的で一次元的な教師－子供関係（ノール，1978）ではなく、現在の日本語教師の認識する大人対大人の関係でもない。状況に応じてその都度変容する文脈依存的な関係であると言える。小笠原（2003）は、このような状況可変的な教育的関係は、多元性をその特質とする現代社会において一定の方向性を指し示すものであり、広範な社会的行為空間のなかで繰り返し新たに形成されねばならないものであると強調した。

中国では昔から「師者は伝道・授業・解惑」と言い伝えられている。つまり、先生というものは生徒に知識の伝授だけではなく、生徒の人生を導くことも、彼らの困惑を解くことも、その努めにあるのだという。子供たちの世界⁴⁸⁾は自ら形成されるのではなく、人格的な媒介を要する（Giesecke, 1997）。教師はけっして知識を教えることだけが期待されている存在ではない。日本人教師と中国人の生徒の付き合いがうまくいかない原因は双方の国の文化環境の違いにもあることは、ここでは深く言及しない。進歩的な教育者は「彼ら（学生たち）のためなら、叱ってもいい。」（インタビュー・2007/08/01・暁静）といった留学生の期待を認識し、彼らと関わりあいながら、答えを探していかなくてはならない。

4. 教師の学びの質を高めよう

牧師は留学生をよりよく導くように猛勉強をしている。彼にとっては、学ぶことと教えることは、表裏一体の行為である。学ぶことの豊かさ、楽しさを、身をもって実感し、示すこと、それが「教える」ということの基本となる。確かに教師の学び自体が貧しいものであるとすれば、子供たちに豊かな学びを伝えることは、とても望めない。牧師は皆と言葉が通じなかったが、自分の目や口で彼らへの関心を示していた。そして、留学生のそばによりそって留学生のことを分かろうとしていた。朝鮮民族を通して漢民族の留学生のことを理解できた牧師は、それで自分が皆と親しくなったと言った。このように留学生に語りかけ、留学生の話に傾聴するということは、相手を受け入れていくという受容的な行為であり、人間関係構築の基本と言える。若者の思いや願いを感じ取り、若者の話を引き出すきっかけを作り、若者の体験や言葉に関心を示し、共感し、感動を分かち合うことが人間関係にリアリティを与え、留学生の生活世界を豊かにする第一歩であり、教師の学びに結びつくだろう。暁静のストーリーを書きあげ、彼女に読んでもらった時に彼女は次の話をしてくれた。

「先生たちは、日本語だけを教えるべきではなく、留学生の心の成長に関心を持つべきだと思う。それと、日本は礼儀にこだわる国だから、留学生はあまり日本の礼儀をしらずにバイトの面接に行くから、無礼を働いたことがよくある。日本語学校でたくさんのはできなくても、礼儀の講座を開いて留学生に教えたら、どう？日本社会自

48) 「世界はただ印象や作用、要求、期待が混淆したものであり、ちょうどテレビ番組のようなものである。世界すなわち自然や文化を認識するには、一方で科学を、他方でそれと結びついた教授学を必要とする。教授学なくして学習可能性はない。このように開かれた世界の媒介は、子供や青少年にとってパーソナルな形でのみ、また教師によってのみ可能である」(Giesecke, 1997, 小笠原, 2003 より再引)

体にもプラスになると思う。」

(ノート・2007/08/01・暁静との話し合い)

「心の成長に関心を持ってほしい」このような留学生たちの生の声に耳を傾けることから教師の学びは始まるのではないかと筆者は考える。よい学びは関心という名の磁力によって精神の磁力を高める。だから、教師が自分の中の留学生を大切に育て、学び手の「語り」を引きだし、学生を理解しようとすることの重要性を強調しておきたい。

人間は、学びながら自己を形成し、またそれを修正し続ける。その学びの対象に、重要なものとして教育があり、優れた教育と出会う(師と出会う)ことは学びを豊かにする極めて重要な条件である。学ぶ者の側から言えば、学びを豊かにするためにこそ教育・師があるはずなのだ。従って、教師の学習の質を高めることが先決である。残念ながら、教職員の勤務体制と研修体制は、その専門性をますます否定する方向で管理だけが強化されている。お互いの知見や経験をフランクに交流することのできる関係性も稀薄だ。組織の歯車として走り回る日々の中からは、広い視野や物事への深い関心は生まれ難い。西田(2007)が指摘するように、学校の授業を生徒にとって魅力あるものにするためには、教員の自由と時間的・精神的なゆとりが不可欠であると考えられる。

おわりに — 開かれた日本へ

現代中国の国内において大きな変化が起こりつつあるのに伴い、人々の留学に対する認識も変ってきた。世界最大の留学生輸出国である中国の留学生は留学生であると同時に、中国と各国との文化交流の担い手ともなった。中国では、2007年により「国家建設高水平公派研究生項目」の実施（2007年から2011年において毎年5,000人の中国大学院生を海外留学）及びアフリカからの留学生受け入れ等外交戦略が展開されている。

少子高齢化により大学全入時代に突入した日本では、2008年、留学生30万人計画⁴⁹⁾や、アジア人財資金構想など留学生に対する視線が非常に熱くなっている。さらに教育再生会議が掲げた留学生100万人構想をはじめ、経済財政諮問会議やアジア・ゲートウェイ戦略会議など政府直轄の会議が、留学生の受け入れの大幅拡大を相次いで打ち出した。

受け入れ拡大を提唱する各会議の報告では、世界の留学生数は2025年には現在の3倍を上回る約700万人に達するとの予測もあり、急速な経済発展が続くアジアでは「高度人材争奪戦」の観もある。こうした潮流や経済のグローバル化、日本の少子高齢化に対応しようという政府の狙いが報告から読み取れる。「開かれた日本」の実現まで、絡んでいる様々な問題を一つ一つ解決しなければならないが、現実問題として現在の日本は国際化に向かわせざるを得ない時期が来たのである。

中国人団体観光ビザの解禁（1999年1月）及び緩和（2008年3月）、様々な分野での両国協力の拡大といった政策が取り上げられたことが、日中両国の国民の間の理解に繋がる。様々な議論を重ねていくうちに、理解が深まり、移民制度や留学生支援などのような日本の国際化に不可欠な問題の解決により適切な道が見つかることが期待される。本論文は、新世代中国人留学生の成長を焦点に当て、彼らがいるK教会の分析記述を通して、留学生への理解及び留学生の居場所作りへの提言を行った。筆者は微力ながら本研究を通して、一人の留学生として共生社会である「美しい日本へ」の実現に貢献できることを願う。

⁴⁹⁾ 「30万人の留学生」とは全学生数（300万人）キャンパスの10人1人の学生が留学生というイメージ。非英語圏の先進国である独（12.3%）、仏（11.9%）とほぼ同じ割合であり、世界の留学生に占める現行のシェア（5%）の維持（アジア・ゲートウェイ構想）である。「100万人計画」が実現するなら4人に1人が留学生になる。

【参考文献】

- 浅野慎一（1997）『日本で学ぶアジア系外国人－研修生・留学生・就学生の生活と文化変容－』大学教育出版
- 浅野慎一（2004）「中国人留学生・就学生の実態と受け入れ政策の転換」『労働法律旬報』2004.05.25 NO.1576, pp.22-29
- 芦名定道ほか（2004）『科学時代を生きる宗教－過去と現在、そして未来へ－』北樹出版
- 石川栄吉ほか（編）（1987）『文化人類学事典』弘文堂
- 伊藤泰郎（1997）「中国人就学生の生活とネットワーク」『北大文学部紀要』45 北海道大学文学部出版, pp.1-20
- 井上孝代（2001）『留学生の異文化間心理学：文化受容と援助の視点から』玉川大学出版社
- 井上孝代（2005）『「日本語学校における危機管理の問題」－マクロ・カウンセリングの視点から－』財団法人日本語教育振興会新任主任教員研修口頭発表資料
- 井上晶子（1998）「韓国人就学生のアイデンティティ形成と異文化接触」『留学生の中途退学に関する異文化心理学的研究』平成8・9年度科学研究費補助金（基盤研究C）研究成果報告書（研究代表者：井上孝代・1998）
- 岩男寿美子・萩原滋（1988）『日本で学ぶ留学生－社会心理学分析－』勁草書房
- ヴァン・マーネン（1999）『フィールドワークの物語－エスノグラフィーの文章作法－』森川渉（訳）現代書館
- 王雪萍（2004）「中国の留学生政策と日本－中国政府派遣赴日学部留学生政策を通して－」<http://www.kri.sfc.keio.ac.jp>（アクセス日：2008.05.12）
- 大阪府国際交流財団（2002）『留学生の生活実態に関する調査』
- 岡益己・深田博己・周玉慧（1995）「中国人私費留学生のソーシャル・サポート」『岡山大学経済学会雑誌』2（3）岡山大学経済学会, pp.493-523
- 岡益己・深田博己（1995）『中国人留学生と日本』白帝社
- 岡益己・深田博己・周玉慧（1996a）「中国人私費留学生の留学目的及び適応」『岡山大学経済学会雑誌』27（4）岡山大学経済学会, pp.25-49
- 岡益己・深田博己・周玉慧（1996b）「中国人私費留学生の日本社会への適応とソーシャル・サポートの関係」『岡山大学経済学会雑誌』28（1）岡山大学経済学会, pp.1-22
- 小笠原道雄（2003）『教育の哲学』放送大学教育振興会 放送大学教材
- 奥田純子（2003）「日本語学校の学生事情」『月刊日本語』7：15-17
- 加賀美常美代（1994）「異文化接触による不満の決定因－中国人就学生の場合－」『異文化間教育』8 異文化間教育学会（編集）アカデミア出版会, pp.117-126
- 何光沪（編）（2006）『宗教与当代中国社会』中国人民大学出版社
- 葛文綺（1999）「留学生の異文化適応に関する研究：来日目的、対日イメージと適応度との関連を中心に」『名古屋大学教育学部紀要』46 名古屋大学教育学部, pp.287-297
- 葛文綺（2007）『中国人留学生・研修生の異文化適応』溪水社

- 金沢吉展（2002）「日本文化への適応と援助－異文化接触の心理学」『日本語教育のための心理学』海保博之他（編）新曜社
- 鐘家新（1992）「中国人の都市における一人っ子を溺愛している親たち－『一人っ子政策』を背景として－」『母子研究』13 社会福祉研究所, pp. 36－37
- クーリー, C. H.（1970）『社会組織論』大橋幸ほか（訳）青木書店
- 工藤正司（2003）「今日の留学生問題」<http://www.yoke.city.yakohama.jp>（アクセス日：2003. 07. 09）
- 倉地暁美（1992）『対話からの異文化理解』勁草書房
- 倉地暁美（1998）『多文化共生の教育』勁草書房
- 「現代の日本留学生」（2001）『人民中国』08. 13 <http://www.japan.people.com.cn>（アクセス日：2003. 08. 01）
- 黄広章（2001）「少年留学是是非非」人民網 <http://www.peopledaily.co.jp>（アクセス日：2001. 06. 17）
- 小沢一仁（2003）「居場所を得ることから自らのアイデンティティをもつこと」『東京工芸大学工学部研究紀要』26 東京大学工学部, pp. 64－75
- 小沢一仁（2004）「アイデンティティ危機における自分自身への違和感から、アイデンティティを再考する」『東京工芸大学工学部研究紀要』27 東京工芸大学工学部, pp. 79－89
- 小島裕子（2003）「学習リソースとしてのアルバイト：就学生を対象として」『Magis/桜美林国際学論集』8：199－213
- 駒井洋（1997）『新来・定住外国人がわかる事典』明石書店
- 駒田聡・澤田美恵子（1999）「『共同体』としての日本語教室」『日本語の地平線－吉田彌壽夫先生古稀記念論集』吉田彌壽夫先生古稀記念論集編集委員会（編）くろしお出版, pp. 103－114
- コメニウス（1973）『大教授学』鈴木秀勇（訳）明治図書
- 桜井厚（2002）『インタビューの社会学－ライフストーリーの聞き方－』せりか書房
- 佐々木英和（2001）「ケータイ・インターネット時代の自己実現観」『子供・若者の居場所の構想』学陽書房, pp. 84－105
- 佐々木雄司（1969）「新興宗教」『からだの科学』29, pp. 70－73
- 佐藤学（編）（1995）『教室という場所』国土社
- 佐藤学（1995）「学びの対話的实践へ」『学びへの誘い』佐伯胖ほか（編）東京大学出版社
- 里見実ほか（2003）「あしたの学びを考える」教育総研・学びの理論と文化研究委員会中間報告書 国民教育文化総合研究所
- 島崎敏樹（1974）『生きるとは何か』岩波新書
- 嶋本圭子（2005）「中国人就学生が語る日本での経験～日本語学校における『問題』を理解するために～」大阪大学大学院文学研究科修士論文（未刊）
- 白石勝己ら（2005）留学生情報 WEB サイト『JAPAN STUDY SUPPORT』2005年7月最新情報 財団法人アジア学生文化協会教育交流事業部（アクセス日：2006. 06. 10）

- 白佐俊憲・呉小瑾（1998）「中国での一人っ子を巡る諸問題」『北海道女子大学短期大学部研究紀要』34 北海道女子大学短期大学部出版, pp. 35-56
- 白佐俊憲（1998）『一人っ子の心理と育児・保育—少子時代の教育方針』中西出版
- 周枳成（2002）『少年留学三思而行』広東教育出版社
- 朱建榮（2001）「日本の外交資源として留学生を大事にせよ」『人民日報』2001. 08. 14
- 祝蓓里ほか（2001）『愛与成長—第一代独生子女大学生心録』華東師範大学出版社
- 周林娟・小山田隆明（1990）「中国における一人っ子の心理学的研究」『岐阜大学教育学・心理学研究紀要』10：72-81
- 姜克實（1997）『現代中国をみる眼』丸善ライブラリー
- 邵春芬（2000）「在日中国人の日本観—留学生・就学生を事例として—」『東京女子大学比較文化研究所紀要』61 東京女子大学比較文化研究所, pp. 91-109
- 「小留学生の問題」（2003）『人民中国』02. 13 <http://www.japan.people.com.cn>（アクセス日：2003. 07. 29）
- 城石しのぶ（2004）「語りからみた、日本で学ぶ留学生の自己変容〜＜中国人留学生＞という枠のムコウ〜」大阪大学文学部卒業論文（未刊）
- 徐光興・蔭山英順（1994）「在日中国人留学生の適応に関する実態と問題」『名古屋大学教育学部紀要』41 名古屋大学教育学部, pp. 39-47
- 徐光興・蔭山英順（1995）「中国人留学生の日本留学の効果と情報に関する研究」『名古屋大学教育学部紀要』42 名古屋大学教育学部, pp. 89-106
- 徐利佳（2005）「在日中国人日本語学校生のアルバイト生活に関する考察」大阪大学文学研究科修士論文（未刊）
- 杉村美紀（2003）「日本の留学生政策とアジア諸国との留学交流：中国人留学生に注目して」『上智大学教育論集』38 上智大学文学部教育学科, pp. 19-31
- 杉山幸子（2004）『新宗教とアイデンティティー回心と癒しの宗教心理学』新曜社
- 孫長虹（2004）「中国人留学生の日本観」『多元文化』4 名古屋大学国際言語文化研究科, pp. 217-229
- 立川武蔵（編）（2001）『癒しと救い—アジアの宗教的伝統に学ぶ—』玉川大学出版
- 田中共子（2000）『留学生のソーシャル・ネットワークとソーシャル・スキル』ナカニシヤ出版
- 田中智志（編）（1999）『＜教育＞の解説』世織書房
- 田中孝彦（2003）『生き方を問う子供たち』岩波書店
- 田中治彦・南博文（監修）（2000）『子供の参画』IPA 日本支部（訳）崩文社
- 田中治彦（編）（2001）『子供・若者の居場所の構想』学陽書房
- 田中広（1997）「隣に住む外国人との共生環境」『実践 国際交流』国際交流基金・財団法人大阪国際交流センター（編集）財団法人大阪国際交流センター, pp. 83-88
- 「大学進学率 14%2002 年度」（2002）<http://www.japan.people.com.cn>（アクセス日：2002. 10. 06）

- 段躍中 (2003) 『現代中国人の日本留学』 明石書店
- 「知的国際貢献の発展と新たな留学生政策の展開を目指して」 (1999) 留学生政策懇談会
<http://www.mext.go.jp> (アクセス日 : 2003. 07. 29)
- 「中国人の留学生に関する意識調査」 (2003) 『関西新聞』 2003. 08. 07
- 張維慶 (2006) <http://www.china-embassy.or.jp/jpn/zgbk/t221623.htm> (アクセス日 : 2007/06/15)
- デューイ, J. (2004) 『経験と教育』 市村尚久 (訳) 講談社
- 徳井厚子 (1999) 「異文化接触場面における摩擦の要因－評価の側面の差からみえてくるもの」 『日本語の地平線－吉田彌壽夫先生古稀記念論集』 吉田彌壽夫先生古稀記念論集編集委員会 (編) くろしお出版, pp. 151－161
- 中井好男 (2006) 「日本語学校での『再履修』が日本語学習者に及ぼす影響～『再履修者』の学習環境という観点から～」 大阪大学言語文化研究科修士論文 (未刊)
- ナンシー, J-L. (1985) 『無為の共同体』 西谷修 (訳) 朝日出版社
- 西田朋美 (2007) 「日本語教師をやめない理由－Narrative Inquiry による二人の教師の自己理解－」 大阪大学大学院文学研究科修士論文 (未刊)
- 「日本留学生の困境」 (2001) 人民網日本語版 <http://www.japan.people.com.cn> (アクセス日 : 2003. 08. 01)
- 「日本留学の『困城』心情」 (2003) <http://www.chinanews.com.cn> (アクセス日 : 2003. 08. 05)
- 「日本留学の騙し」 (2003) <http://www.bofu.net> (アクセス日 : 2003. 07. 29)
- 萩原建次郎 (2001) 「子供・若者の居場所の条件」 『子供・若者の居場所の構想』 学陽書房, pp. 51－83
- 濱島朗 (1973) 『現代青年論』 有斐閣双書
- 浜田麻里 (1999) 「学習者ストラテジー再考」 『日本語の地平線－吉田彌壽夫先生古稀記念論集』 吉田彌壽夫先生古稀記念論集編集委員会 (編) くろしお出版, pp. 179－189
- バタイユ, G. (1970) 『内的体験』 出口裕弘 (訳) 現在思潮社
- 朴相権 (2001) 「異文化適応過程の調査研究－韓国人就学生の言語習得と労働を中心に－」 『千葉大学社会文化科学研究』 5 千葉大学大学院社会文化科学研究科, pp. 127－139
- 範玉梅 (2004) 「日本語学校における一人っ子の中国人留学生の増加現象－背景・問題・対応策の提案」 大阪大学文学研究科修士論文 (未刊)
- 範玉梅 (2005) 「日本語学校における一人っ子の中国人留学生の増加現象」 『阪大日本語研究』 17 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座, pp. 59－90
- 範玉梅 (2007) 「新世代留学生の精神的成長に関するケース・スタディー－日本語教育への示唆」 『阪大日本語研究』 19 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座, pp. 161－192
- 範玉梅 (2007) 「中国の一人っ子の日本留学」 『第 7 回国際日本研究・日本語教育－アジア太平洋地域における日本研究と日本語教育の変容と課題』
- 範玉梅 (2007) 「中国の新世代の留学生研究について」 『第 2 回目の中国全国外国語教育研

- 究学会』2007年9月30日 北京口頭発表
- ピアジェ, J&エリクソン, E・H. 他 (著) (2000) 『遊びと発達心理学』 赤塚徳郎・森 (監訳) 黎明書房
- 深谷和子・深谷昌志 (1976) 『遊びと勉強』 中央公論社
- 福西勇夫 (2001) 『こころのファイルー現代社会の心の歪み』 南山堂
- 富田和広 (1993) 『現代中国社会の変動と中国人の心性』 行路社
- プラマー・ケン (1998) 『セクシュアル・ストーリーの時代ー語りのポリティクス』 桜井厚・小林多寿子・好井裕明 (訳) 新曜社
- ブランショ, M. (1997) 『明かしえぬ共同体』 西谷修 (訳) ちくま学芸文庫 筑摩書房
- フリック・ウヴェ (2003) 『質的研究入門ー〈人間科学〉のための方法論』 春秋社
- ブルーナー, J. (1999) 『意味の復権』 岡木夏木・仲渡一美・吉村啓子 (訳) ミネルヴァ書房
- フロム, E. (2005) 『自由からの逃走』 日高六郎 (訳) 東京創元社 第113版
- ベーゲル, G. W. F. (1998) 『精神現象学』 長谷川宏 (訳) 作品社
- ベルトー, ダニエル (2003) 『ライフストーリーーエスノ社会学的パースペクティブー』 小林多寿子 (訳) ミネルヴァ書房
- 保坂享・中澤潤・大野木裕明 (2000) 『心理学マニュアル面接法』 北大路書房
- ポラニー, M. (1980) 『暗黙知の次元』 佐藤敬三 (訳) 紀伊国屋書店
- ホロウェ&ウィーラー (2000) 『ナースのための質的研究入門ー研究方法から論文作成までー』 野口美和子 (監訳) 医学書院
- 松原達哉・鄧秀 (1990) 「一人っ子の自主性と子供からみた養育態度に関する研究ー中国と日本との比較ー」 『筑波大学心理学研究』 12 筑波大学心理学系, pp. 175-190
- 松本和美 (1992) 「幼児期における家庭教育の動向 (I)ー大阪と上海の一人っ子における躾教育比較ー」 『香川短期大学紀要』 20 香川短期大学出版, pp. 67-72
- 南裕子 (監訳) (1999) 『質的研究の基礎ーグラウンデッド・セオリーの技法と手順』 医学書院
- 箕浦康子 (1999) 『フィールドワークの技法と実際』 ミネルヴァ書房
- 茂住和世 (2003) 「我が国の留学生政策と大学教員の留学生指導ー考察」
<http://www.iic.tuis.ac.jp> (アクセス日: 2003.06.17)
- 文部科学省ホームページ <http://www.mext.go.jp>
- 山縣千枝 (1999) 「中国人就学生の現在ー日本語学校の作文集よりー」 『日本語の地平線ー吉田彌壽夫先生古稀記念論集』 吉田彌壽夫先生古稀記念論集編集委員会 (編) くろしお出版, pp. 235-246
- 山崎瑞紀 (1994) 「アジア系就学生の対日イメージ形成に関する因果モデルの検討」 『日本教育心理学研究』 42 日本教育心理学協会 (編集) pp. 442-447
- 山崎瑞紀 (1996) 「アジア出身の留学生及び就学生の日本観」 『早稲田大学教育学部研究 (教育心理学編)』 44: 41-49
- やまだようこ (編) (2000) 『人生を物語るー生成のライフストーリーー』 ミネルヴァ書房

- ユネスコ (2003) 「中国の高等教育は世界最大規模」『中日新報』2003. 09. 01
- Yinger, J. M. (1994) 『宗教社会学Ⅱ－宗教と個人－』金井新二 (訳) ヨルダン社
- ライフデザイン研究 (1994) 『中国人留学生の日本観』第一生命経済研究所
- 陸士楨・呉魯平・石国亮 (編) (2005) 『社会転型中的青年發展与社会整合』中国社会科学出版社 中国蔵学出版社
- 李鋒 (2005) 『鄉村基督教的組織特征及其社会結構性位秩——華南Y県X鎮基督教教会組織研究』復旦大学出版社
- 「留学的集団無目的」(2002) 中安網 <http://tech.anhuinews.com>(アクセス日:2003. 08. 02)
- 劉西 (2003) 「8000 万一人っ子の素質問題」中安網 <http://tech.anhuinews.com>(アクセス日:2003. 09. 30)
- 劉年 (2000) 「在日外国人留学生問題に関する研究－中国人留学生からみる留学生問題」『立正大学社会学・社会福祉学論叢』33 立正大学社会学・社会福祉学会, pp. 71－80
- 梁麗萍 (2004) 『中国人的宗教心理——宗教認同的理論分析与実証研究』社会科学文献出版社
- 林曉光 (1989) 「中国の一人っ子家庭の課題」『児童心理』43: 12 金子書房, pp. 142－145
- ルーマン, N. (1990) 『信頼－社会的な複雑性の縮減メカニズム－』大庭 健・正村俊之 (訳) 勁草書房

【欧文文献】

- Atkinson, P. (1992) *Understanding Ethnographic Texts*. Sage, Newbury Park, California
- Couchman, W. & Dawson, J. (1995) *Nursing and Health-Care Reserch 2nd edn*. Scutari Press, London
- Cresswell, J. W. (1994) *Research Design: Qualitative and Quantitative Approaches*. Sage, Thousand Oaks, California.
- Denzin, N. K. & Lincoln, Y. S. (1994) *Handbook of Qualitative Research*. Sage London
- Erikson, E. H. (1959) *Psychological Issues: Identity and the Life Cycle*. International Universities Press. : 小此木啓訳編 (1973) 『自我同一性』誠信書房
- Germain, C. P. (1993) *Ethnography: the method*. In *Nursing Research: A Qualitative Perspective* 2nd edn (eds P. L. Munhall and C. oiler Boyd) pp. 237－267, National League for Nursing Press, New York
- Giesecke, H. (1985) *Das Ende der Erziehung*. Stuttgart S. 30ff.
- Giesecke, H. (1997) *Die pädagogische Beziehung*. Weinheim/München.
- Goetz, J. P. & LeCompte M. D. (1984) *Ethnography and Qualitative Design in Educational Research*. Academic Press, Orlando.
- Goodall, J. R. (2000) *Writing the New Ethnography* pp. 87 original italics
- Jorgensen, D. L. (1989) *Participant Observation*. Sage, Newbury Park, California

- Nohl, H. (1978) *Die pädagogische Bewegung in Deutschland und ihre Theorie*. Frankfurt am Main.
- Spinks, B., Hood, R. W., Jr., & Gorsuch, R. L. (1985) *The Psychology of Religion: An Empirical Approach*. New Jersey: Prentice-Hall.
- Wolcott, H. (1992) Posturing in qualitative enquiry. In *Handbook of Qualitative Research in Education* (eds M. Lecompte, W. L. Millroy & J. Preissle), pp. 121–152, Academic Press, San Diego, California
- Wysmans, W. M. & Wiener, C. L. (1990) *Grounded Theory in Medical Research*. Swets and Zeitlinger, Amsterdam

【参考資料】

- ①「牧師先生への依頼」279
- ②「献身見証」(小椿) 283
- ③「快樂的標杆」(暁静) 284
- ④「一封家書」(暁静) 285
- ⑤「一番美しい希望と思い出を残すために」(暁静) 287
- ⑥「一番大切な人へ贈る言葉—私の祖国に伝えたいこと」(暁静) 289
- ⑦「文珍の発表」(文珍) 290
- ⑧「将来の計画書」(解放) 295
- ⑨「願書の理由書」(解放) 296
- ⑩「先生への手紙」(解放) 297
- ⑪「演説原稿」(解放) 298
- ⑫「ラブレター」(解放) 299
- ⑬「做耶穌的見證人」(小猿) 301
- ⑭「旬長十大罪狀」(小不点儿) 303
- ⑮「順口溜」(兄弟教会の留学生) 304
- ⑯「日記」(王小) 305
- ⑰「成功の密訣」(黄) 306
- ⑱「献身の証」(愛子) 309
- ⑲「鉛筆的原則」312

① 【牧師先生への依頼】

牧師先生へのお願い、

私は大阪大学文学研究科博士後期課程の学生で、範玉梅と申します。中国人の日本留学に関する研究をしています。牧師先生と出会い、皆の「愛があるところ」という言葉に惹かれ、教会はどのように留学生を支えているのかということをはっきりとしようと考えようになりました。日本語教育現場において留学生問題の解決糸口を探るのは本研究の目的となっています。教会にいる3年間で色々な感動を受けてきた私は感謝の気持ちで一杯です。ここでこの貴重な体験をくださった牧師先生に改めてお礼を申し上げます。

この研究の中で指導者としての牧師先生ご自身の考えはなにより貴重なものであり、ぜひ聞かせていただきたいと思います。勝手な申し込みの失礼をお許してください。お話の内容を誤解しないようにインタビューという形でお話を伺いたいです。インタビューは1回か2回になりますが、時間はほぼ一回40分ぐらいです。録音は文字化データとして保存し、プライバシーに関わる情報を一切匿名にさせていただきます。いただいたあらゆるデータは博士論文の作成及び学術発表の資料としてのみ使わせていただきます。この間に何らかの支障がある時、いつでも、使用を禁止していただいても構いません。私はご意志を尊重し、データを削除いたします。以下のことを中心にお話を伺いたいたと思いますが、ご協力をくださるようお願いいたします。

依頼者：範 玉梅

連絡先：××××××@hotmail. Com

電話番号：090-××××××××

一回目の聞きたいこと：

- ① 留学生、中国人留学生をたくさん受け入れるようになったきっかけはなんですか。
- ② 留学生は初めてこの教会へ来た頃から今までのことについて
- ③ ほかの教会との違いはどこですか。
- ④ 彼らのことをどのように思っているのか。(どのような考えで中国人の留学生を受け入れているのか？彼らの特徴や彼らの困難などをどう思っているのか)
- ⑤ 数が増えることに伴い、難しいことも起こっていると思うが、どんな難しいことがあったのですか。どのように解決したのですか。
- ⑥ 彼らの引導するには特に困難だと思うところがどこですか。なぜですか？
- ⑦ 彼らへの説教には重点を置くところはいくつかあると思うが、その重点はなんですか。その理由は？
- ⑧ 言葉の重要性をいつも強調されてきたが、そこにある牧師先生の考えはなんですか。
- ⑨ 教会の生活に適応させるためには、どのような工夫をなされているのですか。その理由も。
- ⑩ 教会の運営について牧師先生ご自身の考えは？
- ⑪ 牧師先生のご自分自身の留学経験は彼らへの指導や教会の運営に影響があるでしょうか。
- ⑫ 拡大してきた教会の現在において存在している問題及びその解決について（10分の1を出さない人；若者には信仰生活ではよく起こりやすい問題点；帰国に直面する第一期の留学生のこと）
- ⑬ 留学生たちを大人のように接触することは彼らに未来性をもってほしいと思うが、そこには牧師先生がどのような思いをもっていますか。
- ⑭ リーダーを育てる考えについて
- ⑮ 留学生との間の世代差、言葉の壁や文化の壁が存在しているはずだが、その壁を乗り越えるにはどのような努力をなされてきたのですか。（十分の一；言葉と文化の壁；初めてキリストを接触する人たち）

牧師先生へ、

先日インタビューに応じてくださったことに心から感謝しております。先日のお話を文字化して読むところ、いくつかの確認しないといけないところ及びもうすこし詳しく聞きたいことがありますので、これを全部補足質問で紙にまとめてみました。文字化したものと補足質問を先生にお読みになってから、もう一回お話を伺いたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

敬具
範玉梅

二回目の補足質問：

- ① 他の教会はしていない路傍伝道、断食祈りとか、うちの教会はしている。
 - A 他の教会はなぜしていないのか？
 - B うちの教会はなぜしているのか？
 - C 伝道にすごく熱心に行っていることはどのような意味があるのか？留学生はどのように受止めていると思っているのか？
- ② 大阪ではうちの教会はトップとなっていることは、どんなことなのか？
人数的なのか？行事なのか？伝道に熱心だということなのか？
- ③ 牧師先生は色々な勉強をなされてきたとおっしゃったが、具体的にどのような勉強をなされてきたのか。その勉強は教会を指導するには、どのような役に立ったのか？
- ④ 他の教会で成功したことをうちの教会にも持ってきて、実践させたとおっしゃったが、他の教会のいい実践とは具体的にどのようなことなのか。それとどのようにうちの教会で実践してもらったのか？
- ⑤ 留学生にはたくさんの証言をしてもらったが、その中には非常に印象深いものがあるのか、それはどんなものなのか？彼らに証言をさせることの意味はどう考えているのか？
- ⑥ 理想的なチーム作りは一对一だとおっしゃったが、この考え方の一番の出発点はどのような考えだったのか？本当に実現できるのか？今の状況はどう思っているのか？
- ⑦ 精神的にも関わっている問題が話し合うことによって溶けていくとおっしゃったが、もっと詳しく話してほしい。うちの教会で起ったことを例にして話してほしい。
- ⑧ うちの教会はほぼ大阪の日本語学校に伝道が行っていると思います。
 - A 日本語学校以外には、どのように取り組んでいるのか？その効果は？
 - B 日本語学校の学生に集中して伝道することには、牧師先生はどのようなお考えを持っているのか？（完全に偶然なのか、それともその中には牧師先生の意図も含まれているのか。もし牧師先生のお考えがあったら、それはなんなのか？）
- ⑨ 彼らには自信がない時や未来が見えない不安に陥ったりする時、牧師先生はどのように彼らを励ましているのか？（例を挙げてほしい）
- ⑩ 文珍のようなバイトと学習のバランスが取れない、常にひたすらバイトだけに集中しが

- ⑪ 小椿への育てに牧師先生の最初のお考えとどのように彼女を育てたのか、その行動をもうすこし詳しく話してほしい。
- ⑫ 言葉の力という話は面白かったと思うが、他の教会でも同じように教えているのか。このところには特にうちの教会は自分の独特な考えはないのか。
- ⑬ 友達作りは非常に重要だとおっしゃったが、このところの牧師先生のお考えをもうすこし詳しく話してほしい。
- ⑭ 全ては神様の導きだと先生はおっしゃったが、神様はどのようにうちの教会を導いてくださったのか、どのように中国人の留学生との出会いを導いてくださったのかという導く過程について、先生のお考えをもうすこし分かりやすく説明してほしい。
- ⑮ 牧師先生はどのように自分の愛を表現しているのか、先生から見たうちの教会にいる人たちはどのように愛の表現を表現しているのか。
- ⑯ 若者の青年期への過渡においては、神学の考えはどうなっているのか。現実の留学生を導いている牧師先生ご自身はどう思っているのか。
- ⑰ 師母はどのように先生を支えてきたのか。

②【献身见证】(小椿)

小学 5,6 年级的时候,有一次,我跟妈妈说:“妈,我长大了以后要上神学院,当牧师”。“你别乱说,那很辛苦的,你不能去”。妈妈严厉地拒绝了我。自从那以后,我虽仍然有过坚持,但随着年龄的增长,事情逐渐淡忘了。小学时候我的性格非常的活泼,上了中学后,由于转学的原因,使我的性格变得非常的忧郁,直到中专时的几年里,都非常自卑,心里有说不出的空虚,精神几度崩溃,因此家里决定让我去日本留学,既让我换一个新的生活环境,也为了补贴经济窘迫的家庭。

2003 年 9 月 28 号(星期天)来了日本。与此同时我的生活开始与神密不可分。来日本的第 2 天,就被教会的丽香和几个兄弟姐妹传道,来到了现在所生活的 J 教会。很快我便熟悉了教会的生活,经常来教会祷告做礼拜,因为留学生活比想象的要艰苦,生活很孤独,每次来教会向神诉说时,眼泪不止。直到来日本半年后,男朋友也和我分手了,心中更是倍受打击,甚至连家都不想回,心里的痛苦只有向神倾诉,让神来抚慰我的心。每天从梅田到难波,骑自行车花上 40 分钟。那时已经凌晨 1,2 点,早上又要 6 点打工。那段日子非常艰苦,每天不知道明天会怎么样。每天打 11 个小时,来日本 1 年半,给爸妈寄了 170 万日元,又挣了自己的学费 63 万日元,一年半拼着命打工。大概来教会 1 年左右的时间,牧师就跟我说:“小椿,你当牧师,怎么样?”我就说:“牧师,不行,我一个女孩子家做不到。”但那时就开始想,我的人生成为牧师是什么样子。我当牧师,死的时候会怎么样?我总想这些,但有时觉得当牧师也挺好。

虽然也有要当牧师的想,也说要献身,但是有很多徘徊。我父母把一切希望都放在我身上,我真当牧师,他们会跟我拼命。而且我又是一个没有智慧的人,如果做神的工,总让别人受试探怎么办。我特别不足,没有信心。真正受到神的召命是在 2006 年 8 月 16 日晚上,那是修炼会回来的那天晚上。在神面前,呐喊的祷告了 2,3 个小时,总跟神求梦想。神最后给我恩惠,听到心中微微的启示:“小琴,你要去中国的南方开教会,我会引导你,你在学习中,我也会让你的成绩非常出色,我也会在很多人中抬高你。”从那之后,我真正地受到召命,从此我能大胆地宣布我要当牧师,然而我爸爸妈妈说,如果我当牧师,他们会不要我这个女儿。因为那样的话,他们的期望就都泡汤了。但是过了半年,他们开始能理解我,只是让我把家里债还清之后,再做神的工。

走到今天为止,我真的特别感谢神,因为他抓住了我,而且使用我,我感到特别的荣幸。现在,自卑感和忧郁症也得到了彻底的医治,在学校,还拿了 60 万奖学金,现在已经是大学 3 年级的学生。我要当牧师,希望用我的一生,去做神的工。只要神认定我的话,我会付出我的一生。通过我,让更多的人认识神,通过我,神改变他们的人生,我想把这一切当作我人生最大的荣耀……

③【快乐的标杆】(晓静)

童年的时候心境总是纯纯的，如同一张透明的白纸。似乎把书读好，每次测试能考到一个比较理想的分数，得到老师一个好评，或者父母一个嘉许的微笑，自己就成了世上最幸福的人。因此，为了下一次能再取得那么一点小小的胜利，加倍努力着，努力着。在整个童年里，它看似微不足道，却让我整天沉浸在一种成功的喜悦当中。这种味道不错的感觉，又像加油站，化作驱使我前进的动力，让自己成绩高升不下，蒸蒸日上！每提高一次，把自己那个标杆再往上挪一挪，不多不少一个刚好的位置。自信和满足伴随了我的整个童年。

随着时光飞逝，记不起是从哪天开始，绿给了我发展，红给了我热情，黄教我忠义，蓝叫我以高洁，粉红赐我以希望，灰白色赐我以悲伤……。那张曾经透明的白纸已经有了色彩。自己也从小朋友角色中圆满“毕业”。开始了人生的又一个角色，带着连串的幻想，置身来到了日本。涉世之初的我，突然感觉这个世界的驳杂。天生就争强好胜，自命清高的我，感觉总有点“晕”了，不知道如何把握自己，不知道该如何来扮演这个角色，不知不觉之间有一种生物学范围外的细菌在一天天地加速繁殖。终日野心勃勃，总设想自己正站在了一块极富有弹性的跳板上，用力踮一踮脚尖就能蹿到一个老高的地方，可以轻松跃过其间漫长的艰辛，忽略一次次的失败带来的挫折。就像长臂猿伸手即可摘那挂在树枝最高处的名叫“成功”的果子。

然而奇迹终归没有发生，也不见幸运星即将来临的征兆。反而曾经熟悉的笑脸被包装的严严实实，隐藏在梁柱上。自己极端渴望的一切离自己好远好远，那距离都得用光年来计算了。这使我终于陷入郁闷和痛苦，自卑与无助之间。然而跳板还是那跳板，多少次的跳来跳去，却始终还站在最初那个起点上。以前虎视眈眈的 tiger，现如今简直像个“病猫”。我再也没有勇气和力量了。我开始否定自己，开始怀疑充满激情的未来。

我找不到方向了，我担心，忧虑，想逃。在我想要放弃时，有光向我显现说：“孩子，到我这里来，我是你的藏身之处；我要教导你，指示你当行的路；我要定眼在你身上劝诫你。”（诗：32-8）。翻阅着那本写着曾经的记事本，回想着那些沉重的日日夜夜，体味着我通过努力留下的一个个深深的小脚印，我哭了，也搞不清为什么，眼泪一直往下流……

细思量起来 我根本不认识自己。期待值过高，就像 100 个台阶，那长翅膀的也不可能一步跨越。从此信仰成了我的镜子，我开始能看清自己，重新立起标杆。渐渐的，那张久违的笑脸又二次“开业大吉”了。迷茫中，神牵着我的手，让我找回了快乐标杆。我又回到了那个起初的动作，每次挪一两个刻度，使它一直处在头顶上一个恰当的位置。有时会控制不住自己偷偷地超标，他看我又有小动作，甚可爱，笑一笑，严肃地提醒：“你超标了”。又被发现了。我缩缩脑袋，将标杆再放下来一点。

他那里温暖，包容，充满爱意；他那里有勇敢，自信，博大充满力量；他的双臂为万人张开。

来吧！亲爱的~~！

④【一封家书】(晓静)

亲爱的老爸老妈：

你们好！

好久没有提笔写过信了，家里一切都好吧？我在这边每天忙忙碌碌，很充实，生活也挺顺利的，你们不要太为我操心。虽然经常打电话回家，可还是一直想写封信给你们，没什么别的，跟你们聊聊天！

今天是星期天，我在教会做了礼拜。教会很好的，在我无力的时候，我可以从信仰上得到很大的力量。而且我喜欢那里的赞美，喜欢沉静在年轻人由衷的快乐当中，我急切的渴望自己能快快成长……，看着这几句话，妈你是不是又想说，“这野丫头，又开始犯傻了。”但是随着知识的积累和经验的增多，我确实是在教会里学到了很多在学校学不到的价值观，渐渐的我开始思考着自己要追求的东西，不断地发现自己，更新着自己，这也许就是成长吧。

爸妈，你们养育我长大成人，为我操碎了心，借着这封信，女儿打心里说一句“谢谢你们的养育之恩”。爸，记得上次回国，您对我说了这么一句话“好像是长大点了”。当时我突然顿了一下，紧接着调皮地转移了话题；但这句话永远地铭记在我心中，你知道吗，爸，长这么大你没打过我，没骂过我（我把这件事归为我人生的奇迹之一），从小到大，无论我表现得多么出色，你从来没有夸奖过我，其实我特别希望得到您的一句评价。妈妈总是念叨您太惯我，但对于我来说，你又特别严厉。说实话，一个孩子的成长能够赢得一位父亲的肯定是一件非常值得庆幸的事情，至少我这么认为。

时光飞逝，留学已经3年多了，在异国他乡这个特殊的生存环境中，我开始品味“家人，父母”这几个字眼，寻觅着“无私的爱与奉献的博大”。经常一个人静静地坐下来想一些事情，然后回忆起你们的背影，平凡的不能再平凡的普通老百姓的背影；当生活的一幕幕在我脑海中回映时，我稍微能理解一点“平凡而伟大”的含义。全封闭式教育的高中生活，只有星期天可以回家，每次返校时，爸你再忙都会送我上车，叮嘱我“吃好饭，睡好觉”。我只是满口答应，并不理解是啥意思；等车走远了，从后车窗，我看到您还站在那里，那时候，我自己心理嘀咕，怎么跟朱自清的小说似的，但我还是找不着感觉，不能理解作者为什么会流眼泪。当时我只知道好好学习，高考提名，为我爸脸上增光，自己也威风，多好。现在想想真得很稚气。感谢留学生活，让我学会了照顾自己，从容中体会到了想家的感觉。

日子一天天继续着，然而生活的海洋中总免不了波澜起伏，你为了给我送钥匙，在回家路上发生了交通事故。当我走进病房，看到您躺在病床上的样子时，我的心揪成一团，呆呆地站在那里，不能说一句话，脑袋里只有一个念头“没事儿的”，那时候我完全处于钝化状态，浑身上下每一根神经都蹦得铁紧，真的是不知所措。在麻木中度过了两天之后，我要返回学校，走之前，我终于按捺不住自己，好像要迫切地寻找到什么似的，鼓起勇气，扭头向您那双曾经炯炯有神的眼睛望去，满是疼爱，呵护和期盼的眼神将女儿的心刺透，我的心真的痛了，为什么，为什么会这样？那时候我多么恨自己。眼泪成串成串地往下掉，那一刻，我知

道我该长大成人了，我要自立，要坚强。在那段日子里，爸你就像一个孩子，什么都不求，似乎有爱人孩子在身边，有一日三餐就足够了。突然我发现人竟然是如此容易满足。两年多的时间，妈妈一天不差的，从无怨言的帮您泡脚，用爱和呵护将您扶起，那坚强忍耐，宽容的心真叫我感到有你们我是如此幸福。我知道那其间的辛酸不是用语言可以表述的。

雨下过了，地皮会湿；风吹过了，树叶会落；事情发生过了，会留下痕迹。这场大风雨过后，突然发现你们脸上流露出些许世事的沧桑。但家中的氛围却越来越柔和，温馨。仔细想想老妈真是一个懂得生活，懂得爱的人。以前我总是羡慕老妈怎么会“钓”上这么英俊又能干的老爸，现在我想说，老爸能有这样贤慧妻子是今生最大的幸福。一个温馨的家是爱的见证。

爸妈，天渐渐冷了，你们要照顾好身体。女儿已经长大了，能够管理好自己的生活了，学校也挺好的，不用担心。马上放假了，我就回家跟你们一起过年。

最后祝你们每天身体健康，心情愉快，更加恩爱。

此致

敬礼

爱你们的女儿

⑤【一番美しい希望と思い出を残すために】（暁静）

世界の他の国の子供と同じように、私の少年時代は日本のアニメや漫画の中で過ごした。これはたぶん日本の一番の魅力だろうと思った。

高校を卒業してから、日本留学のチャンスを得た、私は幸運であると思った、回りの友達も皆私のことを羨ましがった。誰でもこのようなチャンスがあるわけではないからだ。日本にやってくる、一番感動したのは桜だった、満開の桜をみるだけで満足してしまう。また綺麗な空気、便利な交通、礼儀正しい人間、このような日本にいと、好きではない人がいないだろうと思う。

早く日本人の友達を作り、いい思い出を作りたいと言う気持ちのなかで、私の留学生活ははじまった。しかし、現実はなかなか甘くはなかった。初めてのアルバイト先で、自己紹介をした私に「ペヨンジュ、してますか」と日本人の先輩に聞かれた。「彼は韓国人ではないか」と言ったら、彼に「中国と韓国は違うんのか」と言われて、ショックだった。歴史問題で中国と韓国の反発がこんなにテレビで取り上げられているのに、彼は区別できないことに驚いた。

少し日本人の若者と接触したら、やっぱり中国人と違うなと思った。たとえば、10代、20代の若い女性は若いうちにすでに芸能界で活躍し始めることが本当に素晴らしいと思う。アルバイトをするチャンスが多い日本では、若者が若いうちに社会と接触でき、社、会からの学びが中国人よりずいぶん多いことが羨ましく思う。しかし、私から見れば、自分の好きなものを手に入れるために、自分のおしゃれだけを考えて、一生懸命に頑張っている彼らは、自分以外のことに無関心すぎるのではないかと思う。

最近、日本で中国人の愛国心が嫌がられているように見られるが、私は愛国心があることが全然悪くないと思っている。なぜかというと、愛国心があるこそ、祖国の未来がいつも自分の心にある。帰国したら、国に役に立つ人間になるという思いが留学の原動力になっているからだ。このような思いを持っている人は私だけではなく、ほとんどの中国留学生はこのように思っているだろうと思う。

このような日本人の若者と中国人の若者との考えの違いが、友達になりにくい原因の一つではないかと思う。

だが、日々日本人と接触している私はいつも皆の優しさに感動してしまう。

去年大学受験の時期のことだったが、あの日々はあまりにも忙しくて、ご飯を食べる余裕もなかった、しかし、一緒にアルバイトしている日本人の友達が毎日お弁当を作ってくれて、いろいろな相談にも乗ってくれた。「青春対話」という本をくれた彼女は「これ、力になれるよ」と私に言った。試験は不合格だったが、彼女から家族のような温かさを感じた私は涙を流した。

その後、私はもう一つ有名な大学をうけたが、不合格だった、受験のことを通して、日

中の受験制度の違いを痛感した。

中国では全国統一試験以外に大学に入る道がないことに対して日本では、大学選択のチャンスが多らしい、けれども、この制度になれない私たちのような留学生にとっては、どこで何をうけたらいいのかわからないことが多い、お金持ちではないから、すべての学校を受けられる可能性はない、結局、自分のレベルに相当する学校にいけなかったことがしばしばである。いい成績を持って受験に行く人が多いのに、一人も採用されないことから、日本の大学受験制度の不透明さを感じた。

実は私がその大学をうけたのは偶然なことだった。この学校でいい勉強ができるとは思わなかったからだ、しかし、キリスト教と出会って、私は変わった、自分の価値観がはっきりしたし、今の自分をきちんと受け止めることができた、このおかげで、今の私は皆と仲良くし、生活も学習も充実している。留学生活ではまだまだいろいろな困難があるだろうと私は思っている。

最後だが、今日の発表はきっと自分の人生のいい思い出になるだろうと思うが、これより、中国人も日本人もお互いに理解が深まって、国境をこえて、愛し合う人間になってほしいという私の希望が分かればうれしいと思う。

⑥【一番大切な人へ贈る言葉—私の祖国に伝えたいこと】（暁静）

「祖国を愛しています。私は小さな存在でこの一生をかけても貴方に何もしてあげられないかもしれない。しかし、この私の心を捧げたい気持ちはわかってほしいのです。」

小さい頃から、私の成績はいつもよく、学校の活動も常に参加していて、自信満々な子供だった。生活にも、未来にも、希望を持って頑張っていた。自分はきっと素晴らしい人生を送れると信じていた。私の祖国はまだ豊かとは言えない、しかしこの堂々たる大国は夥しい動乱と苦難を経験して、今やっと落ち着いた段階に達しようとしている。このことを考える時、私の心はいつも熱くなる、いつか自分の祖国のために力を尽くし、自分なりの生き甲斐が実現できるようになったらうれしいと思う。このような気持ちは私が頑張ろうとする時に、いつも一つの原動力になっていた。

高校卒業後、日本での留学生活が始まった、当時の私にとって、それは人生の飛躍であると思った、勉強も経済も両立できるし、視野も広がる。日本でアルバイトをして、少しお金を稼いで、国内の私と同じ世代で学費が払えないため、学校へ通うことができない子供を一人でも助けられれば良いと思った。

家族と祖国の別れを告げ、留学生活が始まった、この生活を一生忘れることはないだろう。この4年間、毎日軍事訓練のような状態になって、私はまったく別人になったように感じる。自分の日記を開き、昔のことを思い出すと涙が出そうになる。私は自分の存在の小ささを感じながらも生きている実感に浸っている。毎日経験している事はたいしたことではない。それでも、このような日目の積み重ねがあるからこそ、私は毎日の生活感を味わい、反省しながらも成長していることを感じている。圧倒されるような現実と想像を超えるような困難の前で、それでも感謝したくなるような自分を感じるたびに、私は天才ではなく、世の中の普通の一人であると思う。

ある夜、歩きながらいろいろなことを考えていて、気づかずに一つ石のせいで、転んでいた、座り込んだまま、その石を見て、心を打つものを感じていた。足元の石を避けなければ前には進めない。祖国に力を尽くす前に、自分のことをまず整理しなければならない。自分は祖国の荷物にならないようがんばらなくてはならない。

このような考え方は、自分が成長したためか、それとも気が弱くなったためか、わからない。でも私の祖国への熱心さはますます強くなっている。

「祖国を愛しています、しかし、私は本当に小さな存在です。ただ私のこの真摯な気持ちをわかってほしい。」

⑦【文珍の発表】(文珍)

1. 反日という言葉にとっても抵抗感(抵抗感)を持っています。

まずは、中国でこのような使い方(つかいかた)はありませんし、はじめは意味さえわかりませんでした。日本へ来て初めて知った言葉(ことば)です。つぎに、反日の歴史資料というものをよく探(さが)しましたが、中国にはありませんでした。あったのは日本の軍国主義(ぐんこくしゅぎ)に反対(はんたい)するものだけでした(それは第二次戦争の時のことでした)。最後に、現代(げんだい)の日本については、反日というより親日という教育をうけたことは私の実感(じっかん)でした。(日本の製品(せいひん)の宣伝(せんでん)とか多かったですし、悪いことを宣伝してなかったと思います。だから、私たちも日本留学があこがれていました。

2. 戦争の加害者と被害者はだれですか?ということ考(かんが)えましょう。

A: 日本の教科書(きょうかしょ)にどう書いているかわかりませんが、すくなくとも中国に進出(しんしゅつ)ということを書いているでしょう。また、確認(かくにん)していませんが、中日戦争(ちゅうにちせんそう)と書いていると聞きました。また、最近のニュースによると、フィリピンで戦争にのこされた日本兵(へい)が発見(はっけん)されました。それでは、まず日本人は他の国に何をしに行きましたかということを考えてください。しかも、武器(ぶき)も持って行ったということはどんなことでしたか。

B: それに対(たい)する中国の教科書には、それを侵略戦争(しんりゃくせんそう)と書いています。われわれはそれを信じています。そのなかには代表的な(だいひょうてき)事件(じけん)がたくさんありますが、ここで二つをあげます。1つ目は南京大殺戮(さつりく)すること。殺された人は30万いたと記述(きじゆつ)されています。2つ目は日本の731部隊(ぶたい)のことですが、それは中国東北地方の人を捕ま(つかま)って(つかま)って)ひどい人体実験(にんたいじっけん)をいろいろした(ぶたい)でした。そのデータを日本の軍医(ぐんい)は日本へ持って帰ったのです。

「三光政策」とは日本人はあのときに中国へ行ったところ、「三光政策」(さんこうせいさく)が実施されていました。(さんこうって、家を焼きつぶすこと、人を全員殺すこと、ものを全部奪(うば)う(うば)う)ことです)

「日本鬼子」とは戦争の双方(そうほう)には敵軍(てきぐん)と呼ぶのはふつうのことですが、当時(とうじ)の日本軍(ぐん)は「日本鬼子」と呼ばれていました。「鬼」(おに)は日本語にもある言葉(ことば)です。どんなイメージは想像(そうぞう)してみたら、中国の人たちがあの「日本鬼子」をどれぐらい怖(こ)がっていたこともわかるだろうと思います。

以上のことは反日映画で見たこともありますし、親たちやおじいさんたちから聞いたこ

ともあります。また、いまでも、いろいろな当時（とうじ）の写真がみられますし、博物館（はくぶつかん）もあります。ひどいのは東北ではつい二年前に化学武器の爆弾したことによって、被害者（ひがいしゃ）もでてきました。いまは日本側と中国側は一緒にその問題を解決していますが、だいたい30年以上かかると予想（よそう）されています。

C：それなのに、中国はどのように日本へ対処しましたかということを見ましょう。ここで三つのことだけのべさせていただきます。

- ① 戦争の賠償（せんそうのばいしょう）に関して、周恩来総理は中国を代表して一円も要求しませんでした。それについて、中国の人はだれも文句（もんく）を言いませんでした。当時（とうじ）の中国はそんなに貧困（ひんこん）なのに、中国の国民は文句（もんく）を出（だ）そうとするということは考えもしませんでした。なぜかという、戦争を起こした人と日本の国民を分けて考えているので、どうじの日本も中国と同じようにすごくかわいそうでした。食べ物さえありませんでしたから。
- ② 残留孤児（ざんりゅこじ）のことですが、中国人はその自分の親戚を殺した人の子どもを自分の命をかけて育てて守っていたことが、日本のいろいろな記事にもあると思います。見たらすぐわかると思います。すくなくとも「大地の子（だいちのこ）」という映画から何か分かるでしょう。
- ③ 1978年中国の周恩来総理は日本に友好（ゆうこう）の手を出して、友好を求める日本人たちと一緒に友好条約（ゆうこうじょうやく）を締結（ていけつ）しました。中国の国民（こくみん）はどれほどうれしかったです。だれも侵略（りんりやく）された国と友好になるなんてというような考えを聞いたこともありませんでした。なぜかというと、うちの総理は両国の将来のことを考えていたからだとも私たちは思っています。でも、残念ながら、①に関しては日本人たちはあまりしらないようです。②に関してはもっと不思議（ふしぎ）に思います。本当は日本人なのに、中国人は自分の子どもとして育ったことに対して（たい）して、自分の国でまわりの人に日本人とされていないことです。③に関しては、中国の製品（せいひん）を制限して、自分のものを中国に輸出（ゆしゅつ）することによって、実は大きな利益（りえき）をえたほうは日本です。

3. ODAをめぐり

ODAをめぐり、テレビから日本のかたがたのいろいろな発言（はつげん）を聞きました。一番印象深い（いんしょうぶかい）ことですが、日本のかたはほんとうのODA意味を知らない人はおおいことです。ここでその意味を説明するつもりはありません。

しかし、一つ誤解（ごかい）されたのではないかと思うことを説明（せつめい）します。日本のODAが中国の経済発展（けいざいはってん）にたしかに大きな役割（やくわり）を果たしたことに中国の人民は感謝（かんしゃ）します。

だから、中国は日本から借りた（かりた）お金とその利息をきちんと返しています。それをただで使おうと思っと思っています。いろいろなデータからみれば、日本バブルの崩壊（ほ

うかい)に伴い(ともない)、色々な投資(とうし)は泡(あわ)になってしまったことに
対して、中国への ODA は一番知恵(ちえ)がある投資(とうし)だとされています。(こ
れはにほんの専門家たちの分析(ぶんせき)からの結論(けつろん)だ。しらべてみたら
わかるとおもう。)ここで、ODA は無償(むしょう)ということに注意(ちゅうい)して
ほしい。

中国はゆたかではないが、自分よりまずしい国に同じようなこともできるだけやってい
ます。ODA といういいかたかどうかわかりませんが、中国の人から文句(もんく)を私は
聞いたことはありません。皆がそれはあたりまえだと思うからです。

(ここで、ODA とはなにか皆さんにしらべてほしい。それと、日本はゆたかになるのが国
民の勤勉(きんべん)だけは原因(げんいん)なのかということもかんがえてほしい。)

4. 靖国神社(やすくにじんじゃ)の参拝(さんぱい)は被害者(ひがいしゃ)の感 情(かんじょう)を考えましたか?

参拝(さんぱい)はすべきかどうかに関(かん)しては、日本国内(こくない)でも一致(いっち)
していません。でも、参拝(さんぱい)は中国国民(こくみん)の感情(かんじょう)を傷つけている
ことが事実(じじつ)です。私もそう感(かん)じています。

まず、どうして A 戦犯(せんぱん)をそっちに一緒にしたのかということにわかりませ
んでした。なんか殺人犯(さつじんはん)でも死んだら神(かみ)さまになるからという
日本人(にほんじん)のはなしをききまして、すごくびっくりしましたが、それはほんとうですか。

でも一緒にしたのに、戦犯(せんぱん)をさんぱいしないといういいかたもでてきまし
た。それでは、分けてしたほうがいいのではないかと提案(ていあん)したら、それもだ
めですよ。

そこには、ひとつずるい考え方がみえるしかありません。それは、そうしないと理由は
(りゆう)はないのだということでしょう。それこそ、中国の人のところを傷ついたので
とおもいます。

このように人にきずついた加害者(かがいしゃ)から、被害者(ひがいしゃ)に理解(りかい)をもと
めることは実はおかしいと思いませんか。実際(じっさい)はもとめもしてなかったでし
ょう。

すこしひいてみたら、日本は本当にかわいそうにみえます。なぜかという、このよう
なことは中国人(ちゅうごくじん)の感情(かんじょう)をきずついただけですよ。でも、このような行動(こう
どう)はほんとうに日本の国家利益(こっかりえき)を代表(だいひょう)しているの
かとおもうと、日本の未来(みらい)を心配(しんぱい)しています。

以上

以上は私個人の考えですが、専門家(せんもんか)の解釈(かいしゃく)を添付(てんぷ)

して、ご参考（さんこう）ください。こころをあけてはなしをしましょう。

【文珍の資料】

【2005年6月5日皆の話し合い】

夜7時半になると、和室の会議が終わり、皆中から出てきて解散した。「反日についての宿題」を聞いた大宇は「あれは反日じゃない、反小泉だと思うよ。それを修正してもらわないとだめだよ」と発言した。彼の声が大きすぎるせいなのか、椀儀と暁静、もう一人の朝鮮族の女の子（名前わからない）が興味深々に集ってきた。

椀儀（隣の机に座っている）：「真実を言うべきだと思う。昨日は学校の帰りに前に歩いていた日本人女の子が二人いて、彼女らは第二次世界戦争のことを話し合っていたようだ。よく聞いたら、一人はもう一人の女の子に「A級戦犯」や「戦争の経緯」や「靖国神社に戦犯を合祀」などを熱心に説明しているらしい。もう大学生なのに、なにも知らなくてびっくりしたが、それより本当に彼らは洗脳されたようでかわいそうに思っている。他の国の人と交流は難しいでしょう」

文珍：「うちのグループは中国人の留学生が二人しかいないが、もう一人はもう日本に長いから、いつも日本人の立場でものを考えている。今日本にいるから、本当の事を言ったら、だめだと言われた。日本語で話せないのも、ただそばで黙って聞いた。彼女の考えには賛成しないが、自分はなにも話せないから、悔しいばかりだ。」

大宇：「どう言っても、戦争を起すことだけでも、大きな間違いだよ。だれにも人の命を奪う権利がない。神様さえもそのようなことをしないのに、罪深い人間だよ。」

朝鮮民族の女の子：「あの最近よく番組に出てくるお爺さんは知ってます？ 禿げている。番組を作るためにお金で雇ったキャラクタなのか？ 強引に黒を白にする話ばかり、本当に笑うよ。」

暁静：「彼は三宅さんだ。有名な評論家みたいだが、右翼分子だから、そんな発言をする以外にできることはないんだ。彼のような人が大勢いるよ。戦争を起した人たちが処罰されたが、その財産の基礎が動いてないよ。だから、今の政治を握っている人たちは、その人たちの子供や孫ばかりだ。革命は徹底的にやらないと本当の民主は庶民には永遠に届かないものだし、まだ戦争を起す危険がある。」

大宇：「ある本に書いている日本人の恥意識では、ものを盗んだ人だったら、だれも知らなかったら、自分もしなかった感覚になるが、一旦ばれたら、もう恥ずかしくて生きられない。だから、罪を認めないというより、認められなくなるのではないか。雪印、牛肉の件とか、一旦報道されたら、ほとんど大きな事件になって、社長から謝罪をして、自殺する人もいる。」

椀儀：「よく考えたら、アメリカの映画でベトナム戦争に行った人たちの中には精神病に苦しめられた人が多かったが、日本人はそういう話が少ないようだ。やはりアメリカは『聖書』の影響があって、罪の認識が違うようだね。だけど、罪を認めない限り、天国にいけない」

暁静：「非常に矛盾した国だね。バイト先のおばさんは中国が大きくなったら、日本が呑まれるかもしれないとよく言う。なんでも日本のほうがいいと言う一方で、被害妄想症も広がっているようだ。あの先日のフィリピンから帰国した戦士は可哀そうだと思うかないか。戦争を必死に否定している今の時代に聖戦から帰ったあの人を見て、日本人はどう思うのかな。だから、私たちは日本のため、中国のため、絶えずお祈りをしないといけない。」

椀儀：「これは日中の若者が意見を交換するいいチャンスになるかもしれないので、文珍は言いたいことを言うのが留学生の役目だと思うから、頑張ってくださいね」

ずっと黙って聞いていた文珍は、「少なくとも中国人は意見を統一しないとだめだと思うが」と言った。

⑧ [将来の計画書] (解放)

「将来」、この言葉は子供にとって、大きな夢であり、大人にとって、現実な夢であり、お年よりにとって、この言葉はたぶん意味がないだろうと思います。

私にとっては、日本へ来る前に、将来の理想や計画などはとても簡単な考えでした。「お金」、「お金」、一生懸命に仕事をして、お金をたくさんためて、会社を造って、社長になることでした。

日本にやってきた一年後、聖書を読んでから、クリスチャンになりました。その時から、「生きがいは何ですか」と「将来は何をしますか」というこの二つの問題の答えをやっと見つけました。

将来の目標は経済専門家になることです。自分の力で世界中に貧乏な人々の手伝いをしたいと思いますから。さらに、キリスト教の信徒の信仰基金と留学生の学習基金を作りたいです。

このような目標を実現するために、4つのステップが必要だと思います。

- 1、一生懸命に勉強することです。
- 2、大学に入って、社会福祉事業を勉強して、同時に留学生学習基金と信仰基金を成立させることです。
- 3、卒業してから、日本の会社に入って、経験を身に付けることです。
- 4、自分の会社を成立させることです。ここから愛の福音を世界へ広げさせたいです。

目標を達成するために、まず、一生懸命に日本語を勉強しなければなりません。日本語が上手になったら、大学受験を目標にして頑張らなければなりません。

目標の第一歩が実現できる自信を持っています。5年か6年かかって、全部の目標が実現できるだろうと思います。もし、皆様のお祈りをいただければ、なにより、うれしいことだと思います。

⑨【願書の理由書】(解放)

私の父は農民である。私は農村で生まれて、純朴な生活環境で成長してきた。私は社会に愛が満ち溢れていると思い込んでいた。父は小さい頃から、ずっと正しい人間は誠実でまじめであることを教えてもらった。そして、私は父の教えたとおりに生活してきた。

しかし、日本への留学手続きをした時に、仲介の人から、現在の中国の一部の学生は日本で先進な技術と知識を勉強したいが、来るために色々な手続きを偽造しなければならないと聞いた。これに対して、いくら考えても分からなかった。ただ日本へ勉強しようと思う学生たちはどうして自分の本当の姿を隠さないといけないのか。同時に、国と国の間はまだ閉鎖的であることを感じさせた。このような社会現状をどのように変えられるのか、それとも社会の国際化をそのように増強したらいいのか、様々な国の人々は行き来する自由が擁することが出来るのかということを究明したいのは私が社会学を勉強するきっかけだと思う。

今年 5 月、テレビで中国の大規模な反日デモが行われていたことをみた。この原因は小泉の靖国神社の参拝にあると思った。その時に、一人の日本人の友達が見て、納得できずに私に質問をした。中国の大学生達はなぜ過去の歴史を始終心にかけているのですか？ どうしていつも忘れられないのですかと私はなにも答えなかったが、そのきっかけで私は深く考えた。どうして両国の人たちは一つの共同認識の中に平和と愛の世界を建設することができないのかと分かりたくなった。もし、私たちはキリストのように愛の心を持っていれば、世界はよくなるのだろうと思った。

私たちの生存空間においては、まだまだ貧富格差や犯罪などのようなよくない現象がある。私の勉強の目的はどのようにこの社会を理解し、この社会を変えることである。

私は農民の息子であることを一生忘れない。社会学部で勉強した知識と自分の努力で中国の農民の現状を変えようと思っている。また、キリストの愛を抱いて、努力を尽くして世界の平和に人生をささげようと決意した。

⑩【先生への手紙】(解放)

先生へ、

このやり方は、ちょっとびっくりするかもしれませんが、私の気持ちを伝えたいだけです。私が貴校を希望したきっかけをこれから短く述べたいです。

私の日本語の能力のせいで、今回の試験はあぶないと思いますが、来年4月なるまでに、きっと上手になるように頑張ります。

実、私は来年、4月に帰国してから、今通っている日本語学校の校長と一緒に中国で日中友好学校を立てるつもりでした。そのために、私は日本で日本語能力試験などをとらなかつたです。

自分の情熱を持って国へ帰って学校を立てたり会社を作ったりしようと思いました。そのために、私もほかの留学生と一緒にアルバイトしながら、頑張りました。

私は運がよかったから、G 電機会社でアルバイトをするようになりました。あそこの日本人はみんな私に優しくしてくれました。いつもジュースも買ってくれました。短い間で、一階の警備、三階の事務所の人とみんな知り合いになりました。私が会社のホールに入ったら、皆さんが「解放来たね！」と喜んでました。

また、そのビルの韓国人、台湾人、など、たくさんの外国人と友達になってました。その中で、すごく偉い人もいました。

私は未来世界の舞台で、貧しい人、困っている人のために、貢献したいと決心しました。

ところが、9月2日晚、ある人の話にはがっかりしました。知識もないし、お金もないし、日本語も上手ではありません。ただ情熱で何かしようとするのは、ぜったい無理だ。今はまだ若いから前向きな人とみんなに認められるが、10年後、何の変化もなかったら、競争に負けるしかないといわれました。私はその晩に決心しました。先にある程度知識を求めてから、自分が持っている情熱を加えて社会に役に立つ人間になろうと決心しました。私は大学に入ろうとしました。

それから、学校へ行って、校長と帰国建校計画を取り消して、また、アルバイトも止めて、一所懸命に試験のために勉強してきました。

アルバイトをやめたときに、リーダーは私に手紙で「試験終わったら、また来てね！」と親切に書いてくれて、本当に「何で、日本人はこんなにやさしいか！」と思いました。

私の隣にこんな親切な人が一杯いて、本当に力になってくれて、感謝の気持ちが一杯です。

今、日本語がちょっとまた下手ですが、4月まで何とかできますので、ぜひ機会を与えてください。

×解放より

(以上は解放から面接の先生に出したい手紙の第1版でした。第2版は私(筆者)がこ

れを読んで、彼の書いた中国語の手紙を対照しながら、彼の気持ちを漏れないように日本語に修正したものでした。)

⑪【演説原稿】(解放)

皆さん、こんにちは、私は中国からの留学生の解放です。日本へやってきてもうすぐ 2 年間になります。現在は××日本語学校で勉強しております。

大分前から校長先生からも、新聞からも、○代義士は中国国民に非常に友好的な政治家だと聞いております。今日は義士にお会いすることが出来て、本当にありがたく思っております。

この出会いをきっかけで私は一つの決心をしました。○代義士と同じように世界平和の掛け橋になりなくなりました。日本の国民は礼儀正しく、中国の国民と同じように平和を願っていると思っております。私は中国の青年の一人として、短い人生の中に、中馬代義士とうちの校長先生と同じように社会に貢献できる人になりたいです。

愛が与えるものです。それをまず知れば、世界は明るくなると思います。

⑫【ラブレター】

小村さんへ、

こんにちは！

私たちは正式的に付き合い始めたのがバレンタインの日だったでしょう。あれから一人でいる時に、もし今年ではなくて去年のバレンタインに君と知り合ったら、どれほどよかったらうとよく思いました。残念ながら、これは神様の意志かもしれないと思うしかありません。

小村さんは日本人、僕は中国人、二人は違う国の人で違う言葉を使っていますが、僕は小村さんのことをよく分かっていると思います。これからももっと知りたい気持ちがいっぱいです。小村さんもきっと僕の気持ちがわかっているだろうと思っています。

短い間ですが、二人で楽しい話を一杯しましたね。たまには小村さんは僕のことを子供としてみていたと思いますが、もし本当に僕がまだ子供のままだったら、小村ちゃんを追っかけしないはずだろうし、結婚の話も必ずしないはずだと思いませんか。僕は本気なので、この僕の気持ちを真剣に伝えようと思って手紙を書きました。

僕の性格は明るい外向的なタイプだから、友達が多いです。その中には実際に僕のことを好きになって告白してくれた子も結構いました。しかし、僕は今までだれとつきあったこともありませんでした。自立できるようになってから、そういうガールフレンド作りを考えたこともありませんでした。僕にはもっと大きな夢があるので、そのために一日24時間に平均4、5時間の睡眠以外に毎日一所懸命に仕事をして来ました。僕は優秀な企業家になり、世界の舞台に立つことを目指しています。当然、これは非常に難しいことだと分かっています。でも、僕はこの永遠に変わらない目標に近づくためにしっかり頑張っていこうと決心しました。従って、飲むことやカラオケなどのような友達からの遊びの誘いにはほとんど断りました。このような時間を投資に使いたいと思います。僕は自分の将来に責任感を強く感じています。両親も友達も皆僕を見ていると自覚しているからです。

周りの友達は僕が天真爛漫しすぎるとよく言っています。日本人は感情の扱いに関しては非常に現実的で冷淡的だとよく言われるからです。でも、僕は小村ちゃんがとても誠実で質朴な女性だと思っています小村さんの可愛い笑顔と成熟な性格にとっても魅力を感じています。僕は小村さんのことが好きです。だから、僕は小村さんと結婚したいです。

僕は3月18日に帰国する予定なので、日にちを逆さに計算すると、後は27日しかありません。時間が経つのは本当に早かったですね！この間に西村さんに決めていただきたいことがあります。僕と結婚したいですか。こんなに急いで決めていただくことはすごく強引的だと思います。でも、もし僕は帰国したら、きっと忙しくなるだろうし、私たちの間にはコミュニケーションがうまく取れるかどうか自信がありません。日本へ再びくること

もとても面倒くらしい。でも、ひとつだけ誤解されたくないことがあります。小村さんとの結婚はビザのためではありません。もし、僕は本当に日本にいたいと思ったら、学習を続けて卒業後にこの一杯の情熱で大手会社で勤めることは難しいことではないと思います。そのほか、今の工場でも学校でも就職するという手もあります。

確かに国際結婚は僕にもむずかしいことだとずっと思いました。でも、いろいろな結婚した家族の幸せな生活を見ると、少しは考えが変わってきました。実は僕の周りにも日本人と結婚した人が結構多いことに小村さんに出会ってから気づき始めました。今度は知っている一人の叔母ちゃん（日本人の男性と結婚した）とお兄さん（日本人の女性と結婚した）を紹介します。小村さんは彼らにいろいろな情報を聞けると思うからです。実際は予想ほど複雑なことではなく、簡単なことです。今は結婚の手続きをしたら、許可を下さるまで時間もかかります。僕はすこし経済基礎があつたら、中国で盛大な結婚式を挙げると約束します。半年ぐらいのことだろうと思いますが、半年後になると、僕の日本語も上手になると思います。

僕の一方的な考えですが、まず、私たちは結婚証の手続きをしたら結構です。とりあえず、親友などに内緒にします。そうすれば、僕の事業に80%の助けになります。君がいることで、僕の日本語も早く上手になるし、両国の間にたくさんの貿易と情報をやりやすくなります。資本金を貯めたら、日本でも小村さんのために中国語学校や中華料理屋や中国芸術品販売店などが作れます。僕はやはり国際貿易を続けます。（日本は輸入大國だから）

この前に小村さんは僕のことをさらに知りたいと言いました。実は僕の心が清しい水のようにと言えます。まず、私たちは結婚の手続きをして一緒に創業しましょう。来年の8月になったら、結婚式を挙げましょう。どんなことでも複雑に見えるが、一緒に努力すれば、実際は簡単かも知れません。

結末がないことを僕はしません。僕は代価を払う勇気があります。また小村さんに会うときに二人はこういう話をしない方がいいと思っているので、3月15日までに、小村さんのお返事を待っています。もしだめだったら、僕は今のことをすべて忘れて全力でビジネスに飛び込みます。もしOKだったら、具体的なことを二人でゆっくり話しましょう。

では、また！

解 放

二〇〇六年二月二十三日

(小村も解放も匿名)

⑬【做耶稣的见证人】(小猿)

2005年1月16日

今天我将我的信仰是怎样成长的跟大家分享。我原来是和朴哥在一个学校,就是某日本语言学校。朴哥就是那个年纪长点的,挺帅的。他是朝鲜族的,经常听见他使用韩语唱圣歌,当时觉得个挺好听的,韩语也挺好听的,就开始想学韩语了。朴哥也挺好,他就那么开始教我了。当然,那时我根本也没什么信仰,虽然知道了一些词,也喜欢唱,但是基督教这东西我以前并没有接触过,就觉得是和亚洲人,东方人没什么关系,都是老头和老太太参加的会。也可以说是对基督教蒙上了一层阴影吧。

我真正接触到教会是认识了○○他也是朝鲜族人。他跟我说:“大阪有个教会,气氛特别好,去玩玩也行,还管饭,主要是咖喱饭。”回来一身咖喱味,去教会就为了吃咖喱,不算信仰,有什么意思。那时候,朴哥也常对我说,有什么烦恼的话就告诉我。可是我总也没时间,没想要把自己的信仰树立起来。

这期间,圣诞节的礼物交换给我留的印象最深了,我只是想着随便来热闹热闹,没想到要带什么礼物,来了一看,很多人都带了礼物,我觉得挺不好意思的,大家都说“没关系”。那天我得了两双袜子,我挺高兴的。但是我对大家祈祷的时候,又哭又闹,又笑接受不了。我觉得基督徒悲悲切切的,就算是长生也没意思。我们这儿太悲切了。

那时我来日本时间还不长,找了2个月工作都没找到,生活都是靠家里送钱,也挺不好意思的。最主要的是太麻烦,每次10万,20万的,我去银行办过一次手续,太麻烦了。找不到工作,还要来教会,我觉得很过意不去,圣经也不理解,听着听着还犯困。后来我就放弃来教会。但是工作还是没有找到。后来我又去了很多教会,台湾人的,耶和華证人等都有一个共同特点,就是都管饭吃,也很亲切。这个阶段,旬长每给我打电话。我很伤心,你应该打电话问我。在以后的日子里,他又来看我,我看到旬员点检表上写着「很缺乏信心,还很软弱,一直为他祈祷」。但是我觉得你怎么向我祈祷,也不如打个电话。李○○,我想说我很感激他,那正是学校放假,8月修炼会的时候,我觉得自己的信仰还停在初级阶段,好像没得到什么恩惠,又要花好几万不能去。他给我票让我去。在那儿,我又体验了基督徒悲情的一面,大家抱这个,抱那个,显得很痛苦的样子。我不能理解。我还是认为应该充满喜乐才对。

其实回头想想,我不知道,也许我是那时开始树立起信仰的。9月12号,我没来,我病了。旬长给我打了好几个电话,问我吃药了吗,很亲切。我觉得自己不去教会就对不起他。从他的身上我感到了基督徒的爱。可惜,他有一段时间要回国,他走后的日子,我来的特频,老觉得能多看一眼就多看一眼吧。还有一次,我骑自行车受了伤,流了很多血,裤子上也磨了好几个洞。旬长他注意到我,祈祷的时候曲着膝,就凑过来看了看。他说[祈祷结束后,你等我一下,我有话要跟你说。]后来,我等他,他拿了很多药给我。擦的,喷的,胶布等等,都是他现买的。我想这是因为主在他心里,所以他对人很爱。

当然,其它的旬长还有我,也并不缺乏爱,是不知爱怎样表达。丽香旬长,他们两个人信仰都很好,只是性格不同,一个温柔,一个暴躁。李○○旬长每次圣经都准备得很充分,他也是留

学生,也要打工也很疲惫。别人为你付出了,不承认的话那就是对人的一种伤害。他开始一直督促我看圣经,后来不督促了,我也就不看了。人都有这种惰性吧。但是不论怎样,我觉得我见证了李○○旬长,同时我也成长了,自己的信仰也更加坚固了。我记着崔旬长,牧师总是说有一个什么样的旬长,就有一个什么样的苟员。人应该多从自己找原因。应该先试着去了解对方,是什么原因牵拌了他信仰的脚步呢?

人本来就应该是互相相爱的。这里有时好像又存在着一个利益问题。其实,我想你的牺牲和付出是不会白费的。有一些人来了为什么又走了呢?是不是也应该好好问问是谁的问题?我觉得真正地彼此相爱,都非常希望看到大家的脸,只要看到大家,我就感到喜乐。不管他长得丑还是美都是我得姐和哥,都是我的弟和妹。

因为时间关系,今天就到这里。

牧师:

今天听了小猿的话,我们能感到他们体会到了旬长的爱和关心,并且愿意通过旬长了解上帝。人最宝贵的就是生命和灵魂,你们感化了他们,你们已经做了很伟大的事情。是的。他的脚烂了,没有人知道,包括他的父母。而你们却能帮助他,因为他是你们的民族兄弟。所以我们要不断地问自己,有没有同他分享他的痛苦。因为也许正是你们的爱,很多灵魂得到了永生。就比如打电话吧,一周打过几次?是不是像消防士的人工呼吸一样,你们想想,是不是能像他们一样有热情,有勇气。是啊,为什么不给旬员打电话呢?有经验以后,我想你们能做得更好。这些都是非常可贵的事情,是用金钱无法报偿的。我知道,我们很多旬长,常常会做些好吃的,叫旬员到自己家去吃。这对于一个留学生来说,是很难的,但是就有人能做到。最近,我收到了两个旬长交给教会的奖学金,他们把自己的奖学金拿出来希望用来帮助生活比自己更困难的留学生。这使我不由问自己是否真正懂得了爱?我也拿出钱来给你们。目的就是想把爱分享给其他中国人。今天我很高兴,我们有了这许多美好的见证。电话我们一定要坚持打,互相激励对方。

⑭【旬长十大罪状】（小不点儿）

- 1——我不想浪费时间,可是请不要在八点钟就打电话叫我起床上学,我很少梦见亲爱的人。
- 2——遵照您的旨意,我每天记一句圣经的话语,结果,反省了五分钟,我迟到了。出勤率很重要的。
- 3——上周的事我也有不对的地方,我说你炒菜太咸,我是想说下次你给我炒菜少放盐。我的胃现在很不好。
- 4——你说耶稣是为我的罪而死,这让我一直以来很痛苦。我脆弱的心很难承受。
- 5——上周你找人帮我剪头发,我问你剪得好不好,你说很好;我再问,你说挺好,还可以;我再问,你又说给谁看,凑合吧!这让一个风华正貌的年轻人怎么接受!
- 6——牧师讲道的时候,我出去了两分钟,回来后,你闻了闻,问我抽了几根,这让我在上帝面前很没面子。
- 7——看着别人的旬员比我好,别回来后拼命教我圣经,我需要改过自新的机会。
- 8——我取得了一点点成绩,你把我抱得那么紧,身边的女孩子误会了,我可怎么办。
- 9——别总是把我当小孩,这样使我成长缓慢,思维混乱。
- 10——在教会吃东西总说我吃的少,见面又说我胖,这让我有很大的压力。

（『草原』·10期）

⑮【顺口溜】(兄弟教会の留学生)

(之一)

为了出头,浑身欠债。
千里迢迢,跑到国外。
离开了父,亲的关怀。
不见了母,亲的慈爱。
初到日本,打工竞赛。
日语不行,没人青睐。
赋闲在家,百无聊赖。
有人传道,生托死拽。
本想回绝,歇菜歇菜。
反正没事,跟去礼拜。
やばい、我认识了主耶稣的爱。
走进主里,自由自在。
以后生活,不为钱财。
神的国度永远不衰败!

(之二)

有人问我,去不去教会,
我说,不对,我永远属于中国少年先锋队。
有人说,耶稣爱我洗净我的污秽,
我说,白费,我一颗红心向党,没罪。
有人追,说你的灵魂不要在沉睡。
我说,太累,打完工不睡刺激胃。
我固执了年年岁岁。
终于有一天,走进了这个宣教教会。
这地方这好,这地方真
兄弟姐妹有爱心,吃饭不花伙食费。
耶稣基督真珍贵,过去的我真愚昧。
耶稣为我心儿碎,我为耶稣流眼泪。
耶稣基督真珍贵,无可比拟天之最。
愿主为我打破魔鬼累赘,救我脱离灵上旧社会。

(『草原』・10期)

⑩【日記】

2005年10月12日 星期三 晴

——王小

今天是我住院的第9天,在671病房里,每一天都好像在重复着同样的内容。在中国也就罢了,在日本“落难”难免觉得有些低落。

今天因为天气格外的好,心情也就随之放松了一点。躺在床上,什么都可以想,什么也都可以不想。一个人安静的时候,可以让我很容易靠近神,亲近神.难怪那些“不近人情”的弟兄姐妹们总过来“烦”我。是好事,要忍耐。如今是卧薪尝胆,等病好之后,拼出一片天地来,给神争争脸。本公主出了院,全天下的教会就有希望了!

我旁边的病床上住着一位50多岁的老人,这些日子以来,我没有见过一个人来看她。她静静地毫无无情的脸,使我不敢和她对视。日本本来就是一个冷漠的社会,象她这样看起来毫无希望的人满街都是。只是今天吃晚饭的时候,我看着她狼吞虎咽的样子,恻隐之心油然而起。在心里默默地为她祷告起来,也许那份心痛是神的吧!不知道有神的灵魂,无论从这个世界上猎到了什么,都像一个流浪的孤儿一样。

我只吃了一块鸡就饱了,想再次为她祈祷。

上帝呀,你是那么慈悲,在这一点一点的小事上你也来点化我的心,让我在这苦痛的地方看到你对每一个灵魂的爱。

(『草原』·3期)

⑰【成功の密決】(黄)

みなさん、こんにちは。僕は牧師ではありません。牧師の教壇を借りて、みなに証をします。とても緊張しますが、光栄に思います。まず、みなさんがわれわれの教会に来ることによろこそ。先ほど、プロミスの踊りを見てください。すばらしかったです。では、次は皆の時間をすこし借りて、みなに日本でどのように儲けるのかについて話します。まず、自己紹介させていただきます。黄です。立命館大学で勉強しています。日本に来てもう三年たちました。僕も日本へ来てから信仰を持つようになりました。まだ長くありません。みなさんは日本へ来てどう思いますか。日本で勉強しながらお金も儲けられると思う人もいます。日本でお金は儲けやすいのですか？

それなら、私たちは一生懸命にバイトをしてお金を稼ぎましょう。このようにしたら、どんな状況になるのかをすこし考えましょう。一般的には二種類あります。まず、ひとつ目の状況を見ていきましょう。例えば、毎日4時間のバイトをして、時給850円で、休まずにしたら、月102,000円になるでしょう。自分の食事代、家賃などの費用を引いたら、大体月6万の貯金が出来ます。一年だったら、72万になります。皆さんが日本語学校の学費を全部払ったかどうかかわからないが、もしまだ払ってなかったら、この一年の72万円はほとんど出したらなくなってしまいます。10月の学生だったら、一年半の日本語学習になるから、まだ半年の時間があります。この時間はほとんど大学の学費のために一生懸命にバイトをやらなければなりません。でも、一般的な大学だったら、学費がどれぐらいなの？平均一年80万でしょう？入学金は先に30万を出した、残りはどうすればいいの？バイトで儲かったお金はまだ学費に足りないぐらいなんです。当然、おうちにもお金があつて、その差をだしてもらったら、それはまだ別の話になります。じゃ、もう少しバイトをしましょう。毎日夜の仕事をしましょう。このようにすれば、学費は問題がないだろうと考えるようになるかもしれません。

では、私たちは一緒に二つ目の状態を見ましょう。毎日学校以外に、また8時間のバイトをします。時給は850円としたら、月20万円になります。食費や家賃やガス代を引いたら、月15万円残ります。一年間だったら180万円！！多いでしょう。しかし、毎日8時間のバイトをしたら、以下の問題が出てきます。

- ① 入管に発見されると、長時間勤労のため、直接に国に退去させられることになる。
- ② 入管に発見されていない場合だったら、毎日8時間のバイトをしたら、もっと学習をしようとしても、できることなのか？私の経験からみると、その可能性は全然ないんだ。このバイトは事務室に座るだけではないよ。ほとんどは肉体労働だ。とても疲れるよ。すると、もっと学習する時間と精力はほとんどないんだ。バイトが終わると、寝たくなる。疲れて体も動かなくなる。学校の出席率は保証できるかどうか問題になるのに、日本

語をしっかり勉強できるとは思えない。

では、もし私たちがお金を稼ぐことで、大学に受からなかったらどうしたいのですか？それとも、苦勞をして、稼いだお金を全部学費に出して、自分にはなにも残らずに、全部日本人に捧げたとしたら、どうします？じゃ、不法駐在になってバイトをします？毎日怖くて、人に会えない心配をする日々を送りますか？たぶん、今このような考えも出てくると思います。では、私は2年間のお金を稼いで、100、200万円を持って帰ればいいのか？ありませんか？百万二百万のお金で何かできますか？ルームを買う金にもならないし、またお金だったら、使うとすぐ終わるものだから、その時になると、あなたはどうします？

たぶん、今、あなたたちは私にきつとこのような質問を聞きたいと思います。それで終わりではありませんか？どうすればいいのか？バイトをしなければならないし、学習もしなければならないし、どうすればいいのか？それでは、今、私は皆さんにこの問題を解決するいい方法を教えてあげます。それは学習だ！学習はお金を儲ける最高の方法なのです！！

なぜ、学習が一番の儲かる方法ですか？

- ① 奨学金がもらえる。そうすれば、バイトをしなくても生活費と学費が出るから。
- ② 日本語ができれば、仕事を探す道も広がるから、日本語がよければよいほど、いい仕事を見つけられるし、時給の高い仕事ができる。
- ③ 日本語がよくできれば、大学に入りやすい。日本でも大学はブランドが重視されている。入った大学がよければよいほど、就職はしやすくなる。就職してからお金を儲けることはバイトをしながらお金を儲けることよりすいぶんいいことでしょう。

では、皆さんはどちらの道を選ぶのですか？一生懸命にバイトをして、学業を捨てて、稼いだお金を全部学費にして、疲れてなにも学べない悪循環に落ちるといふほうを選ぶのか、それとも、ただ100、200万円を抱いて帰ってしまうほうを選ぶのか、それともしっかり勉強して奨学金をもらって生活と学習が両立できて、将来の就職を考えるほうを選ぶのですか？

たぶん皆は迷わず後者を選ぶだろうと思います。しかし、たぶんこのような言い方もあるでしょう。私は本当は学習が好きではないし、どのように奨学金をもらえるのですか？では、これは私がここで皆さんにこの話をして見証をするわけです。

私の体はあまり健康ではないほうで、たくさんのバイトをしたら、疲れるし、体の調子が悪くなります。私は日本へ来た時、皆さんと同じようになにも分かりませんでした。教会に来ることも本当にしかたないことでした。日曜日教会にきて、牧師の話を聞いた。牧師は神様が存在していることを教えてくれました。また神様は私たちを愛していて、私たちのすべての弱さと不足を許してくれますという。私たちは本心を持って祈って神様の跡をたどって探せば、彼は私たちの一切の祈りを答えてくれるという。私は本当に愚かな人で、本当にしかたがないから、仕事が見つけれなくて、自分にこのように言い聞かせた「よし、私は1回賭けてみよう。信じてみよう。もし、神様が答えてくれなかったら、

信じなくてもいい!」。それから、毎週日曜日、教会にきて、祈ってと言われて、祈ります。他の人はアメンと言うから、私もアメンを言います。どうせ、アメンと言ってもお金がかからないからと思いましたが、後で私の祈祷が全部実現されたし、立命館大学に受かることでも私を守ってくれました。そして、同級生の留学生の中で成績が一番いいのは私です。私は一番だから、この奨学金は私に与えないとだれがもらうのですか？君はきっと賢いと言われるかもしれませんが。実は私を知っている人だったら、だれでも私が愚かな人で全然賢くないと知っています。ほら、今日のこの話でも、昨日はよる 2 時まで準備をしていました。馬鹿は馬鹿だけど、多くの事を考えない人です。私は 1 回信じてみようと思いましたが。答えてくれるんだったら、信じ続けるけど、そうじゃなかったら、信じません。結局、神様が本当に存在しているんです！私の今の全ては神様が下さった祝福です。だから、私は教会に来たくなります。教会に来て神様を感謝したいんです。

でも、だれでも学習がうまく出来たら、だれでも奨学金をもらえるわけにはいかないでしょう。神様を信じている人たちは皆奨学金をもらっているのですか？神様を信じない人だったら、奨学金をもらえないのですか？そうでもないでしょう？たぶんこの中にはこのように考えている人もいます。

確かに教会に来る人が多いです。先輩でも皆奨学金をもらっているわけではないし、皆いい大学に入っているわけでもありません。しかし、この人たちはだれでも日本の留学生活の中で人生に自信を失うことがないんです。皆それぞれの困難があるけど、まるで大きな家族のように、兄弟の中でだれか困難なことがあったら、皆一緒にその兄弟のためにお祈りをするし、お互いに一生懸命に助けあいます。そして、神様は本当に私たちの人間の力で解決できない諸問題を一つ一つ解決してくださりました。本当ですよ。ここにいる兄弟と姉妹はだれにでもたくさん神様の祝福を私たちに教えられます。

この話をする前に私はとても不安でした。自分が準備しているものは牧師との話しと全部反対ではないかと思ったが、実は馬太福音の 6 章 31 から 33 までもこのような話をすでにしているんだと自分の馬鹿が分かりました。

要するに、「まず、神様の国を探すことです」。あるいはあなた自身の条件に関わらず、生活の中で実際に努力をして、生活の前後順位をうまく調整できたら、万事がうまくいきます。この生活の知恵は聖書から教えてもらえるのです。

⑱【献身の証】（愛子）

小学校三年生の時の秋、病気に掛かって死を宣告されたことがありました。しかし、その時牧師の父、母、私の祈りに主が答えてくださって、癒してくださいました。その時父は「貴方の命は主が与えられたのだ、主のために生きるべきだよ」と言ってくれました。

その時から私は祈りの大事さを知り、幼いけど「主のために生きたい」「何のことでも祈れば出来るのだ」と思いました。

14歳の時、ある盛会で「われわれは誰を遣わそうか、誰がわれわれのために行くであろうか」の言葉が心に響き、「主よ！ここに私が、おります。よろしければ、私を遣わしてください」と応答しながら、我慢できず、つい立ってしまいました。この言葉はこの十数年間、一回も私から離れたことがないのです。しかし、これが私の献身のお言葉だとは認めたくなかったのです。それは、「もっとかっこのいい言葉をください」という気持ちが心のどこかにあったからかもしれません。しかし、この言葉が語られる度に、自分の無力さを感じ、心が燃えるのです。そして「ここに私がおります。私を遣わしてください」と言う言葉が心の底から響いてくるのです。

ところが、時が経つに連れ、いろんな影響で段々と献身の思いが薄くなり、勉強で忙しかったので、教会に行くのも煩わしく思うようになりました。しかし、自分が一番愛し、尊敬している父と母にはその自分の変化を見せたくなかったのです。それで、なるべくいい子を演じるようとなりました。ところが、それが、後になって逆に段々と一つの恐れに変わり、親たちとはあまり話したくない状態になりました。

ちょっとその時期、家を離れ都市の高校に行くようになりました。これは私にとっていいことでもあって、悪いことでもありました。いいと言うのは悲しいけど、神様と遠く離れるようになったからであります。勝手な生活だったので、成績はもちろんすごく悪かったのです。大学も行くか？どうか？と迷っていた。ある日、父は私に一番恐れる話をしました。私はどう答えたらいいか、分からなくなりました。それは一方で神学院へ行きたくない、もう一方は親たちを傷つけたくなかったからであります。それは、牧会での苦労も十分なのに、私まで重荷になってはいけないと思っていたからであります。

ちょっとその時、一緒にいた韓国の宣教師である牧師先生が「神学校は大学にいけないからとか、一つの職場として行くところではないんだよ」と一言言ってくれました。そのお陰で、神学校はやめ、友人の紹介で北京に行くことになりました。「献身というのは必ず牧師になることではないので、お金をたくさん設け、貧しい教会を助けるのも一つの献身の形でしょう」と自分自身を納得させ、そのようにしました。しかし、今顧みると、実行できたことは一つもありません。

社会に出た三年間は罪ばかりでした。神様から遠く遠く離れてしまい、心にはたくさん

の傷を負ったのです。この考えは今になって分かったことで、もちろん当時は「神様から離れているんだ」と考えていませんでした。それは世の人と変らない生活をしていましたが、教会にはちゃんと行っているし、友達には伝道もしたからであります。だから、聖書に近づくよりはむしろ自分自身を納得させ、「人間は弱い存在だから、この世の歩みに慣れないとご飯が食べられないから、私もちょっとは現実的に神様を信じたほうがいい」と思い込んでいました。もっと恐ろしいのはこんな考えを正しいのだと思ったことです。

だからと言って、楽な、楽しい生活ではありませんでした。最初は楽しかったですが、世俗的に求めれば求めるほど、自分自身は苦しくなり、世のスピットに自分を合わせれば合わせるほど嘘しさを感じ、矛盾なことが一杯で、また、たくさんの問題に囲まれて、息が苦しくなるほどでした。

2000年の秋、8月のある日の夜です。私はお酒を飲んで橋に坐っていました。もう心が苦しくて、苦しくて、前に進めない状態になっていたのです。

「これが人生か？」と言いながら、泣いていました。

突然「あなたは何で生きているの？」と誰かの声が聞こえました。意識があったので、「誰だ？」と思って周りを見ました。しかし、誰もいませんでした。

「お金を持っていないでしょう？」と、また、声が聞こえてきました。しかし、不思議にも「そうですね！」と自分が頷いているのです。

「でも、私にはまだだ」と思った瞬間、私の考えさえも知っていて、「ほら！教会もちゃんと行かなかったでしょう？神様も信じているぶりだけでしょう？」と言うのでした。それは何か私は別の世界に入ったような心境でした。「死んでよ、死んだらすべてが終わりだよ。」という声がずっと聞こえてきました。「死んだらいいじゃない、私は死んだらいいんだから、もう死ぬわ！」といいながら、橋から飛び降り掛けていました。突然「愛子！！」と言う大きな声と共に、大きな力が、私を引っ張ったのです。私はつい、後ろに座ってしまいました。私を止めたのは人ではありませんでした。その声は私の中から一つ一つの細胞を破って、満たしてあまりがあるほどの響きでした。私は座ったままで泣きながら「神様！どうしたらいいの？」と呼びました。「日本へ！」と言う声と共に、ふっと一ヶ月前からずっと「日本に行きましょう！」と誘ってくれた友人が浮かびました。

理由も分からず、私はすべてを整理して、日本に行くために実家に戻ってきました。それからが大変でした。三年間一人で生活したので、自然に付いてしまった悪い習慣が親たちと合わなかったのです。合わせようと努力もしましたが、なかなか、自分の心をコントロールできません。礼拝では寝っぱなしだし、遊びに誘いに来るわ、私は爆発しそうでした。そして祈ろうとしても祈りが出てこない。じゃ聖書はと思って、読むと、また、すぐ寝てしまいました。私の心は呼んでいましたが、私の体は言うことを聞いてくれません。自分の無力を叱ったりもしましたが、何の効果もありませんでした。きっと親たちは直接強く私に言うのを避けていました。多分、かげでは私のために涙の祈りをしたと思います。このような辛い日々が何ヶ月も続きました。

日本に来る二カ月前、盲腸で入院し、手術を受けました。手術が終わってから、何にも食べれなくなり、夜はまた傷の痛みで苦しみ、あまりにも痛くて「主よ、癒してください！私を許してください！」と呼び、そうすると、ちょっと寝れるようになり、また痛みで目が目覚めると「主よ！」と呼び求めたのです。それが実家に戻ってから、初めての主への祈りでした。

五日目の夜十時ぐらい、ある韓国の宣教師が訪ねてきました。家族にとっても、私にとっても初対面の牧師先生でした。このようなことはしょっちゅうありましたので、誰も不思議には思いませんでした。私のために祈ってくれてから静かに「愛子！貴女は韓国語、中国語も知っていて、その上の日本語までできることはすごいんだよ！日本へ行ってから、是非神学院に入って主のために働きなさい。主はどれほどお喜びでしょう。」と勧めてくれたのです。その話を聞いた瞬間、私を覆った何かが、去って行き、目の前が明るくなり、一つの光がはっきりとした一つの歩むべき道を照らし、私に見せてくださったのです。それと共に「これだ！これが私の歩むべき道だ、私が失ったものだ。」と心に響いてきました。

そして、日本にある神学校と牧師先生の連絡先を教えてくださいました。しかし、日本に来て、連絡してみましたが、連絡ができず、ずっと王寺にある大和教会に通っていましたが、バイト先で買物に来た留学生によって、今の母教会に行くようになりました。この神学校も牧師 J 先生が卒業された学校でしたので、紹介してもらいましたが、お金のことで、直前になって躊躇してしまい、更に主に求めたところ、追われてここに来るようになったのです。

「主よ！なぜ弱い時だけ主を求め、幸せになる時またすぐ主を忘れてしまい、こんな私を主がお使いになさろうとするのですか？！もしそうならば私は喜んで主のために生涯を捧げます。主の為なら何でもします。」と決意しました。

神様は二回も私の命を救ってくださいました。主の存在は私の原動力であります。

神学校に入ってから、何度も「もうだめだ！」と、泣きながら、主に訴えたことがあります。その度、その度、主は「あなたはどこから？」と言うのです。そしてどろどろの中にいた私さえも捨てずに、救ってくださいました。使おうとしている。主に申し訳ない気持ちに一杯になります。そして祈りは「主よ、力をください。」に変わるのです。私が信じている主は本当に生きておられるから、様々なことを前にして、耐えることができるのです。

主は真実な御方で私を守り、その哀れみによって私は今このようにここに立つことができたのです。

「万軍の主の熱心がこれらの事をなさる。」と主は語っていました。

すべての栄光を主に捧げます。

⑱【铅笔的原则】

铅笔即将被装箱运走,制造者很不放心,把它带到一旁跟它说:“在进入这个世界之前,我有几句话要跟你说,如果你能记住这些话,就会成为最好的铅笔。”

1. 你将来能做很大的事,但是有一个前提,就是你不能盲目自由,你要允许被一只手握住。
2. 你可能经常会感到刀削般的疼痛,但是这些痛苦都是必须的,它会使你成为一只更好的铅笔。
3. 不要过于固执,要承认你所犯的任何错误,并且勇于改正它。
4. 不管穿上什么样的外衣,你都要清楚一点,你最重要的部分总是在里面。
5. 在你走过的任何地方,都必须留下不可磨灭的痕迹,不管是什么状态,你必须写下去。要记住,生活永远不会毫无意义。

摘自《海外星云》2005年第23期

(『草原』·5期)

